# 續國譯漢文大成

文學部 五十七

309
65

帙入

始

吉田靜郎氏 寄贈本

# 續國譯漢文大成

文學部第五十七册（第十五帙の一）

## 蘇東坡詩集 三の一

309
65

# 蘇東坡詩集第三卷目次

## 卷十七

### 古今體詩

次韻子由送趙屼歸覲錢塘遂赴永嘉……一
中秋月三首……四
中秋見月和子由……一〇
答王鞏……一四
次韻王定國馬上見寄……一七
與頓起孫勉泛舟探韻得未字……一九
次韻答頓起二首……二三
九日黃樓作……二四
太虛以黃樓賦見寄作詩爲謝……二七
九日次韻王鞏……二九
送頓起……三二
送孫勉……三三
李思訓畫長江絕島圖……三五
張安道見示近詩……三七
次韻王鞏顏復同泛舟……四〇
次韻張十七九日贈子由……四二
次韻王鞏獨眠……四三
次韻王鞏留別……四四
登雲龍山……四七
題雲龍草堂石磬……四八

與舒教授張山人參寥師同遊戲馬臺二首……四九
滕縣時同年西園……五二
次韻王廷老和張十七九日見寄……五四
鹿鳴宴……五六
次韻參寥師寄秦太虛三絕句……五七
與參寥師行園中得黃耳蕈……五九
百步洪二首……六一
送參寥師……六九
夜過舒堯文戲作……七一
和參寥見寄……七三
十月十五日觀月黃樓席上次韻……七五
答王定民……七六
次韻王庭老退居見寄二首……七八
次韻顏長道送傅倅……八〇
雲龍山觀燒得雲字……八二
和田國博喜雪……八五
祈雪霧豬泉出城馬上作贈舒堯文……八七
次韻舒堯文祈雪霧豬泉……八九
宋復古畫瀟湘晚景圖三首……九三
贈狄崇班季子……九五
石炭……九六

## 卷十八

### 古今體詩

人日獵城南以身輕一鳥過槍急萬人呼爲韻……一〇一　〜　將官雷勝得過字代作……一〇四



臺頭寺步月得人字……一〇五
臺頭寺送宋希元……一〇七
種松得徠字……一〇九
作書寄王晉卿忽憶前年寒食北城之游……一一一
往在東武與人往反作粲字韻詩四首……一一四
雪齋……一一七
以雙刀遺子由子由有詩次其韻……一一九
遊桓山以春水滿四澤夏雲多奇峰爲韻……一二三
戴道士得四字代作……一二五
次韻田國博部夫南京見寄二絕……一二七
月夜與客飲杏花下……一二九
送蜀人張師厚赴殿試二首……一三〇
再次韻答田國博部夫還二首……一三二
田國博見示石炭詩有鑄劍斬佞臣之句……一三三
答郡中同僚賀雨……一三五
留別叔通元弼坦夫……一三七
罷徐州往南京馬上走筆寄子由五首……一三九
泗州僧伽塔……一四六
龜山……一四九
書泗州孫景山西軒……一五〇
泗州過倉中劉景文老兄戲贈一絕……一五〇
過淮三首贈景山兼寄子由……一五一
舟中夜起……一五四
余去金山五年而復至次舊詩韻贈寶覺長老……一五五
大風留金山兩日……一五七
遊惠山……一五九
贈惠山僧惠表……一六三
贈錢道人……一六四
與秦太虛參寥會於松江二首……一六六
次韻關令送魚……一六八

次韻秦太虛見戲耳聾……一六九
端午徧遊諸寺得禪字……一七二

## 卷十九

### 古今體詩

雪上訪道人不遇……一七七
李公擇過高郵見施大夫與孫莘老賞花詩……一七八
王鞏清虛堂……一八三
次韻答王鞏……一八五
和孫同年卞山龍洞禱晴……一八七
乘舟過賈收水閣收不在見其子三首……一八九
次韻孫秘丞見贈……一九二
與客游道場何山得鳥字……一九四
僕去杭五年吳中仍歲大饑疫……一九七
舶趠風……一九九
送劉寺丞赴餘姚……一七四
丁公默送蝤蛑……二〇一
送孫著作赴考城……二〇三
泛舟城南會者五人分韻賦詩四首……二〇四
與王郎夜飲井水……二〇九
次韻李公擇梅花……二〇九
送淵師歸徑山……二一三
送表忠觀錢道士歸杭……二一五
次韻周開祖長官見寄……二一八
林子中以詩寄文與可及余……二二三
與王郎昆仲及兒子邁遶城觀荷花四首……二二六



次韻章子厚飛英留題……二三一
城南縣尉水亭得長字……二三二
與胡祠部游法華山……二三三
又次前韻贈賈耘老……二三六
趙閱道高齋……二三九
送俞節推……二四二
次韻答孫侔……二四三
重寄……二四五
次韻和劉貢父登黃樓見寄並寄子由二首……二四六
吳江岸……二五〇

## 卷二十

### 古今體詩

陳州與文郎逸民飲別攜手河堤上作此詩……二六七
子由自南都來陳三日而別……二六八
御史臺榆槐竹柏四首……二五一
榆……二五一
槐……二五二
竹……二五三
柏……二五四
己未十月十五日獄中作詩……二五五
十月二十日恭聞太皇太后升遐故作挽詞二章……二五七
予以事繫御史臺獄故作二詩……二六〇
十二月二十八日蒙恩復用前韻二首……二六三
正月十八日蔡州道上遇雪次子由韻二首……二七一
過新息留示鄉人任師中……二七四

過淮……二七七
書馨公詩後……二七九
游淨居寺……二八一
梅花二首……二八五
戲作種松……二八六
萬松亭……二八八
張先生……二九〇
初到黃州……二九二
陳季常所畜朱陳邨嫁娶圖二首……二九四
少年時嘗過一邨院……二九六
定惠院寓居月夜偶出……二九七
次韻前篇……二九九
安國寺浴……三〇一
安國寺尋春……三〇三
寓居定惠院之東雜花滿山……三〇五
次韻樂著作野步……三〇九
二月二十六日雨中熟睡……三一一
雨晴後步至四望亭下魚池上二首……三一二
雨中看牡丹三首……三一四
次韻樂著作送酒……三一六
次韻樂著作天慶觀醮……三一七
王齊萬秀才寓居武昌縣劉郎洑……三一八
杜沂游武昌以酴醿花菩薩泉見餉二首……三二〇
陳季常自岐亭見訪戲作陳孟公詩一首……三二三
遊武昌寒溪西山寺……三二六
西山戲題武昌王居士……三二八
武昌銅劍歌……三三〇
定惠院顒師爲余竹下開嘯軒……三三三
石芝……三三五
今年正月十四日與子由別於陳州……三三八



遷居臨皐亭……三四〇
晚至巴河口迎子由……三四二
與子由同游寒溪西山……三四四
次韻答子由……三四七
武昌酌菩薩泉送王子立……三四八
和何長官六言次韻五首……三四九
觀張師正所蓄辰砂……三五二
五禽言五首……三五四
次韻子由病酒肺疾發……三五九
鐵拄杖……三六三
與潘三失解後飲酒……三六六

## 卷二十一

### 古今體詩

正月二十日往岐亭……三六九
東坡八首……三七〇
次韻回文三首……三八二
附江南本織錦圖上回文原作三首……三八四
數日前夢一僧出二鏡求詩……三八六
岐亭道上見梅花戲贈季常……三八七
樂泉先生生日以鐵拄杖爲壽二首……三八九
杭州故人信至齊安……三九一
送牛尾貍與徐使君……三九三
四時詞四首……三九五
太守徐君猷通守孟亨之皆不飲酒以詩戲之……三九九
姪安節遠來夜坐三首……四〇〇

冬至日贈安節……四〇四
雪後到乾明寺遂宿……四〇六
伯父送先人下第歸蜀作小詩十四首送之……四〇七
次韻和王鞏六首……四一三
元豐四年十月二十二日謁王文父齊萬於江南……四二三
聞洮西捷報……四二四
記夢回文二首……四二五
三朵花……四二七
次韻陳四雪中賞梅……四二九
正月二十日與潘郭二生出郊尋春……四三〇
是日偶至野人汪氏之居……四三二
淺井……四三四
紅梅三首……四三五
次韻子由寄題孔平仲草菴……四三九
二蟲……四四一
陳季常見過三首……四四二
謝人惠雲巾方舃二首……四四四
寒食雨二首……四四七
徐使君分新火……四四九
次韻答元素……四五一
蜜酒歌……四五三
又一首答二猶子與王郎見和……四五五
謝陳季常惠一揞巾……四五八
贈黃山人……四五九
贈　人……四六〇
問大冶長老乞桃花茶栽東坡……四六一
寄子由……四六三
次韻孔毅父久旱已而甚雨三首……四六四
魚蠻子……四七二
夜坐與邁聯句……四七五





弔李臺卿……四七六
曹旣見和復次韻……四八〇
弔徐德占……四八二
武昌主簿吳亮君采攜其友人沈君十二琴之說……四八四
李委吹笛……四八五
蜀僧明操思歸書龍邱子壁……四八七

## 卷二十二

### 古今體詩

次韻孔毅父集古人句見贈五首……四八九
六年正月二十日復出東門仍用前韻……四九五
食　甘……四九七
大寒步至東坡贈巢三……四九八
元修菜……五〇一
三月三日點燈會客……五〇五
日日出東門……五〇六
南堂五首……五〇七
次韻子由種杉竹……五一一
孔毅父妻挽詞……五一三
初秋寄子由……五一四
和黃魯直食筍次韻……五一六
聞子由爲郡僚所捃恐當去官……五一八
次韻王鞏南遷初歸二首……五二〇
孔毅父以詩戒飲酒問買田且乞墨竹次其韻……五二三
任師中挽詞……五二六
子由作二頌頌石臺長老予亦作二首……五二八
鄧忠臣母周氏挽詞……五三〇

徐君猷挽詞……五三二
洗兒戲作……五三三
和蔡景繁海州石室……五三四
橄欖……五三九
東坡……五四〇
生日王郎以詩見慶次其韻并寄茶二十一片……五四〇
柏石圖詩……五四三
和秦太虛梅花……五四五
再和潛師……五四七
海棠……五五〇
次韻曹九章見贈……五五一
上巳日與二三子攜酒出遊……五五二
劉監倉家煎米粉作餅子……五五七
和參寥……五五八


## 卷二十三　古今體詩


別黃州……五六一
過江夜行武昌山聞黃州鼓角……五六二
岐亭五首……五六四
初入廬山三首……五七七
贈東林總長老……五七九
題西林壁……五八〇
圓通禪院先君舊游也……五八一
子由在筠作東軒記……五八四
余過溫泉壁上有詩亦作一絕……五八六
世傳徐凝瀑布詩作一絕……五八七





書李公擇白石山房……五八九
廬山二勝……五九〇
開先漱玉亭……五九一
棲賢三峽橋……五九三
自興國往筠宿石田驛南廿五里野人舍……五九五
過建昌李野夫公擇故居……五九六
將至筠先寄遲适遠三猶子……五九八
端午游眞如遲适遠從子由在酒局……六〇一
別子由三首兼別遲……六〇三
初別子由至奉新作……六〇六
白塔鋪歇馬……六〇八
同年程筠德林求先墳二詩……六〇九
思成堂……六〇九
歸眞亭……六一〇
陶驥子駿佚老堂二首……六一三
和李太白……六一四
次韻道潛留別……六一七
贈江州景德長老……六一八
郭祥正家醉畫竹石壁上……六一九
龍尾硯歌……六二二
張近幾仲有龍尾子石硯以銅劍易之……六二五
張作詩送硯反劍乃和其詩卒以劍歸之……六二八
去歲九月二十七日在黃州生子……六三〇
葉濤致遠見和二詩復次其韻……六三三


## 卷二十四　古今體詩

次荊公韻四絕……六三九
半山亭……六四二
張庖民挽詞……六四三
次韻葉致遠見贈……六四五
次韻致遠……六四六
次韻杭人裴維甫……六四七
次韻段縫見贈……六四八
題孫思邈眞……六五〇
戲作鮰魚一絕……六五一
同王勝之游蔣山……六五二
至眞州再和二首……六五四
次韻答寶覺……六五八
眉子石硯歌贈胡誾……六五九
以玉帶施元長老元以衲裙相報次韻二首……六六二
次韻滕元發許仲塗秦少游……六六四
送金山鄕僧歸蜀開堂……六六六
送沈逵赴廣南……六六七
豆　粥……六七〇
秦少游夢發殯而葬之因次其韻……六七三
金山夢中作……六七七
次韻周穜惠石銚……六七八
次韻蔣穎叔……六七九
龜山辯才師……六八〇
贈潘谷……六八三
徐大正閒軒……六八五
蒜山松林中可卜居……六八八
王中甫哀辭……六九一
蔡景繁官舍小閣……六九三
十一月十三日與幾先自竹西來訪慶老……六九六
邵伯梵行寺山茶……六九七
高郵陳直躬處士畫雁二首……六九八
和王斿二首……七〇〇
次韻張琬……七〇三
次韻王定國南遷回見寄……七〇四
贈梁道人……七〇七
雍秀才畫草蟲八物……七〇九
促　織……七〇九
蟬……七〇九
蝦　蟇……七一〇
蜣　蜋……七一一
天水牛……七一一
蝸　虎……七一二
蝸　牛……七一二
鬼　蝶……七一三
泗州南山監倉蕭淵東軒二首……七一三
泗州除夜雪中黃師是送酥酒二首……七一六
章錢二君見和復次韻答之二首……七一八

# 蘇東坡詩集 卷十七

釋 清潭 譯解

## 古今體詩 五十一首

### 次韻子由送趙屼歸觀錢塘遂赴永嘉

子由が趙屼の錢塘に歸觀し、遂に永嘉に赴くを送るに次韻す

歸舟轉河曲、稍見楚山(一)蒼。

歸舟河曲を轉じ、稍楚山の蒼たるを見る、

候吏(二)來迎客、吳音(三)已帶鄕。

候吏來りて客を迎へ、吳音已に鄕を帶ぶ、

言從謝康樂(四)、先獻魯靈光(五)。

言に謝康樂に從ひ、先づ魯靈光を獻す、

已擊三千里、何須四十强(六)。

已に擊つ三千里、何ぞ須ひん四十强を、

風流(七)半刺史(八)、清絕校書郎(九)。

風流の半刺史、清絕の校書郎、

到郡詩成(一〇)集、尋溪水濺裳(一一)。

郡に到れば詩は集を成し、溪を尋ぬれば水は裳に濺ぐ、

芒鞋隨采藥(一二)、繭紙(一三)記流觴(一四)。

芒鞋采藥に從ひ、繭紙流觴を記す、

海靜蛟鼉出。山空草木長。
宦游無遠近。民事要更嘗。
願子傳家法。他年請尙方。

海靜かにして蛟鼉出で、山空しくして草木長し、
宦游遠近無し、民事更嘗を要す、
願はくは子家法を傳へ、他年尙方を請はんことを、

【字解】【一】楚山　白樂天の詩、楚山碧岩岩と、今日の湖南湖北の二省は總じて楚の地、【二】候吏　道路に賓客を迎送する官吏、【三】吳音　杜甫の詩に、賀公雅吳語と、【四】謝康樂　靈運は南北朝永嘉の人、羣書を博覽し、文章の美江左に冠ぶ莫し、性豪奢、車服衣裳、多く舊制を改む、永嘉の太守と爲り、山水に遨游して、旬日歸らず、後、臨川の太守と爲る、遨放永嘉に異ならず、有司の糾す所と爲りて棄市せらる、世に謝康樂公と稱せらる、【五】魯靈光　「後漢王延壽傳」に、壽有雋才、父逸欲作魯靈光殿賦、令延壽往錄其狀、延壽因韻之、以簡其父、父曰吾無以加也、時蔡邕亦有此作、十年不成、見延壽賦、遂隱而不出とある、【六】四十強　「禮記」に、四十曰強而仕とある、【七】風流　意義多種ある、流風餘韻、又は儀表、又は品格、今は儀表と品格を合有する、【八】半刺史　「舊唐書蕭倣傳」に、昔庾亮與郭游書、別駕舊與刺史別乘、任居刺史之半、安可非其人也とある、【九】校書郞　書籍を校勘する役、後漢以來之れ有り、正九品の官、【一〇】成集　「南史」に、王筠以一官爲一集と、【一一】濺裳　「抒情集」に、李相蔚鎭淮南、祖送孫處士、舟子回篙濺水、近坐妓衣濕と、孫の詞に、從教水濺羅衣濕、還道朝來行雨歸と、【一二】采藥　「神仙傳」に、劉晨、阮肇、入天台山採藥と、【一三】繭紙　「文房四譜」に、右軍蘭亭帖、用蠶繭紙鼠鬚筆書と、【一四】流觴　「蘭亭序」に、流觴曲水、列坐其次と、【一五】蛟鼉　蛟は「ミヅチ」、蛇に似て四足を有するもの、鼉は鰐の一種、蜥蜴に似て長さ丈餘、【一六】草木長　淵明の詩に、孟夏草木長と、【一七】更嘗　「三國志孫權傳」に、權怒曰、朕年六十、世事難易、靡所不嘗と、【一八】家法　後漢書質帝紀、令郡國擧明經、四姓小侯、元能通經者、各令隨家法と、【一九】尙方　上方とも作る、漢に興りし官名、少府の屬官、尙方令丞あり、「漢書朱雲傳」に、臣願賜尙方斬馬劍、斷佞臣一人頭とある、坡公の「淸獻神道碑」に爲殿中侍御史、彈劾不避權倖、京師號鐵面御史と、

【題義】趙屼字は景仁が其の父の淸獻公を杭州の錢塘に歸覲して遂に永嘉に赴くを、子由が之を送る詩を作る、乃ち公が次韻したものである、

【詩意】徐州より杭州に向ふ歸舟は河曲を幾轉する、既にして稍く前面に楚山の蒼色を見る、候吏も來りて遠來の客を迎へる、其の吳音が已に鄕音を帶びて居る、言に今日の謝康樂である父の抃に從ひ、先づ魯靈光殿賦の如き名文を作つて父に獻ずるやうな文才を有して居る、已に鵬が三千里を擊つの氣概を備へる、四十にして始めて出仕するなぞの常套語は無用である、風流なる半刺史とも謂ふべく、淸絕なる校書郞とも謂ふべきである、郡に到れば詩は能く集を成し、溪を尋ぬれば水は裳に濺ぐあらん、或は芒鞋を著けて采藥に隨ひ、或は繭紙を展べて流觴の文を記すであらう、今や海靜かなれば蛟鼉が浪上に出て遊び、山は空しうして草木のみ生長する、宦游は固より遠近の論は無い、民狀事態は官吏として種種嘗めるの要がある、願ふ所は子は能く家法を傳へて、後年父の如く權貴を畏れざる人とならんことを請ふのである、

【餘論】五言長律として、作意明明なるもの、紀曉嵐曰く、吳音句欠妥、切省覲、只此魯靈光一句、不出水字、擊者何物、到郡謝康樂所選詩名、詩集見隋書經籍志、此切永嘉也と、余謂ふ省覲の意、言從の十字にて足る、子が主にして父が主にあらざれば然るべきものと思ふ、吳音の句も平妥、之を欠妥と言はば、賀公雅吳語は更に欠妥と思ふ、

## 中秋月三首

殷勤去年月。瀲灩古城東。
憔悴去年人。臥病破窗中。
徘徊巧相覓。窈窕穿房櫳。
月豈知我病。但見歌樓空。
撫枕三嘆息。扶杖起相從。
天風不相哀。吹我落瓊宮。
白露入肺肝。夜吟如秋蟲。
坐令太白豪。化爲東野窮。
餘年知幾何。佳月豈屢逢。
寒魚亦不睡。竟夕相喚喁。

中秋の月　三首

殷勤にす去年の月、瀲灩たり古城の東、
憔悴す去年の人、病に臥す破窗の中、
徘徊巧みに相覓む、窈窕房櫳を穿つ、
月豈我が病を知らんや、但歌樓の空しきを見る、
枕を撫し三たび嘆息す、杖に扶けられ起つて相從ふ、
天風相哀ます、我を吹いて瓊宮に落つ、
白露肺肝に入る、夜吟秋蟲の如し、
坐ろに太白の豪をして、化して東野の窮と爲らしむ、
餘年知る幾何ぞ、佳月豈屢ば逢はん、
寒魚亦睡らず、竟夕相喚喁す、

【字解】【一】殷勤　「漢司馬遷傳」に、未下嘗銜二杯酒一接中殷勤之歡上と、【二】瀲灩　「木華海賦」に、瀲淡瀲灩と、水のアフレル貌、【三】徘徊　李白の詩に、我歌月徘徊、我舞影凌亂と、【四】窈窕　詩、窈窕淑女、是は幽閑を言ふ、「郭璞賦」に、幽岫窈窕と、是は深邃を言ふ、今の句、二義を兼ぬ、【五】房櫳　何遜の詩に、房櫳月影斜と、【六】撫枕　陸機の詩に、撫レ枕不レ能レ寐と、【七】三嘆息　「左傳昭公二十八年」、吾子置食之間、三歎何也と、【八】天風　許渾の詩に、天風吹下步虛聲、韓退之の詩に、天風飄飄吹レ我過と、【九】瓊宮　張平子の「思玄賦」に、叫二帝閽一使二闢扉一兮、覿二天皇之瓊宮一と、【一〇】秋蟲　韓退之の詩に、蟲弔二寒夜永一と、【一一】太白　當時の人は稱す、李太白の詩は豪放、孟東野の詩は窮苦と、【一二】幾何　魏武の「短歌行」に、對レ酒當レ歌、人生幾何と、【一三】喚喁　「說文」に、魚在二水中一、羣出動レ口貌と、

【題義】單に中秋月と今の本題せるが、寄子由の三字を月の下に加ふべきである、子由に寄示して言ふ所の意味多ければ洵に然るべしと思ふ、

【詩意】只今見る所の月も殷勤に去年と變りは無い、其の光は瀲灩として古城の東に在る、然るに人間は去年豪健なりしも今年は憔悴して、書堂破窗の中に臥病する、月光は破窗の中を徘徊して巧に人を相覓むる如くである、又窈窕の姿は房櫳を穿ちて來る、月は豈我が病に臥すを知らんや、但月を賞する歌樓の空しきを見るのみ、是に於てか枕を撫して三たび嘆息するに至る、乃ち杖に扶けられて起つて月影に從ふ、天風は病者を相哀しまざるものの如く、我を吹き去つて月の瓊宮に落在せしむ、病者には特に白露の肺肝に入りて寒さを覺ゆ、强ひて吟哦する聲も秋蟲の鳴くの感がある、平生は太白の豪吟を喜ぶが、今夕は化して東野の窮苦と爲る、謂ふに我が餘年は果して幾何なるか分らぬ、此の如きの佳月は豈屢ば逢ふものでは無い、池中の寒魚も睡らざると見えて、竟夕水上に浮んで喚喁せるを見る、

〔二〕

(一)六年逢此月。五年照離別。
【自注】中秋有月、凡六年矣。惟去歲與子由會於此。
歌君別時曲。滿座爲凄(二)咽。
(三)留都信繁麗。此會豈輕擲。
(四)鎔銀百頃湖。挂鏡千尋(五)闕。
三更歌吹罷。人影亂清(六)樾。
歸來北(七)堂下。寒光翻露葉。
喚酒與婦飮。念我向兒說。
豈知衰病後。空盞對梨(八)栗。
但見古河東。蕎(九)麥花鋪雪。
欲和去年曲。復恐心(一〇)斷絕。

〔二〕

六年此の月に逢ふ、五年離別を照らす、
君が別時の曲を歌へば、滿座爲に凄咽、
留都信に繁麗、此の會豈輕しく擲たんや、
銀を鎔かす百頃の湖、鏡を挂く千尋の闕、
三更歌吹能み、人影清樾に亂る、
歸來北堂の下、寒光露葉に翻へる、
酒を喚んで婦と飮み、我を念ひ兒に向つて說く、
豈知らんや衰病の後、空盞梨栗に對す、
但見る古河東、蕎麥花雪を鋪く、
去年の曲を和せんと欲し、復恐る心斷絕するを、

【字解】【一】六年　公の自注に、中秋有月、凡六年矣、惟去歲與子由會於此と、【二】凄咽　嗚咽と同じ、【三】留都　子由時之官南京、南京有留守司、故云留都と施注に在り、【四】鎔銀　劉禹錫の詩に、洞庭秋月生湖心、層波萬頃如鎔銀と、【五】闕　別本に闕に作るは誤、闕は月宮殿を指し、前の百頃湖と對を取る、【六】清樾　樾は木陰を謂ふ、【七】北堂　俗に母を稱して北堂と爲す、義を詩の焉得諼草言樹之背に取る、背は北堂である、【八】梨栗　韓退之の詩に、嬌兒恐我生悵望、盤中不飣栗與梨と、【九】蕎麥　蕎は蕎と同じ、白樂天の詩に、蕎麥花如雪と、【一〇】心斷絕　南北朝鮑明遠の詩に、涕零心斷絕、將去復還訣と、

【詩意】六年間の中秋必ず此の明月に逢ふ、而して五年間は必ず離別の席を照らさる、君が別時の曲を歌うて、滿座の人が皆凄咽せるを記憶する、留都の南京は信に繁麗である、此の會は輕輕に拋擲することは出來ない、何故と言へば、百頃の大湖は水が銀を鎔かす如く美麗である、明月は千尋の高闕に鏡を挂けたる如く明奇である、三更に及んで歌吹が罷めば、人影は淸樾に婆娑として亂る、會を辭し歸り來り北堂の下に坐すれば、月の寒光は露葉に映じて翻へつて居る、是に於て酒を喚んで婦と共に飮み、我が事を念うて兒に向つて說示する、豈預知せんや後來衰病して、酒を飮むを禁せられ空しく栗梨に對することを、但見る古河の東を、蕎麥の花は月光に映じて雪を鋪く如く白きを、乃ち去年の歌曲を追和せんと思へども、復恐る心腸が更に斷絕することを、

〔三〕

(一)舒子在汶(二)上。閉門相對清。
【自注】舒煥試舉人鄆州。
(三)鄆子向河朔。孤舟連夜行。

〔三〕

舒子汶上に在り、閉門相對して淸し、
鄆子河朔に向ひ、孤舟連夜行く、

（自注）鄭僑赴北京戸曹。

（五）頓子雖咫尺（六）。兀如在牢扃（七）。　頓子咫尺と雖も、兀として牢扃に在るが如し、

（自注）頓起來徐試擧人。

（八）趙子寄書來。水調有餘聲。　趙子書を寄せ來る、水調餘聲あり、

（自注）今日得趙杲卿書。猶記余在東武中秋所作水調歌頭也。

悠哉四子心。共此千里明（九）。　悠なる哉四子の心、此の千里の明を共にす、

明月不解老。良辰難合并。　明月老を解せず、良辰合并し難し、

回頭坐上人。聚散如流萍（一〇）。　頭を回らす坐上の人、聚散流萍の如し、

（自注）故人史生爲余言。嘗見海賈云。中秋有月則是歳珠多而圓。賈人常以此候之。雖相去萬里。他日會合。相問陰晴。無不同者。

嘗聞此宵月。萬里同陰晴（一一）。　嘗て聞く此宵の月、萬里陰晴を同じうすと、

天公自著意。此會那可輕。　天公自から著意、此の會那ぞ輕んず可き、

明年各相望。俯仰今古情。　明年各の相望む、俯仰今古の情、

【字解】【一】舒子　公の自注に、舒煥試擧人鄆州と、【二】汶上　今は縣名、漢の東平陸縣、後魏は樂平と改め、隋は平陸と改め、唐は中都と改め、金は汶上と改め、淸は山東省兗州府に屬す、今は山東濟寧道である、【三】閉門　別本は閑門に作る、閑が可、【四】鄭子　公の自注に、鄭僑赴北京戸曹と、【五】頓子　公の自注に、頓起來徐試擧人と、【六】咫尺　八寸を咫と曰ふ、【七】牢扃　扃は外閉の關、「クワンヌキ」と稱するもの、【八】趙子　公の自注に、今日得趙杲卿書、猶記余在東武中秋所作水調歌頭也と、【九】千里明　謝莊が月賦に、美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月と、【一〇】流萍　杜甫の詩に、同是一浮萍と、【一一】同陰晴　公の自注に、故人史生、爲余言、嘗見海賈云、中秋有月、則是歳珠多而圓、賈人常以此候之、雖相去萬里、他日會合、相問陰晴、無不同者と、

【詩意】舒子は汶上に在りて、閉門に相對して座淸きが、鄭子は河朔に向つて、孤舟連夜に奔行する、頓子は相去ること咫尺であるが、此の人は兀兀として牢扃に在るが如くである、趙子は書を寄せ來る、其の書を讀めば去年作りたる水調の餘聲あるを覺ゆ、悠なる哉此の四子の心や、此の千里の明と共に情を見る、哀しい哉明月は老人の衰病を解得せず、良辰に一處に會合することは難い、頭を回らして座上の人を見れば、或は聚まり或は散じて流萍の如きものである、嘗て聞く此の中秋の月は、彼が陰なれば此も陰、彼が晴なれば此も晴、萬里皆同じと、天公も自から著意する、此の會那んぞ輕んずべけんや、明年も各自が別別に相望むこともあらう、復各自に今古の情を俯仰することと思ふ、

【餘論】紀曉嵐は第一首を評して、句句深至、似此乃不摹古而直逼古人と、寒魚亦不睡を評して、亦字分明と、第二首を評して、只鎔銀二句用體物語、餘皆純以神思鎔鑄、情景相融、絕妙言說と、第三首を評して、一語合并、筆力千鈞、挿一波又好と、坡公が本領を學ばんと思ふ者は宜しく此の篇を學ぶべきである、

## 中秋見月和子由

中秋月を見る、子由に和す

明月未出羣山高。　明月未だ羣山の高きを出でず、
瑞光萬丈生白毫。　瑞光萬丈白毫に生ず、
一盃未盡銀闕涌。　一盃未だ盡きざるに銀闕涌き、
亂雲脫壞如崩濤。　亂雲脫壞して崩濤の如し、
誰爲天公洗眸子。　誰か天公の爲めに眸子を洗ふ、
應費明河千斛水。　應に費すべし明河千斛の水、
遂令冷看世間人。　遂に世間の人を冷看せしむ、
照我湛然心不起。　我を照らして湛然心起らず、
西南火星如彈丸。　西南の火星は彈丸の如く、
角尾奕奕蒼龍蟠。　角尾奕奕蒼龍蟠まる、
今宵注眼看不見。　今宵眼を注ぎ看るに見えず、
更許螢火爭清寒。　更に螢火をして清寒を爭は許めんや、

何人艤舟臨古汴。　何人か舟を艤して古汴に臨む、
千燈夜作魚龍變。　千燈夜魚龍の變を作す、
曲折無心逐浪花。　曲折無心浪花を逐ふ、
低昂赴節隨歌板。　低昂赴節歌板に隨ふ、
青熒滅沒轉山前。　青熒滅沒山前に轉ず、
浪颭風迴豈復堅。　浪颭風迴豈復堅からん、
明月易低人易散。　明月低れ易く人散じ易し、
歸來呼酒更重看。　歸來酒を呼んで更に重ねて看る、
堂前月色愈清好。　堂前の月色愈よ清好、
咽咽寒螿鳴露草。　咽咽たる寒螿露草に鳴く、
卷簾推戶寂無人。　簾を卷き戶を推せば寂として人無し、
窗下咿啞惟楚老。　窗下咿啞唯楚老、
【自注】近有一孫名楚老。
南都從事莫羞貧。　南都の從事貧を羞づること莫かれ、

---

【字解】【一】白毫　佛陀が眉上に圓錢形の髮毛がある、是を白毫と謂ふ、瑞光を此の中より發して、山河大地を普く照らす、【二】銀闕　即ち月桂殿をいふ、【三】脫壞　亂雲が消散するときの狀を謂ふ、【四】眸子　韓退之が詩に、念此日月者、爲天之眼睛と、盧仝の月蝕詩に、念此日月者、太陰太陽精、皇天要識物、日月乃化生、走天汲汲勞四體、與天作眼行光明と、【五】明河　宋之問の詩に、明河可望不可親、願得乘槎一問津と、【六】湛然　水のたたへたる貌、【七】彈丸　謝朓の詩に、好詩流轉如彈丸と、【八】角尾　盧仝月蝕詩に、東方蒼龍角、插戟尾捭風と、【九】奕奕　謝惠連の詩に、皎皎天河明、奕奕星宿備と、奕奕は美しき貌、又光がかがやく貌、【一〇】注眼　杜甫の詩に、欲傾注眼と、【一一】螢火　「淨名經」に、無以日光等彼螢火と、【一二】艤舟　舟を裝ふこと、「項羽紀」に、烏江亭長艤船待と、王維の詩に、艤舟一長嘯、四面來西風と、【一三】魚龍變　「漢書西域傳贊」に、曼衍魚龍角抵之戲と、【一四】曲折　委曲と同じ、落ち度なく詳かなるを謂ふ、【一五】低昂　杜甫の詩に、低昂各有意と、【一六】赴節　陸機の「文賦」に、舞者赴節而投袂と、【一七】歌板　杜牧の詩に、萬家相慶喜秋成、處處樓臺歌板聲と、公の自注に、是夜買客、舟中放水燈と、【一八】浪颭　「說文」に、颭風吹浪動也と、柳子厚の詩に、驚風亂颭芙蓉水と、【一九】咽咽は去聲讀のエンにて、入聲

對レ月題レ詩有二幾人一。　月に對し詩を題す幾人かある、
明朝人事隨（二五）レ日出。　明朝人事日に隨つて出づ、
（二六）悅然一夢瑤臺客。　悅然一夢瑤臺の客、

讀のエツにあらずと思ふ、憤厲の重なる貌、馬融の詩の咽咽陰蟲叫と同じ、【二二】咿啞　小兒の語を學ぶ聲、【二三】楚老　公の自注に、近有二一孫一名二楚老一と、【二四】從事　詩に、黽勉從レ事、不二敢告一レ勞と、唐制に、主簿の職、功曹の官は、總て之を從事と謂ふ、【二五】隨日　韓退之の詩に、從事隨レ日生と、【二六】悅然　悅然と同じ、うつとりとして自失する貌、李公垂の詩に、悅然夢作二瑤臺客一と、又「逸史」に、許渾嘗卒三日、人間二其故一、乃作レ詩曰、曉入二瑤臺一露氣淸、坐中唯見許飛瓊、乃復寢、驚起改二第二句一云、天風吹下步虛聲、曰昨夜夢到二瑤臺一、有レ女三百餘人、一云是許飛瓊、令レ改二二句一云、不レ欲二世間知一レ有レ我也と、

【題義】子由が南京より寄せられたる詩、西風吹レ著天容高、明月皎皎分二秋毫一、彭城閉レ門靑嶂合、坐聽百步鳴二飛濤一、使君攜レ客登二燕子一、月色著レ人如レ著レ水、筵前不レ設鼓與レ鐘、處處笛聲相應起、浮雲捲盡流二金丸一、戲馬臺西山鬱蟠、杯中綠酒一時盡、衣上白露三更寒、扁舟明月浮二古汴一、廻首逡巡陵谷變、河呑二巨野一入二長淮一、城沒二黃流一只三板、明年築レ城城似レ山、伐レ木爲レ隄隄更堅、黃樓未レ成河已退、空留二遺跡一令二人看一、城頭看レ月應二更好一、河流深處今生レ草、子孫免レ被二魚鼈食一、歌舞聊寬使君老、南都從事老更貧、羞レ見靑天月照レ人、飛鶴投レ籠不レ能レ出、曾是彭城座中客、此に次韻して作れるものである、

【詩意】明月は未だ羣山の高處に出でざるが、萬丈の長さの瑞光が白毫より生ずるかと思ふ、之に對して一盃の酒を飮んで未だ盡きざる間に、早や山上に銀闕が涌出する、是の時や亂雲が脫壞する狀は宛も濤が崩るる如くである、誰ぞや天公の爲めに其の眸子を洗ふ者は、誰でもない、そは明河に流る千斛の水である、遂には下界世間の人を冷殺して看せしむ、而し我を照して湛然として心に動搖が起らざらしむ、西南を望めば火星が彈丸の如く大なる光を放つて居る、角星も尾星も奕奕として蒼龍蟠の狀を作して輝く、所が火星も角星も他宵の事にて、今宵は如何に眼を注いで看るも見ること出來ない、そは螢火の如きものが月と淸寒を爭ふを許さないのである、又何人であるぞ舟を艤裝して古汴に臨むものは、舟中に千燈を置いて夜魚龍の變を作す者は誰である、曲折無心にして唯浪花を逐うて舟を行る、舟中にて起る歌板の聲は或は低く或は昂く巧に節に赴くの佳調である、舟中の燭光は色靑熒として滅沒山前に轉するを見る、浪は颭動し風は吹き廻して固より堅きものでない、兎角して明月は低れ易く人は散じ易く、乃ち歸り來りて我が家に酒を呼び更に重ねて看る、堂前の月色は愈よ淸好を知る、咽咽として寒螿は露草に鳴いて居る、簾を捲き戶を推開すれば寂として人影は無く、唯窗下に我が孫の楚老が咿啞と書を讀む聲がするのみ、南都の從事よ老いて更に貧なぞと羞ぢてはいかぬ、今夜月に對して詩を題する人は凡そ幾人である、明朝に至れば各の人事俗用が日の出るに隨つて紛紛と起る、今夜の如き遊びは悅然として一夢瑤臺の客たるのみである、

【餘論】紀曉嵐は起句を評して曰く、竟用二初唐體一、亦自宛轉可レ思と、又曰く、瑞光二字鄙と、又西南以下の四句を評して曰く、就二月明星稀語一、衍開脫二盡體物窠臼一と、又、何人以下の數句を評して、饜二一

波一、對面寫照、此是加二一倍一法と、又、結句を評して曰く、用二武元衡語一無レ迹と、多くは首肯が出來る、瑞光二字部は普通の詩語にあらざればならんが、佛教では一種の成語である。若し是を鄙と言はば、下の白毫も鄙と言はなければならぬ、佛典を少しも知らぬ紀が評したる語、坡公は泉下に於て大笑して居るであらう、

## 答二王鞏一【自注】鞏將レ見レ過。有レ詩自謂二惡客一戲レ之。

王鞏に答ふ【自ら注す】鞏將に過ぎられんとす、詩あり自ら謂ふ惡客之に戲る。

汴泗遶二吾城一。　汴泗吾が城を遶る、
城堅如二削鐵一。　城堅うして削鐵の如し、
中有二李臨淮一。(一)　中に李臨淮あり、
號令肝膽裂。　號令肝膽裂く、
古來彭(二)城守。　古來彭城の守、
未レ省レ怕二惡客一。(三)　未だ省せず惡客を怕るるを、
惡客云二是誰一。　惡客は是誰を云ふ、
(四)祥符相公孫。　祥符相公の孫、
是家豪逸生有レ種。(五)　是の家豪逸生るるに種あり、
(六)千金一擲二頗黎盆一。(七)　千金一擲す頗黎盆、
(八)連車載レ酒來。　連車酒を載せて來る、
不レ飲二外酒一嫌二其郇一。(九)　外酒を飲まざるは其の郇を嫌ふ、
子有二千瓶酒一。　子に千瓶の酒あり、
我有二萬株菊一。　我に萬株の菊あり、
任二子滿(一〇)頭插一。　任す子が滿頭に插むに、
團團見レ花不レ見レ目。　團團花を見て目を見ず、
醉中插レ花歸。　醉中花を插んで歸る、
花重壓二折(一一)軸一。　花重くして軸を壓折す、
問レ客何所レ須。　客に問ふ何の須ふる所と、
客言我愛レ山。　客は言ふ我は山を愛すと、
青山自遶レ郭。　青山自から郭を遶り、
不レ要二買(一二)山錢一。　買山の錢を要せず、

【字解】〔一〕李臨淮　「唐書李光弼傳」に、寶應元年、進二封臨淮郡王一、及レ拜二東都留守一、歸二徐州一、初光弼、代二郭子儀朔方一也、營壘士卒、麾幟無レ所レ更、而一號令、氣色乃益精明と、〔二〕彭城　古は縣名、古大彭氏の地、今の江蘇省銅山縣治、〔三〕惡客　「西京雜記」に、公孫宏、起二家於齊一、爲二丞相一、故人高賀從レ之、宏食以二脫粟飯一、覆以二布被一、賀怨曰、何用二故人富貴一、爲二脫粟布被一、我自有レ之、宏大慚、賀告レ人曰、公孫內服二貂蟬一、外衣二麻枲一、內廚五鼎、外膳一殽、豈可以示二天下一、於レ是朝廷疑二其矯一焉、宏聞レ之、歎曰、寧逢二惡賓一、不レ逢二故人一と、又士仁曰く、元結謂二不レ飲者一爲二惡客一、後人以二痛飲一爲二惡客一と、乃ち酒を飲まざる者を惡客とも惡賓とも謂ひ、又痛飲する者も惡客と謂ふ、〔四〕祥符相公　王鞏の大父魏國文正公は、眞宗の世、景德と祥符の間に宰相と爲る、鞏は卽ち其の孫、〔五〕有種　「漢陳勝傳」に、王侯將相、寧有レ種乎と、〔六〕千金　李太白の詩に、其レ情遠レ船沽二美酒一、千金一擲買二春芳一と、〔七〕頗黎盆　韓退之の詩に、谽谺鉅壑頗黎盆と、頗黎、頗梨、玻璃、玻瓈、皆同じ、漢代に始めて有り、橡色を帶びて透明なる玉盆である、〔八〕連車　漢の班孟堅が「西都賦」に、騰二酒車一以斟酌と、注に以レ事

此外有黃樓。　此の外黃樓あり、
樓下一河水。　樓下一河水、
美哉洋洋乎。　美なる哉洋洋乎、
可以療飢幷洗耳。　以て飢を療し幷せて耳を洗ふ可し、
彭城之游樂復樂。　彭城の游樂み復樂み、
客惡何如主人惡。　客の惡は何如ぞや主人の惡と、

載酒也と、【九】其鄉　宋の程大昌が撰なる「演繁露」に、唐令、在田野者爲鄉、別置鄉正一人、故世之鄙陋者、因以鄉名之、東坡詩、不飲外酒餘其鄉、正用此意と、【一〇】滿頭插　杜牧の詩、塵世難逢開口笑、菊花須插滿頭歸と、【一一】折軸　「史記張儀傳」に、羣輕折軸と、【一二】買山　「世說」に、支道林、就深公買卬山、深公答曰、未聞巢由買山而隱と、【一三】洋洋乎　「詩衞風」に、河水洋洋と、水の盛んに、又多くある貌、【一四】療飢　「詩」に、泌之洋洋、可以樂飢と、

【題義】王鞏が詩を以て戲れたるに答ふる詩である、

【詩意】汴水と泗水とは吾が彭城を遶りて流る、彭城は堅固にして削鐵の如くなれば水害なぞ受けない、城中には昔し李臨淮なる豪傑が住して、號令を下すときは衆人皆肝膽の裂くるかと疑ふ程猛烈である、古來より此の彭城の守たる者は、痛飲淋漓たる惡客なぞを怕れない、僕が今惡客と云ふは其の人誰であるぞ、祥符の年に宰相たる文正公の孫を謂ふ、是の王家は世世豪傑が生れて定んで種が有るかと疑ふ、其の人千金を一擲して頗黎盌を買ふの勇を備ふ、乃ち連車に美酒を載せ來りて、外酒を飲まざるは、鄙酒飲むべき味が無いからである、此の如く子には千瓶の美酒ありて、僕には萬株の菊がある、此の菊は自由に采りて君が滿頭に插むことを許す、然らば團團但花を見て目を見ることが出來ない、而して醉中に花を頭髮に插んで歸る、花重うして車軸を壓折することもあらん、僕は客に問ふ何の須ふる所ぞやと、客は答へて言ふ我は平生山を愛すと、愛するが故に青山が郭を遶る所に住を求むる、愛するが買ふ樣な俗氣は持つて居らない、此の青山の外には黃樓がある、黃樓の下は一河水が、美なる哉を歌はんか洋洋乎として流るる、此の水を掬して以て飢も療すべく又耳をも洗ふべし、彭城の地の樂は他に一倍する樂がある、客を惡と言ふ主人の惡は、客の惡と比較して何如か上である、

【餘論】紀曉嵐曰く、調亦近野、以爲豪放則太誤と、又、號令肝膽裂、語殊未穩と、要するに言はんと欲する所を言うて、句の佳惡を問はざるものの如き作である、

### 次韻王定國馬上見寄

王定國が馬上寄せらるるに次韻す

昨夜霜風入裌衣。　昨夜霜風裌衣に入る、
曉來病骨更支離。　曉來病骨更に支離す、
疎狂似我人誰顧。　疎狂我に似たるは人誰か顧みん、
坎坷憐君志未移。　坎坷憐む君が志未だ移らざるを、
但恨不攜桃葉女。　但恨む桃葉の女を攜へざるを、

【字解】【一】裌衣　潘岳の「秋興賦」に、御裌衣と、【二】支離　「莊子人間世篇」に、支離其形者、猶足以養其身、終其天年と、分れ散りて完全ならざるを謂ふ、白樂天の詩に、莫獸舉官貲冷落、駒膠鄂客病支離と、【三】疎狂　狂放不羈

尙能來趁菊花時。　尙能く來りて菊花の時を趁ふ、
(六)南臺二(七)謝人無繼。　南臺の二謝人の繼ぐ無し、
直恐君詩勝(八)義熙。　直恐る君が詩義熙に勝るを、
【自注】二謝從宋武帝九日燕戲馬臺。

の貌、【四】坎坷　轗軻と同じ、行き悩む貌、不遇を謂ふ、杜甫の詩に、德尊一代常坎軻、名垂萬古知何用と、熙寧八年に趙世居の事に坐して、王鞏は勒停せられ、世居は死を賜はつたのである、【五】桃葉女　白樂天の詩に、小妓攜桃葉、新歌踏柳枝と、次公曰く、桃葉王子敬妾也、有詩云、桃葉復桃葉、渡江不用楫と、又「古今樂錄」に、王獻之二妾、桃葉桃根、獻之作桃葉歌と、【六】南臺　「查注」に、南臺卽戲馬臺、以在徐州城南故名と、【七】二謝　謝瞻と謝靈運、公の自注に、二謝從宋武帝九日燕戲馬臺と、「宋書」に、宋武帝爲公時、九月九日、出游項羽戲馬臺、與百僚賦詩と、【八】勝義熙　宋の武帝が公たりし時は、晉の義熙十四年に當る、

【題義】王定國が馬上にて作れる詩を寄示せらる、乃ち之に次韻して作れるもの、

【詩意】昨夜よりの霜風は裌衣に入つて寒い、曉來病骨の更に支離するかと覺ゆ、疎狂我が似き者は誰か同情する者である、坎坷なる君が志未だ移らざることを憐む、但恨むらくは情を慰むる桃葉の女を攜へざることを、尙能く詩を賦する菊花の時を趁ふを約せん、昔し南臺に詩を賦せし二謝は後人其の妙を繼ぐことが無い、直恐らくは君が詩は二謝に勝るものがあらう、

【餘論】公の作としては聲聞乘に屬して、獨覺乘にも遠く、佛乘には尙ほ遠い、且、曉來、能誰、人無、憐君、恐君、公は自身病骨支離と言ふ、余は詩法支離と言はんと欲するのである、

## 與頓起孫勉泛舟探韻得未字

頓起孫勉と舟を泛べて探韻、未字を得たり

窗前堆梧桐。牀下鳴(一)絡緯。　窗前梧桐堆し、牀下絡緯鳴く、
(二)佳人尺(三)書到。(四)客子中夜喟。　佳人尺書到る、客子中夜に喟す、
朝來一樽酒。(五)晤語聊自慰。　朝來一樽の酒、晤語聊か自から慰す、
秋蠅已無聲。霜蟹初有味。　秋蠅已に聲無く、霜蟹初めて味あり、
當爲(六)壯士飮。(七)眥裂須(八)磔蝟。　當に壯士が飮を爲すべし、眥裂け須磔蝟、
勿作兒女懷。坐念(九)蠨蛸畏。　兒女の懷を作す勿れ、坐して念ふ蠨蛸の畏を、
山城亦何有。一笑瀉肝胃。　山城亦何か有る、一笑肝胃を瀉ぐ、
泛舟以娛君。魚鼈多可(一〇)餽。　舟を泛べ以て君を娛しましむ、魚鼈多く餽に可なり、
縱爲十日飮。未(一一)遽主人費。　縱ひ十日の飮を爲すも、未だ遽かに主人を費さす、
(一二)吾儕俱老矣。(一三)耿耿知自貴。　吾儕俱に老いぬ、耿耿自から貴きを知る、
寧能傍門戶。(一四)啼笑雜猩狒。　寧ぞ能く門戶に傍ひ、啼笑猩狒に雜はらん、
要將百篇詩。一吐千(一五)丈氣。　要は百篇の詩を將て、一たび千丈の氣を吐かんと、

蕭條歲行暮。迫二此霜雪未一(一六)。　蕭條歲行くゆく暮れ、此の霜雪の未に迫ぶ、

明朝出二城南一。遺跡(一七)觀二楚魏一。　明朝城南に出で、遺跡楚魏を觀ん、

西風迫吹(一八)レ帽。金菊(一九)亂如レ沸。　西風迫つて帽を吹く、金菊亂れて沸くが如し、

願君勿レ言レ歸。輕レ別吾所レ諱。　願はくは君歸を言ふこと勿れ、別を輕んずるは吾が諱む所、

【字解】〔一〕絡緯　呉淑の「秋賦」に、絡緯悲啼、蟋蟀宵征と、「蓬齋閒覽」に、浙人呼二蠡斯之善鳴者一爲二絡緯機女一と、和名クツワムシである、〔二〕佳人　漢武帝の辭に、懷二佳人一兮不レ能レ忘と、品格端正なる人、〔三〕尺書　尺翰、尺簡、尺牘、皆同じ、古は一尺一寸の板に書するが法、〔四〕客子　白樂天の詩に、貧賤多二悔尤一、客子中夜歎と、〔五〕晤語　「詩」に、彼美淑姬、可二與晤語一と、晤は邂對、面會すること、〔六〕壯士飲　傲然として飮むの意、「漢樊噲傳」に、項羽曰、壯士也、賜二之巵酒一と、〔七〕背裂　「史記項羽記」に、樊噲瞋レ目視二項王一、頭髮上指、目眥盡裂と、〔八〕蠨蛸　「晉桓溫傳」に、劉惔常稱レ之曰、溫眼如二紫石稜一、鬚作二蝟毛磔一、孫仲謀、晉宣王之流亞也と、〔九〕蠨蛸　「毛詩」に、伊威在レ室、蠨蛸在レ戶、町畽鹿場、熠燿宵行、亦可レ畏也、伊可レ懷也と、蠨蛸は蜘蛛の小にして長脚を有するもの、俗呼んで喜子と爲す、〔一〇〕可饋　「論語義疏」に、餽曰レ餽、謂二生肉未レ煮者一と、〔一一〕主人瓮　「漢東方朔傳」に、上語二竇太主一曰、恐暴臣從官多、大爲二主費一、當二是時一、董君見レ尊不レ名、稱二主人翁一、飮大驩樂と、〔一二〕吾儕　吾等、吾儕、皆同じ、「左傳宣公十一年」に、申叔時曰、吾儕小人、所レ謂取二諸其懷一、而予レ之也と、〔一三〕耿耿　「詩衞風」に、耿耿不レ寐、如レ有二隱憂一と、是は心不安の貌、今は心に記する所ありて、忘れざるを謂ふ、韋蘇州の詩に、此心常耿耿と、〔一四〕啼笑　漢の「左思吳都賦」に、猩猩啼而就レ禽、鼯鼠笑而被レ格と、師古曰く、猩猩形若レ狗、而人面、善與レ人言、被レ執將レ死、則相對而泣、狒狒狀如レ人、面長脣黑身、有レ毛反レ踵見レ人則笑、笑則上レ脣掩レ目と、「集韻」に、狒或作レ𥝩、〔一五〕千丈氣　韓退之の詩に、李杜文章在、光焰萬丈長と、〔一六〕霜雪未　霜雪未だ降らざる時、〔一七〕遺跡　彭城は本宋地、而して其の後、齊楚魏が宋を滅ぼして其の地を三分する、〔一八〕吹帽　韓退之の詩に、霜風破二佳菊一、嘉節迫吹レ帽と、〔一九〕金菊　孟郊の詩、金菊亦姓陶と、「木鼈」に、菊一名金沸草と、

【題意】頓起と孫勉の二人と同じく舟を泛べて游び、各の探韻して公は未の字を得て作りしものである、

【詩意】窗前には梧桐の葉が落ちて堆積する、牀下には絡緯が盛んに鳴く、是の時に佳人より尺書が到著したのである、客子は種種の感想が湧きて中夜に嘿く、朝來に及んで一樽の酒を開き、佳人と晤語して以て自から慰む、今や秋蠅は已に聲無く、霜蟹は初めて美味を有つ、佳人等は當に樊噲の如く豪快に飮むべきである、所謂皆は裂け鬚は蝟の毛の如く開くべきである、兒女の如きの悲懷を作してはいかぬ、坐して蠨蛸の長を念ふも、山城には亦何の有する所である、一笑して肝胃を瀉ぎ、舟を泛べて以て君等と倶に娛まん、魚鼈は多く新鮮にて腥氣のあるのが可い、縱ひ十日間連續して飮むも、未だ遽かに主人をして費さしむることはせぬ、が吾儕は倶に老いぬ、唯耿耿として自重自貴なるを知る、寧ぞ能く他人の門戶に傍うて、憫を乞うて啼笑する猩狒に倣はん、要は須らく百篇の詩を作りて、一たび千丈天を衝く氣概を吐くべきである、蕭條として歲は行くゆく暮に逼る、此の霜雪の未だ降らざるうちに、明朝は宜しく城南に出でて、以て楚魏の遺跡を觀んと思ふ、西風は體に迫りて帽を吹き飛ばす强さである、金菊は亂開して宛も沸くが如くである、願はくは君等は歸る歸ると口にしてはいかぬ、別を輕輕視するは吾の固より諱む所である、

【餘論】紀曉嵐曰く、窄韻巧押、東坡長技、昌黎亦能押二窄韻一、而自然則遜矣と、窄韻は所謂險韻、動もすれば語を成さざるものがある、昌黎の詩は公に較ぶれば、自然を遜すと曰ふ紀評は實に同感である

る、但し題に泛舟とあるが、魚鼈の五字を除く外、舟中の事とは思へず、題に拘泥するは不可なるも、全く題を離るるも、亦不可である、此の詩を何と評すべきや、

## 次韻答頓起二首

次韻、頓起に答ふ二首

（一）挽袖推腰踏破紳。　袖を挽き腰を推して踏んで紳を破る、
舊聞攜手上天門。（二）　舊聞く手を攜へて天門に上ると、
相逢應覺聲容似。（三）　相逢うて應に覺る聲容の似たるに、
欲話先驚歲月奔。　話せんと欲して先づ驚く歲月の奔るに、
（四）新學已皆從許子。（五）　新學已に皆許子に從ひ、
諸生猶自畏何蕃。（六）　諸生猶自から何蕃を畏る、
（七）殿廬直宿眞如夢。　殿廬直　宿眞に夢の如く、
猶記憂時策萬言。　猶記す憂時策萬言、

【自注】頓君及第時、余爲殿試編排官、見其答策、語頗直、其後與子由試舉人西京、既罷、同登嵩山絶頂、嘗見其唱酬詩十餘首、頓時中及之。

【字解】【一】挽袖推腰　「左傳襄公十四年」に、臧孫說、謂其人曰、衞君必入、夫二子者、或輓之、或推之、欲無入得乎と、挽は輓と同じ、人を牽離すること、又其の反對に如出の意、韓退之の詩、自顧老母遊門啼、挽斷衫袖留不止と、一心に出てはいかぬと止めること、【二】天門　公が自注の如くば嵩山の絶頂に上ること、太山の天門ではない、【三】聲容似　「戰國策」に、趙襄子、將知伯頭爲飲器、豫讓曰、吾其報知氏之讎矣、乃漆身爲厲、滅鬚去眉、自刑以變其容、爲乞人、而往乞、其妻不識曰、狀貌不似吾夫、其音何類吾夫之甚也、又呑炭爲啞變其音と、【四】新學　王安石が新經の學を言ふ、【五】許子　「孟子滕文公篇」に、有爲神農之言者許行と、安石を譬ふ、【六】何蕃　韓退之が作る「何蕃傳」に、蕃入太學者二十餘年、擧進士、學成行尊、諸生推頌、不敢與蕃齒と、【七】殿廬　公の自注にて明白、

【詩意】袖を挽いたり腰を推したりして遂に踏んで紳を破るに至る、舊時を聞知する君と手を攜へて嵩山の天門に上りしことを、今や相逢うて互に應に覺ゆ其の聲容の相似たるを、舊を話せんと欲して先づ驚く歲月の奔馳せるに、新學が少年輩に喜ばれて皆許子に從學する、諸生は猶自から今日の何蕃即ち君を畏るる、殿廬に直宿せることは眞に夢の如くに過ぎた、猶記憶する君が作る憂時の對策數萬言堂堂たる論文を、

## 【二】

（一）十二東秦比漢京。　十二東秦漢京に比す、
去年古寺共題名。（二）　去年古寺に共に題名す、

【自注】去歲見之於青州。

早衰怪我遠如許。（三）　早衰怪しむ我が遠かに許の如きを、
苦學憐君太瘦生。　苦學憐む君が太瘦生を、
茅屋擬歸田二頃。（四）　茅屋歸らんと擬す田二頃、

【字解】【一】十二東秦　「漢高祖紀」に、田肯賀、上曰、秦形勝之國、帶河阻山、縣隔千里、秦得百二焉、齊地、方二千里、持戟百萬、齊得十二焉、此東西秦也と、陸士衡の詩に、孟諸呑楚夢、百二侔秦京と、【二】古寺　唐の太宗が建立せし京洛の慈恩寺、寺中の雁塔は

(五)金丹終掃雪千莖。　金丹終に掃ふ雪千莖、
何人更似(六)蘇司業。　何人か更に似ん蘇司業に、
和遍新詩滿洛城。　和遍の新詩洛城に滿つ、

士人が題名處と成つて居る、【三】遽如許　「後漢書左慈傳」に、曹操欲レ殺レ之、慈走入二羊羣中一老羝、屈二前膝一人立而言曰、遽如レ許と、【四】田二頃　田二百畝を言ふ、蘇秦以來、中人の生活は二百畝と定まるか、【五】金丹　名藥又は仙藥、杜甫の詩に、白髮千莖雪、丹心一寸灰と、【六】蘇司業　唐の詩人、司業は官名、人名は源明、次公曰く、先生以比二子由一と、

【詩意】十二の東秦は漢京と比較して可い、去年君と慈恩寺塔に共に題名せしことを、然るに今年は早衰して怪しむ我が遽に許の如くの狀と爲る、苦學の爲めに君も太瘦生たるを憐まずに居られない、茅屋に歸らんと擬するも田は二頃ありて安泰である、金丹を求めて終に此の雪千莖の鬚を掃ふことも出來る、何人か更に蘇司業に似て居る者ぞ、新詩を作りて和する者多く洛城に滿たしむるぞや、

【餘論】紀曉嵐曰く、新學之句太露と、後世に於て讀むときは何でも無いが、當時に在つては露骨も極まる、猶自、猶記、刊本の誤であらう、

九日黃樓作　　九日黃樓の作

去年重陽不可說。　去年の重陽は說く可からず、
南城夜半千(一)漚發。　南城夜半千漚發す、

【字解】【一】千漚發　「首楞嚴經」に、空生二大覺中一、如二海一漚發一と、【二】黃花　菊花は黃色を以て稱すべきものと爲して居る、【三】韛韈　韛は鞾と同じ、皮の履、韈は韈の俗字、足袋である、【四】一呷　「說文」に、吸呷鳴と、吸ひ込むこと、【五】千柄鍤　此の三字は公の造語であるか、或は從來の成語であるか、先輩は何の考證も無ければ、確と斷じがたきも、全く鄙野なる木强漢の意味と思ふ、【六】淸河　黃河、天河皆同じ、【七】霜初殺　「春秋定公元年」に、冬十月、隕霜殺レ菽と、【八】千尋刹　刹は刹竿にて、寺塔を謂ふ、頭陀寺の塔尖が見えざるのである、王簡栖の頭陀寺碑に、列刹相望は其の地に在りて觀望することなれば、是は寺寺相望であつて、寺塔相望ではない、【九】鴉軋　櫓聲を形容するのである、杜牧の詩に、鴉棹何時聞二軋鴉一と、【一〇】薄寒　宋玉の九辯に、憯悽增欷兮、薄寒之中レ人と、【一一】艶陽　韓退之の詩に、數

水穿城下作雷鳴。　水は城下を穿ちて雷鳴を作し、
泥滿城頭飛雨滑。　泥は城頭に滿ちて飛雨滑らか、
(二)黃花白酒無人問。　黃花白酒人の問ふ無く、
日暮歸來洗韛(三)韈。　日暮歸來韛韈を洗ふ、
豈知還復有今年。　豈知らんや還復今年有らんとは、
把盞對花容一(四)呷。　盞を把つて花に對し一呷を容る、
莫嫌酒薄紅粉陋。　嫌ふ莫かれ酒薄うして紅粉陋なるを、
終勝泥中千(五)柄鍤。　終に勝る泥中千柄鍤、
黃樓新成壁未乾。　黃樓新たに成りて壁未だ乾かず、
(六)淸河已落霜(七)初殺。　淸河已に落ちて霜初めて殺す、
朝來白霧如細雨。　朝來白霧細雨の如く、
南山不見千(八)尋刹。　南山見えず千尋の刹、
樓前便作海茫茫。　樓前便ち海茫茫と作る、
樓下空聞櫓(九)鴉軋。　樓下空しく聞く櫓の鴉軋たるを、

(一〇)薄寒中人老可畏、　薄寒人に中し老は畏る可し、
熱酒澆(一一)腸氣先壓、　熱酒腸に澆ぎて氣先づ壓す、
(一二)煙消日出見漁邨、　煙消し日出でて漁邨を見る、
遠水鱗鱗山(一三)齾齾、　遠水鱗鱗山齾齾、
(一四)詩人猛士雜龍虎、　詩人猛士龍虎雜はる、
【自注】坐客三十餘人、多知名之士。
(一五)楚舞吳歌亂鵝鴨(一六)、　楚舞吳歌鵝鴨亂る、
(一七)一杯相屬君勿辭、　一杯相屬す君辭する勿れ、
此景何殊泛清霅(一八)、　此の景何ぞ殊ならん清霅に泛ぶに、

杯澆腸胃暫醉、皎皎萬慮隨還新と、【一二】煙消 柳子厚の詩に、煙消日出不見人と、【一三】齾齾 山の高き處、岩石が歯の缺けたる如く聳ゆるを言ふ、【一四】詩人 公の自注に、坐客三十餘人、多知名之士と、韓退之の詩に、坐中之客皆龍虎と、【一五】楚舞 「漢書張良傳」に、戚夫人泣涕、上曰爲我楚舞、吾爲若楚歌と、【一六】鵝鴨 「舊唐書李愬傳」に、取吳元濟、至懸瓠城、夜半雪甚、近城有鵝鴨池、愬令驚之、以御其聲と、「新唐書」に、城旁皆鵝鶩池、令擊之以亂軍聲と、【一七】一杯 韓退之の詩に、一杯相屬君當歌と、【一八】清霅 一名は苕水、浮玉山より出で、吳興に至りて、太湖に入る、

【題意】重陽の日に黃樓に登りて作る、單に九日と記し某月と無きものは重陽に限ることである、

【詩意】去年重陽の佳節は說いてはいかぬ、何故とならば南城夜半に千漚發して、雨水が城下を穿ちて噇噇と雷鳴を作すのみでない、泥濘は城頭に滿ちて飛雨は滑らかである、此の中を犯して黃花と白酒を持つて問ひ來る人も無い、日暮に及んで我が家に歸り來り以て韈襪を洗ふ、豈知らんや還復今年も去年と同樣の狀態である、盞を把つて黃花に對して一吸呷する、嫌うてはいかぬ酒も劣等、女給も劣等であるを、終に勝る泥中の千柄鍤には、黃樓は新築成りて壁は未だ乾かない、天河は已に落ちて霜も初めて肅殺の氣を露はす、而して朝來の白霧は細雨と同樣である、南山の上に千尋の塔尖を見ることが出來ない、樓前を見れば雨水の爲め海茫茫たる狀である、樓下を過ぎる舟は櫓聲を鴉軋と鳴らすを聞く、薄寒が人に中して老人は殊に畏るる感を爲る、强ひて熱酒を腸に澆ぎて元氣を出す、既にして煙は消し日は出でて漁邨を見ることが出來た、遠方の水は鱗鱗と流れ遠山は齾齾である、此の樓上には或は龍の如く或は虎の如き偉なる詩人猛士が會して居る、或は楚舞、或は吳歌、鵝鴨を亂すの概がある、一杯を以て相屬する君よ辭し玉ふな、此の景色は何ぞ清霅に泛ぶと殊なる所あらんや、

【餘論】紀曉嵐は起句を評して、筆筆作龍跳虎臥之勢と、查氏は曰く、陰陽晦明、攝向毫端、作大開合、淺人但見寫景耳と、今案するに虎號ぶは勢がある、臥しては勢は無い、紀は猿が木より落ちたる者、

## 太虛以黃樓賦見寄作詩爲謝

太虛黃樓賦を以て寄せらる、詩を作り爲めに謝す

我在黃樓上、欲作黃樓詩、　我は黃樓の上に在り、黃樓の詩を作らんと欲す、
忽得故人書、中有黃樓詞、　忽ち得たり故人の書、中に黃樓の詞あり、

黄樓高十丈。下建五丈旆。　黄樓高さ十丈、下に五丈の旆を建つ、
楚山以爲城。泗水以爲池。　楚山以て城と爲し、泗水以て池と爲す、
我詩無傑句。萬景驕莫隨。　我が詩傑句無し、萬景驕つて隨ふこと莫し、
夫子獨何妙。雨雹散雷椎。　夫子獨り何ぞ妙なる、雹を雨らし雷椎を散す、
雄辭雜今古。中有屈宋姿。　雄辭今古を雜ふ、中に屈宋の姿あり、
南山多磬石。清滑如流脂。　南山磬石多し、清滑脂を流すが如し、
朱蠟爲摹刻。細妙分毫釐。　朱蠟摹刻を爲し、細妙毫釐を分つ、
佳處未易識。當有來者知。　佳處未だ識り易からず、當に來者の知るあるべし、

【字解】【一】莫隨　白樂天の詩に、身閑景來隨と、【二】雨雹　雹は雨冰卽ち霰と同じ、春秋經僖公二十九年、大雨雹とある、【三】雷椎　郭景陽の句に、豐隆奮椎とある、豐隆は雷の異名、椎は雷石である、【四】屈宋　楚の屈原と宋玉との師弟を謂ふ、【五】磬石　南山より出づる石は以て磬を造るを得、【六】清滑　石質が清滑にして、少女の肌膚が柔美なるに備ふ、【七】朱蠟　滑石の一種、所謂朱色の蠟石、【八】摹刻　印材、又は畫を刻するのである、【九】佳處　公が讀孟郊詩に、佳處時一遭とある、「晉書」に孫綽作天台山賦、示友人范榮期、卿至佳句、輒云應是我輩語と、

【題義】秦太虛が黄樓賦を寄示せられたるに由つて、公は黄樓詩を作り之に酬いたるものである、

【詩意】我は黄樓の上に在りて、以て黄樓の詩を作らんと思ふ、其の時忽ち故人の書を得、開きて之を讀む中に黄樓の詞賦がある、詞賦の中に黄樓は高さ十丈、樓下には五丈の旆を建ててある、而して黄樓を守る楚山は以て城と爲し、黄樓を遶る泗水は以て池と爲す、詞賦は此の如く傑句があるが、我が詩は曾て此の傑句は無い、眼前の萬景が萬景自から驕るが如くにして、我が意に隨うて與れない、夫子は獨り何ぞ此の妙句を吐く、譬ふれば雹を雨らし雷椎を散するの伎がある、其の雄辭は今古に出入して、詞賦中に屈と宋の二文豪の姿を認むることが出來る、南山は由來磬石が多い、其の質や清滑にして脂を流すが如くの感がある、朱蠟の如き摹刻を爲せば、細妙にして毫釐を分つことが出來る、其の佳處は容易に識ることが出來ない、其の佳處を知るは後來の賢者を待つのみである、

【餘論】一讀して屈宋姿に至るまでは、一氣呵成の概があるを知る、南山多の句に至りて、何の爲めであるか、蛇足にあらずやとの感が起る、再思して知る、是は賦を石に刻して後來に留む、讀む者多くは佳處を識る能はずして、更に後來の者を待つとの意なるを會し、始めて蛇足にあらず、反つて是佳處なりと感じたのである、

## 九日次韻王鞏　九日王鞏に次韻す

我醉欲眠君罷休。　我醉うて眠らんと欲す君罷休せよ、
已教從事到青州。　已に從事をして青州に到らしむ、

【字解】【一】我醉　李太白の詩に、我醉欲眠君暫去、明朝有意抱琴來と、「史記」に、呉王謂孫子

鬢霜饒我(三)三千丈。　鬢霜我より饒きこと三千丈、

詩律輸君(四)一百籌。　詩律君に輸す一百籌、

聞道(五)郎君閉東閣。　聞く道らく郎君東閣を閉づと、

且容(六)老子上南樓。　且らく容す老子が南樓に上るを、

相逢不用忙歸去。　相逢うて用ひず忙はしく歸去するを、

(七)明日黄花蝶也愁。　明日黄花蝶も也愁ふ、

曰、將軍歸休と、【二】從事　「世說」に、桓公有主簿善別酒、有酒輒令先嘗、好者謂青州從事、惡者謂平原督郵、注、青州有齊郡、平原有鬲縣、從事言到臍下、督郵言在鬲上住也と、【三】三千丈　李白の詩、白髮三千丈、緣愁似箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜と、【四】一百籌　「大唐新語」に、揚纂判曰、寧輸一籌と、【五】郎君　五代の王保定撰なる、「摭言」に、李義山、師令狐文公楚、大中中趙公綯、在内廷、重陽日、義山謁不見、因以一篇紀屏風而去、云曾共山公把酒卮、霜天白菊正離披、十年泉下無消息、九日樽前有所思、莫學漢臣栽苜蓿、還同楚客詠江蘺、郎君漸貴施行馬、東閣無因更重窺と、【六】老子　「晉書庾亮傳」に、亮在武昌、諸佐史殷浩之徒、乘秋夜往登南樓、不覺亮至、諸人將起避之、亮曰、諸君少住、老子於此、興復不淺と、【七】明日　唐の鄭谷が十日菊の詩に、節去蜂愁蝶不知、曉庭還繞折殘枝、自緣今日人心別、未必秋香一夜衰と、

【詩意】我は醉うて眠らんと思ふから君も罷休し玉へ、已に徹底して酒は十分である、君の鬢霜は我よりも饒きこと三千丈も上である、が、我が詩律は君より劣ること一百籌も下である、歷史にて聞いて居る郎君が東閣を閉ぢたることを、又老子が南樓に上りて少年と共に興を遣りしことを、偶に一年一度の佳節に逢うて會飮したのであるから、忙しく歸去することは許さぬ、古人も十日は蜂愁と言うたが僕は蝶も亦愁ふと思ふ、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、此嫌有粗獷之氣と、余は謂ふ、八句の中第六句のみ、晉時の故事を用ひ、餘の七句は盡く唐代の故事を用ふ、學博きこと海の如き人にあらざれば、決して作る能はざるものである、粗獷の氣は聊かも無い、但例の同字多きは公の病と思はる、我醉、饒我、君罷、輸君、郎君、此等を指して粗獷と評するならば、聊か恕すべきである、

## 送頓起

頓起を送る

客路相逢難。爲樂常不足。　客路相逢ふこと難し、樂を爲す常に足らず、

臨行挽衫袖。更賞折(一)殘菊。　行に臨んで衫袖を挽く、更に折殘の菊を賞せん、

佳人亦何念。悽斷陽關曲。　佳人亦何をか念ふ、悽斷す陽關の曲、

(二)酒闌不忍去。共接一(三)寸燭。　酒闌にして去るに忍びず、共に一寸燭に接ぐ、

留君終無窮。歸駕不免促。　君を留めて終に窮まり無し、歸駕促がすを免れず、

(四)岱宗已在眼。一往繼前(五)躅。　岱宗已に眼に在り、一往して前躅を繼がん、

(六)天門四十里。夜看扶(七)桑浴。　天門四十里、夜扶桑に浴するを看る、

回頭望彭城。大海浮一粟。　頭を回らして彭城を望めば、大海一粟を浮ぶ、

故人在其下、塵土相〈八〉𨃩蹴。　故人其の下に在り、塵土相𨃩蹴す、

惟有黃樓詩。千古配〈九〉淇澳。　惟黃樓の詩あり、千古淇澳に配せん、

〔自注〕頃有詩記黃樓本末。

【字解】〔一〕折殘菊　鄭谷の詩、曉庭還繞折殘枝と、〔二〕酒闌　程度を越し、俗に十二分に飮むことを酒闌と言ふ、〔三〕一寸燭　「南史王僧孺傳」に、竟陵王子良、嘗夜集學士刻燭爲詩四韻者、則刻一寸、以此爲率と、〔四〕岱宗　太山を尊稱して岱宗と言ふ、宗は尊の義、長の義、歸の義等を帶ぶ、〔五〕前躅　前人の高躅である、韋蘇州の詩に、君子有高躅と、〔六〕天門　泰山の天門を言ふ、〔七〕扶桑浴　「淮南子」に、日出於暘谷、浴於成池、拂於扶桑と、〔八〕𨃩蹴　𨃩は彼と此と相ひ擊つの聲、喧𨃩である、蹴は蹴踏、フミツケルのである、〔九〕淇澳　「毛詩」に、瞻彼淇澳、綠竹猗猗と、

【題義】頓起が鄕里に歸るを送る詩である、

【詩意】自他共に客路にて相逢ふことは難い、樂を爲すも常に滿足ではない、君が行るに臨んで衫袖を挽き留む、更に折殘せる菊を賞せんと思ふ、佳人も心中亦何を念ふぞや、陽關の曲を歌ふも悽斷である、酒は已に十二分なるも猶去るに忍びない、共に一寸の燭にも接し居る、が、君を留むるも終には窮まる所が無い、別を惜むは萬萬ながら終に促がして歸らしむるに至る、岱宗は已に近く眼前に在る、君が此に一往して前賢が游賞せし高躅を繼ぐべきである、大天門や小天門と四十里に渉る、此に於て日が扶桑に浴するを看、更に頭を回らして彭城を望めば、大海に一粟を浮べたる感が起るであらう、君の故人である僕は其の下に在つて、塵土に相𨃩蹴する、唯君が作る黃樓の詩のみ有りて、其の名篇であることは千古に淇澳の詩と配合する、

【餘論】紀曉嵐は評して、從對面一邊著筆、景中有情、情中有景、將兩地兩人、鎔成一片、筆力奇絕、末二句、收得少促、與上文亦不甚貫、遂爲白璧之瑕と、余思ふに相𨃩蹴にて止むときは、却つて是れ促るものと、惟有の十字を他の句に代ふれば更に名篇と爲ると、

送孫勉　　孫勉を送る

昔年罷東〈一〉武。曾過北〈二〉海縣。　昔年東武を罷め、曾て北海縣を過ぐ、

〈三〉白河翻雪浪。黃土如蒸麪。　白河は雪浪を翻へし、黃土は蒸麪の如し、

桑麻冠東方。一熟天下賤。　桑麻は東方に冠たり、一熟して天下賤し、

是時累〈四〉饑饉。嘗苦盜賊變。　是の時饑饉に累せらる、嘗て盜賊の變に苦しむ、

每憐〈五〉追胥官。野宿風裂面。　每に憐む追胥官、野宿すれば風面を裂く、

君爲〈六〉淮南秀。文采照〈七〉金殿。　君は淮南の秀たり、文采金殿を照らす、

〔自注〕君嘗考中進士第一人。

胡爲事奔走。投〈八〉筆腰〈九〉羽箭。　胡爲れぞ奔走を事とし、筆を投じて羽箭を腰にする、

更被〈一〇〉犇將軍。豪篇來〈一一〉督戰。　更に犇將軍にかうむつて、豪篇督戰より來る、

【自注】其兄莘老、以詩寄之、皆言戰事。

(一二)親程三郡(一三)士。玉石不(一四)能衙。　親しく程す三郡の士、玉石衙ふ能はず、

欲知君得人。失者亦稱善。　君が人を得るを知らんと欲せば、失者も亦善と稱す、

君才無不可。要使經百(一五)鍊。　君が才は可ならざるは無し、百鍊を經せしめんと要す、

吾詩堪咀(一六)嚼。聊送別酒嚥。　吾が詩咀嚼に堪へたるならば、聊か送る別酒の嚥、

【字解】〔一〕東武　密州を謂ふ、公は曾て密州に守たるのである、前に別東武流杯詩がある、〔二〕北海縣　當川と高術と膠東との三國は皆此の縣に屬す、今日の直隸一帶の地、〔三〕白河　源は塞外の土山より出で、密雲縣に至り、潮河と合流する、〔四〕饑饉「爾雅」に穀不熟爲饑、蔬不熟爲饉と、〔五〕追胥「周禮」に、小司徒之職、掌建邦之教法、以起軍旅、以作田役、以比追胥、以令貢賦、注曰、追謂逐寇、胥謂伺捕盜賊と、〔六〕淮南秀　淮水以南の地、文章の俊秀、〔七〕金殿　江文通の詩、列坐金殿側と、〔八〕投筆　魏徵の詩、投筆事戎軒と、〔九〕羽箭　杜甫の詩、猛將腰間大羽箭と、李白の詩、流星白羽腰間插と、〔一〇〕驃將軍　公が宿餘杭法喜寺、懷孫莘老學士詩に、好在紫髯翁と、魏の張遼、紫髯將軍を以て孫權を目す、今莘老は多髯、又姓は孫、故に此の事を用ふ、乃ち知る、髯將軍は孫勉の兄の孫莘老を言ふ、〔一一〕督戰　莘老詩を以て勉に寄す、多く戰事を言ふ、〔一二〕親程「史記秦始皇紀」に、以衡石量書、日夜有程、不中程、不得休息と、程は度量の總名である、程文又は程式、廳試文字の程式である、〔一三〕三郡　徐州と沂州と鄆州との三である、〔一四〕不能衙「揚子」云、衙玉而賈石、不能聚也と、〔一五〕百鍊「漢官儀」に金取堅剛、百鍊而不耗と、〔一六〕咀嚼　孟東野の詩に、好詩更相續、倒競生牙關、前賢死已久、猶在咀嚼間と、

【詩意】僕が昔年東武の守を罷め歸る途中、曾て北海縣の路を過ぐ、是の時白河は雪浪を翻す如く暴る、而して黃土は宛かも蒸麪の如く惡色である、桑麻は東方に冠たりと稱せらるる處であれば、一たび豐熟すれば天下に賤しくなるのである、今是の時や累年の饑饉に遇うて、盜賊が跋扈して衆民皆苦しむ、每に憐む彼の追胥の官を帶ぶる者は、盜賊を捕獲せんが爲めに野宿までして風が面を裂くの嚴冬も辭することは出來ない、君は元來淮南に於て特出せる秀才である、進士第一人を以て及第せる文采は正に金殿を照らすの概がある、然るに胡爲れぞ奔走の官に從事するや、文官の筆を投じて武官の羽箭を腰にするや、君が家兄である髯將軍の感化もあらうが、雄豪の篇章は督戰中より得來ると思ふ、僕は親しく三郡の士を考試して、及第せる玉と落第せる石とを明白に判じて衙ふことは出來ない、君が人を得る所の才を知らんと欲する者は、其の失する者にも亦善と稱し惡と稱せざる君子の美德を備へらる、君が才は文に於けるも武に於けるも、可ならざるものはない、更に要す百鍊を經て益す堅固ならんことを、吾が詩若しや咀嚼する味の有るものと思ひ玉はば、此の詩を以て聊か別酒の嚥と爲さんと欲するのである、

【餘論】余は此の詩に對し將に言はんとす、無不可と、紀曉嵐は黃土如蒸麪の五字を嫌ふ、公は古典を運用するも妙、亦造語に於ても妙なるものである、但し此の五字は紀が正法眼を衙ふことは出來ない、

## 李思訓畫長江絕島圖　　李思訓が畫く長江絕島の圖

(一)山蒼蒼。水茫茫。　山蒼蒼、水茫茫、

【字解】〔一〕山蒼蒼「古樂府」に、天蒼蒼野茫茫、風吹山低見牛羊」

(二)大孤小孤江中央。　大孤小孤江の中央、
崖崩路絶猿鳥去。　崖崩れ路絶え猿鳥去る、
惟有喬木(三)攙天長。　惟喬木の天を攙して長きあり、
客舟何處來。　客舟は何處より來る、
(四)棹歌中流聲抑揚。　棹歌中流聲抑揚、
沙平風(五)軟望不到。　沙平かに風軟かに望み到らず、
孤山久與船低昂。　孤山久しく船と低昂す、
峩峩兩煙鬟。　峩峩たる兩煙鬟、
曉鏡開新妝。　曉鏡新妝を開く、
舟中賈客莫漫狂。　舟中の賈客漫狂する莫れ、
(六)小姑前年嫁彭郎。　小姑前年彭郎に嫁す、

【題義】李將軍が畫く所の長江絶島の圖に題せる詩である、

と、【二】大孤小孤　樂史が撰する「太平寰宇記」に、彭蠡湖、周圍四百五十里、湖心有大孤山、以別德化都昌之界、小孤山高三十丈、周圍一里、在彭澤縣古城西北九十里、【三】攙天　攙は刺揷である、【四】棹歌　漢武帝の「秋風辭」に、横中流兮揚素波、簫鼓鳴兮發棹歌と、又「列女傳」に、趙簡子、擊楚渡津、津吏醉、其女代父持楫、中流發河激之歌、簡子大悅、納爲夫人と、【五】風軟　白樂天の詩に、風軟春不動と、【六】小姑　歐陽修撰する「歸田錄下」に、世俗傳訛、惟祠廟之名尤甚、江南有大小孤山、而世俗轉孤爲姑、江側有一石磯、謂之澎浪磯、遂轉爲彭郎、云、彭郎小姑壻也、余過小孤山、廟像乃一婦人、而敕額、爲聖母廟、豈止俚俗之謬哉と、陳簡夫の詩に、山稱孤獨字、廟塑女郎形、過客雖知誤、行人但乞靈と、小姑は俗にコジウトメ、夫の姉を曰ふ、王建が新嫁娘詩に、未諳姑食性、先遣小姑嘗と、



【詩意】揚子江上の山は蒼蒼の色を呈する、揚子江の水は茫茫として闊い、而して大孤山と小孤山とは江の中央に聳えてある、其の兩山共に崖は崩れ路は絶えて猿鳥は去る、唯見る所は喬木の天を攙して長きのみである、客舟は何處から來りしやは知らず、棹歌して中流に聲が抑揚する、水の少なき處は沙は平らかにして風軟らか望むも到らざるのである、孤山は其の周圍を往來する船と久しく低昂を爭ふ、兩山とも峩峩たる兩煙鬟を露現して、曉色に鏡の如く新妝を開いてある、舟中の賈客に忠告するが漫狂してはいかぬ、小姑は前年已に彭郎に嫁して去る、

【餘論】紀曉嵐曰く、綽有興致、唯末二句、佻而無味、遂似市井惡少語、殊非大雅所宜と、余謂ふ末二句の意味は前句の新妝を受けて、此の如き語と爲るは、當然の事にて、決して輕佻無味とは言へぬ、若し之を輕佻無味と言はば、古詩十九首は如何と評するや、穆穆堂堂、彬彬昭昭等の文字のみが大雅と心得る者は、三百篇を以て經にあらずと論じたる輩と同一、良に笑ふべきである、

張安道見示近詩　　張安道近詩を示さる

(一)人物一(二)衰謝。(三)微言難重尋。　人物一たび衰謝すれば、微言重ねて尋ね難し、
殷勤永嘉末。復聞正始音。　殷勤なり永嘉の末、復聞く正始の音を、
(四)清談未足多。(五)感時意殊深。　清談未だ多とするに足らず、時に感じて意殊に深し、

少年有奇志。欲(六)和南風琴。　少年奇志あり、南風の琴を和せんと欲す、
荒林蜩(七)螿亂。廢沼蛙(八)蟈淫。　荒林蜩螿亂れ、廢沼蛙蟈淫る、
遂欲(九)掩兩耳。臨(一〇)文但噫瘖。　遂に兩耳を掩はんと欲す、文に臨んで但噫瘖、
蕭然王郎(一一)子。來自(一二)緱山陰。　蕭然たり王郎子、來る緱山の陰よりす、
【自注】其壻王鞏攜來。
云見浮(一三)邱伯。吹(一四)簫明月岑。　云ふ浮邱伯を見ると、簫を吹く明月の岑、
遺聲落淮泗。蛟鼉爲悲(一五)吟。　遺聲淮泗に落つ、蛟鼉悲吟を爲す、
願公正王(一六)度。祈招繼愔(一七)愔。　願はくは公王度を正しうし、祈招愔愔に繼げ、

【字解】【一】人物　「明皇雜錄」に、張九齡、此可言人物矣と、【二】衰謝　杜甫の詩に、覽物嘆衰謝と、【三】微言　微妙の言辭、太史公曰、仲尼沒而微言絕と、「晉書衛玠傳」に、與王敦相見、敦謂謝鯤曰、昔王輔嗣、吐金聲於中朝、此子復玉振於江表、微言之緒、絕而復續、不意永嘉之末、復聞正始之音と、【四】清談　世事を談ぜず、但學理を談ず、魏の何晏や王弼、晉の王衍、尤も有名である、任彥升が勝士表に、勢門上品、猶當格以清談と、【五】感時　杜甫の詩に、感時花濺淚と、【六】欲和　韓退之の詩、騎驢到京國、欲和薰風琴と、「禮記」に、舜作五絃之琴、以歌南風と、【七】蜩螿　蜩も蟬、螿も蟬、「玉篇」に螿蟬也とあるが、公の意毒蟲が亂れるでは無からう、公も必ず蟬の意味で作りしと思ふ、【八】蛙蟈　蟈は蛙の大なる物、【九】掩兩耳　「左傳昭公三十一年」に、荀躒掩耳而走と、【一〇】臨文　「禮記」に、詩書不諱、臨文不諱と、【一一】王郎子　宋の李昉の「太平廣記」に、王仙客者、劉振之甥也、振有女曰無雙、小仙客數歲皆幼稚、戲弄相狎、振妻常戲呼仙客、爲王郎子と、【一二】緱山　緱氏山の略稱、今日河南偃師縣の南に當る、傳說に、王子晉が七月七日、白鶴に乘りて、山頂に駐まり、手を擧げて時人に謝して去ると、【一三】浮邱伯　浮邱公なる仙人、黃帝時代の人、漢に浮邱伯と稱する、或は云ふ王子晉が事であると、一人であるか、二人であるか明白でない、【一四】吹簫　仙人王子喬が笙を吹いて此を過ぐと、是も晉と一人か二人か明白でない、【一五】悲吟　左太沖が詩に、何事待嘯歌、灌木自悲吟と、【一六】王度　王者の德度を謂ふ、「左傳昭公十二年」に、思我王度、式如玉、式如金と、【一七】愔愔　は安和の貌、「左傳昭公十二年」に、祈招之愔愔と、「或說」に、讀如閑平靜、猶言默默と、「唐書」に、昭宗謂杜讓能曰、朕不欲愔愔度日と、「公烏臺詩話」に、元豐元年八月內、張方平、令王鞏將詩一卷、來徐州、題封曰、樂全堂雜詠、拆開看、乃是方平舊詩、軾作一詩、題卷末云云、言昔元帝時、衛玠初過江左、不意永嘉末、復聞正始音、軾意言人物衰謝、不意復見張方平之文章才氣、以譏諷今時風俗衰薄也、意以衛玠比方平、故云清談未足多、感時意殊深、言我非獨多衛玠清談、但感時之衰謝、微言絕縫、此意殊深遠也、又少年有奇志、臨文但噫瘖、軾少年本有志、欲和天下薰風之詩、因見學者、多空言無實、或雜引佛老異端之書、文字雜亂、故以荒林廢沼、比朝廷新法、屢有變更、事多荒廢、致風俗虛浮、學者議妄、如蜩螿之紛亂、遂掩耳、不欲論文也、又蕭然王郎子云云、以王子晉比王鞏、以浮邱伯比方平也、云云、

【題義】張方平字は安道が示さるる近詩に和せらるるもの、

【詩意】今日は人物を察すれば皆衰謝して居る、人物が無いものであるから微言も聞尋することが出來ぬ、但殷勤にする永嘉の末に、正始の音を發したる衛玠の如きは君である、衛玠の清談はまだ多とするに足らぬ、君の清談は時世に感慨して發するのであるから意は殊に深い、僕は少年の時より奇志を抱きて、正道を鼓吹する南風の琴を和せんと欲したのであるが、今日の世は荒林に蜩螿が紛亂する如く、又廢沼に蛙蟈が鳴淫する如く、所謂微言を聞く師が居らない、俗輩癡徒の惡聲には遂に耳を掩はんと思ふ、文詞を作らんと欲するに臨んで、但噫瘖と太息するのみである、然る所に肅然として恭敬する王郎子が、緱山の陰より來るに逢ふ、而して王郎子は云ふ、浮邱伯が簫を吹いて明月の岑に在る

を見た、其の高風遺聲は淮泗に落ちて、蛟鼉の水族は爲めに感じて悲吟を爲すと、願はくは公が政務を執らば王度を正しうして、祈招愔愔に繼ぐの古の王度に回すことに努力し玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰く、荒林四句太激、古人雖レ不レ廢ニ諷刺一、然皆心平氣和、乃不レ失ニ風人溫厚之旨一と、此の評は極めて正論、坡公も泉下に於て必ず服すべきものと思ふ、然れども我邦慷慨家の詩に比すれば、尚ほ恕すべきものがある、我が邦の慷慨家の詩は正面より歌ふを知つて、側面より歌ふことを知らぬ、多數の俗人、正面より歌はねば、何の事か沒分曉なのである、嗚呼已むを得ず、

## 次ニ韻王鞏顏復同泛舟一

王鞏、顏復と同じく泛舟するに次韻す

(一)沈郎清瘦(二)不レ勝レ衣。　沈郎清瘦衣に勝へず、
(三)邊老便便帶(四)十圍。　邊老便便帶十圍、
(五)躞蹀身輕山上走。　躞蹀身輕くして山上に走り、
(六)懽呼船重醉中歸。　懽呼船重くして醉中に歸る、
(七)舞腰(八)似レ雪(九)金釵落。　舞腰雪に似て金釵落ち、
(一〇)談辯如レ雲(一一)玉塵揮。　談辯雲の如く玉塵揮ふ、
憶在ニ錢塘一正如レ此。　憶ふ錢塘に在りて正に此の如し、
(一二)回レ頭四十二年非。　頭を回らせば四十二年非なり、

【字解】〔一〕沈郎　唐の李延壽の「南史」に、沈昭略、嘗遇ニ王約一、瞋レ目觀レ之曰、汝是王約邪、何乃肥而癡、約曰、汝沈昭略邪、何乃瘦而狂と、次公曰、沈郎或以爲指ニ言沈約一、則其與ニ徐勉一書云、老病百日、數圍革帶、常應レ移レ孔、以レ手握レ臂、率計レ月、小ニ半分一、此則有ニ不レ勝レ衣之意一、而山谷亦有レ詩、自是沈郎作レ詩瘦、不レ關春盤生ニ許愁一、則亦言ニ沈約一矣と、【二】不勝衣「荀子」に、葉公子高、微小短瘠、行若レ將レ不レ勝ニ其衣一と、乃ち公は沈休文を指して、沈昭略を指したのではない、【三】邊老「後漢書」に、邊韶字孝先、以ニ文學一知レ名、曾晝日假臥、弟子私嘲レ之曰、邊孝先、腹便便、懶ニ讀書一、但欲レ眠と、【四】十圍「三國志」に、董卓腰十圍と、後漢の東平王蒼、腰帶十圍と、【五】躞蹀　李白の詩に、歸時落日晩、躞蹀浮雲驄、人馬本無レ意、飛騰自豪雄と、何の苦も無く行く貌、【六】懽呼　杜甫の詩に、三更風起寒浪湧、取レ樂喧呼覺ニ船重一と、【七】舞腰「西京雜記」に、戚夫人、善爲ニ翹袖折腰之舞一と、【八】似雪　楊希道の詩に、二八如レ回レ雪と、【九】金釵落「世言」に、張祜客ニ淮南幕中一、赴レ宴時、杜紫微、爲ニ支使一南坐、有ニ屬レ意之處一、索ニ骰子一賭レ酒、牧（杜牧官爲ニ紫微郎一）微吟曰、骰子巡巡裹レ手拈、無レ因レ得レ見玉纖纖、祜應レ聲曰、但知報道金釵落、彷彿還應レ露ニ指尖一と、【一〇】談辯「晉書符融傳」に、談辭如レ雲と、【一一】玉塵揮「晉書孫盛傳」に、嘗詣ニ殷浩一、談論對食、奮ニ擲麈尾一、毛落ニ飯中一と、佛氏も道士も共に持つ、【一二】回頭　元豐元年は公年四十三である、蘧伯玉曰く、五十而知ニ四十九年非一と、

【題義】王鞏と顏復の二人が舟を泛べ同游せる詩に次韻して作る、

【詩意】王は沈郎の如く體瘦せて衣にも勝へぬ、顏は邊老の如く體肥えて帶は十圍も纏ふ、瘦せて居る人は躞蹀として輕く山上でも走る、肥えて居る人は船まで重くして醉中に歸る、妓人の舞腰は雪に似て輕く金釵は落つ、大人等の談辯は雲の如く湧いて玉塵を揮ふの愉快である、僕は今日憶ひ起すが錢塘に官游せる時は正に此の如きものであつた、今日より頭を回らして三省すれば四十二年間は全く非で過ぎた、

【餘論】紀曉嵐曰く、第三句不レ雅と、考ふるに第四句に水中を言ふが故に、前句に於て山を言ふならんが、紀評の如く、全く不雅、狗子の類と混ずる滑稽なる句と思ふ、如雲、如此、十圍、四十、到底

佳律と稱することは出來ない、

## 次韻張十七九日贈子由

張十七が九日子由に贈るに次韻す

千戈萬槊擁笓籬(一)。　千戈萬槊笓籬を擁す、

(二)九日清樽豈復持。　九日清樽豈復持せんや、

【自注】是日南都敎使按兵。

(三)官事無窮何日了。　官事は窮まり無し何れの日か了らん、

菊花有信不吾欺(四)。　菊花信有り吾を欺かず、

逍遙瓊館(五)眞堪羨。　逍遙瓊館眞に羨むに堪へたり、

取次塵纓(六)未可縻。　取次に塵纓未だ縻ぐべからず、

迨此暇時須痛飮。　此の暇時に迨んで須らく痛飮すべし、

他年長劍(七)拄君頤。　他年長劍君が頤を拄へん、

【字解】【一】笓籬　笓は篦と同じ、竹を編みて篦と同形の如くす、「晉史傳成傳」に、傳成勑事云、令史張濟、案行城東、見有新立屋、間笓籬障二十丈と、又「北史」に、笓籬、戰格於女牆、跳出安之、以遮矢石と、【二】九日　公の自注に、是日南都、敎使按兵と、【三】官事　「晉傳成傳」に、楊濟與成書曰、天下大器、非可稍了、而相觀每事欲了、生子癡了官事、官事未易了也、了事正作癡、復爲快耳と、【四】不吝欺　孟子の語、【五】瓊館　蓋公の宮祠、【六】塵纓　「北山移文」に、昔聞投簪逸海岸、今見解蘭縛塵纓と、王粲の詩に、塵纓持君洗と、【七】長劍　「戰國策」に、田單攻狄、不能下、齊嬰兒謠曰、大冠若箕、修劍拄頤、攻狄不能下、壘於梧邱と、



【題義】張恕が九日に子由に贈れる詩に次韻したのである、

【詩意】將校や兵卒の千戈萬槊が笓籬を擁して居る、九日の佳節なれども淸樽なぞを攜へ行くことは出來ぬ、官事は窮まり無ければ何れの日に了ると云ふことはない、が、菊花は時節を知つて開き吾を欺かない、君は瓊館に逍遙すると云ふが眞に羨むに堪へたる次第である、順序次第に移る官吏の塵纓の爲にいつまでも縻がれてはいかぬ、幸に此の暇時に迨んで須らく痛飮すべきである、他年には必ず長劍を頤に拄へて玉階に上るであらう、

## 次韻王鞏獨眠

王鞏が獨眠に次韻す

居士身心如槁木(一)。　居士の身心槁木の如し、

旅館孤眠體生粟。　旅館に孤眠して體粟を生ず、

誰能相(二)思琢白玉。　誰か能く相思白玉を琢く、

服(三)藥千朝償一宿。　服藥千朝一宿に償ふ、

天寒日短銀(四)燈續。　天寒く日短く銀燈續ぐ、

(五)欲往從之車(六)脫軸。　往いて之に從はんと欲すれば車軸を脫す、

何人吹斷參(七)差竹。　何人か吹斷する參差の竹、

【字解】【一】槁木　「莊子庚桑楚篇」に、身若槁木之枝、而心若死灰、若是者、禍亦不至、福亦不來と、【二】相思　盧仝の詩、白玉璞裏、琢出相思心、黃金礦裏、鑄出相思淚と、【三】服藥　「神仙傳」に、彭祖曰、上士別牀、中士異被、服藥百裹、不如獨臥、彼有修其術、以爲彭祖錄と、「太平廣記」には、服藥千朝、不如獨臥一宵と、

泗水茫茫鴨頭綠。　泗水茫茫として鴨頭綠なり、

我所思兮在桂林、欲往從之湘水深と、【六】車脫軸　「史記范雎傳」に、須賈曰、吾馬病、車軸折と、【七】參差竹　「風俗通」に、舜作簫、其形參差、象鳳之翼と、「楚辭九歌」に、吹參差兮誰思と、【八】鴨頭綠　水の色が鴨頭の綠に似て居るを言ふ、

【詩意】居士が身心は宛も槁木の如きである、旅館に孤眠して冷寒の爲めに體に粟を生ずる、誰か能く相思を寄せて白玉を琢くものやある、平生服藥して千朝に及ぶも一宿して獨臥の功には及ばない、天は寒く日は短かければ銀燈を續けて點する宜し、僕は往いて之に從はんと欲すれども車は軸を脫して乘ることが出來ない、何人か簫を吹いて吟斷する者ぞや、簫の曲は何ぞや水は茫茫として鴨頭綠、

【餘論】此の詩を讀んで一僧の詩を憶起したるが、雪夜孤眠雙足冷、霜天剃髮髑髏寒と言ふのである、蓮門の義海が作る「蕉窗漫筆」に載せてある、コンナ題目の詩こそ、紀の所謂非大雅之所宜である、

【四】銀燈　李賀の詩、銀燈點舊紗と、【五】欲往　張平子四愁詩に、

## 次韻王鞏留別

王鞏が留別に次韻す

去國已八年。故人今有誰。　國を去つて已に八年、故人今誰か有る、

當時交遊內。未數蔡充兒。　當時交遊の內、未だ數へず蔡充の兒、

豈無知我者。好爵半已縻。　豈我を知る者無からんや、好爵半ば已に縻がる、

爭爲東閣吏。不顧北山移。　爭うて東閣の吏と爲り、北山の移を顧みず、

公子表獨立。與世頗異馳。　公子獨立を表し、世と頗る馳するを異にす、

不辭千里遠。成此一段奇。　千里の遠きを辭せず、此の一段の奇を成す、

蛾眉亦可憐。無奈思餅師。　蛾眉も亦憐むべし、餅師を思ふを奈んともする無し、

無人伴客寢。惟有支牀龜。　人の客寢に伴ふ無く、惟牀を支ふる龜あり、

君歸與何人。文字相娛嬉。　君が歸るや何人と、文字相娛嬉する、

持此調張子。一笑當脫頤。　此を持つて張子に調す、一笑當に頤を脫すべし、

【字解】【一】去國　公は熙寧四年に東京を離れ、元豐元年に至る、實に八年を經、【二】今有誰　「莊子徐無鬼篇」に、越之流人、去國數日、見其所知而喜、去國旬月、見所嘗見於國中者而喜、及期年也、見似人者而喜矣、不亦去人滋久、思人滋深乎と、【三】交遊內　「司馬遷傳」に、爲宗族交遊光寵と、【四】蔡充兒　「晉書王導傳」に、司徒蔡謨、戲王導、導怒謂人曰、吾往與羣賢共遊洛中、何嘗聞有蔡充兒、謨充子也、【五】東閣吏　「前漢朱雲傳」に、薛宣爲丞相、雲往見之、宣備賓主禮、從容謂雲曰、在田野無事、且留我東閣、可以觀四方奇士、雲曰、小生乃欲相吏邪、宣不敢復言と、【六】北山移　前に辨ぜり、【七】公子　「博物志」に、公子王孫、皆古人相推敬之辭と、【八】獨立　「九歌」に、獨立兮山之上と、【九】不辭　張九齡の詩、不辭山路遠、踏雪也相過と、【一〇】一段奇　「王羲之帖」に、吾年垂耳順、要欲一游目汝嶺、足下但當保護、以俟此期、得果此緣、一段奇事也と、【一一】蛾眉　「本事詩」に、唐寧王宅左、有賣餅者、妻纖白明媚、王一見屬目、厚惠其夫取之、寵愛逾等、環歲問之曰、汝復憶餅師否、默然不對、王召餅師、使見之、其妻注視、雙淚垂頰、若不勝情、時坐客十餘人、皆當時文士、無不悽異、王命賦詩、右丞王維先成曰、莫以今時寵、難忘舊日恩、看花滿眼淚、不共楚王言と、【一二】支牀龜　白樂天の詩に、春朝鎖鸚鵡、冬夜支牀龜と、「史記」に、南方老人、用龜支牀足、二十餘年、老人死移牀龜尙生、龜能行氣導引也と、【一三】娛嬉　韓退之

の詩に、文章自娛戲、金石日擊撞と、【二】調張子　韓退之に調張籍の詩がある、調は調戲、又は調謔、惡意無く戲れるを云ふ、王粲は張安道の壻である、【三】骰頭　髣頭と同じ、

【題義】神宗の熙寧七年に王安石相を罷めて金陵に歸る、傳法沙門と稱せらるる韓絳と護法善神と稱せらるる呂惠卿の二人政治を執る、而かも猶安石が創始たる新法を守る、正人は異論を爲すも、私を計る者は皆從ふ、王鞏は卓然として獨立、節を屈せずして守る所あつたのである、此の時の留別は、熙寧七年にあらずして、それより六年後の元豐元年である、公も是の年を以て黃州に安置せらる、

【詩意】僕は國を去つてより已に八年を經過した、其の八年間の故人は今誰と誰とが存在する、當時交游する者の內で、我が本心を知る者も全く無いとは言はぬ、所が多くは好爵と云ふ餌絲の爲めに縻がれて、爭うて東閣の吏と爲つて去り、山神や猿鶴の爲め嗔らるることを顧みない、が、乃ち王定國公子其の人は獨立を表して、世の凡俗とは全く背馳する、職を辭するも辭せざるは千里遠き鄉國の路である、信に一段の奇事なりと思ふ、昔し富める王公に奪はれたる蛾眉も、貧なる餅師を思ふ性情を奈何ともすること出來ない、假令人の君が客寢に伴うて慰むる者は無くも、此の生命を長く保たしめる支牀の龜は有る、さりながら君は歸鄉して誰と同游し、文字を以て誰と娛戲せらるるや、東坡が作れる此の詩を持つて張子に調謔し玉へ、張子も必ず一笑して頤を脫くであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、數句太激と、成二此一段奇一五字太俚と、余思ふ、坡公の才力絕世、加ふるに博深雄大の學、牛溲も馬渤も盡く筆下に運用する、是の故に公の詩に典據なきものは少い、一段奇の如きは王羲之より來るものなれども、善奔者蹶の類、太俚と評せらるるも、公は甘受することと思ふ、公が詩を學ぶ人は、宜しく其善處を學ぶべきである、

## 登雲龍山

雲龍山に登る

醉中走上黃茀岡(一)　醉中走りて上る黃茀岡、
滿岡亂石如羣羊(二)　滿岡の亂石羣羊の如し、
岡頭醉倒石作牀　岡頭に醉倒して石を牀と作す、
仰看白雲天茫茫　仰いで白雲を看れば天茫茫、
歌聲落谷秋風長　歌聲谷に落ちて秋風長し、
路人舉首東南望　路人首を擧げて東南より望み、
拍手大笑使君狂　手を拍つて大笑す使君狂すと、

【字解】【一】黃茀岡　山陰に在り、【二】羣羊　黃初平は石を打つて羊と化せしめし事がある、

【題義】雲龍山は徐州城東に在る山、元豐元年九月十七日、張天驥と顏復と王鞏と公の四人で登ると、石刻詩に在ると云ふ、

【詩意】醉中に走りて上る黃茀岡、登りて觀れば滿岡が皆亂石にて羣羊の如くである、岡の絕頂に醉

倒して石を牀と作して、臥し乍ら仰いで天上を瞻れば唯茫茫たるのみ、吾等の歌聲は谷底に落ちて秋風と共に長い、山下の路人は東南より山上を望みて、手を拍つて大笑して曰ふ、使君は發狂せりと、

【餘論】紀曉嵐曰く、偶成二別調一、不レ可レ無レ一、不レ可レ有レ二、飲中八仙歌の韻法、紀評の如く一首は可、二首は不可、詩境を指すのでは無く、詩法を指すものである、詩境としては窄韻の詩に比較して全く別境界を開くの感がある、

## 題二雲龍草堂石磬一

雲龍草堂の石磬に題す

（一）折爲二督郵腰一。懸作二（二）山人室一。
折りて督郵の腰を爲し、懸けて山人の室と作す、

殊非二（三）濮上音一。信是（四）泗濱石。
殊に濮上の音にあらず、信に是れ泗濱の石、

【字解】〔一〕折爲　山公曰く、折レ腰爲二磬折一、故用二淵明揖二督郵一事一耳、讀者不下以レ辭害上レ意可也と、〔二〕山人室　「左傳僖公二十六年」に、室如二懸磬一と、〔三〕濮上音　濮上は淫風吹亂の地、從つて其の歌音は盡く淫靡である、〔四〕泗濱　「澄懷錄」に、江南李建勳、嘗蓄二一玉磬一、大尺餘、以二沈香節一、按レ柄擊レ之、聲絲二清越一、客有下談及二猥俗一之語上者、則急起擊二玉磬一數聲、曰聊代清耳、名曰二泗濱友一と、又「尙書」に泗濱浮磬と、庾闡府の詩に、水涘浮磬勤と、

【詩意】督郵の徒には腰は折らぬが磬の爲には折る、石磬は懸けて山人の書室と作る、此の磬聲は濮上の音とは全く異なる、信に是れ泗濱の玉石耳を淸ましむる音を持つて居る、

【餘論】紀曉嵐曰く、此必非二東坡筆一、乃後人依託也と、

## 與二舒教授張山人參寥師一同遊二戯馬臺一。書二西軒壁一。兼簡二顏長道一二首

舒教授、張山人、參寥師と同じく戯馬臺に遊び、西軒の壁に書し、兼ねて顏長道に簡す　二首

古寺長（一）廊（二）院院行。
古寺長廊院院行く、

此軒偏慰故人情。
此の軒偏に慰す故人の情、

楚山（三）西斷如レ迎レ客。
楚山西斷客を迎ふるが如く、

汴水南來故遶レ城。
汴水南來故に城を遶る、

路失二（四）玉鉤一芳艸合。
路は玉鉤を失して芳艸合し、

林亡二白鶴一古泉清。
林は白鶴亡く古泉淸し、

（五）澹游何以娛二庠老一。
澹游何を以て庠老を娛しましむる、

坐聽郊原（六）琢磬聲。
坐して聽く郊原琢磬の聲、

【字解】〔一〕長廊　は步廊、廻廊、乃ち東西の序を曰ふ、大寺には必ず處處に之を設く、〔二〕院院行　王建の詩に、院院燒燈如二白日一と、寺の字は佛徒のみ用ひ、院の字は道士も佛徒も衆人も皆用ふ、此の句意は隅から隅まで行くのである、〔三〕西斷　斷は斷絕、〔四〕玉鉤　「桂苑叢談」に、李蔚、咸通中、自二大梁一移鎭二淮海一、見三郡無二勝游之地一、命於二戯馬亭西一、連二玉鉤斜道一、葺レ亭名二賞心一、次公曰く、路失二玉鉤一、誤用二此揚州戯馬亭事一也、施注曰く、桂苑叢談、咸通中李蔚、鎭二彭城一、於二戯馬亭西一、連二玉鉤斜道一、開二創池沼一、構二葺亭臺一、名レ之曰二賞心一、陳師道後山集、白鶴觀記、徐山不レ泉、州治之南、有二平泉一焉、深明瀦甘、早潦自如、說者曰、泉有二鶴下一故名、「陳無己詩話」乃云、眉山

長公守レ徐、會與レ客、登ニ項氏戲馬臺一、賦レ詩云、路失ニ玉鉤一芳艸合、林亡ニ白鶴一野泉清、廣陵亦有ニ戲馬臺一、其下有レ路、號ニ玉鉤斜一、唐高宗東封、有レ鶴下焉、乃詔ニ諸州一、爲ニ老氏一築レ宮、名曰ニ白鶴公一、並課用、兩役所レ取レ信、故不レ得レ不レ辨也と、要するに臨淮縣と銅山縣は戲馬臺と稱し、廣陵縣は戲馬亭と稱するのである、公が登りしは江蘇徐州の臺である、【五】 澹游　澹泊の雅游、【六】 琢磬聲　工人が石磬を琢する聲、

【題義】 舒と張と參寥の三人と戲馬臺に同游して其の西軒の壁上に題したる詩、更に之を以て簡して顏長道に投示したものである、

【詩意】 戲馬臺に登らんと思うて臺頭寺址の長廊を院院行く、而して臺の西軒に臨んで我等が情を慰安することが出來た、楚山が西方に斷えんとする形は宛かも我を迎ふる如くである、臺下を流る汴水は南より來るが故に城の四面を遶る、玉鉤斜の路は已に失して芳艸が合生する、林中に曾て有りし白鶴觀は今は亡く唯古泉のみ淸く湧く、澹游して我等庠老を娛しましむるものは何である、坐して郊原にて琢磬の聲を聽くのが一番である、

〔二〕

竹杖芒鞋取次行。　竹杖芒鞋取次に行く、

下臨ニ官道一見ニ人情一。　下は官道に臨みて人情を見る、

天寒菽粟猶棲レ畝。　天寒うして菽粟猶は畝に棲み、

日暮牛羊自入レ城。　日暮れて牛羊自から城に入る、

沽酒獨教ニ陶令醉一。　沽酒獨り陶令を醉はしめ、

題詩誰似ニ皎公淸一。　題詩誰か似ん皎公が淸きに、

更尋ニ陋巷顏夫子一。　更に陋巷の顏夫子を尋ねて、

乞ニ取微言一繼ニ此聲一。　微言を乞取して此の聲を繼がん、

【字解】 【一】 見人情　劉夢得の詩に、安知從ニ複道一、然後見ニ人情一と、【二】 棲畝　「南史」に、宋武帝曰、餘糧栖畝、軍無ニ匱乏之憂一と、又左太沖が「魏都賦」に、餘糧栖畝而不レ斂と、注曰く、年豐穀多、投ニ於田畝一、如ニ鳥之栖宿一、人不レ收也と、【三】 日暮　「詩」に、日之夕矣、牛羊下來と、【四】 陶令醉　「廬山記」に、慧遠與ニ陶潛一游、常沽レ酒飲レ之と、【五】 皎公　吳興僧皎然名淸晝、與ニ賈休齊已一、稱ニ三高僧一、皎然九日の詩に、重陽荊楚尙、高會此難レ陪、偶レ見ニ登龍客一、同游戲馬臺、風文特レ水疊、雲籟擁レ歌迴、持レ菊還相問、含情愧ニ不才一と、【六】 陋巷　「論語」に、顏回在ニ陋巷一と、

【詩意】 手には竹杖、脚には芒鞋、山徑を順序取次に行く、頂上に登りて官道を俯臨して風俗人情を見ることが出來る、見る所は如何なる景色である、天は寒けれど菽粟が猶畝に栖むの年豐である、日は昏暮に及んで牛羊は悠悠と自から城に入りて去る、酒を沽うて獨り陶令に似たる張山人を醉はしめる、詩を題しては誰か皎公に似たる參寥師の淸絕を作れるや、更に陋巷に住する顏夫子を尋ねて、夫子の微言を乞取して此の聲を繼がしめんか、

【餘論】 紀曉嵐は後首を評して曰く、次句有レ意而不レ醒、四句荒涼如レ見と、實に佳句として正評を下すときは日暮牛羊自入レ城の七字を以て最上乘と思ふ、王右丞か、孟襄陽か、韋蘇州か、是の三家を除きては此の句は他に無い、余は更に第七句の巧妙に感ず、顏回は陋巷に住し、而して孔夫子之を稱揚する、今それらの語を以て之を顏長道に與ふ、此の如き文字の微妙なる、我が邦人には無き所である、

## 滕縣時同年西園

人皆種楡柳。坐待十畝陰。
我獨種松柏。守此一片心。
君看閭里間。盛衰日駸駸。
種木不種德。聚散如飛禽。
老時吾不識。用意一何深。
知人得數士。重義忘千金。
西園手所開。珍木來千岑。
養此霜雪根。遲彼鸞鳳吟。
池塘得流水。龜魚自浮沈。
幽桂日夜長。白花亂青衿。
豈獨蕃艸木。子孫已成林。
拱把不知數。會當出千尋。
樊侯種梓漆。壽張富華簪。

滕縣時同年の西園

人皆楡柳を種ゑ、坐して十畝の陰を待つ、
我獨り松柏を種ゑ、此の一片の心を守る、
君看よ閭里の間、盛衰日に駸駸、
木を種ゑて德を種ゑず、聚散飛禽の如し、
老時吾は識らず、用意一に何ぞ深きや、
人を知つて數士を得たり、義を重んじて千金を忘る。
西園手に開く所、珍木千岑より來る、
此の霜雪の根を養ひ、彼の鸞鳳の吟を遲つ、
池塘流水を得、龜魚自から浮沈す、
幽桂は日夜に長し、白花青衿亂る、
豈獨艸木のみ蕃せんや、子孫已に林を成す、
拱把數を知らず、會ず當に千尋を出づべし、
樊侯梓漆を種ゑ、壽張華簪に富む、



我作西園詩。以爲里人箴。

我れ西園の詩を作り、以て里人の箴と爲す、

【字解】【一】十畝陰　杜甫の詩に、飽聞楩木三年大、與致溪邊十畝陰と、【二】一片心　孟襄陽の詩、平生一片心と、「禮記」に、如竹箭之有筠也、如松柏之有心也、貫四時而不改と、【三】日駸駸　柳子厚の詩、南風日駸駸と、【四】種德　「書經」に、皐陶邁種德と、種と言ふは蒔の意味、其の積德を遍蒔するのである、劉迎の詩に、家有五畝園、種樹如種德と、【五】老時　時同年を敬稱して言ふ、【六】忘千金　燕昭王置千金於臺上、以延天下士、【七】珍木　劉公幹の詩、珍木鬱蒼蒼と、唐の裴九齡の詩、嬌嬌珍木顚と、【八】白花　「本艸」に、菌桂、花白蘂黃、牡桂赤日白蘂、葉冬夏常青と、【九】獨蕃　「易」に、天地變化草木蕃と、蕃は蕃衍、又蕃殖、蕃植、ハビコルのである、【一〇】拱把　拱は兩手にて圍む、把は片手にて握る、「孟子告子章」に、拱把之桐梓と、【一一】樊侯　「後漢樊宏傳」に、宏字靡卿、南陽人、世祖之舅父重、嘗欲作器物、先種梓漆、時人嗤之、然積以歲月、皆得其用、向之笑者、咸求假焉、貲至巨萬、而賑贍宗族、恩加鄕閭、建武十五年、定封宏壽張侯、十八年、帝過湖陽祠重墓追爵、謚爲壽張敬侯、樊氏侯者凡五國と、

【題義】滕縣即ち徐州の時同年の西園を稱美する詩である、刁同年は前卷に名が見えて明白であるが時同年は如何なる人か不詳、

【詩意】世人は皆柔弱なる楡柳を種ゑ、坐して以て十畝の陰を爲すを待つが、我は獨り堅固なる松柏を種ゑて、以て平生耿耿たる一片の心と爲つて居る、君も見玉へ閭里の間を、盛と衰と變化運轉して駸駸と奔る如くである、所が世俗の常として木は種ゑるが德を種ゑない、總じて聚散共に飛禽の如く輕い、老時は吾能く識らざる人であるが、其の用意の深きことは噂に於て知つて居る、人を知るが故に立派なる數士を得て居らるる、士を得るには義を重んじ金を輕んずる人でなくては出來ぬ、此の西

園も手自ら開く所で、種種なる珍木を千岑の中より持ち來る、此の珍木の霜雪の根を養うて、彼の鸞鳳の吟を爲す時を運つ、池頭には自然の流水を利用して、鯈魚の類を放ち自由に浮沈せしむ、幽桂は日夜に生長して、風に會ふときは白花が青衿に亂れかかる、而かも主人は豈獨り艸木のみを蕃衍せしめるのではない、時家の子孫をして已に林を成すの繁盛を見る、拱把する程のもの無數である、會ら すや千尋の高きを出づるであらう、昔し樊侯は梓漆を種ゑて、身は壽張侯に封せらるるの位と富とを合有せることがある、我は今の西園に游んで西園の詩を作り、以て其の近里の人の戒箴と爲すのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、語既平衍、格韻尤爲ニ凡近一と、公も此の詩を作る當時凡近を主眼として作りしものと思ふ、既に樂天を喜ぶの人、凡近の詩あるは固より其の所である、

## 次ニ韻王廷老和ニ張十七九日見一ㇾ寄

王廷老が張十七の九日寄せられたるに和せるを次韻す

霜葉投ㇾ空雀啅ㇾ籬。[一]　霜葉空に投じて雀籬に啅む、

上ㇾ樓筋力強扶持。[二]　樓に上りて筋力强ひて扶持す、

對ㇾ花把ㇾ酒未ㇾ甘ㇾ老。　花に對し酒を把り未だ老を甘んせず、

膏面染ㇾ鬚聊自欺。[三]　膏面鬚を染めて聊か自から欺く、

無事亦知君好ㇾ飲。　無事亦知る君が飲を好むを、

多才終恐世相縻。　多才終に恐る世相縻ぐを、

請看平日銜ㇾ杯口。[四]　請ふ看よ平日杯を銜むの口、

會有ニ金椎爲ニ控頤一。[五]　會ま金椎の控頤を爲すあらん、

【字解】【一】啅籬　杜甫の詩、啅雀爭ㇾ枝墜と、【二】筋力　杜牧の詩、不ㇾ爲ㇾ尋ㇾ山試ニ筋力一、豈能寒上ニ背雲梯一と、【三】染鬚　劉禹錫の詩、近來時世輕ニ先輩一、好染ニ髭鬚一事ニ後生一と、【四】銜杯　杜甫の詩、生前相遇且銜杯と、【五】金椎　「莊子外物篇」に、儒以ニ詩禮一發ㇾ冢、大儒臚傳曰、東方作矣、事ㇾ之何若、小儒曰、未ㇾ解ニ裙襦一、口中有ㇾ珠、詩固有ㇾ之曰、青青之麥、生ニ於陵陂一、生不ニ布施一、死何含ㇾ珠、爲接ニ其鬢一、壓ニ其顪一、儒以ニ金椎一、控ニ其頤一、徐別ニ其頬一、無ㇾ傷ニ口中珠一と、

【題義】王廷老が張十七の重陽の詩に和して作られたる詩を寄示せられ、乃ち次韻せるものである、廷老名は伯敭、虢州の守、其の子は坡公の女壻である、

【詩意】霜葉を銜んで空に投げて雀兒が竹籬に戲啅して居る、人は佳節を祝ふ爲め樓に上りて筋力を自から强ひて扶持する、菊花に對坐して酒杯を把りまだまだ老を甘んせない、膏面には鬚を染め壯年の如くするは聊か自から欺くのである、無事で居る君の狀は其の好飲にて判る、多才は終に恐る世と相離るることが出來ない、請ふ看玉へ平日杯を銜むの口、會らず金椎を以て控頤を爲すの氣があるを、

【餘論】紀曉嵐曰く、結語太甚と、

## 鹿鳴宴

鹿鳴の宴

(一)連騎忽忽(二)畫鼓喧。　連騎怱怱として畫鼓喧し、
喜君新奪(三)錦標還。　喜ぶ君が新に錦標を奪うて還る、
(四)金罍浮菊催開宴。　金罍菊を浮べて宴を開くを催し、
(五)紅蘂將春(六)待入關。　紅蘂將に春ならんとし關に入るを待つ
他日曾陪(七)探禹穴。　他日曾て禹穴を探るに陪せん、
白頭重見(八)賦南山。　白頭重ねて見ん南山を賦するを、
何時共樂昇平事。　何れの時か共に樂しまん昇平の事、
風月笙簫坐夜閒。　風月笙簫夜閒に坐せん、

【字解】【一】連騎　「戰國策」に結駟連騎、輝於道と、【二】畫鼓　張祜の詩、畫鼓拖環錦臂攘と、【三】錦標　「南部新書」に唐盧肇、黃頗、皆宜春人、同學、郡守獨餞頗、明年肇、狀元及第歸、郡守接甚厚、肇作詩曰、向道是龍剛不信、果然奪得錦標歸、守大慚と、【四】金罍　「詩」に我姑酌彼金罍と、【五】紅蘂　宋之問の詩、紅蕊鎮開花と、【六】待入關　「査注」に、杜牧の詩に秦地少年多釀酒、待將春色入關來と、又、宋之問の詩に、紅蕊鎮開花と、【七】探禹穴　「史記太史公自序」に、十歳誦古文、二十而南游江淮、上會稽、探禹穴と、【八】賦南山　「詩序」に、南山有臺、樂得賢也、得賢則能爲邦家、立太平之基矣と、

【題義】郡貢士に及第したる者の爲めに賀宴を開き此の詩を賦したものである、

【詩意】連騎は怱怱と馳せ、畫鼓は喧喧と響く、喜ぶ君が新たに錦標を奪うて還りしことを、金罍に菊を浮べて賀宴を開催する、紅蘂は春を將て入關を待つ、他日に曾陪して禹穴を探らんと思ふ、白頭重ねて見て南山を賦せんと期す、何れの時か共に昇平の事を樂んで、風月に笙歌して夜閒に坐することを得ん、

【餘論】紀曉嵐曰く、何忽庸俗至此と、余も亦坡公の詩として眞僞を疑ふものである、

## 次韻參寥師寄秦太虛三絶句。時秦君擧進士不得

參寥師が秦太虛に寄する三絶句に次韻す、時に秦君進士に擧げられ、得ず

秦郎文字固超然。　秦郎の文字固より超然、
漢武(一)憑虛意欲仙。　漢武憑虛意仙ならんと欲す、
(二)底事秋來不得解。　底事ぞ秋來解くを得ざる、
(三)定中試與問(四)諸天。　定中試與に諸天に問ふ、

【字解】【一】憑虛　張伯英が書に、如漢武愛道、憑虛欲仙と、憑虛とは大空を凌ぎ上るを言ふ、【二】底事　何事と同じ「イカナレバ」である、【三】定中　歸定坐中と成語する、唐の劉禹錫の和宣上人、寄和禮部王侍郎放榜後詩云、禮闈新榜動長安、九陌人人走馬看、傳聞至公誰印可、支郎天眼定中觀と、「補注」に、史記伍子胥傳、申包胥曰、天定亦能勝人を引く、定中の定と、天定の定と意義大に異なる、【四】諸天　佛典の術語、諸界の天神と云ふ意義である、

【題義】坡公が方外の友たる參寥が其の友秦太虛が進士試驗に落第したるを慰める爲め絶句三首を作りて贈りたるを公が乃ち之に和したものである、

【詩意】秦郎の文字を驅馳するは固より超然たるものである、宛かも漢武が憑虛して意仙ならんと欲するに似て居る、其の意氣を持ち乍ら、底事である秋來人間の事を解脫することを得ざるは、余は禪定中に於て此の事を諸天に問はんと欲するものである、

〔二〕

（一）一尾（二）追風（三）抹萬蹄。
（四）崑崙元圃謂（五）朝隮。
回看世上（六）無伯樂。
却道（七）鹽車勝（八）月題。

一尾追風萬蹄を抹す、
崑崙元圃朝隮すと謂ふ、
回看すれば世上に伯樂無し、
却つて道ふ鹽車月題に勝ると、

【字解】【一】一尾　俗語の一匹に當る、【二】追風　崔豹の「古今注」に、秦始皇有七名馬、一曰追風と、【三】抹　掃滅の意味であらう、【四】崑崙元圃　「水經注」に、崑崙三級、二曰玄圃、「穆天子傳」に、周穆王、駕八駿之乘、升崑崙之邱、賓於西王母、觴於瑤池之上と、「神仙傳」に、崑崙一曰積石瑤房、二曰閬風臺、一曰華蓋、一曰天柱と、【五】朝隮　「毛詩」に、朝隮于西と、【六】無伯樂　韓昌黎の「雜說」に、世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有、而伯樂不常有と、【七】鹽車　駑馬を謂ふ、【八】月題　良馬を謂ふ、「莊子馬蹄篇疏」に、月題額上當顱、形似月者也と、

【詩意】一尾の追風は以て萬蹄を抹するの概がある、崑崙の高き元圃の遠きも朝日の間に隮ると謂ふ、然るに世上を回看するに伯樂は存在しない、多くの凡人輩は鹽車を以て却つて月題や追風より勝れるものと思うて居る、

〔三〕

得喪秋毫久已冥。
不須聞此氣峥嶸。
何妨却伴參寥子。
無數新詩（一）咳唾成。

得喪秋毫久しく已に冥す、
須ひず此の氣峥嶸たるを聞くを、
何ぞ妨げん却つて參寥子に伴ひ、
無數の新詩咳唾して成る、

【字解】【一】咳唾　李白の詩に咳唾落九天、隨風生珠玉と、杜子美の詩、汝身已見唾成珠と、

【詩意】得喪に於ける念は秋毫も持たないのである、持たないからには追風や月題の如き峥嶸たる氣を聞くの要はない、人間の榮華よりは去つて方外の參寥子に伴うて、無數の新詩を咳唾中に成るに及くはない、

【餘論】紀曉嵐は第一の末句、縮合甚巧と評し、第三の縮合得粗率と評したるは贊同する、憑虛は仙人の事、定中は佛道の事、仙を抑へて佛を揚げし意了了のものがある、

## 與參寥師行園中得黃耳蕈

參寥師と園中に行き黃耳蕈を得たり

（一）遣化何時取（二）衆香。
法筵（三）齋鉢久凄涼。

遣化何れの時にか衆香を取る、
法筵齋鉢久しく凄涼、

【字解】【一】遣化　「淨名經香積品」に、遣化菩薩、往衆香國、禮彼佛足とある、【二】衆香　「淨

（四）寒蔬病甲（五）誰能採。　寒蔬病甲誰か能く採らん、

（六）落葉空畦半已荒。　落葉空畦半ば已に荒る、

（七）老楮忽生黃（八）耳菌。　老楮忽ち生ず黃耳菌、

故人兼致白（九）芽薑。　故人兼ねて致す白芽薑、

蕭然放（一〇）レ箸東南去。　蕭然箸を放ちて東南に去り、

又入春山筍蕨鄉。　又入らん春山筍蕨の鄉に、

名經香積佛品第十」に、有レ國名二衆香一、佛號二香積一、今現在、其國香氣、比二於十方諸佛世界、人天之香一、最爲二第一一と、又、香積如來、以二衆香鉢一、盛二滿香飯一、與二化菩薩一と、【三】齋鉢　香積品に、於レ是鉢飯悉飽二衆會一、猶レ故不レ盡と、【四】寒蔬　劉得仁の詩に、數畦蔬甲出と、【五】甲　草木初生之孚子とありて、蔬に子の生えたのである、【六】落葉　一木に落蘂に作る、【七】老楮　楮は「カウゾ」、樹皮を以て紙を作る樹である、【八】黃耳菌　「本草注」に、桑槐楮楡柳、此爲二五木耳一、楮耳人常食とある、木耳は和名「キクラゲ」、濕熱の餘氣にて生ずるもの、【九】白芽薑　「字彙」に薑菜名、辛而不レ葷、禦レ濕之菜也と、「本草」に、通二神明一、去二臭氣一、多食損レ智と、「論語」に孔子不レ撤レ薑食、不二多食一と、和名「シヤウガ」、「ハジカミ」である、芽は俗に「メ」と云ふ、【一〇】放箸　杜子美の詩、放レ箸未レ嘗二佘盤空一と、

【題義】參寥と同伴して園中に行き朽木に依つて黃耳蕈を得て作つたものである、

【詩意】化菩薩を遣つて何れの時にか衆香を取ることが出來るか、維摩の如き法筵齋鉢は其の事久しく淒涼である、尋常の寒蔬は病甲にして誰か之を採る者が有る、落葉は空畦を埋めて半ば已に荒涼である、然るに一の老楮を見れば忽ち黃耳菌の發生せるを、其の上に故人は菌と兼ねて白芽薑を供致せらる、蕭然として食し終り放箸して東南に向つて去る、其の意は又春山の筍や蕨の鄉に入らんが爲である、

【餘論】參寥が法師なるが爲めに蔬筍の氣あるを貴び、淨名經を以て起し、而かも香積の地位に甘んせず、菩薩行品の十一に進み、それより見阿閦佛品の十二に進めとの意味を敍するが爲め又入春山筍蕨鄉と結ぶ、坡公が作意を知つて此の詩を讀まば、公は地下に於て微笑するであらう、

## 百步洪二首

百步洪　二首

王定國訪二余於彭城（一）一。一日棹二小舟一與二顏長道一攜二盼（二）英卿三子一遊二泗（三）水北一。上二聖女山一。南下二百（四）步洪一。吹レ笛飲レ酒。乘レ月而歸。余時以レ事不レ得レ往。夜著二羽衣一。佇二立於黃樓上一。相視而笑。以爲二李太白死一。世間無二此樂一三百餘年矣。定國既去逾レ月。復與二參寥師一放二舟洪下一。追二懷曩游一。以爲二陳迹一。喟（五）然而歎。故作二詩一。一以遺二參寥一。一以寄二定國一。且示二顏長道舒堯文一。邀二同賦一云。

【訓讀】王定國、余を彭城に訪ふ、一日小舟に棹し、顏長道と、盼英卿の三子を攜へ、泗水の北に游び、聖女山に上り、南、百步洪に下り、笛を吹き酒を飲み、月に乘じて歸る、余時に事を以て往くを得ず、夜羽衣を著け、黃樓の上に佇立し、相視て笑ふ、以て李太白死し、世間に此の樂無きこと三百年と爲す、定國既に去つて月を逾ゆ、復參寥師と舟を洪下に放ち、曩游を追懷し、以て陳迹と爲し、

喟然として歎す、故に二詩を作り、一は以て參寥に遺り、一は以て定國に寄せ、且顏長道舒堯文に示し、邀へて同賦すと云ふ、

【字解】【一】彭城　縣の名、古大彭氏の地、今江蘇銅山縣治、【二】盼英卿　盼家と英家と卿家の三妓を謂ふ、【三】泗水　源を山東の泗水縣陪尾山より發して、江蘇、徐州、安徽鳳陽を經て淮に入る、今は泗水の口、江蘇銅山縣境である、【四】百步洪　水を歎賞するに勝地なりと思ふ、【五】喟然而歎　「論語先進篇」に、夫子喟然歎曰、吾與點也と、

【序意】王定國が余を彭城の官舍に訪はれたる時、顏長道と三妓とを攜へて、泗水の北に遊び、且聖女山に上り、南下して百步洪に至り、小舟の中にて笛を吹き、酒を飲み、夜に入り月に乘じて歸る、余は事情ありて、同游することが出來す、獨夜羽衣を著けて、黃樓上に佇立し、舟中の人と樓上の人と、相觀て互に笑ひ、自から謂ふ李太白の夜游以來に、世間に於て此の樂み無きこと殆んど三百年である、定國も已に去つて月を逾ゆ、復參寥師を伴うて舟を百步洪下に放ちて、曩游を追懷して、以て陳迹と爲し、喟然として歎す、故に余は此の二詩を作り、一詩は以て參寥に遺り、一詩は以て定國に寄せ、且顏長道と舒堯文に示し、二人を邀へて同賦すと云ふのである、

長洪斗落生跳波。(一)
輕舟南下如投梭。(二)
水師絕叫鳧雁起。

長洪斗落ちて跳波を生ず、
輕舟南下すること梭を投ずるが如し、
水師絕叫す鳧雁起つと、

【字解】【一】跳波　「子虛上林賦」に、驚波跳沫とある、【二】投梭　梭は機具、タダを入れて横の糸を通はすもの、【三】一綫　綫は糸の筋、俗に線と書するは誤る、【四】鷹隼　「タカ」と「ハヤブサ」である、【五】下注　「詩話總龜」に、東坡作百步洪詩云、有如兎走鷹隼落、駿馬下注千丈坡、坡在黃時有人云、千丈坡豈注馬處、及還朝、其人云、唯善走馬、方能注坡、聞者以爲注坡と、【六】離柱　斷絃の迅速なるを謂ふ、【七】眩轉風掠耳　班固が「西都賦」に、目眩轉而意迷、風掠耳用耳後生風意とある、【八】千渦　渦盤、渦旋と成語して水がウヅマクのである、【九】一快　「吳志呂蒙傳」に、傳此一快と、【一〇】水伯　「莊子秋水第十七」に、秋水時至、百川灌河、涇流之大、兩涘渚涯之間、不辨牛馬、於是焉、河伯欣然自喜、以天下之美爲盡在己と、水伯、河伯、同じ、水神、水長の意、【一一】乘化　「淵明歸去来辭」に、乘

亂石一綫爭磋磨。(三)
有如兎走鷹隼落。(四)
駿馬下注千丈坡。(五)
斷絃離柱箭脫手。(六)
飛電過隙珠翻荷。
四山眩轉風掠耳。(七)
但見流沫生千渦。(八)
嶮中得樂雖一快。(九)
何意水伯夸秋河。(一〇)
我生乘化日夜逝。(一一)
坐覺一念逾新羅。(一二)
紛紛爭奪醉夢裏。
豈信荊棘埋銅駝。(一三)
覺來俯仰失千劫。(一四)

亂石一綫磋磨を爭ふ、
兎走り鷹隼落つるが如きあり、
駿馬下注す千丈の坡、
斷絃は柱を離れ箭は手を脫す、
飛電隙を過ぎ珠荷に翻る、
四山眩轉して風耳を掠む、
但見る流沫千渦を生ずるを、
嶮中樂を得る一快なりと雖も、
何の意ぞ水伯秋河に夸る、
我が生化に乘じて日夜に逝く、
坐ろに覺ゆ一念新羅を逾ゆるを、
紛紛爭奪醉夢の裏、
豈信せんや荊棘銅駝を埋め、
覺來俯仰千劫を失するを、

回視此水殊委蛇。(一五)　回視す此の水殊に委蛇たり、
君看岸邊蒼石上。　君看よ岸邊蒼石の上、
古來篙眼(一六)如蜂窠。　古來篙眼蜂窠の如し、
但應此心無所住。(一七)　但應に此の心所住無かるべし、
造物雖駛如吾何。　造物駛なりと雖も吾を如何、
(一八)回船上馬各歸去。　船を回らし馬に上りて各の歸去す、
多言譊譊(一九)師所呵。　多言譊譊たるは師の呵する所、

化以歸盡と、化は天地自然の變易を謂ふ、【一二】走新羅　「景德傳燈錄」に、僧問、金鱗寶資大師、如何是金剛一隻箭、師曰、道什麼、其僧再問、師曰、過新羅國去と、【一三】荊棘　「晉書索靖傳」に、有先識遠量、知天下將亂、指洛陽宮門銅駝歎曰、會見汝在荊棘中と、【一四】千劫　劫は一世の義、又極めて長時間の義、千劫、萬劫、億劫、皆唯長時間の義である、【一五】委蛇　「詩召南」に退食自公、委蛇委蛇と、水流が右と左とウネリ流るる形容、【一六】篙眼　此の語は坡公が造語、古注に魏志管輅傳を引くが未詳、【一七】所住　「金剛經」に、應無所住、而生其心と、【一八】回船　杜子美の詩、請君臨深探其相逢回船罷酒上馬歸と、【一九】譊譊　揚子云、譊譊者、天下皆訟也、奚其存、曰、天下之亡聖也久矣、呱呱之子、各識其親、譊譊之學、各習其師と、議論なぞをして喧り呼ぶ聲である、默默の反對である、

【詩意】長洪には星斗が光を落して跳波を生ずる、輕舟は南下する狀宛かも梭を投ずる如く輕い、水師は大聲にて叫ぶ鳧雁が驚き起つと、亂石を見れば一綫其の礎き磨きたる狀を爭うて、兎が走り鷹隼が落ちる如きの態である、駿馬の奔下する狀は水が千丈の坡に注ぐが如く駛い、又斷絃が柱を離れ箭が手を脫する如く早い、又飛電が隙を過ぎ珠は荷葉に翻る、四山を望むも眩轉して風は耳を掠むる迅速である、洪水の流れの沫する處は千渦を生ずる、此の如き嶮奇の中に樂を得るは一快ではあるが、何の意ぞや水伯が秋河は此の如きものであるかの如く夸るは、我が生は自然の化に乘じて水と同じく日夜に逝く、坐ろに覺ゆ剎那の一念が已に新羅を逾ゆるを、然るに哀しむべし凡俗は紛紛爭奪を事とする一醉一夢の裏に、彼等は信せない銅蛇の麗園が忽にして荊棘中に埋まることを、覺め來れば一俯一仰の間に千劫を失するを、此の洪の水を回視すれば殊に委蛇たるを知る、君も看玉へ岸邊蒼石の上を、古來より篙師の眼は蜂窠の如く攢めたるを、但應に此の心も定住する所なかるべきである、造物は剎那に過ぎ去つて駛しと雖も吾が心を如何ともすることが出來ない、船を回して馬に上りて各自に歸宅し去る、多言譊譊たるは默默の益あるに及かず、師の爲めに呵せらるる所である、

〔二〕

佳人未肯回秋波。(一)　佳人未だ肯て秋波を回らさず、
(二)幼輿欲語防飛梭。　幼輿語らんと欲して飛梭を防ぐ、
輕舟弄水買(三)一笑。　輕舟水を弄して一笑を買ふ、
醉中(四)蕩槳肩相磨。　醉中槳を盪して肩相磨す、
不學長安閭(五)里俠。　學ばず長安閭里の俠、

【字解】【一】秋波　「傅武仲舞賦」に、目流睇而橫波と、元微之の詩、眼明正似琉璃缾、心蕩秋水橫波清と、【二】幼輿　「晉謝鯤傳」に、鯤字幼輿、鄰家高氏女、有美色、鯤挑之、女投梭、折其兩齒、時人爲之語曰、任達不已、幼輿折齒、鯤

貂裘夜走(六)臙脂坡。
獨將詩句擬(七)鮑謝。
(八)涉江共採秋江荷。
不知詩中道何語。
但覺兩頰生微渦。
我時(九)羽服黃樓上。
坐見(一〇)織女初斜河。
歸來笛聲滿山谷。
明月正照(一一)金叵羅。
奈何舍我入塵土。
(一二)擾擾毛(一三)羣欺(一四)臥駝。
不念空齋老病叟。
(一五)退食誰與同委蛇。
時來洪上看遺跡。

貂裘夜走る臙脂坡、
獨り詩句を將て鮑謝に擬す、
江を涉りて共に採る秋江の荷、
知らず詩中道ふは何の語ぞ、
但覺ゆ兩頰微渦を生ずるを、
我時に羽服黃樓の上、
坐して見る織女初めて河に斜なるを、
歸來笛聲山谷に滿つ、
明月正に照す金叵羅、
奈何ぞ我を舍てて塵土に入る、
擾擾たる毛羣臥駝を欺く、
念はず空齋老病の叟、
退食誰と與に同じく委蛇たる、
時に洪上に來りて遺跡を看る、

---

聞之傲然長嘯曰、猶不廢我嘯歌」と、【三】買一笑　「漢江都王傳」に、建使郎二人乘小舟入波中、船覆、兩郎攀船、乍見乍沒、建臨觀大笑と、【四】疊槳　杜子美の詩、巴童蕩槳欹側過と、【五】閭里俠　「前漢書」に、閭里之俠、原涉爲冠と、【六】臙脂坡　王註厚曰、臙脂坡、長安妓館坊名と、「汴京遺跡志」に、臙脂坡、在開封府城西北、朝暮斜暉、照之如臙脂、俗呼爲紅沙岡」と、【七】鮑謝　鮑照、字は明遠、南朝宋東海の人、詩に工、仕へて臨海王參軍と爲る、世に鮑參軍と稱す、謝朓、字は元暉、南北朝、南齊陽夏の人、少にして學を好み、美名あり、文章清麗、草隸を善くす、五言の詩に長す、曾て宣城太守と爲る、故に世に謝宣城と稱す、杜甫の詩に、往往凌鮑謝と、【八】涉江　李太白の詩に、涉江弄秋水、愛此荷花鮮と、【九】羽服　鳥のハゴロモ、「漢書郊祀志」に、衣羽衣、立白茅上と、【一〇】織女　「小說沈警傳」に、姮娥妬人、不肯留照、織女無賴、已復斜河と、【一一】金叵羅　酒器である、「野客叢書」に、北史、祖珽盜神武金叵羅と、【一二】擾擾　ゴタゴタ亂れるを謂ふ、「國語」に、唯有諸侯、故擾擾焉と、【一三】毛羣　獸類を謂ふ、【一四】臥駝　眠臥する駱駝を謂ふ、【一五】退食　「詩召南」に、退食自公、委蛇委蛇と、【一六】屐齒　「晉謝安傳」に、心喜不覺屐齒之折と、雀躍して喜ぶ狀、又、謝靈運は游山を愛し、險處に攀づ、木屐上るときは前齒を去て、下るときは後齒を去てる、【一七】雙淚下　賈島の詩、兩句三年得、一吟雙淚流と、【一八】羊何　謝靈運、登臨海嶠作題云、與從弟惠連、可見羊何共和之と、太白の詩、別後遙傳臨海作、可見羊何共和之と、太山の羊璿之と東海の何長瑜との二人を謂ふ、今以て舒堯文と顧長道とを指す、【一九】錦字　女子の手裁するものを錦字と謂ふ、晉の竇滔が妻の回文錦字に起る、杜甫の詩に、誰家挑錦字、燭滅翠眉嚬と、太白の詩、中有錦字書、開緘使人嗟と、【二〇】無人呵　王仁裕が「開寶遺事」に、太白於便殿草詔時、大寒筆凍、帝令宮嬪十人、各執牙筆呵之、令白遂取書字と、

忍見(一六)屐齒青苔窠。
詩成不覺(一七)雙淚下。
悲吟相對(一八)惟羊何。
欲遣佳人寄(一九)錦字。
夜寒手冷(二〇)無人呵。

見るに忍びん屐齒青苔の窠、
詩成りて覺えず雙淚下る、
悲吟相對して惟羊何、
佳人に遣るに錦字を寄せんと欲するも、
夜寒く手冷かにして人の呵する無し、

**【詩意】** 佳人は未だ肯て秋波を回らして吳れぬ、それは幼輿が事にて彼は語らんと欲したるも佳人怒りて梭を投げて彼が齒二枚を折つた、君等は輕舟に水を弄して佳人の一笑を買ふことが出來た、醉中に槳を盪かして佳人と肩肩相磨して居る、其の游ぶや長安閭里の俠人の游を學ぶのではない、俠人の徒は貂裘を服けて夜中に臙脂坡に走る無風流なる奴である、君等の游びや獨詩句を將て鮑や謝の游び

を學ぶの高尚且風流である、我は知らない君等が詩中に何の語を道ふやを、但覺ゆ君等が面頰に微渦を生ずることを、我は羽服を著けて黃樓の上に坐して居る、坐しながら見る織女星の初め天河に斜なるを、樓を下りて歸り來れば笛聲が山谷に滿ちて響くを聞く、而して明月が正に金叵羅を照すを見る、奈何ぞや君等は我を舍てて塵土に入つて、擾擾として毛羣が臥駝を欺く如きを學ぶや、念はずや空齋老病の叟を、公より退食して誰と與に委蛇を同じうせんや、時ありて洪上に來りて當時の遺跡を看るも、見るに忍びんや靑苔窠に屐齒あるを、詩成りて覺えず潸然と雙涙が下る、悲吟相對せんと思ふは惟羊何の二人である、且三人の佳人に錦字を寄せ遣らんと思ふも、夜は寒く手は冷かなるも遂に筆を呵して暖めて吳れる者は無い、

【餘論】 觀奕道人は前首を評して曰く、語皆奇逸、亦有灘起渦旋之勢と、又有如兎走の句を評して、只用一有如貫下、便脫去連比之調、一句兩比、尤爲創格と、査云、連用比擬、古無此法、自先生創之と、觀奕又云、後半全對參寥下語、詩須如此、用意方不浮泛と、觀奕道人は前首を以て後首より最も上頭に置くもので、余も亦此の詩の灘起渦旋の壯觀あるを喜ぶものである、一韻の詩の作法として七字の下、平平平なるときは第四字必ず仄、坡公の詩法として一も之を亂るるものは無い、長洪斗落生跳波○○●●○○○、希に多言譊譊師所呵○○●●○●○もある、多くは●●○○○と定まりてある、

送參寥師

(一)上人學苦空(二)、百念已灰冷、
劍頭惟一吷(三)、焦穀無新穎(四)、
胡爲逐吾輩、文字爭蔚炳(五)、
新詩如玉屑(六)、出語便淸警(七)、
退之論草書、萬事未嘗屛、
憂愁不平氣、一寓筆所騁、
頗怪浮屠(八)人、視身如邱井(九)、
頹然寄澹泊(一〇)、誰與發豪猛(一一)、
細思乃不然、眞巧非幻影(一二)、
欲令詩語妙、無厭空且靜(一三)、
靜故了羣動、空故納萬境、
閱(一四)世走人間、觀(一五)身臥雲嶺、
鹹酸雜衆好、中有至味永、

參寥師を送る

上人苦空を學び、百念已に灰冷、
劍頭惟一吷、焦穀は新穎無し、
胡爲れぞ吾輩を逐うて、文字蔚炳を爭ふ、
新詩玉屑の如く、語を出す便ち淸警、
退之草書を論じ、萬事未だ嘗て屛けず、
憂愁平氣ならず、一に寓す筆の騁する所に、
頗る怪しむ浮屠の人、身を視ること邱井の如く、
頹然として澹泊に寄す、誰と與に豪猛を發する、
細思すれば乃ち然らず、眞巧は幻影にあらず、
詩語を妙ならしめんと欲せば、空且靜を厭ふ無かれ、
靜の故に羣動を了じ、空の故に萬境を納る、
世を閱して人間に走る、身を觀じて雲嶺に臥す、
鹹酸衆好を雜ふ、中に至味の永きあり、

詩法不二相妨一。此語當二更請一。　詩法相妨げず、此の語當に更に請ふべし、

【字解】【一】上人　上人の名は「維摩經」にも出るが、僧に對する敬稱語にて學者を先生と稱すると同じ、【二】苦空　「涅槃經」に苦と空と無常と無我を雙樹の雙白に譬へ、四枯と謂ひ、常と樂と我と淨とを雙樹の青色に譬へ、之を四榮と謂ふ、【三】一吷　「莊子則陽篇」に、惠子曰、夫吹レ管也、猶有二嗃也一、吹二劍首一者、吷而已矣と、吷は其の聲甚だ短にして促るを謂ふ、【四】焦穀　「淨名經」に、如二焦穀芽一、如二石女兒一と、【五】蔚炳　「揚子」に聖人虎別、其文炳也、君子豹別、其文蔚也と、「周易」に其文蔚也、其文炳也と、【六】玉屑　「魏志衞顗傳」に、昔漢武、信求二神仙之道一、謂當レ得二雲表之露一、以餐二玉屑一、故立二仙掌一、以承二高露一と、【七】清警　「魏志崔琰傳」に、盧毓清警明理と、【八】浮屠人　儒者が佛者を稱する語、佛者自からは決して用ひぬ語である、浮屠は譯して高顯と謂ふ、即ち五層七層の塔である、僧伽と塔とは大に異なる、東坡も亦此の語を用ひるに至りては、梵學を知らざるに由るのである、【九】邱井　「淨名經」に、是身如二邱井一、爲二老所一レ逼と、樂天の詩、身老同二邱井一、心空是道場と、【一〇】澹泊　揚雄が「長揚賦」に、澹泊爲レ德と、【一一】豪猛　豪懷猛氣である、【一二】幻影　寸時ありて、寸時に滅する、之を幻影と謂ふ、【一三】空且靜　空とは眼界に一物無きを謂ふのではない、之に執著せぬを空と謂ふ、靜とは木石土井の類を謂ふのではない、我が心の動ぜざるを謂ふ、【一四】閱世　劉夢得の詩に、閱世經二重陣一と、【一五】觀身　「淨名經」に、自觀二身實相一と、

【詩意】上人は本來苦空を學ぶの人である、故に塵俗に於ける百念は已に灰冷と爲る、劍頭も一吷するのみ人を殺すのではない、焦穀は新穎を生ずる理は無い、然るに胡爲れぞや吾輩等と追逐して、文字の上に於て蔚炳を爭ふのである、其の作れる新詩は玉屑の如く清麗である、語を出せば清警にして凡俗の鄙陋はない、韓退之が艸書を論じたる文に、高閑上人の艸書を稱揚して萬事を一概に未だ嘗て屏けない、胸中に憂愁を抱くときは平氣を裝ふことが出來ない、其の鬱懷を筆の騁するに任せて寓記する、余は頗る怪しむ佛門の人を、佛者は本來其の身を視ること邱井の如くして、頹然として萬事を澹泊に寄するのである、誰と與に胸中の豪猛を發する理はないが、退いて細思するに左樣ではない、余は聞く眞巧は永劫に留むるもので幻影ではない、是の故に詩語を妙ならしめんと欲するには、空と眞靜とを厭うてはいかぬ、眞靜なるが故に羣動が了むのである、眞空なるが故に萬境を我が懷に容るることが出來る、世を閱して人間に走るも佛法に背かない、身を觀じて雲嶺に臥するは固より本分である、詩を作りて鹹も酸も衆好を雜ふる、其の中に至味の永きものがある、詩と法と少しも相妨げない、余が此の語佛理に當るや否や更に請問せんと思ふ、

【餘論】査初白云ふ、公與レ潛以レ詩友善、畏レ潛以レ詩、潛止一詩僧耳、令レ出二空靜二字一、便有二主腦一、便是結穴處、余謂潛本僧而公之詩友、若專言レ詩、則不レ見レ僧、專言レ禪、則不レ見レ詩、故禪與レ詩併爲二一演成妙諦一、結處、詩法不相妨五字、乃一篇之主宰、非三專拈二空靜一也と、今案ずるに宋の詩僧中、內典に達して旁ら善詩なる者は孤の智圓法師を以て第一とする、惜い哉石門も參寥も內典としての功は無い、坡公が參寥を稱するは、韓愈が高閑を稱すると同じ、但大詩僧と言ふべきのみである、

## 夜過二舒堯文一戲作　夜舒堯文を過ぎ戲れに作る

先生堂上霜月苦。　先生堂上霜月苦ゆ、
弟子讀書喧二兩廡一。　弟子讀書兩廡に喧し、

【字解】【一】月苦　何寅が詩、蒼茫曙月苦と、【二】兩廡　廡は「說文」に堂下周屋とある、人を多く納

推門入室書縱橫。　門を推して室に入れば書縱橫、
蠟紙燈籠晃雲母。　蠟紙燈籠雲母晃たり、
先生骨清少眠臥。　先生骨清うして眠臥少なし、
長夜默坐數更鼓。　長夜默坐更鼓を數ふ、
耐寒石硯欲生冰。　耐寒の石硯も冰を生ぜんと欲し、
得火銅瓶如過雨。　得火銅瓶過雨の如し、
郎君欲出先自贊。　郎君出でんと欲し先づ自から贊す、
坐客斂衽誰敢侮。　坐客衽を斂め誰か敢て侮らん、
明朝阮籍過阿戎。　明朝阮籍阿戎に過ぎ、
應作羲之羨懷祖。　應に羲之が懷祖を羨むを作すべし、

ゐるを得る大屋を謂ふ、【三】雲母 「本草」に、雲母片、有絶大而瑩潔者、今人或以飾燈籠、亦古扇屛風之遺意也と、【四】骨清 韓退之の詩、月明伴宿玉堂空、骨冷魂清無夢寐と、【五】生冰 劉錡の詩、溪毫未試冰生硏と、【六】銅瓶 白樂天の詩、銅瓶水冷齒先知と、【七】自贊 「漢書」東方朔自贊曰、臣嘗受易、請射之、注云贊進也と、堯卿曰、郎君指胥堯文之子、應休璉、與滿公琰書曰、外嘉郎君謙下之德、故後來、遂以郎君稱人之子弟と、【八】誰敢侮 堯卿曰、此言堯文非侮也、南史崔道固、爲宋諸王參軍、被遣靑州、募人、長史以下、並詣道固、道固諸兄等、逼其所生、自致酒炙於客前、道固驚起、接取謂客曰、家無人力、老親自執劬勞、諸客皆知其兄所作、成拜其母、母謂道固曰、我賤不足以報貴賓、汝宜答拜、諸客成嘆美道固母子、而賤其諸兄と、毛詩に或敢侮予と、【九】阮籍過阿戎 「晉書」に、阮籍與王渾爲友、渾子戎年十五、少籍二十歲、而籍與之交、籍每過渾、俄頃輒去、過視戎良久、然後出謂渾曰、濬沖淸賞非卿倫也、共卿言、不如共阿戎談と、【一〇】羲之 「晉王羲之傳」に王述、蒙顯授、羲之恥爲之下、謂諸子曰、吾不減懷祖、而位遇懸邈、當由汝等不及坦之故邪と、王述字は懷祖、坦之は王述の子、

【題義】夜中に舒堯文を訪問して戲れに作りしものである、

【詩意】先生の堂上は霜月が苦えてある、弟子が讀書の聲正しく兩廡に喧しきを聞く、門を推開して室に入れば書冊が縱橫に積んである、蠟紙燈籠が雲母の爲めに晃と輝いて見える、先生は風骨清瘦にして眠臥すること少ない、冬夜の長きに默坐して更鼓を數ふ、耐寒の石硯も正に冰を生ぜんと欲するの寒氣が酷し、銅瓶は僅かに火を得ても水は微しく過雨に類するのみである、郎君は出でて客に接せんとして先づ自から贊する、坐客は衽を斂めて慇懃に禮して侮ることはない、明朝に阮籍は其の父を訪はずして反つて其の子を訪はんと思ふ、應に羲之が其の弟を羨むと同樣の感を君は爲し玉ふな、

【餘論】七言十二句平平に敍し來り、平平に結び去る、坡公が言はんと欲する所は郎君以下の二十八字に在るのみ、

## 和參寥見寄　　參寥寄せらるるに和す

黃樓南畔馬臺宮。　黃樓南畔の馬臺宮、
雲月娟娟正點空。　雲月娟娟正に空に點す、
欲共幽人洗筆硯。　幽人と共に筆硯を洗はんと欲す、
要傳流水入絲桐。　流水を傳へて絲桐に入れんと要す、

【字解】【一】馬臺宮 一本に馬臺東に作る、原作宮とあれば、後の編集者が、東を宮と改めたものである、馬臺東が適切である、【二】娟娟 幽遠なる貌、杜甫の詩、風含翠篠娟娟淨とある、【三】流水 琴

且隨（五）侍者尋西谷。　　且く侍者に隨つて西谷を尋ね、
莫學山僧老祝融（六）。　　山僧を學んで祝融に老ゆる莫かれ、
待我西湖借君去。　　待て我が西湖に君を借りて去り、
一杯湯餅潑（七）油葱。　　一杯の湯餅油葱を潑せん、

琴の佳を言ふ、【四】絲桐　「桓譚新論」に神農氏王天下、始削桐爲琴、縄絲爲絃、以通神明之德、合天人之和と、【五】侍者　高僧が爲めに傍に侍し、用を便ずる者、【六】祝融　峯の名、「南嶽記」に衡山者、火宿之實洞、赤帝館其嶺、祝融託其陽、祝融衡山之一峯也と、【七】潑油葱　古来の注に「未詳」とある、案ずるに「漢光武紀」に氣佳哉、鬱鬱葱葱、言條暢也とあれば、湯餅が充熱して佳氣を潑するのであらう、

【題義】參寥名は道潛、錢塘の人、哲宗の朝に妙摠大師と號を賜ふ、蘇公の門客と爲つて、唱和往還、翰墨に形はる、時人之を重んず、時人の重んずるは、坡公の重んずる影響である、當時參寥集存在したるも、今は宋詩鈔中に存するのみである、

【詩意】黃樓の南畔馬臺の東は、雲月娟娟として正に空に點する、此の時に當りて幽人と共に筆硯を洗はんことを思ふ、更に流水の佳韻を傳へて絲桐に入れんと要する、且らく侍者の案內に隨して西谷を尋ね、他の山僧を學んで祝融峯に老い朽ちてはいかぬ、待つて居玉へ我が西湖に游ぶとき君の身を借りて同伴を思ふから、其の時や一杯の湯餅必ず油葱を潑するであらう、

【餘論】觀奕道人曰く、和參寥の上に戲字を置けと、結句潑油葱の三字太俚と、余謂ふ俚たるに相違なきも、之に代る文字は無い、觀奕一代、他の疵瑕を拾ふに勉め、然らば如何なる文字に改めて可きやは一句も論じない、屈復が杜詩を改刪すると五十步百步である、但西谷、西湖、律詩として大病なるは言ふ迄もない、參寥の原作、堝來淮上臥蕭宮、回首人間萬事空、院靜水沈消薄幔、睡餘寒日耿修桐、南方訪古思杯度、北海談經憶孔融、寂寞蒹葭霜雪後、何時重倚玉青葱、「佩文韻府」に一杯湯餅潑油葱は完顏璹の句とす、



## 十月十五日觀月黃樓席上次韻

十月十五日、月を黃樓に觀る、席上次韻

中秋天氣未應殊。　　中秋の天氣未だ應に殊なるべからず、
不用紅（一）紗照座隅。　　用ひず紅紗座隅を照すを、
山上白雲橫匹素。　　山上の白雲匹素を橫へ、
水中明月臥浮（二）圖。　　水中の明月浮圖に臥す、
未成短（三）棹還三峽。　　未だ成さず短棹三峽に還るを、
已約輕舟泛五（四）湖。　　已に約す輕舟五湖に泛ぶを、
爲問登臨好（五）風景。　　爲めに問ふ登臨好風景、
明年還憶使君無。　　明年還た使君を憶ふや無や、

【字解】【一】紅紗　白樂天の詩、日暮半爐麩炭火、夜深一盞紗籠燭と、【二】浮圖　浮頭、浮屠、佛圖に作る、舊譯家は以て佛陀の轉音と爲す、「廣弘明集二」に浮圖或言佛陀、聲明轉也、譯言淨覺、謂滅穢成明覺、爲聖悟也と、新譯家、卽ち唐以來の譯者は窣堵波、卽ち塔の轉音と爲す、「西域記一」に窣堵波、卽舊所謂浮圖也と、世多く新譯を採りて、舊譯を採らない、今の浮圖卽ち五層の高塔

を指す、【三】短棹　「廿澤謠」に李源與圓澤、上荊州、出三峽、次南浦、維舟山下、圓澤亡、源回棹指餘杭、忽聞葛洪川畔、有牧豎歌、俄至寺前乃澤也と、坡公は此の意を借りて身の蜀に歸らざるを謂ふ、【四】五湖　「呉越春秋」に、范蠡扁舟出三江入五湖、人莫知其所適と、貫湖と游湖と胥湖と海梁湖と金鼎湖と區別はするが、其の實は洞庭一湖である、【五】好風景　杜甫の詩、正是江南好風景、落花時節又逢君と、

【題義】十月十五日卽ち初冬の十五夜に觀月して詩を爲る、誰の詩に次韻したのであるか、不明である、

【詩意】八月十五夜の天氣と殊ならざるのである、紗燈を置いて座隅を照らさしむるは無用である、山上を仰望すれば白雲が一匹の絹素を横ふ如き狀を爲し、水中を俯觀すれば明月が一輪の浮圖を臥せしむる形である、余は未だ短棹を回らして三峽に還ることをしない、已に約して居る輕舟を五湖に泛べて游ぶことを、今夜同賞する人に問ふ今夜の登臨は眞に好風景である、明年も諸君は北の游を爲して使君たる東坡がことを憶ひ起すや無や、

【餘論】公の詩として可もなく不可もなき作である、未應、未成、明月、明年、還三、還憶、刊本の誤にあらず、原作の儘なりとせば、大病の極である、

## 答王定民　　王定民に答ふ

開緘奕奕滿銀鉤。　緘を開けば奕奕銀鉤滿つ、
書尾題詩語更遒。　書尾詩を題して語更に遒、
八法舊聞宗長史。　八法舊と聞く長史を宗とすと、
五言今復擬蘇州。　五言今復た蘇州に擬す、
筆蹤好在留臺寺。　筆蹤好在なり臺寺に留め、
旂隊遙知到石溝。　旂隊遙かに知る石溝に到るを、
欲寄鼠鬚幷繭紙。　鼠鬚と幷せて繭紙を寄せんと欲す、
請君章草賦黃樓。　請ふ君章草黃樓を賦せよ、

【字解】【一】奕奕　詩に奕奕梁山、又、寢廟奕奕、又、憂心奕奕、美の盛、憂の盛、今は美の盛である、【二】銀鉤　「晉索靖傳」に、草書之爲狀也、婉若銀鉤、漂若驚鸞と、【三】語更遒　韓退之の詩、暮作千詩轉遒緊と、「詩豳風」に、四國是遒と、遒緊、遒勁、力の强きを言ふ、【四】八法　秦代の八體より義を得て、更に八法を發明せしもの、八體は八字の體製を言ひ、八法は一字に就いて其の運筆の法を示せるもの、或は永の字より起り、或は隸字より起る、永字に就いての八法は蔡邕、崔瑗、張旭、李陽冰、顏眞卿に至り、隸字に就いては崔瑗、鍾繇、王逸少に至る、【五】長史　卽ち張旭、吳の人、字は伯高、草書に工にして、酒を嗜み、大醉每に呼叫狂走し、字を書するに頭を以て墨に濡ほし以て書することもある、世に草聖と號す、【六】蘇州　韋應物は蘇州の知府、五言は中唐に於て第一と稱せらる、【七】留臺寺　臺頭寺、定民が其書を臺頭寺に留むるを言ふ、【八】旂隊　李洞の詩、九城王氣生旂隊と、旂隊は王命を奉じて、章を書せしむる爲め赴く使者である、【九】鼠鬚　筆の上なるもの、【一〇】繭紙　帛の上なるもの、【一一】章草　王次公曰、章草出漢元帝時、史游作急就章、解散隸體、麤書之、出書斷、杜操善作草書、章帝愛之、詔令章表、亦作草字、遂謂之章草と、

【題義】王定民字は佐才、亳の人、或は謂ふ東萊の人、通城縣令に終る、雙誨篇二十四卷を著はすと、

【詩意】君が寄せられたる書緘を開封すれば、忽ち奕奕たる美字が銀鉤滿ちて居る、其の書尾に題し

たる詩は語句が更に遒勁である、君が字に就いての八法は舊くから聞いて居る張旭を本尊と爲すと、君が詩に就いての五言は今讀んで見ると韋蘇州に擬して淸澹である、君が筆蹤は永く臺頭寺に保存せらるるを知る、王命君に書せしめんとの旂隊は遙かに知る石溝に到るを、我は鼠鬚の筆と繭紙を寄せんと欲するから、請ふ君は遒勁なる章草を以て黃樓賦を書して與れ玉へ、

【餘論】信屈の體無く、首尾一貫して明白なる作法である、

## 次韻王庭老退居見寄二首

王庭老が退居、寄せらるるに次韻す　二首

（一）

浪蘂浮花不辨春。　浪蘂花を浮べ春を辨せず、

歸來方識歲寒人。　歸來方に識る歲寒の人、

回頭自笑風波（二）地。　頭を回らして自から笑ふ風波の地、

閉眼聊觀夢幻（三）身。　眼を閉ぢて聊か觀る夢幻の身、

北牖已安陶令榻。　北牖已に安く陶令の榻、

西風還避庾（四）公塵。　西風還た避く庾公の塵、

更搔（五）短髮東南望。　更に短髮を搔きて東南を望み、

【字解】〔一〕浪蘂　韓退之の詩、浮花浪蘂鎭長有、纔開還落瘴霧中と、〔二〕風波地　白樂天の詩、況在名利途、平生有風波と、〔三〕夢幻身　「金剛經」に一切有爲法、如夢幻泡影と、〔四〕庾公塵　「晉王導傳」に時庾亮、雖居外鎭、而執朝廷之權、趨向者多歸之、王導內不能平、常遇西風塵起、舉扇自蔽、徐曰、元規塵汚人と、庾亮字は元規で

試問今誰裹舊巾。　試に問ふ今誰か舊巾を裹むやと、

【詩意】浪蘂に花を浮ぶるも我は春の游を辨じない、歸り來りて方に歲寒を守るの人たるを識る、頭を回らして自から笑ふ此の世は風波の地であるを、眼を閉ぢて聊か觀察する夢幻の身であることを、北牖の下には已に陶令が臥榻を安置する、西風の前には還た庾公の塵を避ける、更に短髮を搔きて東南を看望し、試に問ふ今日誰か陶や庾の如くの舊巾を裹む者ぞやある、

ある、〔五〕搔短髮　杜子美の詩、白頭搔更短、渾欲不勝簪と、

〔二〕

接果移花看（一）補籬。　果を接ぎ花を移して補籬を看る、

腰（二）鐮手斧不妨持。　腰鐮手斧持つを妨げず、

上（三）都新事長先到。　上都の新事長く先づ到り、

老圃閒談未易欺。　老圃の閒談未だ欺き易からず、

釀酒閉門開（四）社甕。　酒を釀し門を閉ぢ社甕を開き、

殺（五）牛留客解耕（六）縻。　牛を殺し客を留め耕縻を解く、

何時得見纖（七）纖玉。　何れの時か纖纖の玉を見るを得て、

【字解】〔一〕看補籬　杜子美の詩、牽蘿補破籬と、白樂天の詩、移花夾暖室と、〔二〕腰鐮　鮑照の樂府に、腰鐮刈葵藿、倚杖牧雞豚と、鐮は和語の「マガリガマ」である、〔三〕上都　班固が「西都賦」に、建上都而觀萬國と、〔四〕開社甕　羅隱の詩、會待與君開社甕と、甕は甕と同じ、酒を貯ふる「カメ」である、春社の日に開き、

右手持杯左捧頤。(八)　右手に杯を持し左に頤を捧げん、

〜

又秋社の日に聞く、【五】牧牛「王注」に隋末劉黒闥、屏居漳南、諸將詣之、黒闥方耕疏、卽殺耕牛、與之共飲と、【六】耕縻「說文」に縻牛轡也と、牛馬の轡の下にあてて車を引かしむる革紐である、【七】纖纖玉「捷言」に張祜、客淮南幕中、赴宴時、杜紫微、爲支使、南座有屬意之處、索骰子賭酒、牧微吟曰、骰子逡巡裹手拈、無因得見玉纖纖、張祜應聲曰、但知報道金釵落、彷彿還應露指尖と、【八】捧頤　俗語の頬杖をツクことである、「世說」に、陸遺林以如意拄頰、望鍾山と、支頤、拄頰、捧頤皆同じ、

【詩意】退官後の身は果を接ぎ花を移して補籬を看る、腰には鎌を夾み手には斧を持つことを誰か妨ぐるものぞや、上都の新事は長く先づ到るも、老圃と閒談する未だ欺き易からない、酒を釀して門を閉ぢ社日を待つて甕を開く、牛を殺して客を留め耕縻を解く、獨樂の狀は此の如きも、何れの時にか纖纖たる玉人の歌舞でも見るを得て、右手に杯を持ち左手は頤を捧へるの悠游あるや、

【餘論】紀曉嵐は西風還避庾公塵を許して太露と、當時に在りて露骨に過ぎるを嫌ふのである、余は後首の殺牛留客解耕縻の七字は殘酷なる句と思ふ、東坡居士として特に其の殘酷を嫌ふ、故事あるにせよ、實事にあらざるにせよ、母の爲め羅漢供を爲したる坡公の詩として取ることは出來ない、妨持、持杯、又小疵である、

## 次韻顏長道送傅倅

顏長道が傅倅を送るに次韻す

兩見黃花掃落英。(一)　兩見す黃花と掃落英と、

〜【字解】【一】落英「楚辭」に、

南山山寺遍題名。(二)　南山山寺遍ねく名を題す、

宗成不獨依岑范。(三)　宗成は獨岑范に依らず、

魯衛終當似弟兄。(四)　魯衛は終に當に弟兄に似たるべし、

去歲雲濤浮汴泗。(五)　去歲雲濤汴泗に浮び、

與君泥土滿衣纓。(六)　君と泥土衣纓に滿つ、

如今別酒休辭醉。　如今別酒醉を辭するを休めよ、

試聽雙洪落後聲。(七)　試みに聽け雙洪落後の聲、

餐秋菊之落英と、落ちたる花の說と、落ちたる葉の說とあるが、花が正しい、【二】題名　前に辨ぜり、【三】宗成「後漢書黨錮傳」に、汝陽太守宗資、任功曹范滂、南陽太守成瑨、亦委功曹岑晊、二郡爲之謠曰、汝南太守范孟博、南陽宗資主畫諾、南陽太守岑公孝、宏農成瑨但坐嘯と、【四】魯衛「漢書」に、大馮君、小馮君、兄弟繼踵、相因循政、如魯衛と、【五】雲濤　劉禹錫の詩、洶疑雲濤翻と、【六】滿衣纓　白樂天の詩、塵土滿衣何處來と、【七】雙洪　王注曰、雙洪蓋徐州二水也、先生徐州鹿鳴燕賦詩敍云、俯聽二洪之奔怒即此也と、查初白云、「宋史河渠志」に、呂梁百步兩洪、湍急險惡、多壞舟楫、呂梁洪、在城東南五十里、有上下二洪、巨石齒列、波流洶湧、呂梁西岸、有尉遲城、唐尉遲恭、疏二洪、因築城と、

【詩意】君は已に黃花を見て更に落英をも見る、南山の山寺に及第せる名をも題する、宗と成との二人は獨岑と范との二人に依託するのみでない、魯と衛とは終に當に弟と兄とに似たる親みがある、去歲は雲濤を冒して汴泗に舟を泛べ、君と同游して泥土が衣纓に滿ちたことがある、只今の別酒は醉を辭し玉ふな、試に聽かんと欲す雙洪に湍流する水の落後の聲を、

【餘論】觀奕道人曰く後四句筆力雄大と、去歲の句は卽ち流水對法である、

## 雲龍山觀燒得雲字

雲龍山觀燒、雲字を得たり

(一)丁女眞水妃。寒山便火(二)耘。　丁女眞に水妃、寒山便ち火耘、
(三)隕霜知已殺。(四)坏戶聽初焚。　隕霜已に殺を知る、坏戶初焚を聽く、
(五)束縕方熠燿。(六)敲石俄(七)氤氳。　縕を束ねて方に熠燿、石を敲きて俄かに氤氳、
落點甘(八)泉烽。橫煙楚(九)塞氛。　落點甘泉の烽、橫煙楚塞の氛、
窮蛇上喬木。潛蛟躡浮雲。　窮蛇喬木に上り、潛蛟浮雲を躡む、
驚飛墮傷雁。狂走迷(一〇)癡聾。　驚飛して傷雁墮ち、狂走して癡聾迷ふ、
谷蟄起(一一)蜩燕。山妖竄(一二)夔羵。　谷蟄蜩燕起ち、山妖夔羵竄る、
野竹爆哀聲。(一三)幽桂飄寃芬。　野竹哀聲爆たり、幽桂寃芬飄る、
悲同秋照(一四)蟬。快若夏(一五)燎蚊。　悲は秋照蟬に同じ、快は夏燎蚊の若し、
(一六)火牛入燕壘。(一七)燧象奔吳軍。　火牛燕壘に入り、燧象吳軍に奔る、
崩騰井(一八)陘口。萬馬皆朱(一九)幘。　崩騰井陘の口、萬馬皆朱幘、
搖曳驪山陰。(二〇)諸姨爛紅裙。　搖曳す驪山の陰、諸姨紅裙爛たり、
方隨(二一)長風卷。忽値絕澗分。　方に長風の卷くに隨ひ、忽ち絕澗の分つに値ふ、
我本山(二二)中人。(二三)習見匪獨聞。　我は本山中の人、習見は獨聞にあらず、
偶從二三子。來訪張隱君。　偶ま二三子に從ひ、來り訪ふ張隱君、
君家亦何有。物象移(二四)朝曛。　君が家亦何か有る、物象朝曛移る、
把酒看飛燼。空庭落(二五)繽紛。　酒を把つて飛燼を看る、空庭繽紛落つ、
行觀農事起。(二六)畦壠如纈紋。　行くゆく觀る農事の起るを、畦壠纈紋の如し、
細雨發春穎。嚴霜倒(二七)秋蕡。　細雨春穎發す、嚴霜秋蕡倒る、
始知一(二八)炬力。洗盡狐兎羣。　始めて知る一炬の力、洗ひ盡くす狐兎の羣、

【字解】【一】丁女　王注次公曰、左傳昭公九年夏四月、陳災、鄭裨竈曰、五年陳將復封、封五十二年而遂亡、子產問其故、對曰、陳水屬也、火水妃也、而楚所相也、注云、火畏水、故爲之妃、韓退之、陸渾山火詩に、女丁婦壬傳世婚、壹肯在丁爲女、而歸壬則爲婦也、【二】火耘　「史記平準書」に、江南火耕水耨と、【三】隕霜　春秋經僖公三十三年、隕霜不殺草と、【四】坏戶　王注厚曰、季秋隕霜殺草、王者順天行誅、蟄蟲坏戶、以避殺氣、始聽揆萊と、坏と培とは同じ、戶を塗ること、「月令」に、是月也草木黃落、乃伐薪爲炭と、【五】束縕　「漢書蒯通傳」に、里婦夜亡肉、姑逐之、里母束縕、請火於亡肉家曰、昨夜犬得肉相殺、請火治之、亡肉家遽追呼其婦、注、縕亂麻也と、【六】敲石　劉禹錫の詩、木從敲石光、遂致烘火熱と、柳子厚の詩、夜發敲石火と、【七】氤氳　杜甫の詩、佳氣日氤氳と、【八】甘泉　宮名、「關輔記」に甘泉宮、在今池陽縣西、去長安三百里と、【九】楚寨　左傳襄公二十七年、伯夙謂趙孟曰、楚氛甚惡と、【一〇】癡聾　癡鈍なる貌、【一一】蜩燕　蜩はセミ蟬、蟬と燕は秋を過ぐれば則ち一は去り、一は蛻化する性である、【一二】夔羵　「國語」に、木石之怪曰夔罔兩、水之怪曰龍罔象、土之怪曰羵羊と、【一三】幽桂　韓退之の

詩、春雨星攢尋蟳火、注曰、餘杭風俗、寒食雨後、家家持燭尋蟳と、蟳は異名な無腸公子と言ふ、「カニ」である、【一五】 燎皴 歐陽修の詩、燒蒼苔煙埃、燎壁皴照燭と、【一六】 火牛 「史記田單傳」に、齊田單、守即墨、收城中、得千餘牛、爲絳繒衣、畫以五彩龍文、東兵刃於其角、而灌脂束葦於尾、燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士五千人、隨其後、牛尾熱、怒而奔燕軍、燕軍夜大驚、牛尾炬火、光明炫燿、燕軍視之、皆龍文、所觸盡死と、【一七】 燧象 左傳定公四年、吳伐楚、昭王使鍼尹固、執燧象、以奔吳師と、梁元帝の詩、逢燧階火度、燧象帶烽然と、「論語」に鑽燧改火とありて、燧は石と鐵と打ち合せ、又は錐もみをして火を發する其の器具を言ふ、象尾に係れば、之を燧象と言ふ、【一八】 井陘 「漢書韓信傳」に、信擊趙、未至井陘口三十里止舍、夜半傳發、選輕騎二千人、人人持一赤幟、從間道萆山而望趙軍、戒曰、趙見我走、必空壁逐我、若疾入、拔趙幟、立漢幟、趙軍還歸壁、壁皆漢赤幟、大驚、遂亂遁走と、【一九】 朱幘 「毛詩碩人注」に朱幘以朱纏鑣扇汗也と、幘とは鑣「クツメミ」の飾を言ふ、【二〇】 諸姨 「舊唐書楊貴妃傳」に、姊三人、皆有才貌、玄宗、竝封國夫人之號、長曰大姨、封韓國、三姨封虢國、八姨封秦國、毎年十月、幸華淸宮、國忠姊妹、五家扈從、毎家爲一隊、著一色衣、五家合隊、照映如百花之煥發と、【二一】 長風 「宋玉高唐賦」に、長風至而波起兮と、水上又は大原を吹く風を長風と曰ふ、【二二】 山中人 白樂天の詩、我本山中人、誤爲時網牽と、【二三】 習見 「郭璞山海經序」に、夫翫所習見、而奇所希聞、此人情之常蔽也と、【二四】 移朝曛 沈約の詩、山中咸可悅、賞逐四時移と、【二五】 繽紛 楚辭に佩繽紛其繁飾兮と、【二六】 畦壠 畦は田圃、壠は田中の高處を曰ふ、【二七】 秋蕢 詩に有蕢其實と、草木の實多きを曰ふ、【二八】 一炬 「杜牧阿房宮賦」に、楚人一炬とある、

【題義】 雲龍山に火の祭を觀て、多人と作り、韻を分つて雲の字を得たのである、

【詩意】 丁女はヒノトの女であるが實は水妃である、今や寒山便ち火転する秋である、霜露が隕つれば千草皆殺さるるを知る、戸を坯つて以て初焚を聽く、亂麻を束ねて火を點して方に熠燿と光が散す、石を敲けば其の氣が俄かに氤氳と起る、火が一點落ちたる狀は甘泉宮に揭げる烽と思ふ、火燄の横ふ狀は楚塞の氛たるかと疑ふ、竄せる蛇は穴に赴くを忘れて喬木に上る、潛せる蛟は又浮雲を躡むの狀を爲す、驚飛せるの傷雁は地に墮ち、狂走せる癡麏は其の所に迷ふ、谷に蟄したる蜩も燕も共に起ち、山妖たる夔魖は其の身を竄し、野竹は哀聲を發して爆し、幽桂も亦寃芬を翻飄する、悲を言へば秋の照蟖に同じく、快を言へば夏の燎蚊の若きである、其の火勢は火牛が燕壘に入るを思ふ、其の燧象は吳軍を走らすことを想ふ、又崩騰せるは井陘の口である、萬馬が皆朱幘して美にして且壯である、又人事より見れば搖曳せる驪山の陰に、諸姨が紅裙を爛として翻す若きである、方に長風の火勢を卷きさるに隨ふ、忽ち凋の極絕せる所に値うて分る、思ふに我は本山中の人である、習見するも我聞ではない、偶ま二三子に從つて、來りて訪ふ張隱君を、張君の家は何を有するものである、萬物萬象渾て朝曛に移る、酒を把つて飲み乍ら飛燼を看る、空庭に飛燼が繽紛として落つ、今より先きは農事の起るを觀、惡草已に燒き去つて畦壠は纈紋の如くである、細雨が來れば春穎を發するも、嚴霜は秋蕢も倒し去る、始めて知る一炬の力、狐兎の羣棲を燒き盡すことを、

【餘論】 紀曉嵐曰く、力摹昌黎、居然似之、我本山中人以下、忽又平易、未免首鼠兩端、不成體格と、余謂ふ我邦京都の大文字山一年一度此の神事ありと聞く、京洛の詩人誰か坡公が此の如き雄篇を屬するものぞや、

## 和田國博喜雪

田國博が雪を喜ぶに和す

（一） 疇昔月如晝。晩來雲暗天。 疇昔月晝の如く、晩來雲天に暗し、

(二)玉花飛半夜。(三)翠浪舞明年。 玉花半夜に飛び、翠浪明年に舞ふ、
(四)螟螣無遺種。(五)流亡稍占田。 螟螣遺種無く、流亡稍や田を占む、
歲豐君不(六)樂。(七)鐘磬幾時編。 歲豐君樂しまざらんや、鐘磬幾時か編する、
【自注】田有服不樂。

【字解】【一】疇昔 「禮記檀弓」に、余疇昔之夜と、「左傳」に、疇昔之羊、子爲政と、前日又は昨夜と普通に解釋する、疇は元來麻田を謂ふ、麥の義あるを以て、前日と解するのである、【二】玉花 雪をいふ、【三】翠浪 麥、雪が盛んなれば麥必ず熟す、【四】螟螣 「毛詩」に、去其螟螣、及其蟊賊と、螟と螣とを二蟲に解することもある、今は螟螣なる一箇の蟲、俗に「イナムシ」苗心を食ふ害蟲である、【五】流亡 流人亡客と成語する、「漢宣帝紀」に、流民自占八萬餘口と、【六】不樂 公の自注に、田有服不樂と、服は服役ならんと思ふ、【七】鐘磬 樂に編鐘と編磬とがある、編鐘は十六鐘と同じく一簴に懸け、分つて兩層と爲し、十二正律と四倍律とに應ずる、其の鐘大小皆同じ、外形は橢圓、下口は平、高さ約七寸五分、編磬は小磬十六枚を同じく一簴に懸ける、長圓の形皆同じ、厚薄は則ち損益ある、以て十二律と四倍律とに應ずる、編鐘と同じ、

【題義】田國博字は叔通、國士博士と爲り、徐州の通判と爲る、此の人の雪の詩に和したるもの、

【詩意】昨夜は月が晝の如く明かであつたが、今日の晩來より雲が天に暗澹と湧く、果せるかな玉花が半夜に飛び、翠浪は明年を賺舞するであらう、田の害蟲である螟螣は雪の爲め繁殖することが出來ない、亡命の流人も稍や田を占むることが出來る、此の如き歲豐君樂しまざるときは、編鐘編磬を幾時か爲さるるや、

【餘論】坡公の詩としては平平凡凡のものである、且題目に喜雪とあり、詩中に不樂とあり、如何にも矛盾する如くに思はる、或は不樂を「ガクセズンバ」と訓むも、是でも落著せぬやうである、此等の事は後賢の叱正を乞はざるを得ない、

## 祈雪霧豬泉。出城馬上作。贈舒堯文

雪を霧豬泉に祈る、城を出でて馬上の作、舒堯文に贈る

三年走吳越。踏徧千重山。 三年吳越に走る、踏み徧し千重の山、
朝隨白雲去。暮與棲鴉還。 朝に白雲に隨つて去り、暮に棲鴉と還る、
翩如得(一)木狖。(二)飛步誰能攀。 翩つて木を得たる狖の如く、飛步誰か能く攀ぢん、
一爲(三)符竹累。坐老(四)敲榜間。 一たび符竹の累と爲り、坐して老ゆ敲榜の間、
此行亦何事。聊散腰脚頑。 此の行亦何事ぞ、聊か腰脚の頑を散ず、
浩蕩城西南。亂山如(五)玦環。 浩蕩城の西南、亂山玦環の如し、
山下野人家。桑柘雜榛(六)菅。 山下野人の家、桑柘榛菅に雜はる、
歲晏風日暖。(七)人牛相對閒。 歲晏風日暖かに、人牛相對して閒なり、
薄雪不蓋土。麥苗稀可刪。 薄雪土を蓋はず、麥苗稀に刪る可し、

願君發二豪句一。嘲二詠破天慳一。（八）　願はくは君豪句を發せよ、嘲詠天慳を破らん、

【字解】〔一〕得木狖　黒猿を狖と曰ふ、〔二〕飛歩　前に辨ぜり、〔三〕符竹　竹符の假用、「唐書車服志」に、高祖入二長安一、罷二隋竹使符一、頒二銀莵符一と、〔四〕敲榜　「漢項籍傳贊」に、執二敲朴一、以鞭二笞天下一と、「漢東方朔傳」に、郭舍人曰、願令二朔復射一、朔中レ之、臣榜百、顏師古曰、榜擊也と、韓愈の詩、何況親二犴獄一、敲榜發二姦偸一と、榜又は搒に作る、〔五〕玦環　韓退之の詩、青玉刻佩聯二玦環一と、半圓形の佩玉を玦環と曰ふ、〔六〕棒菅　棒は「ハシバミ」、菅は茅の屬「スゲ」である、〔七〕人牛　淸居和尙、牧牛詩第十二、人牛俱亡と、〔八〕慳　慳吝、慳貪、「法華經」に衆生垢重、慳貪嫉妬とあり、ムサボリヲシムのである、

【題義】雪を大觀山の霧豬泉に於て祈る爲めに城を出で、其の中途馬上の作を舒堯文に贈りしもの、別に祝文がある、嗟嗟我民、何辜二於天一、不レ水則旱、於レ今二年、天未レ悔レ禍、百日不レ雨、雪不レ斂レ塵、麥不レ蓋レ土、天子命レ我、禱二於山川一、側聞此山、神龍之淵と、

【詩意】三年の間吳と越との路を走り、千重の山を踏徧する、朝には白雲に隨つて去き、暮には棲鴉と與に還る、翩として輕きこと木を得たる狖と同樣、飛歩する狀は誰も我に攀づることは出來ない、それが一たび竹符を持する身の累と爲つて自由が束縛せられ、坐して敲榜の間に老いんとするに至る、今の此の行は亦何事である、聊か腰脚の頑なるを散ずるを得た、浩蕩として心は暢ぶ城の西南、去つて看れば亂山は玦環の如くである、山下を瞰れば皆野人の家にて、桑と柘と榛と菅とが雜植する、歲は早や晏に逼つて風日暖かなれば、人と牛と相對して閒なるを認む、薄雪は土を蓋ふまで多く雨らない、麥苗も稀に刪りとるべし、願はくは君豪句を發し玉へ、而して嘲詠して天公の慳吝なるを破り玉へ、

【餘論】此の篇題目に祈雪とある、祈るに於ては誠心でなければならぬ、然るに此の詩は一向に誠心が表はれて居ない、半ば滑稽に類する、果して何事を祈るのである、紀曉嵐曰く祈レ雪不レ應レ如二此說一、此與レ同二二令祈雨詩一、同一語病、只因二說得豪快一、遂忘レ顧二立言之體一と、此の紀評には贊成せざるを得ない、坡公は文に於ける、詩に於ける、動もすれば、立言の體を失するものが往往ある、公が一種の惡癖であると思ふ、

次二韻舒堯文祈一レ雪霧豬泉一　舒堯文が雪を霧豬泉に祈るに次韻す

長笑蛇醫（一）一寸腹。　長く笑ふ蛇醫が一寸の腹、
銜レ冰（二）吐レ雹何時足。　冰を銜み雹を吐き何れの時か足る、
蒼鵝（三）無レ罪亦可レ憐。　蒼鵝罪無し亦憐む可し、
斬レ頸橫レ盤不二敢哭一。　頸を斬られ盤に橫はるも敢て哭せず、
豈知泉下有二豬龍一。（四）　豈知らんや泉下豬龍あり、
臥枕雷車（五）踏二陰軸一。（六）　臥枕雷車陰軸を踏む、
（七）前年太守爲レ旱請。　前年太守旱の爲めに請ふ、

【字解】〔一〕蛇醫　前に辨ぜるも更に記せば、「酉陽雜俎」に、王彥威、在二汴州一二年、夏旱、時賓王傳季玘、寓レ汴、因レ宴、王以レ旱爲レ言、季醉曰、欲レ雨甚易、可レ求二蛇醫四頭一、十石甕二枚一、每甕實以レ水、浮二二蛇醫一、以レ木蓋、密二泥之一、分置二於閒處一、甕前後設レ席、燒レ香、選二小兒十歲以下十餘一、令下執二小青竹一、晝夜更擊中其甕上、不レ得二少輟一、王如レ言試レ之、一

雨點隨人如撒菽。

太守歸國龍歸泉。【自注】傳飲之曾禱此泉得雨。

至今人詠淇園綠。

我今又復罹此旱。

凜凜疲民在溝瀆。

却尋舊跡叩神泉。

坐客仍攜王子淵。【自注】飲之時客惟舒在矣。

看草中和樂職頌。

新聲妙語慰華顚。

曉來泉上東風急。

須上冰珠老蛟泣。

怪詞欲逼龍飛起。

雨點人に隨ひ菽を撒するが如し、

太守は國に歸り龍は泉に歸る、

今に至りて人は詠ず淇園の綠なるを、

我今又た復た此の旱に罹る、

凜凜疲民溝瀆に在り、

却つて舊跡を尋ねて神泉を叩く、

坐客仍ほ攜ふ王子淵、

看草中和職頌を樂み、

新聲妙語華顚を慰す、

曉來泉上東風急なり、

須らく冰珠に上りて老蛟泣くべし、

怪詞逼らんと欲して龍飛び起つ、

險韻不量吾所及。

行看積雪厚埋牛。

誰與春工掀百蟄。

此時還復借君詩。

餘力汰輈仍貫笠。

揮毫落紙勿言疲。

驚龍再起震失匙。

險韻量らず吾が及ぶ所、

行くゆく看る積雪の厚く牛を埋むるを、

誰と與に春工百蟄を掀げん、

此の時還た復た君が詩を借る、

餘力輈を汰し仍ほ笠を貫す、

毫を揮ひ紙に落し疲を言ふこと勿れ、

驚龍再起して震つて匙を失せん、

日兩夜、雨大注と、【二】銜冰　「夷堅乙志」に、劉居中、臨嵩山頂、有大蜥蜴數百、皆長三四尺、人以食就手飼之、拊摩其體、滑膩如脂、一日衆繞水瓮邊、各就取水、纔入口、即吐出、已圓結似彈丸、積之於側、俄頃間、纍纍滿地、忽震雷一聲起、彈丸皆失去、明日人來言、昨午雨雹大作、乃知蜥蜴所爲者此也と、【三】無罪　王註厚曰、祈雨法刑白鵝と、「東坡志林」に云く、鵝能警盜、亦能却蛇、且又有祈雨之厄、悲夫と、鵝の血を盤に盛り以て雨を祈る、【四】豬龍　宋孫光憲の「北夢瑣言」に、邛州有湫、有牝豕出入、號豬龍湫、唐天復中旱、守宰祈之、至誠有雨と、【五】雷車　唐段成式の「酉陽雜俎」に、柳公權說、元和末、止建州山寺、夜半覺、門外喧鬧、因潛於窗中觀之、見數人運斤、造雷車如圖畫者、久之一聲氣、忽斗晴、其人兩目昏昏焉と、【六】陰軸　張華の「博物志」に、地下四柱、三千六百軸、犬牙相舉と、【七】前年　公の自注に、傳飲之、曾禱此泉得雨と、【八】淇園綠　「毛詩」に、瞻彼淇澳、綠竹猗猗と、詩は武公の德を美め、今は太守の德を讃す、【九】王子淵　公自注に、飲之時、客惟舒在矣と、【一〇】新聲　「史記樂書」衞靈公曰、今者未聞新聲、請奏之と、【一一】華顚　白首を謂ふ、「新序」に、齊宣王曰、士亦華髮墮顚、而後可用耳、【一二】老蛟泣　「博物志」に、鮫人從水中出、曾寄寓人家、積日賣綃、臨去從主人索器、泣而出珠滿盤、以與主人、鮫は蛟と同じ、【一三】險韻　生僻の字を以て韻と爲す、公別に險韻清詩苦鬬新と、此の詩乃ち險韻である、【一四】埋牛　「戰國策」に、魏惠王死、葬有日矣、大雨雪、至於牛目と、【一五】掀　掀舉、「サシアゲル」である、【一六】汰輈　「左傳宣公四年」に、越叔攻楚王、射王汰輈及鼓跗、著於丁寧、又射汰輈、以貫笠轂と、【一七】揮毫　杜子美の詩、揮毫落紙如雲煙と、【一八】失匙　「三國志」曹操と玄德の故事、

【詩意】旱に遇うて長く笑ふことは蛇醫の怪奇を爲す一寸の腹の小なるを、又冰を銜み雹を吐くのことには何れの時にか滿足する、但蒼鵝が何の罪も無きに、頸を斬られて盤に橫はるも敢て哭せざることを憐むのである、豈知らんや泉下に豨龍あることを、臥枕して雷車の陰軸を踏むを見るも怪事であ

る、前年には太守が旱の爲め請雨を爲せしとき、天は其の祈に感せしならん、忽ちに雨點が人に隨つて袪を撒する如きを見る、然るに太守は辭職して歸國し龍も泉下に歸る、今に至りて衆人は猶ほ太守の德を讃稱する、我も今又た復た此の旱に罹ふ、㵝㵝たる疲民は皆溝瀆に在りて苦しむ、却つて舊跡を尋ねて神泉を叩くに至る、坐客としては仍ほ王子淵を攜へて來る、看草中和職頭を樂しむのみでない、新聲妙語は白首の老人を慰むる所以である、曉旦に泉上に至れば東風正に急、須らく冰珠を捧げて老蛟人の泣くものあらん、怪詞は人に逼つて龍も飛び起つであらう、君が作れる詩の險韻は吾が及ぶところでない、必ずや積雪が牛を埋沒するまで雨るを看るであらう、誰か春の天工と百盐を掀擧せしむるぞや、此の時に際して還た復た君が詩を借りて、餘力を以て轍を汰し仍ほ笠を貫かんと思ふ、是の故に君は毫を揮うて紙に落し疲勞を言ひ玉ふな、驚龍も再起して雷も震動し匙を失する人もあるであらう、

【餘論】觀奕道人曰く、多爲二韻脚所一牽、不二甚自如一と、余は一代次韻の詩を作らざるを以て旗幟と爲すのであるから、一向に次韻を重視しない、要するに詩は自然を貴ぶ、次韻は自然に背くもの、坡公として此の理を知らないのではない、時代の風潮を脱する勇氣が無かつたのである、無理に作りし詩、諷詠するものでなく、故事運用の力を見るのみ、

## 宋復古畫瀟湘晚景圖三首

宋復古が畫ける瀟湘晚景の圖　三首

西征憶二南國一。堂上畫二瀟湘一。　西征して南國を憶ふ、堂上瀟湘を畫く、
照レ眼雲山出。浮レ空野水長。　眼を照らして雲山出で、空に浮んで野水長し、
舊游心自省。信レ手筆都忘。　舊游心自から省み、手に信せて筆都て忘る、
會有二衡陽客一。來看意渺茫。　會ま衡陽の客あり、來り看て意渺茫、

【字解】〔一〕西征　晉の潘岳に西征賦がある、征は征討ではなく、西行である、〔二〕瀟湘　宋復古は八景を始めて案出せし人、併し乍ら此の瀟湘の畫は夜雨ではない、單に瀟湘の圖である、〔三〕衡陽　縣の名、三國の世吳の置く所、晉は衡山縣と改む、今日湖南省衡陽道に當る、瀟湘の合流せる處は、湖南零陵縣北である、

【題義】元の夏文彥の「圖畫寶鑑」に曰く、宋廸字は復古、李成を師として山水を學び、運思高妙、又喜んで松を畫き、或は孤松、或は雙松、以て千萬株に至る、山水其の得意なるもの、平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁邨夕照、之を八景と謂ふ、好事の者多く之を傳ふと、今は瀟湘の晚景圖に詩を題したものである、

【詩意】西征して南國の景を憶ひしに、堂上に瀟湘晚景の圖を見ることが出來た、我が眼を照らして雲山の出づるがある、天空に浮んで野水の長きを見る、我は舊游の時を追懷して心自から省し、君は

手に信せて筆と云ふものを都て忘る、會ま衡陽よりの客がありて、來り看て意が渺茫と爲る、

〔二〕

落落君懷抱。山川自屈蟠。　落落たる君が懷抱、山川自から屈蟠、

經營初有適。揮灑不應難。　經營初め適するあり、揮灑應に難かるべからず、

江市人家少。煙郵古木攢。　江市人家少なく、煙郵古木攢まる、

知君有幽意。細細爲尋看。　知んぬ君が幽意あるを、細細爲に尋看す、

【字解】〔一〕落落　「後漢耿弇傳」に、帝謂弇曰、將軍前在南陽、建此大策、常以爲落落難合、有志者、事竟成也と、〔二〕揮灑　卽ち揮毫と同じ、〔三〕經營　南齊の謝赫の「古畫品錄」に、畫有六法、五曰經營位置、杜子美の詩、意匠慘澹經營中と、

【詩意】落落として人と俯仰しないのが君の懷抱である、其の懷抱を發揮するには山川の自から屈蟠せるを見るが可い、經營慘澹の結果初めて適ふ、揮灑するに臨んでは樂樂と爲す、江市の邊は人家良に少なく、煙郵の處は古木攢まりてある、知る君には別に幽意のあるを、細細に尋看して其の眞趣を認むることが出來る、

〔三〕

咫尺殊非少。陰晴自不齊。　咫尺殊に少にあらず、陰晴自から齊しからず、

徑蟠趨後崦。水會赴前溪。　徑蟠後崦に趨き、水會前溪に赴く、

自說非人意。曾經入馬蹄。　自說人意にあらず、曾經馬蹄に入る、

他年宦游處。應指劍山西。　他年宦游の處、應に劍山の西を指すべし、

【字解】〔一〕陰晴　杜牧之の「阿房宮賦」に、一宮之間、而氣候不齊と、

【詩意】咫尺に千里を畫く殊に小なる景ではない、而して陰晴が遠と近とにて齊しくない、徑の蟠屈する所は後崦に趨くからである、水の會する所は前溪に赴くが爲である、實觀して描きしものには人意を借りて描いたのではない、曾經て此の地に馬蹄を入れしことがある、他年官吏として巡遊せし處は、應に劍山の西方に當るのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、題畫作五律已難措手、疊至三首更難措と、又曰く自說句晦と、余は謂ふ第二首、君懷、知君、有適、有幽、小疵ではない、律としては大疵の中に入る、余は坡公として喫茶飯の類と思ふ、

贈狄崇班季子　　狄崇班季子に贈る

狄生臂鷹來。見客不會揖。　狄生鷹を臂にして來る、客を見て會揖せず、

踞牀咤得雋。借筯數禽入。　牀に踞して咤し得て雋、筯を借りて數禽入る、

(五)短後捎豹裘。猶濺猩血濕(六)。　短後捎豹裘、猶は濺ぐ猩血の濕を、

(七)指呼索(八)酒嘗。快作長鯨吸(九)。　指呼酒を索めて嘗め、快は長鯨の吸を作す、

半酣論刀槊(一〇)。怒髮(一一)欲起立。　半酣にして刀槊を論じ、怒髮起立せんと欲す、

北方老獮子(一二)。狂突尙不繫。　北方の老獮子、狂突尙ほ繫はれず、

要須此慓悍(一三)。氣壓邊烽急。　要は此の慓悍を須て、氣は邊烽の急を壓せん、

夜走追(一四)鋒車。生斬活離級(一五)。　夜走りて鋒車を追ひ、生斬す活離級、

持歸獻天王。封侯穩可拾(一六)。　持ち歸りて天王に獻す、封侯穩かに拾ふべし、

何爲走獵師。日使羣(一七)毛泣。　何爲れぞ走獵師、日に羣毛を泣かしむる、

【字解】【一】 臂鷹 「南史張充傳」字延符、少好逸游、父緒、嘗告歸、至始入西郭、逢充獵、右臂鷹、左牽狗、遇緒船至、便放紲脫韝、拜於水次、緒曰、一身兩役、無乃勞乎と、【二】 咤 吒と同じ、叱吒、即ち怒聲を發するのである、【三】 捎 本義として鳥の肥を言ふが、轉じて俊秀などと通用する、【四】 借筯 「漢書張良傳」を閱するに借筯を借箸と記す、臣請借前箸以籌之、張晏曰、求借所食之箸、用指畫也と、【五】 短後 「莊子說劍篇」に、唐人之劍、蓬頭突鬢、垂冠曼胡之纓、短後之衣、瞋目而語難とある、【六】 猩血 「華陽國志」に、猩猩其血、可以染朱罽と、【七】 指呼 李義山の文、堪備指呼と、【八】 索酒嘗 杜子美の詩、指點銀瓶索酒嘗と、【九】 長鯨吸 杜子美の詩、飮如長鯨吸百川と、【一〇】 刀槊 前に辨ぜり、【一一】 怒髮 「史記」に、怒髮上衝冠と、【一二】 老獮子 獮、「纂文」に、屑尾犬也とある、猛惡なる犬を謂ふ、契丹族に譬ふ、【一三】 慓悍 「漢書高帝紀」に、項羽爲人慓悍と、スバヤクアラシである、【一四】 追鋒車 「古今注」に、追鋒車去巾、蓋施通幰、速則乘之と、「晉杜預傳」に、給追鋒車、第二駙馬と、衣を以て車を飾るを巾車と曰ふ、今之を去りて、幰車即ち左右自由に開く車の「スダレ」を施すを曰ふ、【一五】 活離級 「班固東都賦」に、四夷間奏、德廣所及、佅侏兜離、罔不具集と、活離は兜離の誤であらう、兜離は西夷の樂曲の名、【一六】 可拾 「漢書夏侯勝傳」に、毎講授、常謂諸生曰、士病不明經術、經術苟明、其取青紫、如俛拾地芥耳と、【一七】 羣毛泣 「班固西都賦」に、風毛雨血、灑野蔽天と、

【題義】 狄姓の人が崇班の官を奉ずる、公は其の季子の爲めに此詩を贈る、崇班は琴殿に供奉する官である、

【詩意】 狄生は狩獵に出る爲め鷹を臂に載せて來る、中途に客を見るも會釋も揖讓もしない、身は牀に踞し乍ら叱咤する狀は雋である、他人の箸を借りて以て捕獲せる鳥を數ふ、其の服裝は極めて短き豹皮の裘を著ける、其の衣服には鳥の血が濺ぎて猩猩の色の如くである、部下を指呼して酒を索めて嘗め、快飮の狀は長鯨が百川を吸ふ樣である、酒が丁度半酣に及ぶと大に兵法を論じて、頭髮は怒りて起立せんとする、北方の强族たる老獮子は、狂突にして尙未だ捕へられない、要は君が此の慓悍の精氣を須て、彼の邊烽の急なるを厭伏せらるることである、夜中に追鋒車を走らして、北方の强族も器具も手に收むべきである、持ち歸りて天王に獻上して、以て名爵を拾ひ玉へ、然るに何ぞや獵師輩と伍して走り、日日徒らに鳥獸類を泣かしむるや、

【餘論】 此の篇風人の旨は失はざるも、造語妥ならざるものがある、韓昌黎の堂に上るも、杜子美の室には入らない、

## 石炭　　　石炭

彭城舊無石炭、元豐元年十二月、始遣人訪獲於州之西南白土鎭(一)之北、冶鐵作兵、犀利(二)勝常云、

【訓讀】彭城舊と石炭無し、元豐元年十二月、始めて人を遣り、訪うて州の西南白土鎭の北に獲、鐵を冶し、兵を作る、犀利常に勝ると云ふ、

【字解】(一) 白土鎭　「九域志」に、徐州舊縣、有永安白土二鎭と、(二) 犀利　鋭利なるをいふ、

君不見前年雨雪　　君見ずや前年雨雪行人斷え、
行人斷、
城中居民風裂骭、　　城中の居民風骭を裂く、
濕薪半束(一)抱衾裯(二)、　　濕薪半束衾裯を抱く、
日暮敲門無處換、　　日暮門を敲くも換ふる處無し、
豈料山中有遺寶、　　豈料らんや山中遺寶あり、
磊落如毉(三)萬車炭、　　磊落毉の如く萬車の炭、
流膏迸液無人知、　　膏を流し液を迸らすも人の知る無し、
陣陣(四)腥風自吹散、　　陣陣腥風自から吹き散ず、
根苗一發浩無際、　　根苗一發浩として際無し、
萬人鼓舞千人看、　　萬人鼓舞し千人看る、
投泥潑水愈光明、　　投泥潑水愈よ光明、
爍玉(五)流金見精悍、　　爍玉流金精悍を見る、
南山栗林(六)漸可息、　　南山の栗林漸く息ふ可し、
北山頑鑛何勞鍛、　　北山の頑鑛何ぞ鍛を勞せんや、
爲君鑄作百鍊(七)刀、　　君が爲めに鑄て百鍊刀を作り、
要斬長鯨(八)爲萬段(九)、　　長鯨を斬りて萬段と爲さんと要す、

【題義】太古時代の植物が地球の變動を經て、土中に埋み入り、遠く歳月を經て、次第に變化して成るものを石炭と曰ふ、

【詩意】君も見て知つて居られる前年雪が雨りて路に行人斷え、城中の居民は風に骭を裂かるる酷寒である、濕薪半束衾裯を抱くのみ、日暮れて門を敲くも何處も同樣換へる處はない、豈料らんや山中に

【字解】(一) 半束　「詩經」に不流束薪と、(二) 衾裯　詩に抱衾與裯と、「後漢書羊續傳」に、唯有布衾敝裯と、杜甫の詩、城中對米換衾裯と、フスマとネマキである、(三) 如毉　「唐書」に毉美石黑色と、(四) 陣陣　劉禹錫の詩、摩蒙光陣陣と、(五) 爍玉　「楚辭宋玉招魂」に、十日代出、流金爍石と、(六) 栗林　「莊子山水篇」に、遊栗林と、文公曰、栗林蓋木炭也と、(七) 百鍊　「晉書」に、赫連勃勃、造百鍊剛刀、爲龍雀大環、號曰大夏龍雀と、(八) 斬長鯨　李太白の詩、安得倚天劍、跨海斬長鯨と、(九) 萬段　「唐段秀實傳」に、罵朱泚云、狂賊可斬萬段と、

遺寶ありと聞く、磊落として瞖の如きの石炭が萬車に積むほどありと、其の石炭は膏を流し液を迸らすも今日まで何人も知るものがない、其の氣の爲めに陣陣の腥風は自から吹き散じ去る、而かも其の根苗が一たび發するや無際限に多くある、萬人鼓舞して千人は喜び看る、泥に投ずれば水を潑して愈よ光明がある、玉を爍かし金を流して精悍を見る、南山の栗林は今日より漸く息ふべく、北山の頑鑛は今日より強ひて鍛を勞することはいらぬ、君が爲めに鑄て百鍊刀を作り、以て長鯨を斬つて萬段と爲すことが出來る、

【餘論】觀奕道人曰く、微嫌二其剿而不一レ留と、

# 蘇東坡詩集 卷十八

## 古今體詩 四十七首

### 人日獵二城南一。會者十人。以二身輕一鳥過。槍急萬人呼一爲レ韻。得二鳥字一

人日城南に獵す、會する者十人、身輕く一鳥過ぎ、槍急に萬人呼ぶを以て韻と爲す、鳥の字を得たり

兒童笑二使君一。憂慍常悄悄。(一)

兒童使君を笑ふ、憂慍常に悄悄、

誰拈(二)白接䍦。令レ跨(三)金騕褭。

誰か白接䍦を拈して、金騕褭に跨らしむる、

東風吹二(四)濕雪一。手冷怯二清曉一。

東風濕雪を吹き、手冷かに清曉を怯る、

忽發二(五)兩鳴鶬一。相趁飛(六)鷂小。

忽ち兩鳴鶬を發し、相趁ふ飛鷂の小、

放レ弓一長嘯。目送(七)孤鴻矯。

弓を放ちて一長嘯、目送す孤鴻の矯たるを、

吟レ詩忘(八)二鞭轡一。不レ語頭自掉(九)。

詩を吟じて鞭轡を忘る、語らず頭自から掉ふ、

歸來仍脫粟。鹽豉煮芹蓼。
何似雷將軍。兩眼霜鶻皎。
黑頭已爲將。百戰意未了。
馬上倒銀缾。得兎不暇燎。
少年負奇志。蹭蹬百憂繞。
回首英雄人。老死已不少。
青春還一夢。餘年眞過鳥。
莫上呼鷹臺。平生笑劉表。

歸來仍ほ脫粟、鹽豉芹蓼を煮る、
何似ぞや雷將軍の、兩眼霜鶻皎たるに、
黑頭已に將と爲る、百戰意未だ了せず、
馬上銀缾を倒す、兎を得て燎くに暇あらず、
少年奇志を負ふ、蹭蹬として百憂繞る、
首を回らせば英雄の人、老死已に少からず、
青春還た一夢、餘年眞に過鳥、
呼鷹臺に上る莫かれ、平生劉表を笑ふ、

【字解】【一】悄悄 「詩邶風」に憂心悄悄と、【二】白接䍦 「晉書山簡傳」に、襄陽兒童歌曰、時時能騎馬、倒著白接䍦と、男子が頭を覆ふものを䍦と曰ひ、婦人が戴くものを冪と曰ふ、【三】金騕褭 杜甫の詩、御鞍金騕褭と、騕褭は名馬の名、【四】霰雪 「埤雅」に、雲閒俗謂之米雪、今名濟雪、亦曰霰雪と、【五】鳴鏑 「唐韻」に鏑箭卽鳴鏑也と、「漢匈奴傳」に、冒頓廼作鳴鏑、習勒其騎射と、【六】飛蝱 蝱はアブ、人畜を螫み、血を吸ふ飛蟲、【七】孤鴻 「晉書顧愷之傳」に、愷之每重嵇康四言詩、因爲之圖、恒云、手揮五絃易、目送歸鴻難と、【八】忘鞭轡 「嘉話錄」に、賈島初赴京師、一日于馬上得句云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、初欲以敲爲推、練之未定、以手作推敲勢、不覺衝京尹韓退之、卽爲左右擁至、具告其事、退之笑曰、作敲字佳、乃與竝轡哦詩、久之而去と、【九】頭自掉 杜甫の詩、巢父掉頭不肯住と、張祜の詩、逢人說劍三攘臂、對鏡吟詩一掉頭と、【一〇】脫粟 「漢公孫宏傳」に、爲布被脫粟之飯と、【一一】鹽豉 味噌や納豆の類、「世說」に、千里蓴羹、未下鹽豉と、【一二】何似 孰若と同じ、【一三】雷將軍 「唐書」に、令狐潮圍雍邱、雷萬春、立城上、面中六矢而不動、潮疑謂張巡曰、向見雷將軍、乃知足下軍令矣と、【一四】黑頭 「晉書諸葛恢傳」に、王導嘗謂曰、明府當爲黑頭公と、【一五】馬上 杜甫の詩に、馬上誰家白面郞、臨堦下馬坐人牀、不知姓字麤豪甚、指點銀缾索酒嘗と、【一六】蹭蹬 人の勢を失墜するを云ふ、【一七】英雄人 杜甫の詩、至今英雄人、高視見霸王と、【一八】過鳥 杜甫の詩、餘生如過鳥と、【一九】呼鷹臺 三國の時、劉表、荊州に在りて臺を築き、以て呼鷹と名づく、【二〇】笑劉表 劉表、字は景升、民を愛し士を養うて、從容自から保つ、曹操が袁紹と相戰ふや、袁は救を劉に求む、劉之を許して往かんと欲したるに、操は旣に紹を敗る、此の勢を以て操は表を征せんとす、此の時表は疽が背に發して卒したのである、

【題義】正月七日に城南に狩獵して會する者渾て十人、身輕一鳥過、槍急萬人呼を分ちて韻と爲し公は鳥の字を得たのである、

【詩意】兒童は使君（公自身）を笑うて居る、使君は憂慍の狀常に悄悄として居るからである、誰か白接䍦を拈して、我をして金騕褭に跨らしむるや、東風は頻りに霰雪を吹いて、手を冷却せしむるが爲め清曉を怯る、是の時忽ち兩鳴鏑の響が發して、相趁ふ飛蝱の小なるものを、弓を放擲して一たび長嘯して、孤鴻の矯飛する狀を目送する、是に於て詩を吟じて鞭轡を忘れる、人と語を交へず唯頭を自から掉ふのみ、歸來して仍ほ脫粟の飯を喫して、鹽豉を以て芹蓼を煮る、元氣は及ばない雷將軍の、兩眼が霜鶻の如く俊皎なるに、將軍は少壯の年已に將と爲りて、百戰の意は猶ほ未だ了らない、乃ち馬上に於て銀缾の酒を飲み倒し、兎の類は燎いて食ふ暇が無い、然るに多くの人は少年の時奇志を抱負として居るが、事は志と背き蹭蹬として百憂繞るの不幸に遭ふ、首を回らして英雄人を思ふに、

徒らに老いて死する者も少くない、青春の若きを誇るも還た一夢である、我等の餘年も早く過ぎること飛鳥と同じ、此の地に呼鷹臺が有るも上りては不可、臺を築き天下を望みし劉表を平生は笑うて居る、

【餘論】紀曉嵐曰く、淋漓頓挫、收束滿足、借雷將軍對照、作收亦可以佳、然未免近剽近薄、結末如畫家山脚重重、氣脈更加深厚と、余も亦此の評に贊同するものである、

## 將官雷勝、得過字、代作

將官雷勝、過字を得たり、代つて作る

胡騎入雲中(一)、急烽連夜過(二)。
胡騎雲中に入る、急烽連夜過ぐ、

短刀穿鹵陣(三)、濺血貂裘涴(四)(五)。
短刀鹵陣を穿ち、濺血貂裘を涴す、

一來輦轂下(六)、愁悶惟欲臥(七)。
一たび輦轂の下に來りて、愁悶惟臥せんと欲す、

今朝從公獵、稍覺天宇大(八)。
今朝公に從つて獵し、稍や天宇の大なるを覺ゆ、

一雙鐵絲箭(九)、未發手先唾。
一雙の鐵絲箭、未だ發せず手先づ唾す、

射殺雪毛狐、腰間餘一箇(一〇)。
射殺す雪毛の狐、腰間一箇を餘す、

【字解】【一】雲中　一本に岡中に作る、安定高平の地、漢代匈奴の屢ば侵入せし地である、【二】急烽　杜甫の詩、羽書還似急、烽火未全停と、【三】鹵陣　鹵は擄に通ず、【四】濺血　「晉書紀傳」に、血濺御服と、【五】貂裘　黑貂の裘である、【六】輦轂下　天子の居し玉ふの地、「史記」に得待罪輦轂下と、【七】愁悶　悲愁煩悶と成語する、「司馬相如長門賦」に、愁悶悲思と、【八】天宇大　劉禹錫の詩、倚蓋碧落靜、始覺天宇大と、【九】鐵絲箭　杜子美の詩、憶留腰下鐵絲箭、射殺林中雪毛狐と、【一〇】餘一箇　杜子美の詩、峽口驚猿聞一箇と、

【題義】人日會合する十人の内雷勝は軍人なれば詩を作ることが出來ない、分韻過字を得たるを坡公が代作したのである、

【詩意】胡騎雲中に突入する、急烽連夜に過ぎる、短刀を以て鹵陣を穿ち去る、血を濺いで以て貂裘を涴す、一たび來る輦轂の下に、愁悶して唯臥せんことを欲する、今朝公に從つて獵して、稍や天宇の大を覺えたのである、一雙の鐵絲箭は、未だ發せざる前に手先づ唾はく、射殺する雪毛の狐、腰間一箇を餘すのみ、

【餘論】紀曉嵐曰く、疎疎落落、殊有古樸之致、不如此則不似代雷將軍、軍人無事に苦しむの際は、愁悶して臥せんと欲する、然るに公等と共に獵を爲して、天宇の大を覺ゆと云ふの意であらうが、余は紀評の如く此の詩を佳とは思はぬのである、

## 臺頭寺步月得人字

臺頭寺月に步す、人の字を得たり

風吹河漢掃微雲。
風は河漢を吹いて微雲を掃ふ、

步屧(一)中庭月趁人(二)。
中庭に步屧すれば月人を趁ふ、

浥浥(三)爐香(四)初泛夜。
浥浥たる爐香初めて夜に泛び、

【字解】【一】步屧　杜甫の詩、步屧隨春風と、屧は下駄、【二】月趁人　李白の詩、月行却與人相隨と、【三】浥浥　露などの物をウル

(五)離離花影欲レ搖レ春。　離離たる花影春を搖かさんと欲す、
遙知金(六)闕同ニ清景一。　遙かに知る金闕清景を同じうするを、
想見氈(七)車輾ニ暗(八)塵一。　想ひ見る氈車暗塵に輾るを、
回レ首舊游眞是夢。　首を回らせば舊游眞に是れ夢、
一簪ニ華髮一岸(九)綸巾。　一に華髮に簪して綸巾岸つ、

ホス貌、【四】 爐香 江文通の「別賦」に、共ニ金爐之夕香一と、【五】 離離 詩に其實離離、又、彼黍離離と、バラバラに實る貌、「石林詩話」に、詩下ニ雙字一、極難、須レ使ニ五言七言之間、除ニ去五字三字一外、精神興致、全見ニ于兩言一、方爲ニ工妙一、唐李嘉祐、水田飛ニ白鷺一、夏木囀ニ黄鸝一、王摩詰、添ニ漠漠陰陰四字一、如ニ李光弼、將ニ郭子儀軍一、一號ニ令之一、精彩數倍ス、老杜、無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來、江天漠漠鳥飛去、風雨時時龍一吟等、乃爲ニ超絶一、近時蘇子瞻、浥浥爐香初泛レ夜、離離花影欲レ搖レ春、可ニ以追ニ配前作一也と、【六】 金闕 「神異經」に西北荒中、有ニ二金闕一と、【七】 氈車 毛席を敷きたる車、【八】 暗塵 蘇味道の詩、暗塵隨レ馬去、明月逐レ人來と、【九】 岸綸巾 青絲にて製する頭巾を綸巾と曰ふ、岸幘と同じく頭巾をヌギて頭を露はし、禮法を簡略にする狀、岸をソバダツと讀むこと無理なれば、岸綸巾ガンリンキンと讀むも可い、

【題義】 臺頭寺と號する精舍にて月下に步游して人の字を得たのである、

【詩意】 東風は河漢を吹いて微雲を掃ひ散ずる、臺頭寺の中庭に步屧して徘徊すれば月が人を趁ふ如くである、浥浥たる金爐の香氣は堂上初めて夜に泛び、離離たる花影は庭中に春を搖かさんとするかと疑ふ、遙かに想ふ仙境の金闕も此の清景を同じうするであらう、又想ひ見る氈車に乘じて夜游せる紳士は暗塵を輾るであらう、自分は首を回らして舊游を懷へば眞に是れ夢と爲る、故に一度は白髮頭に簪を夾して岸綸巾の狂態を爲す、

【餘論】 紀曉嵐は此の七律を讚嘆して曰く、五六拓得開機不ニ順筆滑下一、此處最忌ニ順筆直寫一、如ニ人腰間無レ力、通身骨節都散緩一と、五六とは遙知想見の十四字を指す、石林居士は三四の二句を採り、觀奕道人は五六の二句を採る、二大家此の如く讚嘆する、又議すべき處はない、唯題に臺頭寺とあるが此の三字無くとも詩は一向に妨げぬ、何の爲めに臺頭寺步レ月と爲したのであるか、

## 臺頭寺送ニ宋希元一

臺頭寺に宋希元を送る

相ニ從傾(一)蓋一只今年。　傾蓋に相從ふ只今年、
送ニ別南(二)臺一便黯(三)然。　別を南臺に送る便ち黯然、
入レ夜更歌金(四)縷曲。　夜に入りて更に歌ふ金縷の曲、
他時莫レ忘角(五)弓篇。　他時忘るる莫かれ角弓の篇、
三年不レ顧東(六)鄰女。　三年顧みず東鄰の女、
【自注】取ニ宋玉一。
(七)二頃方求負郭田。　二頃方に求む負郭の田、
【自注】取ニ季子一。

【字解】 【一】 傾蓋 「家語」に、孔子之レ郯、遭ニ程子於塗一、傾レ蓋而語と、前漢書鄒陽の語に、白頭如レ新、傾蓋如レ故と、車を駐め、車蓋を傾け近づきて語る、其の親しみを表はすのである、【二】 南臺 戯馬臺の異名、徐州の城南に在る、【三】 黯然 別を惜しみ悲しむ貌、江淹の「別賦」に、黯然消魂者、唯別而已矣と、【四】 金縷曲 杜秋娘は金陵の女、年十五にして、李錡の妾と爲る、嘗て錡が爲めに詞を唱へて曰ふ、勸レ君莫

我欲二歸休一君未レ可。　我歸休せんと欲するも君未だ可ならず、
(八)茂先方議斷二龍泉一。　茂先は方に議す龍泉を斷ることを、

レ惜金縷衣、勸レ君須レ惜少年時、花開堪レ折直須レ折、莫レ待レ無レ花空折レ枝と、【五】角弓　角にて飾れる弓、詩小雅に騂騂角弓と、左傳昭公二年、晉韓宣子來聘、公享レ之、季武子、賦二緜之卒章一、韓子賦二角弓一、宴二于季氏一、有二嘉樹一焉、宣子譽レ之、武子曰、宿敢不レ封二殖此樹一、以無レ忘二角弓一と、杜甫の詩、更尋嘉樹傳、不レ忘二角弓詩一と、角弓詩は、兄弟の國は、爭ふなく、和親すべきを歌へる詩である、【六】東鄰女　宋玉が「好色賦」に、天下佳人、莫レ若二楚國一、楚國之麗、莫レ若二臣里一、臣里之美、莫レ若二臣東家之子一、此女登レ牆、闚レ臣三年、至レ今未レ許也と、【七】二頃　前に辨ぜり、【八】茂先　晉張華、字茂先、初牛斗間、常有二紫氣一、華聞豫章人雷煥、妙達二緯象一、乃要レ煥共尋二天文一、因登レ樓仰觀、煥曰、寶劍之精、上徹二於天一耳、問在二何郡一、煥曰在二豫章豐城一、即補レ煥爲二豐城令一、煥到レ縣掘二獄基一、入レ地四丈餘、得二石函一、中有二雙劍一、並刻レ題、一曰二龍泉一、一曰二太阿一、其夕斗牛間、氣不二復見一と、杜甫の詩、徒勞望二牛斗一、無レ計斸二龍泉一と、

【題義】臺頭寺に於て宋希元に送別の詩を作る、

【詩意】君の傾蓋に相從ふこと只今年である、新知ではあるが別れに當りては良に黯然たらざるを得ない、乃ち此の夜は金縷の曲を歌うて陽氣に送り度い、他時必ず忘れてはいかぬ角弓の篇章を、君は輕輕に色なぞを求めないから、三年も東鄰の女を顧みない、が、我は負郭の田を二頃求むる意思がある、我は其の田園に歸休せんと思ふが君はまだ退隱する年ではない、茂先が雷煥と議して龍泉太阿を斸るの事業を爲すべきである、

【餘論】紀曉嵐曰く、五句無レ著、切レ姓已是小樣、再加二無著一、愈成二癥痏一と、余案ずるに此の詩も七律、然るに今年、三年、方求、方議、是が癥痏にて、別に癥痏は無いと、

種レ松。得二徠字一【自注】其四在二懷古堂一。其六在二石經院一。
松を種ゑ、徠字を得【自から注す】其の四は懷古堂に在り、其の六は石經院に在り。

春風吹二楡林一。(一)亂莢飛作レ堆。　春風楡林を吹き、亂莢飛んで堆を作す、
荒園一雨過。(二)戢戢千萬栽。　荒園一雨過ぎ、戢戢として千萬栽、
青松種不レ生。百株望二一(三)枚一。　青松種うるも生せず、百株一枚を望む、
一枚已有レ餘。氣壓千畝槐。　一枚已に餘あり、氣は壓す千畝の槐、
野人易二斗(四)粟一。云自二魯(五)徂徠一。　野人斗粟に易へ、云ふ魯の徂徠よりすと、
魯人不レ知レ貴。萬竈飛二青(六)煤一。　魯人貴きを知らす、萬竈青煤飛ぶ、
東縛同一車。胡(七)爲乎來哉。　東縛す同一車、胡爲乎來るや、
泫然解二其縛一。清泉洗二淨埃一。　泫然として其の縛を解き、清泉浮埃を洗ふ、
枝傷葉尙困。生意未二肯囘一。　枝は傷み葉は尙ほ困し、生意未だ肯て囘らず、
山僧老無レ子。養護如二嬰孩一。　山僧老いて子無し、養護嬰孩の如し、
坐待走二龍蛇一。清陰滿二南臺一。　坐して待つ龍蛇走りて、清陰南臺に滿つるを、
孤根裂二山石一。(八)直幹排二風雷一。　孤根山石を裂き、直幹風雷を排す、

我今百日客。【自注】時去替不百日。　　我今百日客、
養此千歳材。　　此の千歳の材を養ふ、
茯苓無消息。雙鬢日夜摧。　　茯苓消息なし、雙鬢日夜に摧く、
古今一俯仰。作詩寄餘哀。　　古今一俯仰、詩を作りて餘哀を寄す、

【字解】〔一〕楡莢　白樂天の詩、楡莢拋錢柳眼迷と、楡は「ニレ」、寒地に産する喬木、白楡は先づ葉を生じて、後莢を著け、赤楡は先づ莢を著け、後葉を生ず、莢卽ち「サヤ」の形は錢に似て居る、〔二〕戢戢　韓退之の詩、戢戢已多如束筍と、〔三〕一枚　「說文」に幹曰枚と、〔四〕斗粟　斗は卽ちマス、穀類を以て易ふる、〔五〕魯徂徠　「水經注」に、環水又左入於汶水、又西南流經徂徠山、西山多松柏、詩所謂徂徠之松也、「都山記」に、徂徠山、在梁甫奉高博三縣界、猶有美松と、〔六〕青煤　王注に、兗州出佳墨、多用徂徠山松燒煤と、〔七〕胡爲　李太白の詩、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉と、〔八〕直幹　杜子美の詩、幹排風雨尤力爭、根斷泉源豈天意と、〔九〕茯苓　「淮南子」に、千年之松、下有茯苓、上有兎絲と、「抱朴子」に、松脂入地、千年變爲茯苓と、

【題義】松を種うることを題目として人と共に賦して公は徠の字を得たのである、

【詩意】春風が楡林を吹けば、楡莢が亂れ落ち飛んで堆を作す、其の風後の荒園に一雨過ぎ去れば、此の時戢戢として千萬稚松を栽う、青松種うるも枯死し易く容易に生じ難きも、百株を聚めて一幹を爲すを望む、一幹と爲せば已に餘ありて、其の氣は千畝の槐樹を壓するのである、野人は斗粟を以て松を購ふ代に易へ、云ふ此の松は徂徠山より來るものであると、魯人は此の松の貴きを知らざるが故に、各戶各家に此の松を燒いて以て青煤煙を飛ばす、山を出すに羣稚松を束縛して一車に積み込む、可憐なる狀を以てどうして來るぞや、泫然として其の束縛を解き、清泉を以て其の浮埃を洗ふ、枝は傷れ葉は尙ほ困する姿である、枯れるか生きるか未だ判然しないが、山僧は老いて子無ければ、此の稚松を愛護して嬰孩の如く大切にする、坐して待つ段段成長して龍蛇を走らすの狀と爲るを、而して清陰が南臺に滿るに至るを、孤根が山石を裂くの力、直幹が風雷を排するの氣、我は今僅僅百有餘日の停留客である、が此の稚松を種ゑて千歳の材を養はしむ、茯苓は消息無く、雙鬢は日夜に摧ける、古今を一俯仰して、詩を作りて我が餘哀を寄託する、

【餘論】紀曉嵐曰く、詩中有人、便非空調と、余は坡公同時の孤山法師の咏賣松者の詩を記憶する、莫嫌人不買、人亦愛蒼翠、却是歲寒姿、難種塵埃地、且歸栽澗底、映水成嘉致、他年苟合拱、採取不我棄、天子建明堂、此爲棟梁備、

## 作書寄王晉卿。忽憶前年寒食北城之游。走筆爲此詩

書を作りて王晉卿に寄す、忽ち前年寒食北城の游を憶ふ、筆を走らして此の詩を爲る

北城寒食煙火微。　　北城の寒食煙火微なり、
落花胡蝶作團飛。　　落花胡蝶團を作して飛ぶ、

【字解】〔一〕胡蝶　は蝴蝶と同じ、〔二〕王孫　「劉安の招隱士」に、王孫遊兮不歸、山中兮不可以久

王孫出游樂忘歸。　王孫出游樂んで歸るを忘れ、
門前驄馬紫金鞿。　門前驄馬紫金鞿、
吹笙帳底煙霏霏。　笙を吹いて帳底煙霏霏、
行人舉頭誰敢睎。　行人頭を擧げて誰か敢て睎ん、
扣門狂客君不麾。　門を扣けば狂客君麾かず、
更遣傾城出翠帷。　更に傾城をして翠帷を出で遣む、
書生老眼省見稀。　書生老眼省見稀なり、
畫圖但覺周昉肥。　畫圖但覺ゆ周昉の肥ゆるを、
別來春物已再菲。　別來春物已に再菲、
西望不見紅日圍。　西望すれども見ず紅日の圍を、
何時東山歌采薇。　何れの時か東山采薇を歌ひ、
把盞一聽金縷衣。　盞を把りて一たび聽かん金縷衣を、

留と、謝靈運の詩、清暉能娯人、游子憺忘歸と、【三】驄馬　前に辨ぜり、【四】帳底　「李賀秦宮詞」に、帳底吹笙香霧濃と、【五】敢睎　「廣韻」に睎盼也望也と、背を顧みて望む、【六】狂客　唐賀知章、自號四明狂客、【七】不麾　君自から指揮せざるを曰ふ、【八】傾城　許彥周の「詩話」に、晉卿得罪外謫、後房善歌者、名囀春鶯、爲密縣馬氏所得、可爲晉卿有家妓之證と、【九】老眼　杜甫の詩、皇天無老眼と、【一〇】省見稀　「漢書東方朔傳」に、未得省見と、韓退之の詩、以火來照所見稀と、坡公嘗て雪入春分省見稀と作る、【一一】周昉　唐の周昉字は仲朗、京兆の人、宣州の長史と爲る、善畫、其の士女を畫くに、多く穠麗豐肥の態を爲す、見る所の儘を描くなりと讃する者もある、又畫は精妙なるも、之を肥に失すと譏る者もある、【一二】西望　馮應榴曰く此用長安日近意と、【一三】東山　「詩小雅」に、我徂東山慆慆不歸と、【一四】采薇　「詩天保章」に、采薇采薇、薇亦作止、曰歸曰歸、歲亦莫止と、



【題義】書信を作りて王晉卿に寄せんとして、忽ち前年寒食の日に北城に游びしことを憶ひ出し、筆を走らして此の詩を爲りしものである、王晉卿は能詩善畫の人なるが故に、詩中に畫事を歌うたのである、

【詩意】去年北城に游びし時は寒食の日にて煙火は良に微であつた、其の時は落花と胡蝶と團を作して飛ぶのを看た、王孫は出游すれば必ず樂んで歸るを忘れる、門前にはいつまでも繫ぎ停める驄馬の紫金鞿を、馬の主人公たる王孫は笙を帳底に吹いて香煙は霏霏と飛ぶ、行人頭を擧げて誰か敢て睎むや、偶ま其の門を扣くの狂客あるも君は麾かず、更に傾城を案內せしめる爲めに翠帷を出でしむ、書生は老眼なれば傾城の姿容は省見すること稀であるが、畫圖にて平生認め居る周昉の描ける肥態の美人は是であると、去年此の如き事ありて別來して今年も春物は已に再び芳菲を看る、而かも西望するも紅日の圍は見ることが出來ない、何れの時か東山に徂き采薇の歌を唱へて歸るの美を曰ふや、而して盞を把つて一たび彼の金縷衣の曲を聽くことを得るぞや、

【餘論】紀評に無深意而風華特勝とある、余詩法を以て案ずるに、公の一韻到底詩は韻脚が平平平なる場合、前句は必ず仄仄であるとの見は翁覃溪なその論する所である、公の七古は前前に擧ぐる所多くは其の法を認めることが出來る、此篇でも帳底煙霏霏、但覺周昉肥の如きそれである、が此の十二句の中、其の二句を除く外、韻脚は仄平平もあり、仄仄平もあり、平仄平もあり、一韻の詩は下の

三字必ず平なりとの說は到底信ずることは出來ない、必ずや古詩は有法無法の間に於て其の諧調を見るのみ、讀詩必此詩、定非知詩人と公自から說いて居る、

## 往在東武與人往反作粲字韻詩四首。今黃魯直亦次韻見寄。復和答之

往きに東武に在り、人と往反して粲字韻の詩四首を作る、今黃魯直、亦次韻して寄せらる、復た和して之に答ふ

(一)符堅破荊州。止獲(二)一人半。　符堅荊州を破り、止だ一人半を獲たり、
(三)中郎老不遇。但喜識(四)元嘆。　中郎老いて不遇、但だ喜ぶ元嘆を識るを、
我今獨何幸。文字厭(五)奇玩。　我今獨り何の幸ぞ、文字奇玩を厭ふ、
又得(六)天下才。相從百憂散。　又天下の才を得、相從うて百憂散す、
陰求(七)我輩人。規作林泉伴。　陰かに我輩人を求むるに、規林泉の伴を作す、
寧當待垂老。(八)倉卒收一旦。　寧ろ當に垂老を待つて、倉卒一旦に收むべきや、
不見(九)梁伯鸞。空對(一〇)孟光案。　見ずや梁伯鸞、空しく孟光の案に對す、
(一一)才難不其然。(一二)婦女廁周亂。　才難しと其れ然らずや、婦女周亂に廁る、
世豈無作者。於我如(一三)既盥。　世豈作者無からん、我に於て既盥の如し、
獨喜誦君詩。(一四)咸韶音節緩。　獨り喜ぶ君の詩を誦するを、咸韶音節緩か、
(一五)夜光一已多。矧獲纍纍貫。　夜光一已に多なり、矧んや纍纍の貫を獲るをや、
相思君欲(一六)瘦。不往我眞懦。　相思君瘦せんと欲す、往かざれば我眞に懦なり、
吾儕眷微祿。寒夜把寸炭。　吾儕微祿を眷みて、寒夜寸炭を把る、
何時定相過。徑(一七)就我乎館。　何れの時か定んで相過ぎ、徑ちに我に就いて館せん、
飄然東南去。江水清且暖。　飄然として東南に去る、江水清く且暖、
相與訪(一八)名山。(一九)微言師(二〇)忍粲。　相與に名山を訪ひ、微言忍粲を師とせん、

【字解】【一】符堅　或は苻堅と書く、晉の人、字は永固、又字は文玉、國を建て前秦、元を永興、又甘露、又建元と號せり、【二】一人半　堅が荊州を破り、人が其の收穫を問へば答へて曰く、一人半を得たるのみ、一人は釋道安、半人は習鑿齒である、【三】中郎　後漢の蔡邕、左中郎將と爲る、【四】元嘆　「吳志」に、顧雍字元嘆、蔡伯喈、從朔方還、嘗避怨于吳、雍從學琴書と、【五】奇玩　俗に稱する骨董品の類、「史記呂不韋傳」に、買奇物玩好自奉と、【六】天下才　「國語」に、管子天下之才也と、【七】我輩人　我と同調の者との義、「晉石苞傳」に、許允謂石苞曰、卿是我輩人と、【八】倉卒　李陵答蘇武書、前書倉卒、未盡所懷と、蒼黃、又は蒼惶、皆同じ、アワテルである、【九】梁伯鸞　孟光の夫、【一〇】孟光　伯鸞の妻、【一一】才難　「語」の泰伯第八に、舜有臣五

人一、而天下治、武王曰、予有亂臣十人一、孔子曰、才難、不其然乎、唐虞之際、於レ斯爲レ盛、有婦人一焉、九人而已、三分天下一有其二一、以服事殷一、周之德、其可レ謂至德一也已矣と、【一二】婦女　武王の后、邑姜を曰ふ、【一三】既豐　既灌に作る方が可、「語」に禘自既灌一而往者、吾不レ欲レ觀レ之矣と、祖を祭るに酒を地に灌ぎ、其の香を以て神を降すことを灌と曰ふ、【一四】成韶　黄帝の樂を成と曰ひ、舜帝の樂を韶と曰ふ、【一五】夜光　珠の名、南海に出づると云ふ、【一六】欲瘦　杜甫の詩、思レ君令人瘦一と、【一七】就我手館　「禮記檀弓篇」に、子夏曰、賓客至、無レ所レ館、夫子曰、生於レ我乎館、死於レ我乎殯と、【一八】訪名山　杜甫の詩、余亦游名山一發軔在遠壑一と、【一九】微言　微妙の言辭である、微少の言辭ではない、【二〇】忍粲　東土にて達磨、慧可、僧璨(粲とも書く)、道信、弘忍と法を傳へ、粲は三祖大師と稱し、忍は五祖大師と稱す、忍を上にし、粲を下にしたるは韻法已むを得ない、

【題義】別に記する程度の難解の義はない、

【詩意】前秦の符堅は荊州を破つて、何か利得が有りしやと人が問うたら、止一人半を獲たのを喜ぶと答へた、蔡中郎は老いるまで不遇であつた、不遇であつたが、顧元嘆を識つたのを喜ぶ、符も蔡も共に收穫は人物である、我も今獨り何の幸福である、文字は徒らに奇玩を弄するを厭ふも、又天下の才人を得たるを喜ぶ、相從うて百憂總て散じる、陰かに我輩と同調の人を求めて、規して林泉の伴を作さんことを、明日明日と垂老を待つて後に、倉卒て一旦に收穫せんとすべきではない、見ずや彼の梁伯鸞が聰明でありながら、晩年に到るまで其の賢婦の孟光一人の案に對したるのみではないか、才を得るの難きは孔子も其れ然らずやと述べ玉うたのではないか、才人十人の中一人は婦女も厠へたことにて知れる、今世も作者が無しとは言はぬが、我に於ては既に祭餘の棄物である、獨り喜んで君が詩を諷誦する所以は、君が詩は咸韶皆音節が緩調であるに由る、夜光の珠は一箇にて已に多とする、況んや槃槃として珠玉の文字を貫ぬるに於てをや、君は相思の情深く瘦せんと欲すと、往かざるときは我は眞に儒である、所で吾儕は微祿の爲め眷戀として、寒夜に寸炭を把るの身である、何れの時か約定して相過ぎ、徑ちに我が家を宿館とするや、而して飄然として東南に去らん、東南の江水は淸く且暖である、手を攜へて相與に名山を訪うて、微妙の言辭を忍粲の如き高僧に聞き師とすべきや、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、不見四句、不レ免和韻牽掣之痕一と、題目に次韻とあつて、和韻とはない、和韻なれば、牽掣せられない、次韻なるが故に牽掣せらるるのである、而も此の四句を除き去らば、中間の脈が斷絶する、次韻の自然を害すること東坡先生の大才と雖も、如何ともすることが出來ない、況んや公より以下の者に於てをや、

## 雪齋　【自注】杭僧法言。作雪山於齋中一。

雪齋　【自ら注す】杭僧法言、雪山を齋中に作る。

君不レ見峨眉山西　君見ずや峨眉山西雪千里、
雪千里。
北望成都如井底。　成都を北望すれば井底の如し、
春風百日吹不レ消。　春風百日吹けども消せず、
五月行人如凍蟻。　五月行人凍蟻の如し、

【字解】【一】峨眉山　峨嵋とも書く、四川省峨眉縣の西南に在る、兩山相對して峨眉の如きを以て名く、八十四盤、石龕百十二、大洞十二、小洞二十八、奇景類なしと云ふ、【二】北望成都　今日の地理に據れば峨眉は建昌道に屬し、成都は西川

紛紛市人爭奪中。　紛紛市人爭奪の中、
誰信言公似贊公。　誰か信ずる言公が贊公に似たるを、
人間熱惱無處洗。　人間の熱惱洗ふに處なし、
故向西齋作雪峰。　故に西齋に向つて雪峰を作る、
我夢扁舟入吳越。　我扁舟を夢みて吳越に入る、
長廊靜院燈如月。　長廊靜院燈月の如し、
開門不見人與牛。　門を開いて人と牛とを見ず、

【自注】言有詩見寄。云林下閑看水牯牛。

惟見空庭滿山雪。　惟見る空庭滿山の雪、

【題義】杭州法惠院の僧言公が居室の東軒に於て、水や石や樹なぞを集めて山形を作り、之に粉末を飛灑して以て雪中の景を作り、雪齋と號したるを坡公が詩を題せるものである、

【詩意】君見ずや峨眉山の西は千里雪皚皚である、北方の成都府を遙望すれば宛かも井底の如くである、春風が百日吹き續くも雪が消滅することは無い、五月の盛夏にも行人は冬の凍蟻の如くである、紛紛として市人は名を爭ひ利を奪ふ中、誰か信ずるや言公が贊公に似たるの淸僧であることを、人間の熱惱は洗ふに處は無い、是の故に西齋に向つて雪峰を作りて示されたることと思ふ、我は扁舟に乘じて吳越の間に入るを夢む、長き廊や靜かなる院は燈が月の如く白い、乃ち門を開きて見れば人と牛とを全く見ずして、唯見る空庭には滿山の雪が吹き散じて居るを、

【餘論】紀評に曰く、起結俱可、中四句少味亦少力と、果して力少なく、味も亦少なきや、仔細に論究すべきである、

遺に闘し、千里相隔つ、【三】爭奪　杜子美、贈閬邱師兄詩、漠漠世界黑、驅驅爭奪繁と、【四】贊公　杜子美の詩、贊公釋門老、學佛以治性と、贊公は大雲寺主である、【五】人間熱惱　「華嚴經」に、以白旃檀塗身、能除一切熱惱、而得淸涼也と、白香山の詩、旣無白旃檀、何以除熱惱と、【六】靜院　張祜の詩、梨花靜院無人見と、【七】不見　「禪語」に憔悴人牛俱不見と、

## 以雙刀遺子由。子由有詩。次其韻

雙刀を以て子由に遺る、子由、詩あり、其の韻に次す

寶刀匣不見。但見龍雀環。　寶刀匣にして見ず、但龍雀の環を見る、
何曾斬蛟蛇。亦未切琅玕。　何ぞ曾て蛟蛇を斬らん、亦未だ琅玕を切らず、
胡爲穿窬輩。見之要領寒。　胡爲れぞ穿窬の輩、之を見て要領寒き、
吾刀不汝問。有愧在其肝。　吾刀汝問はざれ、愧あり其の肝に在り、
念此力自藏。包之虎皮斑。　此を念うて力自から藏す、之を包む虎皮斑、
湛然如古井。終歲不復瀾。　湛然古井の如し、終歲復瀾たたず、
不憂無所用。憂在用者難。　憂へず用ふる所無きを、憂は用者の難きに在り、

佩之非其人。匣中自長歎。　之を佩ぶ其の人にあらず、匣中自から長歎す、

我老衆所易。屢遭非意干。　我老いて衆の易る所、屢ば遭ふ非意の干すに、

惟有王元通。堦庭秀芝蘭。　惟王元通あり、堦庭芝蘭秀づ、

知子後必大。故擇刀所便。　知る子が後必ず大なるを、故に刀を擇んで便とする所、

屠狗非不用。一歲六七刓。　屠狗用ひざるにあらず、一歲に六七刓、

欲試百鍊剛。要須更泥蟠。　百鍊剛を試みんと欲す、要らず須らく更に泥蟠、

作詩銘其背。以待知者看。　詩を作りて其の背に銘す、以て知者を待つて看ん、

【字解】【一】龍雀環　古代名劍の名、【二】斬蛟蛇　「漢高祖紀」に、拔劍斬蛇、分爲兩斷と、【三】琅玕　玉に似て居る石、【四】穿窬　「論語陽貨篇」に、子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與と、コソコソ泥棒を曰ふ、【五】要領　要は腰、コシ、領は頸、クビである、「漢張騫傳」に、竟不能得月氏要領と、【六】虎皮　「禮記」に、武王倒載干戈、包之以虎皮と、【七】湛然　水のたたへたる貌、又靜かなる貌、白樂天の詩、湛然玉匣中、秋水澄不流と、【八】非其人　「晉書」に、呂虔有佩刀、工相之、以爲必登三公、可服此刀、虔謂王祥曰、苟非其人、刀或爲害、卿有公輔之量、故以相與と、【九】所易　韓退之の詩、法曹貧賤衆所易と、輕易侮蔑である、【一〇】非意干　「晉衞玠傳」に、嘗謂、人有不及、可以情恕、非意相干、可以理遣、故終身不見喜慍之容と、干は干犯である、【一一】王元通　晉の王覽字は元通、【一二】後必大　元通の父を祥と曰ふ、死に臨み、刀を以て覽に授けて曰ふ、汝後必す興さん、此の刀に稱ふに足ると、「左傳」に、畢萬之後必大と、【一三】屠狗　「樊噲傳」に、沛人也、以屠狗爲事と、【一四】六七刓　刓は刓削、ケヅル又キルである、【一五】百鍊　魏武帝論刀に、所謂百鍊利器、以辟不祥と、【一六】泥蟠　「班固答賓戯」に、泥蟠而天飛者、應龍之神也と、泥中に蟠かまるのである、【一七】銘其背　「家語」に、孔子觀周、入后稷廟、右階之前、有金人焉、三緘其口、而銘其背と、

【題義】二本の刀を子由に遺りしに子由が詩を作る、其の韻に次したものである、

【詩意】寶刀を收むる匣は見ざるも、但中の寶刀卽ち龍雀環を見る、此の寶刀は曾て蛟蛇を斬りしことは無い、亦琅玕をも切つたことは無い、が胡爲れぞ穿窬の輩は、之を見れば直ちに腰も領も寒き感を爲すであらう、吾が寶刀は何者を斬ると汝は問ふ必要はない、愧有る輩は自分の肝に在る、此の事を念うて力自から之を藏して居つたのである、之を包むに虎皮斑を以てしたのである、寶刀たるや湛然として古井の水の如く、終歲瀾だつことは無い、用ふる所無きを憂ふるに及ばない、憂ふることは用者を擇ぶの難きに在る、之を佩ぶる人が其の人にあらざれば、寶刀は匣中に於て長歎するであらう、我は老いて衆人の爲め輕侮せらる、屢ば意にもあらざるの干犯に遭ふ、佩びて以て刀の爲め喜ばれたる者は王元通である、王家の堦庭は芝蘭が秀出して、與へる者は與へられる者の大人物と爲るを信じて居る、故に擇び亦人を擇ぶ、此の寶刀たるや極めて小用の屠狗にも用ひないのではない、僅僅一歲の中六七刓である、百鍊剛雄を試みんと欲する者は、必らず泥中に蟠るの雌伏が大切である、詩を作りて以て寶刀の背に銘記する、以て後來の知者を待つて看せしめよ、

【餘論】紀曉嵐曰く、純是寓言、吾刀二句深警、唯肝字微嫌趁韻、少陵義鶻行、用激怒壯士肝、注家以肝主怒解之、已屬附會、此以愧屬肝、更無意義可說と、子由の詩、凜然愁肺肝は意義

あるも、愧肝は紀評の如く、全く何の意義も無い、愧心の語と同樣に見ることは出來ない、次韻の大雅に背くことは是を以て知るべきである、

## 遊桓山會者十人以春水滿四澤夏雲多奇峰爲韻得澤字

桓山に遊ぶ、會する者十人、春水四澤に滿つ、夏雲奇峰多しを以て韻と爲す、澤の字を得たり

東郊欲尋春。未見鶯花迹。　東郊に春を尋ねんと欲するも、未だ鶯花の迹を見ず、

春風在流水。鳧雁先拍拍。(一)　春風は流水に在り、鳧雁先づ拍拍、

孤帆信溶漾。(二)弄此半篙碧。　孤帆は溶漾に信し、此の半篙の碧を弄す、

艤(三)舟桓山下。長嘯理輕策。(四)　舟を桓山の下に艤し、長嘯して輕策を理す、

彈琴石室中。幽響淸礫礫。(五)　琴を石室の中に彈ずれば、幽響淸うして礫礫、

弔彼泉下人。野火失枯腊。(六)　弔ふ彼の泉下の人、野火枯腊を失す、

悟此人間世。何者爲眞宅。　悟る此の人間の世、何者か眞宅と爲す、

暮回百步洪。散(七)坐洪上石。　暮に回る百步洪、散坐す洪上の石、

愧我非王襃。(八)子淵肯見客。　愧づ我が王襃にあらざるを、子淵は肯て客とせらる、

【自注】謂王氏兄弟也。

臨流吹洞簫。(九)水月照連璧。(一〇)　流に臨んで洞簫を吹く、水月連璧を照らす、

此歡眞不朽。回首歲月隔。(一一)　此の歡眞に不朽、首を回らせば歲月隔たるも、

想像斜川(一二)游。作詩寄彭澤。(一三)　想像す斜川の游、詩を作りて彭澤に寄す、

【字解】〔一〕拍拍　韓退之の詩、靑泥掩兩翅、拍拍不得離と、バタバタと打つ貌、〔二〕溶漾　舟の水中にタダヨフのである、〔三〕艤舟　舟を整へて前岸に向ふを曰ふ、王翰の詩、艤舟一長嘯、四面來淸風と、〔四〕輕策　白樂天の詩、扁舟厭泊煙波上、輕策閑尋浦嶼間と、〔五〕礫礫　王注云、先生游桓山記云、登桓山、入石室、使道士戴日祥、鼓雷氏之琴、今詩蓋紀實也と、子由の詩、爆竹聲礫礫と、公の詩、春山礫礫鳴春禽、物の聲を形容する、〔六〕枯腊　「前漢揚王孫傳」に、支體絡束、口含玉石、欲化不得、鬱爲枯腊、千載之後、棺槨朽腐、乃得歸土、就其眞宅と、〔七〕散坐　十人が各〻が欲するまま散亂閒坐する、〔八〕王襃　前に辨ぜり、〔九〕洞簫　洞は通で、底の無き簫、尺八の類を曰ふ、〔一〇〕連璧　王襃と王子淵とを曰ふ、「晉夏侯湛傳」に、美容觀、與潘岳友善、每行止、同輿接茵、京都謂之連璧と、〔一一〕歲月隔　杜甫の詩、日月不相饒、節序昨夜隔と、〔一二〕斜川游　晉陶淵明の詩序に、辛丑正月五日、與二三鄰曲、同游斜川、欣對不足、率爾賦詩と、〔一三〕彭澤　淵明彭澤縣令と爲る、

【題義】徐州の桓山に遊び、同游する者十人、是に於て淵明が詩の春水滿四澤、夏雲多奇峰の十字を分韻して公は澤字を得て此の詩を賦したのである、

【詩意】東郊に向つて春景を尋ねんと欲したるも、まだ鶯も鳴かず花も亦開かない、而も春風は先づ流水に在るを認む、鳧や雁の羽を拍拍と打ち、孤帆の溶漾たる流れに信すも春の氣分が顯はれて居る、乃ち此の半篙の碧を弄して、舟を桓山の山麓に艤して、舟より下りて山に登り長嘯して輕策を理する、或は琴を石室の中に彈ずれば、其の幽響が淸く礫礫と聞え、或は弔ふ彼の泉下の人を、野火一炬の下に枯腊すらも無い、是に於て乎悟る人間の世、何者か是れ眞宅と爲るものである、日暮に及んで百歩洪の處に囘りて、互に洪上の石に散坐する、愧ぢる我は王襃の如き人にあらざるも、子淵の爲め客として待遇せらるるを、流に臨んで洞簫を吹けば、宛かも山月は彼の連璧を照すが如くである、此の游歡や眞に不朽である、首を囘らせば晉の世と今日とは歲月隔たる、而かも想像する斜川に高士が同游せしことを、今詩を作りて以て彭澤に慨寄せんとするのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、綽有二陶韋之意一、而不レ襲二其貌一、此乃善學二陶韋一者と、宋の世、理學を貴しとし、文でも詩でも、理窟を主として、餘韻を存するものは極めて寥寥、公と雖も、到底時代と離るることは出來ない、是に於て作る所の詩、勃窣なるもの多きは已むを得ざるに由る、然るに此の詩の如きは紀評の如く、上は陶彭澤に逼り、下は韋蘇州に逼るの概がある、沈歸愚曰く、宋元詩近レ腐、此等の詩に於ては復此の語を發せざるものと思ふ、

### 戴道士得四字代作

少(一)小家江南。寄跡方外(二)士。
偶隨白雲出。賣(三)藥彭城市。
雪霜侵(四)鬢髮。塵土汙冠袂。
賴此三(五)尺桐。中有山水(六)意。
自從夷(七)夏亂。七絲(八)久已弃。
心知鹿(九)鳴三。不及胡(一〇)琴四。
使君獨慕古。嗜好與(一一)衆異。
共弔桓魋(一二)宮。一灑孟(一三)嘗涙。
歸來鎖塵匣(一四)。獨對斷(一五)絃喟。
挂(一六)名石壁間。寂寞(一七)千歲事。

戴道士四の字を得たり、代つて作る
少小より江南に家し、跡を方外の士に寄す、
偶ま白雲に隨つて出で、藥を彭城の市に賣る、
雪霜鬢髮を侵し、塵土冠袂を汙す、
賴に此の三尺の桐、中に山水の意あり、
夷夏亂れしより、七絲久しく已に弃つ、
心に知る鹿鳴の三、胡琴の四に及かざるを、
使君獨り古を慕ひ、嗜好衆と異る、
共に弔す桓魋宮、一たび灑ぐ孟嘗に涙を、
歸來塵匣に鎖し、獨り斷絃に對して喟く、
名を挂く石壁の間に、寂寞たり千歲の事、

【字解】【一】少小　白樂天の詩、少小孤且貧と、【二】方外士　「莊子大宗師篇」に、子桑戶、孟子反、子琴張三人、相與友、子貢反、以告二孔子一、曰彼何人者邪、孔子曰、彼遊二方之外一者也と、孔孟の徒より、佛氏、道士を皆方外士と稱す、【三】賣藥　佛氏は賣藥を禁じて「梵網」に戒がある、道士は之を職務とする、「後漢書」に、韓康、採二藥名山一、賣二長安市一、口不レ二レ價と、【四】侵鬢髮　樂天の詩、黑髮霜雪侵、青袍塵土汙と、【五】三尺桐　桐琴三尺六寸六分、以て三百六十六日に象るのである、【六】山水意　「列子」に

伯牙善鼓レ琴、鍾子期善聽、伯牙鼓レ琴、志在二高山一、子期曰、善哉峩峩兮若二太山一、志在二流水一、子期曰、善哉洋洋兮若二江河一と、【七】爽夏氣　孝公曰、庶法曲、勿レ失二雅音一、然本諸夏之聲、故歷朝行焉、天寶十四載、始詔道、調二法曲一、與二番部新聲一合作、自レ樹爽夏之聲相飛、無二復辨者一、前輩嘗言、今世所レ謂琴者、乃古之鄭衞耳、今世所レ謂鄭衞、則皆番胡貫矣、而雅音替壞、不二復存一焉と、【八】七絃　孟東野の詩、哀哀七絲絃と、【九】鹿鳴三　「左傳襄公四年」に、歌二鹿鳴之三一、而「琴操」有二鹿鳴曲三疊一と、【一〇】胡琴四　胡琴は琵琶を曰ふ、蕃人の馬上鼓する樂器、四絃を以て四時に象るのである、【一一】與衆異　韓退之の詩、與レ世異レ趨誰相親と、【一二】桓魋宮　桓魋の墓は桓山に在る、【一三】孟嘗淚　孟嘗君の墓は徐州に在る、【一四】塵匣　鮑照の詩、明鏡塵匣中、瑤琴生二網羅一と、【一五】斷絃　子期死、伯牙斷レ絃と、【一六】挂名　韓退之の文に、挂二名經端一、自託レ不レ腐と、【一七】寂寞　杜子美の詩、千秋萬歲名、寂寞身後事と、

【題義】桓山に會する者曰く、畢仲孫、舒煥、寇朝昌、王適、王遹、王肄、蘇邁、舒彥擧、戴道士、及び公との十人である、乃ち戴道士が四の字を得たるに代作せられしものである、

【詩意】道士自から謂ふ余は少小より江南に家したるが、家を舍てて身を方外の士に寄跡した、方外は平生山に住するが偶ま白雲に隨つて山を出で、藥を彭城の市に賣る、所が雪霜が鬢髮を侵し來るのみでなく、塵土の爲め冠袂をも汙された、賴に此の三尺の桐琴は、此の中に山水の意を持して居る、抑も夷と中士とが亂れてからは、眞正なる七絲は久しく巳に弃てられて知る人は無い、人人心に鹿鳴の三曲の善なるを知るも、實際は胡琴の四絃に及ばない、然るに使君（坡公を指す）は獨り古樂を慕うて、其の嗜好は今の衆人とは異なる、共に桓魋の宮を弔うて之を彈じ、一たび孟嘗君の墓前に泣いて之を奏し、歸來之を塵匣に鎖して、獨り斷絃に對して叩く、但名を石壁の間に挂けて死せんと思ふ、それは寂寞たる千歲の事である、

【餘論】紀曉嵐曰く、遠想慨然、適然高唱、代作乃勝二自作一、要仍是自寫二胸懷一耳、語特和平と、案ずるに分韻は得字に依つて辛苦一倍するものがある、於の字、不の字、死の字、四の字の如きそれである、然るに胡琴四なぞと運用し來りて、自然の語となせる伎倆は大才公の如き人でなければ能はざる所、嘆せざるを得ない、張三李四、又は朝三暮四なぞより得來ることも明白である、特に桓魋は墳墓であるに、宮と使用したるは戴の道士に切ならしむるに在る、用意周到、僻の擊つべきものがない、代作勝二自作一と言ふ紀評は其の當を得たりと思ふ、

## 次二韻田國博部夫南京見レ寄二絕一

田國博部夫が南京より寄せらるる二絕に次韻す

歲月翩翩(一)下レ坂輪。　歲月翩翩坂を下るの輪、
歸來杏子已(二)生仁。　歸り來れば杏子已に生仁、
(三)深紅落盡東風惡。　深紅落ち盡くして東風惡し、
柳絮(四)楡錢不レ當レ春。　柳絮楡錢春に當らず、

【字解】【一】下坂輪　「漢書蒯通傳」に、猶如二阪上走一丸也と、【二】生仁　杏が實を結ぶを曰ふ、【三】深紅　杜牧の詩、狂風落盡深紅色、綠葉成レ陰子滿レ枝と、【四】楡錢　沈郎の詩、青錢夾二城路一と、

【詩意】歲月の過ぎる速かさは翩翩と坂を下る車輪と同樣である、家を出る時蕾の杏子が歸る時は巳に實を結んで居る、深紅は落ち盡くして東風も猛惡である、柳絮も楡錢も最早や春の價値はない、

〔二〕

(一)火冷餳稀杏粥稠。　火冷やかに餳稀に杏粥稠し、

(二)青裙縞袂餉田頭。　青裙も縞袂も田頭に餉す、

(三)大夫行役家人怨。　大夫の行役家人怨む、

應羨居鄉馬(四)少游。　應に羨むべし居鄉の馬少游を、

【字解】【一】火冷「玉燭寶典」に、寒食煮大麥粥研杏仁爲酪、別造餳沃之と、李義山の詩、粥香餳白杏花天と、白樂天の詩、留餳和冷食出火煮新茶と、【二】青裙縞袂　田婦の姿態を曰ふ、青色の裙即ち裾と、縞色の袂即ち袖である、【三】大夫　官名、單に大夫と稱しても上中下の差別がある、【四】馬少游「後漢書馬援傳」に、馬援擊交趾、謂官屬曰、吾從弟少游、常哀吾慷慨有大志曰、士生一世、但取衣食裁足、乘下澤車、御款段馬、爲郡掾吏、守墳墓、鄉里稱善人、斯可矣、致求盈餘、但自苦耳と、

【詩意】今や火冷餳稀杏粥稠の時節である、青裙縞袂の妝を爲す人は田頭にて午飯を喫して居る、君が大夫としての行役は家人は怨むであらう、此を怨めば彼を羨む道理で一生鄉里を愛したる馬少游の樣なる主人を羨むであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、歲月翩翩是宋句、歸來杏子是晚唐句、又寄慨殊深、行役之感、言外見之、青裙句對照好と、案するに「宋詩百一鈔」は多く此等の詩を採る、詩に精なるものは、識も亦同じうするものである、

月夜與客飲杏花下　月夜客と杏花の下に飲す

杏花飛簾散餘春。　杏花簾に飛んで餘春に散す、

明月入戶尋幽人。　明月戶に入り幽人を尋ぬ、

褰衣步月踏花影。　衣を褰げ月に步して花影を踏む、

炯如流水涵青蘋。　炯として流水の青蘋を涵すが如し、

(一)花間置酒清香發。　花間に酒を置けば淸香發し、

(二)爭挽長條落香雪。　爭うて長條を挽きて香雪落つ、

山城酒薄不堪飮。　山城酒薄くして飮むに堪へず、

勸君且吸(三)杯中月。　君に勸む且吸へ杯中の月を、

洞簫聲斷月明中。　洞簫聲は斷ゆ月明の中、

惟憂月落酒杯空。　惟憂ふ月落ち酒杯の空しきを、

明朝捲地春風惡。　明朝地を捲きて春風惡しくば、

但見綠葉棲(四)殘紅。　但見ん綠葉の殘紅を棲するを、

【字解】【一】花間　李太白の詩、花間一壺酒、獨酌無相親と、【二】爭挽　杜甫の詩、狂風挽斷最長條と、【三】杯中月　白樂天の詩、雲隨飛燕、月隨杯と、【四】殘紅　王建の詩、樹頭樹底覓殘紅と、

【詩意】杏花は飛んで簾を打ち餘春に散亂する、明月は戶に入りて幽人を尋ぬるものの如くである、

起つて衣を褰げて月下に步して花影を踏めば、炯として流水が青蘋を涵すが如き狀である、花間に酒を置けば忽ち清香が發する、爭ひて長條を挽いて風が香雪を落したるに由る、山城の酒は味薄ければ飲むに堪へず、君に勸告する酒飲めずんば杯中の月を吸ひ玉へ、洞簫の聲は吹斷する月明の中に、唯憂ふ月落ち酒杯に影空しくなるを、明朝、地を捲きて春風猛惡ならば、但綠葉陰陰として僅かに殘紅を棲すに過ぎないであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、有太白之意、三四寫景入微、結乃勸今日之飲、非傷春意也、案するに杜詩狂風挽斷最長條とある、然らば爭挽も風挽と改むべきが如きも、結句に春風起とあるから避けたものと思ふ、詩品は太白と白樂天の間に介在する、

## 送蜀人張師厚赴殿試二首

蜀人張師厚が殿試に赴くを送る　二首

〔一〕

忘歸不覺鬢毛斑。　歸を忘れて覺えず鬢毛の斑なるを、

好事鄉人尙往還。　好事の鄉人尙ほ往還す、

斷嶺不遮西望眼。　斷嶺遮らず西望の眼を、

送君直過楚王山。　君を送りて直ちに過ぐ楚王山、

【字解】【一】鬢毛斑　「潘安仁秋興賦」に、斑鬢髟以承弁と、【二】好事　「孟子」に、好事者爲之也と、【三】西望眼　韓退之の詩、爲遮西望眼、終是懶回頭と、【四】楚王山　項羽が徐州に都し、自から西楚覇王と號したるが故に楚王山の名ありとの說と、徐州の桓山には楚の元王の墓あるが故に楚王山と曰ふとの說がある、後說が是である、

【題義】蜀人の張師厚が天子親から試驗官と爲つて行ふ所の進士の選を求めて京に赴くを送るの詩である、

【詩意】歸るを忘れてまだ覺らぬ己が鬢毛の斑白となるを、好事の我が同鄉人は尙ほ世事に往還する、斷嶺は曾て西望せんとする眼を遮らない、君を送つて直ちに楚王山を過ぐ、

〔二〕

雲龍山下試春衣。　雲龍山下春衣を試む、

放鶴亭前送落暉。　放鶴亭前落暉を送る、

一色杏花三十里。　一色の杏花三十里、

新郎君去馬如飛。　新郎君去つて馬飛ぶが如し、

【字解】【一】試春衣　杜甫の詩、朝回日日典春衣、毎日江頭盡醉歸と、試は典とは異なる、典は質に置くこと、「字書」に未實爲其事、而先驗其可否者皆曰試と、【二】放鶴亭　公の放鶴亭記に、雲龍山人張君、于故居之東作亭、山人有二鶴、且則望西山之缺而放焉、暮則傃東山而歸、故名之曰放鶴亭と、【三】三十里　徐州より京に趨くの路程、【四】新郎君　新に及第する者を謂ふ、【五】馬如飛　韓偓の詩、矢如流電馬如飛と、

【詩意】雲龍山下より春の旅裝をして殿試に出發する、放鶴亭前に落暉を送り且君を送る、一色の杏花は三十里に連接する、新郎君は得意に去つて馬は飛ぶが如くである、

【餘論】紀曉嵐曰く一色二句近俗と、一色と謂ひ、新郎君と謂ひ、固より是れ俗、公自からも俗なるを知りつつ作つたものである、

## 再次韻答田國博部夫還二首

再び次韻して田國博部夫の還るに答ふ 二首

西郊黃土沒車輪。　西郊の黃土車輪を沒す、
滿面風埃笑路人。　滿面の風埃路人を笑ふ、
已放役夫三萬指。　已に役夫を放つ三萬指、
從敎積雨洗殘春。　從敎す積雨の殘春を洗ふに、

【詩意】西郊の黃土は風埃の爲め車輪を沒し、滿面の風埃は路人を笑ふ如くである、已に役夫を三千人も放遣したのであるから、從敎す積雨の殘春を洗ひ灑ぐに、

【字解】〔一〕滿面　韓退之の詩、風霜滿面無人識と、〔二〕三萬指　「漢書貨殖傳」に、通都大邑、童手指千、注千則人百と、三萬指は卽ち三千人である、

〔二〕

枝上稀疏地上稠。　枝上は稀疏地上は稠し、
忍看紅糝落牆頭。　看るに忍びんや紅糝牆頭に落つるを、
風流別乘多才思。　風流の別乘才思多し、
歸趁西園秉燭游。　歸りて西園秉燭の游を趁ふ、

【字解】〔一〕枝上　張文昌の詩に、地上漸多枝上稀、白樂天の詩、枝上稀疏地上多と、〔二〕紅糝　韓退之の詩、始見洛陽春、桃枝綴紅糝と、糝は花の黏り著くのである、〔三〕別乘　「王注」顏曰、唐置別駕、爲太守之貳、謂之別乘と、〔四〕西園　魏文帝の詩、乘輦夜行游、逍遙步西園と、〔五〕秉燭　古詩に、晝短苦夜長、何不秉燭游と、

【詩意】枝上には花が稀疏なれども地上には稠し、看るに忍びんや紅糝の牆頭に落つる姿を、風流なる別乘は才思多きを知る、歸り來らば必ず西園秉燭の夜游を趁ふことであらう、



## 田國博見示石炭詩有鑄劍斬佞臣之句次韻答之

田國博、石炭の詩を示さる、劍を鑄て佞臣を斬るの句あり、次韻して之に答ふ

楚山鐵炭皆奇物。　楚山の鐵炭皆奇物、
知君欲斫姦邪窟。　知る君が姦邪窟を斫らんと欲するを、
屬鏤無眼不識人。　屬鏤眼無ければ人を識らず、
楚國何曾斬無極。　楚國何ぞ曾て無極を斬らん、
玉川狂直古遺民。　玉川狂直古の遺民、
救月裁詩語最眞。　救月詩を裁す語最も眞、
千里妖蟇一寸鐵。　千里の妖蟇一寸の鐵、
地上空愁蟣蝨臣。　地上空しく愁ふ蟣蝨の臣、

【字解】〔一〕鐵炭　「漢李尋傳」に、致治感陰陽、猶鐵炭之低卬見效可信者也と、注に天文志云、縣土炭也、以鐵易土耳、先冬夏至、縣鐵炭於衡各一端、令適停、冬陽氣至、炭仰而鐵低、夏陰氣至、炭低而鐵仰と、〔二〕屬鏤　劍の名、「史記伍子胥傳」子胥數諫吳王、王不用、太宰嚭、與子胥有隙、因讒之、吳王乃賜子胥屬鏤之劍以死と、「國志」に、此箭無眼不識人と、〔三〕

斬無赦　左傳昭公二十七年、楚令尹子常、殺費無極、與鄢將師、盡滅其族、以說於國、謗言乃止、【四】玉川　盧仝字は玉川、月蝕詩に、傳聞古老說、蝕月蝦蟇精、徑圍千里入汝腹、如此瘢痕阿誰生、又云、地上蟣蝨臣仝、告愬帝天皇、臣心有鐵一寸、可刳妖蟇癡腸と、【五】遺民　「史記」に先王之遺民也と、【六】救月　「周禮」に、以救月之矢、夜射之と、

【題義】田國博が石炭の詩を示さる、其の詩中に劍を鑄て佞臣を斬るとの句がある、其の意を受けて次韻して答ふ、

【詩意】楚山より出づる鐵炭にて劍を鑄る、皆奇物である、知る君が此の劍を以て姦邪窟を斫らんと欲するを、屬鏤は名劍ではあるが眼が無いから忠義の人を識らない、楚國に於て無極を斬つたのは讒人であるから是は當然と思ふ、盧玉川は狂直なる古の遺民である、是の故に月光の邪魔を爲す妖蟇を除きて月光の暗を救はんとして詩を裁したるは語最も眞である、其の詩に言うて居る千里の妖蟇を一寸の鐵にて刳くべしと、又地上に空しく愁ふる蟣蝨の臣と歌うて居る、

【餘論】紀は評して太激太盡と、當面に激憭して諷諭するの態に出でざるを謂ふ、余頃者坡公同時の費袞の「梁谿漫志」を讀む、中に云ふ、作詩押韻是一奇、荊公、東坡、魯直、押韻最工、而東坡尤精於次韻、蓋其胸中、有數萬卷書、左抽右取、皆出自然云云、今案するに起句の物と四句の極と七句の鐵と皆入聲、古體と律體との論無く盛唐大家には之れ無き所、坡公を祖として仰止する者は別とし、盛唐を宗とする者より見れば嚴法ならずと思ふのである、

答郡中同僚賀雨

郡中同僚の賀雨に答ふ

(一)水旱行十年。(二)飢疫徧九土。(三)
水旱行くゆく十年、飢疫九土に徧し、

奇窮所向惡。歲歲祈晴雨。(四)
奇窮向ふ所惡し、歲歲晴雨を祈る、

雖非爲己求。(五)重請終愧古。
己が爲めに求むるにあらずと雖も、重請終に古に愧づ、

鬼神亦知我。(六)老病入腰膂。
鬼神も亦我を知る、老病腰膂に入る、

何曾(七)拜向人。此意雖不許。
何ぞ曾て人に拜向せん、此の意許さざる難し、

重雲(八)萋已合。微潤先流(九)礎。
重雲萋として已に合す、微潤先づ礎に流る、

蕭蕭止還作。坐聽及三鼓。
蕭蕭止んで還た作る、坐聽して三鼓に及ぶ、

天明將吏集。泥土滿韡屨。
天明將に吏集らんとす、泥土韡屨に滿つ、

登城望(一〇)甡麥。綠浪風掀舞。
城に登りて甡麥を望めば、綠浪風掀舞す、

愧我賢友生。雄篇鬭新語。
愧づ我が賢友生、雄篇新語を鬭はす、

君看大熟歲。風雨占十五。(一一)
君看よ大熟歲、風雨十五を占む、

(一二)天地本無功。祈禳何足數。
天地本功無し、祈禳何ぞ數ふるに足らん、

渡河不入境。未若無蝗(一三)虎。
河を渡りて境に入らず、未だ若かず蝗虎無きに、

而況刑(一四)白鷺。下策(一五)君勿ㇾ取。　而かも況んや白鷺を刑するをや、下策は君取る勿れ、

【字解】【一】水旱　水害と旱害、【二】飢疫　飢饉と疫病、【三】九土　宋玉が「好色賦」に、「周二覽九土一」と、【四】「新晴雨」杭州に在る時、晴雨と捕蝗詩を作り、密州に在る時、又禱雨と雩泉記を作る、【五】重請　「穀梁傳」に、定公元年、雩之必待二其時窮、人力盡一何也、雩者爲ㇾ旱求者也、求者請也、古之人、重請何重二乎請一、人之所二以爲一ㇾ人者讓也、請道去ㇾ讓也と、【六】老病　杜子美の詩、老病人扶再拜難と、【七】拜向人　「郭子儀傳」に、「晉遣ㇾ使至ㇾ饋、田承嗣、西望拜、指二其膝一曰、茲膝不ㇾ屈二於人一久矣、今爲ㇾ公拜と、【八】渰渰　「淮南子」に、山雲蒸ㇾ柱礎潤と、【九】萋萋　「毛詩」に、有二渰萋萋一、興ㇾ雨祁祁と、渰は雲の起る貌、【一〇】「三十國春秋」に、慕容儁曰、豈能拜二向人一と、【一一】十五　「論衡」に、太平瑞應、五日一風、十日一雨と、【一二】天地　「列子」に、天地無二全功一と、【一三】蝗虎　蝗は螽イナゴ、稻を食ふ害蟲、「後漢書」に、宋均遷二九江太守一、郡多二暴虎一常募設二檻穽一、而猶多二傷害一、均曰、虎豹在ㇾ山、黿鼉在ㇾ水、各有ㇾ所ㇾ託、今爲二民害一、咎在二殘吏一、其務退二奸貪一、思ㇾ進二忠善一、可ㇾ一二去檻穽一、其後傳言、虎相與東游度ㇾ江と、【一四】刑白鷺　白鷺を殺して無益なる祈禱、【一五】下策　「漢書溝洫志」に、待詔賈讓言、治ㇾ河有二上中下策一、若繕ㇾ完故隄一、增ㇾ卑倍ㇾ薄、勞費無ㇾ已、數逢二其害一、此最下策也と、

【題義】郡中の同僚が賀雨の事を尋ねられたるに答へて作る、

【詩意】水害や旱害が殆んど十年間も繼續して、飢饉や疫病が全國に徧く滿つ、寄窮して向ふ所も惡し、其の惡しき所以は歳歳に及んで晴や雨を祈ることである、祈るは己一個人の爲ではないが、二度も三度も天に憐みを請ふは古に愧ぢることである、鬼神も亦能く我を知つて居らるる、老病が腰部や膂部に及んで、自分が自分を自由にすること出來ない、其の不自由の身を以て鬼にも人にも拜向すること何で出來るぞ、出來ないと云ふ意を天は許したのではないが、一旦重雲が萋として合し來れば、小雨漸く降りて微しく礎石を潤し去る、蕭蕭と或は止み或は作りて、夜坐して聽いて夜半に及ぶ、天明に郡吏が集り來る狀を見るに、各の泥土が韡履に著き滿ちて居る、郡城に登りて麰麥を觀望すれば、麥を吹く風が綠浪を起して風が掀舞するかと疑ふ、我は愧づ我が賢友生に對して、賢友は各の雄篇を作りて新語を鬬はすに、然り乍ら君看よ大豐熟の歳は、五日に一風吹き十日に一雨下る、天地は全功無しと聞く、祈禳の事は何ぞ數ふるに足らんや、惡獸が河を度りて境に入らざるもよいが、それよりは惡蟲惡獸の無き方がよい、祈禳が已に無益なる上に罪の無き白鷺を殺すなぞ皆下策である、此の如きの下策は郡僚諸君は取つてはいかぬ、

【餘論】紀曉嵐曰く、雖二兀傲一而立言有ㇾ體、此處最難二著筆一、如曰二偶然一、則祈禱爲ㇾ戲、如曰ㇾ有ㇾ虛、又自以爲ㇾ功、只可下如ㇾ此諸語轉過上と、余謂ふ「心ダニ誠ノ道ニ合ヒナバ祈ラズトテモ神ヤ守ラン」の意を以て此の詩を讀むべきである、紀評も亦敬服すべきである、

## 留二別叔通元弼坦夫一

叔通・元弼・坦夫に留別す

田三(一)昔同僚。(二)向ㇾ我每傾倒。(三)
田三は昔し同僚、我に向つて每に傾倒す、

當年或齟齬。(四)反覆看愈好。
當年或は齟齬、反覆看て愈よ好し、

寇三(五)我部民。孝弟化二鄰保一。
寇三は我が部民、孝弟鄰保を化す、

有如袁伯業(六)。苦學到衰老。　袁伯業の如きあり、苦學衰老に到る、
石(七)生吾邑子。勁(八)立風中草。　石生は我が邑子、勁立す風中の草、
宦游甑(九)生塵。飯水媚翁嫗(一〇)。　宦游して甑に塵を生ず、飯水翁嫗に媚ぶ、
我窮交舊絕。計拙集枯槁(一一)。　我窮して交舊絕つ、計拙にして枯槁集る、
三子尤見存。往復紛紵縞(一二)。　三子尤も存するを見る、往復紵縞紛たり、
迎我淮水北。送我睢陽(一三)道。　我を迎ふ淮水の北、我を送る睢陽の道、
願存金(一四)石契。凜凜貫華皓。　願はくは金石の契を存して、凜凜華皓を貫かん、

【字解】〔一〕田三　叔通を曰ふ、〔二〕同僚　「左傳文公七年」に、先蔑奔秦、荀伯止之曰、同官爲僚、吾嘗同僚、敢不盡心乎と、〔三〕傾倒　前に辨ぜり、〔四〕齟齬　「說文」に、齟齬不相値也と、〔五〕寇三　元弼を曰ふ、〔六〕袁伯業　「魏文帝典論」に、能勤學者、唯吾與袁伯業耳と、袁紹の從兄である、〔七〕石生　坦夫を曰ふ、〔八〕勁立　古詩に疾風知勁草と、〔九〕甑生塵　「後漢范冉傳」に、冉字史雲、所止單陋、有時絕粒、閭里歌之曰、甑中生塵范史雲、釜中生魚范萊蕪、桓帝時、爲萊蕪長と、〔一〇〕翁嫗　老父と老母の意、〔一一〕集枯槁　「莊子天下篇」に、雖枯槁不舍也と、「國語」に、人皆集於菀、予獨集於枯と、〔一二〕紵縞　「左傳襄公二十九年」に、吳公子札、聘於鄭、見子產、如舊相識、與之縞帶、子產獻紵衣焉と、〔一三〕睢陽道　「漢地理志」に、梁國睢陽、故宋國微子所封と、唐の張巡の廟も此に在る、〔一四〕金石契　「韓詩外傳」に、楚熊渠子夜行、見寢石、以爲伏虎、彎弓射之、沒金飲羽、金石爲之開、而況人乎と、孟郊の詩、爽爲願多氷壑、中有潛浪翻、唯當金石交、可與賢達論と、

【題意】公が徐州より南京に向つて出發するとき此の詩を作りて叔通と元弼と坦夫との三人に留別したのである、

【詩意】田三は昔日官に在りて我と同僚である、而かも同僚視せず我を崇敬し又傾倒したのである、そのとき我は往往齟齬したことがある、反覆再三しても尙ほ好感を以て居られる、寇三は我と部落を同じうする良民である、孝弟の道を以て鄰保を風化せられたることは、後漢の袁伯業の如きものがある、其の苦學して衰老に到るも亦袁に似て居る、石生は我が邑里の後進で、其の人は勁風にも屈せざる勁草に似て居る、我は宦游して家甑には塵を生ずる狀態で、炊事なぞは翁嫗が親ら爲るのである、我窮を告ぐれば交舊も自然と斷絕する、生計拙なれば集まるものは枯槁である、三子は厚誼が變せず今も存せらる、互に相往復して紵縞の交を訂する、曾ては我を淮水の北に迎へられ、今日は我を睢陽道に向つて送らる、願はくは此の金石の交契を永く存して、凜凜として白頭に到るまで一貫せん、

## 罷徐州往南京馬上走筆寄子由五首

徐州を罷め南京に往き、馬上筆を走らし子由に寄す　五首

吏民莫扳(一)援。歌管莫凄(二)咽。　吏民扳援する莫かれ、歌管凄咽する莫かれ、
吾生如寄耳。寧獨爲此別。　吾が生は寄する如きのみ、寧ろ獨り此の別を爲さん、
別離隨處有。悲(三)惱緣愛結。　別離は隨處に有り、悲惱は愛の結ぶに緣る、

而我本無恩。此涕誰爲設。　而かも我は本恩無し、此の涕は誰が爲めに設くる、
紛紛等兒戲。鞭鐙遭割截。　紛紛兒戲に等し、鞭鐙割截に遭ひ、
道邊雙石人。幾見太守發。　道邊石人雙ぶ、幾たびか太守の發するを見る、
有知當解笑。撫掌冠纓絕。　知るあらば當に笑を解くべし、掌を撫して冠纓絕たん、

【字解】【一】扳援　扳引援護、【二】凄咽　白樂天の詩に、祖帳離聲咽管絃と、【三】悲惱　「法華經」に、憂悲苦惱と、【四】兒戲　「漢周亞父傳」に、覇上棘門、特兒戲耳と、【五】鞭鐙　鐙の字、字書に無し、「開元天寶遺事」に、姚崇牧荊州、受代日、民吏泣擁馬首、鞭鐙民皆截、留之以表遺戀と、鞍であらう、【六】雙石人　「水經注」に、鄒南千秋亭壇廟之東枕道、有兩石翁仲、東坡罷徐州詩曰、道邊雙石人、幾見太守發、則徐州有石人可知と、【七】解笑　元微之の詩、桃花仰笑鶯能語と、【八】冠纓絕　「史記滑稽傳」に、楚大發兵、加齊、齊王使淳于髡、之趙請救兵、齎金百斤、車馬十駟、淳于髡、仰天大笑、冠纓索絕と、

【題義】徐州の官を罷め南京に往かんとして馬上に此の五首を作り子由に寄示したものである、

【詩意】徐州の吏民は我の此を離るるを引き留めてはいかぬ、又送別燕席の歌管は凄咽の意を奏してもいかぬ、畢竟吾が生は寄寓する如きのみである、寧ぞ獨此の別のみ別れではない、別離は常に隨處に有る、佛典にも說いてある悲惱は愛を結ぶに緣ると、而かも我は本より恩愛を施したことがない、人も歌も哀涕するは誰が爲めに設けたのである、此の如きことは紛紛たる兒戲に等しきものと思ふ、鞭や鐙を割き截り小兒の如きの瞻戀である、道中の路邊に兩個の石人が在る、此の石人は幾回か太守の出發する狀を見たであらう、石人が靈知あらば定めて解笑して、掌を撫して其の冠纓を絕つことであらう、

〔二〕

父老何自來。花枝裊長紅。　父老は何くより來る、花枝裊として長紅なり、
洗盞拜馬前。請壽使君公。　盞を洗うて馬前に拜す、使君公を壽せんと請ふ、
前年無使君。魚鼈化兒童。　前年使君無し、魚鼈兒童に化す、
擧鞭謝父老。正坐使君窮。　鞭を擧げて父老に謝す、正しく使君窮するに坐す、
窮人命分惡。所向招災凶。　窮人は命分惡し、向ふ所災凶を招く、
水來非吾過。去亦非吾功。　水來るも吾が過にあらず、去るも亦吾が功にあらず、

【字解】【一】父老　鄉里に相當の勢力を持つ人、「漢馮唐傳」に、父老何自苦と、【二】裊　裊娜、タヲヤカである、【三】長紅　王註堯卿曰、方俗銓官罷任、以花枝挂紅、謂之長紅と、【四】馬前　韓退之の文に、拜北平王於馬前と、【五】使君公　白樂天の詩、遙見朱輪來出郭、相迎勞動使君公と、【六】魚鼈　「新論」に、禹治水、生人免爲魚鼈之患と、【七】擧鞭　「晉書山簡傳」に、兒童歌曰、擧鞭向葛彊、何如并州兒と、

【詩意】我を送る爲めであらうが父老は何くより來集せるや、我に贈れる花枝は裊娜として長紅である、その上に盞を洗うて馬前に拜せられ、使君公の爲め壽詞を呈せんと請はる、前年は此の州に使君が無く、治水の役人が無ければ兒童は殆んど魚鼈に化せんとする狀態であつた、之を聞いて我は鞭

を擧げて父老に謝する、使君は其の返答に窮する者である、自分は總てに於て窮人にて命分の惡しきを知つて居る、任地の向ふ所災凶を招くことが多い、故に水害の來るも吾が怠過の罪でも無い、又水害の去るも吾が勤勉の功でも無い、

〔三〕

(一)古汴從西來。迎我向南京。　古汴西より來り、我を迎へて南京に向ふ、

東流入淮泗。送我東南行。　東流して淮泗に入り、我を送りて東南に行く、

暫別復還見。依(二)然有餘情。　暫らく別れて復た還た見る、依然として餘情あり、

春雨漲微波。一夜到彭城。　春雨微波を漲らし、一夜彭城に到る、

過我黃樓下。朱闌照飛甍。　我が黃樓の下を過ぎ、朱闌飛甍を照らす、

可憐洪上石。誰聽月中聲。　憐む可し洪上の石、誰か聽く月中の聲、

【字解】【一】古汴　「水經」に、淮水又東過睢陽縣南、汴水從北來注之と、馮應榴曰、水經本文、無汴水句、「名勝志」引水經有此句と、「太平寰宇記」に、汴水在南邱縣北、梁孝王廣睢陽城、七十里、開汴河後、水始經城南と、【二】依然　白樂天の詩、依然若有情と、

【詩意】古汴水は西方より流れ來り、我を迎へて南京に向つて流れ、更に東流して淮泗に入り、我を送りて東南に行く、暫時此の水と分るるかと思うて復た還た此の流を見る、依然として餘情あるを覺ゆ、春雨の爲め水は微波を漲らして、一夜彭城に流れ到る、我が黃樓の下を過ぎて、樓の朱闌や樓の飛甍を水光が照らす、可憐なる百步洪上の石、誰人か此の石を擊つ水の月中に聲あるを聽くものである、

〔四〕

前年過南京。麥老櫻桃熟。　前年南京を過ぎ、麥老いて櫻桃熟す、

今來舊遊處。櫻麥半黃綠。　今舊遊の處に來れば、櫻麥半ば黃綠、

歲月如宿(一)昔。人事幾反覆。　歲月宿昔の如きも、人事は幾反覆、

青(二)衫老從事。坐穩生(三)髀肉。　青衫の老從事、坐穩にして髀肉を生ず、

聯(四)翩閱三(五)守。迎送如(六)轉轂。　聯翩三守を閱し、迎送轉轂の如し、

歸耕何時決。田(七)舍我已卜。　歸耕何れの時にか決せん、田舍我已に卜す、

【字解】【一】宿昔　杜子美の詩、寢病悲宿昔と、【二】青衫　杜子美の詩、將軍昔著從事衫と、【三】生髀肉　「蜀志」に先主在荊州牧劉表座上、起如廁、慨然流涕還坐、表怪問之、曰吾常身不離鞍、髀肉皆消、今不復騎、髀裏肉生、日月若馳、老將至矣、而功業不建、是以悲耳と、【四】聯翩　續ぎて絶えざる貌、「陸機文賦」に、浮藻聯翩と、【五】三守　一守は陳襄、一守は滕甫、一守は張方平、【六】如轉轂　「漢貢禹傳」に、數易長吏、送故迎新之費甚多と、賈島の詩、碌碌復碌碌、百年轉轂と、【七】田舍　「魏志陳登傳」に、求田問舍、言無可采と、

【詩意】前年に南京を經過せし時は、初夏であつた爲め麥は老いて櫻桃は熟したが、今年其の舊遊の

處に來つて見れば、初春にて櫻桃も麥も半ば黃綠である、歲月は僅僅一二年にても宿昔の如きの感を爲す、此の間に於て人事は幾反覆するや、靑衫の老從事、別に變化するでも無く髀肉を生ずる感が起る、聯翩と三たび長官を更迭して、其の送迎は車輪を轉ずる如くである、歸耕の計は知らず何れの時に決するや、田舍は我は已に卜居を定めてある、

〔五〕

卜田向何許。石佛山南路。(一)
下有爾家川。千畦種秔稌。(二)
山泉宅龍蜃。(三)平地走膏乳。
異時畝一金。(四)近欲爲逃戶。(五)
逝將解簪紱。(六)賣劍買牛具。
故山豈不懷。廢宅生蒿穭。(七)
便恐桐鄉人。長祠仲卿墓。(八)

〔五〕

田を卜して何れの許に向ふ、石佛山南の路、
下に爾が家の川あり、千畦秔稌を種う、
山泉は龍蜃宅にし、平地膏乳を走らす、
異時畝一金、近ごろ逃戶を爲さんと欲す、
逝くゆく將に簪紱を解かんとす、劍を賣て牛具を買ふ、
故山豈懷はざらんや、廢宅蒿穭を生ず、
便ち恐る桐鄉の人、長く祠る仲卿の墓、

【字解】〔一〕石佛山　眉州眉山縣の石佛鎭に在る山、〔二〕秔稌　秔は粳、ウルシネ、稌はモチゴメ、「毛詩」に、豐年多黍多稌と、〔三〕龍蜃　蜃は普通に大蛤（オホハマグリ）と稱す、「物類相感志」に、蜃蛟也、狀如蛇龍、如池井間、有則吐氣爲雨と、「怪異記」に、豬龍泉、在眉山石佛鎭、曾有乳豬、於此化二龍と、〔四〕異時　今と異りたる時、「司馬相如傳」に、異時嘗通爲郡縣矣と、〔五〕畝一金　「東方朔傳」に、酆鎬之間、號爲土膏、其賈畝一金、今規以爲苑と、〔六〕逃戶　「唐書食貨志」に、宇文融獻策、括籍外羨田逃戶、自占者、給復五年と、〔七〕解簪紱　官を罷む、〔八〕蒿穭　蒿は蓬蒿、穭は自生の稻、李白の詩、幾日相別離、門前生穭葵と、〔九〕仲卿　「前漢書」に、朱邑字仲卿、少時爲舒桐鄉嗇夫、存問耆老孤寡、遇之有恩、吏民敬愛焉、以治行第一、入爲大司農、病且死、囑其子曰、我爲桐鄉吏、其民愛我、必葬我桐鄉、後世子孫、奉嘗我、不如桐鄉民、及死其子葬之桐鄉西郭外、民果共爲邑立祠、歲時祠祭不絕と、

【詩意】田舍を卜して何許に向はんと思ふや、我が意は石佛山南の路に在る、其の山下には爾が家を繞るの川がある、千畦には秔や稌を種う、山泉の中には龍蜃の窟宅がある、平地に其の膏乳の氣を走らして、異時には一畝が一金の價に騰る、近日に官籍を逃れ去つて、逝くゆくは將に總ての簪紱を解き舍てんと思ふ、劍も賣つて其の金は牸具を買はんと願ふ、故山は平生懷はざるにあらず、廢宅に蓬と蒿穭を生ずることであらう、便ち恐れて感ずる桐鄉の人が、長く善吏でありし仲卿の墓を祠ることに、

【餘論】紀曉嵐は第一首を評して、極力擺脫、此下亦難著語、只得以曠語作收と、第二首を評して、此從前首而我本無恩二句生出、然自表捍水之功、語意殊淺、末二句與上不接、已曰招災凶則已引爲已過矣と、第三首を評して、此首氣局渾成、文淸亦極宛轉と、第五首を評して、故山二句轉折、語氣稍覺格格、然尙不甚礙、病在豈不二字、本與便恐二字呼應、而廢宅句冗贅、共間以趁韻、遂令機局不靈と、此等の評語坡詩を學ぶ者の爲め、益あるも害は無い、

## 泗州僧伽塔

我昔南行舟繫汴。
逆風三日沙吹面。
舟人共勸禱靈塔。
香火未收旂脚轉。
回頭頃刻失長橋。
却到龜山未朝飯。
至人無心何厚薄。
我自懷私欣所便。
耕田欲雨刈欲晴。
去得順風來者怨。
若使人人禱輒遂。
造物應須日千變。
今我身世兩悠悠。

泗州の僧伽塔

我昔し南行して舟を汴に繫ぐ、
逆風三日沙面を吹く、
舟人共に勸む靈塔に禱ることを、
香火未だ收まらざるに旂脚轉ず、
頭を回らせば頃刻に長橋を失す、
龜山に却到して未だ朝飯ならず、
至人は無心何ぞ厚薄せん、
我自から私を懷き便なる所を欣ぶ、
田を耕し雨を欲し刈るとき晴を欲す、
去るに順風を得來者は怨む、
若し人人をして禱る輒ち遂げしめば、
造物は應に須らく日に千變すべし、
今我身世兩ながら悠悠、

【字解】【一】繫汴　汴は汴渠卽ち汳水、其の上游は古の滎瀆、又南濟と曰ふ、首として黃河を受け、滎陽に在るを蒗蕩渠と曰ひ、東流するものを官渡水と曰ふ、而して故道二あり、一を古汴河の故道と爲し、河南の舊鄭州開封、歸德の北境より江蘇の舊徐州を經て泗に合して淮に入る、則ち知る今題に泗州とあり、而して舟繫汴とある、汴の流れは直ちに泗に入るを、【二】逆風　「法華經」に逆風吹レ浪と、【三】香火「佛經」に香火供養と、【四】龜山　泗水縣の東北、「泗州圖經」に、水陸院在二城東三十里一、宋元嘉中、文帝遣二戚貫一、拒二魏太武於二此山一、築二長城一、造二浮橋一、絕二水路一と、【五】至人　「莊子逍遙游」に、至人無レ己と、聖人、神人、共に同義、【六】順風

去無所逐來無戀。
得行固願留不惡。
每到有求神亦倦。
退之舊云三百尺。
澄觀所營今已換。
不嫌俗士汙丹梯。
一看雲山繞淮甸。

去りて逐ふ所無く來りて戀ふ無し、
行を得るは固より願ふ留るも惡から「ず、」
到る每に求めあらば神も亦倦む、
退之舊と云ふ三百尺と、
澄觀營む所今已に換はる、
俗士の丹梯を汙すを嫌はずんば、
一看せん雲山の淮甸を繞るを、

「劉禹錫何卜賦」に、同涉二於川一、其時在レ風、沿者之吉、泝者之凶、同藝二于野一、其時在レ澤、伊穭之利、乃穋之厄と、宋王應麟曰、東坡耕田二句意本レ此と、【七】千變「賈誼賦」に、千變萬化、未二始有一レ極と、【八】澄觀　韓退之、送二僧澄觀一詩に、僧伽後出淮泗上、勢到二衆佛一尤恢奇、淮無レ波平如レ席、欄柱傾扶半天赤、火燒水轉掃レ地空、突兀便高三百尺、借問經營本何人、道人澄觀名籍籍と、宋の葛立方の「韻語陽秋」を讀む、曰く唐中葉、浮屠中、有二四澄觀一、皆二支提一、以舍二僧伽一者、洛陽之澄觀也、退之元和五年、爲二洛陽令一、與二之詩一者也、參二無名大師一、爲二華嚴疏主一、譯經潤文者、會稽之澄觀也、裴休爲二塔銘一曰、元和五年、授二僧統印一、歷二九宗聖世一、爲二七帝門師一、俗壽一百二者也、「傳燈錄」有二儀國大師澄觀一、又有二曹溪別出第二世、五臺山華嚴澄觀大師一、似二卽會稽之澄觀一と、【九】俗士　此の俗士は善男善女の反對を曰ふ、公自身を指して曰ふのである、【一〇】汙丹梯　祈禱などの無益を知りつつも、其の塔上に登るを曰ふ、杜子美の詩、著書覓二丹梯一と、謝靈運の詩、躡步陵二丹梯一、姑坐侍二君子一と、

【題義】僧伽は葱嶺の北何國の人、何國は碎葉國の東北に在り、僧伽本土に在りて、少うして出家し、始めて西涼に至り、次いで江淮を歷へ、龍朔の初めに當り、臨淮に至る、信義坊に就きて居る、其地は齊の香積寺址、中宗の景龍二年、詔あり內道場に赴く、乃ち香積寺址を普光王寺と稱して居る、四

年に入寂す、淮上に葬る、後塔上に於て小僧の狀を現す、是に於て風を乞ふ者は風を生じ、子を求むる者は子を得、太平興國七年に塔蓋を重ぬと云ふ、乃ち唐宋の間、其の民間の信仰を繫ぎしものである、

【詩意】我は昔し南行するとき舟を汴河に繫ぐ、其の時や逆風が三日吹き續きて沙が面を打つ、舟人は共に逆風の歇まんことを靈塔に禱れと勸告する、乃ち香火を供したる間も無く旂脚が轉廻する、頭を回らして看る頃刻の間に長橋を失ふ、龜山に却到する頃は未だ朝飯ならざりき、それ至人は無心にして甲乙に對して平等、決して厚薄の分ちあるべきでない、凡俗は皆私欲を懷き私欲の便なる所を欣ぶ、耕田の時は雨を欲求し刈る時は晴を欲求する、南去の者は順風を欣ぶも北來の者は其れが逆風なれば怨むであらう、若しや南人も北人も禱が成就せば、造物者は日に千變せざるべからず、今我は身も世も兩ながら悠悠、去るも逐ふ所のものは無く來るも戀ふものは無い、前行を安穩に得るは固より願であるが留まるも惡くは無い、到來する每に勝手なる事を求むれば神も亦倦むであらう、退之は舊云ふ三百尺であると、澄觀が營む所の塔は今日の塔とは異なる、神が若し俗士の丹梯を汙すを嫌はざれば、我は塔頂に登りて雲山が淮甸を繞るの景を看んと欲するものである、

【餘論】紀曉嵐曰く、極力作二擺脫語一、純涉二理格一、而仍清空如レ話、確是僧伽塔、不レ可レ移二之別水神一、又就二自己一伸一層、愈加二滿足一、又層層波瀾、一齊捲盡、只就レ塔作レ結、簡便之至と、今案するに祈禱を嘲笑せずして、神も亦倦厭すると言ひ、而して破佛の猛將韓退之を拉し來りて、以て倍賓と爲す、

至奇、至妙、至巧、坡公を除きては此の種の詩を歌ふものは斷じてない、實に天下一品である、

## 龜山

我生飄(一)蕩去何求。　我が生飄蕩去つて何をか求めん、
再過二龜(二)山一歲五周。　再び龜山を過ぎて歲五周、
身行二萬里一半二天下一。　身は萬里に行きて天下に半ばし、
僧臥二一菴一初白頭。　僧は一菴に臥して初めて白頭、
地隔二中(三)原一勞二北(四)望一。　地は中原を隔てて北望を勞し、
潮連二滄海一欲二東游一。　潮は滄海に連り東游せんと欲す、
(五)元嘉舊事無二人記一。　元嘉舊事人の記する無し、
(六)故壘摧頹今在不。　故壘摧頹今在りや不や、

【字解】【一】飄蕩　杜子美の詩、我生苦飄蕩と、俗語の漂浪である、【二】龜山　泗州盱眙縣龜山鎭に在る、【三】中原　曹子建の語、游二驪中原一、逍二遙閒宮一と、【四】北望　「龜山操」に、季桓子、受二齊女樂一、孔子欲レ諫不レ得、退而作二此曲一、其詞曰、予欲レ望レ魯兮、龜山蔽レ之、手無二斧柯一、奈二龜山一何と、【五】元嘉　宋の文帝の紀年、【六】故壘　公の自注に、宋文帝、遣三將拒二魏太武一、築二城此山一と、

【詩意】我が生は飄蕩として去つて何をか求めんや、再び龜山を過ぐ屈指前游より五年を經、一身は萬里に行き殆んど天下の半は足跡を印してある、僧は一菴に起臥して白頭の老まで至る、地は中原を隔りて北望を勞する、潮水は滄海に連りて東海の游を爲さんと思ふ、元嘉の舊事は何人も記憶する者

は居らない、故壘摧頽して今在りや不や、

【餘論】紀曉嵐曰く、覇業雄圖、倘有今昔之感、而況一人之身乎、前四句與後四句映發有情、不是弔古套語と、

## 書泗州孫景山西軒

泗州孫景山の西軒に書す

落日明孤塔。青山繞病身。　落日孤塔明かに、青山は病身を繞る、

知君向西望。不媿塔中人。　知る君が西に向つて望む、塔中の人に媿ぢざるを、

【詩意】孫景山が家の西軒より見れば、落日の光が僧伽塔に挂りて明かである、而して四面の青山は病を養ふ人の身を繞るのである、知る君が西に向つて望むは、僧伽其の人に媿ぢざることである、

## 泗州過倉中劉景文老兄。戲贈一絕

泗州、倉中の劉景文老兄に過ぎ、戲れに一絕を贈る

既聚（一）伏波米。還數（二）魏舒籌。　既に伏波の米を聚め、還た數ふ魏舒の籌、

應笑蘇夫子。（三）僥倖得湖州。　應に笑ふべし蘇夫子、僥倖に湖州を得たるを、

【字解】【一】伏波米　「馬援傳」に、於帝前聚米、爲山谷、指畫形勢と、【二】魏舒籌　「晉魏舒傳」に、舒爲鍾毓長史、毓每與參佐射、舒常爲畫籌而已、後遇朋人不足以舒滿數、毓初不知其善射、舒容範閑雅、發無不中、舉坐愕然、莫有敵者、徒謝而嘆曰、吾之不足以盡卿才、有如此射矣、豈一事哉と、【三】僥倖　徼幸と同じ、

【題義】倉中は泗州の一地名、此に劉景文を訪うて戲れに此の絕句を賦したのである、

【詩意】劉君は古の馬伏波の米を聚め、還た魏舒が籌を數ふるの才を有する人である、其の才を以て視れば、此の蘇夫子が但二千石に過ぎぬ湖州を得たるを笑はるるであらう、

## 過淮三首。贈景山兼寄子由

淮を過ぐ三首、景山に贈り、兼ねて子由に寄す

（一）好在長淮水。十年（二）三往來。　好在なり長淮の水、十年三たび往來す、

功名（三）倦已矣。歸計亦悠哉。　功名倦に已みぬ、歸計も亦悠なる哉、

（四）今日風憐客。平時浪作堆。　今日風客を憐み、平時浪堆を作す、

晚來洪澤口。（五）捍索響如雷。　晚來洪澤の口、捍索響雷の如し、

【字解】【一】好在　健在とか、或は無事であつたと云ふ意義、白樂天の詩、好在王員外、是れは人に就いて言ふ、【二】三往來　熙寧四年辛亥に杭に赴き、七年甲寅に密州に移り、元豐二年己未に、徐より湖に移る、淮上を往來すること九年、【三】倦已矣　杜子美の詩、素業行已矣、又、坐穩興悠哉と、【四】今日　施肩吾、過揚子江詩、今日步春草、復來縱此道、江神也世情、爲我風色好と、【五】捍索　捍はフセグ、尭卿曰、舟有捍索、行則斂、舟住則爲纜と、

【詩意】昔より熟觀せし長淮の水が好在である、吾は十年間に此の水を三度も渡る、功名心は最早

無い、さうだと申して歸田の計も亦悠なる哉である、今日は穩波である、風が客を憐む爲であらう、平時は此の淮浪は頗る高い、晩來洪澤の口では、捍索の音が雷の如く響くは、諸船が泊する用意を爲すのである、

〔二〕

過淮山漸好。松檜亦蒼然。　淮を過ぎて山漸く好し、松檜も亦蒼然、
靄靄藏孤寺。冷冷出細泉。　靄靄孤寺を藏し、冷冷細泉出づ、
故人眞吏隱。小檻帶巖偏。　故人眞に吏隱、小檻巖を帶びて偏し、
却望臨淮市。東風語笑傳。　却つて臨淮の市を望めば、東風語笑傳ふ、

【字解】【一】靄靄　雲の盛んなる貌、陶明の詩、停雲靄靄と、【二】冷冷　水聲を謂ふ、古樂府に、山溜何冷冷と、陸機の賦に、音冷冷而盈レ耳と、【三】吏隱　「汝南先賢傳」に、鄭欽吏二隱於蟻陂之陽一と、韓退之の詩、太平公事少、吏隱詎相賒と、【四】却望　「元和郡縣志」に、泗州臨淮郡、南臨二淮水一、西枕二汴河一、水路東至二楚州一、二百二十里と、

【詩意】淮を過ぎ去れば山漸く好く、松檜も亦蒼然の色を呈して居る、靄靄として雲は孤寺を藏して居る、冷冷として響くものは細泉である、故人は眞に吏隱である、堂屋の小檻は巖を帶びて偏つてある、却つて臨淮の市街を望めば、東風が市中の語笑を傳へて來る、

〔三〕

回首濉陽幕。簿書高沒人。　首を回らせば濉陽の幕、簿書高く人を沒す、
何時桐柏水。一洗庾公塵。　何れの時か桐柏の水、一洗す庾公の塵、
此去漸佳境。獨游長愴神。　此を去つて漸く佳境、獨游して長く神を愴ましむ、
待君詩百首。來寫浙西春。　待つ君が詩百首、來り寫す浙西の春、

【字解】【一】濉陽　「元和郡縣志」に、春秋宋國、秦碭郡、漢曰二濉陽一、以二濉水在一郡之南一也と、【二】桐柏水　「王注」に、桐柏山、在二唐州桐柏縣一、淮水所レ出と、浙江の天台桐柏とは異なる、【三】佳境　「晉顧愷之傳」に、毎レ食二甘蔗一、常自レ尾至レ本、人或怪レ之、云漸入二佳境一と、

【詩意】首を回らせば君は濉陽の幕に居る、簿書堆裏に沒せられし人である、何れの時にか桐柏の水を以て、庾公が吏塵を一洗し去るや、此を去つて段段と佳境に入るも、獨游なれば長く神を愴ましむること多い、只待つ君が詩百首も作り、來りて浙西の春色を寫さんことを、

【餘論】第一首は淮を過ぎることを敍し、第二首は景山に寄せ、第三首は子由に寄せしものである、紀曉嵐は第一首を評して、一氣渾成、而又非二貌襲之盛唐一と、二首を評して、不レ出レ色と、三首を評して、此首從二子由一挽到二過淮一、章法不レ苟と曰ふ、余は詩品として過淮は上、寄景山は中、寄子由は下と段段に下るを覺ゆ、紀も一洗五字は露骨に過ぐと曰ふ、余も紀に贊成するものである、但し五律

としての格法は議すべきものは無い。

## 舟中夜起

舟中夜起つ

微風蕭蕭吹菰蒲。　微風蕭蕭として菰蒲を吹き、
開門看雨月滿湖。　門を開きて雨を看れば月湖に滿つ、
舟人水鳥兩同夢。　舟人水鳥兩ながら夢を同じうし、
大魚驚竄如奔狐。　大魚は驚竄して奔狐の如し、
夜深人物不相管。　夜深けて人物相管せず、
我獨形影相嬉娯。　我獨り形影相嬉娯す、
暗潮生渚弔寒蚓。　暗潮渚に生じて寒蚓を弔す、
落月挂柳看懸蛛。　落月柳に挂り懸蛛を看る、
此生忽忽憂患裏。　此の生忽忽憂患の裏、
清境過眼能須臾。　清境眼を過ぎ能く須臾、
雞鳴鐘動百鳥散。　雞鳴鐘動きて百鳥散す、
船頭擊鼓還相呼。　船頭に鼓を擊ちて還た相呼ぶ、

【詩意】舟中に夜中起きて看れば、微風が蕭蕭として菰蒲を吹く、船窓を開いて風聲を雨聲かと疑うて看れば晴月の光湖に滿ちてある、舟人も水鳥も兩ながら夢を結んで居る、時に大魚が驚き竄る勢ひ奔狐の如きを看る、夜深けて人と物とは相管せず、我獨り起ちて形影相嬉娯するのみ、暗潮は渚邊に生じて定んで寒蚓を弔するであらう、落月は岸柳に挂りて懸絲の蛛を看る、此の生や忽忽憂患の裏に過ぐ、偶ま清境を看るも過眼良に須臾である、雞が鳴けば鐘も曉に動き百鳥も宿を出でて散ず、是に於て船頭に鼓を擊つて舟人は客を呼ぶのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、開レ門看レ雨月滿レ湖、此從二聽レ雨寒更盡、開レ門落葉深一化出と、余は此の兩句唐人なるを記憶するも、作者の名を忘る、然れども許せんと欲する心は紀と同一である、

## 余去金山五年而復至。次舊詩韻贈寶覺長老

余金山を去り五年にして復た至る、舊詩韻に次して寶覺長老に贈る

誰能斗酒博西涼。　誰か能く斗酒西涼を博する、
但愛齋廚法豉香。　但愛す齋廚法豉の香を、
舊事眞成一夢過。　舊事眞成に一夢に過ぎ、

【字解】(一)斗酒　續漢書、敦煌張氏家傳曰、扶風孟佗、以二蒲萄酒一斗一遺二張讓一、即得二涼州刺史一と、(二)齋廚　寺の臺處を曰ふ、

高談爲洗五年忙。　高談爲めに洗ふ五年の忙、
清風偶與二山阿曲一。　清風偶ま山阿の曲よりし、
明月聊隨二屋角方一。　明月聊か屋角の方に隨ふ、
(四)稽首願師憐二久客一。　稽首す願はくは師久客を憐めよ、
直將二(五)歸路一指二(六)茫茫一。　直ちに歸路を將て茫茫を指せ、

【三】法豉　俗に言ふ納豆、豆を以て料と爲し、鹹淡の二種あり、淡豆豉は黑き大豆を以て、水に浸し蒸熟し、蒿を覆ふ、發黴の後、水を拌して甕に入る、泥封して之を曝らす、久しくして始めて成る、鹹豆豉の造法も略同じ、發黴の後、鹽や薑椒等を入るるのみ、【四】稽首　佛氏の敬禮語、首地に至りて、稽留する少時、「周禮」の禮法なるも、佛氏は稽顙を多く用ひない、【五】歸路　安心の歸路を曰ふ、山中の歸路ではない、【六】茫茫　「淮山會策」に、一朝臥レ疾在レ床、衆苦縈纏、前去茫茫、未レ知二何往一と、退之游二青龍寺一詩、桃源迷路竟茫茫、

【題義】金山は江蘇丹徒縣の西北に在る、舊は江中に在りしが、四圍の沙が漲りて陵と成るもの、本と浮玉山と名けしが、裴頭陀が住して以來今の名とす、山中の冷泉を天下第一泉と稱す、公は熙寧七年に杭より密に移り、元豐二年徐より湖に移る前後凡そ五年、今其の舊題の韻に次して寺主の寶覺長老に贈る、

【詩意】誰人か斗酒を辭せす西涼を博するや、精舍の齋廚は酒よりは法豉の香が可い、舊事は眞成に一夢に過ぎぬ、今日高談し五年の俗忙を洗ひ去る、清風は偶ま山阿の曲より吹き來り、明月は聊か精舍の屋角に依り添うて來る、長老に稽首する願はくは師よ久客を哀憐して、直ちに我が適歸の路の茫茫たるを指示し玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰く、五六作二寫景一則纖、借二寫到處隨緣之意一則不レ妨と、紀評極めて巧妙、亦坡公の筆法を奪ふものである、

## 大風留二金山一兩日

大風金山に留まる兩日

(一)塔上一鈴獨自語。　塔上の一鈴獨自から語る、
(二)明日顚風當二斷渡一。　明日顚風なれば當に斷渡すべし、
朝來白浪打二蒼崖一。　朝來白浪蒼崖を打ち、
倒射軒窗作二(三)飛雨一。　倒射軒窗飛雨を作す、
(四)龍驤萬斛不二敢過一。　龍驤萬斛敢て過ぎず、
漁舟一葉從二掀舞一。　漁舟一葉掀舞に從す、
細思城市有二(五)底忙一。　細思するに城市底の忙かある、
却笑蛟龍爲レ誰怒。　却つて笑ふ蛟龍誰が爲に怒るを、
無事久留童僕怪。　無事久しく留まる童僕怪しむ、
此風聊得妻孥許。　此の風聊か得たり妻孥の許を、

【字解】【一】塔上　「晉書佛圖澄傳」に、石勒死之年、天靜無レ風、而塔上一鈴獨鳴、佛圖澄曰、鈴音云二國有二大喪一不レ出二今年一矣と、「佛圖澄本傳」に、石宣與二佛圖澄一同坐、浮圖一鈴獨鳴、澄謂二鈴音一以言レ事、無レ不二效驗一と、【二】明日　此の七字は鈴音が歌うた語である、【三】飛雨　謝元暉の詩、湖風吹二飛雨一、蕭條江上來と、【四】龍驤　「王注」に、龍驤大舟也、蓋言無レ撥以濟、則大才難レ進、如二何無レ水、而龍驤之舟不レ行也と、公の詩、萬斛龍驤到自遲とある、【五】有底忙　韓退之の詩、有二底忙時一不二肯來一と、【六】灌山澄

人。參寥の號である、潛は潛と同じ、參寥名は道潛、山人の二字を加へて號と爲す、査愼行云、先生自ㇾ徐移ㇾ湖、過二高郵一、與二少游、參寥一、同行遊二金山一、時剛公皆在焉と、

(六)潛山道人獨何事。　潛山の道人獨り何事ぞ、
夜半不ㇾ眠聽二粥鼓一。　夜半に眠らず粥鼓を聽く、

【詩意】寺塔に挂る一鈴が獨自から語りしは、明日は風が顚じて人が渡を斷つと告げたのである、果せるかな朝來より强風の爲め白浪が蒼崖を高く打つ、餘波が軒窗を倒射して宛も飛雨の狀態である、巨大なる萬斛の舟も過ぐることは出來ない、況して漁舟の一葉なる風に掀舞せらるるに從す外はない、細思するに城市には底事の爲め忙しきであるか、却つて笑ふ蛟龍輩は誰の爲め怒るのである、何の用事も無きに久留するは家に在る童僕は怪しむことであらう、此の風の爲めの停留は聊か妻孥の許すことである、潛山の道人は俗家の累なきに何事ぞや、夜半に眠るべきに眠らずして翌朝の粥鼓を聽くまで起きて居る、

【餘論】紀曉嵐曰く、筆力橫恣、又無事二句、金山阻風中、有ㇾ景有ㇾ人と、「漁隱叢話」に、對句法、人不ㇾ過三以ㇾ事以二ㇾ意、出處備具、謂二之妙一、不ㇾ若二東坡之徵意奇特一、如ㇾ曰下聞說騎ㇾ鯨游汗漫、記曾捫ㇾ蝨話中酸辛上、又曰下龍驤萬斛不二肯過一、漁舟一葉從中掀舞上、以ㇾ鯨爲二蝨對一、以二龍驤一爲二漁舟對一、大小氣焰之不ㇾ等、其意若ㇾ玩ㇾ世、謂下之秀傑之氣、終不ㇾ可ㇾ沒者上と、

遊二惠山一　惠山に遊ぶ

余昔爲二錢塘(一)倅一。往二來無錫(二)一。未三嘗不ㇾ至二惠山(三)一。既去五年。復爲二湖州一。與二高郵秦太虛杭僧參寥一同至。覽二唐處士王武陵竇羣朱宿所ㇾ賦詩一。愛二其語淸簡蕭然有二出塵之姿一。追二用其韻一。各賦二三首一。

【訓讀】余昔錢塘の倅と爲り、無錫に往來し、未だ嘗て惠山に至らずんばあらず、既に去つて五年、復た湖州と爲り、高郵、秦太虛、杭僧參寥と同じく至り、唐の處士王武陵、竇羣、朱宿が賦する所の詩を覽る、其の語淸簡蕭然出塵の姿あるを愛し、其の韻を追用し、各の三首を賦す、

【字解】【一】錢塘　浙江省杭州の地、【二】無錫　今日は浙江の鄰省、江蘇省の蘇常道、【三】惠山　無錫縣の西郊七里、六朝宋の司徒湛茂之の別墅を寺と爲したもの、

夢裏五年過。覺來雙鬢蒼。　夢裏に五年過ぎ、覺め來れば雙鬢蒼たり、
還將二塵土足一。一步瀹瀾(一)堂。　還た塵土の足を將て、一たび步す瀹瀾堂、
俯窺松桂影。仰見鴻鶴翔。　俯して窺ふ松桂の影、仰ぎ見る鴻鶴の翔るを、
炯然肝肺間。已作二冰玉光一。　炯然たる肝肺の間、已に冰玉の光を作す、

虛明中有色。清淨自生香。　虛明中に色あり、清淨自から香を生ず、
還從世俗去。永與世俗忘。　還た世俗に從つて去るも、永く世俗と忘れん、

【字解】〔一〕漪瀾堂　公自から注す、堂は寺中に在る、惠山第二泉の上に在る、

【詩意】五年間は全く夢中に過ぎ去る、覺め來るときは已に雙鬢が蒼色と爲つて居る、還た塵土を往來する足を以て、一歩を運んで今漪瀾堂に入る、俯して松桂の巖下に在るを窺ひ、仰ぎて鴻鶴の巖上に翔るを見る、炯然たる肝肺の間は、已に冰玉の光を作すのである、其の玉は虛明中に色ありて、清淨にして自から光を生ずる、而かも還た身は世俗に從つて去つて、心は永く世俗と忘れんと思ふ、

〔二〕

薄雲不遮山。疎雨不濕人。　薄雲山を遮らず、疎雨人を濕ほさず、
蕭蕭松徑滑。策策芒鞋新。　蕭蕭松徑滑らかに、策策芒鞋新なり、
嘉我二三子。皎然無緇磷。　嘉す我が二三子、皎然として緇磷無きを、
勝游豈殊昔。清句仍絕塵。　勝游豈昔に殊ならん、清句仍絕塵なり、
弔古泣舊史。疾讒歌小旻。　古を弔して舊史に泣き、讒を疾んで小旻を歌ふ、
哀哉扶風子。難與巢許鄰。　哀しい哉扶風の子、巢許と鄰し難きを、

【自注】謂寶臺。

【字解】〔一〕策策　白樂天の詩、落葉聲策策と、〔二〕緇磷　李白の詩、皓璧無緇磷と、「論語」に、磨而不磷、涅而不緇と、緇は黑である、〔三〕勝游　白樂天の詩、勝游從此始と、〔四〕絕塵　「莊子徐無鬼篇」に、天下馬有成材、超軼絕塵、不知其所と、「史記樂毅傳」太史公曰、蒯通主父偃、讀樂毅之報燕王書、未嘗不廢書而泣也と、〔五〕小旻　毛詩小旻は大夫が幽王を諷刺するのである、〔六〕扶風子　寶羣を謂ふ、寶羣は扶風の人、毗陵に隱居し、節操を以て聞ゆ、徵されて左拾遺を拜し、後御史中丞と爲る、〔七〕巢許　巢父は堯代の高士、山居して世利を厭ふ、樹を以て巢と爲し、其の上に寢る、堯天下を讓るも受けない、許由、堯又許由に天下を讓らんとするも、去つて箕山に逃る、杜子美の詩、巢許山林志と、

【詩意】薄雲なれば山を遮るには到らない、疎雨なれば人を濕すまでに到らない、蕭蕭たる松徑は滑らかにして、踏めば策策と鳴つて芒鞋の新なるかと疑ふ、嘉す我黨の二三子、其の人品皎然として緇磷の無きを、此の勝游は昔の勝游も同じ、淸句は良に絕塵である、古を弔するときは其の歷史に泣かされ、讒者を疾みつつ小旻の詩を歌ふ、哀しい哉扶風の竇羣子、逃志はありながら巢許と鄰することの出來ぬことを、

〔三〕

敲火發山泉。烹茶避林樾。　火を敲きて山泉を發し、茶を烹て林樾に避く、
明窗傾紫盞。色味兩奇絕。　明窗紫盞を傾け、色味兩ながら奇絕、
吾生眠食耳。一飽萬想滅。　吾が生眠食のみ、一飽すれば萬想滅す、

頗笑玉川子。飢弄〔三〕三百月。　頗笑す玉川子、飢弄す三百月、
豈如山中人。睡起〔四〕山花發。　豈如かん山中の人、睡起すれば山花發き、
〔五〕一甌誰與共。〔六〕門外無二來轍一。　一甌誰と共にせん、門外來轍無し、

【字解】〔一〕林樾　「玉篇」に、楚謂二兩樹交陰之下一曰レ樾と、樹の重なり掩ふを曰ふ、〔二〕紫盞　「蔡襄茶錄」に、茶色白宜二黒盞一、建安所レ造者紺黒、紋如二兎毫一、他處或色紫、皆不レ及也と、〔三〕三百月　盧玉川、謝孟諫議新茶詩に、開レ緘宛見二諫議面一、手閲二月團三百片一と、〔四〕山花發　李白の詩、東風吹二山花一、安可レ不レ盡レ杯と、劉禹錫の詩、野狗度二春水一、山花映二巖扉一と、〔五〕一甌　鄭谷の詩、一甌春有レ味と、甌は甌瓶、茶を貯ふる瓶である、〔六〕門外　「陳平傳」に、門外多二長者車轍一と、

【詩意】火を敲き發すは山泉を汲んで茶を煮る爲めである、宛かも林樾に身を避けて宜しい、林亭の明牕に倚りて紫盞を傾くれば、茶味も茶色も兩ながら奇絶である、吾生は眠と食とに在るのみ、一飽すれば萬想盡く滅する、頗笑するは玉川子の行狀である、飢弄する月團は三百片であると、此の如きことでは山中の人の眞味を味ふには及ばない、山中に睡起すれば山花の發くがある、一甌の茶を誰と共に喫せんや、門外は寂寞として訪人の車轍は無い、

【餘論】紀曉嵐は第一首の評に、中四句自在流出、瀟灑穆穆、不レ減二原作一、唯起結八句、未レ免二作意一耳と、又二首を評して、亦是古調と、又三首を評して、此則純用二本色一と、今茲に王武陵の原作を見ん、秋日游二古寺一、秋山正蒼蒼、泛レ舟次二巖室一、稽首金山堂、下有二寒泉流一、上有二珍禽翔一、石門吐二明月一、竹木涵二清光一、中夜何沈沈、但聞二松桂香一、曠然出二塵境一、幽慮澹已忘、又竇羣の詩、共訪青山寺、曾隱南朝人、問レ世松桂老、開レ襟言笑新、歩移月亦出、水映石磷磷、予洗腸中酒、君濯纓上塵、結彩入二幽抱一、淸氣逹二蒼旻一、信レ此澹忘レ歸、淹留氷玉鄰、又朱宿の詩、古寺隱二秋山一、登攀度二林樾一、悠然靑蓮界、此地塵境絶、機閉任二晝昏一、慮澹知二生滅一、微吹遞二遙泉一、疎松對二殘月一、庭虛露華綴、池淨荷香發、心悟形未レ留、遲遲履二歸轍一、

## 贈二惠山僧惠表一　惠山の僧惠表に贈る

行二徧〔一〕天涯一意未レ闌。　天涯に行き徧くして意未だ闌ならず、
〔二〕將レ心到處遣二人安一。　心を將て到る處に人を安んせ遣む、
山中〔三〕老宿依然在。　山中の老宿依然として在り、
案上〔四〕楞嚴已不レ看。　案上の楞嚴已に看ず、
〔五〕攲レ枕落花餘二幾片一。　枕を攲て落花幾片を餘す、
閉レ門新竹自千竿。　門を閉づ新竹自から千竿、
客來茶罷空無レ有。　客來りて茶罷み空しく有る無し、
〔六〕盧橘楊梅尚帶レ酸。　盧橘楊梅尚は酸を帶ぶ、

【字解】〔一〕天涯　白樂天の詩、春生何處暗周遊、海角天涯遍始休と、〔二〕將心　「傳燈錄惠可傳」に、可問曰、諸佛法印、可レ得レ聞乎、磨曰、諸佛法印、匪レ從レ人得一、曰、我心未レ寧、乞師與安、磨曰、將レ心來、與レ汝安焉と、〔三〕老宿　「釋」に、比丘、五十夏以上、名二老宿一と、〔四〕楞嚴　大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の畧名、十卷ある、首楞嚴三昧經二卷あるも、詩人用ふる楞嚴は十卷本である、

ろ、其の實は彈丸の如く五月中に熟す、其の味は甜酸、太白の詩、江北荷花開、江南楊梅熟と、

【詩意】行脚して天涯に巡游したるも其の意は猶ほ滿足はせぬ、が禪法を說いて到る處に人を安心せしむ、山中に老宿は依然として在すも、案上に置く楞嚴は悟りし後は糟粕なれば已に看ない、枕を敧つる處は落花が幾片を餘すや、門を閉すの新竹は矗として自から千竿と成る、客來るも茶を喫する外何物も無い、盧橘も楊梅も熟せざれば尙ほ酸味を帶びて供することが出來ない、

【餘論】公の詩としては可も無く、不可も無く、尋常喫茶飯の類と見てよい、

## 贈二錢道人一

錢道人に贈る

書生苦(一)レ信レ書。世事仍臆度。
書生書を信ずるに苦しむ、世事仍ほ臆度す、

不(二)レ量二力所一レ負。輕出二千鈞諾(三)一。
力の負ふ所を量らず、輕々しく千鈞の諾を出す、

當時一快意(四)。事過有二餘怍(五)一。
當時一快意、事過ぎて餘怍あり、

不レ知幾州鐵。鑄二此一大錯(六)一。
知らず幾州の鐵か、此の一大錯を鑄る、

我生涉二憂患一。常恐長二罪惡一。
我れ生きて憂患に涉り、常に恐る罪惡を長ずるを、

靜觀殊可(七)レ喜。脚淺猶容卻(八)。
靜觀殊に喜ぶ可し、脚淺にして猶ほ容卻、

而況錢夫子。萬事初不レ作。
而かも況んや錢夫子、萬事初めより作さず、

相逢更何言。無(九)レ病亦無レ藥。
相逢うて更に何をか言はん、病無く亦藥無し、

【字解】【一】苦信書　「孟子盡心章」に、盡信レ書則不レ如レ無レ書、吾於二武成一取二二三策一而已矣と、【二】不量　「左傳僖公二十年」に、君子曰、蘭之見レ伐、不レ量レ力也と、【三】千鈞諾　「漢書季布傳」に、諺曰、得二黃金百斤一、不レ如レ得二季布一諾一と、【四】快意　杜子美の詩、快意在二目前一と、又人生快意多レ所レ辱と、【五】餘怍　「論語憲問」に、其言之不レ怍、則爲レ之也難と、怍は慚二「キマリガワルイ」の意義、【六】一大錯　孫光憲の「北夢瑣言」に、唐魏博節度羅宏信卒、子紹威繼レ之、本府有二牙兵八千一益驕、因與二汴人一計會殺盡、雖レ害二素心一、而漸爲二梁祖凌制一、乃謂二親吏一曰、聚二六州四十三縣鐵一打二一箇錯一不レ成と、【七】可喜　「楚辭」に、獨立不レ遷、豈不レ可レ喜と、【八】容卻　「漢劉向傳」に、猶二卻行而求一レ及二前人一也と、退行と同じ、後へ退くこと、【九】無病　「傳燈錄」に、百丈懷海禪師云、佛是衆生邊藥、無病不レ要レ喫レ藥、藥病俱消、喩如二淸水一と、

【詩意】書生は書を讀むも何れの書を信じてよいかに苦しむ、世事も紛雜、臆度せざるを得ない、己が自力の負ふ所を量らずして、輕輕に千鈞の重諾を爲すこともある、其の時や一に快意であるが、事が過ぎた後は餘怍あるものである、縱ひ幾州の鐵を聚めて一個是は大丈夫のものを鑄たと考へても、何ぞ料らん是も一大錯であつたことを、我が生は內憂外患に涉る、常に恐る其の動作が罪惡を長ずることのみなるを、唯靜觀する方法を殊に喜びとする、脚淺ければ猶容易に卻行する、而かも況んや錢夫子、萬事初めより作さない、相逢ふも更に何の言ふ所も無い、無病なればこそ無藥である、

【餘論】紀曉嵐曰く、純爲二介甫輩一發、全用二宋格一、然自是一種不レ可二磨滅一文字と、錢道人に依託して而して其の敵は本能寺に在るもの、老泉辨姦論以上の痛棒である、

## 與秦太虛參寥會於松江而關彥長徐安中適至分韻得風字二首

秦太虛・參寥と松江に會す、而して關彥長・徐安中適ま至る、分韻、風の字を得たり　二首

吳越溪山興未窮。　　吳越の溪山興未だ窮まらず、
又扶衰病過垂虹。(一)　　又衰病を扶けて垂虹を過ぐ、
浮天自古東南水。(二)　　天に浮ぶは古より東南の水、
送客今朝西北風。　　客を送る今朝西北の風、
絕境自忘千里遠。(三)　　絕境自から忘る千里の遠きを、
勝游難復五人同。　　勝游復五人同じうする難し、
舟師不會留連意。　　舟師は會せず留連の意を、
擬看斜陽萬頃紅。　　看んと擬す斜陽萬頃の紅、

【題意】秦太虛と參寥と三人にて松江に會合したるとき、關彥長と徐安中の二人が偶然至れるに依つて、五人にて分韻して公は風の字を得たのである、

【字解】【一】垂虹「吳郡志」に垂虹吳江東門外橋名、一名長橋、慶曆八年、縣尉王廷堅造、東西百餘丈、中間有垂虹亭と、【二】浮天「郭氏元中記」に、天下之多者水焉、浮天載地と、【三】絕境「淵明桃花源記」に、來此絕境と、

【詩意】吳越を挾んでの溪山は興の窮まり無きものである、又衰病を扶けつつ垂虹橋を過ぎる、天に浮ぶ如くなるは古より東南の水狀である、客を送るは今朝便宜にも西北の風が吹く、絕境は自から千里の遠きを忘る、勝游する五人が復會同することは容易でない、舟師は我輩が留連の意を會せざるも、我輩五人は斜陽船中にて萬頃の紅を看んと思ふからである、

〔二〕

二子緣詩老更窮。　　二子詩に緣りて老いて更に窮す、
人間無處吐長虹。(一)　　人間處の長虹を吐く無し、
平生睡足連江雨。(二)　　平生睡は足る連江の雨、
盡日舟橫擘岸風。(三)　　盡日舟は橫ふ擘岸の風、
人笑年來三黜慣。　　人は笑ふ年來三黜に慣るるに、
天教我輩一尊同。　　天は我輩をして一尊同じからしむ、
知君欲寫長相憶。　　知る君が長相憶を寫さんと欲し、
更送銀盤尾鬣紅。(四)　　更に銀盤尾鬣の紅を送るを、

【字解】【一】長虹　江淹謂郭筆曰、子之咳唾成珠玉、吐氣作虹蜺、非碌碌儔比也と、【二】連江雨　杜牧之の詩、一夜風吹竹、連江雨送秋と、【三】擘岸風　王註曰、南中風吹舟拍岸、謂之擘岸風、吹舟擘岸、謂之開岸風、擘岸乃開岸之義也と、【四】尾鬣紅　鬣は馬にはタテガミ、魚はヒレである、

【詩意】太虛と參寥の二子は詩を推敲するに緣つて老いて更に窮するも、人間世界別に長虹の如き氣

を吐く所はない、平生は充分に睡を取る漣江の雨に、盡日舟は橫はる擘岸の風に、人は多く笑ふ年來僕が三度左遷に慣れたるを、而かも天は今日我輩等に一尊を同じうせしめらる、知る君が長相憶を寫さんと欲して、再度も銀盤尾鬣の紅を送らるるを、

【餘論】紀曉嵐曰く、二詩皆清老と、查愼曰く、浮天二句、入ニ許丁卯手一、便成ニ板對一、由ニ其才氣短小一、不ニ能ニ動宕一也と、

## 次ニ韻關令送一ㇾ魚　關令魚を送るに次韻す

(一)擧ㇾ網驚呼得ニ巨魚一。　網を擧げて驚呼す巨魚を得たりと、
(二)饞涎不ㇾ易ㇾ忍ニ流酥一。　饞涎流酥を忍び易からず、
更煩ニ(三)赤脚長鬚老一。　更に赤脚長鬚老を煩はして、
來趁西風(四)十幅蒲。　來り趁はしむ西風十幅蒲、

【字解】【一】擧網「易林」に、漁父擧ㇾ網、先得ニ大魚一と、【二】饞涎　美味を看てヨダレを流すのである、【三】赤脚長鬚　韓退之の詩、一奴長鬚不ㇾ裹ㇾ頭、一婢赤脚老無ㇾ齒と、【四】十幅蒲「國史補」に、舟船之盛、盡ニ於西江一、編蒲爲ㇾ帆、大者或數十幅、自ニ白沙一、泝ㇾ流而上、常待ニ東北風一、謂ニ之潮信風一と、

【詩意】網を擧げて看れば存外巨魚が捕へられ驚呼したのである、之を聞いて饞涎が我慢することが出來ず流酥の如くに流る、更に僕や下婢を煩はして、復一尾を得んと思うて西風十幅の蒲を趁はしむる、

## 次ニ韻秦太虛見ㇾ戲ニ耳聾一　秦太虛が耳聾を戲れらるるに次韻す

君不ㇾ見詩人(一)借ㇾ車　君見ずや詩人車を借る
無ㇾ可ㇾ載。　載すべき無し、
(二)留ニ得一錢一何足ㇾ賴。　一錢を留め得たるも何ぞ賴むに足らん、
晚年更似杜陵翁。　晚年更に似たり杜陵の翁に、
(三)右臂雖ㇾ存耳先聵。　右臂存すと雖も耳先づ聵す、
人將ニ(四)蟻動一作ニ牛鬪一。　人は蟻動を將て牛鬪と作す、
我覺風雷眞(五)一噫。　我は覺ゆ風雷の眞に一噫なるを、
(六)聞塵掃盡根性空。　聞塵掃ひ盡して根性空し、
不ㇾ須ニ更枕ニ清流派一。　須ひず更に清流派に枕するを、
(七)大朴初散失ニ混沌一。　大朴初めて散じて混沌を失す、
(八)六鑿相攘更勝敗。　六鑿相攘うて更に勝敗、
(九)眼花亂墜酒(一〇)生ㇾ風。　眼花亂墜して酒風を生ず、
(一一)口業不ㇾ停詩有ㇾ債。　口業停めず詩に債あり、

【字解】【一】借車「歐陽永叔詩話」に、孟郊、賈島、皆以ㇾ詩窮至ㇾ死、而平生尤自喜爲ニ窮苦之句一、孟有ニ移居詩一、借ㇾ車載ニ家具一、家具少ニ於車一、乃是無ニ一物一耳と、【二】留得一錢　杜子美の詩、囊空恐羞澀、留ニ得一錢一看と、【三】右臂　杜子美の詩、此身飄泊苦ニ西東一、右臂偏枯半耳聾と、【四】蟻動「晉殷仲堪傳」に、父師嘗患ニ耳聰一、聞ニ牀下蟻動一、謂ニ之牛鬪一と、【五】一噫「莊子齊物篇」に、大塊噫氣、其名爲ㇾ風と、【六】聞塵「圓覺經」に、識清淨故、聞塵清淨、聞清淨故、耳根清淨、性清淨故、一身清淨と、【七】大朴「莊子應帝王篇」に、儵與ㇾ忽、相ニ遇于渾沌之地一、謀ㇾ報ニ渾沌之德一、曰、人皆有ニ七竅一、此獨無ㇾ有、嘗試鑿ㇾ之、日鑿ニ一竅一、七日而渾沌死と、【八】

君知五蘊(一三)皆是賊。　君は知る五蘊皆是れ賊なるを、
人生一病今先差(一四)。　人生一病今先づ差ゆ、
但恐此心終未了。　但恐る此の心終に未だ了せず、
不(一五)見不聞還是礙。　不見不聞も還た是れ礙、
今君疑我特佯聾(一六)。　今君疑ふ我は特に佯聾と、
故作嘲詩窮嶮怪。　故に嘲詩を作りて嶮怪を窮む、
須防額癢(一七)出三耳。　須らく額癢を防ぎて三耳を出すべし、
莫放筆端風雨快(一八)。　筆端をして風雨の快ならしむる莫れ、

六鑿 「莊子外物篇」に、心有二天游一、室無二空虛一、則婦姑勃谿、心無二天游一、則六鑿相攘と、【九】 眼花 杜子美の詩、眼花落レ井水底眠と、【一〇】 酒生風 張子野、溜眼亭詩に、不聽耳邊啼鳥換、任教風外雜花零と、【一一】 口業 佛典に身業、口業、意業、之を三業と謂ふ、【一二】 詩債 白樂天の詩、負レ君詩債多と、【一三】 五蘊 色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊、之を五蘊又五陰とも謂ふ、色は聚沫の如く、受は水泡の如く、想は陽燄の如く、行は芭蕉の如く、識は幻事の如しと「維摩疏」に在る、【一四】 先差 差は痿瘂即ち平愈である、【一五】 不見「傳燈錄」に、壽州道樹禪師云、伊伎倆有レ窮、吾不レ見不レ聞無レ盡と、【一六】 佯聾 佯は佯詐、聾は聾聵、作りて聾と稱す、「楚辭」に孫佯聾而不レ聞と、【一七】 額癢出三耳 「張君房脞說」に、隋蕭慎、爲二冥府一、追爲二右曹從事一、仍辟二常州秀才與寀通一管記、慎令レ爲レ判、申二天府一、有二黃衫人一、持レ狀去、少頃復持二天符一云、所レ申不レ當、慎大怒、寀通曰、君爲二判辭一、使三我受二譴、呼二左右一、取二方寸肉一、塞二其一耳一、遂無レ所レ聞、寀通乞レ更爲二判、不レ允、卽廿二再䦨一、逢再判之一、後有二天符一來云、甚允當、慎宾謂二寀通一曰、非レ君不レ可レ正二此獄一、命二左右一、割二去耳肉一、令三一小兒擘爲二耳、安二額上一曰、塞二君一耳一、與二君三耳一可乎、寀通復活、後數日、覺二額癢一、湧二出一耳一、尤聰、時人笑曰、天有二九頭鳥一、地有二三耳秀才一、亦呼爲二鼈冠秀才一と、【一八】 風雨快 杜子美の詩、筆落驚二風雨一と、

【題義】 秦太虛が公が耳聾を聞いて戲れに詩を作り寄せられたるを次韻して作る、

【詩意】 君見ざるや詩人は移居に當り事を借るも載せて行くべき器具は一物も無い、僅僅一錢を所持するも賴とするに足らぬ、晩年余の生計は杜少陵と酷く似て居る、右臂は完存であるが耳が先づつんばとなる、世間の人は、微小なる蟻動を巨大なる牛鬪かと疑ふ程であるが、我は覺ゆ風雷の烈なるも天が一あくびしたのでないかと、而かも耳より聞いて煩惱を起すの染塵は掃盡して心根意性はさつぱりとする、此の上は清流に枕して耳を洗ふの要は無い、大朴は大朴の儘で善なるに耳だの目だのを著けた爲め渾沌を死したものもある、又耳や目や口の六鑿が互に慾情を闘擾しつつ勝敗を爭ふ醜態を作す、又醉眼はチラチラして花無きに花を認め風無きに風あると思ふ、口業も停止する所無ければ隨つて詩に債を有するのである、君も知る筈である、五蘊は皆是れ靈性を奪ひ去る賊である、我は喜ぶ、人生の耳より入る一欲病だけは先づ平愈せるを、但恐る此の心根の何物たるを覺了せざるときは、不見も不聞も還是れ障礙と爲る、今君は疑ふ東坡は佯聾で眞聾ではないかと、是の故に此の嘲詩を作りて頗る嶮怪を窮めたのであらう、其の口業の爲め冥府に入りて額上に三耳を出すの前例もあるから自ら防禦し玉へ、筆端を奔放にして風雨の飛ぶ如く快と呼んではいかぬ、

【餘論】 紀曉嵐曰く、起語特超雋、又善二於解嘲一、又派字添出趁レ韻、又結語還戲意、語雖二佻薄一、然題中原有二戲字一、故不レ礙レ格、且言外有下戒二其太聰一意上、亦非レ無レ關二風旨一、但弄二筆鋒一と、實に紀評の如く、巧を極め、奇を極む、太白にもあらず、子美にもあらず、昌黎にもあらず、自から蘇家の絕伎、秦太虛の詩の世に傳はらざるは惜しむべきものと思ふ、

## 端午偏遊諸寺得禪字

端午諸寺に偏遊し、禪の字を得たり

(一)肩輿任所適。遇勝輒流連。
焚香引幽步。酌茗開淨筵。
(二)微雨止還作。小窗幽更妍。
盆山不見日。草木自蒼然。(三)
忽登最高塔。(四)眼界窮大千。(五)
(六)卞峰照城郭。(七)震澤浮雲天。(八)
(九)深沈既可喜。(一〇)曠蕩亦所便。(一一)
幽尋未云畢。墟落生晚煙。(一二)
歸來記所歷。耿耿清不眠。(一三)
道人亦未寢。孤燈同夜禪。(一四)

肩輿適く所に任す、勝に遇へば輒ち流連す、
香を焚いて幽步を引き、茗を酌んで淨筵を開く、
微雨止んで還た作り、小窗幽更に妍、
盆山日を見ず、草木自から蒼然、
忽ち最高塔に登り、眼界大千を窮む、
卞峰城郭を照らす、震澤雲天に浮ぶ、
深沈既に喜ぶ可し、曠蕩亦便なる所、
幽尋未だ云に畢らず、墟落晚煙を生ず、
歸來歷る所を記す、耿耿淸うして眠らず、
道人も亦未だ寢ねず、孤燈夜禪を同じうす、

【字解】【一】肩輿　「晉書王獻之傳」に、嘗經吳郡、聞顧辟疆有名園、先不相識、乘平肩輿徑入と、【二】微雨　杜子美の詩、小雨止還作、斷雲疎復行と、【三】蒼然　草木の年を經て鬱蒼たるを云ふ、暮色蒼然、古色蒼然、對比して知れ、公自から云ふ、非至吳越不見此境也と、【四】最高塔　湖州府治北の飛英寺の塔、【五】大千　千の下、世界の字を略するも大千世界の意味である、三千大千世界は全地球上を意味する、【六】卞峰　「吳興統記」に、卞山在烏程縣北一十八里と、陸魯望の詩、卞峰顏色好と、【七】照城郭　杜子美の詩、碧瓦朱甍照城郭と、【八】震澤　「吳郡續圖經」に、太湖、在吳縣西南、禹貢謂之震澤、爾雅謂之具區、史記國語、謂之五湖、其實一也と、【九】深沈　「後漢書鄧禹傳」に、深沈有大度と、【一〇】可喜　「唐書長孫無忌傳」に、發言可喜と、【一一】曠蕩　ヒロビロしたる貌、「後漢書馬融傳」に、埛場區宇、恢胎曠蕩と、【一二】墟落　陶淵明の詩、依依墟里煙と、王右丞の詩、斜陽照墟落と、荒墟邨落と成語してアレタル邨里を謂ふ、【一三】耿耿　「詩衞風」に、耿耿不寐、如有隱憂と、此れは不安心の貌、今は心に忘れざる貌を謂ふ、【一四】夜禪　白樂天の詩、心到夜禪空と、

【題義】五月五日に諸寺を巡遊して諸人と共に分韻して詩を作り、公は禪の字を得たのである、

【詩意】二人が前後より擔ぐ輿に乘つて意に適ふ所に任せ、而して最も勝景の處に遇へば輒ち流連する、香を焚きては幽步を引き、又茗を酌んでは淨筵を開く、微雨が或は止み或は還た下る、其の狀を寺の小窗より見れば幽更に妍である、寺庭の盆山も自然の山と同じく日光を見ない、それは草木が自から蒼然と籠りし故である、忽ちにして塔の最高頂に登りて俯瞰すれば、眼界は殆んど大千世界を窮むるの思ひがある、卞峰を望めば寺の碧瓦朱甍が城郭を照らす如くである、遠くより震澤を見れば雲天に浮ぶかと疑ふ、深沈なる態度も喜ぶが、又曠蕩たる氣宇も亦便とする所である、幽尋すべき處此に畢つたのではないが、墟落を眺むれば皆晚煙を生じて居る、歸來して游歷したる事を記し、心目共に耿耿として淸くして眠ることが出來ない、余輩のみでない道人も亦寢に就かない、孤燈の下に寺僧と夜禪を同じうする、

【餘論】紀曉嵐は微雨以下の二十字を評して、四句神來と、又善於空際烘託と、又結末有餘味、

入一欄、更有幽致と、之を唐の王右丞や韋蘇州集に混ずるも、聊かも遜色はない、公の才は勁健の詩、高古の筆、豪放の章、往くとして可ならざるものは無い、

## 送劉寺丞赴餘姚　劉寺丞が餘姚に赴くを送る

(一)中和堂後石(二)楠樹。　中和堂後石楠樹、
與君對牀聽夜雨。　君と對牀夜雨を聽く、
(三)玉笙哀怨不逢人。　玉笙哀怨人に逢はず、
但見香煙橫碧(四)縷。　但見る香煙碧縷を橫ふを、
(五)謳吟思歸出無計。　謳吟歸を思ふも出づるに計無し、
坐想(六)蟋蟀空房語。　坐して想ふ蟋蟀空房に語るを、
明朝開(七)鏁放觀潮。　明朝開鏁して放ち觀潮せん、
豪氣正與潮爭怒。　豪氣正に潮と怒を爭ふ、
(八)銀山動地君不看。　銀山地を動かす君看ずや、
獨愛清香生雲(九)霧。　獨り愛す清香の雲霧に生ずるを、
別來聚散如宿昔。　別來聚散宿昔の如し、
城郭空存鶴飛去。　城郭空しく存し鶴飛び去る、
我老人間萬(一〇)事休。　我老いて人間萬事休す、
君亦洗心從佛(一一)祖。　君も亦心を洗うて佛祖に從ふ、
手香新寫法(一二)界觀。　香を手にして新たに寫す法界觀、
眼淨不(一三)觀登(一四)伽女。　眼淨うして覷ず登伽の女、
(一五)餘姚古縣亦何有。　餘姚の古縣亦何か有る、
(一六)龍井白泉甘勝乳。　龍井白泉甘きこと乳に勝る、
千金買斷顧(一七)渚春。　千金買斷す顧渚の春、
似與越人降日(一八)注。　越人と日注を降すに似たり、

【字解】【一】中和堂　呉越の錢鏐、杭州に於て堂を作り、握髮と名く、宋の至和中、威敏孫公沔、此の州に守と爲り、中和と改む、【二】石楠　高山に生ずる灌木、花色紅白簇生する、【三】玉笙　「風俗通」に漢章帝時、零陵文學奚景、於舜祠下得笙、白玉管也、乃知古以玉爲管、後人易以竹耳と、【四】碧縷　白樂天の詩、待漏入朝時、碧縷爐煙直と、【五】謳吟　「漢書高祖紀」に、有士卒、皆歌謳思東歸と、【六】蟋蟀　「毛詩」に、蟋蟀在堂、歲聿云莫、今我不樂、日月其除と、【七】開鏁　王註曰、先生監試杭州時八月十六日放榜、故云開鏁放觀潮と、官吏の登用考試に及第せる者の名を記したる表札を掲示す、之を放榜と曰ふ、杜牧の詩、平明放榜未花開と、門の鑰鎖即ちクサリを取り除くのである、【八】銀山　北周庾開府の詩、啓銀山或動と、【九】雲霧　杜子美、月夜の詩、香霧雲鬟濕、清輝玉臂寒と、【一〇】萬事休　劉夢得の詩、綢繆若便遺身世、黃髮相看萬事休と、【一一】從佛祖　佛陀と祖師、古注に莊子を引證するが、莊子とは關係が無い、【一二】法界觀　華嚴經中の「入法界品」を指す、爾時善財童子、敬繞彌勒菩薩、合掌自言、唯願大聖、開樓觀門、令我得入と、【一三】不讎　讎はウカガフ、伺、又ネラフ、狙である、【一四】登伽女　摩登伽女は古代印度の賣春婦、【一五】餘姚　「元和郡縣志」に、餘姚、舜後支庶所封、舜姓姚、故曰餘姚と、「九域志」に、餘姚縣、在越州東北百四十七里と、案ずるに秦の世、餘姚縣、隋に廢し、唐に復置き、明清共に浙江省紹興府に屬し、民國は浙江會稽道に屬せしむ、【一六】龍井　餘姚に龍泉寺あり、寺に靈泉を出す、【一七】顧渚春　「吳均入東記」に、顧渚在縣北三十里、吳王夫差、顧其渚次、原濕平衍、可爲都邑、故名と、「茶譜」に、陸龜蒙、嗜茶、置園于顧渚山下、歲入茶租、自爲品題と、「避暑錄」に、顧渚在長興縣、所謂吉祥

309
65



寺也、其中爲ニ劉希范家所一レ有、兩地所レ產、歲止五六斤、民國も浙江省長興縣である、【二八】日注「歸田錄」に、草茶日注、第一芽、巖下尙長、其絕品、至ニ二三寸一、不レ過ニ數十株一、餘雖レ不レ逮、然非ニ他產可一レ比、多吸宜レ人、無ニ停滯酸噎之患一と、

【題義】劉誼が寺丞の官を以て餘姚に赴任するを送る詩である、

【詩意】中和堂後の石楠樹の花開きし時、君と對床して夜雨を聽いた事がある、玉笙の聲は哀怨を訴へても人に逢はない、但見る香煙の碧縷を橫へることを、諷吟して歸去を思へども歸り出るの計は無い、已む無く坐して蟋蟀の空房に語るを想ふ、が明朝は鎖鑰を開きて錢塘の潮を觀ることが出來る、豪氣は殆んど潮勢と怒號を爭ふことを辭せぬ、波浪は銀山の如く地を動かし來る君も見玉はざるや、獨り愛する淸香の雲霧が湧生することを、別來してより聚散共に宿昔の如く、昔日住せし城郭に還りて見れば城郭依然たるも、人は鶴と化して飛び去る、我は老いて人間に於て萬事休する、君も亦煩惱の心を洗淨して佛祖の道に隨從する、其の故に香を焚きつつ新寫する華嚴大乘の法界品を、肉眼も已に淸淨にして曾て登伽女の如き色女を覷はない、今君の赴任する餘姚の古縣は亦何物をか有する地である、それは淸淨の人に適する龍井より出づる白泉が甘きこと乳にも勝れて居る、且千金を以て買斷する顧渚の茶の春を、越人と日注を降すに似たることと思ふ、

【餘論】紀曉嵐曰く、收太草草、又末句未ニ甚解一、再詳レ之と、要するに此の篇は解すべき所もあり、亦不可解の所もあり、所謂饒舌に過ぎて、寒巖子の叱呵を兎る能はざるものと思ふ、

終

# 續國譯漢文大成

文學部　五十八

309
65

始

吉岡修郎氏 寄贈本

# 續國譯漢文大成

文學部第五十八册（第十五帙の二）

## 蘇東坡詩集 三の二

309
65

# 蘇東坡詩集　卷十九

## 古今體詩五十首

### 霅上訪道人不遇

花光紅滿欄、草色綠無岸。
不逢青眼人、長歌白石爛。

霅上に道人を訪うて遇はず

花光紅にして欄に滿ち、草色綠にして岸無し、
青眼の人に逢はず、長歌す白石爛たりと、

【字解】【一】滿欄　欄は花園の欄を謂ふ、【二】青眼人　晉の阮籍は俗士を見れば、白眼にて之を迎へ、高士を見れば、青眼を以て之を迎ふ、【三】白石爛　甯戚適齊、擊牛角歌曰、南山矸、白石爛、生不逢堯與舜禪、短布單衣適至骭、從昏飯牛薄夜半、長夜漫漫何時旦と、

【題義】霅水の上に道人を訪うて遇はず、よつて此詩を作りしものである、

【詩意】花の光は紅色が庭欄に滿ちて居る、而して草色は綠色が岸の無きまで齊しく生じて居る、不幸にして青眼の人に逢ふことが出來ず、唯空しく長歌する白石爛たりと、

【餘論】此の五言は紅綠青白の文字を使用する爲め、偶爾設けたる題目、王右丞の下馬飲君酒の詩と同樣、必ず其の人有るのではない、一種游戲の詩と見れば可い、

李公擇過高郵。見施大夫與孫莘老賞花詩。憶與僕去歲會於彭門。折花餽筍故事。作詩二十四韻見戲。依韻奉答。亦以戲公擇云

李公擇、高郵を過ぎ、施大夫と孫莘老との賞花の詩を見、僕と去歲彭門に會し、折花餽筍の故事を憶ひ、詩二十四韻を作りて戲れらる、韻に依つて奉答、亦以て公擇に戲ると云ふ

(一)汝陽眞(二)天人。(三)絹帽著紅槿。　汝陽は眞の天人、絹帽紅槿を著く、
(四)纏頭(五)三百萬。不買一(六)微哂。　纏頭三百萬、一微哂を買はず、
共誇(七)青山峰。曲盡花不隕。　共に誇る青山峰、曲盡くるも花は隕ちず、
當時謫仙人。(八)逸韻謝(九)封眕。　當時謫仙人、逸韻封眕を謝す、
詩成天(一〇)一笑。萬象解(一一)寒窘。　詩成りて天一笑し、萬象寒窘を解く、
驚開小桃杏。不待雷(一二)發軫。　驚き開く小桃杏、雷の發軫を待たず、
(一三)餘波尙(一四)涓滴。乞與(一五)居易稹。　餘波尙ほ涓滴、乞與す居易と稹、
爾來誰復見。前輩(一六)風流盡。　爾來誰か復た見ん、前輩風流盡く、
寂寞(一七)兩詩人。殘紅對(一八)櫻筍。　寂寞たる兩詩人、殘紅櫻筍に對す、
饑腸得一醉。妙語傳不泯。　饑腸一醉を得、妙語傳へて泯びず、
君來恨不與。更復(一九)相牽引。　君來りて與へざるを恨む、更に復た相牽引す、
我老(二〇)心已灰。空煩扇(二一)餘燼。　我老いて心已に灰す、空しく煩はす餘燼を扇ぐを、
天游照六(二二)鑿。虛室掃(二三)充牣。　天游六鑿を照らす、虛室充牣を掃ふ、
懸知(二三)色竟空。那復嗜(二四)烏吻。　懸かに知る色竟に空なるを、那ぞ復た烏吻を嗜まんや、
蕭然一方丈。(二五)居士老(二六)龐蘊。　蕭然たる一方丈、居士老龐蘊、
(二七)散花從滿(二八)襭。不答天女問。　散花して滿襭に從ふ、天女の問に答へず、
故人猶(二九)故目。(三〇)怨句寫餘恨。　故人猶ほ故目、怨句餘恨を寫す、
疑我此心在。遮防費(三一)欄楯。　疑ふ我が此の心在るを、遮防欄楯を費す、
(三二)應虞已斃蛇。(三三)折尾時一蠢。　應虞已に蛇を斃し、折尾時に一蠢、
仄聞(三四)孟光賢。未學(三五)處仲忍。　仄に聞く孟光の賢、未だ學ばず處仲の忍を、
【自注】聞閒故出事。見本傳。
寄招應已足。左右侍雲鬢。　寄招應に已に足るべし、左右雲鬢に侍す、

何時花月夜。羊酒(三六)謝不敏。　何れの時か花月の夜、羊酒不敏を謝せん、
此生如幻(三七)耳。戲語君勿慍。　此の生幻の如きのみ、戲語君慍る勿かれ、
應同亡(三八)是公。一對子(三九)虛听(四〇)。　應に同じかるべし亡是公が、一に子虛に對して听ふに、

【字解】【一】汝陽　汝陽は郡名、唐の玄宗の長子璡は汝陽郡に封ぜらる、杜子美の詩、汝陽三斗始朝天と、【二】天人　杜子美の詩、汝陽讓帝子、眉宇眞天人と、【三】絹帽　「南卓羯鼓錄」に、汝陽王璡、玄宗特鍾愛焉、每遊幸、頃刻不舍、嘗戴砑絹帽打曲、上自摘紅槿花一朵、置帽上笪處、二物皆滑、久之方安、遂奏舞山香一曲、花不墜落、上大笑、賜璡金器と、【四】纏頭　「唐書郭子儀傳」に、出羅錦二百匹、爲子儀纏頭之賚と、俗語の祝儀と同じ、【五】三百萬　「太眞外傳」に、八姨爲秦國夫人、上羯鼓曲罷、上戲曰、阿瞞樂籍、今日幸得供養夫人、請一纏頭、秦國曰、豈有大唐天子阿姨無錢用耶、遂出三百萬爲一局焉と、【六】微哂　「論語先進」に、夫子哂之と、哂笑と成語し、嘲笑と同じ、【七】青山峰　「羯鼓錄」に、宋開府、與上論鼓事、謂上曰、頭如青山峯、手如白雨點、卽羯鼓之能事、山峯取不動、雨點取碎急と、【八】逸韻　顧況酬李侍郎詩、逸韻不可酬と、【九】封黔　田のアゼを曰ふ、今は封都の異味、【一〇】天一笑　杜子美の詩、每蒙天一笑と、「仙傳拾遺」に、玉女投壺梟而脫、誤不接者、天爲之笑と、【一一】窘窮　窘は窘困、寒に苦しむ、【一二】發軫　車を出すこと、「魏書高祖紀」に六軍發軫と、【一三】餘波　「尙書禹貢」に、餘波入於流沙と、【一四】泪滴　杜子美の詩、垂露成泪滴と、【一五】居易稹　白居易字は樂天、元微之名は稹、中唐に在りて酬和尤も盛ん、世に元白と號す、【一六】風流藪　「南史張融傳」に、其從弟弔之曰、阿兄風流頓盡と、【一七】兩詩人　施大夫と孫莘老、【一八】櫻筍　「秦中歲時記」に、長安四月十五以後、自堂廚至百司廚、通謂之櫻筍廚と、【一九】牽引　「左傳襄公十三年」に石臭曰、今楚不競、行人何罪、止鄭一卿、以除其偪、使睦而疾楚、以固於晉、焉用之、使歸而廢其使、怨其君、以疾其大夫、而相牽引也、不猶愈乎と、又「易經注」に、茅之爲物、拔其根、而相牽引者也と、互に手を引くのである、【二〇】心已灰　前に辨ぜり、【二一】餘燼　「左傳成公二年」に、齊賓媚人曰、請收合餘燼、背城借一と、【二二】充牣　「漢司馬相如傳」に、萬端鱗崪充牣其中者、不可勝紀と、又「後漢書淸河王慶傳」に、珍費玩好、充牣其邸と、充實、充滿と同じ、【二三】色卽空　「心經」に色卽是空と、【二四】烏喙　「史記蘇秦傳」に、飢人飢而不食烏喙者、爲其愈充腹、而與餓死同患也と、毒草の名、トリカブト、烏頭とも曰ふ、【二五】居士　緇衣を著けずして道を學ぶ者を居士と曰ふ、【二六】龐蘊　「傳燈錄」に、居士龐蘊、少悟塵勞、志求眞諦と、【二七】散花　天女が花を散じ、其の花が衣に著きたる者は修道の足らぬ者、花衣に著かざる者は修道の徹せる者、【二八】裓　花を盛り、佛に擎げる器、「柳子厚文」に襄衣裓之贈と、【二九】故目　「水經注」に猶存故目と、【三〇】怨句　韓退之の詩、剡藤怨句刺棄遺と、【三一】欄楯　「阿彌陀經」に、七重欄楯、周匝圍繞と、【三二】虞虞　山澤を掌る官を虞人と曰ふ、虞虞は之を指すか、【三三】折尾　杜子美の詩、折尾能一掉、飢腸皆已穿と、【三四】孟光賢　後漢梁鴻字は伯鸞の妻、名は德曜字は孟光、【三五】處仲　「晉書王敦傳」に、王愷字處仲、嘗置酒、敦與導俱在坐、有女妓吹笛、小失聲韻、愷便毆殺之、一坐改容、敦神色自若、他日又造愷、愷使美人行酒、以客飲不盡、輒殺之、酒至敦導所、敦故不肯持、美人悲懼失色、而敦傲然不視、導還歎曰、處仲若當世心懷剛忍、非令終也と、【三六】羊酒　韓退之の詩、買羊酤酒謝不敏、偶逢明月曜桃李と、【三七】如幻　「金剛經」に如幻如夢と、【三八】亡是公　音讀はブシコウ、訓讀はコノコウナシである、「漢書司馬相如傳」に、亡是公無是人也と、烏有先生の類、【三九】子虛　「漢書司馬相如傳」に、子虛虛言也と、【四〇】听　笑ふ貌、

【題義】李公擇が高郵を過ぎ、施大夫と孫莘老が花を賞する詩を見て、公は去歲彭門に會合して、花を折り筍を餽りし故事を憶うて詩二十四韻を作りて戲れらる、是に於て今其の韻に次して以て奉答、亦以て公擇に戲ると、

【詩意】花を賞するに就いて想像するは唐の汝陽王の如きは眞に天人である、嘗て絹帽に紅槿花を玄宗の爲め付著せられた風流の韻事がある、賜ふ所の纏頭は三百萬錢であるが、一微哂だに買ふとではない、皆共に誇る青山峯の鼓曲を巧みに彈せることを、一曲を盡すまで帽上の花が墜ちざる程の伎を

呈する、盛唐當時の謫仙人を思へば、其の逸韻の高き封眕を謝したるにあらずや、當時詩成りて天も一笑せるのである、天地萬象も春ならんとして漸く寒窘を解く、時節に驚いて開くは小桃杏である、雷聲が發軫するを待たずして、其の餘波は尙涓滴の音を成して居る、それは白樂天や元稹の類である、それより以來誰か復見るや、逸韻は勿論餘波も涓滴も風流が盡きたのである、其の人物寂寞中に施と莘との兩詩人を見れば、尙は春の殘紅が初夏の櫻筍に對する感がある、飢腸も一醉を得るの思ひある、妙語も後に傳へて泯びない、李君の來りて與にせざるを恨む、更に復相牽引せんと思ふ、我は身老いて心も已に死灰と爲る、空しく餘燼を扇揚するは煩はしい、鈞天の游は六鑿を照らすであらう、虛室は充牣する物を掃ふべきである、懸に知る色相あるものは竟に空と爲る、那ぞや復鳥吻を嗜まんや、蕭然たる一方丈、方丈に坐する者は居士老龐蘊である、天女の散花は衣裓に滿つるに從す、天女に對して我無心なれば其の問も答ふるの要はない、而かも故人は今の我を見る猶故の我を見る目を以てする、是の故に怨句を以て其の餘恨を寫されたのであらう、公等は疑ふ我が今日の心猶ほ疇昔の心が存在すると、故に散花を遮防するに橫欄直楯を費すならんと思ふ、應虞は已に蛇を斃す、其の蛇は苦しまぎれに折れた尾を一蠢する、我は仄かに聞く細君は孟光の賢と同じと、而かも其の良人は未だ處仲の剛忍を學ばない、寄招することも應に已に定めて、左右に天女の如き雲鬟を侍せしむることであらう、何れの時か春江花月の夜に於て、羊を料し酒を暖めて不敏を謝するであらう、思ふに此の生は夢幻の如きのみ、以上の語は皆戲語であるから公等慍ることは爲るな、例へば亡是公と云ふ元來無き人が子虛といふ元來無き人を一听するに同じきことである、

【餘論】紀曉嵐曰く、語自俊逸、唯起處十數句、爲韻所牽、不免迂遠と、公の如き天下の大才も、韻を驅使すること能はずして、反つて韻の爲め驅使せらるるの感あるは、次韻の惡法の罪である、公が樂天を好むは次韻の癖を同じうするからであらう、王若虛の說に、次韻は實に作者の大病なり、詩道宋人に至り、已に自から衰敝す、才識東坡の如きも、亦波蕩して之に從ふを免れず、集中次韻する者、幾んど三の一、技巧を窮極し、一時を傾動すと雖も、而かも天を害すること全く多し、蘇公をして此れ無からしめば其れ古人を去る何ぞ遠からんや、明清間の大家は皆此の說である、蘇公の爲め實に千秋の恨事である、

王鞏清虛堂

清虛堂裏王居士(一)。
閉(二)眼觀(三)心如止(四)水。
水中照見萬象空。
敢問堂中誰隱(五)几。
吳(六)興太守老且病。

王鞏の淸虛堂

淸虛堂裏の王居士、
閉眼觀心止水の如し、
水中照し見る萬象の空なるを、
敢て問ふ堂中誰か几に隱ると、
吳興の太守老いて且病む、

【字解】〔一〕居士　譯語である、梵語は「キヤラオツ」と稱す、財に居る士、家に居るの士、在家にて佛道を志ざす者、「維摩經疏」に居士有二、一廣積資財、居財之士、名爲居士、二在家修道、居家道士と、「禮記玉藻」に、鄭康成曰、居士

(八)堆案滿前長渴睡。　堆案滿前長く渴睡す、
願君勿笑(九)反自觀。　願はくは君笑ふ勿れ自觀に反するを、
夢幻去來殊未已。　夢幻去來殊に未だ已まず、
長疑安石(一〇)恐不免。　長く疑ふ安石恐らくは免れざるを、
未信犀首(一一)終無事。　未だ信せず犀首終に無事、
勿將一念住清虛。　一念を將て清虛に住する勿かれ、
居士與我蓋同耳(一二)。　居士我と蓋し同じきのみ、

道藩處士也と、【二】閉眼　心の散亂を防ぐには必ず眼を閉づ、【三】觀心　「景德傳燈錄」に法融禪師、入牛頭山石室、唐貞觀中、四祖入山、見師端坐自若、祖問曰、在此作什麼、師曰觀心と、【四】止水　「楞嚴經」に、月光童子、白佛言、有佛出世、名爲水天、教諸菩薩、修習水觀、我於是時、室中安禪、我有弟子、闚窗觀室、唯見清水、遍在室中と、【五】隱几　「莊子齊物論」に、南郭子綦、隱几而坐、顔成子游、侍於前曰、何居乎、形固可使如槁木、心固可使如死灰乎、子綦曰、今之隱几者、非昔之隱几者と、【六】吳興　「元和郡縣志」に、吳興、古防風氏之國、三國時、置吳興郡、隋仁壽二年、改湖州、東至杭州一百九十里と、今日の浙江省吳興縣、【七】太守　晉の何楷以て公自身を譬ふ、【八】堆案　劉禹錫の詩、莫言堆案無餘地、白樂天の詩、堆案拋來眼較明と、【九】反自觀　注家に異說あると思ふが、余は前文の如くに讀む、【一〇】安石　「晉書」に、謝安棲遲東土、雖放情邱壑、然每遊賞、必以妓女從、安石妻、劉惔妹也、見家門富貴、而安獨靜退、乃謂曰、丈夫不如此也、安掩鼻曰、恐不免耳と、【一一】犀首　「史記」に、陳軫謂犀首曰、公何好飲也、曰無事也、軫曰、吾請令公厭事、可乎と、【一二】同耳　「晉張華傳」に、羣臣諭伐吳、帝曰、此自吾意、華但與吾同耳と、

【題義】王定國が開封府城東の清虛堂に寄題して作りし詩、

【詩意】清虛堂裏の王居士は、終日眼を閉ぢ自心を觀察して心は止水の如く靜寂である、而して其の觀察力が徹底したるときは水中に於て萬象の澄空なるを照見する、敢て問ふ堂中几に隱る者は誰であると、吳興の太守は年老いて且身病む、簿書堆案なるも整理もせずに渴睡する、願はくは君よ君が自己の心觀と相反するを笑うてはいかぬ、假令ひ觀心するも夢の如く幻の如く心が去來して殊に已むことはない、長く疑ふ一生世と違ふと云うた安石も到當世に出づるを免れなかつた、また犀首が無事だと云うたことも信を措けない、君に忠告するが世を逃れんとする一念を將て清虛の一堂に終身住することなぞ止め玉へ、必ずや居士の眞想は我と同じきのみと思ふ、

【餘論】紀曉嵐曰く微嫌多偈頌之氣と、余は謂ふ是れ偈頌七分、詩品は三分、公の詩として最下乘なるものである、

## 次韻答王鞏

次韻、王鞏に答ふ

我有方外客(一)。顔如瓊(二)之英。　我に方外の客あり、顔は瓊の英なるが如し、
十年塵土窟。一寸冰雪清。　十年塵土の窟、一寸冰雪清し、
(三)竭來從我遊。坦率(四)見眞情。　竭來我に從つて遊び、坦率眞情を見る、
顧我無足戀。戀此山水清。　我を顧みるに戀ふに足る無し、戀ふ此の山水の淸きを、
新詩如(五)彈丸。脫手不暫停。　新詩彈丸の如し、脫手暫らくも停まらず、

昨日放魚回。衣巾滿浮萍。　昨日放魚して回る、衣巾浮萍滿つ、
今日扁舟去。白酒載烏程。(六)　今日扁舟去る、白酒烏程より載す、
山頭見月出。江路聞鼉鳴。(七)　山頭月の出づるを見、江路鼉の鳴くを聞く、
莫作孺子歌。滄浪濯吾纓。　孺子の歌を作す莫かれ、滄浪に吾が纓を濯ふ、
吾詩自堪唱。相子棹歌聲。　吾が詩自から唱ふるに堪へたり、子が棹歌の聲を相ふ、

【字解】〔一〕方外　釋氏が道士を曰ふ、今參寥を指すのであらう、〔二〕瓊之英　「詩」に倚之以瓊英と、「吳女歌」に、美人榮榮兮、顏若君之榮と、〔三〕竭來　「洪武正韻」に、竭來猶言來也と、向來も同義、サキゴロである、「後漢張衡思玄賦」に、迴志竭來從玄謀、獲我所求夫何思と、〔四〕坦率　虛飾の反對である、〔五〕如彈丸　「南史」に、沈約謂王志曰、謝朓、文章之美、可謂後來獨步、謝朓、嘗見語曰、好詩圓美、流轉如彈丸と、〔六〕烏程　地名、〔七〕鼉鳴　「晉安博物記」に、鼉鼉夜鳴、聲逢逢然と、鼉の一種である、

【詩意】我に方外の客がある、此の僧の顏は瓊の精英なるが如くである、十年間も塵土窟に往來して、而かも一寸冰雪の淸きを失はない、竭來より我に從つて遊び、其の性格は坦率にして眞情を見ることが出來る、其の戀はれる我自身を顧みると一向に戀はるる價値は無い、戀ふ所は此の山水の淸きに在る、新詩は文字圓轉にして彈丸の如しと思ふ、脫手して暫らくも停滯することはない、昨日放魚して回る、歸來して見れば浮萍が衣巾に附著して居る、今日も又扁舟に乘じて去る、白酒を載せて烏程より發する、山頭を望んで月の出づるを見、江路の間に鼉の鳴くを聞く、孺子は滄浪の水淸めば吾纓を濯はんと歌うたが、それに傚うてはいかぬ、吾が詩は吾自から唱ふるのがよい、吾は子が棹歌の聲を相ふのである、

【餘論】王鞏に答ふるに方外客を以て起し、王鞏に和する意味は薄い、或は題目を編纂者が誤れるものにやとも思はる、特に冰雪淸、山水淸、韻法として此の使用法は曾てない、紀曉嵐は第二句の顏如五字を抹殺せるは當を得て居る、公の詩として是亦最下乘なるもの、

## 和孫同年卞山龍洞禱晴　孫同年が卞山の龍洞に晴を禱るに和す

吳興連月雨。釜甑生魚蛙。(一)　吳興連月の雨、釜甑魚蛙を生ず、
往問卞山龍。(二)曷不安厥家。　往いて問ふ卞山の龍、曷ぞ厥の家に安んぜざる、
梯空倚巉絕。(三)俯視驚谽谺。(四)　梯空にして倚巉絕、俯視して谽谺に驚く、
神井湧雲蓋。(五)陰崖垂蘚花。(六)　神井雲蓋に湧き、陰崖蘚花垂る、
交流百道泉。(七)赴谷走羣蛇。　交流百道の泉、谷に赴き羣蛇走る、
不知落何處。隱隱如纅車。　知らず何れの處に落つ、隱隱纅車の如し、
我來叩石戶。(八)飛鼠翻白鴉。　我來りて石戶を叩く、飛鼠白鴉翻る、

寄語洞中龍。睡味豈不嘉。　寄語す洞中の龍、睡味豈嘉せざらん、

雨師少弭節。雷師亦停撾。　雨師少しく節を弭めよ、雷師も亦撾を停めよ、

積水得反壑。稻苗出泥沙。　積水壑に反るを得、稻苗泥沙を出づ、

農夫免菜色。龍亦飽豚豭。　農夫菜色を免かる、龍も亦豚豭に飽く、

看君擁黃紬。高臥放晚衙。　看る君が黃紬を擁し、高臥して晚衙を放つを、

【字解】〔一〕生魚鼃 「戰國策」に、知伯攻趙城、水不沒者三版、臼竈生鼃、人馬相食と、〔二〕卞山 卞山の祠な黃龍洞と曰ふ、〔三〕巉絕 韓退之の詩、梯空上秋旻、孤撐有巉絕と、山のサガシキな曰ふ、〔四〕豁谺 「司馬相如傳」に、豁谺豁閜、阜陵別隖と、谷の大に開けたる貌、〔五〕神井 劉逖の詩、神井堪消渉と、〔六〕陰崖 潘岳の賦、眺華嶽之陰崖と、喩鳧の詩、層巖罅花垂と、〔七〕百道泉 沈佺期の詩、竹裏泉聲百道飛と、〔八〕飛鼠 「太白仙人掌茶詩序」に、荊州玉泉寺、近淸溪諸山、山洞往往有乳窟、窟中多玉泉交流、中有白蝙蝠、大如鴉と、太白の詩、常聞玉泉山、山洞多乳窟、仙鼠如白鴉、倒懸淸溪月と、「臨安志」に、大滌洞中有白鼠、長可二尺、傳靑名爲玉芝と、〔九〕弭節 「離騷」に吾令羲和弭節兮と、〔一〇〕反壑 歸壑と同じ、「禮記」に、土反其宅、水歸其壑と、〔一一〕菜色 「禮記」に、以三十年之通、雖有凶旱水溢、民無菜色と、〔一二〕豚豭 「白樂天黑潭龍樂府」に、假託神龍食豚畜、重泉之下龍知無と、〔一三〕黃紬 「佛游錄」に、文潞公、初知楡次縣、題詩於新衙鼓上云、置向譙樓一任撾、撾多撾少不知他、如今幸有黃紬被、努力頭來早放衙と、

【題義】孫同年が久雨を憂へて卞山の龍洞祠に晴を禱る詩を作る、乃ち之に和して作れるもの、

【詩意】吳興の地は三十日を越して猶ほ雨が降る、一家の釜甑に魚蛙を生ずるに至る、乃ち往いて卞山の神龍に問ふ、曷ぞ厥の洞中に安處せずして天空を妄りに飛ぶや、我は空に梯して君に問はんと欲するも天路は巉絕である、下を俯視すれば壑の豁谺たるに驚く、神井は雲蓋を湧出するのみでない、陰崖は總て皆蘚苔の花を垂れる、東西より交流する泉は百道の泉と爲る、谷に赴いて羣蛇を走らし、其の歸著するは何れの處なるやを知らない、水聲の隱隱たるは繅車を轉する如くである、我來りて石戶を叩けば、飛鼠が出でて白鴉は翻へる、我は洞中の龍神に寄語することがある、天上を飛躍するよりは睡味の方が嘉いではないか、雨神も少しくは節を弭め、雷神も亦撾を停止し、而して積水は一齊に壑に反りなば、稻苗は靑靑と泥沙を出で、農夫は欣欣として菜色を免れ、龍も亦豚豭に飽いて居る、我は看ん孫君が黃紬を著擁して、安心高臥して晚衙を早く放退することを、

【餘論】紀曉嵐曰く、寄語句、直貫到龍亦句、看君二句、接得少突、前路只有我來字、未出孫也と、詩義明白、讀むに窘屈の感はない、

## 乘舟過賈收水閣。收不在。見其子。三首

舟に乘じて賈收が水閣を過ぐ、收在らず、其の子を見る　三首

愛酒陶元亮。能詩張志和。　酒を愛す陶元亮、詩を能くす張志和、

靑山來水檻。白雨滿漁簑。　靑山水檻に來り、白雨漁簑に滿つ、

涙垢添丁面。貧低擧案蛾。　涙垢添丁の面、貧低擧案の蛾、
不レ知何所レ樂。竟夕獨酣歌。　知らず何の樂しむ所ぞ、竟夕獨り酣歌す、

【字解】〔一〕愛酒　杜子美の詩、愛レ酒晉山簡と、〔二〕能詩　杜子美の詩、能レ詩何水曹と、〔三〕水檻　杜子美の詩、新添二水檻一供二垂釣一と、〔四〕添丁　賈が子の名、賈詩に、莫レ怪添丁郎、涙下作二面垢一と、〔五〕擧案　「後漢書」に、梁鴻妻孟光、鴻至レ矣、依二大家皐伯通一、居二廡下一、爲レ人賃舂、每レ歸妻爲具レ食、不三敢於二鴻前一仰視一、擧レ案齊レ眉と、〔六〕酣歌　白樂天の詩、客去有二餘趣一、竟夕獨酣歌と、

【題義】舟に乘じて賈收が水閣を過ぎたるも、生憎收が不在なりしため、其子供に會見して此詩を作つたもの、

【詩意】酒を愛する晉の陶元亮は今日君である、詩を能くする唐の張志和は今日君である、君が住居は青山が水檻に逼りて來る、白雨は珠を跳らして漁簑に滿つるを見る、涙を流せば垢を伴ふ添丁の面である、貧甚しと言ふとも猶ほ案を擧ぐるの貞妻がある、知らず其の何の樂しむ所ぞや、竟夕獨り酣歌する、

〔二〕

嫋嫋風蒲亂。猗猗水荇長。　嫋嫋として風蒲亂る、猗猗として水荇長し、
小舟浮二鴨綠一。大杓瀉二鵞黃一。　小舟は鴨綠に浮び、大杓は鵞黃に瀉ぐ、
得意酒詩社。終身魚稻鄕。　得意なるは酒詩の社、終身魚稻の鄕、
樂哉無二一事一。何處不二清涼一。　樂しい哉一事無し、何處か清涼ならざらん、

【字解】〔一〕嫋嫋　風のソヨグ貌、〔二〕風蒲　蒲は水艸ガマ、古詩に風蒲獵二曲渚一と、〔三〕猗猗　「詩衞風」に綠竹猗猗と、美しく盛んなる貌、〔四〕水荇　荇は水艸、アサザである、夏時黃花を著く、〔五〕鴨綠　李白の詩、遙看漢水鴨頭綠、恰似二蒲萄初醱醅一と、〔六〕大杓　水などを汲む器、柘杓と成語する、〔七〕鵞黃　鵞兒は黃色、借りて嬌美なるものを形容する、今酒を謂ふ、杜子美の詩、鵞兒黃似レ酒、對レ酒愛二新鵞一と、

【詩意】嫋嫋として風に吹かるる蒲は亂れる、又猗猗として盛んなる水荇は長い、小舟を鴨綠の水に浮べ、而して大杓を以て鵞黃酒を瀉ぐ、得意なるは酒詩の社である、一生を送るは魚稻の鄕である、樂しいかな一煩事の無きこと、然らば何れの處に在つても清涼である、

〔三〕

曳二杖青苔岸一。繋レ船枯柳根。　杖を曳く青苔の岸、船を繋ぐ枯柳の根、
德公方上レ冢。季路獨留レ言。　德公は方に冢に上り、季路は獨り言を留む、
已占二蒲魚港一。更開松菊園。　已に蒲魚の港を占む、更に開く松菊の園、
從レ茲來往數。兒女自譍レ門。　茲より來往數ば、兒女自から門に譍す、

【字解】〔一〕曳杖　「檀弓」に、孔子負レ手曳レ杖と、「梁書任昉傳」に、爲二新安太守一、率然曳レ杖徒行と、〔二〕繋船　樂天の詩、郎下

狩此禅繋龍舟と、【三】龐公「襄陽記」に、諸葛孔明、毎至德公家、獨拜牀下、德公初不令止、司馬德操、嘗詣德公、値其渡沔上祀先人墓、德操徑入其室、呼德公妻子、使速作黍、徐元直、向云當來就我與德公談、其妻子皆羅拜堂下、奔走共設、須臾德公還直入、不知何者是客也と、【四】季路 即ち子路、姓は仲、名は由、親に事へて孝、米を百里の外に負ふ、孔悝の難に死し、二子を戒しむる言を留むる、【五】蒲魚 「周禮」に、其利蒲魚と、【六】松菊間 淵明の辭に、三徑就荒、松菊猶存と、【七】來往數 杜子美の詩、自今幽興熟、來往亦無期と、【八】蓽門 「晉書李密傳」に、內無應門五尺之童と、杜子美の詩、嬾藥能無時、蓽門幸有兒と、

【詩意】 杖を青苔の岸上に曳き、船を繋ぐ枯柳の根に、龐德公は方に冢に上り、季路は子の爲めに善言を留む、其の居は已に蒲魚の港を占領する、其の上更に松菊の園を開く、茲より來往も頻繁であらう、兒女が出でて客を門に迎へることと思ふ、

【餘論】 紀曉嵐は第一首を評して句陋拙と、此の詩を三復するに疏樸の處は見るべきも、陋拙の處は見ない、殊に第一首は中晩唐人の間に伍して、遜色無きものと思ふ、如何なる點が陋拙であるか、紀を九泉の下より喚起して其の意見を聞かまほしく思ふのである、

## 次韻孫祕丞見贈
孫祕丞が贈らるるに次韻す

感慨清哀似變風。　感慨清哀變風に似たり、

老於詩句耳偏聰。　老いて詩句に於て耳偏に聰なり、

迂疎自笑成何事。　迂疎自から笑ふ何事を成すと、

冷澹誰能用許功。　冷澹誰か能く許功を用ふる、

不怕飛蚊如立豹。　怕れず飛蚊の立豹の如きを、

【自注】湖州多蚊蚋。豹脚尤毒。

肯隨白鳥過垂虹。　肯て白鳥に隨つて垂虹を過ぎん、

【自注】垂虹長橋亭名。

吟哦相對忘三伏。　吟哦相對して三伏を忘る、

擬泛冰溪入雪宮。　冰溪に泛んで雪宮に入らんと擬す、

【字解】【一】感慨 「漢郭解傳」に、少時陰賊感慨、注云、感慨者、感意氣而立節槪也と、劉參得の詩、中年多感慨と、【二】變風 子夏詩序に、王道衰、禮義廢、政敎失、國異政、家殊俗、而變風變雅作矣と、【三】冷澹 「全唐詩話」に、楊汝士曰、笙歌騰沸、勿作冷澹生活と、【四】立豹 蚊有文采者、謂之豹脚、【五】白鳥 蚊子を曰ふ、杜子美の詩、江湖多白鳥と、朱新仲の「猗覺寮雜記」に、杜詩、黃鳥時兼白鳥飛、鷺也、蚊亦名白鳥、「月令」仲秋之月、羣鳥養羞、注白鳥謂蚊蚋と、【六】吟哦 韓退之の詩、帝欲長吟哦と、【七】三伏 夏至後第三庚爲初伏、四庚爲中伏、立秋後初庚爲終伏、謂之三伏、【八】雪宮 次公曰、世謂湖州爲水晶宮と、

【題義】 孫姓の人が祕書省丞の官に在る、此の人が詩を贈られたるに次韻したのである、

【詩意】 君の詩を誦すれば感慨に發して其の調や清哀變風に似て居る、我老いたるも詩句に於ては耳偏に聰である、迂疎は自から笑ふ何事も成し得ない、冷澹にしては誰か能く許の如きの功を用ひんや、一向に怕れない飛蚊の立豹の如く羣至するに、肯て白鳥の飛ぶに隨つて垂虹亭を過ぎる、吟哦し相對して三伏の炎熱を忘る、冰溪に舟を泛べて雪宮に入らんと擬するのである、

【餘論】 公は石曼卿紅梅の詩、認レ桃無二緑葉一、辨レ杏有二青枝一を評して曰ふ、此至陋語、蓋邨學中體也、故作レ詩力去二此弊一と、然らば余は問ふ、不レ怕飛蚊如二立豹一、肯隨二白鳥一過二垂虹一は如何なるや、飛蚊と白鳥は文字は形を異にするも同じく是れ蚊蚋の一物である、公として杜詩に於て一物を別句となし、以て對を取りし例の有無を知つて居られることと思ふ、要するに此の詩は公の詩として聲聞乘に屬するものである、

## 與レ客游二道場何山一得二鳥字一

客と道場何山に游ぶ、鳥の字を得たり

清溪到レ山盡。飛路盤空小。　清溪山に到りて盡き、飛路盤空小なり、

(一)紅亭與二(二)白塔一。隱見喬木(三)杪。　紅亭と白塔と、隱見す喬木の杪に、

中休得二小菴一。孤絶寄二雲表一。　中ごろ休して小菴を得たり、孤絶雲表に寄す、

洞庭在二北戶一。雲水天渺渺。　洞庭北戸に在り、雲水天渺渺、

菴僧(四)俗緣盡。(五)淨業洗未レ了。　菴僧俗緣盡き、淨業洗うて未だ了せず、

十年(六)畫二鵠竹一。益以レ詩自繞。　十年鵠竹を畫く、益す詩を以て自から繞る、

高堂(七)儼像設。禪室各深窈。　高堂儼像設け、禪室各の深窈、

奔泉何處來。(八)華屋過二溪沼一。　奔泉何れの處より來る、華屋溪沼を過ぐ、

何山隔二幽谷一。去路淸且悄。　何山幽谷を隔て、去路淸うして且悄、

長松度二翠蔓一。絶壁挂二啼鳥一。　長松翠蔓を度る、絶壁啼鳥挂かる、

我友自レ杭來。尙歎レ所レ歷少。　我が友杭より來る、尙ほ歎ず歷る所の少きに、

歸途風雨作。一洗紅日燎。　歸途風雨作り、一洗す紅日の燎くを、

俄驚(九)萬竅號。黑霧卷二蓬蓼一。　俄かに驚く萬竅號び、黑霧蓬蓼を卷くに、

舟人紛變レ色。坐羨輕鷗矯。　舟人紛として色を變じ、坐して羨む輕鷗の矯たるを、

我獨喚二酒杯一。醉死勝二(一〇)流殍一。　我獨り酒杯を喚び、醉死流殍に勝る、

書生例二(一一)强狠一。造物空煩擾。　書生强狠例なり、造物空しく煩擾、

更將二掀舞勢一。把レ燭畫二風篠一。　更に掀舞の勢を將て、燭を把つて風篠を畫く、

美人爲二破顏一。正似二(一二)腰支嫋一。　美人破顏を爲す、正に腰支の嫋きに似たり、

明朝便陳迹。淸景墮二空杳一。　明朝便ち陳迹、淸景空杳に墮つ、

作レ詩記二餘歡一。萬古一(一三)昏曉。　詩を作りて餘歡を記す、萬古一昏曉、

【字解】 〔一〕 紅亭　「吳興統記」に、郡有二五亭一、白蘋亭、集芳亭、山光亭、朝霞亭、碧波亭、 〔二〕 白塔　白塔巷、有二白石塔一焉

と、但し此の詩の白塔は道場山中の白塔を指して、巻の白塔ではない、【三】木杪　謝靈運の詩、俯視喬木杪と、【四】俗緣　淨業の反對、【五】淨業　俗緣の反對、【六】畫鶻竹　道場山中の僧、善畫なる者、其の名は傳はらない、【七】僊像　畫僧の像か、佛祖の像か未詳、【八】華屋　堂堂たる屋宅を云ふ、曹植の樂府に、生存華屋處、零落歸二山邱一と、【九】高簇　萬簇と同じ、【一〇】流殍　流人や殍人、【一一】强狠　「陸賈新語」に恃負二强狠一と、【一二】破顏　即ち笑顏、【一三】昏曉　杜子美の詩、陰陽割二昏曉一と、

【題義】客と同じく道場山即ち何山の正眞寺に游び、分韻して公は鳥の字を得て此の詩を作る、

【詩意】清溪の流れは山に到りて盡きる、而して山の飛路は空に盤廻して小徑である、其の間に於て紅亭と白塔が、或は隱れ或は見る喬木の杪に、中途にして休息するに小菴がある、其の小菴は孤絕にして雲表に寄する如くである、洞庭湖は北戶より望むを得、雲か水か天か渺渺として居る、其の菴主は已に俗緣の盡きた人である、が淨業洗ふも未だ全く人間を脫せない、それは十年間も鶻竹を畫くことである、畫のみでない詩累も亦身を繞る、高堂には僊像の設けがある、禪室は各の深く且窈窕である、奔泉は何れの處より來るかを知らない、華屋は溪沼を過ぎて見える、何山は段段と幽谷を隔たる、下山しての去路も清且悄、見玉へ長松は翠色の蘿蔓を度り、絕壁は啾啾と啼く鳥を挂ける、我が友は杭州より來る、尙ほ歎ず經歷する所の少なきを、歸途に就かんとして風雨が作り、紅日の燎熱を一洗し去る、俄かに驚く萬竅の號怒するに、忽ちにして黑霧は蓬蘽を卷いて、舟人は皆紛として顏色を變ふ、坐して羨む輕鷗が風波を知らぬ顏をして矯たるを、我は多くの舟人と異なりて獨り酒杯を喚び、自から思ふ醉死は流殍より勝ると、書生は古今通例强狠である、造物は空しく煩擾、更に掀舞の勢を將て、我は燭を把つて以て風篠を畫かんと思ふ、美人は破顏を爲して、正しく腰支の嫋きに似たるを知る、此の游も此の景も明朝は便ち陳迹と爲る、淸景も空杳に墮するのである、記念として詩を作り餘歡を記す、萬古千秋要するに一昏曉に過ぎない、

【餘論】紀曉嵐曰く、起四句如レ畫、通首亦緊峭之中、不レ乏二波折一、又紀は醉死以下を評して、又生二一波勢一、更滿足、勢須二如レ此作一收、余も此の評に服する者である、

僕去レ杭五年。吳中仍歲大饑疫。故人往往逝去。
聞湖上僧舍。不二復往日繁麗一。獨淨慈本長老。學
者益盛。作レ詩寄レ之

僕杭を去ること五年、吳中仍歲大饑疫、故人往往逝去す、聞く湖上の僧舍、復た往日の繁麗ならずと、獨淨慈の本長老、學者益す盛ん、詩を作りて之に寄す

來二往三【一】吳一一夢間。　三吳に來往する一夢の間、
故人半作冢纍然。　故人半ば作る冢纍然、
獨依二舊社一傳二眞法一。　獨り舊社に依りて眞法を傳ふ、

【字解】【一】三吳　「通典」は、吳郡と丹陽と吳興、之を三吳と謂ふ、「水經」は、吳興と吳郡と會稽とを三吳と謂ひ、「指掌圖」は、蘇州と常州

要ㇾ與(二)遺民一度二(三)厄年一。　遺民と厄年を度らんと要す、

(四)趙叟近聞ㇾ還二(五)印綬一。　趙叟近ろ聞く印綬を還すと、

(六)竺翁先已反二林泉一。　竺翁先づ已に林泉に反る、

何時(七)策杖相隨去。　何れの時か策杖相隨つて去り、

任ㇾ性逍二遙(八)不學禪一。　性に任せて不學の禪に逍遙せん、

と湖州とを三吳と謂ふ、通例は水經の說を取る、今の詩は公の生涯として蘇常湖の三吳說が適當なるものと思ふ、【二】遺民　「左傳閔公二年」に、衞之遺民男女七百有三十人と、【三】厄年　「漢書王莽傳」に、下二吏祿制度一曰、予遭二陽九之阨一、百六之會、國用不ㇾ足、民人騷動、今阨會已度と、【四】趙叟　趙淸獻公抃を謂ふ、【五】印綬　「漢朱買臣傳」に、還二其印綬一と、元豐二年に趙抃は、太子少保の官を辭職する、【六】竺翁　淨慈の本長老を言ふ、辯才を指すとの說もある、竺は僧の意、禪の意、【七】策杖　左太冲の詩、策杖招隱士と、【八】不學禪　「景德傳燈錄」に、福州長慶寺大安禪師云、在二潙山一三十年、喫二潙山飯一、屙二潙山屎一、不ㇾ學二潙山禪一、只看二一頭水牯牛一と、

【題義】僕が杭州を退去してより五年間を過ぐ、其の間吳中は歲歲飢疫が次ぎ、其の疫の爲め友人が往往逝去すと聞く、湖の淨慈寺や靈隱寺も昔日の繁盛はない、が本長老のみ其の會下が盛んであると、乃ち此の詩を作りて寄せる、

【詩意】三吳の間を往來する五年であるが殆んど一夢間なる思ひがある、五年間には故人が半ば冢墓に歸して冢墓のみ纍然である、我は獨り舊同盟の社に依りて佛の眞法を傳へ、且は遺民と共に飢疫の厄年を越さんと思ふ、天下の大官なる名士も近來辭職したる事を聞く、且人天の導師たる高僧も城を去つて林泉に反られたと聞く、何れの時にか策杖して師に隨つて去り、本性に任せて不學の禪に逍遙



することが出來るか、

【餘論】此等の七律は公の作として平衍冲澹のもので誦すべきものである、老熟の境に造らざれば、此の詩は作る能はざるものである、

## 舶趠風

舶趠の風

吳中梅雨既過颯然清風彌ㇾ旬。歲歲如ㇾ此。湖人謂二之舶趠風一。是時海舶初回云。此風自二海上一與ㇾ舶俱至云爾。

【訓讀】吳中梅雨既に過ぎ、颯然たる清風旬に彌る、歲歲此の如し、湖人之を舶趠の風と謂ふ、是の時海舶初めて回ると云ふ、此の風、海上より舶と俱に至ると爾か云ふ、

三旬已過黃(一)梅雨。　三旬已に過ぐ黃梅の雨、

萬里初來(二)舶趠風。　萬里初めて來る舶趠の風、

幾處縈回度二山曲一。　幾處か縈回山曲を度る、

一時(三)淸駛滿二江東一。　一時淸駛江東に滿つ、

(四)驚飄蔌蔌先ㇾ秋葉。　驚飄蔌蔌秋に先つの葉、

【字解】【一】黃梅雨　宋陸佃の「埤雅」に、江湘二浙、四五月之間、梅欲二黃落一則水潤土溽、其鉀如ㇾ濕、謂二之梅雨一、自ㇾ江以南、三月雨、謂二之迎梅一、五月雨、謂二之送梅一と、夏至の前後、各の半月なれば三旬である、【二】舶趠風　公の自序で明白

喚醒昏昏(五)嗜(六)睡翁。　喚醒す昏昏睡を嗜むの翁、
欲作蘭(七)臺快哉賦。　蘭臺快哉の賦を作らんと欲し、
却嫌分別問雌雄。　却つて嫌ふ分別雌雄を問ふを、

なるが、「石林避暑錄」にも、五六月間梅雨時、必有大風、連晝夕踰旬、吳人謂之舶䑲風とある、【三】清駛　韓退之の詩、南溪赤清駛と、駛は疾走又急速である、【四】蔌蔌　鮑照の賦、蔌蔌風威と、李善云ふ風聲勁捷之貌と、【五】昏昏「孟子盡心」に、今以其昏昏、使人昭昭と、くらき貌、【六】嗜睡　杜牧之の文、好酒嗜睡、其癖已痼と、【七】蘭臺「宋玉風賦」に、楚襄王遊蘭臺之宮、有風颯然而至、乃披襟而當之、曰快哉此風、寡人所與庶人共者耶、宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共之、王曰豈有說乎、玉曰、發明耳目、寧體便人、此大王之雄風也、啗齰嗽獲、死生不卒、此庶人之雌風也と、

【詩意】三旬日已に黃梅の雨を送り去る、將に夏より秋に及ばんとする時萬里より初めて舶䑲の風が至る、其の風は幾處をか縈回して山曲を度り來るものであるか、一時疾走して勢が江東に滿つるを見る、其の急勢に驚きて飄るものは蔌蔌と響く秋を待たずして散する葉である、又其の風勢は喚び醒ますのである昏昏と睡を嗜む翁を、宋玉に倣うて快哉賦を作らんと思ふも、雌風の雄風のと云ふ分別するを嫌ふが故に作らない、

【餘論】紀曉嵐曰く、結亦大露不平と、不平を露はしたのではない、宋人として議論を著けるが當然の慣習である、

丁公默送蝤蛑　丁公默、蝤蛑を送る

溪邊石蟹(一)小于錢。　溪邊の石蟹錢より小なり、
喜見輪(二)囷赤玉盤。　喜び見る輪囷赤玉盤、
半殼含(三)黃宜點酒。　半殼黃を含み宜しく酒に點ずべし、
兩(四)螯斫雪勸加餐。　兩螯雪を斫りて加餐を勸む、
蠻珍海(五)錯聞名久。　蠻珍海錯名を聞く久し、
怪雨腥風入坐寒。　怪雨腥風坐に入りて寒し、
堪笑吳(六)興饞太守。　笑ふに堪へたり吳興の饞太守、
一詩換得兩尖(七)團。　一詩換へ得たり兩尖團、

【字解】【一】石蟹「蟹賦」に、明越溪澗、石穴中出小蟹、其色赤而堅、俗呼爲石蟹と、【二】輪囷「漢鄒陽傳」に、蟠木根柢、輪囷離奇と、マガリクネル、【三】含黃「吳興掌故集」に、蟹子未成時、曰黃甲、有細骨、黃依以生、入海則黃化爲子、而芒赤漸長、至春深散子、則芒赤輪囷蟹腐と、【四】兩螯「酉陽雜俎」に、蝤蛑大者長尺餘、兩螯至強、鄖縣昔有人、於水際泥穴、探取之、手爲左螯所夾、即以口嚙之、又爲右螯所夾、有頃而死、至今呼此、爲蝤蛑洲と、【五】海錯「禹貢」に海物惟錯と、【六】吳興饞太守　前に辨ぜり、【七】尖團　唐彥謙の詩、謾誇風味過蝤蛑、尖臍猶勝團臍好と、母蟹の臍は團、雄蟹の臍は尖である、

【題意】丁公默と云ふ人が蝤蛑を送付せられたるを作れる詩、

【詩意】溪邊の石蟹は錢より小さな形であるが、其の形の輪囷たる赤玉盤は喜び見るのである、半殼が黃を含む時は未だ柔であるから酒に點じて食ふがよい、兩螯の肉は雪を斫るが如き色にて食慾が

進む、蠻珍海錯は名を聞くこと久しいが、今日は怪雨腥風が坐に入りて寒きを覺ゆる、笑ふに堪へたるは吳興の饞太守である、一詩を作りて二四の尖團と交換した、

## 送孫著作赴考城。兼寄錢醇老李邦直二君。於孫處有書見及

孫著作の考城に赴くを送り、兼ねて錢醇老・李邦直に寄す、二君、孫の處に於て、書あり及ばる

使君閒（一）如雲。欲出誰肯伴。　使君の閒は雲の如し、出でんと欲し誰か肯て伴はん、
清風獨無事。一嘯（二）亦可喚。　清風獨り事無く、一嘯亦喚ぶ可し、
來從白蘋洲（三）。吹我明月觀（四）。　來る白蘋洲よりす、我を吹く明月觀、
門前遠行客（五）。青衫流白汗。　門前遠行の客、青衫白汗を流す、
問子何怱怱（六）。王事（七）不可緩。　子に問ふ何ぞ怱怱たる、王事緩うすべからず、
故人錢與李。清廟兩圭瓚（八）。　故人錢と李と、清廟兩圭瓚、
蔚爲萬乘器（九）。尙記溝中斷（一〇）。　蔚として萬乘の器たり、尙記す溝中の斷、
子亦東南珍。價重（一一）不可算。　子も亦東南の珍、價重うして算ふべからず、
別情何以慰。酒盡對空案。　別情何を以て慰せん、酒盡きて空案に對す、
惟持一榻涼。勸子巾少岸。　惟一榻の涼を持す、子に勸む巾少岸、
北風那復有。塵土飛灰炭。　北風那ぞ復た有らん、塵土灰炭飛ぶ、
欲寄二大夫。發發（一二）不可絆。　二大夫に寄せんと欲す、發發絆ぐべからず、

【字解】【一】閒如雲　白樂天の詩、靜將鶴爲伴、閒與雲相似と、【二】一嘯　「後漢方術傳」に、趙炳、嘗臨水求度、船人不知之、炳乃張蓋坐其中、長嘯呼風、亂流而濟と、【三】白蘋洲　「吳興統記」に、白蘋洲、在霅溪東南一里と、【四】明月觀　王註云、明月觀、在江寧府故臺城と、【五】遠行客　古詩に、人生天地間、忽如遠行客と、【六】怱怱　杜子美の詩、寄語北來人、後來莫怱怱と、【七】王事　「毛詩」に、王事靡盬、憂我父母と、【八】圭瓚　宗廟に用ふる酒器、「毛詩」に釐爾圭瓚と、【九】萬乘器　「漢鄒陽傳」に、蟠木根柢、輪囷離奇、而爲萬乘器者、以左右先爲之容也と、【一〇】溝中斷　「莊子天地篇」に、百年之木、破爲犧樽、青黃而文之、其斷在溝中、比犧樽於溝中之斷、則美惡有間矣、其於失性一也と、【一一】價重　杜子美の詩、價重百車渠と、【一二】發發　「毛詩」に、南山烈烈、飄風發發と、

【題義】著作郎の官を奉ずる孫氏が考城に赴くを送りて作り、兼ねて錢醇老と李邦直との二君に寄示したのである、二君は孫氏に書翰を送られて我の事にも言及されたのである、

【詩意】使君たる我は身閒にして宛も雲の如くである、出でんと欲して誰か肯て伴ふ者がある、伴ふものは獨清風のみである、我れ一嘯すれば清風は以て喚ぶことが出來る、其の來るは白蘋洲の方より

來る、而して我を吹いて明月觀に到らしむ、忽ち門前遠行の客を見る、其の人や青衫に白汗を流して居る、問ふ子は何の故に悤悤たるやと、子は曰ふ王事は決して緩うすべからざるが故である、故人の錢李の二君は、淸廟の兩圭瓚にも比すべきである、藹として萬乘の器である、尙ほ記す溝中の斷を、子も亦東南の珍寶である、其の價は重くして計算以外の珍である、離別の情は何を以てか慰するや、酒盡きれば空案に對するのみ、又唯一榻の涼風を持するのみ、子に勸む窮屈の態度を爲さずして少しく巾を岸てよ、北風は那ぞ復た有つて、塵土には灰炭を飛ばすであらう、二大夫に詩を寄せんと欲するも、飄風は發發として絆ぐこと出來ない、

【餘論】　紀曉嵐評して曰く、起結甚別、斗入奇絕、塵土句少欠雅と、

## 泛舟城南。會者五人。分韻賦詩。得人皆苦炎字。四首

舟を城南に泛べ、會する者五人、分韻詩を賦す、人皆苦炎の字を得たり　四首

城中樓閣似魚鱗。　城中樓閣魚鱗に似たり、

不見淸風起白蘋。　見ずや淸風の白蘋に起るを、

試選苕溪最深處。　試に選ぶ苕溪最深の處、

仍呼我輩不羈人。　仍ほ呼ぶ我輩不羈の人、

窺船野鶴何曾下。　船を窺ふ野鶴何ぞ曾て下らん、

見燭飛蟲空自馴。　燭を見て飛蟲空しく自から馴る、

遶郭荷花一千頃。　郭を遶る荷花一千頃、

誰知六月下塘春。　誰か知らん六月下塘の春、

【字解】【一】魚鱗　「楚辭」に魚鱗屋兮龍堂と、【二】白蘋　宋玉の「風賦」に起於青蘋之末と、湖洲に白蘋洲あるが故、【三】苕溪　「地志」に、天目山、一名浮玉山、苕溪出焉、在於潘臨安二縣界、耆老相傳云、夾岸多苕花、每秋風飄散水上如飛雪、然因名と、【四】不羈人　韓退之の文、羈旅者乃是不羈人と、【五】遶郭　白樂天の詩、遶郭荷花三十里と、姜白石云、吳興號水晶宮、荷花盛麗、陳簡齋詞云、今年何以報君恩、一路荷花相送到青墩と、【六】下塘　「成淳臨安志」に、上下塘、河南、自天宗水門、餘杭水門、二河合於北郭、稅務前與城東水合、分爲兩派、一由東北上塘、入大運河、一由西北、過江漲橋以北、入安吉州界、曰下塘河と、

【題義】　舟を城南に浮べて遊んだ時に、會する者五人であつて、韻を分つて詩を賦したが、公は人皆苦炎の四字を得、此四首の詩を作つたのである、

【詩意】　城中の樓閣は宛も魚鱗の如く、只今は淸風の白蘋を吹くを見る、試みに苕溪の最深處まで入りて去れば、人は呼ぶ我が輩は不羈の人であると、船を窺ふの野鶴は下らんと欲する狀を作すが下らない、燭を見るの飛蟲は空しく自から馴るる、郭を遶るの荷花は一千頃もある、誰か知らんや六月の夏に下塘の春を作すを、

〔二〕

苦熱誠知處處皆。　苦熱誠に知る處處皆きを、

何當危坐學心齋。　何くにか當に危坐して心齋を學ぶべき、

【字解】【一】危坐　端坐、正坐と同じ、正坐すれば姿勢高危に見ゆる故、【二】心齋　「莊子人間世篇」

(三)海鰲要共詩人把。　海鰲は要ず詩人と共に把らん、
溪月行遭霧雨霾。(四)　溪月行くゆく霧雨に遭うて霾からん、
鄕國飄零斷書信。(五)　鄕國飄零書信斷え、
弟兄流落隔江淮。(六)　弟兄流落して江淮を隔つ、
便應築室苕溪上。　便ち應に室を苕溪の上に築き、
荷葉遮門水浸堦。　荷葉門を遮り水堦を浸すべし、

流落　杜子美の詩、故鄕有弟妹、流落隨邛盧と、

【詩意】苦熱は誠に知る何處も皆同じきを、何くに於てか危坐して心齋を學ばんと欲するや、海鰲は要ず同調の詩人と共に把るのが可い、溪月は初めは明輝でありしが徐徐に霧雨の爲め霾に遭ふ、鄕國は飄零するが故に書信を斷絕するに至る、弟兄は流落して江と淮とを隔絕するに至る、便ち應に室を苕溪の上に築きて、荷葉は門を遮り水は堦を浸すの景を見んと、

〔三〕

紫蟹鱸魚賤如土。(一)　紫蟹鱸魚賤しうして土の如し、
得錢相付何曾數。(二)　錢を得て相付す何ぞ曾て數へん、

に、顏回曰、敢問心齋、仲尼曰、唯道集虛、虛者心齋也と、【三】海鰲　「晉書」に、畢卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒盃、左手持蟹鰲、拍浮酒船中、便足了一生矣と、【四】霧雨霾　白樂天の詩、霧雨霾檣竿と、霾はツチグモリである、【五】飄零　杜子美の詩、垂老見飄零と、【六】

【字解】【一】賤如土　白樂天の詩、米價賤如土と、【二】何曾數　「漢書五行志」に河間姹女工數錢と、

(四)碧篇時作象鼻彎。　碧篇時に象鼻の彎を作し、
白酒微帶荷心苦。　白酒微しく荷心の苦きを帶ぶ、
(五)運肘風生看斫鱠。　肘を運らして風生じ斫鱠を看る、
(五)隨刀雪落驚飛縷。　刀に隨つて雪落ち飛縷に驚く、
不將醉語作新詩。　醉語を將て新詩を作らず、
飽食應怒腹如鼓。(六)　飽食應に怒づべし腹鼓の如きを、

左右揮霜刀、鱠飛金盤白雪高と、「吳興掌故集」に、湖人作時善斫鱠、縷切如絲と、【六】如鼓「莊子馬蹄篇」に鼓腹而遊と、

【詩意】紫蟹も鱸魚も當り年で其の價は土の如く賤し、錢を與ふれば何匹でも吳れて魚の數なぞは關はん、戲れに碧篇を造れば象鼻の彎曲する狀を爲す、篇中に盛る白酒は微しく荷心の苦味を帶びる、魚を料理せんと肘を運らせば風が生ずる是れ鱠を斫るのである、刀を下すに隨つて魚の白身が雪が落ちるかと疑ふそれは飛縷である、余は醉語を將て直ちに新詩となすこと出來ない、飽食すれば應に慙愧する腹が鼓の如く大膨脹する、

〔四〕

橋上游人夜未厭。　橋上の游人夜未だ厭かず、

【三】碧篇　「壺君房語說」に、歷城北、有使君林、魏正始中、鄭公愨於三伏之際、率賓僚、避暑於此、取大荷葉、盛酒以簪刺、令與柄通屈、莖上輪囷如象鼻、傳翕之、名爲碧篇、歷下皆效之と、篇は竹筒、タケヅツ、【四】運肘　「禮記」に、深衣袼之高下、可以運肘、運肘風生と、【五】隨刀　杜子美の詩、饔子

【字解】【一】鳳簫　杜子美の詩、

共依水檻立風簷。(一)　共に水檻に依りて風簷に立つ、
樓中煑酒初嘗茨。(二)　樓中酒を煑て初めて茨を嘗め、
月下新妝半出簾。(三)　月下新妝して半ば簾を出づ、
南郭清游繼顔謝。(四)　南郭の清游顔謝に繼ぎ、
北窗歸臥等羲炎。(五)　北窗の歸臥羲炎に等し、
人間寒熱無窮事。(六)　人間の寒熱窮まり無きの事、
自笑疎頑不受痁。(七)　自から笑ふ疎頑の痁を受けざるを、

簷雨細隨風と、張耒の詩、靜入風簷夜雨聲と、【二】嘗茨　茨は水仙、オニバス、ミヅブキ、芒刺あり食ふべし、【三】新妝　徐徘が妻の劉氏の詩、落日更新妝と、司空圖の詩、晚妝留拜月、卷上水晶簾と、【四】顔謝　顧況の「湖州刺史廳壁記」に、在晉則謝安、謝萬、王羲之、王坦之、王獻之、因朝則顔魯公忠烈也、袁給事、高議正也、劉員外、全白文翰也、【五】羲炎　太皞伏羲氏、炎帝神農氏、【六】寒熱「南史」に、不能翻復言語、自生寒熱也と、【七】不受痁　次公曰、痁瘧疾也、其發狀、一寒一熱と、痁は俗、オコリである、

【詩意】橋上の游人は夜も猶ほ厭はぬ、共に水檻に依りて風簷に立つて居る、而して樓中に酒を煑る者は初めて茨を嘗め、月は新妝を凝らして半ば簾を出づる、南郭の清游は顔公や謝公の蹤を繼ぐのである、北窗に歸臥すれば身は伏羲や神農氏と等しい、人間は寒熱變じ易く窮まり無き事であるが、我は自から笑ふ疎頑なれば普通人間の病む痁と云ふ病を受けたことがない、

【餘論】紀曉嵐は第一首を許して、入手恣逸、妙不單弱と、余は其の病を見る、不見、見燭、竹下塘、是である、紀は第二首を許して、有疎宕之氣と、第三首を許して、仄韻作五律已不可、況於七律と、余は其の病を見る、如土、如鼓、作象、作詩、紀は第四首を許して、別無佳處、唯末句押韻甚巧と、余は其の病を見る、游人、清游、人間、要するに四首共に公として聲聞乘に屬するものである、

## 與王郎夜飲井水

王郎と夜井水を飲む

吳興六月水泉溫。　吳興六月水泉溫なり、
千頃菰蒲聚鬪蚊。　千頃の菰蒲鬪蚊を聚む、
此井獨能深一丈。　此の井獨り能く深きこと一丈、
源龍如我亦如君。　源龍我の如く亦君の如し、

【詩意】吳興の六月は水泉溫かである、千頃の菰蒲に鬪蚊が集る、此の井は獨り能く深きこと一丈、源龍我の如く亦君の如くである、

## 次韻李公擇梅花

李公擇の梅花に次韻す

詩人固長貧。(一)日午饑未動。(二)　詩人固長貧、日午饑ゑて未だ動かす、

偶然得一飽(三)、萬象困嘲弄。
偶然一飽を得、萬象嘲弄に困しむ、

尋花不論命、愛雪長忍凍(四)。
花を尋ねて命を論せず、雪を愛して長く凍を忍ぶ、

天公非不憐、聽飽卽喧鬨(五)。
天公憐まざるにあらず、聽飽卽ち喧鬨す、

君爲三郡(六)守、所至滿賓從(七)。
君は三郡の守たり、至る所賓從滿つ、

江湖常在眼、詩酒事豪縱(八)。
江湖常に眼に在り、詩酒豪縱を事とす、

奉使今折磨(九)、淸比於陵仲(一〇)。
奉使今折磨す、淸きは於陵の仲に比す、

永懷茶山(一一)下、攜妓修春貢(一二)。
永く懷ふ茶山の下、妓を攜へて春貢を修す、

更憶檻泉亭(一三)、插花雲髻(一四)重。
更に憶ふ檻泉亭、花を插んで雲髻重し、

蕭然臥灊麓(一五)、愁聽春禽哢。
蕭然として灊麓に臥す、愁へ聽く春禽の哢するを、

忽見早梅花、不飮但孤諷。
忽ち見る早梅花、飮まず但孤諷、

詩成獨寄我、字字愈頭痛(一六)。
詩成りて獨り我に寄す、字字頭痛を愈す、

嗟君本侍臣(一七)、筆橐(一八)從上雍(一九)。
嗟君本侍臣、筆橐上雍に從ふ、

脫韡(二〇)吟芍藥(二一)、給札(二二)賦雲夢(二三)。
韡を脫して芍藥に吟ず、給札雲夢を賦す、

何人慰流落、嘉藹(二四)天爲種。
何人か流落を慰する、嘉藹天爲めに種う、

杯傾笛(二五)中吟、帽拂果(二六)下幹。
杯は傾く笛中の吟、帽は拂ふ果下の幹、

感時念羈旅、此意吾儕共。
時に感じて羈旅を念ふ、此の意吾が儕共にす、

故山今何有、桐(二七)花集幺(二八)鳳。
故山今何か有る、桐花幺鳳集まる、

君亦憶匡廬、歸掃藏書洞。
君も亦匡廬を憶ふ、歸りて掃ふ藏書洞、

何當種此(二九)花、各抱漢(三〇)陰甕。
何か當に此の花を種ゑ、各の漢陰甕を抱くべき、

【字解】【一】長貧　漢書張負曰、固有美如陳平長貧者乎と、【二】儂未動　白樂天の詩、痛飮困連宵、悲吟飢過午と、【三】萬象　韓退之の詩、萬類困陵暴と、【四】忍凍　孟東野の詩、凍吟成此章と、【五】喧鬨　鬨は閧と同じ、【六】三郡　鄂州、湖州、齊州、【七】賓從　魏文帝の文に、賓從無聲と、【八】豪縱　縱は恣肆、放恣なり、【九】折磨　白樂天の詩、由來才命相折磨と、【一〇】於陵仲　「高士傳」に、陳仲子字子終、適楚居於陵、楚王欲以子終爲相、入告於妻、妻曰亂世多害、於是相與逃、而爲人灌園と、【一一】茶山　湖州に在り、【一二】春貢　茶を製して、貢物と爲す、杜牧之の湖州詩に、山實東南秀、茶稱瑞艸魁と、【一三】檻泉亭　齊州に在り、【一四】雲髻　「曹植洛神賦」に雲髻峩峩と、【一五】灊麓　灊山の麓、公擇が官を以て舒州を巡視せし時を云ふ、【一六】頭痛　「三國志」に、陳琳作諸書及檄、呈太祖、太祖先苦頭風、是日疾發、臥讀琳所作、翕然而起曰、此愈我病、數加厚賜と、【一七】侍臣　曹子建の詩、侍臣省文奏と、【一八】筆橐　橐は嚢橐、フクロ、小な橐と謂ひ、大な嚢と謂ふ、【一九】上雍　漢の司馬遷の書、迫季冬、僕又薄從上雍と、【二〇】脫韡　「舊唐書李白傳」に、玄宗欲造樂府新詞、亟召白、白已醉臥、以水灑面、秉筆、頃之成十餘章、嘗沈醉殿上、引足令高力士脫靴、由是斥去と、【二一】芍藥　「楊妃外傳」に、開元中、禁中重木芍藥、植於沈香亭前、會花繁開、持金花牋、宣李白、立進淸平調詞、上自是顧李翰林、異於他學士、會高力士、以脫鞾爲恥、異日戲曰、以飛燕指妃子、賤之甚矣、妃深然之、帝嘗三欲命白官、卒搾止と、【二二】給札　筆紙を賜はる、【二三】

雲夢　洞庭湖の七澤の一、【二四】嘉祿　美花を謂ふ、【二五】笛中吟　落梅曲を謂ふ、【二六】果下騂「後漢書」に、濊貊獻₂果下馬₁と、馬の高さ三尺、之に乘りて果樹の下を行く、【二七】桐花　桐花鳥は西蜀に產する、鳳に似て小、蜀人之を倒掛子と謂ふ、【二八】么鳳　桐花鳥を謂ふ、【二九】此花　梅花を謂ふ、【三〇】漢陰叟「莊子天地篇」に、子貢南遊₂於楚₁、反₂於晉₁、過₂漢陰₁、見₂一丈人、方將₂爲₂圃畦₁、鑿レ隧而入レ井、抱レ甕而出灌、搰搰然、用レ力甚多、而見レ功寡と、

【詩意】詩人は固より長貧である、日午に猶ほ飢ゑて未だ活動が出來ない、偶然にも一飽を得るときは、萬象が嘲弄するかの如くなるに困しむ、花を尋ねんと意思が動けば命なぞを論ずる遑がない、且雪も愛するを以て長く凍冷を忍ぶ、天公も詩人を憐まざるのではないが、飽くことを聽けば卽ち喧閧するであらう、君は三郡を次ぎ次ぎと太守と爲つた、而して至る所賓客や從者が滿ちて居た、江湖の出來事は常に眼中に在りて、詩酒の會を以て豪奢なる放恣を事と爲た、又王命を奉じ使者と爲りて骨を折り心を磨す、而かも其の心事の淸きは於陵の陳仲にも比すべきである、永く懷ふ茶山の下に於て、妓を攜へて春貢の茶を造修せしことを、更に記憶する檻泉亭に在りし時を、花を挿んで雲髻の重き風流の游を、爾來は蕭然として灊山の麓に臥して、愁を將て春禽の鳴呼を聽く、忽ち早梅の花開くを見、酒を飮まずして但孤吟諷詠し、其の詩を以て我に寄贈せらる、其の詩を讀めば我頭痛も平愈する、嗟子君は本來侍從の臣である、嘗て筆橐を以て上雍に隨從せるが、一旦韈を脫せしめて芍藥を吟じたる太白の豪氣と、札を給せられて雲夢を賦せし相如との蹤を學び、遂に何人も左遷や流落を慰する無きに至る、所が嘉禱は天の種植である、杯を傾けて落梅花曲を笛中に傳ふる、帽は拂ふ果下の騂馬に乘りて、時節に感じて以て羈旅の情を念ふ、此の意は君も我輩も同樣である、故山は今や何が有るか、定めし桐花鳥が頻りに鳴集して居るであらう、君も亦僕が蜀を想ふと同じく故鄕の廬山を憶ひ、早く歸りて其の藏書洞を掃はんと、何か當に此の花を種ゑて、各の漢陰丈人の如く骨を折ることが出來るであらう、

【餘論】紀曉嵐は評して曰く、一起口說₂公擇₁、却句句藏₂自己₁在レ內、早爲₂篇末結胎₁、又曰、借レ題抒レ意、梅花只借作₂點綴穿挿₁、方是和レ人詩、若句句實₂寫梅花₁、便同₂自詠₁、又忽見早梅花の二句を評して入得擺脫と、又何人の二句を評して一棨拂、不レ粘不レ脫と、又此意の二句を評して挿₂入自己₁、便有₂綰合₁と、又何當の結末二句を評して一齊綰結、滴水不レ漏と、乃ち案ず、題目に梅花と題して詩中に梅無し、維摩の無言は竟に文殊の有言に勝るものである、

送₂淵師歸₂徑山₁　淵師の徑山に歸るを送る

我昔嘗爲₂徑山客₁。（一）　我昔し嘗て徑山の客と爲る、
至レ今詩筆餘₂山色₁。（二）　今に至りて詩筆山色を餘す、
師住₂此山₁三十年。　師此の山に住すること三十年、
妙語應レ須₂得₂山骨₁。（三）　妙語應に須らく山骨を得べし、

【字解】【一】徑山客　徑山は今日の浙江省錢塘道臨安縣の北三十里に在る、唐肅宗の永泰元年に法欽、此の山に入りて修錬す、代宗の大曆四年、闕に召し、國一大師と號を賜ふ、此より宋元と世を歷て、今に至

鄱城六月水雲蒸。　鄱城六月水雲蒸す、
飛蚊猛捷(四)如㆓花鷹(五)㆒。　飛蚊猛捷なること花鷹の如し、
羨師方丈冰雪冷。　羨む師が方丈冰雪冷か、
蘭膏(六)不動長明燈。　蘭膏不動長明燈、
山中故人知㆓我至㆒。　山中の故人我が至るを知り、
爭來問訊(七)今何似。　爭ひ來りて問訊す今何似と、
爲言百事不㆑如㆑人。　爲めに言へ百事人に如かず、
兩眼猶能書(八)㆓細字㆒。　兩眼猶は能く細字を書すと、

【題義】　澄慧大師、名は淵と稱する僧が徑山に歸るを送る詩である、

【詩意】　我は昔日徑山の客と爲りて寓居した、其の時の詩筆は平凡のもので山の皮相を寫せるのみ、然るに師は此の徑山に定住すること三十年、修行の久しき妙語も應に山の骨まで了得せらるるであらう、鄱城の地は六月の晩夏水雲蒸して、飛蚊が人を刺す猛捷にして花鷹の如くである、羨む師が徑山の方丈は夏日にも冰雪が冷やかにて、蘭膏は盡くる時無く不動にして日夜に燈が明である、山中の故人は師が歸るを聞いたなら、爭ひ來つて東坡は今日何似と問訊するであらう、師は我が爲めに挨拶して吳れ玉へ東坡は百事他人に及ばざるが、唯兩眼は猶ほ明かで細字をも書すと、

るまで達磨禪の道場と爲つて存在する、【二】山色　「傳燈錄」に、祖欲㆓西返㆓天竺㆒、乃命㆓門人㆒曰、時將㆑至矣、汝等各言㆓所得㆒、時門人道副對曰、如㆓我所見㆒、不㆑執㆓文字㆒、不㆑離㆓文字㆒、而爲㆓道用㆒、師曰汝得㆓吾皮㆒と、山色は即ち山皮である、【三】山骨　「傳燈錄」に、道育曰、四大本空、五陰非㆑有、而我見處、無㆓一法可㆒㆑度、祖師曰、汝得㆓吾骨㆒と、【四】猛捷　傅休奕の賦、猛捷者莫㆑如㆑虎と、【五】花鷹　花は鷹が翼に紋あるを謂ふ、【六】蘭膏　「楚辭招魂」に、蘭膏明燭、華鐙錯些と、【七】問訊　「古樂府」に、幸可㆓廣問訊㆒と、「佛經」に問訊如來と、今の句は佛經を準とする、【八】書細字　公の自注に、徑山夏無㆑蚊、余舊詩云、問龍乞㆑水歸洗㆑眼、欲㆑看㆓細字㆒銷㆓殘年㆒と、

【餘論】　紀曉嵐曰く、不㆑免㆓淺率㆒と、余謂ふ紀は佛學を知らざれば、勝手なる批評を下す、淺率は紀自からが淺率である、自分の詩は道副の如く淺く、師が語は道育の如く深いと云ふ意義を山色と山骨とに依つて出したる處、言ふべからざる味がある、紀は學問を以て文學を解せんとする癖がある、此の詩の評に於て、最も能く其の癖を見る、

## 送㆓表忠觀錢道士歸㆒㆑杭　表忠觀の錢道士が杭に歸るを送る

熙寧(一)十年。詔以㆓龍山廢佛祠(二)㆒。爲㆓表忠觀㆒。元豐(三)二年。通教(四)自㆑杭來。見㆓予於吳興㆒。問觀(五)亦卒㆑工乎。曰未也。杭人比歲不㆑登。莫㆑有㆓助㆑我者㆒。余曰。異哉杭人。重(六)㆑施輕㆑財。是不㆔獨爲㆓福田(七)㆒也。將㆔自託㆓於不朽㆒。今歲成矣。子其行乎。及㆑還作㆑詩送㆑之。

【訓讀】　熙寧十年、詔して龍山の廢佛祠を以て表忠觀と爲し、元豐二年、通教杭より來り、予を吳興に見る、問ふ觀亦工を卒るかと、曰く未だしなり、杭人比歲登らず、我を助くる者ある莫し、余曰

く、異なる哉杭人、施を重んじ、財を輕んず、是れ獨り福田の爲めならざるなり、將に自から不朽に託せんとす、今歳成る、子其れ行くか、還るに及んで詩を作り之を送る、

【字解】【一】熙寧十年　宋の第六主神宗の年號、【二】廢佛祠　廢佛寺と見よ、祠ではない、妙因院を廢したのである、【三】元豐二年　熙寧十年より三年後である、同じく神宗の年號、【四】通教　道士の名、【五】間觀　法師の住院を寺と謂ひ、道士の住院を觀と謂ふ、今此の表忠觀は吳越の錢氏一族を祀るの觀である、【六】重施　杭州の人間が觀を建築するに金錢を施舍するを謂ふ、【七】福田　道士が世世生活出來ることを謂ふ、是の福田の語は佛氏の專門語、今借りて道士に用ふ、

（一）先王舊（二）德在民心。　先王の舊德民心に在り、
（三）著令稱忠上意深。　著令忠を稱す上意深し、
（四）墮淚行看會祠下。　墮淚行いて看る祠下に會するを、
（五）挂名爭欲刻（六）碑陰。　挂名爭ひ碑陰に刻せんと欲す、
淒涼（七）破屋塵（八）凝坐。　淒涼破屋塵坐に凝り、
憔悴（九）雲孫雪滿簪。　憔悴雲孫雪簪に滿つ、
未信諸豪容郭（一〇）解。　未だ信せず諸豪の郭解を容るるを、
卻從他縣施千金。　卻つて他縣より千金を施す、

【字解】【一】先王　用語廣し、今は錢氏の祖先を謂ふ、【二】舊德　「周易」に、食舊德、貞厲終吉と、【三】著令　詔令を著明するを謂ふ、【四】墮淚　晉の羊祜が峴山碑を稱して墮淚碑と謂ふ、【五】挂名　韓退之の文、挂名經論自託不腐と、【六】碑陰　「徐陵傳大士碑」に、載在碑陰、書其名品と、【七】破屋　司空圖の詩、落葉穿破屋と、【八】凝坐　「晉簡文帝紀」に、留心典籍、不以居處爲意、凝塵滿席

宴如也と、謝靈運の詩、芳塵凝瑤席と、【九】雲孫　錢道士を謂ふ、「爾雅」に、子の子が孫、孫の子が曾孫、曾孫の子が玄孫、玄孫の子が來孫、來孫の子が晜孫、晜孫の子が仍孫、仍孫の子が雲孫、其の意は輕遠如浮雲とある、【一〇】郭解　「史記游俠傳」に、郭解洛陽人、有相仇者、邑中賢豪、居間者以十數、終不聽、客迺見解、解夜見仇家、仇家曲聽解、解乃謂仇家、洛陽諸公、在此間多不聽、今子幸而聽解、解奈何從他縣、奪人邑中賢大夫權乎、乃夜去、不使人知と、

【題義】表忠觀を守る錢道士が杭州の其の住觀に歸るを送る詩である、

【詩意】吳越の祖先たる錢鏐の德は民心に滲み込んで在る、敕旨を以て表忠と稱する主上（神宗）の意は深きものがある、今の民は晉時の民と同じく碑を覽て淚を墮し祠下に會するであらう、又各の其の志を表したる名を碑陰に刻せんことを爭ふのである、淒涼たる錢氏の破屋は塵埃が坐に凝る如く曾ては荒れたのである、憔悴せる錢氏の雲孫は雪が簪に滿つる如くに老ゆ、諸豪が郭解の俠氣を容れたと云ふことを未だ信じない、信じない理由は却つて他縣より民が其の德を慕うて錢廟修理に千金を寄施したので知れる、

【餘論】公は別に表忠觀碑を杭州知事趙抃に代つて作りたるものがある、其の文も、其の銘も、堂堂たる傑作であるに反し、此の詩の平凡無味なるは不思議に思ふ、紀曉嵐曰く如此大題、何詩語凡近乃爾、豈美盡於碑、此不妨草草耶と、人の歸を送るのであるから、歸來後觀を守るの訓戒の意味を加ふれば可と思ふが、題目は一向に關らずして錢廟の事のみを言ふ、紀評の如く草草たる故に然るかと察する、

## 次韻周開祖長官見寄　　周開祖長官が寄せらるるに次韻す

(一)俯仰東西閱數州、　俯仰東西數州を閱す、
老於(二)岐路豈伶優、　岐路に老ゆ豈伶優ならん、
初聞父老推(三)謝令、　初めは聞く父老の謝令を推すを、
旋見兒童迎(四)細侯、　旋ち見る兒童の細侯を迎ふるを、
(五)政拙年年祈水旱、　政 拙にして年年水旱を祈り、
民勞處處避嘲謳、　民勞して處處に嘲謳を避く、
(六)河呑巨野那容塞、　河は巨野を呑むも那ぞ塞を容れん、
(七)盜入蒙山不易搜、　盜は蒙山に入るも搜し易からず、
仕道固應慚(八)孔孟、　仕道固に應に孔孟に慚づべし、
扶顚未可責(九)由求、　扶顚未だ由求を責むべからず、
漸謀田舍猶懷祿、　漸く田舍を謀るも猶ほ祿を懷ひ、
未脫風濤且傍洲、　未だ風濤を脫せず且らく洲に傍ふ、
(一〇)惘惘可憐眞喪狗、　惘惘憐むべし眞の喪狗、
時時相觸似(一一)虛舟、　時時相觸れ虛舟に似たり、
竭來震澤都如夢、　竭來震澤都て夢の如く、
只有苕溪可(一二)倚樓、　只苕溪の樓に倚るべきあり、
齋醞酸甜如蜜水、　齋醞 酸甜蜜水の如く、
樂工零落似(一三)風甌、　樂工零落して風甌に似たり、
遠思(一四)顏柳幷(一五)諸謝、　遠く思ふ顏柳幷に諸謝、
近憶(一六)張陳與(一七)老劉、　近く憶ふ張陳と老劉とを、
風定軒窗飛豹脚、　風定まつて軒窗豹脚飛び、
【自注】湖多蚊。土人云豹脚者尤毒。
雨餘欄檻上蝸牛、　雨餘の欄檻蝸牛上る、
舊遊到處皆(一八)蒼蘚、　舊遊到る處皆蒼蘚、
同甲惟君尙黑頭、　同甲惟君尙ほ黑頭、
憶昔湖山共(一九)尋勝、　憶ふ昔し湖山に共に勝を尋ね、
相逢(二〇)杯酒兩忘憂、　相逢うて杯酒兩ながら憂を忘る、

---

【字解】【一】俯仰　「魯靈光殿賦」に、俯仰顧盼、東西周章と、【二】岐路　「陸士衡樂府」に、岐路交朱輪と、【三】謝令　「晉書鄧攸傳」に、攸爲吳郡、刑政清明、去郡、不受一錢、百姓數千人、留牽攸船、不得進、攸乃少停、夜中發去、吳人歌之曰、紞如打五鼓、雞鳴天欲曙、鄧侯挽不留、謝令推不去、【四】細侯　「後漢書郭伋傳」に、伋字細侯、爲幷州牧、始至行部、到西河美稷、有兒童數百、各騎竹馬、道次迎拜と、【五】政拙　自責して謂ふ、【六】河呑　公徐州に在りて水害に遭ひしを謂ふ、【七】盜入蒙山　公密州に在りし事を謂ふ、【八】孔孟　孔子と孟子、【九】由求　仲由と冉求、【一〇】惘惘　「莊子庚桑楚篇」に、汝亡人哉、惘惘乎、汝欲逞汝性情、而無由入、可悲哉と、「史記」に、孔子適鄭、與弟子相失、獨立郭東門、鄭人曰、東門有人、其顙似堯、其項類皐陶、其肩類子產、然自腰以下、不及禹三寸、纍纍若喪家之狗と、【一一】虛舟　「莊子山水篇」に、方舟而濟於河、有虛船來觸舟、雖有褊心之人、不怒と、【一二】倚樓　杜子美の詩、驗業頻看鏡、行藏獨倚樓と、【一三】風甌　査云、甌疑作鷗と、紀云、甌當作漚と、【一四】顏柳　顏眞卿と柳公權、【一五】諸謝　謝靈運、謝惠連、謝元暉、【一六】張陳　張子野、陳令舉、【一七】老劉　劉孝叔、【一八】蒼蘚　蒼蒼たる苔蘚、皆墓上を謂ふ、【一九】尋勝　韓愈の詩、尋勝不憚險と、【二〇】杯酒　顧榮謂張翰曰、唯酒可以忘憂と、【二一】駭汗流　韓愈の詩、

醉看梅雪清香過。　醉うて梅雪清香を看て過ぎ、
夜棹風船駭汗流。(二一)　夜風船に棹して汗流に駭く、
百首共成山上集。　百首共に成す山上の集、
三人同作月中遊。　三人同じく作す月中の遊、
海南未起垂天翼。(二二)　海南未だ起たず垂天の翼、
澗底仍依徑寸麻。　澗底仍ほ依る徑寸の麻、
已許春風歸過我。　已に許す春風の歸りて我に過ぐるを、
預憂詩筆老難酬。　預め憂ふ詩筆の老いて酬い難きを、
此生歲月行飄忽。　此の生歲月行くゆく飄忽、
晚節功名亦謬悠。(二三)　晚節功名亦謬悠、
(二四)犀首正緣無事飲。　犀首正に緣る無事の飮、
(二五)馮驩應爲有魚留。　馮驩應に有魚の爲に留まるべし、
從今更踏青州麴。(二六)　今より更に青州の麴を踏み、
薄酒知君笑督郵。　薄酒知る君が督郵を笑ふを、

汗出餽且駭と、【二二】垂天翼 「莊子逍遙游篇」に、鵬怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於南溟と、【二三】謬悠 「莊子天下篇」に、莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭と、虛遠にして、實際に近からざるを謬悠と言ふ、【二四】犀首 「史記」に、陳軫謂犀首曰、公何好飲也、曰、無事也、軫謂曰、吾請令公厭事、可乎と、【二五】馮驩 「史記」に、馮驩居孟嘗君傳舍、彈其劍而歌曰、長鋏歸來乎、食無魚、孟嘗君、遷之幸舍、食有魚矣と、【二六】青州 「世說」に、桓公有主簿、善別酒、有酒輒令先嘗、好者謂青州從事、惡者、謂平原督郵、注曰、青州有齊郡、平原有鬲縣、從事謂到臍下、督郵謂在鬲上住也と、臍はホソ、ヘソ、鬲はムネ、



【題義】周邠字は開祖は錢塘の長官である、其の寄示せられたる詩に次韻して作る、

【詩意】東西に俯仰して數州を閱歷し、以て岐路に身を老ゆるは伶優のみではない、君の官途に在るや初めは聞く父老が謝令を推したる如く敬したるを、更に旋りて見る兒童までが細侯を迎ふる如くに禮したるを、僕は官に在りて政治を執ること拙なれば年年水旱を天に祈るの不幸を見、又民衆をして勞せしめて處處にて嘲弄せられし謳を避けた、河が巨野を呑むの水害に逢ふも其れを閉塞する策が無く、盜賊が蒙山に入るも其れを搜索する力も薄かつた、道行はれざるも仕ふるは固に孔孟に對して慚愧する、又國家の顚を扶け正すの力無きを責められたる由求が事を言ふ僕は資格が無い、而かも漸く氣が付いて田舍の善きを知るも半面は猶ほ仕祿を懷ふの慾がある、是の故に未だ世路の風濤を脫せずして且らく知府の位地に居る、惘惘として憐む可き狀態は眞に喪家の狗の如くである、又時時是非を誤りて觸れることは虛舟に似たることもある、さきごろ住したる震澤は都て夢の如くに思ふ、只苕溪の游びのみは樓に倚るべしとの安意があつた、齋釀の酸甜は變じて蜜水の如く、樂工は零落して蹤無く風漏にも似て居る、遠くしては思ふ顏柳諸謝の世に於ける功と文に於ける力とを、近くしては憶ふ張陳老劉の高風美德を、風定まるときは軒窗に惡蚊が多く飛び、雨餘の欄檻には蝸牛が上るを見る、而して舊游は到る處に皆墓下の人と爲つて居る、僕と同年の君は唯獨り黑頭で健在する、昔日を追憶すれば湖山に共に名勝を尋ね、相逢うては杯酒兩人とも憂を忘れた、乃ち醉うて梅雪の清香を看賞して過ぎ、又は夜風船に棹して汗の流るるに駭く、百首の詩は各の山上の集會にて成る、三人にして同

じく月中の游もする、君は今日宜しく垂天の翼を張りて臺閣に飛び入る人であるが、澗底に在りて徑寸の縣令席に依る、巳に許せるは春風が歸りて我に過ぎることを、預め憂ふ詩筆が澀滯して厚意に酬い難きを、此の生や歲月行くゆく飄忽にして、晚節の功名も亦謬悠たるものである、犀首と同じく我は無事なるが故に飲む、馮驩たる君は宜しく魚あるが爲めに留まるのであらう、今より更に靑州從事たる美酒を飮むべきである、平原督郵たる惡酒は君の笑ふ所である、

【餘論】紀曉嵐曰く、喪狗之喪字、原有二平仄二讀一、如作レ平、則不レ協レ律、如作レ去、則側二去家事一、殊不レ安と、又曰く遠思句法太率と、又曰く澗底句未レ詳、又曰く七言長律、少陵亦不レ能レ工、不レ可レ作也と、紀は此の如く評するを以て自から選せる「擇粹」には此の詩を取らず、案するに喪は明白に去聲に使用せらる、去聲としての喪は得喪、氣喪、道喪、淪喪、彫喪、沮喪にして、輓喪、奔喪、亡喪、治喪の平聲では無い、喪家狗は平　仄である、公が大才なるも此の失は如何とも出來ない、馮應榴も「敬齋古今黈」を引いて曰く、止用二喪狗兩字一、似レ不二甚妥一と、今余は謂ふ是れ皆次韻の失にして、公の失ではない、宋人の失にして、公の失ではない、

## 林子中以レ詩寄二文與可及余一。與可既歿。追二和其韻一

林子中、詩を以て文與可及び余に寄す、與可既に歿す、其の韻を追和す

斯人所二甚厭一。投(一)界每不レ受。　斯の人甚だ厭ふ所、投畀每に受けず、

欲二其少(二)須臾一。奪(三)去唯恐レ後。　其をして少須臾ならんと欲するも、奪ひ去りて「唯後るるを恐る」、

云誰尸(四)二此職一。無(五)乃亦假(六)守。　云ふ誰か此の職を尸どる、無乃亦假守せん、

賦才有(七)二巨細一。無レ異二斛與一レ斗。　賦才巨細あり、斛と斗とに異なる無し、

胡不レ安二其分一。但聽二物所一レ誘。　胡ぞ其の分に安んせず、但物の誘ふ所に聽す、

時(八)來各飛動。意(九)合無二姸醜一。　時來りて各の飛動す、意合すれば姸醜無し、

坐令二雞(一〇)棲車一。長載二朱伯厚一。　坐ろに雞棲車をして、長く朱伯厚を載せしむ、

平生無(一一)二一旅一。既(一二)死咤(一三)二萬口一。　平生一旅無く、既に死して萬口咤ちす、

自レ聞二與可亡一。胸臆生(一四)二堆阜一。　與可の亡を聞きしより、胸臆堆阜を生ず、

懸知臨絕意。要二我一執手一。　懸かに知る臨絕の意、我をして一たび執手せんと要す、

相望五百里。安得レ自二其牖一。　相望む五百里、安んぞ得ん其の牖に自るを、

遺(一五)文付二來哲一。後事待二諸友一。　遺文來哲に付し、後事諸友を待つ、

伶(一六)傳嵇(一七)紹孤。老病孟(一八)光偶。　伶傳嵇紹孤なり、老病孟光偶なり、

世人賤(一九)二目見一。爭笑千(二〇)金帚。　世人目見を賤しみ、爭ひ笑ふ千金の帚、

君詩與二楚詞一。識者當レ有(二一)レ取。　君が詩楚詞と、識者當に取るあるべし、

但知愛墨竹。此歎吾已久。 但墨竹を愛するを知る、此の歎吾已に久し、

故人多厚祿。能復哀君否。 故人多くは厚祿、能く復た君を哀しむや否や、

不見林與蘇。饑寒自奔走。 見ずや林と蘇と、饑寒自から奔走す、

【字解】【一】投畀　詩に、取彼譖人、投畀豺虎、豺虎不食、投畀有北、有北不受と、【二】少須臾　「漢賈山傳」に、願少須臾毋死見德化之成と、【三】奪去　「唐楊綰傳」に、綰薨、帝驚悼曰、天何奪綰之速耶と、【四】尸此職　詩に誰其尸之と、【五】無乃　「論語」に無乃大簡乎と、杜子美の詩、無乃聖射勞と、【六】假守　「漢項籍傳」に、會稽假守通素賢と、柳子厚の文、存義假令零陵二年と、假守、假令共に攝守である、皆ムシロである、【七】有巨細　吳都賦に、庸可共世而論巨細と、【八】時來　杜子美の詩、時來展才力と、【九】意合　意氣投合、「史記」に、善仕不如遇合と、【一〇】雞棲車　「後漢陳蕃傳」に、朱震字伯厚、爲州從事、奏濟陰太守單匡贓罪、并連匡兄中常侍、超三府、諺曰、車如雞棲馬如狗、疾惡如風朱伯厚と、杜子美の詩、雞栖奈汝何と、【一一】無一旅　「左傳」に、五百人爲旅と、【一二】既死　王次公曰、言生遭寡徒、而死則共惜也と、【一三】咤　多く叱咤などと成語して怒聲に用ふ、今次公の言ふ如く惜聲に用ふるか、【一四】生堆阜　胸中に邪魔の物が生ずる、【一五】遺文　魏文帝の書に遺文都爲一集と、【一六】伶俜　古詩に、少年惶且怖、伶俜到他鄉と、オチブレ又はサマヨフ貌を言ふ、【一七】皆紹孤　「晉山濤傳」に、濤字巨源、與嵇康善、康後坐事臨誅、謂子紹曰、巨源在、汝不孤矣と、【一八】孟光偶　後漢の梁鴻と其の妻の孟光とが夫妻相慰めて偶坐する、前に辨ある、【一九】賤目見　「張平子東京賦」に、若客所謂、末學膚受、貴耳而賤目者也と、【二〇】千金帚　魏文帝の論文に、夫人善於自見、而文非一體、鮮能備善、是以各以所長、相輕所短、里語曰、家有敝帚、享之千金、斯不自見之患也と、【二一】有取　劉勰辨騷に、楚辭者體慢於三代、而風雅於戰國、乃雅頌之博徒、而詞賦之英傑也、揚子老子之言遺德、吾有取焉耳と、【二二】故人　杜子美の詩、厚祿故人書斷絕と、

【題義】林希字は子中が詩を作り公と文與可とに寄示せられたるも、與可は既に歿したる後なれば公が子中の詩に和して詩中に與可の事を言うたのである、

【詩意】斯の文與可と云ふ人が甚だしく厭ふことは、投げ畀へたる物は毎に受けない、今少須臾くは生存させたく思うたが、天が奪ひ去つて後るるを恐るるものの如くである、云ふ誰が湖州知府の職を尸る者ぞ、無乃亦假守の人が尸るであらう、人の賦才は各の巨才と細才とがある、其れは斛と斗との異あると同じである、斛は斛斗は斗と其の分際に安んずれば可い、但物象の誘ふに聽すべきである、時節が來れば各の飛動する、意氣合すれば妍醜の別は無い、陳蕃は友人の朱伯厚をして雞の棲む車の如き役不足の地位に置いた、平生は一旅團をも有せざる身が、既に死んだと聞いて萬口が一齊に惜聲を放つた、文與可が死亡すと聞いてより、僕は胸臆に堆阜を生じたるかと疑ふ、遙かに知る與可が世と背絕に臨むときの意、我と一度握手がしたいと要したのであるが、相望むとも懸遠五百里である、安んぞ其の牖に自ることが出來やう、但し其の遺藁は後進の者に付與し、其の家の後事は諸友に依託する、伶俜たるも幸なるは嵆紹の孤兒である、老病たるも幸であるは孟光の偶坐である、而して世人の多くは古より目見を賤しと爲す、論より證據千金の帚を爭ふを笑うたではないか、文君の詩と楚詞は、識者は必ず之を取るべきを信ずる、世人の多くは識者でない但其の墨竹を愛することのみを知る、此の事を慨歎すること吾は久しきものである、文君の故人は多く厚祿の身分である、其の故人は能く復た君を哀哭するや否や、見ずや林子中と蘇子瞻は、飢と寒とに鬪ひつつ奔走して居る、

【餘論】紀曉嵐曰く、起不㆓醒豁㆒、不㆑免㆓吃力之痕㆒、後半自沈著と、詩中言ふ所首尾共に與可の事を言うて、寄せられたる林子中の事は陪伴たるに過ぎない、意合無㆓妍醜㆒、長截㆓朱伯厚㆒等の句あるを見れば、當時黨人が朝に蘇派、暮に王（安石）派、昨は守舊派、今は新法派と移り易ること、猶ほ今日我邦の政黨と稱するものと同様なることが知れる、

## 與㆓王郎昆仲及兒子邁㆒遶㆑城觀㆓荷花㆒。登㆓峴山亭㆒。晩入㆓飛英寺㆒。分韻得㆓月明星稀㆒。四首

王郎昆仲及び兒子邁と、城を遶りて荷花を觀、峴山亭に登り、晩に飛英寺に入り、分韻して月明星稀を得たり　四首

昨夜雨鳴㆑渠。曉來風（一）襲㆑月。　昨夜雨渠に鳴り、曉來風月を襲ふ、
蕭然欲㆓秋意㆒。谿水清可㆑啜。　蕭然秋意ならんと欲す、谿水清くして啜るべし、
環㆑城三十里。處處皆佳絶。　城を環る三十里、處處皆佳絶、
（二）蒲蓮浩如㆑海。時見舟一葉。　蒲蓮浩として海の如く、時に見る舟一葉、
此間眞避㆑世。（三）青蒻低㆓白髮㆒。　此の間眞に世を避く、青蒻白髮に低る、
相逢欲㆓相問㆒。已逐㆓驚鷗（四）沒㆒。　相逢うて相問はんと欲す、已に驚鷗の沒するを逐ふ、

【字解】【一】襲月　「漢劉向傳」に、「樊惠襲㆑月」と、【二】蒲蓮　韓愈の詩、淺有㆓蒲蓮㆒深有㆓葭葦㆒と、【三】青蒻　蒻を以て製せる笠、【四】鷗沒　杜子美の詩、白鷗沒㆓浩蕩㆒と、

【題義】王家の兄弟と公と公の子邁と四人にて城を遶り荷花を觀、而して峴山亭に登り、晩日に飛英寺に入る、是の寺に於て韻を分ちて各の詩を賦し、公は月明星稀の四字を得て四首を作るもの、

【詩意】昨夜は雨聲が渠に鳴るを聞いたが、曉來は天晴れて風が月を吹き襲ふ、夏日であるが蕭然として秋意を覺ゆる、谿水は清冽にして啜る可く、城を環る三十里、處處皆佳絶である、蒲蓮は浩渺として海の如く、時に何處からとも無く舟が一葉來るを見る、青蒻は白髮に及ぶまで低れてある、相逢うて互に相問はんと欲すれば、皆言ふ心は已に驚鷗の沒するまで逐ふと、

〔二〕

清風定何物。可㆑愛不㆑可㆑名。　清風定んで何物ぞ、愛すべくして名く可からす、
所㆑至如㆓（一）君子㆒。草木有㆓（二）嘉聲㆒。　至る所君子の如く、草木嘉聲あり、
我行（三）本無事。（四）孤舟任㆓斜横㆒。　我が行本無事、孤舟斜横に任す、
中流自偃仰。適與㆑風相迎。　中流に自から偃仰す、適ま風と相迎ふ、

擧杯屬浩渺。樂此兩無情。　杯を擧げて浩渺に屬す、此を樂んで兩ながら無情、

歸來兩溪間。雲水夜自明。　歸來兩溪の間、雲水夜自から明らかなり、

【字解】【一】如君子　「風俗通」に、風或清明來、久長不動樹木、離地二三丈者、此謂龍德在於下風、或清明、不及二三尺者、此君子風也と、【二】嘉聲　「蔡邕碑」に、文領嘉聲兩響和と、【三】本無事　「唐陸象先傳」に、天下本無事と、【四】孤舟　寇萊公の詩、孤舟盡日橫と、

【詩意】清風と云ふものは定んで何物である、但是れ愛すべくして何物と名くることは出來ない、至る所嫋嫋と吹いて君子の如く人に快感を覺えしむ、又風の爲めに草木も嘉聲を發する、我が一行は本より無事の人である、孤舟に乘じて舟の斜橫に一任する、而して中流に於て上下を俯仰する、適ま風と相迎へて、杯を擧げて以て浩渺に屬する、此を樂んで人も境も共に無情である、兩溪の間を歸り來れば、雲も水も夜自然と晴明である、

〔三〕

(一)苕水如(二)漢水。鱗鱗鴨頭青。　苕水は漢水の如く、鱗鱗として鴨頭青し、

(三)吳興勝(四)襄陽。萬瓦浮青冥。　吳興は襄陽に勝る、萬瓦青冥に浮ぶ、

我非(五)羊叔子。媿此峴山亭。　我羊叔子にあらず、此の峴山亭に媿づ、

悲傷意則同。歲月(六)如流星。　悲傷の意は則ち同じ、歲月流星の如し、

從我(七)兩王子。(八)高鴻插修翎。　我に從ふ兩王子、高鴻修翎を插む、

(九)湛輩何足道。當以德自銘。　湛輩何ぞ道ふに足らん、當に德を以て自から銘すべし、

【字解】【一】苕水　浙江の天目山より出づ、【二】漢水　陝西の嶓冢山より出づ、【三】吳興　苕水の流るる地、【四】襄陽　漢水の流るる地、【五】羊叔子　晉の羊祜字は叔子、卒するに及び、襄陽の百姓、其の德を慕ひ、碑を峴山に樹て、以て墮淚碑と題す、【六】如流星　王昌齡の詩、白馬如流星と、【七】兩王子　王適と王遹、【八】高鴻　「西京賦」に弋高鴻と、【九】湛輩　「洪容齋題跋」に、晉代名臣文集、凡十四家、有張敏者、太原人、其一篇云、頭責子羽、文九百餘言、鄒湛姓名、因羊叔子而傳、字曰潤甫と、「元和郡縣志」に、羊祜鎭襄陽、與鄒潤甫同登峴山と、

【詩意】苕水の流れは漢水の如くである、鱗鱗として水は鴨頭の青を漾はす、而して吳興の繁華は襄陽に勝るものがある、萬家の屋瓦は青冥に浮び出る、我は當年の羊叔子ではない、不德を以て此の峴山亭を見ることを媿ぢる、但悲傷する意は當年の百姓と同じ、歲月は流星の如く疾し、我に從隨する王郎の二人の兒は、高鴻が修翎を插むの概がある、鄒湛の輩は何ぞ其れ道ふに足らんや、人は當に德を以て自から銘とすべきである、

〔四〕

吏民憐我嬾。鬭訟日已稀。　吏民は我が嬾きを憐み、鬭訟日に已に稀なり、

能爲無事飮。可作(一)不夜歸。　能く無事の飮を爲す、不夜の歸を作す可し、

復尋飛英游。盡此一寸暉。　復た飛英を尋ねて游び、此の一寸の暉を盡くす、

撞鐘履聲集。顚倒雲山衣。　鐘を撞けば履聲集る、顚倒す雲山の衣、

我來無時節。杖屨自推扉。　我來る時節無し、杖屨自から扉を推す、

莫作使君看。外似中已非。　使君の看を作す莫かれ、外は似て中は已に非なり、

【字解】【一】不夜歸「詩」に厭厭夜飲、不醉無歸と、杜子美の詩、不夜月臨關と、月明晝の如きを謂ふ、【二】飛英寺在府城北門內、唐咸通中、僧雲皎、自長安來、得舍利、建飛英石塔、中和五年、改上乘寺、景德二年、改書名、飛英教寺とあれば、天台又は華嚴を奉ずるのであらう、【三】顚倒「毛詩」に、東方未明、顚倒裳衣と、

【詩意】官吏も人民も我が嬾性を憐むのであらう、鬪訟等の事は日に已に稀である、訟事稀なるが故に我は無事に飲むことが出來る、月明に乘じて歸るの好きを思へば、復た飛英寺を尋ねて游び、此の一寸時の暉も盡くさんと思ふ、僧が山鐘を撞けば履聲が多く集まる、蒼黃と至れば雲山の衣を顚倒して著るものもある、我は來游するに時節は問はない、興が湧けば杖屨自から山扉を推す、諸君は僕を太守だの知府なぞと看て呉れるな、外觀は知府であるが中心は知府ではない、

【餘論】紀曉嵐が第一首を評して忽作清音、却仍用本色、不規規于王孟形模と、又第二首を評して、此暗用漁父事、非寫景也と、又三四を評して二首又以朴至勝と、此の四首を以て前の林子中追和の詩に比較すれば、別人の手に出づるの感がある、紀が王孟形模と評したるは頗る當る、

次韻章子厚飛英留題　章子厚が飛英留題に次韻す

款段曾陪馬少游。　款段曾て陪す馬少游、

而今人在鳳麟洲。　而今人は鳳麟洲に在り、

黃公酒肆如重過。　黃公の酒肆如し重過せば、

杳杳白蘋天盡頭。　杳杳白蘋天の盡きる頭、

【字解】【一】款段「後漢書馬援傳」に、乘下澤車、御款段馬と、足の遲き馬、【二】鳳麟洲「東方朔十洲記」に、鳳麟洲、在西海之中と、【三】黃公「世說」に、王濬沖、爲尚書令、經黃公酒壚下過、顧謂後車客、吾昔與嵇叔夜、阮嗣宗、共酣飲於此壚、竹林之游、亦預其末、自嵇生夭、阮公亡以來、便爲時所羈紲、今日視此雖近、邈若山河と、【四】天盡頭 曾松詩に、直到天頭天盡頭と、

【題義】章惇字は子厚が翰林學士たりし時、飛英寺に留題せる詩を見て公が次韻して作る、

【詩意】款段たる馬に騎り曾て馬少游に陪游したが、而今は其の人は鳳麟洲卽ち翰林に在る、黃公の酒肆に如し重過を思はば、杳杳たる白蘋の天盡きる頭に來玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰く、語殊溫藉と、信に七絕の上乘たるものである、

城南縣尉水亭得長字　城南縣の尉水亭、長の字を得たり

兩尉鬱相望。東西百步場。　兩尉鬱として相望む、東西百步場、

旂揮蒲柳市。伐鼓水雲鄉。　旂を揮ふ蒲柳の市、鼓を伐つ水雲の鄉、

已作二(五)觀魚檻一。仍開二(六)射鴨堂一。　已に觀魚の檻を作り、仍ほ射鴨の堂を開く、
全家依二(七)畫舫一。極目亂二(八)紅妝一。　全家畫舫に依り、極目紅妝亂る、
瀲瀲波頭細。疎疎(九)雨脚長。　瀲瀲として波頭細かに、疎疎として雨脚長し、
我來閒濯レ足。溪漲欲レ浮レ牀。　我來りて閒に足を濯へば、溪漲りて牀を浮べんと欲す、
(一〇)澤國山圍裏。(一一)孤城水影旁。　澤國山圍の裏、孤城水影の旁、
欲レ知二歸路處一。葦外記二(一二)風檣一。　歸路の處を知らんと欲せば、葦外風檣を記せよ、

【字解】【一】兩尉　「宋史職官志」に、太平興國七年、析二烏程一置二歸安二縣一、皆爲二望縣一則各置レ尉と、今考ふ或は尉水亭が二亭有るを謂ふかと、【二】百步場　尉司較閱處を言ふ、【三】蒲柳市　湖州を言ふ、【四】水雲鄉　湖州を言ふ、【五】觀魚　「左傳隱公五年」に、公將レ如レ棠觀二魚者一と、【六】射鴨堂　王註曰、孟郊爲二溧陽尉一、開二射鴨堂一と、【七】畫舫　劉希夷の詩、畫舫烟中淺と、【八】紅妝　杜子美の詩、特地引二紅妝一と、【九】雨脚長　杜牧の詩、林黑山高雨脚長と、【一〇】澤國　「周禮」に、凡邦國之使節、山國用二虎節一、土國用二人節一、澤國用二龍節一と、宋之問の詩、澤國韶氣早と、多水の國を謂ふ、【一一】孤城　李涉の詩、孤城吹角水茫茫と、【一二】風檣　「杜牧之、李長吉集序」に、風檣陣馬、不レ足レ爲二其勇一也と、檣は帆柱、ホバシラ、

【詩意】彼此の兩尉を鬱として相望む、其の東西大凡そ百步場である、東面の方では旆を揮うて蒲柳の市が有る、西面の方には鼓を伐つ水雲の鄉が有る、此の亭には已に觀魚の檻を作る、更に仍ほ射鴨堂をも開く、一家を擧げて畫舫に依る、其の畫舫には極目紅蓮の花が亂れて看える、瀲瀲たる波頭は微細であるが、疎疎たる雨脚は廣長である、我は此に來りて閒に足を濯はんと思ふも、溪は水漲りて牀を浮べんとする勢である、我が歸路の處を知らんと欲すれば、葦外に風檣の在るを記憶すれば路は誤らない、

【餘論】紀曉嵐曰く、東坡五言長律、皆氣機流動、由二其一筆寫出一、不下由二堆砌一而成上と、

## 與二胡祠部一游二法華山一　胡祠部と法華山に游ぶ、

陂湖欲レ盡山爲レ界。　陂湖盡きんと欲し山界を爲す、
始見寒泉落二高派一。　始めて見る寒泉の高派より落つるを、
(一)道人未レ放泉出レ山。　道人未だ放たず泉は山を出づ、
(二)曲折虛堂瀉二清快一。　曲折虛堂清快を瀉ぐ、
使君年老尙兒戲。　使君年老いて尙ほ兒戲す、
綠棹紅船舞二澎湃一。　綠棹紅船澎湃に舞ふ、
一笑翻レ杯(三)水濺レ裙。　一笑杯を翻して水裙に濺ぐ、
餘歡濯レ足波生レ(四)隘。　餘歡足を濯へば波隘に生ず、
長松攙レ天龍起立。　長松天に攙し龍は起立す、
蒼藤倒レ谷雲崩壞。　蒼藤谷に倒れて雲崩壞す、

【字解】【一】道人　學道の人を謂ふ。今、山僧を指す、【二】曲折　委曲と同じ、【三】水濺裙　王註曰、裴虔餘、成通末、佐二李公淮南幕一、游レ江舟水剌レ船、誤爲二竹篙濺水一、濕レ近レ座之衣一、公色變、虔餘遂紀二一絕一曰、滿額鵝黃金縷衣、翠翹浮動玉釵垂、從教水濺羅衣濕、知道巫山行雨歸、公覽レ之極レ歡と、【四】隘　狹隘、【五】崇嶹　范蔚宗の詩、遊レ渚攀二崇嶹一と、【六】可怪　「木玄虛海賦」に、何怪不レ備と、【七】誰云　「吳興掌故集」に、法華寺高頂、有二臨湖亭一、「湖州志」に、太湖周三萬六

仰穿(五)蒙密得清曠。　仰いで蒙密を穿ちて清曠を得、
一覽震澤吁可(六)怪。　一覽震澤吁怪なる可し、
誰(七)云四萬八千頃。　誰か云ふ四萬八千頃と、
渺渺東盡日所(八)曬。　渺渺東は盡く日の曬す所、
歸途十里盡風(九)荷。　歸途十里盡く風荷、
清唱一聲聞(一〇)露薤。　清唱一聲露薤を聞く、
【自注】是日樂工有作此聲者
嗟予少(一一)小慕眞(一二)隱。　嗟予少小より眞隱を慕ふ、
白髮青衫天所械。　白髮青衫天の械する所、
忽逢佳士與名山。　忽ち佳士に逢うて名山を與にす、
何異枯(一三)楊便馬疥。　何ぞ異ならん枯楊便ち馬疥、
君猶鸞鶴偶飄墮。　君猶ほ鸞鶴偶ま飄墮、
(一四)六翮如雲豈長(一五)鎩。　六翮雲の如く豈長鎩、
不將新(一六)句紀茲游。　新句を將て茲游を紀せずんば、

千頃、縱廣二百八十里、東洩ニ松江ニ、又東流二百里入レ海と、【八】所曬　韓退之の詩、秋日萬里曬と、【九】風荷　顧況の詩、荷花十餘里と、【一〇】聞露薤　杜子美の詩、盤餞承ニ露薤ニと、【一一】少小　韓退之の詩、少小倘奇偉と、【一二】眞隱　庾開府の詩、學氣求ニ眞隱ニと、【一三】枯楊　「五燈會元」に、僧問ニ仁岳禪師ニ、一大藏經、盡是名言、離ニ此名言ニ、如何指示、師曰、痴馬揩ニ枯楊ニと、【一四】六翮　「韓詩外傳」に鴻鵠擧ニ千里ニ、所レ恃者六翮耳と、【一五】長鎩　顏延年の詩、鸞翮有レ時鎩、龍性誰能馴と、鎩は本來ツルギ、矛(ホコ)である、今は殘(ソコナフ)の義、【一六】新句　張籍の詩、回レ首吟ニ新句ニと、【一七】清淨債　白樂天の詩、猶結淸淨緣と、

恐負山中清淨(一七)債。　恐らくは山中清淨の債を負はん。

【題意】胡祠部と卞山の別峯である法華山に游んで作れる詩。

【詩意】陂湖が盡きんと欲する所は山を以て南北の界を爲す、此に來りて始めて寒泉が高派より落つるを見る、道人は未だ坐禪より起つて來ないが泉は山より出て居る、其の水は虛堂を曲折して其の瀉ぐ狀は清快である、使君たる我輩は年老ゆるも尙ほ兒戲を好む、玩具である綠棹や紅船を其の水に浮ぶれば其の水の澎湃たるに舞ふ、一笑する船杯を翻覆すれば水が裙に濺ぐを、餘歡滅せざる中に足を濯へば波が狹隘に生ずる、又見る長松が天に攙して龍の起立せる如くなるを、或は蒼藤の枝が谷に倒れる狀は雲の崩壞せる如くである、仰いで蒙蒙密密の中を穿ち出れば清曠の地に達する、是に於て俯して震澤を一覽すれば怪物が棲むべきを思ふ、誰人か云ふ四萬八千頃の廣き湖が、渺渺として東の方日の曬す所に到りて盡きると、歸途の十里は盡く荷香を聞きながら過ぐ、且舟子が唱ふる歌聲は宛かも露薤を聞くが如きの哀調である、嗟予は少小の時より眞隱を慕うて居る、而かも白髮青衫眞隱と爲るを得ざるは天に械梏せらるるに由る、忽ち佳士に逢うて名山の游びを與にするも、何ぞ異ならん疥馬が枯楊に其體を摩擦するに、ただ一時の樂に過ぎないのである、胡君は鸞鶴の偶然と飄墮するが如く、六翮は雲の如くにして長鎩する憂は無い、新句を求め得て茲佳游を紀せざるときは、恐らくは山中清淨の債を長く負ふの憾みがある。

【餘論】紀曉嵐曰く、二詩俱遒緊と、又曰く薤露倒押欠妥と、今案ずるに倒用法は詩家の通例、而かも自然を損せざる範圍に於てのみ、露薤は如何に韻字の爲めとは言へ、紀評の如く妥當を欠くものである、英雄人を欺く者か、

又次前韻贈賈耘老　又前韻を次し、賈耘老に贈る

(一)具區呑滅三州界。　具區呑滅す三州の界、
浩浩湯湯納(二)千派。　浩浩湯湯として千派を納る、
從來不著萬斛船。　從來著けず萬斛の船、
一葉漁舟恣奔快。　一葉の漁舟恣に奔快す、
(三)仙壇古洞不可到。　仙壇古洞到る可からず、
空聽餘瀾鳴(四)湃湃。　空しく聽く餘瀾の鳴いて湃湃たるを、
今朝偶上法華嶺。　今朝偶ま上る法華嶺、
(五)縱觀始覺人寰隘。　縱觀して始めて覺ゆ人寰の隘きを、
山頭(六)臥碣弔孤冢。　山頭の臥碣に孤冢を弔す、
下有(七)至人僵不壞。　下に至人の僵れて壞せざるあり、
空餘白棘(八)網秋蟲。　空しく白棘を餘して秋蟲を網す、
無復(九)青蓮出幽怪。　復た青蓮の幽怪を出づる無し、
【自注】事見本院碑。
我來(一〇)徙倚(一一)長松下。　我來りて徙倚す長松の下、
欲掘茯苓親洗曬。　茯苓を掘りて親しく洗曬せんと欲す、
聞道山中富奇藥。　聞道く山中奇藥に富むと、
往往(一二)靈芝雜葵薤。　往往靈芝葵薤に雜はる、
詩人空腹待(一三)黃精。　詩人空腹にして黃精を待つ、
生事只看(一四)長柄械。　生事只看る長柄の械、
【自注】杜子美詩云。長鑱長鑱白木柄。我生托子以爲命。
今年(一五)大熟期一飽。　今年大に熟せば一飽を期す、
(一六)食葉微蟲直(一七)癬疥。　葉を食ふの微蟲は直癬疥、
【自注】賈云。今歲有小蟲食葉。不甚爲害。

【字解】【一】具區 「蘇州圖經」に、具區接蘇常湖秀四州界、内有大小山七十二、洞庭居其一焉と、「周禮」に、東南曰揚州、其山鎭曰會稽、其澤藪曰具區と、【二】納千派 「王案震澤編」に、北曰百瀆、納建康常潤之水、南曰諸瀆、納宣歙臨安苕霅之水と、【三】仙壇 「元中記」に、洞庭、古人謂仙壇之靈區、有龍威林屋等洞と、【四】湃湃 馮應榴曰く、湃湃二字、未詳所本と、【五】縱觀 「漢高祖紀」に、縱觀秦皇帝と、【六】臥碣 碣は碑碣、碑は方、碣は圓、法華寺に唐大光和尚の碑あるを謂ふ、【七】不壞 白樂天の詩、身壞口不壞と、【八】網秋蟲 劉禹錫の詩、蒼蒼網蟲遍と、蜘蛛の巣を謂ふ、【九】青蓮 「法華經」に、有人聞是品、能隨喜讃善者、是人口中、常出青蓮と、湖州法華山、昔有樵夫、入山得青蓮一枝、蓮生於平陸、因持入市、市人以花生非時、且異其事、乃從樵夫、還至木處、掘地觀之、下有石匣、中有一童子、舌根不壞、花自舌出、是人生持誦法華經、致此勝果、故以名其山と、【一〇】徙倚 王績の詩、徙倚欲何依と、「楚辭哀時命」に、獨徙倚而彷徉と、聊か憂情を以て低佪するの語、【一一】長松 「吳興備志」に、法華寺前、有松逕數里、皎然詩、路入松聲遠更奇、山光水色共參差、中峯禪寂一僧在、坐

白花牛落紫穟香。　白花半ば落ちて紫穟香ばし、
擴(一八)レ臂欲レ助ニ磨鎌鍛一。　臂を擴うて助けんと欲す鎌鍛を磨くを、
安得ニ山泉變ニ春(一九)酒一。　安くにか山泉の春酒に變するを得て、
與レ子一洗尋(二〇)常債。　子と一洗せん尋常の債を、

對乘朝老樹枝、卽此地也と、【一二】葵蓮　野菜を謂ふ、【一三】黄精　杜子美の詩、黄精無レ苗山雪盛と、「冷齋夜話」に、魯直曰、杜子美詩、黄獨無レ苗山雪盛、俗人易曰ニ黄精一、子美流離、亦未レ至レ作ニ道人側客食一ニ黄精一也と、「漁隱叢話」に、杜詩黄精無苗、後人所レ改也、舊乃黄獨、本蜀謂ニ之土芋一、根唯一顆而色黄、故名ニ黄獨一、饑歳土人、掘以充レ食、故老杜云爾、東坡云、空腹待ニ黄精一、則坡讀ニ杜詩一、亦以ニ黄獨一、爲ニ黄精一矣と、【一四】長柄械　杜子美の詩、長鑱長鑱白木柄、我生托レ子以爲レ命、是れ公の自注である、【一五】大熟　豐年を謂ふ、【一六】食葉　公の自注に、買云今歳有ニ小蟲一食レ葉、不ニ甚爲一レ害と、【一七】癬疥　蟲の寄生に依りて起る小泡、俗にヒゼンと稱し、手指の間に生ずるもの、傳言、患之小者、猶ニ癬疥一也と、【一八】攘臂　「孟子盡心章」に馮婦攘レ臂下レ車と、勇奮して起つの形容、【一九】春酒　太白の詩、此江若變作ニ春酒一と、【二〇】尋常債　杜子美の詩、酒債尋常行處有と、「三國志」に、孫濟、孫權之叔也、嗜レ酒不レ治レ産、常醉屢欠ニ酒債一、人皆笑レ之、濟恬然自若、謂レ人曰、尋常行坐處、欠ニ人酒債一、欲レ貨ニ此縕袍一償レ之と、

【詩意】震澤の浩渺たる常に三州の界を呑滅する、其の勢は浩浩湯湯として百千の支派の水を納る、從來大なる萬斛の船を著けざるも、尤も小なる一葉の漁舟が恣に奔快するを見る、仙壇古洞は容易に到る可からざるも、唯空しく餘瀾の鳴りて湃湃たるを聽く、今朝偶ま來りて法華山の頂に上り、自由に觀望して始めて人寰の狹隘なるを覺る、而して山頭に横臥して居る墓碣に孤冢を弔ふ、此の孤冢の下には高僧の僊れて舌根の壞せざる人がある、其の冢邊には空しく白棘を餘して蜘蛛の巣を網にするに任す、復た青蓮の生ずる如き幽怪は見ることがない、我は來りて長松の下に徙倚し、茯苓を掘りて以て親しく洗曬せんと思ふ、曾てより聞く山中には奇藥が豐富であり、往往にして靈芝が葵蓮に雜りて生ずると、詩人は空腹になれば芋魁を食はんと待つのである、人生の事は只長柄の械を看る如きが多い、今年は定めし大熟ならん、然らば一飽を期して可い、葉を食ふの微蟲は病としても癬疥の類大なる害は無い、稻の白花は半落ちて今や紫色の穟穗が香を放ちてある、我も臂を攘うて勇氣を出し收穫の助けを爲さんと鎌や鍛を磨くである、安くにか山泉の春酒に變するを得て、子と共に尋常行處の債務を一洗すべきや、

## 趙閲道高齋

趙閲道の高齋

見ニ公(一)奔走一謂ニ公勞一。　公が奔走を見て公が勞を謂ふ、
聞ニ公隱退一云ニ公高一。　公が隱退を聞いて公が高きを云ふ、
公心底(二)處有ニ高下一。　公が心底の處に高下あらん、
夢(三)幻去來隨レ所レ遭。　夢幻去來遭ふ所に隨ふ、
不レ知高齋竟何義。　知らず高齋竟に何の義ぞ、
此名之設緣ニ吾曹一。　此の名の設けらるる吾曹に緣る、
公年四(四)十已得レ道。　公年四十已に道を得るも、

【字解】【一】公奔走　王安石が新法を行はんと欲せる時、公は其の非を鳴らして、東西奔走したることを謂ふ、【二】底處　何處と略んど同義、【三】夢幻　佛氏の語、【四】四十　「孟子」に四十不レ動レ心と、【五】俗緣　佛氏の語、【六】伊皐　伊尹は殷の湯王の相、皐陶は唐虞の際の相、【七】逆旅　「莊子知北遊」に、哀樂之來、吾不レ能レ禦、其去弗

(五)俗緣未盡餘伊皐(六)。　俗緣未だ盡きず伊皐を餘す、

功名富貴皆逆旅(七)。　功名富貴皆逆旅、

黃金知繫何人袍。　黃金知る何人の袍を繫ぐ、

超然已了(八)一大事。　超然として已に了す一大事、

挂冠而去眞秋毫。　挂冠して去る眞に秋毫、

坐看猿猱落罝罔。　坐して看る猿猱の罝罔に落つるを、

兩手未肯置所操。　兩手未だ肯て操る所を置かず、

乃知賢達與愚陋。　乃ち知る賢達と愚陋と、

豈直相去(九)九牛毛。　豈直に相去る九牛毛、

長松百尺不自覺。　長松百尺自ら覺らず、

企而羨者蓬與蒿(一〇)。　企てて羨む者蓬と蒿と、

我欲贏(一一)糧往問道。　我糧を贏ひ往いて道を問はんと欲す、

未應舉臂辭盧敖(一二)。　未だ應に臂を舉げ盧敖を辭すべからず、



能止、悲夫、世人直爲物逆旅耳と、又「列子仲尼篇」に、龍叔曰、吾鄕譽不以爲榮、國毀不以爲辱、得而不喜、失而弗憂、視生如死、視富如貧、視人如豕、視吾如人、處吾之家、如逆旅之舍、觀吾之鄕、如戎蠻之國と、【八】一大事 「法華經」に、諸佛世尊、唯以一大事因緣、故出現於世と、【九】九牛毛 「晉華譚傳」に、或問譚曰、諺言人之相去、九牛毛、寧有是理乎、譚曰、昔許由巢父、讓天子之貴、市道小人、爭半錢之利、此之相去、何啻九牛毛也と、【一〇】蓬與蒿 韓退之の詩、自慚靑蒿倚長松と、【一一】贏糧 贏は餘贏、豐贏、財物都て充分以上なるを言ふ、以て「ニナフ」又は「モタラス」なぞと使用する、「荘子庚桑楚篇」に、南榮趎贏糧、七日七夜、至老子之所と、「漢書刑法志」に、贏三月之糧と、【一二】盧敖 「淮南子」に、盧敖游于北海、過一若士、敖自謂觀乎六合之外、若士舉臂而竦身、遂入雲中、盧敖仰而視之不見と、

【題義】 趙抃字は閱道は西安の人、參知政事の時、安石と爭うて位を去り、後に資政殿學士を拜して、杭州の知事と爲る、靑州、越州の知事を經て、遂に太子少保に移り、是に於て致仕して三衢に居り、高齋を作りて、以て高僧名士と來往し、年七十七を以て薨ず、世に淸獻公と稱す、今此の詩其の高齋に題して作れるもの、

【詩意】 公が國事の爲め奔走せるを見ては公の勤勞を謂ひ、公が退隱せらるるを聞いては公が淸高なるを云ふ、而かも公が心に於ては底の處にも高下は無いのである、世事は畢竟夢幻の去來なれば遭ふ所に隨ふのみ、然らば居處を高齋と稱するは何の義なるを解知し得ない、所で此の高齋の名の設けは吾が輩等に緣つて出來たものである、公は年四十所謂不惑の年已に道を得たのであるが、而かも官に居せしは世緣が盡きずして古の伊皐の如く世を救ふの仕事を餘したからである、意ふに功名富貴は暫時止まり暫時に去る旅舍の如きもの、黃金の力は何人の袍を繫ぐものぞや、公は出も超然、處も亦超然、已に死生の一大事なることを了悟せらるる、冠を挂けて官を去る眞に秋毫、坐して看る彼の猾性なる猿猱が罝罔に落ちながら、猶ほ其の左右の手に握りて居る物を離さない、そこで知る去る者の賢達と落ちる者の愚陋とを、之を比較すれば提燈に釣鐘以上九牛毛程の異がある、松は長じて百尺に及ぶも自から其の高きを覺らないは賢達である、其の高きに達せんと企て羨むの蓬蒿は愚陋である、我は糧を贏らして高齋に往いて道を問はんと欲するが、公は臂を舉げてそれを拒絶しないであらうか、

【餘論】七古一韻の作法、蘇家の憲法を紊さない、紀曉嵐は評して、大冒傷雅と、公は時あり憤激の語を吐く、大雅に背くあるも、目前に慨して已むを得ざるの言と思ふ、

## 送兪節推

兪節推を送る

吳興有君子。澹如朱絲琴。　吳興に君子あり、澹として朱絲琴の如し、
一唱三太息。至今有遺音。　一唱して三たび太息す、今に至り遺音あり、
嗟余與夫子。相避如辰參。　嗟余夫子と、相避けて辰參の如し、

【自注】退翁官於蜀。余在京師。余歸而退翁去。及余官於吳興。則退翁亡矣。

猶喜見諸郎。窈然清且深。　猶は喜ぶ諸郎を見るを、窈然淸うして且深し、
異時多良士。末路喪初心。　異時良士多し、末路初心を喪ふ、
我生不有命。其肯枉尺尋。　我が生が命を有せずんば、其れ肯て尺を枉げて尋せん、

【字解】【一】君子　兪節推の父、汝尚字は退翁と謂ふ、退翁は其の人淸白、屯田郎中の官を以て致仕す、其の妻の黃氏に謂つて曰く、人生七十の者は稀、吾と夫人と皆巳に之を過ぐ、往く可し、黃曰く我先づ去らん、後三日黃は沐浴して化去す、退翁は明日、諸子を召して曰く、吾も亦行かん、俄かに几に隱りて終る、孫莘老の碑文詳かに此の事を叙す、【二】夫子　退翁を言ふ、公の自注に、退翁官於蜀、余在京師、余歸而退翁去、及余官於吳興、則退翁亡矣と、【三】辰參　蘇武の詩、昔爲鴛與鴦、今爲參與辰と、辰星は東南に出で、參星は西方に出で、時刻は參星沒して後、辰星が出るのである、【四】異時　「漢食貨志」に、異時言作時也と、【五】末路　「戰國策」に、行百里者半於九十、此言末路之難と、【六】初心　韓愈の文、道德日負於初心と、【七】枉尺尋　「孟子滕文公章句下」に、枉尺而直尋と、

【詩意】吳興の地に君子が有る、其の人品は澹泊にして朱絲琴の如くである、一度曲を奏すれば三たび太息する、今日に至るまで其の遺音がある、嗟予余は夫子と、其の境地の相避け去る辰參の如きものでありしが、猶ほ喜ぶものは夫子の諸郎を見ることが出來る、諸郎の人品も皆窈然と淸く且深く輕薄の態は無い、而かも考ふ異時に良士を多く知つて居りしが、多くは末路が初心に背きて全うしない、我等が生にして若し命あらざるときは、其れ肯て一尺を枉げて一尋を直くするであらう、

【餘論】紀曉嵐は異時多以下を評して曰く、不甚分明と、前作の坐看猿猱の句も今と同樣頗る明白を缺く所がある、

## 次韻答孫侔

次韻、孫侔に答ふ

十年身不到朝廷。　十年身は朝廷に到らず、
欲伴騷人賦落英。　騷人に伴うて落英を賦せんと欲す、
但得低頭拜東野。　但低頭して東野を拜するを得ば、
不辭中路候淵明。　辭せず中路に淵明を候するを、

【字解】【一】落英　「離騷」に、朝飮木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英と、【二】低頭　韓退之の詩、低頭拜東野、願得終始如駏蛩、東野不回頭、有如寸莛撞巨鐘と、【三】候淵明　「晉陶潛傳」に、

艤舟苕霅人安在。　苕霅に艤舟する人安くに在る、

卜築江淮計已成。　江淮に卜築する計已に成る、

（四）千里論交一言足。　千里論交一言に足る、

與君蓋亦不須傾。（五）　君と蓋亦傾くるを須ひず、

刺史王宏造焉、潛稱疾不見、宏令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐通之等、齎酒先於半道要之、潛既遇酒、便引酌野亭、欣然忘進、宏乃出與相聞、遂歡宴窮日と、【四】千里「後漢范式傳」に、與張劭爲友、二人並告歸鄉里、式謂元伯曰、後二年當過拜尊親見孺子、尅期、元伯請設饌以候之、母曰、二年之別、千里結言、何相信之審耶、對曰、巨卿信士、必不乖違、至其日果到と、【五】不須傾　楊誠齋曰、孔子與程子相見、傾蓋而語、鄒陽云、傾蓋如故、孫侔與東坡、初不相識、以詩寄坡、坡和云、與君蓋亦不須傾、此翻案法也と、

【題義】孫侔字は少述は眞州の人、親に事へて至孝、王安石、曾子固と游ぶ、州學教授に除せらるるも、就かずして江淮の間に客居して卒す、東坡の名を慕うて詩を贈り、公が之に次韻したものである、

【詩意】君は十年も身を野に處して朝廷に到らない、唯騷人に同伴して落英を賦せんと欲せらる、但低頭して東野を拜することを得れば、肯て辭せない中路に出でて淵明を仕候することを、艤舟して苕霅の游を爲せし當時の人は今は安くに在る、君は江淮の間に家を構ふる計已に成ると聞く、千里を隔てても交を論ずれば一言にして足る、其の一言は君と蓋は亦傾くるを須ひず、面交よりは心交の方が重い、

【餘論】紀曉嵐曰く、六句指買田泗上之事と、此の詩、律としては亦病がある、不到、不辭、不須、騷人、人安、紀は古人の疵を指摘するに巧にして、此の疵を論せざるは不思議である、

## 重寄　重ねて寄す

凜然高節照時人。　凜然たる高節時人を照す、

不信微官解浼君。（一）　信せず微官の君を解浼するを、

（二）蔣濟謂能來阮籍。　蔣濟謂ふ能く阮籍を來すと、

（三）薛宣眞欲吏朱雲。　薛宣眞に朱雲を吏とせんと欲す、

好詩衝口誰能擇。　好詩口を銜いて誰か能く擇ばん、

俗子疑人未遣聞。　俗士人を疑ふ未だ遣聞せず、

乞取千篇看俊逸。　千篇を乞取して俊逸を看る、

不將輕比鮑參軍。（四）　將て輕しく鮑參軍に比せず、

【字解】【一】解浼　「孟子公孫丑下」に、爾焉能浼我哉と、汚及び浼と同じ、ケガスである。【二】蔣濟　「晉阮籍傳」に、太尉蔣濟、聞籍有雋才、而辟之、籍詣都亭、奏記求免、初濟恐籍不至、得記欣然、遣卒迎之、而籍已去、濟大怒、於是鄉親共諭之、乃就吏、後謝病歸と、【三】薛宣　「前漢朱雲傳」に、薛宣爲丞相、雲往見之、宣備賓主禮、從容謂雲曰、在田野無事、且留我東閣、可以觀四方奇士、雲曰、小生乃欲相吏邪、宜不敢復言と、【四】鮑參軍「南史」に、鮑照字明遠、文辭贍逸、臨海王子頊、爲荊州、照爲前軍參軍と、杜子美の詩、清新庾開府、俊逸鮑參軍と、鍾嶸曰、鮑參軍詩、如野鶴騁雲、良馬走堤、俊逸奔放と、

【詩意】凜然たる君の高節は時に走る人を照す、余は信せない微官君を解浼することを、昔し蔣濟は謂うた能く阮籍が己れの部下に來たと、薛宣も亦朱雲を吏にせんと欲したのである、好詩は口を銜いて出づ誰か能く擇ばんや、俗士は人を疑うて眞實の事を聞かしめない、君の詩千篇を乞取して俊逸を

看んと思ふ、輕輕に君を將て鮑參軍に比するのではない、

【餘論】紀曉嵐曰く、連用五人名礙格と、一律の中四人は對法として已むを得ざるも五人の名を連ぬる例は無い、紀評の礙格は洵に然るべきと思ふ、且、不信、未遣、不將、誰能、誰能、坡公の律往往之れあるは、公が此の格を創せしとなれば可なるも、然らざれば病である、

## 次韻和劉貢父登黃樓見寄。竝寄子由二首

劉貢父が黃樓に登り寄せらるるに次韻して和し、竝に子由に寄す　二首

清派（一）連淮上。黃樓冠海隅。　清派淮上に連なり、黃樓海隅に冠たり、

此詩尤偉（二）麗。夫子計魁（三）梧。【自注】劉爲人短小。　此の詩尤も偉麗、夫子計るに魁梧、

世俗輕瑚（四）璉。巾（五）箱襲武（六）夫。　世俗瑚璉を輕んじ、巾箱武夫を襲ふ、

坐令乘傳（七）遽。奔走爲儲（八）須。　坐して傳遽に乘せしむ、奔走儲須を爲す、

邂（九）逅我已失。登臨誰與俱。　邂逅我已に失す、登臨誰と與俱にせん、

貧（一〇）貪倉氏粟。身聽冶（一一）家櫨。　貧貪倉氏が粟、身聽冶家の櫨、

會合難前定。歸休試後圖。　會合前定し難し、歸休後圖を試む、

腴（一二）田未可買。【自注】本欲買田於泗上、近已不遂矣。　腴田未だ買ふべからず、

窮（一三）鬼却須呼。　窮鬼却つて須らく呼ぶべし、

二水何年到。雙（一四）洪不受艫（一五）。　二水何れの年か到る、雙洪艫を受けず、

至今清夜夢。飛轡策天（一六）吳。【自注】此詩寄劉。　今に至るまで清夜の夢、飛轡天吳を策す、

【字解】【一】清派　次公曰、清派卽清河也、其水從青州來、與淮會於徐と、【二】偉麗　揚子、詩人之賦麗以則と、【三】魁梧　公自注に劉爲人短小と、「史記」に、聞張良之智勇以爲其貌魁梧奇偉、反若婦人女子と、【四】瑚璉　宗廟にて用ふる器、論語に出づ、【五】巾箱　元稹の詩、童兒抽巾箱と、絹張りの小箱を言ふ、「南齊書陸澄傳」に、王儉出巾箱几案雜服飾と、【六】武夫　「戰國策」に、武夫類玉と、武夫は珷玞、玉に似たる石、【七】傳遽　「唐韻」に傳遽驛也、以車曰傳、以馬曰遽と、「王注」に、傳遽使車之公者と、貢父が京東轉運使の職を奉ずる時を言ふ、【八】儲須　軍儲軍須より起りて、總ての儲、總ての須に用ふ、【九】邂逅　「毛詩」に、見此邂逅と、【一〇】貧貪倉氏粟　頗る解し難き句、案ずるに「後漢書王嘉傳」に、貪其材器有益於公家也、孝文時、吏居官者或長、子孫以官爲氏、倉氏庫氏、則倉庫吏之後也と、【一一】冶家櫨　櫨は爐と同じ、「莊子大宗師篇」に、今一以天地爲大鑪、以造化爲大冶と、【一二】腴田　公の自注に、本欲買田於泗上、近已不遂矣と、「漢張禹傳」に、家以田爲業、及富貴多買田、至四百頃、皆涇渭溉灌、極膏腴と、【一三】窮鬼　韓退之の送窮文に結柳作車、縛草爲船、載糗輿粻、三揖窮鬼と、【一四】雙洪　百步洪と呂梁洪の二、【一五】艫　船尾卽ちトモ、【一六】天吳　「山海經」に有神人、八首人面、虎身十尾、名曰天吳と、

【題義】劉貢父が黃樓に登りて感慨せられし詩を寄示せられたるを次韻し、一首を劉に贈り、一首を

子由に贈りたるもの、

【詩意】 清河の水派は淮上にまで連なる、而して河上に在る黃樓の大なるは海隅に冠絕する、君が此の詩は尤も偉麗である、知らざるもの其の詩を讀んで夫子を狀貌魁梧の人と計するであらう、所が世俗は瑚璉の如き禮器は輕視して、反つて巾箱に珷玞の如きものを祕襲する、聞く奔走するは儲須の爲めであると、邂逅するも忽ちにして我は失する、我が黃樓に登臨するときは誰と與俱にするぞや、貪らば愈よ貧である倉氏の財粟、身に於て聽く治家の模倣を、會合するもいつと前定は容易でない、官を罷めて歸休後の計を圖るべきである、腴田なぞは買ふを要しない、反對に窮鬼が却つて呼ぶことと思ふ、二水の邊には何れの年にか到るや、雙洪は狹くして艫を容るる事が出來ない、今に至るまで清夜の夢、艣を飛ばして天吳を策つことを、

〔二〕

與子皆去國。十年天一隅。(一)
(二)數奇逢惡歲。計拙集枯梧。(三)
(四)好士餘劉表。窮交憶灌夫。(五)
(六)不矜持漢節。猶喜攬桓須。(七)
清句金絲合。高樓雪月俱。

〔二〕

子と皆國を去る、十年天の一隅、
數奇にして惡歲に逢ひ、計拙にして枯梧に集る、
士を好むは劉表を餘し、窮交は灌夫を憶ふ、
矜らず漢節を持するを、猶は喜ぶ桓須を攬ることを、
清句金絲合し、高樓雪月俱にす、

吟哦出新意。指畫想前廡。(八)
【自注】子由初赴南京。送之出東門。登城上。覽山川之勝。云。此地可作樓觀。於是始有改築之意。

吟哦新意を出し、指畫前廡を想ふ、

自寫千言賦。新裁六幅圖。(九)
【自注】近以絹自寫子由黃樓賦。爲六幅圖。甚妙。

自から寫す千言の賦、新たに裁す六幅の圖、

(一〇)傳看一座聳。勸著尺書呼。

傳看せんと一座聳え、勸著して尺書呼ぶ、

莫使騷人怨。東游不到吳。(一一)
【自注】此詩寄子由。

騷人をして怨ましむる莫かれ、東游吳に到らず、

【字解】 【一】 天一隅　李陵の詩、各在天一涯と、 【二】 數奇　俗語のフシアハセ、奇は耦の對、運命相合はざるの義、「史記李廣傳」に、李廣數奇、恐不得所欲と、 【三】 集枯梧　「國語」に、優施、謂里克妻曰、主孟啗我、我敎茲暇豫事君、乃歌曰、暇豫之吾、吾不如鳥烏、人皆集於菀、已獨集於枯と、菀は茂木の貌、 【四】 好士　「後漢劉表傳」表爲荊州刺史、學士歸者千數と、 【五】 灌夫　「前漢書」に、竇嬰無勢、諸公稍自引而怠驁、唯灌夫獨否、兩人相爲引重と、 【六】 不矜　狄公曰、言賈父不以爲使自矜耳と、 【七】 桓須　「晉桓伊傳」に、謝安、主壻王國寶、安惡其爲人、每抑制之、孝武末年、國寶讒諛行於主相之間、嫌隙遂成、帝召伊飲、安侍坐、帝命伊吹笛一弄、乃請以箏歌、伊撫箏而歌、怨詩曰、爲君既不易、爲臣良獨難、忠信事不顯、乃有見疑患、周旦佐文武、金縢切不刊、推心輔王政、二叔反流言、聲節慷慨、俯仰可觀、安泣下霑襟、乃越席而就之、捋其須曰、使君於此不凡、帝有媿色と、須は卽ち鬚である、 【八】 指畫　韓退之の詩、指畫變悅歎と、公の自注に、子由初赴南京、送之出東門、登城上、覽山川之勝、云此地可作樓觀、於是始有改築之意と、 【九】 六幅圖　公の自注に、近以絹自寫子由黃樓賦、爲六幅圖、甚妙と、 【一〇】 傳看　韓退之の詩、一府傳看黃琉璃と、 【一一】 不到吳　公自注に、此詩寄子由と、韓退之の詩、孔子西

行不到呉と、

【詩意】子と余と皆國を出でてより、十年餘も各の天の一隅を隔てて居る、數奇にして互に凶惡の歲に逢ふ、生計も拙なれば枯梧に集まりて茂樹に止まることをせぬ、士を好むの劉表を今日も猶ほ餘すあるを喜ぶ、又窮交は人の好まざる所灌夫を憶はざるを得ない、貢父の人物は漢節を持しても矜らない、猶ほ喜ぶことには桓伊の須を攬るの人なるを、清句を誦すれば金絲合する妙がある、高樓に登れば雪月倶に看るの興がある、吟哦は新意を出し、指晝宜しきを得たるは前撫を想はざるを得ない、自から千言の賦を寫して、且新たに六幅の圖を裁製する、傳看する者は一座皆身を聳かすであらう、尺書を以て呼ぶことを勸著するも、唯騷人をして怨ましめてはいかぬ、騷人は東游して呉に到らない、

【餘論】此の二篇解すべく亦解すべからざる所が多い、詩意として余が解する所、唯是れ余が解にして、果して作者が首肯するや否やを知らない、作者のみならず、今人も亦首肯するや否やも亦知らない、

## 呉江岸

呉江の岸

曉色兼秋色。蟬聲雜鳥聲。
壯懷消鑠盡。回首尙心驚。

曉色と秋色と、蟬聲鳥聲に雜はる、
壯懷消鑠し盡きぬ、首を回らして尙心驚く、

【詩意】呉江の岸上の秋色は異に秋色である、蟬が嘒嘒と鳴く裏に鳥が啾啾と囀する聲に雜はる、壯懷は已に消鑠し盡くるも、首を回らして尙心魂の驚くものがある、

## 御史臺楡槐竹柏。四首

御史臺、楡槐竹柏　四首

### 楡

楡

我行汴堤上。厭見楡陰綠。
千株不盈畝。斬伐同一束。
及居幽囚中。亦復見此木。
蠹皮溜秋雨。病葉埋牆曲。
誰言霜雪苦。生意殊未足。
坐待春風至。飛英覆空屋。

我汴堤の上を行く、見るを厭ふ楡陰の綠なるを、
千株畝に盈たず、斬伐して同一束、
幽囚の中に居るに及んで、亦復た此の木を見る、
蠹皮秋雨溜り、病葉牆曲を埋む、
誰か言ふ霜雪苦と、生意殊に未だ足らず、
坐して待つ春風至り、飛英空屋を覆ふを、

【字解】【一】汴堤　「元和郡縣志」に、禹開汴渠、以通淮泗、漢永平中築堤、隋煬帝、更令自板渚引河入汴口、又從大梁之東、引汴達淮、河畔樹之以楡柳と、【二】幽囚　「馬融上安帝書」に、今皆幽囚、陷於法網と、公作る所の詩忌諱に觸れ、投獄せられしことを言ふ、【三】蠹皮　蠹は木中に生じて、心を食ふ蟲、【四】病葉　杜子美の詩、病葉多先墜と、【五】飛英　任昉の詩、飛英若總素と、

【題義】御史臺は漢以來稱する所、乃ち刑務所である、御史は綱紀を肅正し、官邪を糾察する處、其の臺前に植うる楡と槐と竹と柏との四植物を詠じたのである、楡は陰深く、槐は年を經るに從つて大且つ高く、竹と柏は四時色を變へざるからである、

【詩意】我は汴堤の上を行いた時、楡柳の陰の綠なるを見ることを厭ふ、千株あるも畝に盈たざるに、斬伐して同一束と爲す、後幽囚の中に居るに及んでも、汴堤と同じく亦復た此の木を見る、蠹の爲めに皮が腐りて秋雨が其の皮に溜り、病葉は墜落して牆の曲處を埋む、誰か言ふ霜雪の爲め苦しめられて、生意が殊に未だ足らずと、坐して春風の吹き至るを待つて、飛英が紛紛と空屋を覆ふことを、

## 槐

憶我初來時。草木向衰歇。　憶ふ我が初めて來る時、草木衰歇に向ふ、

高槐雖經秋。晚蟬猶抱葉。　高槐秋を經ると雖も、晚蟬猶ほ葉を抱く、

淹留未云幾。離離見疏莢。　淹留未だ云に幾ばくならず、離離として疏莢を見る、

棲鴉寒不去。哀叫饑啄雪。　棲鴉寒くして去らず、哀叫饑ゑて雪を啄む、

破巢帶空枝。疏影挂殘月。　破巢空枝に帶び、疏影殘月挂る、

豈無兩翅羽。伴我此愁絶。　豈兩翅羽なからん、伴ふ我が此の愁絶に、

【字解】【一】衰歇　太白の詩、瑤草恐衰歇と、【二】高槐　「淮南子」に、槐之生也、入季春五日而兎目、十日而鼠耳、更旬而始規と、【三】抱葉　杜子美の詩、抱葉寒蟬靜と、【四】離離　「詩王風」に其實離離と、【五】疏莢　莢は莢殼、實を包めるサヤ、「周禮」に其植物宜莢物と、【六】破巢　「後漢孔融傳」に、破巢之下、安有完卵と、【七】翅羽　白樂天の詩、奮飛無翅羽と、【八】愁絶　戴叔倫の詞に、蘆笳一聲愁絶と、

【詩意】憶ふに我が御史臺に初めて來るの時は、草木が總て衰歇に向ふの節であつた、高槐は秋を經るとも、晚蟬が猶ほ葉を抱いて鳴いて居る、淹留すること未だ幾何でもないが、高槐は離離として疏莢を見る、棲鴉は寒を畏れて去つて飛ばない、哀叫しながら飢ゑて雪を啄みて居、破れた巢が空枝に帶びてある、其の疏影には殘月が挂る、烏は兩翅羽が無いのではない、我が輩の愁絶に伴ふが爲であると思はる、

## 竹

今日南風來。吹亂庭前竹。　今日南風來り、吹き亂す庭前の竹、

低昂中音會。甲刃紛相觸。　低昂音會に中る、甲刃紛として相觸る、

蕭然風雪意。可折不可辱。　蕭然風雪の意、折る可きも辱しむ可からず、

風霽竹已回。猗猗散青玉。　風霽れて竹已に回り、猗猗として青玉散ず、

故山今何有。秋雨荒籬菊。　故山今何か有る、秋雨籬菊荒る、

此君知健否。歸掃南軒綠。　此君知る健なりや否や、歸りて南軒の綠を掃はん、

【字解】【一】中音會　「莊子養生主篇」に、庖丁解牛、奏刀騞然、莫不中音、合於桑林之舞、中經首之會と、【二】甲刃

「杜牧晚晴賦」に、竹林外裹兮、十萬丈夫、甲刃擺擺、密陣而環侍と、【三】猗猗　前に辨ぜり、【四】靑玉　陸龜蒙の詩、萬條寒玉一溪煙と、

【詩意】今日は南風が吹き來りて、庭前の竹を吹き亂す、甲乙と相低昂して一一晉會に中らざるは無い、一低と一昂と宛かも甲刃が紛として相觸れるの形である、蕭然たる風雪の吹く意は、折る可きも之を辱しむ可からずと、風が霽るれば竹も亦風に隨つてぐるぐる回る、其の喜ぶの狀は猗猗として靑玉を散ずるので判る、故山は今の時節に何かあるや、秋雨の爲に定めし離菊が荒涼と爲つたであらう、但獨り此君が健在であつたなら、歸る日は南軒の綠を掃うて賞觀せんと思ふ、

## 柏

故園多珍木。翠柏如蒲葦。
幽囚無與樂。百日看不已。
時來拾流膠。未忍踐落子。
當年誰所種。少長與我齒。
仰視蒼蒼幹。所閱固多矣。
應見李將軍。膽落溫御史。

柏

故園珍木多く、翠柏蒲葦の如し、
幽囚與に樂む無し、百日看巳まず、
時に來りて流膠を拾ふ、未だ忍びず落子を踐むに、
當年誰か種うる所、少長我と齒す、
仰ぎ視る蒼蒼の幹、閱する所固より多し、
應に見るべし李將軍、膽は落とさる溫御史、

【字解】【一】珍木　張九齡の詩、嬌嬌珍木巓と、【二】翠柏　柏は扁柏の類、常綠喬木の總稱、ヒノキ、【三】流膠　一本流肪に作る、皮より流るる脂肪、【四】落子　「本艸」に柏九月結子と、【五】所閱　「漢蓋寬饒傳」に、平恩侯許伯入第、寬饒仰視屋而歎曰、審哉、然富貴無常、忽則易人、此如傳舍、所閱多矣と、【六】李將軍　李祐、【七】溫御史　溫造、「舊唐書」に、溫造召拜侍御史、李祐自夏州入拜金吾、違勅進馬百五十匹、造正衙彈奏、祐股戰汗流、私謂人曰、吾夜踰蔡州城、擒吳元濟、未嘗心動、今日膽落於溫御史、吁可畏哉と、

【詩意】柏臺の故園には珍木が多くある、中に就いて翠柏は蒲葦の如くに鬱茂である、幽囚せらるるに及んで與に樂むことなければ、此の柏樹のみ百日看て巳まない、時には來りて流膠を拾ふこともあるが忍びない其の落子を踐み行くには、當年誰か此の樹を種ゑたものである、少も長も皆我と同年位である、仰いで蒼蒼の幹を視て、樹としても閱する所のもの多くあらう、應に見るべし法を正す爲めには李將軍も、溫御史の爲めに豪膽を落されたることを、

【餘論】紀曉嵐、楡を評して純用寫意、妙不怨怒と、槐を評して借題抒意、正不必句句切槐と、竹を評して查初白云ふ、骨節淸剛、琅然可誦と、紀は又柏を評して觸手立意と、

## 己未十月十五日。獄中恭聞太皇太后不豫有赦作詩

己未十月十五日、獄中恭しく太皇太后の不豫、赦あると聞いて詩を作る

庭柏陰陰晝掩門。　庭柏陰陰晝門を掩ふ、
(一)烏知有赦鬧黃昏。　烏は赦あるを知りて黃昏に鬧ぐ、
漢宮自種(二)三生福。　漢宮自から種う三生の福、
楚客還招(三)九死魂。　楚客還た招く九死の魂、
縱有(四)鋤犂及田畝。　縱ひ鋤犂の田畝に及ぶあるも、
已無(五)面目見邱園。　已に面目の邱園を見ること無し、
只應聖主如堯舜。　只應に聖主堯舜の如くなるべし、
猶許先生作(六)正言。　猶は先生に許して正言と作さしむ、



【字解】【一】烏知　「南史」に、宋元康中、徙彭城王義康於豫章、臨川王義慶、時爲江州、相見而哭、文帝聞而怪之、徵還宅、義慶大懼、妓妾夜聞烏啼聲、叩齋閤云、明日應有赦、及旦改爲南兗州、因製烏夜啼曲と、【二】三生　過去と現在と未來を云ふ、【三】九死魂　「楚辭」に、雖九死其猶未悔と、【四】鋤犂　杜子美の詩、縱有健婦把鋤犂と、【五】面目　「史記項羽本紀」に縱江東父老、憐而王我、我何面目見之と、【六】正言　「職官」に宋雍熙四年、改補闕爲左右司諫、拾遺爲左右正言と、

【題義】元豐二年己未八月に貶せられ、獄に在ること七十有餘日にして皇太后が偶ま不豫、是に於て大赦令を出し、公も亦出獄するを得て是の詩を作る、

【詩意】庭柏は陰陰として獄舍の門を晝も掩ふ、烏は大赦令があるを聖得知して黃昏に啼き鬧ぐ、漢宮は乃ち大恩德を施して以て三生の福因を種ゑ、楚客は已に生を期しないのに還九死の魂魄を招來する、今後縱ひ鋤犂を把りて田畝に耕すの勞を厭はずとするも、已に一度入獄した身は此の面目を以て邱園を見るに忍びない、只應に聖主は堯舜の仁厚にも比すべきである、猶は先生を許して正言の官を授け玉ふ、

【餘論】紀曉嵐曰く、亦和平と、余案するに、有赦、有鋤、三生、先生、例の同字が多い、和平は和平なるが、三生の佛語を挾入するは亦是れ英雄人を欺くものか、

## 十月二十日恭聞太皇太后升遐。以軾罪人。不許成服。欲哭則不敢。欲泣則不可。故作挽詞二章

十月二十日、恭しく太皇太后の升遐を聞く、軾罪人を以て服を成すを許されず、哭せんと欲するも則ち敢てせず、泣かんと欲するも則ち不可、故に挽詞二章を作る、

巍然(一)開濟兩朝勳。　巍然として開濟す兩朝の勳、
信矣(二)才難十亂臣。　信なり才は難し十亂臣、
(三)原廟固應祠百世。　原廟は固に應に百世に祠らるべし、
先王何止(四)活千人。　先王何ぞ止だ千人を活かさん、
(五)和熹未聖猶貪位。　和熹未だ聖ならず猶ほ位を貪り、

【字解】【一】開濟　杜子美の詩、兩朝開濟老臣心と、「宋史」に、曹彬字國華、眞定人、太祖開寶六年、進檢校太傅、八年平江南、拜樞密使、太宗即位、加同平章事、從征太原、加兼侍中、太平興國三年、進檢校太師、尋封魯國公、咸平二年卒、追封濟陽郡王、諡武惠と、

明<sup></sup>德雖レ賢不レ及レ民。　明德賢なりと雖も民に及ばず、
月落風悲天雨泣。　月落ち風悲しんで天雨泣く、
誰將二椽（七）筆一寫二（八）光塵一。　誰か椽筆を將て光塵を寫すや、

【二】才難「論語泰伯章」に、武王曰、予有二亂臣十人一、孔子曰才難、不二其然乎一と、邑姜一人は女である、【三】原廟「漢書」に孝惠爲二原廟一と、「宋史」に、曹彬本傳、配享太祖廟廷」と、【四】活千人「前漢書元后傳」に、王翁孺曰、吾聞活二千人一者、有レ封二子孫一、吾所レ活者、萬餘人、後世其興乎と、【五】和熹「後漢和熹鄧皇后紀」に、和帝崩、殤帝生始百日、后乃迎立レ之、尊レ后爲二皇太后一、臨レ朝、及二殤帝崩一、太后定レ策、立二安帝一、猶臨二朝政一、范曄論曰、鄧后稱レ制終身、號令自出、術謝二前政之良一、身闕二明辟之義一、至レ使二嗣主側レ目斂一レ衽、於虛器、直生二懷懟一、懸二書於象魏一、借二之偵一者、殆其惑哉と、又「宋史曹皇后傳」に、英宗卽位、尊レ后爲二皇太后一、帝感レ疾、請二權同處二分軍國事一、御内東門小殿聽レ政、明年夏帝疾愈、卽命二撤レ簾還一レ政、帝持書久不レ下、及レ秋始行レ之と、【六】明德「後漢明德馬皇后紀」に、皇太后曰、馬貴人德冠二後宮一、卽其人也、遂立爲二皇后一、常衣大練、不レ加レ緣、建初元年、欲レ封二爵諸舅一、太后不レ聽と、【七】椽筆「世說」に、王東亭嘗夢、人以二大筆一與レ之、管如レ椽と、【八】光塵「老子」に和二其光一同二其塵一と、

**【題義】** 獄を出でて五日にして太皇太后の升遐を聞くも、一旦罪人と爲りし身、成服は許されない、是の故に哭することも泣くことも、羣臣の如くにすることは出來ない、但挽詩二章を賦して哀悼の意を表するのである、

**【詩意】** 太祖太宗の兩朝に渉りて國家を開濟する曹族の勳は巍然たるものがある、才は難し僅かに十亂臣のみと孔子の言はれしは信である、功臣として太祖の廟に配せられ曹彬は百世に祠らるるもので ある、先王の廣德は何ぞ止だ千人の人數を活かすのみではない、和熹は女傑ではあるが未だ帝位でない而かも長く帝位を貪る、明德は賢后ではあるが其の夫の帝を輔くるに止まりて其の功が民には及ばない、月は落ち風は悲しんで天も涙を雨らす、誰か椽大の筆を將て太后の光塵を寫し出すものぞや、

〔二〕

未レ報二山陵國（一）士知一。　未だ報せず山陵國士の知に、
遶レ林松柏已猗猗。　林を遶る松柏已に猗猗、
一聲慟哭猶レ無レ所。　一聲慟哭するに猶は所無く、
萬死酬レ恩更有レ時。　萬死恩に酬ゆ更に時あり、
夢裏天衢隘二雲仗一。　夢裏天衢雲仗隘く、
人間雨淚變二彤帷一。　人間雨淚彤帷變す、
（二）關雎（三）卷耳平生事。　關雎卷耳平生の事、
白首（四）纍臣正（五）坐レ詩。　白首の纍臣正に詩に坐す、

**【字解】** 【一】國士知「史記刺客傳」に、豫讓曰、知伯以二國士一遇レ我、我以二國士一報レ之と、「東都事畧」に蘇軾以レ詩得レ罪、人知二必死一、慈聖太后、違豫中聞レ之、謂二神宗一曰、昔仁宗、以二制科一得二軾兄弟一、甚喜曰、吾爲二子孫一得二兩宰相一、今聞軾以レ作レ詩、繫レ獄、得レ非三仇人中二傷之一招二至於詩一、其過微矣、吾疾勢已篤、不レ可二以冤濫致一レ傷二中和一、神宗涕泣、軾由レ是得レ免と、【二】關雎　詩經周南詩篇の名、周の文王の后妃の德を歎ぜる詩、【三】卷耳「詩周南」に、采二采卷耳一、不レ盈二頃筐一と、后妃が文王を思慕すること、【四】纍臣「左傳成公三年」に、以二君之靈一、纍臣得レ歸二骨於晉一と、【五】坐詩　李定と舒亶の二人、公の詩、贏得兒童語音好、一年强半在二城中一、讀書萬卷不レ讀レ律、致二君堯舜一終無レ術、東海若知二明主意一、應レ教三斥鹵變二桑田一等を擧げ、公は君父を怨謗すと、是に於て幽囚せらる、

**【詩意】** 未だ山陵の國士として偶せられし恩は報いざるに、陵林を遶るの松柏は已に猗猗と茂る、一

聲慟哭せんと欲するも其の所無く、又萬死を以て恩に酬ゆるは更に時あるを知る、夢裏に天衢雲仗も險きの感を爲し、人間の雨涙形帷を變ずるの悲しみがある、關雎卷耳を唱ふるは、太后平生の事である、白首の纍臣は正に詩に坐したるを憫み玉ふ、

【餘論】紀曉嵐、後首を評して、三四沈痛、後半措語頗滯と、眞に確評である、

予以事繫御史臺獄。獄吏稍見侵。自度不能堪。死獄中。不得一別子由。故作二詩。授獄卒梁成。以遺子由。

予事を以て御史臺獄に繫がる、獄吏稍侵さる、自から度るに堪ふる能はず、獄中に死し、子由に一別するを得ざらんと、故に二詩を作り、獄卒梁成に授け、以て子由に遺る

聖主如天萬物春。　聖主天の如く萬物春なり、
小臣愚暗自亡身。　小臣愚暗にして自から身を亡ぼす、
百年未滿先償債。(一)　百年未だ滿たず先づ債を償ひ、
(二)十口無歸更累人。　十口歸する無く更に人を累せん、
是處青山可埋骨。　是の處青山骨を埋むべし、

【字解】〔一〕償債　「首楞嚴經」に、償其宿債と、過去の罪を消するを云ふ、〔二〕十口　一家十人、〔三〕夜雨　杜子美の詩、夜雨剪春韭、新炊間黃粱と、〔四〕未了因　未だつきぬ因緣の意、

他年夜雨(三)獨傷神。　他年夜雨獨り傷神、
與君世世爲兄弟。　君と世世兄弟と爲り、
又結來生未了(四)因。　又結ぶ來生未了の因を、

【題義】予は時事を議したる罪を以て獄に繫がれ、獄吏の爲め稍稍侵さるることもある、自から度るに堪ふることは出來ない、獄中に於て死に、且子由に一別の言辭を爲すことが出來ない、是に於て二首を作りて、獄吏の梁成に依屬して以て子由に遺るを得たのである、

【詩意】聖主の恩德は天の如く高く萬物一樣に春である、小臣は愚暗なるが故に自から身を亡ぼすに至る、未だ定命の百年に滿たずして先づ其の債を償ふとしても、蘇家の十口は歸する所無く更に他人を累するに忍びない、是の處青山骨を埋むべきも、他年夜雨を聞くごとに獨り傷神するに堪へない、君と願はくは世世兄弟と爲つて、又來生にも未了の因を結ばんと、

〔二〕

(一)柏臺霜氣夜凄凄。　柏臺の霜氣夜凄凄、
風動(二)琅璫月向低。　風は琅璫を動かして月は低に向ふ、
夢繞雲山心似鹿。　夢は雲山を繞りて心鹿に似、

【字解】〔一〕柏臺　御史臺の異名、〔二〕琅璫　「後漢書寶卓、收捕烈、付郿獄、錮之銀鐺鐵鎖」と、此はクサリ、杜子美の詩、風動金琅

魂驚湯火命如雞。　　魂は湯火に驚きて命雞の如し、
眼中犀角眞吾子。　　眼中の犀角眞に吾子、
身後牛衣愧老妻。　　身後の牛衣老妻に愧づ、
百歳神游定何處。　　百歳神游定んで何れの處ぞ、
桐鄉知葬浙江西。　　桐鄉知る浙江の西に葬るを、

【自注】獄中聞杭湖間、民爲余作解厄道場累月、故有此句。

爲余作解厄道場累月、故有此句と、

【詩意】柏臺の霜氣は夜淒淒である、風は獄内の琅璫を動かし月は低に向ふ、我が夢は雲山を繞りて心は之を慕ふの鹿にも似て居る、魂は湯火にも驚きて我が命は之に烹らるる雞の如きかと思ふ、我が眼中に在る今日の犀角は眞に吾子一人である、身後蘇家を寒飢ならしむるは老妻に愧づる、死後の神游は定めし何れの處である、桐鄉は知る浙江の西に葬ると、

【餘論】査初白の說に、此の獄中詩は、正集に入らず、南宋人の詩話中、往往之を載せて、頗る字に異同多しと、然らば何れが眞とも定め難きも、多く傳ふる所、今の本の如くなれば、姑らく之に從ふのである、紀曉嵐前首を評して曰く、譏刺太多、自是東坡大病、然但多排詆權倖之言、而無一毫怨謗君父之意、是其根本不壞處、所以能傳於後世也、情至語、不以工拙論也と、後首を評して

瑠、此はスズ、【三】犀角　「後漢李固傳」に犀角伏犀と、【四】牛衣　「前漢書」に、王章疾病無被、臥牛衣中、與妻決涕泣、其妻呵怒之曰、仲卿京師尊貴、在朝廷人、誰踰仲卿者、今疾病困尼、不自激卬、乃反涕泣、何鄙也と、【五】神游　「列子」に、黄帝神游而已と、【六】桐鄉　公の自注に、獄中聞杭湖間、民



句太俚と、余は曾て韓文公の潮州七律と此の前首とを以て情至語の雙璧と稱した、今紀と意の合したるを喜ぶ、

## 十二月二十八日蒙恩責授檢校水部員外郎黃州團練副使。復用前韻二首

十二月二十八日、恩を蒙りて、檢校水部員外郎黃州團練副使を責授せらる、復た前韻を用ふ　二首

(一)百日歸期恰及春。　　百日の歸期恰かも春に及ぶ、
(二)餘年樂事最關身。　　餘年の樂事最も關身、
出門便旋(三)風吹面。　　門を出づれば便旋として風面を吹き、
走馬聯翩(四)鵲(五)啅人(六)。　　馬を走らすれば聯翩として鵲人に啅し、
却對酒杯渾似夢。　　却つて酒杯に對し渾て夢に似、
試拈詩筆已如神。　　試みに詩筆を拈すれば已に神の如し、
此災何必深追(七)咎。　　此の災何ぞ必ずしも深く追咎せん、

【字解】【一】百日　初白云ふ、公以八月十八日赴獄、十二月二十八日出獄、恰滿百日と、【二】餘年　韓退之の詩、吾其寄餘齡と、【三】便旋　種種の說あるも、今は踟躕不進の貌、【四】聯翩　韓退之の詩、起居諫議聯翩來と、甲より乙と次第して進むを言ふ、【五】鵲　カササギ、喜を報ずる鳥、【六】啅人　啅は啄と同じ、今は喧啅である、

（八）竊レ祿從來豈有レ因。　竊祿從來豈因あらん、

【七】追咎　王羲之の書、追ニ咎往事一と、【八】竊祿　孔融の書、忠非ニ三聞一、智非ニ晁錯一、竊レ祿爲レ過、免レ罪爲レ幸と、孫君孚の談圃に、子瞻得レ罪、時有ニ朝士一、賣ニ一詩策一、內有ニ使墨君事者一、遂下レ獄、李定、何正臣、劾ニ其事一、以ニ指斥一論、謂レ蘇曰、學士素有ニ名節一、何不ニ與レ他招了一、蘇曰、軾爲ニ人臣一、不ニ敢萌ニ此心一、卻未レ知ニ何人造ニ此意一、一日禁中、遣ニ馮宗道按ニ獄、止貶ニ黃州團練副使一と、

【題義】出獄後に恩赦を蒙りて、公事文牘を檢校する水部員外郞と爲り、黃州の節度防禦團練副使を責授せられて作れるものである、

【詩意】百日間の幽囚より歸期を得て回春の氣を覺ゆ、餘年の樂事は最も關身の事である、門を出づれば便旋せざるを得ない風の面を吹くに、馬を走らせば聯翩たる喜びは鵲も知つて人前に噪しく鳴く、却つて酒杯に對すれば萬事渾て夢の如く、試みに詩筆を拈來すれば已に神の如くである、此の災禍は何ぞ必ず深く追咎せられんや、祿を竊む從來何の因があるでもない、

〔二〕

平生文字爲ニ吾累一。　平生文字我が累を爲す、
此去聲名不レ厭レ低。　此を去つて聲名低きを厭はず、
（一）塞上縱歸ニ他日馬一。　塞上縱ひ他日の馬に歸するも、
（二）城東不レ鬪少年雞。　城東鬪はさず少年の雞、
休レ官彭澤貧無レ酒。　官を休むる彭澤貧にして酒無く、
隱レ几（三）維摩病有レ妻。　几に隱る維摩病んで妻あり、
堪レ笑睢陽（四）老從事　笑ふに堪へたり睢陽の老從事、
爲レ余（五）投レ檄向ニ江西一。　余が爲めに檄を投じて江西に向ふ、

【自注】子由聞ニ予下一レ獄、乞下以ニ官爵一贖中予罪上、貶ニ筠州監酒一。

【字解】【一】塞上　「淮南子」に「近ニ塞上一之人、有ニ善術者一、馬無レ故亡而入レ胡、人皆弔レ之、其父曰、此何遽不レ爲レ福乎、居數月、其馬將ニ胡駿馬一而歸、人皆賀レ之、其父曰、此何遽不レ爲レ禍乎と、【二】城東　「城東父老傳」に、賈昌年七歲、明皇召爲ニ雞坊小兒一、長至ニ元和庚寅一年九十八矣、語ニ太平事一、歷歷可レ聽、自言少年、以ニ鬪雞一媚レ上、上以ニ倡優一畜レ之と、曹植の詩、鬪雞東郊道と、此の游戲は漢代より起る、【三】維摩　「淨名經」に、維摩示レ疾、以ニ法喜一爲レ妻と、【四】老從事　子由を指す、【五】投檄　公の自注に、子由聞ニ予下一レ獄、乞下以ニ官爵一贖中予罪上、貶ニ筠州監酒一と、渠之の詩、投レ檄北去何離哉と、

【詩意】平生文字の爲めに累せらる、今日より以後の聲名は低きを厭はない、縱ひ今日の禍が明日の福と變るとするも、城東に向つて少年輩と鬪雞などは共にせぬ、少年輩に頭を下げるを厭うて官を休めた彭澤は貧にして酒は無い、又羅漢等を叱呵したる維摩は几に隱りて病を愈すに法妻がある、笑ふに堪へたる事は睢陽の老從事である、余が爲めに餘計な心配をして檄を投じて江西に向うたは、

【餘論】紀は譏刺太多、東坡大病と前に評したるが、公の頂門の一針である、「平生文字爲ニ吾累一」と自己を知り乍ら、又好んで爲レ累の詩を歌ふ、「宋史」にも蘇軾、程頤、同在ニ經筵一、軾喜ニ諧謔一、而頤以ニ禮法一自持、軾每嘲ニ侮之一とありて、程伊川の如きですら、兒童を見る如くである、況んや餘子をや、後首、爲吾、爲余、不厭、不鬪、詩にも病がある、

# 蘇東坡詩集卷二十

## 古今體詩六十首

### 陳州與文郎逸民飲別攜手河堤上作此詩

陳州に文郎逸民と攜手河堤上に飲別し、此の詩を作る

白酒無聲滑瀉油。
醉行堤上散吾愁。
春風料峭(一)羊角(二)轉。
河水渺瀰(三)瓜蔓(四)流。
君已思歸夢巴峽。
我能未到(五)說黃州(六)。
此身聚散何窮已。
未忍悲歌學楚囚(七)。

白酒聲無く滑かに油を瀉ぐ、
醉うて堤上に行き吾愁を散す、
春風料峭として羊角轉じ、
河水渺瀰として瓜蔓流る、
君已に歸を思うて巴峽を夢み、
我能く未だ黃州を說くに到らず、
此の身聚散何ぞ窮已あらん、
未だ忍びず悲歌楚囚を學ぶに、

【字解】【一】料峭 陸龜蒙の詩、東風料峭客帆遲と、風が肌に著き微寒の貌、【二】羊角 旋風を言ふ、「莊子逍遙遊」に、搏扶搖羊角而上者九萬里と、グルグル旋る風、【三】渺瀰 李太白の詩、洞庭瀟湘意渺瀰と、【四】瓜蔓 「永衡記」に、三月桃花水、五月瓜蔓水と、瓜蔓延ぶる節故に名づく、【五】未到 韓退之の詩、潮陽未到吾能說、海氣昏昏水拍天と、【六】黃州 公、團練副使と爲り、明年二月に黃州に至る、

【七】楚囚　「左傳成公九年」に、晉侯觀於軍府、見鍾儀、問之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所獻楚囚也と、又「晉書王導傳」に、過江人士、每暇日、相要出新亭飲宴、周顗中坐嘆曰、風景不殊、擧目有河山之異、皆相視流涕、唯導愀然變色曰、當共戮力王室、剋復神州、何至作楚囚、相對泣耶、衆收涙而謝之と、

【題義】陳州に於て子由の女壻である文逸民と留別に際し此の詩を作りしものである、

【詩意】白酒を杯に瀉ぐも聲が無く油の如く滑かである、飲後堤上に醉歩して吾が愁を散ずる、面前の春風は料峭として羊角轉する如く、脚下の河水は溶溶として瓜蔓流るる、君は已に歸を思ふが爲めに巴峽を夢むる、我は黄州に到るに定まつて居るがまだ詳說することは出來ない、此の身の聚散は窮已あること無い、唯忍びない悲歌して楚囚を學ぶには、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、滑瀉油三字不雅、羊角乃旋颷之狀、與春風料峭不合、角字澀字、皆應平而仄、以次句瓜字、應仄而平、雙救之、此唐人定格也と、紀は作法に於ては之を許すも、起句滑瀉油の三字を俗と爲す、余は例の同字多きを指摘する、吾愁、我能、未到、未忍、後生學ぶ者は不可、羊角は旋颷の狀であるから、春風と不合であるとの紀評も大に聞く可きである、

## 子由自南都來陳三日而別

子由南都より來陳、三日にして別る

夫子自逐客。尙能哀楚囚。
夫子自から逐客、尙ほ能く楚囚を哀しむ、

奔馳三百里。徑來寬我憂。
奔馳三百里、徑ちに來りて我が憂を寬うす、

相逢知有得。道眼淸不流。
相逢うて得るあるを知る、道眼淸うして流れず、

別來未一年。落盡驕氣浮。
別來未だ一年ならず、落ち盡くす驕氣の浮ぶを、

嗟我晩聞道。款啓如孫休。
嗟我晩に道を聞き、款啓孫休の如し、

至言難久服。放心不自收。
至言久しく服し難く、放心自から收めず、

悟彼善知識。妙藥應所投。
悟る彼善知識、妙藥投する所に應ず、

納之憂患場。磨以百日愁。
之を憂患の場に納れ、磨するに百日の愁を以てせん、

冥頑雖難化。鐫發亦已周。
冥頑化し難しと雖も、鐫發亦已に周ねし、

平時種種心。次第去莫留。
平時種種の心、次第に去つて留まる莫し、

但餘無所還。永與夫子游。
但無所還を餘して、永く夫子と游ばん、

此別何足道。大江東西州。
此の別何ぞ道ふに足らん、大江東西の州、

畏蛇不下榻。睡足吾無求。
蛇を畏れて榻を下らず、睡足りて吾求め無し、

便爲齊安民。何必歸故邸。
便ち齊安の民と爲る、何ぞ必ずしも故邸に歸らん、

【字解】【一】逐客　「史記李斯傳」に、秦宗室大臣、請一切逐客、斯亦在逐中と、【二】三百里　樂史の「太平寰宇記」に、自歸德軍西南至陳州、二百八十里と、歸德軍は卽ち南京である、【三】寬我憂　杜子美の詩、斗水何直百憂寬と、【四】道眼　道な修

して得たる眼、「圓覺經」に分ニ別邪正一、能於ニ末世一切衆生無畏道眼一と、【五】驕氣　「史記老子傳」に、謂ニ孔子一曰、去ニ子之驕氣一、與ニ多欲一と、【六】款啓　「莊子達生篇」に、有ニ孫休者一、踵レ門而詫、今休款啓、寡聞之民也と、款は空にて、啓は開、所見の小なるを言ふ、【七】放心　「孟子」に、學問求ニ其放心一而已と、【八】善知識　「法華經妙莊嚴王品」に、善知識者、是大因緣と、天台の「法華文句」に、聞レ名爲レ知、見レ形爲レ識、是人益ニ我菩提之道一、名ニ善知識一と、良友を稱する語、博學の士を稱するのではない、【九】妙藥　「維摩經」に、世尊現レ身、爲ニ大醫王一、善療ニ衆病一、應レ病與レ藥と、【一〇】冥頑　韓退之の文に、冥頑不靈と、【一一】觸發　ホリヒラクのである、【一二】種種　白樂天の詩、銷盡平生種種心と、【一三】無所還　「楞嚴經」に、阿難言、我心性各有ニ所還一、則妙明元心、何故無還、佛告ニ阿難一、今當レ示ニ汝無所還地一と、【一四】長蛇　「佛遺教經」に、煩惱毒蛇、睡在ニ汝心一、譬如ニ黑蚖在ニ汝室一、睡ニ當以ニ持戒之鉤一、早併除レ之、睡蛇既出、乃可ニ安眠一と、【一五】齊安　春秋の世弦國、隋の齊安郡、今の黃州、

【題義】 元豐三年に黃州に赴任の途次、道を陳州に取る、時に子由も南都より來りて、三日會談せし時の詩である、

【詩意】 夫子は自から朝廷を放逐せられた客である、が尙ほ能く楚囚と爲る人を哀しむ、君は三百里も遠路を奔馳せられ、徑ちに來りて我が心憂を寬慰せらる、君と相逢うて所得あるを知る、道眼は淸うして流れない、君と一別來未だ一年は經ない、是の間に驕氣や浮念は落ち盡きぬ、嗟予我は晩年に道を聞いて、所見の狹小なること孫休の如くである、先賢の至言は久しく敬服はして居るが、散漫たる放心は尙ほ自から收むることが出來ない、悟る彼の方外の良朋友は、病者の爲めに病に應適する藥を投せらるるを、我も之を憂患の場に納め入れられ、磨して以て百日の愁を消したい、冥頑の天分は變化する難きも、聊かでも頑冥を觸發せらるること已に周ねきを知る、平生種種なる煩惱の心も、次第次第に去つて跡が留まることがない、但無所還の地を餘して、此の淸淨の境地に永く夫子と游ばんと思ふ、今日此の別は何ぞ道ふに足らん、大江を中心に東州と西州との隔てのみ、蛇害を畏るるを知つて榻を下らない、一榻を守りて睡は足る又何をか求めんや、便ち齊安の一民と爲つて、必ず故鄕に歸らんと思ふ念は起さない、

【餘論】 紀曉嵐曰く、起二句施ニ於兄弟一不レ合、於ニ朋友一則可、道眼句拙、落盡句亦拙と、紀評當る、公の子由を視る、弟として視るよりは寧ろ友として視ることが多い、起二句の紀評は取るに足らぬ、

## 正月十八日。蔡州道上遇レ雪。次ニ子由韻一二首

正月十八日蔡州道上雪に遇ふ、子由の韻に次す　二首

蘭(一)菊有ニ生意一。微陽回ニ寸根一。
蘭菊生意あり、微陽寸根を回す、

方憂(二)集ニ暮雪一。復喜迎ニ朝暾(三)一。
方に憂ふ暮雪集まるを、復た喜ぶ朝暾を迎ふるを、

憶我故居室。浮光(四)動ニ南軒一。
憶ふ我が故居室、浮光南軒に動くを、

松竹半傾瀉。未レ數ニ葵(五)與一レ萱。
松竹半は傾瀉、未だ數へず葵と萱とを、

三徑瑤草合。一瓶井(六)花溫。
三徑瑤草合し、一瓶井花溫なり、

至レ今行吟處。尙餘ニ履舃(七)痕一。
今に至りて行吟の處、尙ほ履舃の痕を餘す、

一朝出從仕、永愧李仲元(八)、　一朝出でて從仕し、永く李仲元に愧づ、
晩歳益可羞、犯雪方南奔、　晩歳益す羞づべし、雪を犯して方に南奔、
山城買廢圃、槁葉手自掀(九)、　山城廢圃を買ひ、槁葉手自から掀ぐ、
長使齊安人、指說故侯園(一〇)、　長く齊安の人をして、故侯の園を指說せしめん、

【字解】【一】蘭菊　「煙花錄」に、陳後主、問煬帝、麗華與蕭妃何如、帝曰、春蘭秋菊、亦各一時之秀也と、【二】集春雪　「毛詩」に、先集維霰と、【三】朝暾　「楚辭九歌」に、暾將出兮東方、照吾檻兮扶桑と、【四】浮光　劉孝綽の詩、浮光亂粉壁と、【五】葵與萱　葵はアフヒ、萱はワスレ草、忘憂草、宜男草、【六】井花　杜子美の詩、兒童汲井花と、紀曰、井花須作華と、華が正しい、【七】履舃痕　孟東野の詩、小時屐舃痕と、【八】李仲元　揚子、或問、子蜀人也、請人、曰有李仲元者、人也、不屈其意、不累其身、曰是夷惠之徒歟、曰不夷不惠、可否之間也、仲元世之師也と、【九】掀　掀舉又は掀簸である、【一〇】故侯園　「前漢書」に、召平故秦東陵侯、秦破爲布衣、貧種瓜長安城東、瓜美、故世謂東陵瓜と、

【題義】正月十八日、蔡州の道上にて雪に逢ひ、子由が詩を作る、乃ち其の韻を次して作る、

【詩意】蘭も菊も皆生意がある、微しく陽暖なれば寸根を回す、其の寸根を死すものは雪であるが故に憂ふ、復た喜ぶことは朝暾を迎ふる時である、憶ふに我等が國の故居室に在りし時は、曉暾の浮光が南軒に動き、松竹は雪の爲め半は傾瀉し、而して未だ葵と萱とを數へることが出來ない、三徑は瑶艸が鎖合して、僅に一瓶に井華が溫である、今に至るまで當時行吟の處、尙ほ我等が履舃の痕跡を餘す、一朝國を出でて朝に仕へ、永く以て國を出でない李仲元に愧づ、晩歳に及んで益す其の羞を知る、此の大雪を犯して方に南奔することを、山城に廢圃を買ひ求め、枯槁せる樹葉を手自から掀取する、長く齊安の民衆をして、故侯が處理せる園なることを指說せしむとは、

〔二〕

鉛膏(一)染髭須、旋露霜雪根、　鉛膏髭須を染め、旋露霜雪の根、
不如閉目坐、丹府(二)夜自暾、　如かず閉目して坐し、丹府夜自から暾、
誰知憂患中、方寸寓羲軒、　誰か知らん憂患の中、方寸羲軒を寓す、
大雪從壓屋、我非兒女萱(三)、　大雪屋を壓するに從す、我は兒女の萱にあらず、
平生學踵息(四)、坐覺兩蹬溫(五)、　平生踵息を學び、坐ろに覺ゆ兩蹬の溫なるを、
下馬作雪詩、滿地鞭箠痕、　馬より下りて雪詩を作る、滿地鞭箠の痕、
佇立(六)望原野、悲歌爲黎元(七)、　佇立して原野を望み、悲歌黎元の爲にす、
道逢射獵子、遙指狐兎奔、　道に射獵子に逢ふ、遙かに狐兎の奔るを指す、
蹤跡尙可原、窟穴何足掀、　蹤跡尙ほ原ぬべし、窟穴何ぞ掀ぐるに足らん、
寄謝李丞相(八)、吾將反邱園、　寄謝す李丞相、吾將に邱園に反らんとす、

【字解】【一】鉛膏　ナマリにて造るアブラ、卽ち白髮染である、【二】丹府　陸機辨亡論に、鬱丹府之愛、注謂心也と、【三】

兒女萱　孟郊詩、萱草兒女花、不レ解二壯士憂一と、【四】踵息　「莊子大宗師篇」に、眞人之息以レ踵、衆人之息以レ喉と、踵はキビス、喉はノド、【五】兩鐙　鐙は鐙を正とす、アブミ、【六】佇立　「毛詩」に、瞻望弗レ及、佇立以泣と、【七】黎元　黎は黑、元は首、即ち黔首、人民を謂ふ、【八】李丞相　李斯は秦の丞相、犬を牽きて上蔡東門を出でし事、今借りて李定に喩ふ、

【詩意】鉛膏を用て髭須を染むるも、尙ほ霜雪の如き毛の根は露はれて居る、如かず閉目して坐し、丹府に心眼を開きて見れば夜も亦朝暾の如くである、誰か知らんや憂患の中、丹府の方寸に羲軒氏を寓するのであるを、然らば大雪が屋を壓するに從せてよい、我等は固より兒女の萱艸とは違ふ、平生より眞人と衆人との相違の事を學ぶ、坐ろに覺ゆ眞人踵息の旨を得たものか兩鐙が溫かくなりたるを、乃ち馬より下りて雪の詩を作れば、滿地皆鞭箠の痕である、是に於て佇立して原野を望み、悲歌慷慨するは黎元の爲めである、道にして射獵の子に逢ふ、其の子は遙かに狐兎を指して奔る、其の蹤跡は尙ほ尋ぬるを得るも、狐兎の窟穴は何ぞ掀擧するに足らんやと思ふ、詩を以て李丞相に寄謝する、吾は將に故の邱園に反らんと欲する、

【餘論】紀曉嵐、前首を評して是憂患後語と、後首を評して嘅字押得牽强、兒女萱亦生造、大雪二句、蹤跡二句皆寓言也と、紀は牽强や生造の非を知りて、次韻の罪にあることを問はない、要するに次韻は牽强もする、生造もする、

## 過二新息一留二示鄉人任師中一　新息を過ぎ鄉人任師中に留示す、

昔年嘗羨任夫子。　昔年嘗て羨む任夫子、
卜二居(一)新息一臨二淮水一。　新息に卜居して淮水に臨む、
怪君(二)便爾忘二故鄉一。　怪しむ君が便爾故鄉を忘れ、
稻熟魚肥信清美。　稻熟し魚肥え信に清美、
(三)竹陂雁起天爲黑。　竹陂雁起りて天爲めに黑し、
【自注】小竹陂在二縣北一。
(四)桐柏煙橫山半紫。　桐柏煙橫はりて山半ば紫なり、
【自注】桐柏廟在二縣南一。
知君坐受(五)兒女困。　知る君が坐ながら受く兒女の困みを、
悔不三先歸弄二清泚一。　悔ゆ先づ歸りて清泚を弄せざることを、
塵埃我亦失レ(六)收レ身。　塵埃我も亦身を收むるを失す、
此行(七)蹭蹬尤可レ鄙。　此の行蹭蹬尤も鄙しむ可し、
寄食方將レ依二(八)白足一。　寄食方に將に白足に依らんとす、
附書未レ免レ煩二(九)黃耳一。　附書未だ免れず黃耳を煩はすを、

【字解】【一】新息　「太平寰宇記」に、新息縣、在二蔡州東南一百五十里一、淮水自レ西流入、經二縣南一と、今の河南省汝陽道息縣、漢の馬援は新息侯と爲る、【二】便爾　爾は語助のみ、【三】竹陂　公「自注」に小竹陂在二縣北一と、【四】桐柏　公「自注」に桐柏廟在二縣南一と、【五】兒女困　「史記淮陰侯傳」に、呂后使二武士縛一レ信、信曰、吾悔不レ用二蒯通之計一、乃爲二兒女子所一レ詐と、元豐中に任師中は轉運判官と見を異にし、誣奏せられたる事を言ふ、【六】收身　歐陽修の詩、何日早收レ身、江湖一漁艇と、【七】蹭蹬　杜子美の詩、蹭蹬騏驎老と、道路に疲勞せし貌、【八】白足　「高僧傳」に、曇始者、晉武帝時人、足白二於面一、時稱爲二白足和尙一と、【九】黃耳　犬の名、「晉書陸機傳」に、機有二駿犬一、

往雖不及來有年。　往は及ばずと雖も來は年あり、
詔恩倘許歸田里。(一〇)　詔恩倘し田里に歸るを許さば、
却下關山入蔡州。(一一)　却つて關山を下りて蔡州に入り、
爲買烏犍三百尾。(一二)　爲めに買はん烏犍三百尾、
【自注】黃州出水牛。

名黃耳、旣羇寓京師、久無家問、笑語犬曰、我家絕無書、汝能齎書、取消息否、犬搖尾作聲、機乃爲書、以竹筩盛之、繫其頸、犬尋路南走、遂至家、得報還洛、後以爲常と、【一〇】歸田　柳子厚の詩、皇恩若許歸田去、晩歲當爲鄰舍翁と、【一一】入蔡州　「王註」に、關山則自蔡州所經由來黃州路、先生後有梅花小詩云、半嶺飛雪度關山と、【一二】烏犍　水牛を言ふ、

【題意】黃州に赴かんとする途次、新息を過ぎ、其の同鄕人の任師中に留示するもの、

【詩意】昔年嘗て羨む任夫子、羨む意味は新息に卜居して其の居は淮水に臨むと聞くに由る、然るに今日は怪しむ君が容易に故鄕の事を忘却して、此の地稻は熟し魚は肥えて信に淸美であると言ふ、僕が見る所は竹陂には雁起ちて天が爲めに黑い、又桐柏は煙が橫はりて山色が半紫である、知る君が坐ながら兒女輩の爲め困められ、悔ゆらくは先きに歸りて鄕國の淸泚を弄せざるを、君の事を言ふ僕も同じく塵埃中に奔走して早く收身の法を失つて居る、今次の此の行の如きは蹭蹬尤も自から鄙しむべきを知つて居る、黃州に赴かば身は僧房に寄寓して寺僧の厄介にならんと思ふ、故鄕へ遺る書を附して黃耳を煩はすことを免れない、已往は及ばずと言ふも未來は更に年あり、詔恩を蒙りて田里に歸ることを許さるれば、却つて關山を下りて蔡州に入り、生の爲めに烏犍三百尾を買うて活を計らんと思ふ、

【餘論】紀曰く（以下曉嵐は畧す）竹陂二句寓言、任之獄事、以雁與煙、比小人也、然其言不甚譬切と、往雖以下を評して、此却得體と、余は此の評を善と信ずる、

## 過淮

淮を過ぐ

朝離新息縣。(一)初亂一水碧。　朝に新息縣を離れ、初めて亂る一水の碧、
暮宿淮(二)南郵。已度千(三)山赤。　暮に宿す淮南の郵、已に度る千山の赤きを、
(四)麕鼯號古戍。霧雨暗破驛。　麕鼯古戍に號び、霧雨破驛暗し、
回頭梁楚郊。永與中(五)原隔。　頭を梁楚の郊に回らせば、永く中原と隔つ、
黃州在何許。想像雲(六)夢澤。　黃州は何れの許に在る、想像す雲夢澤、
吾生如寄耳。初不擇所適。　吾が生は寄するが如きのみ、初めは適く所を擇ばず、
但有魚與稻。生理已自畢。　但魚と稻とあらば、生理は已に自から畢る、
獨喜小兒子。少小事安佚。　獨り喜ぶ小兒子、少小安佚を事とし、

相從艱難中。肝肺如（七）鐵石。　相從ふ艱難の中、肝肺鐵石の如し、

便應與晤語。何止寄（八）衰疾。　便ち應に與に晤語すべし、何ぞ止だ衰疾を寄せん、

【自注】時家在子由處。獨與兒子邁南來。

【字解】〔一〕初亂　「尙書」に亂于河と、河流を正しく横ぎり渡る、〔二〕淮南郡　「元和郡縣志」に、淮水自西流入、經新息縣南去縣五里と、〔三〕千山赤　杜子美の詩、四望千山萬山赤と、〔四〕鼪鼯　鼪は鼬の類、鼯はムササビ、謝元暉の詩、飢鼯此夜啼と、〔五〕中原　杜子美の詩、中原杳茫茫と、〔六〕雲夢澤　今日湖北の江漢道安陸縣に屬す、雲澤と夢澤との二澤の名、方八九百里、總じて之を雲夢と謂ふ、孟浩然の氣蒸雲夢澤は是である、〔七〕如鐵石　「魏武故事」に、長史王忠、必能勠事、心如鐵石と、〔八〕寄衰疾　「公自注」に時家在子由處、獨與兒子邁南來と、杜子美の詩、瀧涙江漢身衰疾と、

【詩意】早朝に新息縣を發途して、初めて一水の碧なるを亂る、晩暮に宿する所は淮南の郡である、其の途次已に千山の禿なるを度る、鼪鼯の號ぶを聞くは共れは古戌の邊である、霧や雨の爲め破驛は暗い、頭を梁楚の郊に回らして見れば、永く中原と遠隔せることを覺ゆ、我が赴かんとする黃州は果して何れの處である、先づ雲夢澤の狀を想像する、吾が生は寄寓の如きのみである、初めより適く所を擇んでは居らぬ、但生を保つの魚と稻とあらば、生理は巳に自から畢る、獨り喜ぶは小兒子、少小の時は安佚を事としたのであるが、長じて我が艱難の中に從うて、肝肺は堅固にして鐵石の如くである、便ち應に之と晤語すべく、何ぞ止だ此の衰疾を勞はるのみではない、

【餘論】紀曰く、沈痛、語不在深と、

## 書𧮪公詩後　　𧮪公詩後に書す

過加祿鎭南二十五里大許店。休馬於逆旅祁宗祥家。見壁上有幅紙。題詩云。滿院秋光濃欲滴。老僧倚杖靑松側。只怪高聲問不𧮪。嗔余踏破蒼苔色。其後題云。滏水僧寶𧮪。宗祥謂余。此光黃間狂僧也。年百三十。死於熙寧十年。既死。人有見之者。宗祥言其異事甚多。作是詩以識之。𧮪公本名淸戒。俗謂之戒和尙云。

【訓讀】加祿鎭南二十五里、大許店に過ぐ、馬を逆旅祁宗祥が家に休ふ、壁上を見れば、幅紙あり、詩を題して云ふ、滿院の秋光濃かに滴らんと欲す、老僧杖に倚る靑松の側、只怪しむ高聲問ふも𧮪へず、嗔る余が蒼苔の色を踏破せるをと、其の後に題して云ふ、滏水の僧寶𧮪と、宗祥余に謂ふ、此れ光黃間の狂僧なり、年百三十、熙寧十年に死す、既に死す、人之を見るもの有り、宗祥共の異事を言ふ甚だ多し、是の詩を作り以て之を識す、𧮪公本名淸戒、俗之を戒和尙と謂ふと云ふ、

𧮪公昔未化（一）。來往淮山曲。　𧮪公昔未だ化せず、來往す淮山の曲、

壽逾兩甲子。氣壓諸尊（二）宿。　壽は兩甲子を逾え、氣は諸尊宿を壓す、

但嗟濁惡世(三)。不受龍象(四)蹴。　但嗟く濁惡の世、龍象の蹴を受けず、
我來不及見。悵望(五)空遺躅。　我來りて見るに及ばず、悵望空しく遺躅、
霜顱隱白毫(六)。鎖骨(七)埋青玉。　霜顱白毫を隱し、鎖骨青玉を埋む、
皆云似達磨(八)。隻履還西竺。　皆云ふ達磨の、隻履西竺に還るに似たりと、
壁間餘清詩。字勢頗拔俗。　壁間に清詩を餘し、字勢頗る拔俗、
爲吟五字偈。一洗凡眼肉。　爲めに吟ず五字の偈、一洗せん凡眼の肉を、

【字解】【一】示化　僧の死を遷化と言ふ、【二】耆宿　僧の戒德の高きものを言ふ、【三】濁惡世　「阿彌陀經」に五濁惡世と、【四】龍象　學德の高き僧を龍象と言ふ、「維摩經」に、如龍象蹴蹋、非驢所堪と、【五】悵望　謝元暉の詩、佇聽我悵望と、【六】白毫　佛陀が面上眉間の毫髮を言ふ、【七】鎖骨　「觀音持驗記」に、觀音大士、昔於陝府、化爲倡女、以救淫迷者、既死埋之、後有胡僧自西域來、見墓敬禮焚香、人謂曰、此一淫縱女子何敬耶、僧曰、斯乃大聖、慈悲喜捨、世俗之欲、無不狥焉、此卽鎖骨菩薩、衆人開墓視、遍身之骨、鈎結皆如鎖狀、人異之、爲起塔と、【八】達磨　「傳燈錄」に、師祖已化、葬熊耳山吳坂、三年後有魏使宋雲、自使西域回、見達磨於葱嶺、手攜隻履、翩翩獨行、言吾歸西天、雲至、言之孝莊帝、使人發塔開棺、唯隻履在耳と、

【詩意】臻公が昔し遷化せざる時、淮山の曲に來往すと、其の壽は兩甲子を逾え、氣は諸耆宿を壓服すと、但嗟く濁惡の世、龍象等の蹴蹋なぞ受けない、我は公の生前を見るに及ばずして、今は悵望するも空しく遺躅である、霜顱には佛陀の如く白毫あるも隱し、道體は埋葬したるも凡夫の骨ではない、人は皆云ふ達磨大師が隻履を提げて西天に還るに似て居ると、宗祥が家の壁間に清詩を餘すを見れば、字勢は頗る拔俗である、公の爲めに今佛經の五字の頌文を吟誦して、以て凡眼肉を一洗せんとするものである、

【餘論】紀は此の篇を評しない、案ずるに公は僧の七絕を清詩と稱せるが、俗陋極まるものである、轉結二句殊に滑稽の極である、公は諧謔を好むの僻、此の詩に於て遺憾なく發揮せるもの、紀の論せざる所以も、察知するに難くない、

## 游淨居寺　淨居寺に游ぶ

淨居寺在光山(一)縣南四十里。大蘇山之南。小蘇山之北。寺僧居仁爲余言。齊(二)天保中。僧惠思(三)過此見父老。問其姓。曰蘇氏。又得二山名。乃嘆曰。吾師告我。遇三蘇則住。遂留結菴。而父老竟無有。蓋山神也。其後僧智顗(四)見思於此山而得法焉。則世所謂思大和尚。智者大師是也。唐神龍(五)中。道岸(六)禪師始建寺於其地。廣明庚子之亂。寺廢於兵火。至乾興中。乃復。而賜名曰梵天云。

【訓讀】淨居寺は光山縣の南四十里、大蘇山の南、小蘇山の北に在り、寺僧居仁余の爲めに言ふ、齊

の天保中、僧惠思、此を過ぎ父老を見て其の姓を問ふ、曰く蘇氏と、又二山の名を得、乃ち嘆じて曰く、吾師我に告ぐ、三蘇に遇はば則ち住まれと、遂に留まりて菴を結ぶ、而して父老竟に有る無し、蓋し山神なり、其の後僧智顗、思を此の山に見、而して法を得、則ち世に所謂思大和尚、智者大師是なり、唐の神龍中、道岸禪師、始めて寺を其の地に建つ、廣明庚子の亂、寺兵火に廢す、乾興中に至り、乃ち復して名を賜ひ梵天と曰ふと云ふ、

【字解】【一】光山　光山は今河南省汝陽道の光山縣に在る、一名弋山、山の周回二十里、大蘇山も小蘇山も、是の支山である、【二】齊天保中　北齊の第一主文宣帝洋の年號、【三】惠思　北魏李氏の子、齊に入りて惠文に依りて法を受け、後大蘇山に住したるも、兵亂を避けて、去りて南嶽に赴き、是の山に住する十年、陳の大建九年に遷化す、世に思大和尚又は南嶽大師と號す、【四】智顗　字は德安、姓は陳氏、年十八、大蘇山に上りて惠思に謁して法を受け、後天台山に入りて、是の山に寂す、世に智者大師と號す、【五】唐神龍中　中宗の年號、智者大師寂後百有九年、【六】道岸　姓は唐氏、世潁川の大族、卽ち智者と同鄉、後光州に遷り、出家後は會稽の龍興寺に在りて法を說く、寂年は未詳、今此の淨居寺は道岸の此の禪師の建立である、要するに天台系の宗派である、

十載遊名山。自製山中衣。
願言畢婚嫁。攜手老翠微。
不悟俗緣在。失身陷危機。
刑名非宿學。陷穽損積威。
遂恐生死隔。永與雲山違。
今日復何日。芒鞵自輕飛。
稽首兩足尊。舉頭雙涕揮。
靈山會未散。八部猶光輝。
願從二聖往。一洗千劫非。
徘徊竹溪月。空翠搖煙霏。
鐘聲自送客。出谷猶依依。
回首吾家山。歲晚將焉歸。

十載名山に遊び、自から製す山中の衣、
願うて言に婚嫁を畢へ、手を攜へて翠微に老いんと、
俗緣の在るを悟らず、失身危機に陷る、
刑名は宿學にあらず、陷穽積威を損す、
遂に生死の隔てを恐る、永く雲山と違ふ、
今日復た何の日ぞ、芒鞵自から輕飛す、
稽首す兩足尊、頭を擧げて雙涕揮ふ、
靈山の會未だ散せず、八部猶は光輝あり、
願はくは二聖に從つて往き、千劫の非を一洗せん、
竹溪の月に徘徊すれば、空翠煙霏搖く、
鐘聲自から客を送り、谷を出でて猶は依依たり、
首を吾が家山に回し、歲晚れて將に焉くに歸らんとするや、

【字解】【一】婚嫁　白樂天の詩、女嫁男婚了と、【二】翠微　杜子美の詩、華亭入翠微と、【三】刑名　「史記」に、申不害之學、本於黃老、而主刑名と、法律學を言ふ、【四】陷穽　「司馬遷の書」に、猛虎在深山、百獸震恐、及其在檻穽之中、搖尾而求食、積威約之漸也と、【五】今日　杜子美の詩、今夕復何夕、共此燈燭光と、【六】稽首　印度にて敬禮九儀の一を稽首と言ふ、「法華經」に、稽首兩足尊と、佛陀は自身も滿足、他人をも滿足せしむる、故に是の名ある、【七】雙涕揮　「金剛經」に、深解義趣、涕淚悲泣と、【八】靈山會　剡溪の「法華玄義」に、智者初入大蘇山、謁思大禪師、悟法華三昧、見靈山一會、儼然未散と、【九】八部　天一龍二夜叉三乾闥婆四阿修羅五迦樓羅六緊那羅七摩睺羅八を言ふ、部は部屬、皆大神力を有し、變化自在なる神類である、【一〇】二聖　南嶽と智者、【一一】千劫　儒は千世萬世と言ひ、佛は千劫萬劫と言ふ、【一二】空翠　王右丞の詩、空翠濕人衣と、孟浩然の詩、空

翠落庭陰と、

【詩意】十載の間名山に游ぶ、常に自から旅行用としての山中服を製して居る、願うて言に子女等が婚嫁が畢りしならば、同調の人と手を攜へて翠微に入つて老いんと、而かも猶ほ俗緣の在るを悟らず、俗世の爲めに時を罵り詩を作り失身して危機に陷りし事を招く、檻穽の中に陷りて積威を損するに至る、遂に恐る生死相隔て、現世に於て永く雲山と逢ふことを、然るに今日は復何の日ぞや、芒鞵を穿ちて此の名山に輕飛を得たるは、無上兩足尊を稽首して、頭を擧げて佛面に對し雙涕を揮ふ、今も猶ほ靈山に佛陀が說法する集會が未散であるかと覺ゆ、隨つて八部衆も光輝が依然としてある、願はくは二聖の敎に從つて往き、千劫に此の身の非なるを一洗せんと思ふ、更に竹溪の月に徘徊すれば、梵林の空翠が煙霏を搖かすを見る、時に鐘聲が聞ゆるは客をして下山せしむる報である、乃ち谷を出で去るも猶ほ心は依依と後へ殘る、首を回らして大蘇小蘇の二山を見、歲晚れて將に焉くに歸らんとするや、

【餘論】紀曰く、頓挫好、是憂患後語、結得縣邈と、紀評の如く憂患後語は疑ふべくもない、已に乾竺の學に深し、實際の感慨に遇ふ、此の文字ある、然らざるを得ない、世に蘇洵を老蘇と稱し、蘇軾を大蘇と稱し、蘇轍を小蘇と稱し、合して三蘇と號す、南嶽大師が事と合して、公に於て不思議の思ひ起る、亦當然である、結末に吾が家山は眉州の家山を指すにあらずして、大蘇小蘇を指す所、思慕の情察すべきである、

## 梅花二首

梅花　二首

春來幽谷水潺潺。　春來幽谷水潺潺、
的皪梅花草棘間。　的皪たる梅花草棘の間、
一夜東風吹石裂。　一夜東風石を吹いて裂く、
半隨飛雪度關山。　半ば飛雪に隨つて關山を度る、

【字解】【一】的皪　花の鮮明なるを言ふ、【二】石裂　「國史補」に李生月夜泛舟、吹橫竹笛、俄有客呼船請載、旣至請吹之、其聲清壯、山石可裂と、獨孤及の文、溪喉地坼、谷凍石裂と、歐陽修の詩に、日日東風吹石裂と、【三】關山　高適聞笛詩に、借問梅花何處落、風吹一夜滿關山と、

【詩意】春が來りたれば幽谷を流るる水も潺潺と音を爲す、的皪として鮮明なる梅花も草棘の間に開く、一夜東風が石を吹いて裂くの勢である、十分に開きし梅花も半は飛雪と爲つて關山を度る、

〔二〕

何人把酒慰深幽。　何人か酒を把つて深幽を慰する、
開自無聊落更愁。　開きても自から無聊落つれば更に愁ふ、
幸有青溪三百曲。　幸に青溪三百曲あり、
不辭相送到黃州。　辭せす相送りて黃州に到るを、

【字解】【一】無聊　「楚辭」に、思君兮無聊と、【二】三百曲　太白の詩、三十六曲水回縈、一谿初入千花明と。

【詩意】何人か酒を把つて我が深幽を慰する者ぞや、開くも自から無聊である落つれば更に愁と爲る、

幸に清溪が三百曲も長く續く、此の中を行いて辭せない相送りて黃州に到るを、

【餘論】二絶宋絶として上乘なるもの、紀曰く前首借喩、後首說明、章法不レ苟と、案ずるに二首梅花を借りて、自況を敍するにあれば、解釋も見る人に依つて異なる、余は姑らく當面の解を爲すのみ、

## 戲作ニ種松一

我(一)昔少年日。種レ松滿ニ東岡一。
初移ニ一寸根一。瑣細如ニ挿秧一。
二年黃茅(二)下。一一攢ニ麥芒(三)一。
三年出ニ蓬艾(四)一。滿山散ニ牛羊一。
不レ見十餘年。想作ニ龍蛇長一。
夜風波(五)浪碎。朝露珠璣香。
我欲レ食ニ其膏一。已伐ニ百(六)本桑一。
【自注】煮ニ松脂一法。用ニ桑柴灰水一。
人事多乖迕(七)。神藥竟渺茫。

戲に種松を作る

我昔し少年の日、松を種ゑて東岡に滿つ、
初め一寸の根を移し、瑣細挿秧の如し、
二年黃茅の下、一一麥芒攢まる、
三年蓬艾出で、滿山牛羊散す、
見ざること十餘年、想ふ龍蛇の長きを作すを、
夜風波浪碎け、朝露珠璣香ばし、
我其の膏を食はんと欲し、已に百本の桑を伐る、
人事多くは乖迕、神藥覚に渺茫、



朅來齊安野。夾レ路須髯蒼。
會開ニ龜蛇窟(八)一。不レ惜ニ斤斧瘡(九)一。
縱未レ得ニ茯苓一。且當レ拾ニ流肪(一〇)一。
釜(一一)盎百出入。皎然散ニ飛霜一。
槁死三(一二)彭仇。澡換五穀腸。
靑骨凝ニ綠髓一。丹(一三)田發ニ幽光一。
白髮何足レ道。要使ニ雙瞳方一。
却後五百年。騎レ鶴還ニ故鄉一。

朅來す齊安の野、路を夾む須髯蒼、
會ま開く龜蛇の窟、惜しまず斤斧の瘡、
縱ひ未だ茯苓を得ざるも、且當に流肪を拾ふべし、
釜盎百出入、皎然として飛霜散す、
槁死す三彭仇、澡換す五穀腸、
靑骨綠髓を凝らし、丹田幽光を發す、
白髮何ぞ道ふに足らん、要らず雙瞳をして方ならしめ、
却後五百年、鶴に騎りて故鄉に還らん、

【字解】【一】我昔　杜子美の詩、甫昔少年日と、【二】黃茅　黃色のチガヤ、「本草」に、黃茅似ニ菅茅一、而莖上開レ葉、可レ爲ニ索綯一と、【三】麥芒　芒は麥の尖、針の如き毛、潘安仁の賦に、麥漸漸以擢レ芒と、【四】蓬艾　蓬も艾もヨモギ、【五】波浪碎　松葉が風の爲め動くを言ふ、【六】百本桑　公の自注に煮ニ松脂一法、用ニ桑柴灰水一と、【七】乖迕　杜子美の詩、人事多錯迕と、【八】龜蛇窟　松脂土に入つて千年、茯苓と爲る、狀龜蛇鳥獸の如きもの良品である、【九】斧瘡　紀曰く瘡當レ作レ創と、【一〇】流肪　「本草」に松脂別名松肪、注云、松節、松心、松枝、在レ土不レ朽、流脂日久、變爲ニ琥珀一と、【一一】釜盎　「本草」に松脂先須用ニ大釜一、加レ水置レ甑、白茅藉ニ甑底一、布ニ松脂於上一、炊以ニ桑薪一、候ニ松脂盡入ニ釜中一、乃出レ之投ニ於冷水一、既凝又蒸、白如レ玉、然後入レ用と、【一二】三彭　彭質と彭踞と彭居と、人の身中に在りて、狀は小兒の如く、須毛ある、人が已に死すれば、此の物鬼と爲る、【一三】丹田　臍より一寸下の所、「黃庭經」に、丹田之中精氣微と、

【題義】松を種ゑて仙法を想ひ、現實の如くに歌はんと、故に戲作と題せるのである、

【詩意】我昔し少年の日、稚松を種ゑて東岡に滿たしめた、初めは一寸の根を移し、瑣細にして宛かも挿秧の如くであつた、二年を經て黃茅の下に達し、一一麥芒を攢むる如く、三年を超せば蓬艾を出づるの大と爲る、滿山に牛羊を散游させるの好きに逢す、而して爾後見ざるもの十餘年、想ふに龍蛇の長影を爲し、夜風には謖謖と波浪が碎け、朝露には晶晶と珠璣の香を發すと、然らば我は其の膏を取り食うて、生を養はんと欲し、已に製造の準備に百本の桑を伐る、何ぞ料らん人事は多く乖迕する、神藥を製造すること竟に渺茫と爲る、曾てより此の齊安の野に來りて見れば、雨路を夾んで須髯蒼たり、會ま龜蛇窟を開きて、惜ますに斤斧の爲め松が創を受くるを、縱ひ未だ茯苓を得ざるとするも、且當に流肪を拾ひ取ることが出來る、之を製して神藥と爲す法は釜盎を用ひて百回も出入する、其の結果皓然として飛霜を散ずる白色の物が出來る、槁死せる三彭の仇となり、人間五穀の腸を澡換する、青骨が綠髓を凝らして、丹田には幽光を發するに至る、白髮も何ぞ道ふに足らん、後日必す仙道を成就して、雙瞳をして方形ならしめ、今より後五百年、鶴に騎りて故鄉に還るの自由を得ん、

【餘論】仙家の事を說くを以て解すべく、解すべからざるものあり、紀曰く、緣二是松詩一、故不レ嫌三於章咒氣一、若作二道家詩一、用二此種字句一便可レ厭、雙結完法と、

## 萬松亭

萬松亭

麻城縣令張毅、植二萬松於道周一、以芘二行者一、且以名二其亭一、去未二十年一、而松之存者十不レ及二三四一、傷二來者之不レ嗣二其意一也、故作二是詩一、

【訓讀】麻城縣令張毅、萬松を道周に植ゑ、以て行者を芘ひ、且以て其の亭に名く、去りて未だ十年ならずして、松の存するもの、十が三四に及ばず、來者の其の意を嗣がざるを傷むなり、故に是の詩を作る、

十年栽種百年規、　十年栽種す百年の規、

好德(一)無二人助一(二)我儀一、　好德人の我が儀を助くる無し、

【自注】古語云、一年之計、樹レ之以レ穀、十年之計、樹レ之以レ木、百年之計、樹レ之以レ德、

縣令若同二倉庾氏一(三)、　縣令若し倉庾氏に同じからば、

亭松應レ長二子孫枝一、　亭松も應に子孫の枝を長ずべし、

天公不レ救斧斤厄、　天公は救はず斧斤の厄を、

野火解レ憐氷雪姿、　野火憐むを解す氷雪の姿を、

爲問幾株能合抱、　爲めに問ふ幾株能く合抱、

殷勤記取角弓詩(四)、　殷勤に記取せよ角弓の詩、

【字解】〔一〕好德　公の自注、一年之計、樹レ之以レ穀、十年之計、樹レ之以レ木、百年之計、樹レ之以レ德と、〔二〕助我儀　「詩」に、我儀圖レ之、愛莫レ助レ之と、〔三〕倉庾氏　「前漢書」に、孝文時、國家無事、爲レ吏者、長二子孫一、居レ官者、以爲レ姓、注倉氏庾氏是也と、〔四〕角弓詩　「左傳昭公二年」に、晉韓宣子來聘、公享レ之、韓子賦二角弓一、既宴二享於季氏一、有二嘉樹一焉、宣子譽レ之、武子曰、宿敢不レ封二殖此樹一、以無レ忘二角弓一と、杜子美の詩、更尋嘉樹傳、

不忘角弓詩と、

【題意】　黄州より東北一百七十里の地に麻城縣がある、縣令が萬松を道旁に植ゑて、以て往來人の夏日炎を防ぐに供せるに、十年も經ざるに亭は存するも、松の存するもの少し、乃ち傷んで是の詩を賦されしものである、

【詩意】　松を樹ゑしは十年百年と永遠を思へばである、德を好んで多くの人が我が儀を助くる者がない、縣令が若し倉庾氏に同じければ、亭松も應に子孫の枝を長ずるならんと思ふ、然るに天公は數はない斧斤の災厄を禦るを、野火は唯憐む氷雪の姿を焚くを、爲めに問ふ幾株か能く合抱の木が殘り居るやと、殷勤に記取し玉へ昔し角弓の詩あるを、

【餘論】　紀曰く腐氣太甚と、余謂ふ趣旨が首尾貫通して、難解人を惱ます詩に勝ること萬萬、七律の正法として推すべく、後生の學ぶべきものである、

## 張先生

張先生

先生不知其名。黄州故縣人。本姓盧。爲張氏所養。陽狂垢汚。寒暑不能侵。常獨行市中。夜或不知其所止。往來者欲見之。多不能致。余試使人召之。欣然而來。既至立而不言。與之言不應。使之坐不可。但俯仰熟視傳舍堂中。久之而去。夫孰非傳舍者。是中竟何有乎。然余以有思維心追躡其意。蓋未得也。

【訓讀】　先生は其の名を知らす、黄州故縣の人、本姓は盧、張氏の養ふ所と爲る、陽狂垢汚、寒暑使すこと能はす、常に市中に獨行し、夜或は其の止まる所を知らす、往來する者、之を見んと欲するも、多く致すこと能はす、余試みに人をして之を召さしむ、欣然として來る、既に至るも立ちて言はず、之と言ふも應へす、之をして坐せしむるも可かす、但俯仰して傳舍堂中を熟視し、久之して去る、夫れ孰か傳舍にあらざるもの、是の中竟に何か有らんや、然して余以て心を維ぎ其の意を追躡するに思ひあるも、蓋し未だ得ざるなり、

熟視空堂竟不言。　空堂を熟視して竟に言はず、
故應知我未天全。　故に應に知るべし我は未だ天全ならざるを、
肯來傳舍人皆說。　肯て傳舍に來ると人皆說く、
能致先生子亦賢。　能く先生を致す子も亦賢なり、
脫屣不妨眠糞屋。　脫屣妨げず糞屋に眠るを、
流澌爭見浴冰川。　流澌爭ひ見る冰川に浴するを、

【字解】　【一】天全　「莊子達生篇」に、壹其性、養其氣、合其德、以通乎物之所造、若是者、其天守全、其神無郤と、【二】傳舍　「史記」に、沛公至高陽傳舍と、宿屋を言ふ、【三】能致　「揚子」に、叔孫通、欲制君臣之儀、徵先生於齊魯、所不能致者二人と、【二】糞屋　王註堯卿曰、木朽

士廉豈識桃椎妙。　士廉豈識らん桃椎の妙、
妄意稱量未必然。　妄意に稱量する未だ必ずしも然らず、

斫信者、得道之異人也、常汚垢作狂、晝脫履而行、夜眠糞屋中、人莫測之と、【五】流澌　氷が解け流るゝ貌、「楚辭」に流澌紛兮將來下と、「談苑」に、郭忠恕、大寒鑿冰而浴と、【六】桃椎　「唐書」に、朱桃椎、益州人、被裘曳索、人莫測其所爲、高士廉爲長吏、備禮以請、降階與之語、不答瞪視而出、士廉拜曰、祭酒其使我以無事治蜀耶、乃簡條目、薄賦斂、州大治と、【七】稱量　「楚辭」に苦稱量之不審兮と、

【詩意】先生を招致し來るも空堂の上下を熟視するのみにて何事も言はない、言はない所を考ふれば我が未だ天全を體得せざる人であるを知つて居るのであらう、但し先生が肯て傳舍に來るは不思議であると人が說く、が容易に來らざる先生を招致したる子も亦賢人である、先生は古の偉人の如く世事を脫屣して糞屋中に眠る人である、又流澌を看て冰川に浴する高士である、我は今日の士廉とすれば先生は古の桃椎である、士廉が桃椎の妙を識らんと欲するは、畢竟妄意に稱量するのみ未だ必ずしも然らざるのである、

【餘論】紀曰く五六太俗と、俗の中に味がある、

## 初到黃州

初めて黃州に到る

自笑平生爲口忙。　自から笑ふ平生口の爲めに忙がしきを、
老來事業轉荒唐。　老來事業轉た荒唐、
長江繞郭知魚美。　長江郭を繞りて魚の美を知り、
好竹連山覺筍香。　好竹山に連りて筍の香を覺ゆ、
逐客不妨員外置。　逐客は妨げず員外置を、
詩人例作水曹郎。　詩人は例水曹郎と作る、
只慙無補絲毫事。　只慙づ絲毫の事を補ふ無きを、
尙費官家壓酒囊。　尙ほ官家を費して酒囊を壓す、

【自注】檢校官例、折支多得退酒袋。

【字解】【一】事業　王註次公曰、李台嘏、謂韓昭曰、韓八座事業、如拆襪線、無一條長者と、【二】員外置　李渉の詩、唯餘員外置、不廁列星文と、左遷せられし者は、苛員外の官に備はるのみ、【三】水曹郎　白樂天の詩、題詩寄與水曹郎と、杜子美の詩、能詩何水曹、水部郎である、水澤を掌理する官、梁の何遜、唐の張籍、孟賓子皆水部郎である、【四】官家　白樂天の詩、況無治道術、坐受官家祿と、公の自注に、檢校官例、折支多得退酒袋と、曲物を以て錢に代ふるを折支と謂ひ、又退酒袋と謂ふ、

【題義】元豐三年二月に年四十五を以て初めて黃州に團練副使と爲りて到る時の作である、

【詩意】自から笑ふ平生生活の爲めに多忙なるを、老來事業の轉た荒唐なるを覺ゆ、黃州の地は長江が一郭を繞りて魚の美なるを知る、好竹は連山に多く筍の香ばしきを覺ゆる、然らば逐客と爲つて員外置たるも妨げる所はない、古より詩人は多く水曹郎と作る、只慙づらくは國家に對し絲毫の事の補ひも無く、徒らに官家の俸錢を費して酒囊を壓することを、

【餘論】起句に爲口忙と用ひ、而して魚美、筍香、酒囊、皆口に入るもの、句法として尋常ではあるが、後生は是の句法を知らざるものもある、此等の詩を熟讀するが可い、紀曰く和平と、事の二字あ

るは例の病である、

## 陳季常所レ蓄朱陳邨嫁娶圖。二首

陳季常が蓄ふるところの朱陳邨嫁娶の圖　二首

何年顧陸丹青手。　何の年か顧陸丹青の手、
畫作朱陳嫁娶圖。　畫き作す朱陳嫁娶の圖、
聞道一邨惟兩姓。　聞道く一邨惟兩姓と、
不レ將ニ門戶一買ニ崔盧一。　門戶を將て崔盧を買はず、

【字解】〔一〕顧陸　晉の顧愷之字は長康、義熙中、衞協を師とし、丹青妙を極む、畫絶、癡絶、才絶を以て三絶の稱がある、宋の陸探微は常に明帝の左右に在りて筆を揮ひ、人物及び山水、獨歩と稱せらる、「歷代名畫記」に、張懷瓘云、像ニ人之美一、顧得ニ其神一、陸得ニ其骨一と、〔二〕朱陳　朱陳邨は徐州豐縣の山中に在り、朱と陳との兩姓のみ、世婚姻を爲して、他姓を交へない、亦世と往來もしない、〔三〕買崔盧　「唐書高士廉傳」に、太宗詔ニ士廉等一、刊ニ正姓氏一、撰爲ニ氏族志一、太宗曰、我與ニ山東崔盧李鄭一、舊既無レ嫌、爲ニ其世代衰微、全無ニ冠蓋一、猶自云ニ士大夫一、婚姻之間、則多邀ニ錢幣一、才識凡下、偃仰自高、販ニ鬻松檟一、依ニ託富貴一、我不レ解人間何爲重レ之、祇緣ニ齊家、唯據ニ河北一、梁陳僻ニ在江南一、至レ今猶以ニ崔盧王謝一爲レ重と、又「文中子」に、任薛王劉崔盧之昏非レ古也、何以親レ譜、唐高士廉傳、太宗以ニ山東士人、尙ニ閥閱一、嫁娶必多取レ貲、故人謂ニ之賣昏一、由レ是詔ニ士廉一、爲ニ氏族志一、帝曰、我於ニ崔盧李鄭一無レ嫌、今謀士勞臣、何容レ納ニ貨舊門一、向レ聲背レ實、買レ昏爲レ榮耶、太上立レ德、其次立レ功、其次立レ言、其次有レ爵、爲ニ公卿大夫一、世世不レ絶、謂ニ之門戶一、今皆反レ之、豈不レ惑耶と、

【題義】陳季常は自から方山子と號す、陳公弼の子、是の人の蓄藏する朱陳邨嫁娶圖に題せるもの、

【詩意】何れの年にか顧か陸かが丹青の手を揮ひしものぞ、畫き作す朱陳嫁娶の圖を、我は舊くから聞いて居る此の邨は朱と陳との兩姓のみにて、門戶を高めんと金權ある崔盧を買はないと、

〔二〕

我是朱陳舊使君。　我は是朱陳の舊使君、
【自注】朱陳邨在ニ徐州豐縣一。
勸農曾入杏花邨。　勸農曾て入る杏花邨、
而今風物那堪レ畫。　而今風物那ぞ畫くに堪へん、
縣吏催レ錢夜打レ門。　縣吏錢を催して夜門を打く、

【字解】〔一〕舊使君　公曾て徐州の知と爲る、〔二〕杏花邨　朱陳邨の鄰邨である、〔三〕催錢　韓退之の詩、門外唯有レ吏、日來徵レ租更索レ錢と、

【詩意】我は朱陳邨の州の舊使君である、農事を勸說して曾て杏花邨まで往いた、而るに只今の風物は那ぞ畫圖と爲すに堪へんや、縣吏が錢租を催促して夜中に門を打くの狀を、

【餘論】公が山邨の詩、無レ象太平還有レ象、孤煙起處是人家、而今風物那堪レ畫、縣吏催レ錢夜打レ門、共に是奸黨の詩案と爲るもの、公の苦しめらるるも是が爲め、公の貴きも亦是が爲である、紀曰く二首皆淺直と、淺直を知りつつ公は作れるものである、杜荀鶴の再經ニ胡城縣一の詩、去歲曾經ニ此縣城一、縣民無ニ口不一レ冤聲、今來縣宰加ニ朱紱一、便是生靈血染成、公に較ぶれば更に淺直である、

少年時嘗過一郡院。見壁上有詩云。夜涼疑有雨。院靜似無僧。不知何人詩也。宿黃州禪智寺。寺僧皆不在。夜半雨作。偶記此詩。故作一絕。

少年の時嘗て一郡院を過ぐ、壁上を見れば、詩あり云ふ、夜涼しうして雨あるかと疑ひ、院靜かにして僧無きに似たり、何人の詩なるを知らざるなり、黃州の禪智寺に宿す、寺僧皆不在、夜半雨作る、偶ま此の詩を記す、故に一絕を作る、

佛燈漸暗饑鼠出。
山雨忽來修竹鳴。
知是何人舊詩句。
已應知我此時情。

佛燈漸く暗くして饑鼠出で、
山雨忽ち來りて修竹鳴く、
知る是何人の舊詩句、
已に應に我が此の時の情を知るなるべし、

【詩意】佛前の燈火が暗からんとする時飢鼠が出で來る、山雨が來るは修竹の鳴くので判る、曾て讀みし詩句は、何人の作なるかを知らないが、我が今夜此の古寺に宿する情を知つて作りしものかと思はる、

定惠院寓居。月夜偶出

定惠院寓居、月夜偶ま出づ

幽人無事不出門。
偶逐東風轉良夜。
參差玉宇飛木末。
繚繞香煙來月下。
江雲有態清自媚。
竹露無聲浩如瀉。
已驚弱柳萬絲垂。
尙有殘梅一枝亞。
清詩獨吟還自和。
白酒已盡誰能借。
不惜青春忽忽過。
但恐歡意年年謝。
自知醉耳愛松風。

幽人無事門を出です、
偶ま逐ふ東風の轉た良夜を、
參差として玉宇木末に飛び、
繚繞たる香煙月下に來る、
江雲態あり淸くして自から媚び、
竹露聲無く浩として瀉ぐが如し、
已に驚く弱柳の萬絲垂るるを、
尙ほ殘梅一枝の亞ぐあり、
淸詩獨吟して還た自から和し、
白酒已に盡きて誰か能く借さん、
惜しまず靑春の忽忽過ぐるを、
但恐る歡意年年謝するを、
自から知る醉耳の松風を愛するを、

【字解】【一】良夜　古注に良猶深也とあり、【二】參差　不齊貌、【三】玉宇　「拾遺記」に瓊樓玉宇と、玉にて飾る屋宇、【四】木末　杜子美の詩、我僕猶木末と、木杪と同じ、木のコズヱ、【五】繚繞　「張平子南都賦」に、修袖繚繞而滿庭と、【六】弱柳　初春に柳の芽を出したるを言ふ、李太白の詩、河堤弱柳鬱金枝と、【七】亞　次ぐと同じ、【八】忽忽　「賈誼惜誓篇」に、儵忽忽而不反と、劉向の「九歎」に、年忽忽而日度と、倏忽である、又ウツカリと日の過ぎ去るを言ふ、【九】愛松風　「南史」に、陶宏景、特愛松風、庭院皆植松、每聞其響、欣然爲樂と、【一〇】浮浮　「毛詩」に、蒸之浮浮と、【一一】炊玉　杜子美の詩、玉粒足晨炊と、【一二】溜溜　李頎遣

會揀霜林結茅舍。　會ま霜林を揀んで茅舍を結ぶ、
(一〇)浮浮大甑長(一一)炊玉。　浮浮大甑長く玉を炊ぎ、
(一二)溜溜小槽如(一三)壓蔗。　溜溜小槽蔗を壓するが如し、
飲中眞味老更濃。　飲中の眞味老いて更に濃か、
醉裏狂言醒可怕。　醉裏の狂言醒めて怕るべし、
(一四)閉門謝客對妻子。　門を閉ぢ客を謝して妻子に對す、
倒冠落佩從嘲罵。　冠を倒し佩を落して嘲罵に從す、

【題義】黄州の定慧院に寓居中、明月の夜に乘じて出游して作るもの、

【詩意】幽人無事にして寺門を出づることが無い、偶ゝ東風の轉た良夜を逐うて出づ、參差として玉宇は木末に飛ぶの狀を爲し、繚繞する香煙は月下に散じ來る、江雲は種種變態して淸うして且自から媚ぶる如くである、竹露は聲無く浩として瀉ぐが如くである、已に驚く弱柳の條條萬絲垂るるに、其の間に尙ほ殘梅の一枝が開き亞ぐあるを、淸詩を獨吟して還た自から之を和す、白酒は已に飲み盡くるも誰か更に一杯を借すものぞ、惜まない青春の忽忽と過ぎ去ることを、但恐る歡意の年年に衰謝することを、自から知る醉耳の松風を愛聽するを、會ま霜林を揀んで茅舍を結ぶは松風の爲めである、大甑に浮浮たる氣あるは玉粒を炊ぐのである、小槽に溜溜たるは蔗を壓する爲めである、飲中の眞味は老いて更に濃かなるを喜ぶも、醉裏の狂言は醒後大に怕るるものがある、門を閉ぢて客を謝し但妻子に對するのみなれば怕るる筈がない、冠を倒にし佩を落して妻子等の嘲罵に從すのである、

【餘論】紀曰く第三句參差玉宇飛木末、突出無根、若非題目分明、則上二句、似是舊句矣と、又曰く句句對仗、於後世爲別調、然却是齊梁唐人之舊格と、案ずるに昔年枕山先生が湖山と不忍池に會合して、各の此の詩に次して作り、當時文壇の盛事でありしことを聞く、詩は枕山詩鈔初篇中に在り、

の詩、缺簷溜溜垂と、水のシタタ、
【一三】如壓蔗　「智藏經」に、譬如甘蔗既被壓、已滓無餘味と、
【一四】閉門　「史記市公傳」に、公歸晉、終身不出門、復謝絶賓客と、

## 次韻前篇

前篇に次韻す

去年花落在徐州。　去年花落ちて徐州に在り、
對月酣歌美(一)淸夜。　月に對して酣歌淸夜を美む、
【自注】去年徐州花下對月、與張師厚王子立兄弟飲酒、作繖字韻詩。
今年黄州見花(三)發。　今年黄州花の發くを見る、
小院閉門風露下。　小院門を閉ぢて風露下る、
萬事如花不可期。　萬事花の如く期すべからず、

【字解】【一】徐州　公の自注に去年徐州花下對月、與張師厚、王子立兄弟飲酒、作繖字韻詩と、
【二】淸夜　陶淵明の詩、佳人美淸夜、達曙酣且歌と、
【三】花發　杜子美の詩、獨樹花發自分明と、
【四】巴峽　湖北巴東縣の西二十里に在る、江が巫山より巴東に入るを巴峽と爲す、
【五】樊口　公自注に

餘年似酒那禁瀉。　餘年酒に似て那ぞ瀉ぐに禁へん、

憶昔扁舟泝巴峽(四)。　憶ふ昔し扁舟巴峽に泝り、

落帆樊口(五)高桅(六)亞。　落帆樊口高桅亞ぐ、

【自注】樊口在黃州南岸。

長江袞袞空(七)自流。　長江袞袞空しく自から流る、

白髮紛紛寧少借。　白髮紛紛寧ろ少くも借さん、

竟無五畝繼汨(八)溺。　竟に五畝の汨溺に繼ぐなし、

空有千篇凌鮑(九)謝。　空しく千篇の鮑謝を凌ぐあり、

至今歸計負雲山。　今に至りて歸計雲山に負く、

未免孤衾眠客舍。　未だ免れず孤衾客舍に眠るを、

少年辛苦眞食(一〇)蓼。　少年辛苦眞に蓼を食ひ、

老境安閒如啖(一一)蔗。　老境安閒蔗を啖ふが如し、

饑寒未至且安居。　饑寒未だ至らず且安居す、

憂患已空猶夢怕。　憂患已に空し猶ほ夢に怕る、

在黃州南岸」と、【六】高桅 韓退之の詩、「大帆夜劃窮高桅」と、桅は船竿、カザ、【七】空自流 李太白の詩、「日暮長江空自流」と、【八】汨溺 長沮と桀溺、【九】鮑謝 鮑照と謝朓、【一〇】食蓼 白樂天の詩、「何異食蓼蟲、不知苦是苦」と、【一一】啖蔗 韓退之の詩、「初味猶啖蔗」と、【一二】官長罵 杜子美の詩、「醉則騎馬歸、頗遭官長罵」と、



穿花踏月飲郇酒。　花を穿ち月を踏み郇酒を飲み、

免醉歸遭官(一二)長罵。　醉歸して官長の罵るに遭ふを免る、

【詩意】去年花落ちるの春晩には徐州に在住して、月に對して酣歌して淸夜を賞美した、今年は黃州に在住して春初に花の發くのを見る、小院門を閉ぢて風露が自然と下る、萬事花の如く期を定むることが出來ない、我が餘年は酒に似て那ぞ瀉ぐに禁へんや、記憶する昔日扁舟に乘じて巴峽に泝りしこ とを、帆を樊口に落して高桅が亞ぐ、長江は日夜に袞袞として流れるも、白髮も亦刻刻に紛紛と增して天は人の爲め少しも假借しない、而かも歸らんと思ふに五畝の田を耕せる汨溺程の地を有しない、唯飢を救はざる千篇が鮑謝を凌ぐの槪あるのみ、是の故に今に至るまで歸計は雲山に負きつつある、まだ免れぬ旅寓に於て孤眠するを、少年の辛苦は眞に蓼を食ふの苦を嘗める、老境の安閒なることは蔗を啖ふ如く甘い、幸に飢寒が未だ身に至らず且安居する、憂患は已に空と爲るも猶ほ夢に怕るることがある、花を穿ち月を踏んで郇酒を飲み、醉歸するも官長の罵りに遭ふことを免れるを喜ぶ、

【餘論】査初白云ふ、「兩篇曲折淸眞、自成風格、與定慧院、海棠詩、各極其妙」と、紀曰く、「淸峭不減前篇」と、

## 安國寺浴

安國寺に浴す

老來百事懶。身垢猶念浴。　老來百事懶し、身垢けば猶ほ浴を念ふ、

衰髮不到耳。尙煩月一沐。　衰髮耳に到らざるも、尙ほ煩はす月に一沐を、
山城足薪炭。煙霧蒙湯谷。(一)　山城薪炭足る、煙霧湯谷に蒙し、
(二)塵垢能幾何。(三)翛然脫羈梏。　塵垢能く幾何ぞ、翛然羈梏を脫す、
(四)披衣坐小閣。(五)散髮臨修竹。　衣を披きて小閣に坐し、髮を散じて修竹に臨む、
心困(六)萬緣空。身安(七)一牀足。　心困萬緣空し、身安んじて一牀足る、
豈惟忘淨穢。兼以洗榮辱。　豈惟淨穢を忘るるのみならん、兼ねて以て榮辱を洗ふ、
默歸(八)毋多談。此理觀要熟。　默歸して多談すること毋れ、此の理觀要熟せよ、

【字解】【一】湯谷 「山海經」に、黑齒國有湯谷と、【二】塵垢 「莊子達生篇」に、彷徨乎塵垢之外と、【三】翛然 「莊子大宗師篇」に、翛然而往、翛然而來と、飛ぶ駄の疾きを言ふ、【四】披衣 庾開府の詩、阮籍披衣進と、杜子美の詩、只作披衣慣と、衣を著する意ではなく、衣裝を嚴にせざるを言ふ、【五】散髮 嵇叔夜の詩、采薇山阿、散髮巖岫と、【六】萬緣空 白樂天の詩、萬緣一成空と、【七】一牀足 盧仝の詩、四肢安穩一張牀と、【八】毋多談 漢揚惲の書、願勉旃毋多談と、

【題意】黃州の安國寺に在りて入浴せる詩である、

【詩意】老來百事皆懶い、然れども身に垢が著けば入浴することは念ふ、衰髮が耳の邊までは垂れないが、月一度は之を沐することをする、水を變じて湯と爲す原料は山城に薪炭が十分に在る、乃ち湯を沸かす爲め煙霧の氣が湯谷に蒙蒙とあがる、浴して以て洗ひ去る塵垢は幾何かは知らないが、一洗後は翛然として羈梏を脫するの思ひがある、浴後は衣を披いて小閣に坐し、散髮のままにて修竹に對すれば、心困萬緣一切空と爲る、安身は一牀にて足る、豈惟淨も穢も忘るるのみでない、榮も辱も總て以て忘却する、默歸して多談してはいかぬ、此の一默の理は觀察の要心熟すれば判る、

【餘論】公の作として可も無く不可も無きものに屬す、

## 安國寺尋春　　安國寺に春を尋ぬ

臥聞(一)百舌呼春風。　臥して聞く百舌の春風に呼ぶを、
起尋(二)花柳郁郁同。　起つて花柳を尋ぬれば郁郁同じ、
城南古寺修竹合。　城南の古寺修竹合し、
小房曲檻敧深紅。　小房曲檻深紅敧つ、
看花(三)歎老憶年少。　花を看て老を歎じ年少を憶ふ、
對酒思家(四)愁老翁。　酒に對し家を思ひ老翁を愁ふ、
病眼不羞(五)雲母亂。　病眼羞ぢず雲母の亂るるに、
(六)鬢絲强理茶煙中。　鬢絲强理す茶煙の中、

【字解】【一】百舌 百舌は一名伯勞、モズ、杜子美の詩、赤葉楓林百舌鳴と、【二】花柳 杜子美の詩、步履隨春風、郁郁自花柳と、鮑照の詩、春風太多情、郁郁花柳好と、【三】歎老 顧況の詩、拭淚看花奈老何と、歐陽公の詩、插花不插兒女花、老大安能逐年少と、【四】愁老翁 杜子美の詩、偏勸腴腆餽年少、軟炊香飯緣老翁と、【五】雲母 キララ、本草に雲母片、有絕大而瑩潔者、今人或以飾燈

遙知二月王城外。(七)　遙かに知る二月王城の外、
(八)玉仙(九)洪福花如海。　玉仙洪福花海の如し、
薄羅匀霧蓋新妝。(一〇)　薄羅匀霧蓋し新妝、
(一一)快馬爭風鳴雜珮。　快馬風を爭ひ雜珮鳴る、
玉川先生眞可憐。　玉川先生眞に憐む可し、
(一二)一生耽酒終無錢。　一生酒に耽りて終に錢無し、
病過春風九十日。　病過春風九十日、
獨抱添丁(一三)看花發。　獨り添丁を抱きて花の發くを看る、

傷、亦古詞騒風之遺意也と、【六】鬢絲 杜牧之の詩、今日鬢絲禪榻畔、茶煙輕颺落花風と、【七】王城 開封を指す、【八】玉仙 觀の名【九】洪福 寺の名、古注に、仙觀在京城宣化門外、有陳道士者、修葺亭臺、栽種花木甚盛、洪福寺、在京師、「汴京遺跡志」に、洪福寺有二、其一在開封城西、金水河北、其一在東北汐窩岡」と、【一〇】新妝 徐俳妻劉氏の詩、落日更新妝と、【一一】快馬 「南史、曹景宗傳」に、騎快馬如龍、覺耳後生風、鼻頭出火と、【一二】一生 盧全の詩、天下薄夫苦耽酒、玉川先生也耽酒、薄夫有錢恣長樂、先生無錢養淸泊、有錢無錢俱可憐、百年驟過如流川と、【一三】添丁 盧全添丁の詩、春風苦不仁、呼逐馬蹄行人家、慚愧瘴氣却、憐我入我憔悴骨中、爲生涯、數日不食强强行、何忍索我抱看滿樹花と、添丁は自分の子を卑下して言ふ、盧仝は其の子を添丁と名づく、公は其の子、過を伴うて遊んだのである、

【詩意】臥し乍ら百舌の春風に呼び噪ぐのを聞き、起つて花や柳を尋ぬれば邨邨が皆同じく春を裝うて居る、城南の安國古寺は特に修竹が合圍して、小房も曲檻も修竹の間に花が深紅を皷ててある、是の花を看て忽ち老を歎じ年少の好きを憶ふ、酒に對すれば忽ち家を思ふ念が起りて老翁を愁ふるに至る、病眼は雲母が紛亂すと認めても羞とはしない、鬢絲は强ひて茶煙の中に處理する、是に於て遙かに想ひ知る二月王城の外を、玉仙觀も洪福寺も花が海の如く盛開であらう、之を看んとする兒女等は薄羅が匀しく霧の如く見ゆる新妝を凝らすであらう、又子弟等は快馬を馳せて雜珮を鳴らすの賑やかであらう、玉川先生は獨り唯眞に憐むべく、一生酒に耽りて終に錢無きに至る、病過して春風九十日、獨り添丁を伴ひ抱きて花の發くを淋しく看るのである、

【餘論】紀は臥聞以下の四句を評して起有神致と、又以後半文意推之、題下當有寄某人、或懷某人字と、盧仝を出して結尾を收むる所に據つて案ずれば、紀の言は眞に當る、

## 寓居定惠院之東。雜花滿山。有海棠一株。土人不知貴也

寓居定惠院の東、雜花山に滿つ、海棠一株あり、土人貴きを知らざるなり

江城地瘴蕃草木。(一)　江城地瘴なるも草木蕃す、
只有名花苦幽獨。(二)　只名花の幽獨に苦むあり、
(三)嫣然一笑竹籬間。　嫣然一笑す竹籬の間、
桃李漫山總麤俗。(四)　桃李漫山總て麤俗、
也知造物有深意。　也知る造物の深意あるを、

【字解】【一】蕃草木 「易」に天地變化草木蕃と、【二】幽獨 「楚辭」に、吾生之無樂兮、幽獨處乎山中と、【三】嫣然 「宋玉好色賦」に、東家之子、嫣然一笑と、【四】麤俗 王禹偁の詩、桃李拼門是俗材と、【五】佳人 杜子美の詩

故遣(五)佳人在空谷。
自然富貴(六)出天姿(七)。
不待金盤薦華屋。
(八)朱脣得酒暈生臉。
翠袖卷紗紅(九)映肉。
林深霧暗曉光遲。
日暖風輕春睡足(一〇)。
雨中有淚亦悽愴。
月下無人更清淑。
先生食飽無一事。
散步逍遙自捫(一一)腹。
不問人家與僧舍。
拄杖敲門看(一二)修竹。
忽逢絕艷照衰朽。

故に佳人をして空谷に在ら遣む、
自然の富貴天姿に出づ、
金盤華屋に薦むるを待たず、
朱脣酒を得て暈臉に生ず、
翠袖紗を卷きて紅肉に映ず、
林深く霧暗くして曉光遲し、
日暖かに風輕くして春睡足る、
雨中涙あり亦悽愴、
月下人無く更に清淑、
先生食飽きて一事無く、
散步逍遙して自から腹を捫づ、
問はず人家と僧舍とを、
拄杖門を敲き修竹を看る、
忽ち逢ふ絕艷の衰朽を照らすを、

絕代有佳人、幽居在空谷と、【六】富貴　杜子美の詩、一種是春長富貴と、【七】天姿　潘正叔の詩、徒美天姿茂と、【八】朱脣　鮑照の歌、朱脣動、素袖擧、洛陽少童邯鄲女と、【九】紅映肉　杜子美の詩、紅顏白面花映肉と、【一〇】春睡足　「明皇雜錄」に、上皇嘗登沈香亭、召妃子、妃子時卯酒未醒、高力士、從侍兒扶掖而至、上皇笑曰、豈是妃子醉耶、海棠睡未足耳と、【一一】捫腹　「孫眞人養生訣」に、食了行百步、數以手摩肚と、【一二】看修竹　「南史袁粲傳」に、家居負郭、每杖策逍遙、當其得意、悠然忘返、郡南一家、頗有竹石、粲率爾步往、亦不通主人、直造竹所、嘯咏自得と、【一三】揩　揩擦、揩拭、目をぬぐふ、【一四】銜子　「施注」に、海棠性便冷濕、蜀之瀕錦江爲多者、

歎息無言揩(一三)病目。
陋邦何處得此花。
無乃好事移西蜀。
寸根千里不易致。
(一四)銜子飛來定鴻鵠。
(一五)天涯流落俱可念。
爲飲一樽歌此曲。
明朝酒醒還獨來。
雪落紛紛那忍觸。

歎息無言病目を揩ふ、
陋邦何れの處にか此の花を得る、
乃ち好事の西蜀より移す無からんや、
寸根千里致し易からず、
子を銜んで飛來定んで鴻鵠、
天涯流落俱に念ふ可し、
爲めに一樽を飮んで此の曲を歌ふ、
明朝酒醒め還た獨來せば、
雪落ち紛紛那ぞ觸るるに忍びん、

蓋以鳥雀啄呑其子、隨糞拋擲、往往叢生、第不見之傳記、姑存之以俟知者と、【一五】天涯　白樂天の詩、同是天涯淪落人と、

【題義】寓居せる定惠院の東に種種の花が山に滿ち、中に海棠が一株あるも、其の土地の人は其の貴重なるを知らない、是に於て此の詩を賦して其の貴重なる花なるを知らしむ、

【詩意】江城の地は瘴霧多きも草木は蕃殖する、凡草以外に名花一株が幽獨に苦しむ、而かも嫣然として竹籬の間に一笑する、桃花や李花は滿山なるも總て麤俗極まる、也知る造物者は深意のあることを、是の故に佳人をして此の空谷に在らしめたのである、空谷に居りながら自然の富貴は其の天姿に

備へ出してある、金盤に盛りて華屋に薦むるを待つて居ない、朱脣は酒を得て暈が臉に生ずるを見る、又見る翠袖が紗を卷いて紅肉に映ずるを、林深く霧暗くして曉光は遲い、日暖かに風輕うして春睡足るが如くである、雨中に淚あるは悽愴の氣を覺える、月下に人無ければ更に淸淑である、先生食飽けば其の餘に一事も無い、山中を散步逍遙して自から腹を捫でるのみ、行く先は普通の人家も僧寺も擇ばない、拄杖して門を敲き修竹を看る、今忽ち名花の絕艷が我が衰朽の身を照らすに逢うて、歎息して無言病目を揩うて見る、邊陋の邦何れの處にか此の花を得たるや、是は好事の者が西蜀より移したものでなからうか、寸根なるも千里は容易に致すことが出來ない、思ふに子を銜んで飛び來る鴻鵠の致す所であらう、然らば我も鄕里は君と同じければ、天涯流落の感は君の爲めには念はざるを得ない、之が爲めに一樽を飮んで此の歌曲を歌ふ、明朝に達して酒醒めて還た獨來すれば、花が雪の如く散落して紛紛たらんか那ぞ之に觸るるに忍びんや、

【餘論】此の篇は公が集中の傑作に屬するものにて古今讚評頗る多い、紀は曰く純以海棠自寫風姿高秀、興象深微、後半尤煙波跌宕、此種眞非東坡不能、非一時興到亦不能と、査初白云ふ、讀前半覺似海棠曲矣、妙在先生食飽一轉、此種詩境、從少陵樂游園歌得來、寓其神理而化其畦畛、故爲絕唱と、魏淳甫の「詩人玉屑」に、坡海棠詩、辭格超逸、不復踏襲前人、平生喜爲人寫、蓋人間刊石者、自有五六本云、軾生平得意詩也と、

## 次韻樂著作野步

樂著作が野步に次韻す

老來幾不辨西東(一)。　老來幾んど西東を辨せず、
秋後霜林且強紅(二)。　秋後の霜林且強紅、
眼暈(三)見花眞是病。　眼暈して花を見る眞に是れ病ひ、
耳虛聞蟻定非聽。　耳虛にして蟻を聞く定んで聽にあらず
酒醒不覺春強半(四)。　酒醒めて覺えず春強半なるを、
睡起常驚日過中。　睡起常に驚く日中を過ぐ、
植杖(五)偶逢爲黍客。　杖を植てて偶ま逢ふ黍を爲るの客、
披衣(六)閒詠舞雩風。　衣を披きて閒に詠ず舞雩の風、
仰看落蘂收松粉。　仰ぎ看る落蘂松粉を收むるを、
俯見新芽摘杞叢。　俯して見る新芽杞叢を摘むを、
楚雨還昏雲夢澤。　楚雨還た昏し雲夢澤、
吳潮不到武昌宮(七)。　吳潮到らず武昌宮、

【自注】黃州對岸武昌縣有孫權故宮。

【字解】【一】西東　韓退之の詩、暑不知東西と、【二】強紅　白樂天の詩、醉貌如霜葉、雖紅不是春と、【三】眼暈　「圓覺經」に、病眼認空華と、皮日休の詩、眼暈見雲母、耳虛聞海濤と、【四】強半　白樂天の詩、百年強半時と、【五】植杖　「論語微子篇」に、丈人植其杖而芸、子路拱而立、止子路宿、殺雞爲黍而食之と、【六】披衣　「論語先進篇」に、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸と、【七】武昌宮　公の自注に、黃州對岸、武昌縣有孫權宮と、【八】粗通　粗の字平上の二聲ある、今は上聲にして畧の字の意味に見よ、【九】解組　印綬を解くこと、

廢興古郡詩無數。　廢興古郡詩無數、
寂寞閒窗易粗通。　寂寞閒窗易粗ぼ通す、
解組歸來成二老。　組を解きて歸來二老と成り、
風流他日與君同。　風流他日君と同じからん、

【題義】欒京が著作郎の官の時、野歩の詩を示さる、之に次韻して作るもの、

【詩意】老來幾んど路の西東を辨せられざるに至る、而かも野に出て見れば秋後の霜林は且強紅なるを覺ゆ、眼が眩暈して花も無きに花と見るは眞に是れ眼病なればである、耳は虛なるに蟻の音がすると聞くは耳が聰でない故である、酒醒めて覺えず春は已に强半であるを、睡より起きて常に驚く日が已に午中を過ぎて居るに、郊に向つて杖を植てて偶ま黍を爲る者に逢ひ、又衣を披きて閒に詠ずる舞雩の風に、仰ぎて落蘂を看れば松粉は已に收まる、俯して新芽を見て杞叢を摘む、楚雨霏霏として昏きは雲夢澤である、吳潮は湃湃たるも武昌宮に到らない、或は廢或は興の古郡は詩無數である、寂寞たる閒窗に在つては易理に粗ぼ通じて居る、組を解いて歸來せば二老と成りて、風流の游他日君と同じきを期したい、

【餘論】七言の長律は公が得意にあらざることは集中に其の數の少きにても分る、而かも此の篇の如き、後世作家の亦及ぶべからざるを知る、楚雨吳潮の二句は余は少年時から愛誦せる句である、

# 二月二十六日。雨中熟睡。至晩强起出門。還作此詩。意思殊昏昏也。

二月二十六日雨中熟睡し、晩に至りて强ひて起つて門を出で、還た此の詩を作る、意思殊に昏昏なり

卯酒困三杯。午餐便一肉。(一)(二)　卯酒三杯に困み、午餐便ち一肉、
雨聲來不斷。睡味淸且熟。　雨聲來りて不斷、睡味淸うして且熟す、
昏昏覺還臥。展轉無由足。(三)　昏昏覺めて還た臥し、展轉足るに由なし、
强起出門行。孤夢猶可續。　强ひて起つて門を出でて行く、孤夢猶ほ續ぐ可し、
泥深竹雞語。邨暗鳩婦哭。(四)(五)　泥深くして竹雞語る、邨暗くして鳩婦哭し、
明朝看此詩。睡語應難讀。　明朝此の詩を看れば、睡語應に讀み難かるべし、

【字解】【一】卯酒　白樂天の詩、空腹三杯卯後酒と、朝飲む酒を言ふ、【二】午餐　白樂天の詩、午餐何所有、魚肉一兩味と、【三】展轉「毛詩」に展轉反側と、【四】竹雞「洞冥記」に、竹雞似鷓鴣と、ケバシギと稱する鳥、「遯齋閒覽」に、白蟻聞竹雞之聲、盡化爲水、今在處山林多有之、其聲自呼爲泥滑滑者是也と、【五】鳩婦哭　歐陽修の詩、鳴鳩逐婦鳴中林、鳩婦怒啼無好音と、

【詩意】卯酒は三杯飲んで困迷する、午餐は便ち一菜にて止む、雨聲來りて不斷、睡味は淸うして且酣熟する、昏昏として覺めて還た臥す、展轉反側して滿足して眠るに由がない、强ひて起床して門を

出て行くも、孤夢猶は繼續するかと覺ゆ、泥は深く竹雞は鳴いて語るが如く、邨暗くして鳩婦は鳴いて哭する如くである、明朝に及んで此の詩を看れば、睡語なれば恐らくは讀み難いであらう、

## 雨晴後。歩至四望亭下魚池上。遂自乾明寺前東岡上歸。二首

雨晴れて後、歩して四望亭下の魚池の上に至り、遂に乾明寺前の東岡上より歸る　二首

雨過浮萍合。蛙聲滿四鄰。　雨過ぎて浮萍合し、蛙聲四鄰に滿つ、

海棠眞一夢。梅子欲嘗新。　海棠眞に一夢、梅子新を嘗めんと欲す、

拄杖閒挑菜。(一)鞦韆不見人。　杖を拄いて閒に挑菜、鞦韆人を見ず、

殷勤木(二)芍藥。獨自殿(三)餘春。　殷勤なるは木芍藥、獨り自から餘春に殿す、

【字解】(一)鞦韆　秋千とも書く、俗にブランコと稱する游戲、「古今藝術圖」に鞦韆北方山戎之戲とあれば、戎人より始まりしものである、富豪の庭院には必ず之を設けてある、(二)木芍藥　牡丹を唐代稱して言ふ、(三)殿餘春　「論語註」に、在軍前曰啓、在後曰殿と、

【題義】雨後に四望亭址の下の魚池の上に至り、それより乾明寺前の東岡上に路を取りて歸り、此の間の所見を賦したのである、

【詩意】雨過ぎて後池中の浮萍が一所に合する、而して蛙聲は閣閣と四鄰に滿ちて居る、海棠も已に飛散して一夢と爲る、梅子は漸く熟して嘗めんとする節と爲る、杖を拄いて閒に菜花を挑弄する、鞦韆を認め得たるも人の游戲する者はない、詩人に對して殷勤なるは唯木芍藥である、羣花散する後獨り自から餘春を飾りて居る、

〔二〕

高亭廢已久。下有種魚塘。　高亭廢すること已に久し、下に種魚塘あり、

暮色千山入。春風百草香。　暮色千山に入り、春風百草香し、

市橋人(一)寂寂。古寺竹蒼蒼。　市橋人寂寂、古寺竹蒼蒼、

鸛鶴來何處。號鳴滿夕陽。　鸛鶴何れの處より來る、號鳴夕陽に滿つ、

【字解】(一)人寂寂　李義山の詩、改成人寂寂と、

【詩意】高亭は廢後已に久しい、廢せずして存するものは亭下の種魚塘である、此の處に到るころは暮色が千山に入るころである、が猶ほ春風は百草の香を吹いて居る、市橋の方を見れば人は寂寂である、古寺を認め得たるも是も竹の蒼蒼たるを見るのみ、時に鸛鶴は何れの處より飛來するやを知らざるが、號鳴する聲が夕陽に滿ちて居る、

【餘論】紀曰く、格在唐宋之間、寓意遲暮と、第二首を評して此首純乎杜意、結尤似と、木芍藥と

鶴鶴を以て自から況する所、公が高きを見るべく、亦以て尊大なるも知らる、

## 雨中看牡丹三首　雨中牡丹を看る　三首

霧雨不成點。映空疑有無。　霧雨點を成さす、空に映じて有無を疑ふ、

時於花上見。的皪走明珠。　時に花上に於て見る、的皪として明珠を走らす、

秀色洗紅粉。暗香生雪膚。　秀色紅粉を洗ひ、暗香雪膚に生す、

黃昏更蕭瑟。頭重欲相扶。　黃昏更に蕭瑟、頭重くして相扶けんと欲す、

【字解】〔一〕霧雨　「古列女傳」陶荅子妻云、豹藏霧雨と、俗に稱するキリアメ、〔二〕映空　杜子美の詩、鳴雨旣過漸細微、映空搖颺如絲飛と、〔三〕暗香　白樂天の詩、風薰颺暗香と、〔四〕頭重　杜牧之の詩、醉頭扶不起、三丈日還高と、

【詩意】絲より細かなる雨は地に點することが無い、空に映ずるも其の影有るや無やを疑ふ程である、時に牡丹花上に於て見れば、花が的皪として明珠を走らす如きを認む、秀色は紅粉を洗ふ如くである、而かも暗香は雪の如き白膚より生ずるを知る、黃昏に到りて更に花容が蕭瑟たるを覺ゆ、頭重くして低るるを相扶けたいと思ふ、

〔二〕

明日雨當止。晨光在松枝。　明日雨當に止むべし、晨光松枝に在り、

清寒入花骨。肅肅初自持。　清寒花骨に入り、肅肅初めて自から持す、

午景發濃艷。一笑當及時。　午景濃艷發き、一笑當に時に及ぶべし、

依然暮還斂。亦自惜幽姿。　依然暮に還た斂む、亦自から幽姿を惜む、

【字解】〔一〕花骨　李賀の詩、天遣裁詩作花骨と、〔二〕當及時　古詩に、成歡當及時と、〔三〕惜幽姿　謝靈運の詩、潛蚪媚幽姿と、

【詩意】明日は雨當に止むべしと思ふ、晨光は已に松枝に在るを知る、一味の清寒は花骨に逗入して、肅肅として人の扶けを待たず初めて自から姿を持す、午景に及ぶ頃は愈よ濃艷を發して、嫣然として一笑其の時を得意とするであらう、而かも依然たるは暮に到り還た姿を斂め、亦自から其の幽姿を惜む如くである、

〔三〕

幽姿不可惜。後日東風起。　幽姿惜しむ可からず、後日東風起らん、

酒醒何所見。金粉抱青子。　酒醒めて何の見る所ぞ、金粉青子を抱く、

千花與百草。共盡無妍鄙。　千花と百草と、共に盡きて妍鄙無し、

未忍汚泥沙。牛酥煎落蘂。　未だ忍びす泥沙に汚さるるに、牛酥落蘂を煎る、

【字解】〔一〕金粉 溫庭筠牡丹の詩、曉來金粉覆二庭莎一と、李白の詩、輕如二松花落二金粉一と、花蕊の粉を言ふ、〔二〕牛酥 「馮注」に、孟蜀李昊、每二牡丹花開一、分二遺親友一、以二金鳳箋一、成二歌詩一以致レ之、又以二興平酥一同贈、花謝時煎食レ之と、

【詩意】幽姿は自から惜むは不可、後日には東風が必ず起らん、酒醒めて後何の見る所がある、金粉が已に靑子を抱きて居る、意ふに千花も百草も、盛りを過ぎ更に散盡の後は姸も鄙も共に無い、が其の落片でも泥沙に汚すには忍びない、牛酥を以て其の落蘂を煎じて食はんと思ふ、

【餘論】紀曰く、三首一氣相生、走字似二荷葉一、作二落又綴一卽得、暗香生、不レ似二雨中一、頭重欲二相扶一、景眞而語不レ雅と、要するに公として上乘の詩ではない、

## 次二韻樂著作送一レ酒　樂著作が酒を送るに次韻す

少年多病怯二杯觴一。　少年多病にして杯觴を怯る、
老去方知此味長。　老い去りて方に知る此の味の長きを、
萬斛[一]羈愁都似レ雪。　萬斛の羈愁都て雪に似たり、
一壺春酒若爲[二]湯。　一壺の春酒は若爲なる湯ぞ、

【字解】〔一〕萬斛 「庾開府愁賦」に、唯將二一寸心一、貯二此萬斛愁一と、〔二〕若爲湯 「漢書張宗傳」に、以二張將軍之衆一、當二百萬之師一、猶下以二小雪一投中沸湯上と、

【詩意】少年の時は多病にて杯觴を見るだにも怯れたが、老境に及んで方に知る此の味の長きことを、縱ひ萬斛の羈愁あるも都て雪の如くに消滅する、ハテ一壺の春酒は若爲なる靈湯であるぞや、

【餘論】紀曰く、太凡鄙と、公の詩は一一來歷ありて、一として空腹より出でしものはない、其の來歷を尊重すれば、凡鄙として排斥することは出來ないのである、

## 次二韻樂著作天慶觀醮一　樂著作が天慶觀に醮するに次韻す、

濁世紛紛肯下臨。　濁世紛紛たるに肯て下臨せんや、
夢尋二飛步[一]一五雲[二]深。　夢に飛步を尋ぬれば五雲深し、
無レ因上二到通明殿[三]一。　因無し通明殿に上到するに、
只許二微聞一玉佩音一。　只微しく玉佩の音を聞か許む、

【字解】〔一〕飛步 郭璞の詩、飛步登二玉闕一と、〔二〕五雲 五色の雲、「周禮」に、保章氏以二五雲之物一、辨二吉凶水旱降豐荒之祲象一と、今の句は天仙五雲の坐を言ふ、〔三〕通明殿 王欽若の「翊聖保德傳」に、建隆之初、鳳翔張守眞、游二終南山一、聞三空中有レ召レ之者二、聲甚淸徹、守眞悚聽、數里語云、汝若先行、吾卽在レ後、守眞莫レ測、旣還レ家、又聞二於室中一曰、吾是玉帝輔神、受レ命衛レ時、乘レ龍降レ世、一日守眞、朝二禮玉皇大殿一、覩二其額一、曰二通明殿一、不レ曉二其旨一、因焚レ香告曰、通明之說、竊所レ未レ曉、敢祈二眞敎一、眞君曰、上帝在二無上天一、爲二諸天之尊一、萬象羣仙、無二不レ臣者一、常升二金殿一、殿之光明、照二於帝身一、身之光明、照二於金殿一、光明洞徹、無レ所レ不レ照、故曰二通明殿一、諸天朝謁、仰二覩其殿一、見レ在二光明中一と、

【題義】樂著作が天慶觀に醮して壇を設けて醮禱せる詩に次韻して作る、

【詩意】濁世紛紛として淸澄ならざるに天帝は何ぞ下界に降臨せんや、夢に天帝の飛步を尋ぬれば唯五雲が深く鎻して居る、乃ち凡人は通明殿に上到するに術の因るべきものが無い、只微しく殿閣の玉珮の音を聞かしむるのみである、

# 王齊萬秀才寓居武昌縣劉郎洑。正與伍洲相對。伍子胥奔吳。所從渡江也

王齊萬秀才、武昌縣劉郎洑に寓居す、正に伍洲と相對す、伍子胥吳に奔り、從つて江を渡る所なり

君家稻田冠西蜀。　君が家の稻田西蜀に冠たり、
(一)搗玉揚珠三萬斛。　玉を搗き珠を揚ぐ三萬斛、
塞江(二)流柹起書樓。　塞江流柹に書樓を起て、
(三)碧瓦朱欄照山谷。　碧瓦朱欄山谷を照らす、
(四)傾家取樂不論命。　傾家樂を取り命を論せす、
(五)散盡黃金如(六)轉燭。　黃金を散盡すること轉燭の如し、
唯餘舊書一百車。　唯餘す舊書一百車、
(七)方舟載入荊江曲。　方舟載せて荊江の曲に入る、
江上靑山亦何有。　江上の靑山亦何か有る、
伍洲遙望劉郎藪。　伍洲遙かに望む劉郎藪、

【字解】【一】搗玉　「張融海賦」に、揚珠起玉と、【二】流柹　「晉王濬傳」に、武帝謀伐吳、濬造船於蜀、木柹蔽江而下と、【三】碧瓦　權寄著の詩、曉霜浮碧瓦、薄日度朱欄と、【四】傾家　陶淵明の詩、傾家持作樂、竟此歲月駛と、【五】散盡　李白の詩、黃金散盡還復來と、【六】轉燭　杜子美の詩、萬事如轉燭と、【七】方舟　「莊子山木篇」に、方舟而濟於河と、【八】壓私酒　壓は壓搾にて、オサヘシボルのである、太白の詩、吳姬壓酒喚客嘗と、【九】飲酒　杜子美の詩、何時一樽酒、重與細論文と、【一〇】仲謀　吳主孫權字は仲謀、【一一】公瑾　周瑜字は公瑾、【一二】一酹　酹は酒を地に沃ぎて神を祭る、【一三】英烈君　公の自注、杭州伍子胥廟、封英烈王と、

明朝寒食當過君。　明朝寒食當に君に過ぐべし、
請殺耕牛(八)壓私酒。　請ふ耕牛を殺して私酒を壓し、
與君(九)飲酒細論文。　君と飲酒細かに文を論じ、
酒酣訪古江之濆。　酒酣にして古を訪はん江の濆、
(一〇)仲謀(一一)公瑾不須弔。　仲謀公瑾弔するを須ひず、
(一二)一酹波神(一三)英烈君。　一に波神英烈君に酹せん、
【自注】杭州伍子胥廟封英烈王。

【題義】王齊萬字は文甫、嘉州の人、今は武昌縣の劉郎洑に寓居する、其の劉郎洑は孫權が劉玄德を迎へし地、其の地は春秋の伍子胥が吳に奔らんと欲して、此に來り漁父の爲め船底に隱されて渡りし所である、

【詩意】君が家は稻田を多く所有して西蜀第一であつた、乃ち玉を搗き珠を揚げる三萬斛の巨富である、其の富力を以て江を塞ぐほど木柹を流して以て書樓を起つ、樓の碧瓦朱欄は山谷を照らすの勢である、此の如く一家を傾けて樂を取り命なぞを論せない、黃金を散盡すること輕輕轉燭の如く思ふ、唯餘す所は其の舊藏書が一百車程ある、是の書物を方舟に載せて荊江の曲に入り來る、荊江の上の靑山は亦何か有るぞや、伍洲より遙かに望むは是れ劉郎藪である、幸に明日は恰も寒食の節に當りて君

が家を訪ふべしと思ふ、請ふ耕牛を殺して家造の酒を壓搾し玉へ、君と酒を飲みながら細かに文を論ぜんと思ふ、而して酒が丁度よい時分に江濱に古蹟を訪はん、仲謀や公瑾の靈は弔する必要は無い、唯一に波神である英烈君を酹する、

【餘論】紀曰く、不論命三字太重、殺耕牛語屢見、究非情事、結句寄慨、徒取忠而見謗耳、其實無味と、公は佛教の慈悲を能く知る人、而かも往往に殺牛の語を見る、紀の非情事と評するは洵に然るもの、但首尾中間と次第順序整然として意味一貫せるは取る可きである、

## 杜沂游武昌以酴醾花菩薩泉見餉二首

杜沂、武昌に游び、酴醾花菩薩泉を以て餉らる　二首

(一)酴醾不爭春。寂寞開最晚。　酴醾春を爭はず、寂寞として開くこと最も晚し、
青蛟走玉骨。(二)羽蓋蒙珠幰。　青蛟玉骨を走らし、羽蓋珠幰を蒙る、
(三)不妝艷已絕。(四)無風香自遠。　妝はざるも艷已に絕、風無きも香自から遠し、
(五)淒涼吳宮闕。【自注】武昌有孫權故宮苑。　淒涼たり吳の宮闕、
紅粉埋故苑。　紅粉故苑を埋む、
至今微月夜。笙簫來翠巘。(六)　今に至るまで微月の夜、笙簫翠巘より來る、
餘妍入此花。千載尙淸婉。(七)　餘妍此の花に入り、千載尙ほ淸婉、
怪君呼不歸。定爲花所挽。　怪しむ君が呼べども歸らず、定んで花の挽く所と爲らん、
昨宵雷雨惡。花盡君應返。　昨宵雷雨惡し、花盡くれば君應に返るべし、

【字解】〔一〕酴醾　蔣葉灌木、蔓生にして高さ四五尺、夏初花開く、色酴醾酒に似たるを以て名づく、〔二〕羽蓋「張平子東京賦」に、羽蓋葳蕤と、〔三〕不妝　唐太宗の詩、不妝空散粉と、〔四〕無風　杜子美の詩、無風雲出塞と、〔五〕淒涼　公の自注に、武昌有孫權故宮苑と、〔六〕翠巘「聞見後錄」に、層峯翠巘、效奇於前と、翠色の奇巘を言ふ、〔七〕淸婉「毛詩」に、有美一人、淸揚婉兮と、

【題義】杜沂が武昌に游び、武昌にて得たる酴醾花と菩薩泉の水を餉られたるに對し謝詩を作れるもの、

【詩意】酴醾花は多くの花と春を爭はない、是の故に開くこと最も晚い、其の樹の蔓は青蛟の如く長く且玉骨を走らす狀である、而して羽蓋は珠幰を蒙るが如くである、特に妝はざるも艷は已に絕世である、別に風は無くとも香は自から遠くへ達する、淒涼たるは吳の宮闕の址である、三千の紅粉も故苑に埋めてある、今に至るまで微月の夜は、笙や簫を吹く音が翠巘より來るを聞く、其の紅粉の餘妍が此の花に入る故に、千載尙ほ淸婉なるのである、怪しむ杜君の呼べども歸らざるは、定んで此の花の爲め袖を挽かるる爲めであらう、昨宵は雷雨が惡かつた、花が飛び盡くるは必定、然らば君は返るであらう、

（二）

君言西山頂。自古流白泉。　君は言ふ西山の頂、古より白泉流ると、

上爲千牛乳。下有萬石鉛。　上は千牛乳爲り、下には萬石鉛あり、

不愧惠山味。但無陸子賢。　惠山の味に愧ぢざるも、但陸子の賢無し、

願君揚其名。庶託文字傳。　願はくは君其の名を揚げ、庶ふ文字に託して傳へよ、

寒泉比吉士。清濁在其源。　寒泉は吉士に比す、清濁其の源に在り、

不食我心惻。於泉非所患。　食はざれば我が心惻む、泉に於て患ふる所にあらず、

嗟我本何用。虛名空自纏。　嗟我本と何の用ぞ、虛名空しく自から纏ふ、

不見子柳子。餘愚汚谿山。　見ずや子柳子、餘愚谿山を汚すを、

【字解】【一】西山　「名勝志」に、西山卽樊山、在武昌西三里、孫權嘗獵此山、見一姥、曰、我樊噲母也、饒君伐吳、當助一臂、後果有赤壁之捷、因立廟祀之、以名其山と、【二】陸子賢　「陸羽傳」に、天下水味、以惠山泉爲第二と、【三】寒泉　「毛詩」に、爰有寒泉、在浚之下と、【四】不食　「周易井卦」に、井渫不食、爲我心惻と、【五】子柳子　柳子厚なるや、別人なるや分明でない、施德初の注に、柳子厚、愚溪詩序、山水之奇、以余故、咸以愚辱焉、愚溪對溪之神、夜見夢曰、子幸擇而居予、而辱以無實之名、柳子對曰、汝胡不呼、今之聰明皎厲、握天子有司之柄者、使一經於汝、而惟我獨處、是則汝之實也、神曰、子之愚、何如而可以及我、柳子曰、汝欲窮我之愚說耶、雖竭汝之所往、不足以申吾喙、涸汝之所流、不足以濡吾翰、願以是汚汝可乎、溪神嘆曰、嗟有愉矣、是汚我也と、余柳子厚の愚溪序を讀む、施德初擧ぐるものと全く異なる、姑らく記して一說に備ふるのみ、

【詩意】君は言ふ西山の頂上は、古來より白泉流ると、上は千牛の乳色と爲つて、下は萬石の鉛ありと、泉の味は惠山の泉味に愧ぢざるも、但人は陸子の賢無きを如何せんや、願はくは杜君よ君は其の名を揚げて、白泉を賦する文字に託して名を後世に傳へ玉へ、寒泉を以て吉士に比して言へば、清も濁も皆其の源に在る、食はざるときは我が心惻む、寒泉に於ては何等別に患ふる所は無い、嗟我は本と何の用を爲す者である、虛空のみ空しく自から纏うて居るのみ、君も見ずや彼の子柳子の言を、我が餘愚は畢竟谿山を汚すに過ぎない、

【餘論】紀曰く、移空作、有東坡慣法、至今十字可删、餘妍以下を評して趁手生情、借作縮結、用筆盡便之至と、又曰く、一首以幻語生波、一首以議論見意、章法不苟と、今案するに至今の十字餘韻あるが如くにして、又聊か蛇足の感もある、紀評の如く删去して更に佳なるを覺ゆ、

陳季常自岐亭見訪。郡中及舊州諸豪。爭欲邀致之。戲作陳孟公詩。一首

陳季常、岐亭より訪はる、郡中及び舊州の諸豪、爭うて之を邀致せんと欲す、戲れに陳孟公の詩を作る　一首

（一）

孟公好飲寧論斗。　孟公飲を好み寧ろ斗を論せんや、

【字解】【一】孟公　漢陳遵、字

醉後關門防客走。　醉後關門客の走るを防ぐ、
不妨閒過左阿君。　妨げず閒過す左阿君、
(三)百謫終爲賢太守。　百謫終に賢太守と爲る、
老居閭里自浮(四)沈。　閭里に老居して自から浮沈、
笑問伯松何苦心。　笑つて問ふ伯松何の苦心ぞ、
忽然載酒從陋巷。　忽然酒を載せて陋巷に從ふ、
爲愛揚(五)雄作酒箴。　爲に愛す揚雄が酒箴を作るを、
長安富兒求一過。　長安の富兒一過を求む、
(六)千金壽君君笑(七)唾。　千金君を壽するも君笑唾、
汝家安得客孟公。　汝が家安んぞ得ん孟公を客とするを、
從來只識陳(八)驚坐。　從來只識る陳驚坐、

孟公、性好客、毎會飲、取客車轄投井中、雖有急不得去と、【二】左阿君 「前漢書」陳遵爲河南太守、弟級爲荊州牧、當之官、俱過長安富人故淮陽王外家左氏、飲食作樂、司直陳崇、劾奏陳遵過寡婦左阿君、置酒歌謳、起舞跳梁、頓仆坐上、免歸と、【三】百謫 「前漢書」哀帝末、遵入公府、日出醉歸、曹事數廢、西曹以故事適之侍曹、輒詣寺舍、白遵曰、陳卿今日以某事適、遵曰、滿百乃相聞、故事、有百適者斥、滿百、西曹請斥、大司徒馬宮重遵、謂西曹、此人大度士、奈何以小文責之と、【四】浮沈 「漢書」に、遵少與張竦伯松、相親友、嘗謂竦曰、足下諷誦經書、苦身自約、不敢差跌、而我放意自恣、浮沈俗間、官爵功名、不減於子、而差獨樂、顧不優邪、竦曰、人各有性、長短自裁、子欲爲我亦不能、吾而效子亦敗矣、雖然學我者易持、效子者難將と、【五】揚雄 王楙曰、揚雄作酒箴、以諷諫成帝、事具在遵傳、其中云、酒何過乎、遵大喜、謂張竦曰、吾與爾猶是矣と、【六】千金 「曹植樂府」に、王稱千金壽と、【七】笑唾 劉叉の詩、玉石共笑唾と、【八】陳驚坐 遵所到衣冠懐之、唯恐在後、時列侯有與遵同姓字者、毎至人門曰、陳孟公、坐中莫不震動、既至而非、因號其人曰陳驚坐と、

【題義】陳季常が岐亭より來りて訪はる、季常が此の郡中に至ると聞き傳へて、我も我もと之を招飲せんと爲たは、宛かも漢の陳孟公の事に似たるを以て、戯れに季常を以て今日の孟公と見做して此の詩を作りしものである、

【詩意】孟公は自から酒を飲み亦人にも飲まして升斗など論じない、而かも客の歸り去るを嫌うて之が車轄を投ずるに至る、又酒を飲ます家なら寡婦でも人の細君の家でも關はない、官吏の紀律に背くからとて百謫せらるるも終に賢太守の名を墜さない、老いて閭里に居るも自から浮沈の理を知つて居る、反對にクヨクヨして居る者に問ふ何の爲め苦心するぞと、時あり忽然と酒を攜へて陋巷に從ひ、爲めに愛する揚雄が酒箴を作りて長上を戒むるを、長安の富兒が君の來駕を求めて一過するも、千金の高禮も受けずに君は笑唾する、汝が家は安んぞ孟公を客とすることを得よう、孟公以外の陳驚坐でも招けばそれでよい、

【餘論】紀曰く、太涉輕薄、便非詩品と、學力博大なるが故に、牛溲馬勃、敗鼓之皮、一として詩に入れざるものはない、是の故に動もすれば輕薄に涉り、詩品を損ずること公の常、公が詩を讀む者は細心に注意すべき所である、

## 遊武昌寒溪西山寺

武昌寒溪の西山寺に遊ぶ

(一)連山蟠武昌。翠木蔚樊口(二)。
連山武昌に蟠し、翠木樊口に蔚たり、

我來已百日。欲濟空搔首(三)。
我來りて已に百日、濟らんと欲して空しく首を搔く、

坐看鷗鳥(四)沒。夢逐鸊鷉(五)走。
坐して看る鷗鳥の沒するを、夢は鸊鷉を逐うて走る

今朝橫江來。一葦(六)寄衰朽。
今朝橫江來、一葦衰朽を寄す、

高談破巨浪。飛屨輕重阜。
高談巨浪を破り、飛屨重阜を輕んず、

去人曾幾何。絕壁寒溪吼。
去人曾て幾何ぞ、絕壁寒溪吼ゆ、

風泉兩部(七)樂。松竹三益友(八)。
風泉兩部樂、松竹三益友、

徐行欣有得(九)。芝朮(一〇)在蓬莠(一一)。
徐行して得るあるを欣ぶ、芝朮蓬莠に在り、

西上九曲亭(一二)。衆山皆培塿(一三)。
西九曲亭に上れば、衆山皆培塿、

却看江北路。雲水渺何有。
却つて江北の路を看れば、雲水渺として何か有る、

離離見吳宮(一四)。莽莽(一五)眞楚藪。
離離として吳宮を見る、莽莽として眞に楚藪、

空傳孫郎石(一六)。無復陶公柳(一七)。
空しく傳ふ孫郎が石、復た陶公の柳無し、

爾來風流人(一八)。唯有漫浪叟(一九)。
爾來風流の人、唯漫浪の叟あり、

買田吾已決。乳水(二〇)況宜酒。
買田吾已に決す、乳水況んや酒に宜しきをや、

所須修竹林。深處安井臼。
所須の修竹林、深處に井臼を安んず、

相將踏勝絕。更裹三日粇(二一)。
相將に勝絕を踏み、更に三日の粇を裹まん、

【字解】【一】連山　杜子美の詩、連山抱西南と、【二】樊口　前に辨ず、【三】搔首　「詩」に、愛而不見、搔首踟蹰と、【四】鷗鳥沒　杜牧之の詩、坐盜飛鳥沒と、【五】鸊鷉　クジカ、性臆病、己が影水に映ずるを見て走ると云ふ、【六】一葦　「詩」に、誰謂河廣、一葦杭之と、【七】兩部　「南史」に、孔珪、字德璋、不樂世務、門庭之內、草萊不剪、中有蛙鳴、或問之曰、欲爲陳蕃乎、珪笑答曰、我以此當兩部鼓吹、何必效蕃、王晏嘗鳴鼓吹候之、聞蛙鳴曰、殊聒人耳、珪曰、我聽鼓吹、殆不及此、晏有慚色と、【八】三益友　「論語季子篇」に、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣と、白樂天の北窗三友詩、三友者爲誰、琴罷輒擧酒、酒罷輒吟詩、三友遞相引、循環無已時と、松竹梅を歲寒三友と稱す、公別に梅竹石を三友と稱せる畫贊がある、【九】有得　柳子厚の詩、始至若有得と、【一〇】芝朮　靈芝と蒼朮、【一一】蓬莠　蓬蒿と莠莠、【一二】九曲亭　子由が「九曲亭記」に、子瞻遷於齊安、齊安無名山、而江之南、武昌之間、羊腸九曲、而獲少平、有廢亭焉、其遺址甚狹、不足以席衆客、子瞻與客入山、相與營之、亭成而西山之勝始具と、【一三】培塿　杜子美の詩、高山之外皆培塿と、小阜な培塿と謂ふ、【一四】吳宮　「名勝志」に、吳王避暑宮、在寒溪上、今圓通閣是也と、【一五】莽莽　「離騷」に、孟夏兮草木莽莽と、【一六】孫郎石　「三國志孫策傳」に、袁術嘗嘆曰、使術有子如孫郎、死復何恨と、【一七】陶公柳　「晉書陶侃傳」に、侃鎭武昌、性纖密好問、頗類趙廣漢、嘗課諸營種柳、都尉夏施、盜官柳植之於己門、侃後見、駐車問曰、此是武昌西門前柳、何因盜來此種、施惶怖謝罪と、【一八】風流人　「北史」に、王昕母崔氏、生九子、皆風流醞藉と、【一九】漫浪叟　「唐元結傳」に、自稱浪士と、【二〇】乳水　乳泉なり、【二一】粇　「尙書」に、峙乃粇糧と、唐韻に乾飯屑と、イリゴメ、

【題意】武昌縣の寒溪に在る西山寺に遊び其の風景を敍して作る、

【詩意】連山が高低武昌に至りて蟠屈する、翠木は樊口に當りて蔚薈する、我は此の樊口に來りて已に百日、濟らんと欲して濟らず空しく首を掻く、何の爲す所もなく鷗鳥の沒するを看るのみ、今朝始めて江を横ぎり來りて、一葦の小舟に此の衰朽の身を寄託する、偶ま豪氣を發して高談巨浪を破り、又飛檐層重の高阜を輕んずる、此の處を去りし人は曾て幾何かありしぞ、絶壁の下寒溪が吼ゆる如きを聞く、それは風泉兩部樂である、松竹も亦徒友である、徐徐として行き心に何物か得る有るを欣ぶ、芝朮の如き芳艸が蓬蒿の如き臭艸の中に交りてある、西の方九曲亭に上りて看れば、衆山皆培塿の看がある、却つて來時の江北の路を俯看すれば、雲水渺渺中に何か有るぞ、離離として吳の宮址を見る、莽莽たるものは眞に楚藪である、終古に空しく傳ふるは孫郎石なるも、千秋復た陶公柳は無い、爾來風流人は少く、今日一人漫浪たる此の詩叟あるのみ、田を買うて棲隱の計吾は已に決して居る、乳泉況んや酒に宜しきをや、而して經營せんとする所は修竹林を處理して、其の深處に井臼を置安することである、同調人と相將に此の勝絶の地を踏破するに、更に三日を支へる糗糧を裹まんと思ふ、

【餘論】紀曰く、平敍而自然淸脫、又結末を評して宕逼一層作結、便不板滯と、後世山水を記する者、宜しく法と爲すべきである、

## 西山戲題武昌王居士

西山戲れに武昌の王居士に題す

予往在武昌西山九曲亭上。有題一句。云元鴻横號黃樹峴。九曲亭卽吳王峴山。一山皆槲葉。其旁卽元結陂湖也。荷花極盛。因爲對云。皓鶴下浴紅荷湖。座客皆笑。同請賦此詩。

【訓讀】予往きに武昌の西山九曲亭上に在り、一句を題するあり、云ふ、元鴻横號す黃槲峴、九曲亭は卽ち吳王の峴山、一山皆槲葉、其の旁は卽ち元結陂湖なり、荷花極めて盛ん、因つて對を爲りて云ふ、皓鶴下りて浴す紅荷湖と、座客皆笑ふ、同じく此の詩を賦せんと請ふ、

（一）江干高居堅關扃。　江干の高居堅く扃を關す、
鞬耕躬稼角（二）挂經。　鞬耕躬稼角に經を挂く、
篙竿繫舸（三）菰茭隔。　篙竿舸を繫ぎ菰茭隔り、
笳鼓過軍（四）雞狗驚。　笳鼓軍を過ぎ雞狗驚く、
解襟顧景各（五）箕踞。　襟を解き景を顧みて各の箕踞し、
（六）擊劍（七）賡歌幾擧觥。　劍を擊つて賡歌幾たびか觥を擧ぐ、
（八）荊笄供膾愧（九）攪聒。　荊笄供膾攪聒を愧づるも、
乾鍋更戞甘瓜羹。　乾鍋更戞瓜羹を甘しとす、

【字解】【一】江干　水涯と同じ、江畔を言ふ、【二】角挂經　「漢書・兒寬傳」に、帶經而鋤と、【三】菰茭　菰はマコモ、茭はウマビリ、【四】雞狗驚　杜子美の詩、殺雞到雞狗と、【五】箕踞　「史記刺客傳」に、倚柱而笑、箕踞以罵と、兩足を出して坐る形が箕に似てゐる、【六】擊劍　司馬相如傳の語、【七】賡歌　書經の語、【八】荊笄　荊釵と同じ、愚妻である、【九】攪聒　攪擾聒聒、やかまし、

【題義】西山に於て武昌の王居士に戯れて題して作れるもの、轡に作れる句に元、卽ち黒と黄とがあり、後に荷花を見て、皓と紅との皆色に關する字を用ひしより、座客が皆笑うたのである、

【詩意】江干に臨んで建てる高居は堅く扃扉を關してある、察するに犍牛を引いて耕し躬から稼して牛角に挂經するのであらう、江中を看れば篙竿に舸を繋いで菰茭を隔つてある、笳鼓の聲は軍が定んで過ぎたのであらう雞狗が皆驚く、煩襟を解いて景を顧みつつ各の箕踞して休息する、又劍を擊つて互に賡歌しつつ幾たびか酒觥を擧ぐる、荆笄が馳走する爲め膾を料理するは攪聒を愧ぢざるを得ない、乾鍋が更戛として出來揚がりしものは瓜薬の疎末のもの之を甘しとする、

【餘論】紀曰く、此種不宜入集、不得以王融藉口、王融詩、先不應入集也、皮陸紛紛、更屬雅人所弗道と、「漫叟詩話」に、東坡作吃語詩、山谷亦有戲題詩、二老亦作詩戲耶と、吃はドモリ、「韓非傳」に、爲人口吃、不能道說とありて、要するに次第順序が整然とせず、言ふ所何事たるを解せざるに至る、所謂此等の詩を吃語體と稱するもの、紀曉嵐が雅人所弗道と評したるは當る、此の詩の如き扃も經も九靑なれば八庚に通用することは出來ない、公の集より除き去るべきものである、

## 武昌銅劍歌

武昌銅劍の歌

供奉官鄭文。嘗官於武昌。江岸裂出古銅劍。文得之以遺余。冶鑄精巧。非鍛冶所成者。

【訓讀】供奉官鄭文、嘗て武昌に官す、江岸裂けて古銅劍を出す、文、之を得て以て余に遺る、冶鑄精巧、鍛冶の成す所のものにあらず、

雨餘江清風卷沙。　雨餘江淸うして風沙を卷く、
雷公躡雲捕黃蛇。[一]　雷公雲を躡んで黃蛇を捕ふ、
蛇行空中如枉矢。[二]　蛇は空中を行く枉矢の如く、
電光煜煜燒蛇尾。[三]　電光煜煜蛇尾を燒く、
或投以塊鏗有聲。　或は投ずるに塊を以てすれば鏗として聲あり、
雷飛上天蛇入水。　雷飛んで天に上り蛇は水に入る、
水上靑山如削鐵。　水上の靑山鐵を削るが如し、
神物欲出山自裂。　神物出でんと欲して山自から裂く、
細看兩脅生碧花。[四]　兩脅を細看すれば碧花を生ず、
猶是西江老蛟血。　猶ほ是れ西江老蛟の血、

【字解】[一] 雷公　王梅溪曰く、唐開元末、太原武勝之、爲宣州司士知靜江軍事、忽然潮中見雷公鼓霰雲、逐小黃蛇、蟠繞潮上、靜江之夫、皷以石投之、中蛇、飴然作金聲、雷公飛去、使人往觀之、得一銅劍、有文、曰許旌陽斬蛟第三劍云と、[二] 枉矢　枉は枉屈、まがる、[三] 燒蛇尾　「封氏聞見記」に、士人登第、必展歡宴、謂之燒尾、於說有三、其一云、魚躍龍門時、則有雷電爲燒其尾而化と、[四] 碧花　李賀の詩、漆灰骨末丹水沙、凄凄古血生銅花と、[五] 蒯緱　蒯は萱の類、繩に掛るを得、緱は劍首を謂ふ、

蘇子得之何所爲。　蘇子之を得て何の爲す所ぞ、

(五)<br>剸絲彈鋏詠新詩。　剸緱鋏を彈じて新詩を詠ず、

(七)<br>君不見凌煙功臣長九尺。　君見ずや凌煙の功臣長九尺、

(八)<br>腰間玉貝高拄頤。　腰間の玉貝高く頤を拄ふるを、

【詩意】雨餘の江色は淸うして風が沙を卷く、此の時や雷公が雲を蹋んで黃蛇を捕へたのである、蛇は空中を行くこと宛かも枉矢の如き形である、電光は熠熠として蛇の尾を燒く、人が之に塊を以て投げて見たれば鏗として聲がある、雷は飛んで天に上り去り蛇は水に入り去る、水上と靑山との間削鐵の如き音響が發する、神物が出現するときは山が自から裂ける、自分の雨脅を細看すれば碧花が生ずる、猶ほ是れ西江の老蛟の血である、今蘇子は之を得て何の爲す所ぞや、或は剸緱し或は彈鋏して新詩を詠ずるのみ、君見玉はざるや凌煙閣の功臣の像は身長九尺である、其の腰間の寶劍は高く頤を拄ふるのを、

【餘論】紀曰く、此與醉道士石詩、同一運意、皆討巧省力之法、彼只成游戲小品、而此能不失詩格者、賴有一結耳と、王漁洋は「古詩平仄論」中に此の詩を出して曰く、右換韻多寡不一、雖是古法、不可爲常也と、王覃溪は直是先生（漁洋）當日對門弟子匆匆語、門人刻舟膠柱者幾何矣と、要するに紀評の如く一結を以て餘韻あるを覺ゆるのである、

【六】彈鋏　「戰國策」に、彈鋏歌曰、長鋏歸來乎と、【七】凌煙　唐の太宗、貞觀十七年に、國家の功臣、杜如晦、房玄齡、二十四人を凌煙閣に畫かしむ、【八】玉貝　劍を稱して謂ふ、【九】拄頤　「東觀記」に、玉貝劍拄頤と、

## 定惠院顒師爲余竹下開嘯軒

定惠院顒師、余が爲めに竹下に嘯軒を開く

(一)<br>啼鴂催天明。喧喧相詆譙。　(二)　啼鴂天明を催す、喧喧として相詆譙す、

(三)<br>暗蛩泣夜永。(四)喞喞自相弔。　暗蛩夜の永きに泣き、喞喞として自から相弔ふ、

(五)<br>飮風蟬至潔。(六)長吟不改調。　風を飮む蟬は至潔、長吟して調を改めず、

(七)<br>食土蚓無腸。亦自終夕叫。　土を食ふの蚓は腸無きも、亦自から終夕叫ぶ、

(八)<br>鳶貪聲最鄙。(九)鵲喜意可料。　鳶貪るの聲最も鄙し、鵲喜ぶの意料るべし、

皆緣不平鳴。(一〇)慟哭等嬉笑。(一一)　皆不平に緣つて鳴く、慟哭嬉笑に等し、

(一二)<br>阮生已蟲率。孫子亦未妙。(一三)　阮生は已に蟲率、孫子も亦未だ妙ならず、

道人開此軒。淸坐默自照。(一四)　道人此の軒を開き、淸坐默して自照す、

(一五)<br>衝風振河海。不能號無竅。(一六)　衝風河海に振ふも、無竅を號ばす能はず、

累盡吾何言。風來竹自嘯。(一七)　累盡きて吾何をか言はん、風來れば竹自から嘯く、

【字解】【一】啼鴂　鴂は鵙即ちフクロフの類、鵙鴂は杜鵑の異名、今の啼鴂は鵙鴂である、【二】詆譙　詆訶譏讀で、他人をそしりとがめる、【三】暗蛩　蛩は多様ある、イナゴ、コホロギ、キリギリス、今の語は「爾雅」に蟋蟀蛬とある、卽ちキリギリス、「陸機蟲魚疏」に幽州人謂二之趨織一、ハタオリと、【四】唧唧　羽聲を言ふ、「古樂府木蘭詩」に唧唧復唧唧と、七月鳴を中心とする、【五】飮風蟬　「月令」に仲夏之月蟬始鳴、季夏之月寒蟬鳴と、【六】長吟　曹子建蟬賦に獨怡樂而長吟と、【七】食土蚓　「荀子」に、蚓上食二埃土一、下飮二黃泉一、用心一也と、【八】鳶　トンビ、銅馬鍋の飛鳶操に、鳶飛杳杳靑雲裏、鳶鳴蕭蕭風四起と、鵰、フクロフの類として鄙しむ、【九】鵲客　鵲はカササギ、「禽經」に靈鵲兆レ喜と、「西京雜記」に、乾鵲噪而行人至と、【一〇】不平鳴　韓退之の文に、大凡物不レ得二其平一則鳴と、【一一】慟哭　「戰國策」に、長歌之哀、過二於慟哭一、嬉笑之怒、甚二於裂眦一と、【一二】阮生　晉の阮籍、【一三】孫子　阮籍の友人孫登、「晉書」に、籍嘗於二蘇門山一、遇二孫登一、與商二略終古一、及二栖神道氣之術一、登皆不レ應、籍因長嘯而退、至二半嶺一、聞レ有二聲若二鸞鳳之音一、響二乎巖谷一、乃登嘯也と、【一四】自照　長嘯する如き奇術を爲さず、自己の心性を觀照する、【一五】衛風振河海　「莊子齊物論篇」に大塊噫氣、其名爲レ風、是惟無レ作、作則萬竅怒號と、【一六】不能號　「莊子齊物論篇」に風振レ海而不レ能レ驚と、【一七】自嘯　「說文」に竹得レ風其體天屈、如二人之笑一と、

【題義】定惠院主の顒師が、公が爲めに竹下に嘯軒を開築せられ其の喜びを歌うたものである、

【詩意】啼鴂は正に天明を催す時である、喧喧として相詆譙する如きである、暗蛩は夜の永きを泣き通して、唧唧として自から相弔する如きである、又風を飮むの蟬は惡食せざるが故に至潔である、長吟して其の調子を改むることはない、土を食うて生を保つ蚯蚓は腸なきも、亦自から終夕叫ぶのを聞く、鳶の貪る聲は最も是れ鄙である、鵲の喜ぶは其の意料るべきである、慟哭するも嬉笑するも世俗の外に出ない、阮生なぞも已に蠢率の人間である、孫子なぞも亦未だ妙と爲すには足らない、今顒道人は此の嘯軒を開築して、是に於て淸坐して冥默自から觀照する、彼の輩が衛風の威を以て河海を振ふとも、無竅を號ばしむることは不能である、俗累が盡きたる吾は亦何をか言はん、風が吹き來れば竹が自から嘯く、

【餘論】紀曰く、奇恣超妙、一二掃恒蹊一、阮生二句亦可レ省と、査初白曰く、一片悟境と、案ずるに玉梅溪本には阮生の二句無し、紀は無きを以て勝れりと爲すのである、孫子亦未レ妙の五字の如き小兒以上の拙、要するに此の十字は刪除すべきである、然らば瓦を去つて玉を存するもの、

## 石芝

石　芝

元豐三年五月十一日癸酉。夜夢遊二何人家一。開二堂西門一。有二小園古井一。井上皆蒼石。石上生二紫藤一。如二龍蛇一。枝葉如二赤箭一。主人言。此石芝也。余率爾折食二一枝一。衆皆驚笑。其味如二雞蘇一而甘。明日作二此詩一。

【訓讀】元豐三年五月十一日癸酉、夜夢む何人の家に遊び、堂の西門を開けば、小園古井あり、井上皆蒼石、石上紫藤を生じ、龍蛇の如し、枝葉赤箭の如し、主人言ふ、此れ石芝なりと、余率爾に折つて一枝を食ふ、衆皆驚き笑ふ、其の味雞蘇の如くにして甘し、明日此の詩を作る、

空堂明月淸且新。　空堂の明月淸く且新たなり、

（一）【字解】【一】了然　明白に理解

幽人睡息來初勻。　幽人睡息來り初めて勻ふ、
(一)了然非夢亦非覺。　了然夢にあらず亦覺むるにあらず、
有人夜呼祁(二)孔賓。　人あり夜呼ぶ祁孔賓、
披衣相從到何許(三)。　衣を披いて相從ひ何許に到る、
朱欄碧井開瓊戶(四)。　朱欄碧井瓊戶を開く、
忽驚石上堆龍蛇。　忽ち驚く石上龍蛇堆きに、
玉芝紫筍生無數。　玉芝紫筍生ずること無數、
鏘然敲折青珊瑚(五)。　鏘然敲折す青珊瑚、
味如蜜藕(六)和雞蘇(七)。　味は蜜藕の雞蘇に和するが如し、
主人相顧一撫掌。　主人相顧みて一に掌を撫す、
滿堂坐客皆盧胡(八)。　滿堂の坐客皆盧胡す、
亦知洞府(九)嘲輕脫。　亦知る洞府の輕脫を嘲るを、
終勝嵇康羨王烈(一〇)。　終に勝る嵇康が王烈を羨むに、
神山(一一)一合五百年。　神山一合五百年、
風吹石髓堅如鐵。　風は石髓を吹いて堅きこと鐵の如し、

するを云ふ、【二】郗孔賓「晉書郗嘉傳」に、嘉字孔賓、好學、年二十餘、夜忽窗中有聲、呼曰、郗孔賓郗孔賓、隱去來隱去來、修飾人世甚苦、不可讀、所得未毛銖、所喪如山嶽、且而悉去と、【三】何許 何處と同じ、【四】瓊戶 宋之問の詩、畫堂瓊戶特相宜と、【五】珊瑚「晉書石崇傳」に、武帝助王愷、嘗以珊瑚樹賜之、高一尺許、枝柯扶疎、世所罕比、愷以示崇、崇便以鐵如意擊之、應手而碎と、杜子美の詩、腰下寶玦青珊瑚と、陸龜蒙の詩、玉芝敲折淨然陰と、【六】蜜藕 蓮根を言ふ、【七】雞蘇「本草」に、水蘇味辛、一名雞蘇、可以烝雞故名、多生水旁と、「石門題跋」に、雞蘇木龍腦薄荷也、東吳林下人、夏月多以飲客、而俗人不知、私議東坡誤用雞蘇爲紫蘇、可發一笑と、【八】盧胡 笑聲が咽喉の間にある義、「後漢應劭傳」に、昔鄙人以乾鼠爲璞、襲之於周、宋愚夫亦寶燕石、緹錦十重、觀之者、掩口盧胡而笑と、【九】洞府 仙人宮府を言ふ、李昉等が奉勅撰なる「太平廣記」に、許碏遊盧江間、嘗醉吟曰、閬苑花前是醉鄉、誤翻王母九霞觴、羣仙拍手嫌輕脫、謫向人間作酒狂と、【一〇】羨王烈「神仙傳」に、王烈字長休、邯鄲人、常服黃精及鉛、嵇叔夜甚敬愛之、共入山、遊戲採藥、後烈獨之太行、見山破石裂數百丈、兩畔皆是青石、石中有一穴、青泥流出如髓、烈取泥試丸之、隨手堅凝、氣如粳米飯、嚼之、因攜少許與叔夜、叔夜取而視之、已成青石、擊之琤琤如銅聲、叔夜卽與烈往視之、斷山已復如故と、【一一】神山「神仙記」に、神山五百年輒開、其中石髓出、得而服之、壽與天相畢と、

**【題義】** 夢に何人の家とも知らずして、門に入りて見れば、古井の上に蒼色の石がある、其の上に紫藤が龍蛇の如く蟠まるを看る、主人の言ふ此れは石芝であると、率爾に折つて之を食へば味は雞蘇の如きの感を爲したのであるが、旁の人は皆之を笑うた、乃ち明日此の詩を作りしものである、

**【詩意】** 空堂を照すの明月は淸且新なるを見る、幽人は睡息より出で來りて心氣初めて勻ふ、而して夢でもなく亦覺めても居らぬことは了然である、誰人とも知らず蘇東坡蘇東坡と呼ぶ者あるを、乃ち衣を披服して何許に到ると聞かず唯隨從して行く、行いて見れば朱欄碧井瓊戶が開きてある、忽ちに驚く石上に龍蛇が堆蟠するを、龍蛇と思ひしは玉芝紫筍にして無數に生じてある、折つて見れば鏘然と響ありて皆青珊瑚である、食うて見れば味は蜜藕の雞蘇に和するに似て居る、主人と互に相顧みて一に掌を撫づ、滿堂の坐客は一齊に盧胡して笑ふ、亦知る洞府の神仙が凡夫の輕脫なるを嘲けるを、

而かも自からは嵇康が王烈を羨むの事よりは勝るを知る、神山が一合すれば五百年開かない、然るときは風は石髓を吹くも堅きこと鐵の如く奈何ともすることが出來ない、

【餘論】紀曰く、亦頗賴二此一結一と、此の詩を論じて輒一結と輕輕に斷じ去るは如何なるものであらうか、前前の意義より來りて此の一結と爲る、紀評は輕脫と嘲けらざるを得ない、作法としては四換韻の正體である、

## 今年正月十四日。與二子由一別二於陳州一。五月子由復至二齊安一。以レ詩迎レ之

今年正月十四日、子由と陳州に別れ、五月、子由復た齊安に至る、詩を以て之を迎ふ

驚塵急雪(一)滿二貂裘(二)一。　驚塵急雪貂裘に滿つ、

淚灑二東風一別二宛邱(三)一。　淚は東風に灑ぎて宛邱に別る、

又向二邯鄲枕中(四)一見。　又邯鄲枕中に向うて見、

却來(五)雲夢澤南州。　却來す雲夢澤南の州、

睽離(六)動作二三年計(七)一。　睽離動もすれば三年の計を作す、

牽挽(八)當レ爲二十日留一。　牽挽當に十日の留を爲すべし、

早晚青山映二黃髮(九)一。　早晚か青山黃髮に映じ、

相看萬事一時休。　相看て萬事一時に休せん、

【自注】柳子厚別二劉夢得一詩云、皇恩若許二歸レ田去一、黃髮相看萬事休と

【字解】(一) 急雪　杜子美の詩、急雪舞二廻風一と、(二) 貂裘　貂はテン、其の皮を以て裘に作る、尾は冠の飾りとす、(三) 宛邱　縣の名、陳州に屬す、(四) 邯鄲枕　「太平廣記」に、開元中、道人呂翁、嘗往二來邯鄲一、有二書生一姓盧、與レ翁同止二逆旅一、主人方蒸二黃粱一、共待二其熟一、盧生不レ覺長嘆、翁問レ之、具言二生世困阨一、翁開二囊中枕一、以授二盧生一曰、枕レ此當レ如レ願、生俛レ首、但記身入二枕中一、遂至二其家一、未レ幾、登二高第一、歷二臺閣一、出二入將相一五十年、忽欠身而寤、黃粱猶未レ熟也、謝曰、先生以窒二吾欲一耳、自レ此不二復求一レ仕矣と、(五) 却來　「唐詩」に强半春寒去却來と、(六) 睽離　睽はタガフ、違と同じ、(七) 三年計　子由と睽離して、三年を計する、(八) 牽挽　力一杯に引くこと、(九) 黃髮　公の自注に、柳子厚別二劉夢得一詩云、皇恩若許二歸レ田去一、黃髮相看萬事休と、王梅溪曰く、柳子厚の詩、皇恩若許二歸レ田去一、晚歲當レ爲二鄰舍翁一、劉夢得云、耦耕若便遺二身世一、黃髮相看萬事休、先生自注、誤合二二詩一爲レ一也と、

【題義】今年卽ち元豐三年の正月十四日に子由と陳州にて別れ、五月に子由は復た齊安に至る、此の詩を賦して之を迎へたのである、

【詩意】驚塵や急雪が貂裘に滿ち、淚は東風に灑ぎて宛邱に於て嘗て離別した、其の後は邯鄲一夢の中に於て見たが、身はアベコベに雲夢澤南の州に來たのである、睽離して後の動止動作は早や三年を計算する、偶ま遇うたのである、極力に十日間は滯留することを勸む、早晚か青山が黃髮に映じて、二人相看て浮世の萬事が一時に休むときぞや、

【餘論】紀曰く、見字不レ對二州字一と、紀評當る、

## 遷居臨皐亭

臨皐亭に遷居す

我生天地間。一蟻寄大磨。
我天地の間に生れ、一蟻大磨に寄す、

區區欲右行。不救風輪左。
區區右行せんと欲すれば、不救に風輪は左す、

雖云走仁義。未免違寒餓。
仁義に走ると云ふと雖も、未だ寒餓に違ふを免れず、

劍米有危炊。鍼氈無穩坐。
劍米危炊あり、鍼氈穩坐なし、

豈無佳山水。借眼風雨過。
豈佳山水なからんや、借眼風雨過ぐ、

歸田不待老。勇決凡幾箇。
歸田老を待たず、勇決凡そ幾箇ぞ、

幸茲廢棄餘。疲馬解鞍馱。
幸に茲に廢棄の餘、疲馬鞍馱を解く、

全家占江驛。絕境天爲破。
全家江驛を占め、絕境天爲に破る、

饑貧相乘除。未見可弔賀。
饑貧相乘除す、未だ弔賀すべきを見ず、

澹然無憂樂。苦語不成些。
澹然憂樂無し、苦語些を成さず、

【字解】【一】大磨 「晉書天文志」に、周髀家云、天旁轉如推磨而左行、日月右行、隨天左轉、故日月實東行、而天牽之以西沒、譬之於蟻行磨石之上、磨左旋而蟻右去、磨疾而蟻遲、故不得不隨磨以左迴焉と、【二】風輪 「俱舍論」に、先於最下、依止虛空、有風輪生、廣無數、厚十六億踰繕那と、【三】仁義 「孟子」に由仁義行と、【四】劍米 「晉顧愷之傳」に、桓元在殷仲堪坐上、共作危語、元曰、矛頭淅米劍頭炊、仲堪曰、百歲老翁攀枯枝、有一參軍云、盲人騎瞎馬、夜半臨深池、仲堪眇目、驚曰、此太逼人と、【五】鍼氈 「晉書愍懷太子傳」に、舍人杜錫每盡忠、規勸太子、修德進善、遠於讒謗、太子怒、使人以鍼著錫常所坐氈中、而刺之流血と、【六】借眼 寸時の間、眼に借すの意、【七】歸田 韓退之の詩、有路即歸田と、【八】勇決 杜子美の詩、西方服勇決と、【九】疲馬 孟郊の詩、疲馬思解鞍と、【一〇】乘除 韓退之の詩、無善名以聞、無惡聲以揚、名聲相乘除、得少失有餘と、【一一】弔賀 「劉向誡子書」に、董仲舒曰、弔者在門、賀者在閭、言憂則恐懼、恐懼則福至、賀者在門、弔者在閭、言受福驕奢、驕奢則禍至と、【一二】澹然 「莊子刻意篇」に、澹然無極、而衆美從之と、【一三】不成些 些字「說文」に、語詞也と、意義を含まざる字、

【題義】定慧院より臨皐亭に遷居して感慨を敍せる詩である、

【詩意】我は天地の間に生れたるも、一蟻が身を大磨に寄せたると同樣である、區區として右行せんと欲すれば、聊かも止救せずして風輪は左旋する、自身は仁義の爲めに奔走すると云ふが、寒と餓との苦に逢ふことは免れない、米を劍頭で炊ぐの危險もある、氈下に鍼があつて穩坐することも出來ない、海內に佳山水無しとは言はず、而かも借眼風雨過ぐるの速覽のみ、老境に及ぶを待たずして歸田する者は凡そ幾人かある、勇決する人は稀である、我は幸に廢棄の餘である、是の故に疲馬が鞍馱を解くことが出來た、全家が江驛を占領して、其の絕境の地は天の開破したのである、是に於て飢貧と乘除するを得た、然らば弔すべきも賀すべきも共に無い、澹然たる我が身は憂も樂もない、又屈原の如き苦語も成さない、

【餘論】紀曰く、有兀傲之氣、

# 曉至巴河口迎子由

去年御史府(一)。舉動觸四壁(二)。
幽幽(三)百尺井。仰天(四)無一席。
隔牆(五)聞歌呼。自恨計之失。
留詩(六)不忍寫。苦淚(七)漬紙筆。
餘生(八)復何幸。樂事有今日。
江流鏡面淨。煙雨輕冪冪(九)。
孤舟(一〇)如鳧鷖。點破千頃碧。
聞君在磁湖(一一)。欲見隔咫尺。
朝來好風色。旗脚西北擲。
行當中流見。笑眼清光溢。
此邦疑可老。修竹帶泉石。
欲買柯氏林(一二)。茲謀待君必。

曉、巴河口に至り子由を迎ふ
去年御史の府、擧動四壁に觸る、
幽幽百尺の井、天を仰げば一席も無し、
牆を隔てて歌呼を聞く、自から恨む計之れ失するを、
詩を留めて寫すに忍びず、苦淚紙筆を漬す、
餘生復た何の幸ぞ、樂事今日あり、
江流鏡面淨く、煙雨輕く冪冪、
孤舟鳧鷖の如し、點破す千頃の碧なるを、
聞く君磁湖に在りと、見んと欲するも咫尺を隔つ、
朝來好風色、旗脚西北に擲つ、
行いて中流に當りて見れば、笑眼に淸光溢る、
此の邦に老ゆ可きかと疑ふ、修竹泉石を帶ぶ、
柯氏が林を買はんと欲す、茲に謀るに君を待つて必とせん、

【字解】【一】御史府 前に解あり、【二】四壁 「漢王莽傳」に、定安公第、置門衞使者監領、敕阿乳母、不得與語、常在四壁中と、【三】幽幽 「詩小雅」に、幽幽南山と、深遠なる貌、【四】仰天 「莊子齊物論篇」に、南郭子綦、隱几而坐、仰天而噓と、【五】隔牆 韓退之の詩、隔牆聞讙呼と、【六】留詩 獄中に在りて、子由に寄せたる七律二首を言ふ、【七】苦淚 孟東野の詩、苦淚滿眼黑と、【八】餘生 謝靈運の詩、餘生不歡娛、何以竟暮歸と、【九】冪冪 煙の覆うて低れたる貌、李華の文に、鬼神來兮雲冪冪と、【一〇】孤舟 李白の詩、小舟若鳧鷖と、【一一】磁湖 「子由詩中」に、舟次磁湖、以風浪留二日と、大冶縣磁山の麓に在る、【一二】柯氏林 「名勝志」に、柯山在赤壁高寒亭之東と、「圖經」に、柯山四望、南直高邱と。施德初云、欲買柯氏林、卽此地と、

【題意】黃州を距ること二十里に巴河口がある、曉旦に此の地に子由を迎へて作りしものである、

【詩意】去年は御史府に罪の人と爲りて、一擧一動が總て四壁に觸れる獄室に居りしものである、宛かも幽幽たる百尺の井底に在つて、天を仰げば一席も無きが如くである、牆を隔てて歌呼を聞く事がある、自から恨む計の失なるを、其の時や詩を留むるも寫すに忍びず、苦淚を流して紙筆を漬したのである、已に死は覺悟して居りしが餘生を得たるは何の幸福である、樂事が今日に有るを見る、巴河の水流は鏡面淸淨にして、煙雨の煙冪冪たるは眞に佳景である、而して孤舟は水に泛ぶ鳧鷖の如く、千頃の水碧を點破して行く、聞く君は磁湖に在任して、見んと欲するも咫尺を隔るを如何せんや、今日幸に朝來より好風色にて、旗脚が西北方に擲つて居る、孤舟にて行き中流に當りて見れば、笑眼に淸光溢れてある、此の邦にて老を送るかと疑ふ、修竹好き上に猶ほ泉石を帶びて居る、僕は柯氏林を買ひ取らんと思ふ、茲に君と謀議して君が是非買へと言ふことを待つ、

【餘論】紀曰く、語皆眞至と、慟天哭地の境界を經過し來ることを敍するのであるから、眞至は當然

である、此等の詩中に諧謔の語なぞを用ふれば、決して大宗師では無い、

## 與子由同游寒溪西山　子由と同じく寒溪西山に游ぶ

(一)散人出入無(二)町畦、　散人の出入町畦なし、
朝游湖北暮淮西、　朝に湖北に游び暮に淮西、
(三)高安酒官雖未上、　高安の酒官未だ上らずと雖も、
(四)兩脚垂欲穿塵泥、　兩脚垂れて塵泥を穿たんと欲す、
與君聚散若雲(五)雨、　君と聚散雲雨の若く、
(六)共惜此日相提攜、　共に此の日を惜みて相提攜す、
千搖萬兀到樊口、　千搖萬兀樊口に到る、
一箭放(七)溜先鳧鷖、　一箭放溜鳧鷖に先んず、
層層草木暗西嶺、　層層草木西嶺に暗し、
(八)瀏瀏霜雪鳴寒溪、　瀏瀏霜雪寒溪に鳴る、
空山古寺亦何有、　空山古寺亦何か有る、
歸路萬頃青玻瓈、　歸路萬頃の青玻瓈、
我今漂泊等鴻雁、　我今漂泊鴻雁に等し、
江南江北無常棲、　江南江北常棲無し、
幅巾不(九)擬過城市、　幅巾擬せず城市を過ぎんと、
(一〇)欲踏徑路開新蹊、　徑路を踏んで新蹊を開かんと欲す、
【自注】路有直入寒溪不過武昌者。
却憂別後不忍到、　却つて憂ふ別後到るに忍びず、
見子行迹空餘悽、　子が行迹を見て空しく餘悽、
吾儕流落豈天(一一)意、　吾儕流落する豈天意ならん、
自坐迂(一二)闊非人(一三)擠、　自から迂闊に坐す人の擠するにあらず、
行逢山水輒羞歎、　行いて山水に逢うて輒ち羞歎す、
此去未免勤鹽(一四)虀、　此を去つて未だ免れず鹽虀を勤むるを、
何當一遇李(一五)八百、　何か當に一たび李八百に遇うて、
【自注】李八百宅、在筠州〇〇、相傳能拄拐日八百里。

【字解】【一】散人　自から檢束せざる人、「莊子人間世篇」に、幾死之散人と、唐陸龜蒙、自號江湖散人と、【二】無町畦　「莊子人間世篇」に、彼且爲無町畦、亦與之爲無町畦と、心に隔て無く、行くに界無きを言ふ、【三】高安　縣名、筠州に屬す、公は罪を得て筠州の鹽酒稅官と爲る、【四】兩脚　杜子美の詩、出門復入門、兩脚但如舊、所向泥活活、思君令人瘦と、【五】雲雨　劉禹錫の詩、故人雲雨散と、【六】共惜　韓退之の詩、此日足可惜、此酒不可嘗、捨酒去相語、共分一日光と、【七】放溜　皇甫冉の詩、放溜出江口と、溜は湍と同じ、【八】瀏瀏　謝惠連の詩、萃亭映江月、瀏瀏出谷飈と、風の疾き貌、【九】不擬　杜子美の詩、不擬哭途窮と、【一〇】欲踏　查初白云、詩、行道兌矣、傳、兌成蹊也、疏、蹊者先無行迹、初爲徑路之名と、「名勝志」に、萬松山、在樊山北、臨江松陰夾路、特爲幽邃、有路直入寒溪山下之捷徑也と、【一一】天意　杜子美の詩、汝病豈天意と、【一二】迂闊　「漢書王吉傳」に、上以其言迂闊、不甚寵異也と、【一三】非人擠　擠は擠陷又は擠排、韓退之の文に反擠之又下之石焉と、【一四】鹽虀　鹽類や虀類の稅を徵收する官、【一五】李八百　王梅溪曰く李八百名脫、蜀人也と、歐陽守道碧落堂記云、高安郡于江西稱道院、相傳爲上古仙人李八百修煉之所と、【一六】刀圭　藥匙、藥

な趣ある點である、轉化して隣衛の鶴と爲る、

相哀白髮分刀圭。(一六)　白髮を相哀んで刀圭を分つべき、

【詩意】散人の出入は紀律なぞ無いから又町畦も無い、朝には湖北に遊び暮に淮西、高安の税務官に任せられたるも未だ上途はしない、官吏として威嚴を保つ必要がないから、兩脚垂れて塵泥を穿たんとする狀態である、君と聚散定めなく宛かも雲雨の如きである、一遇したるときは此の日を惜んで相提攜して游ばん、千搖萬兀して樊口に到る、是に於て一箭放溜鳧鷖より先と爲る、層層たる草木は西嶺に晻靄する、瀏瀏たる霜雪は其の音が寒溪に鳴る、空山の古寺に於て見る所亦何か有るぞや、歸路に當りて萬頃水の青玻瓈色を呈するを見る、我今漂泊鴻雁と身蹤を等しうする、江南も江北も常棲は無い、幅巾して城市を過ぎるは望みでない、唯徑路を踏んで新蹊を開かんと欲するのみ、而かも退却して考へ憂ふ君と別後は獨り到るに忍びないと、子が行迹を見て空しく餘悽がある、吾儕が南北と流落するも天意ではない、自から迂闊の致す所にて人の擠陷したのではない、行いて山水に逢へば輒ち羞歎せざるを得ない、今日の游止めば又鹽虀を監督する勤務がある、何か一度は神仙の李八百に遇うて、共に白髮を哀んで刀圭を分配せんと、

【餘論】紀曰く、語語圓健、用筆每透過一層、最爲沈著、東坡難得此和平之旨と、詩は八齊一韻なれば、○●（〇〇〇又は●●（〇〇〇蘇家の正法眼藏として、明明白白である、

次韻答子由　次韻、子由に答ふ

平生弱羽寄衝風。(一)　平生弱羽衝風に寄す、
此去歸飛識所從。　此を去つて歸飛從ふ所を識る、
好語似珠穿一一。(二)　好語は珠に似て穿つ一一、
妄心如膜退重重。(三)(四)　妄心膜の如く退いて重重、
山僧有味寧知子。(五)　山僧味あり寧ろ子を知らん、
瀧吏無言只笑儂。(六)　瀧吏言無く只儂を笑ふ、
尙有讀書清淨業。(七)　尙ほ讀書清淨の業あり、
未容春睡敵千鍾。(八)　未だ容れず春睡の千鍾に敵するを、

【字解】【一】衝風「史記韓安國傳」に、衝風之末、力不能漂鴻毛と、【二】似珠　元微之の詩、一一貫珠隨咳唾と、【三】妄心　佛典に、眞心妄心の語あり、妄心とは煩惱心を言ふ、【四】如膜　膜は眼膜、耳膜、眼の薄皮、耳の薄皮、【五】有味　杜牧の老僧詩に、家住城南杜曲旁、兩枝仙桂一時芳、山僧尙未知名姓、始表空門氣味長と、【六】瀧吏　韓退之の詩、往問瀧頭吏、潮州尙幾里、行當何時到、土風復何似、瀧吏垂手笑、官何問之愚、譬如官京邑、何由知東吳、潮州底處所、有罪乃竄流、儂幸無負犯、何由到而知と、樂昌瀧を守るの公吏を言ふ、【七】清淨業「華嚴經」に、自行清淨業と、「觀無量壽經」に、佛日敎我觀於清淨業處と、【八】千鍾「家語」に、季孫贈我千鍾也、而交益親と、

【詩意】平生餘りに壯健ならざる身を以て衝風に寄せて居る、此を去つて歸飛するも我は其の從ふ所を識る、君が作る詩は好語にして珠を一一穿ちたるに似て居る、僕は妄心が膜の如く退きて重重な

るを覺ゆる、山僧が僧として味あるは子の如き大詩人を知らざる所に在る、又瀧吏は俗吏であるから無言にして只儂を見て笑ふのみ、尙は讀書する淸淨の業務が忙がし、未だ容許しない春睡の價は千鍾に敵することを、

【餘論】紀曰く、三四宋格と、案ずるに膜の字「涅槃經」に、圓伊金錍、以抉四眼無明之膜とあり、病眼者に就いて言ふ、今之を妄心の上に用ふるは、妥當ならざるを覺ゆ、紀の所謂宋人の詩格は往往之を見る、獨り公のみではない、有二字は例の病である、

## 武昌酌菩薩泉送王子立

武昌に菩薩泉を酌み、王子立を送る

送行無酒亦無錢。　行を送るに酒無し亦錢も無し、
勸爾一杯菩薩泉。　爾に勸む一杯の菩薩泉、
何處低頭不見我。　何れの處に低頭するや我を見ず、
四方同此水中天。　四方同じく此の水中の天、

【字解】〔一〕菩薩泉　菩薩の意義は、自身をも救ひ、他人をも救ふと云ふに在れば、泉に名づけて自他を長濟するのである、〔二〕水中天　「楞嚴經」に、有佛出世、名爲水天、敎諸菩薩、修習水觀、入三摩地、觀於身中、水性無奪、與世界外、浮幢王刹、諸香水海、等無差別と、

【詩意】君が行を餞別せんと思ふも酒も無く亦錢も無い、已むを得ずして一杯の菩薩泉の水を呈贈する、僕が微意に對して君は低頭するも一向に我を見ることが出來ない、四方同じく此の水中一樣の天に居るからである、

【餘論】紀曰く、竟是偈頌と、題目の菩薩泉より詩想を湧出せしのみ、一時責を塞ぐか、又游戲なるのみ、

## 和何長官六言次韻五首

何長官の六言に和す、次韻五首

作邑君眞伯厚。　邑君と作る眞に伯厚、
去官我豈曼容。　官を去る我豈曼容ならん、
一廛願託仁政。　一廛願はくは仁政に託せん、
六字難賡變風。　六字變風を賡し難し、

【字解】〔一〕伯厚　「後漢陳蕃傳」に、朱震字伯厚、爲州從事、奏濟陰太守單匡贓罪、幷連匡兄中常侍超、三府諺曰、車如雞棲、馬如狗狹、惡如風朱伯厚と、〔二〕曼容　「漢書兩龔傳」に、琅邪邴漢、兄子曼容、養志自修、爲官不肯過六百石、輒自劾去と、〔三〕一廛　「孟子公孫丑章句」に、廛無夫里之布、則天下之民、皆悅而願爲之氓矣と、〔四〕仁政　「孟子梁惠王章句」に、君行仁政と、〔五〕六字　六義と同じ、〔六〕變風　「子夏詩序」に、至於王道衰、而變風變雅作矣、故變風發乎情、止乎禮義と、

【題義】何長官が示されたる六言詩に和して次韻せられたものである、

【詩意】邑君の邑君たる資格あるは伯厚である、官を去るの我は曼容に倣ふのではない、一市廛の願ふ所は仁政の人に託するのである、六字の詩は變風なれば賡酬し難いのである、

〔二〕

五噫已出東洛。
三復願比南容。
學道未逢潘盎。【自注】南海謂狂爲盎、盎潘近世得道者也。
草書猶似楊風。【自注】楊凝式也。

五噫已に東洛に出づ、
三復願はくは南容に比せん、
學道未だ潘盎に逢はず、
草書猶ほ楊風に似たり、

【字解】【一】五噫　後漢梁鴻、五噫歌を作る、【二】東洛　後漢の都、【三】三復「論語先進篇」に、南容三復白圭と、【四】潘盎　公の自注に、南海謂狂爲盎、盎潘近世得道者也と、查初白云ふ、潘盎名昆、本集趙先生舍利記云、南海有潘昆者、陽狂不測、人謂之潘盎、嘗與京師言法華偈頌、往來言云、盎日光佛也、趙先生棄官從遊、盎以爲盡得我道と、【五】楊風　公の自注に、楊凝式也と、「法書苑」に、楊凝式、善行草、西洛寺觀三百餘處、題寫殆徧、號楊風と、尹師魯曰く、楊凝式書、縱肆自肆、盡得於己意、覩之則其似可盡、其得意不可盡と、

【詩意】五噫の歌は已に東洛より出て居る、三復して丁寧に南容に比するを願ふのである、學道は未だ潘盎の如き術師に逢はないが、草書の自肆放散なるは楊風に似て居る、

〔三〕

石渠何須反顧。
水驛幸足相容。
長江大欲見庇。
探支八月涼風。

石渠何ぞ反顧を須ひん、
水驛幸に相容るるに足る、
長江大に庇はれんと欲す、
探支八月涼風あり、

【字解】【一】石渠　漢の石渠閣、秘書を藏する所、又講論する所、【二】反顧「離騷」に、忽反顧以游目兮、將往觀乎四荒と、【三】水驛　臨皐亭を指すか、【四】探支　王梅溪曰く、探支字是官物官錢、有此名、此亦餘言之矣と、皮日休の詩、鶴料符來每探支と、

【詩意】昔の石渠閣は何ぞ反顧するを須ひんや、今の水驛は幸に此の身を容託するに足る、長江は大に主人を庇護するが如くなるを知る、是の故に探支する八月の涼風を、

〔四〕

清風初號地籟。
明月自寫天容。
貧家何以娛客。
但知抹月批風。

清風初めて地籟號ぶ、
明月自から天容を寫す、
貧家何を以て客を娛ましむる、
但知れ月を抹し風を批するを、

【字解】【一】地籟「莊子齊物論篇」に、厲風濟、則衆竅爲虛、地籟則衆竅是已と、【二】天容　韓退之の詩、天容與水色、此處皆綠淨と、【三】抹月批風　王梅溪曰く、饌食者、有批有抹、抹月批風、又戲言之と、施德初曰く、禪宗有薄批明月、細抹清風之語と、

【詩意】清風は初め地籟號ぶを聞く、明月は自から天容を水に寫して居る、貧家は何を以て來客を娛ましむるぞや、但知れ抹月批風自然の樂みを、

〔五〕

〔五〕

青山自是絕色。　青山自から是れ絕色、
無人誰與爲容。(一)　人無し誰と與に容を爲ん、
說向市朝公子。　說いて市朝の公子に向ふも、
何殊馬耳東風。(二)　何ぞ馬耳東風に殊ならん、

【詩意】青山は自から是れ絕世の景色である、伴ふ人も無きに誰の爲めに其の姿容を呈するぞや、此の事を說いて市朝の公子に向ふも、彼等には何も通ずる能はず馬耳東風である、

【餘論】紀曰く、六言最難、工即工、亦非正體と、我邦の金龍道人は「六言詩選」一卷を選集せるが、要するに一種の見戲のみ、

【字解】(一)爲容　杜荀鶴の詩、承恩不在貌、敎妾若爲容と、(二)馬耳　李白の詩、吟詩作賦北窗裏、萬言不直一杯水、世人聞此皆掉頭、有如東風吹馬耳と、

## 觀張師正所蓄辰砂

張師正が蓄ふる所の辰砂を觀る

將軍結髮戰蠻溪。(一)　將軍結髮して蠻溪に戰ふ、
篋有殊珍勝象犀。　篋に殊珍あり象犀に勝る、
漫說玉牀收箭鏃。(二)　漫に說く玉牀箭鏃を收むと、
何曾金鼎識刀圭。(三)(四)　何ぞ曾て金鼎刀圭を識らん、
近聞猛士收丹穴。(五)　近ごろ聞く猛士が丹穴を收むと、
欲助君王鑄裹蹏。(六)　君王を助けて裹蹏を鑄んと欲す、
多少空巖人不見。　多少空巖人見えず、
自隨初日吐虹蜺。(七)　自から初日に隨つて虹蜺を吐く、

【題義】張師正が家に蓄藏する辰州より出でし玉砂を觀て此の詩を作れるもの、

【詩意】將軍は結髮して以來七十餘度も蠻溪に戰爭をしたのである、分捕品として篋中には殊珍の象犀に勝る者がある、而して漫に說く玉牀には箭鏃を收むと、此れ以上に金鼎と刀圭の貴重品あることを識らない、近來聞く勇猛の武士が丹穴を手に收め、乃ち君王を助けて裹蹏を鑄んと欲すと、多少の空巖は人を見ることが出來ない、辰砂は自から初日に隨つて虹蜺の光彩を吐きつつある、

【餘論】紀曰く、意境開拓、不嫌小題大做、魏叔子謂、小題大做、俗人得意之筆、自是洞見肺腑語、亦有不可一概論者、此類是也と、佛家謂ふ、破一微塵、出大千經卷と、小題大做、必ずしも俗人の事ではない、小題大做の力を有する者は已に俗人ではない、魏叔子が俗人の弊を謂ふとならば可なるも、紀評の如く一概に論ずるは愚である、但此の第三句一本に分箭鏃に作る、收の字では

【字解】(一)將軍　漢の李廣、將軍と爲り、結髮して征蠻、七十餘戰と云ふ、(二)玉牀　「圖經」に、辰州出丹砂、其苗乃白石耳、土人謂之砂牀、箭鏃連牀者、色若鐵而瑩澈と、(三)金鼎　仙家の用、(四)刀圭　醫家の用、(五)丹穴「史記貨殖傳」に、巴蜀寡婦淸、其先得丹穴、而擅其利數世と、(六)裹蹏「漢書」、武帝太始二年、詔曰、往者朕郊見上帝、西登隴首、獲白麟、以饋宗廟、渥洼水、出天馬、泰山見黃金、宜改故名、今更黃金、爲麟趾裹蹏、以協瑞焉と、裹蹏は要するに黃金の名である、(七)吐虹蜺　「大洞煉眞寶經」に、上品光明沙者、受太陽、洞通澄明、正眞之正氣、降結紅光、耀如日色、中品白馬牙沙者、受太陽、平和柔順氣、結白光、懍慄如雲母色、下品紫靈沙者、受太陽山澤之靈、結紅紫色と、

收丹穴と故障を生ずる、紀が此の事を言はざるは疎である、

### 五禽言五首　　五禽言　五首

梅聖兪嘗作四禽言。余謫黄州寓居定惠院。遶舍皆茂林修竹。荒池蒲葦。春夏之交。鳴鳥百族。土人多以其聲之似者名之。遂用聖兪體作五禽言。

【訓讀】梅聖兪嘗て四禽言を作る、余黄州に謫せられ、定惠院に寓居す、舍を遶りて皆茂林修竹、荒地蒲葦、春夏の交、鳴鳥百族、土人多く其の聲の似たるを以て之に名づく、遂に聖兪が體を用ひ、五禽言を作る、

(一)

使君(一)向蘄州(二)。　使君蘄州に向ふ、
更唱蘄州鬼(三)。　更に唱ふ蘄州鬼、
我不識使君。　我使君を識らず、
寧知使君死。　寧ぞ使君の死を知らん、
人生作鬼(四)會不免。　人生鬼と作る會ず免れず、

【字解】【一】使君　漢代、太守を稱して府君と曰ひ、刺史を使君と曰ふ、凡そ奉使の官、亦使君と稱す、公も使君なれども、今は前の使君、王禹偁を指す、【二】蘄州　湖北黄州府に屬す、今日の蘄州縣、【三】蘄州鬼　公の自注に、王元之、自黄移蘄州、聞啼鳥、問其名、或對曰、此名蘄州鬼、元之大惡之、果卒於蘄と、【四】作鬼　生は陽



使君已老知何晚。　使君已に老ゆ知ること何ぞ晚き、

【自注】王元之、自黄移蘄州、聞啼鳥、問其名、或對曰、此名蘄州鬼、元之大惡之、果卒於蘄、

なれば人と曰ひ、死は陰なれば鬼と曰ふ、

【題意】梅聖兪が嘗て四禽言の詩を作る、公黄州に遷謫せられて定惠院に寓居せらる、其の院舍を遶りて茂林や修竹や荒池や蒲葦がある、春夏の際には、種種なる鳴鳥が羣集する、土人は其の鳥の名を其の聲に依つて名けて居る、遂に聖兪の詩を憶起して五禽言を作れるものである、

【詩意】曾て王禹偁は使君の官を以て蘄州に向はる、而して蘄州鬼の詩を唱へ出さる、我は使君とは知己でない、知己でないから使君の死んだことも知らない、が人生鬼と作ることは誰も會ず免かれざる所である、使君が蘄州に來りし時は年は相當に老いしならん、此の鳥聲を聞いて始めて死を知るは、其の知ること何ぞ晚いのでないか、

(二)

昨夜南山雨。　昨夜南山雨ふる、
西溪不可渡。　西溪渡る可からず、
溪邊布穀兒(一)。　溪邊の布穀兒、

【字解】【一】布穀兒　鳲鳩の異名、「爾雅」に、鳲鳩鵠鵴也、注云、今之布穀也とある、【二】脫破袴　公の自注に、土人謂布穀、爲脫却破

勸レ我脫(一)二破袴一。
不レ辭レ脫レ袴溪水寒。
水中照見催租瘢(三)。

【自注】土人謂二布穀一爲二脫却破袴一。

我に勸む破袴を脫せよと、
辭せずして袴を脫すれば溪水寒し、
水中照し見る催租瘢、

【詩意】昨夜は南山に雨が降る、西溪水漲るが故に渡ることを得ない、西溪邊の布穀兒は、渡らんと欲する我に破袴を脫げよと勸むるが如き語を爲す、我は勸告に應じて袴を脫いで渡れば如何にも溪水は寒い、水中に照して見る催租の瘢が袴にあることを、

袴一と、【三】瘢　瘢痕、キズアト　である、

〔三〕

去年麥不レ熟。
挾(一)レ彈規二我肉一。
今年麥上(二)レ場。
處處有二殘粟一。
豐年無(四)象何處尋。

去年麥熟せず、
彈を挾んで我肉を規す、
今年麥場に上る、
處處殘粟あり、
豐年無象何れの處にか尋ねん、

聽取林間快活(四)吟。

聽取す林間快活の吟、

【自注】此鳥聲云二麥飯熟即快活一。

【詩意】去年は麥が熟しない、農人が心配するに關せず田獵なぞをして役人は享樂する、今年は豐年にして麥が市場に上るのみならず處處に殘粟あるの始末、其の豐年の無象なれば何れの處に其の象を尋ぬるぞ、それには聽取するがよい鳥が林間に快活吟を爲すを、

【字解】【一】挾彈規我肉　此の義明白でない、施德初は漢書東方朔傳の其賈畝一金、今規以爲レ苑を引いて注するが要領を得ず、馮應榴は太元經の明珠彈肉費不レ當也を引いて注するも尙は明白でない、要するに麥も熟せざるに田獵なぞするは我が肉を損する如きものであるとの意と思ふ、【二】上場　唐の王建の詩、麥收上レ場絹在レ軸と、【三】無象「舊唐書」に、牛僧孺奏曰、太平無象、今歲未レ及二至理一、亦謂二小康一、若別求二太平一、非二臣等所一レ及と、【四】快活吟　公の自注に、此鳥聲云二麥飯熟即快活一と、

〔四〕

力(一)作力作。
蠶(二)絲一百箔。
壠上麥(三)頭昂。
林間桑子落。
願儂一箔千兩絲。
繰絲得(四)レ蛹飼二爾雛一。

【自注】此鳥聲、云二蠶絲一百箔一。

力作力作、
蠶絲一百箔、
壠上麥頭昂く、
林間桑子落つ、
願ふ儂が一箔千兩絲、
繰絲蛹を得て爾が雛を飼はんことを、

【字解】【一】力作　王梅溪曰く、「列女傳」に、秋胡妻曰、采桑力作、不レ願二人之金一と、【二】蠶絲　公の自注に、此鳥聲、云二蠶絲一百箔一と、【三】麥頭昂「王元景讀戲」に、元景嘗大醉、楊遵彥謂レ之曰、何大低昂、元景曰、黍熟頭低、麥熟頭昂、黍麥俱有レ所二以低昂一と、【四】得蛹「荀子蠶篇」に、蛹以爲レ母、蛾以爲レ父と、蠶が化して蛹と爲り、

蛹が化して蛾と爲る、

【詩意】力作なるか力作なるか、蠶絲一百箔である、壠上には麥頭が昂く見える、林間には桑子が落ちてある、願はくは儂が一箔千兩絲、繰絲より蛹を得て爾が雞を飼はんことを、

〔五〕

姑惡姑惡。　姑惡姑惡、

姑不惡。妾命薄。　姑惡ならず、妾が命薄し、

君不見東海孝婦　君見ずや東海の孝婦死して三年の乾

死作三年乾。　を作す、

不如廣漢龐姑去　如かず廣漢の龐姑去りて却還するに、

却還。【自注】姑惡水鳥也。俗云、婦以姑虐死。故其聲云。

【字解】【一】姑惡　公の自注に、姑惡水鳥也、俗云、婦以姑虐死、故其聲云と、【二】妾命薄「漢許后傳」に、妾薄命端遇竟寧前と、【三】東海孝婦「漢于定國傳」に、東海有孝婦、少寡亡子、養姑甚謹、其姑自經死、姑女告吏、婦殺我母、具獄上府、于公以爲、此婦養姑、以孝聞、必不殺也、太守不聽、竟論殺孝婦、郡中枯旱三年と、【四】龐姑「後漢列女傳」に、廣漢姜詩妻者、同郡龐盛之女也、詩事母至孝、妻奉順尤篤、母好飲江水、水去舍六七里、妻常泝流而汲、後値風不時得還、母渴、詩責而遣之、妻乃寄止鄰舍、晝夜紡績、市珍羞、使鄰母以意自遺其姑、如是者久之、姑怪問鄰母、鄰母具對、姑感慚呼還、恩養愈謹と、

【詩意】姑惡か姑惡か、姑が惡しきのではない妾が命の薄き故である、君も見玉へ、東海の孝婦死して三年枯旱を見る、それらの所爲は如かず廣漢の龐姑が婦を去らしめて復た呼び還したるに、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、此種題目、初作猶是樂府、變體歌謠遺意、再作則陳陳相因、轉入窠臼矣、何效之者至今不已也と、

次韻子由病酒肺疾發　子由酒を病み肺疾發するに次韻す

憶子少年時。肺病疲坐臥。　憶ふ子が少年の時、肺病坐臥に疲れしことを、

【一】嗽呀或終日。勢若風雨過。　嗽呀或は終日、勢は風雨の過ぐるが若し、

【三】虛陽作浮漲。客冷仍下墮。　虛陽浮漲を作し、客冷仍下墮す、

妻孥恐悵望。膾炙不登坐。　妻孥恐れて悵望、膾炙坐に登らず、

終年禁晚食。半夜發淸餓。　終年晚食を禁じ、半夜に淸餓發す、

胃强鬲苦滿。肺斂腹輒破。　胃强くして鬲苦滿つ、肺斂まりて腹輒ち破る、

【七】三彭恣啖嚙。二豎肯逋播。　三彭啖嚙を恣にし、二豎肯て逋播す、

寸田可治生。誰勸耕黃穤。　寸田生を治す可し、誰か勸めて黃穤を耕す、

【自注】新法方田、謂黃穤爲上腴。

探懷得眞藥。不待君臣佐。　懷を探りて眞藥を得たり、君臣佐を待たず、

初如雪花積。漸作櫻珠大[一二]。
隔牆聞三嚥[一三]。隱隱[一四]如轉磨。
自茲失故疾。陽唱[一五]陰輒和。
神仙多歷試。中路或坎坷[一六]。
平生不盡器[一七]。痛飲[一八]知無那。
舊人[一九]眼看盡。老伴[二〇]餘幾箇。
殘年一斗粟[二一]。待子同春簸[二二]。
云何不自珍。醉病又一挫。
眞源結梨棗[二三]。世味等糠莝[二四]。
耕耘當待穫。願子勤自課。
相將賦遠游。仙語不用些[二五]。

初めは雪花の積むが如く、漸く櫻珠の大を作す、
牆を隔てて三嚥を聞けば、隱隱として磨を轉するが如し、
茲より故疾を失し、陽唱へて陰輒ち和す、
神仙多く歷試し、中路或は坎坷、
平生器を盡さず、痛飲那ともする無きを知る、
舊人眼看盡す、老伴幾箇を餘す、
殘年一斗の粟、子を待つて同じく春簸せん、
云何ぞ自珍せず、醉病又一挫する、
眞源梨棗を結び、世味糠莝に等し、
耕耘當に穫を待つべし、願はくは子勤めて自課せよ、
相將に遠游を賦せんとす、仙語些を用ひず、

【字解】【一】 嘑呀　大に口を張る貌、【二】 風雨過　岑參の詩、渭上風雨過と、【三】 虛陽作浮漲　陰氣實ちて陽氣虛なるを謂ふ、【四】 客冷仍下墮　元氣下に墮つるを謂ふ、【五】 輸炙不登坐　妻兒と團欒して同膳せざるを謂ふ、【六】 鬲　鬲は膈、心と脾の間即ち胃腑である、【七】 三彭　三尸を謂ふ、道家に心中の神を謂ふ、一は腦に居り、二は明堂に居り、三は腹胃に居り、人に害を加ふ、【八】 二豎　病魔と言ふと同じ、「左傳成公十年」に、公夢疾爲二二豎子一、曰、彼良醫也、懼傷我、焉逃之、其一曰、居二肓之上、膏之下一、若二我何一、醫至、曰、疾不可爲也、在二肓之上、膏之下一、攻之不可、達之不及、藥不至焉と、【九】 逋播　「書經」に、予惟以二爾庶邦一、于伐二殷逋播臣一と、逋は逃亡、播は遷移である、【一〇】 耕黃秬　公の自注に、新法方田、謂二黃秬一爲二上腴一と、秬はモチゴメ、【一一】 君臣佐　一君、二臣、三佐、藥名である、施德初曰く、養命之藥多君、養性之藥多臣、治病之藥則多佐と、【一二】 櫻珠大　「老子節解」に曰く、唾者溢爲二醴泉一、聚爲二玉漿一、流爲二華池一、散爲二津液一、降爲二甘露一、漱以明之、旣藏潤身、以流二百脈一、化二養精神一、支節毛髮、堅固長春と、【一三】 聞三嚥　嚥は咽と同じ、「孟子滕文公章句下」に、井上有李、螬食實者過半矣、匍匐往將食之、三咽然後、耳有聞、目有見と、【一四】 隱隱　不分明なる形容、又憂戚の形容、又盛なる形容、今は盛なる貌、張衡の賦に隱隱轔轔と、【一五】 陽唱　「詩序」に、昏姻之道缺、陽唱而陰不和、男行而女不隨と、【一六】 坎坷　不遇なる貌、【一七】 不盡器　唐の何諷が夢湯賦に、飲不盡器、枯腸已療と、【一八】 痛飲　「世說」に、痛二飲酒一、熟二讀離騷一、便可稱二名士一と、甚だしく酒を飲む、【一九】 舊人　「尙書」に、赤惟圖任二舊人一共政と、【二〇】 老伴　白樂天の詩、老伴如君少、歡情向我偏と、【二一】 一斗粟　「漢淮南厲王傳」に、廢處二蜀嚴道邛郵一、不食而死、民歌之曰、一尺布倘可縫、一斗粟倘可舂、兄弟二人不二相容一と、【二二】 舂簸　「魏書崔亮傳」に、亮傭二擬任一、其妻不免親事二舂簸一と、米を臼にて搗き、糠を箕にてさびるを舂簸と云ふ、【二三】 梨棗　「眞誥」に右英王夫人、授二許長史一曰、火棗交梨之樹已生、君心中倘有二荊棘相雜一、是以二樹不見、可二剪二荊棘一用二此樹一單生上と、梨はナシ、棗はナツメ、藥用である、【二四】 等糠莝　糠はヌカ、莝は斫藁、細かに切りしワラ、馬糧である、「史記」に范雎が須賈に莝豆を食はしめたとある、【二五】 不用些　些の字、平去二聲を帶ぶ、平聲の場合は些少、スコシの意味、去聲の場合は無意味の助字、兮の字と同用、楚人の聲、今は去聲である、

【題義】 子由が酒の爲めに肺疾を發したるを憂ふる詩に次韻して作れるもの、

【詩意】 記憶する子が少年の時、肺を病んで坐臥共に疲勞を感せしことを、喊呀すること或は終日、而かも病勢は風雨の若くに速かに過ぎて、元氣は虛なるも外見かるはずみを作すが、客冷は仍ほ下墮する、妻孥は心配して悵望する、冷膾熱炙も團欒して食ふことが出來ない、終年の間　晚　食を禁ず、其

の結果半夜に淸饑を訴ふるに至る、胃が強ければ食することは出來るが食すれば鬲部が苦惱である、肺が斂まれば腹が輒ち容易に破れる、三彭の邪神が徒らに啖嚙を 恣 にするのみにて我が身體の榮養にはならない、而かも病魔が肯て逋播するのでもない、其の寸田を如何して生を治すべきである、誰か黃穠を耕すことを勸むる、懷中を探りて眞藥を得、此の眞藥あれば別に君臣佐を待たない、初めは雪花を積むが如き狀も、次第に櫻珠の大なる如き形を作す、牆を隔てて三咽を聞く、其の聲は隱隱として磨を轉ずる如くである、玆よりして慢性たる故疾は失するを得、陽唱陰和の調子が取れる、神方や仙方を多く歷試したるに、中路に於て或は坎坷する、平生其の容器の量を盡くさず、痛飮奈ともする無きを知る、舊知人は眼看盡して、老伴は今幾箇も餘すことがない、殘年一斗の粟、子を待つて舂簸を同じうせんと思ふのみ、云何ぞ自愛自珍せず、自から求めて醉病平生の 志 一挫する、淸める眞源は梨棗を結ぶも、濁れる世味は糠覈を食ふに等し、耕耘して當に收穫を待たんと思ふ、願ふ子の自課を勸むることを、相將に元氣に復して遠游を賦せんと思ふ、仙語は些を用ひない、

【餘論】 此の篇は仙書と醫書に精通する者にあらざれば、眞意を解する能はず、吾が解する所、誤れるものあらん、達人の叱正を乞ふのみ、紀曉嵐曰く、末句未レ免ニ强押一と、公別に苦語不成些ニの語がある、今、仙語不用些ニと、共に强押妥ならざる感がある、

# 鐵拄杖

鐵拄杖

柳眞齡字安期。閩人也。家寶ニ一鐵拄杖一。如ニ楖栗木一。牙節宛轉天成。中空有レ簧。行輒微響。柳云。得ニ之浙中一。相傳王審知。以遺ニ錢鏐一。以賜ニ一僧一。柳偶得レ之以遺レ余。作ニ此詩一謝レ之。

【訓讀】 柳眞齡字は安期、閩人なり、家に一鐵拄杖を寶とす、楖栗木の如く、牙節宛轉天成、中空にして簧あり、行けば輒ち微響す、柳云ふ、之を浙中に得と、相傳ふ王審知、以て錢鏐に遺る、以て一僧に賜ふ、柳偶ま之を得、以て余に遺る、此の詩を作り之を謝す、

柳公手中黑蛇滑。
千年老根生ニ乳節一。
忽聞鏗然(一)爪甲聲。
(二)四坐驚顧知ニ是鐵一。
含簧腹中細泉語。
(三)迸火石上飛星裂。

柳公手中黑蛇滑か、
千年の老根乳節を生ず、
忽ち聞く鏗然爪甲の聲、
四坐驚顧是れ鐵なるを知る、
含簧腹中細泉語る、
迸火石上飛星裂く、

【字解】【一】爪甲聲　杜子美の桃竹杖詩に、倚ニ我老病ニ贈ニ兩莖ニ出入爪甲鏗有レ聲と、【二】四坐驚　杜子美の詩、落筆四座驚と、【三】迸火　呂洞賓の詩、似ニ石中迸火一と、【四】閩王　王審知を言ふ、王は唐末に威武節度使と爲り、後梁之を閩王に封ず、福建の地に據る、凡そ六主五十四年、南唐の爲め滅ぼさる、

公言此物老有神。　公は言ふ此の物老いて神ありと、
自昔閩王餉吳越。　昔し閩王吳越に餉りしより、
不知流落幾人手。　知らず流落幾人の手、
坐看變滅如春雪。　坐して看る變滅春雪の如し、
忽然贈我意安在。　忽然我に贈る意安くに在る、
兩脚未許甘衰歇。　兩脚未だ許さず衰歇を甘んずるを、
便尋轍迹訪崆峒。　便ち轍迹を尋ねて崆峒を訪ふ、
徑渡洞庭探禹穴。　徑ちに洞庭を渡りて禹穴を探り、
披榛覓藥採芝菌。　榛を披き藥を覓めて芝菌を採らん、
刺虎鏦蛟擉蛇蝎。　虎を刺し蛟を鏦き蛇蝎を擉し、
會教化作兩錢錐。　會ず化して兩錢錐と作らしめん、
歸來見公未華髮。　歸來公を見る未だ華髮ならず、
問我鐵君無恙否。　我に問ふ鐵君恙なきや否や、
取出摩挲向公說。　取出して摩挲公に向つて說かん、



【五】衰歇　太白の詩、瑤草恐衰歇と、【六】轍迹「老子」に、善行無轍迹と、【七】崆峒「莊子在宥篇」に、黃帝立爲天子十九年、令行天下、聞廣成子、在崆峒之上、故往見之と、【八】禹穴「史記」に、禹巡狩至會稽而崩、因葬焉、有孔穴、民間云、禹入此穴と、【九】鏦蛟　蛟は龍の一種、ミヅチ、鏦は小さき槍、【一〇】擉　獸類や魚類を刺して捕ふる器具、【一一】兩錢錐「說苑」に、干將、莫邪、拂鐘不錚、試物不知、揚刃離金、斬羽契鐵斧、此至利也、然以之補履、曾不如兩錢之錐と、【一二】華髮　白髮、【一三】無恙否　施德初云、「桂苑談叢」李德裕贈僧方竹杖、及再見問杖無恙否、曰已規而漆之矣、公嗟惋久之と、【一四】摩挲　摩擦と同じ、劉禹錫の詩、船頭大甕鐵、摩挲光陳隣と、

【題意】柳眞齡字は安期は閩人である、家寶として一の鐵拄杖を所持する、柳栗木の如くにして、牙節宛轉天成である、中空にして簧がある、行くに微しく響を爲す、嘗て之を浙中より得と、相傳ふ王審知が吳越王の錢鏐に遺り、錢鏐は之を一僧に賜ひ、柳偶ま之を得て以て余に遺る、故に此の詩を作りて謝を表すと、

【詩意】柳公の手中に黑蛇滑かである、千年の老根に乳節を生ずるやと疑ふ、忽ちに聞く鏗然として爪甲に聲あるを、四坐の人皆驚き顧みて是は鐵であることを知る、含簧の腹中は細聲語るが如く、石上に卓するときは火迸しり飛星裂く、柳公は言ふ此の物老いて益す神ありと、昔し閩王が吳越王に餉りし以來、甲と乙と幾人の手に流落せしことを知らず、坐して變滅を看ること春雪の如く、忽然と我に贈れる公の意は安くに在るぞや、兩脚未だ許さない衰歇を甘んじ家に在るを、便ち轍迹を尋ねて崆峒を訪はんと思ふ、徑ちに洞庭を渡りて禹穴を探り、荊薪を披き藥を覓め芝菌を採收し、又險路を行くには虎を刺し蛟を擉し蛇蝎を擉すことあらん、會ず此の鐵杖を化して兩錢の錐と爲すべきである、而して歸り來りて公に見えんも未だ華髮にはならない、我に問はば鐵君恙無きや否やと、乃ち取出して摩挲して此の如く依然たる狀を公に向つて說かん、

【餘論】紀曉嵐曰く、少揮洒自如之致と、世に傳唱する詩ではあるが、坡公の至れるものではない、

## 與潘三(一)失解後飲酒

潘三失解後飲酒するに與ふ

(二)千金敝帚人誰買。　千金の敝帚人誰か買ふ、
(三)半額蛾眉世所妍。　半額の蛾眉世に妍とする所、
顧我自爲(四)都眊矂。　我を顧みるに自から都眊矂たり、
憐君欲鬭(五)小嬋娟。　憐む君が小嬋娟を鬭はさんと欲す、
(六)青雲豈易量他日。　青雲豈他日を量り易からんや、
黃菊猶應似去年。　黃菊猶は應に去年に似たるべし、
醉裏未知誰得喪。　醉裏未だ知らず誰か得喪、
滿江(七)風月不論錢。　滿江の風月錢を論ぜず、

【字解】【一】失解　即ち不調の事である。【二】千金　「魏文帝典論」に、家有敝帚、享之千金、此不自見之患也と、【三】半額　「後漢馬廖傳」に、上疏長樂宮曰、長安語曰、城中好高髻、四方高一尺、城中好廣眉、四方且半額、城中好大袖、四方全匹帛と、【四】都眊矂　五代の王定保が著はせる「摭言」に、我唐進士不捷所飽、謂之打眊矂と、又「封龍子」に、古之謂知道者曰先生何也、猶言先醒也、不聞道術之人、則冥於得失、不知亂之所由、眊眊乎其猶醉也と、目の明かならざる貌を言ふ、【五】小嬋娟　大公曰く、柳嬋娟、竹嬋娟、月嬋娟、謂之三嬋娟、今言小嬋娟、似指人言之矣と、【六】青雲　「史記范雎傳」に、須賈曰、不意君能自致青雲之上と、【七】風月　太白の詩、淸風明月、不用一錢買と、

【題義】潘三が失解後に飲酒するを聞き賦して與へたものである、

【詩意】敝帚を千金に買ふ類の鈍漢は無い、けれど半額の蛾眉は妍なるものではないが時樣を逐ふの者は之を妍と爲る、顧みるに我は自から都て人を見るに眊矂である、又憐む君が時流と小嬋娟を鬭はさんとするの情を、青雲は握れるか握れないか他日の事は今判らない、が黃菊は今年も依然として去年と同樣である、而かも醉裏誰も得喪の理は知ることは出來ない、滿江の風月は錢を論じないから之に對して飲酒するもよい、

【餘論】紀曉嵐曰く、三句太凡鄙と、

309
65

終

# 續國譯漢文大成

文學部 五十九

309
65

始

吉田徐郎氏 寄贈本

# 續國譯漢文大成

文學部 第五十九册（第十五帙の三）

## 蘇東坡詩集 三の三

309
65

# 蘇東坡詩集　卷二十一

## 古今體詩　九十二首

### 正月二十日往岐亭。郡人潘古郭三人。送余於女王城東禪莊院

正月二十日、岐亭に往く、郡人潘古郭の三人、余を女王城東の禪莊院に送る

十日春寒不出門。
十日春寒門を出でず、

不知江柳已搖邨。
知らず江柳已に邨に搖くを、

稍聞決決流冰谷。
稍や聞く決決冰谷に流るるを、

盡放青青沒燒痕。
盡く青青を放ちて燒痕を沒す、

數畝荒園留我住。
數畝の荒園我を留めて住せしめ、

半瓶濁酒待君溫。
半瓶の濁酒君を待つて溫む、

【字解】〔一〕決決　韋蘇州の詩、決決水泉動と、王建の詩、溫泉決決出宮流と、水流の貌、
〔二〕燒痕　平野の草などを燒きたる痕、劉長卿の詩、春入燒痕青と、

去年今日關山路。　去年今日關山の路、
細雨梅花正斷魂。　細雨梅花正に斷魂、

【三】關山路　公嘗きに至黃州の詩、昨夜東風吹石裂、半隨飛雪度關山と、

【題義】元豐四年の正月二十日黃州に在りて、岐亭に往き、潘古郭の三人が之を女王城東の禪莊院に案内する、其の狀を敍す、

【詩意】十日餘り春寒の爲め門を出ない、知らず江柳が新枝を郇に搖かすを、稍や聞く決決として冰谷に流るる水音を、盡く青青たる草は燒痕より放ち出づ、莊院數畝の荒園は我を留めて住せしめる價値がある、又半瓶の濁酒は君を煩はして溫むるを待つ、憶ふに去年の今日は關山の路に在つて、細雨中に梅花を看て正に斷魂せしことを、

【餘論】紀曉嵐曰く、一氣渾成と、孟春の景情を敍し去りて、水の決決と流るる如く、毫も澀態あることなし、公の詩中溫藉に屬する者、

## 東坡八首

東坡　八首

余在黃州二年。日以困匱。故人馬正卿哀余乏食。爲於郡中請故營地數十畝。使得躬耕其中。地既久荒。爲茨棘瓦礫之場。而歲又大旱。墾闢之勞。筋力殆盡。釋耒而嘆。乃作是詩。自愍其勤。庶幾來歲之入。以忘其勞焉。

【訓讀】余黃州に在る二年、日に以て困匱、故人馬正卿、余が乏食を哀れみ、爲めに郡中に於て、故營地數十畝を請ひ、其中に躬耕するを得せしむ、地既に久しく荒れ、茨棘瓦礫の場と爲る、而して歲又大旱、墾闢の勞、筋力殆んど盡き、耒を釋てて嘆す、乃ち是の詩を作り、自ら其の勤を愍む、庶幾ふ來歲の入、以て其の勞を忘るるを、

廢壘無人顧。頹垣滿蓬蒿。　廢壘人の顧みる無し、頹垣蓬蒿滿つ、
誰能捐筋力。歲晚不償勞。　誰か能く筋力を捐て、歲晚勞を償はざる、
獨有孤旅人。天窮無所逃。　獨り孤旅の人あり、天窮して逃るる所無し、
端來拾瓦礫。歲旱土不膏。　端來りて瓦礫を拾ふ、歲旱土膏ならず、
崎嶇草棘中。欲刮一寸毛。　崎嶇たる草棘の中、刮らんと欲す一寸の毛、
喟然釋耒嘆。我廩何時高。　喟然として耒を釋てて嘆す、我廩何れの時か高き、

【字解】【一】蓬蒿　「莊子庚桑楚篇」に、妄鑿垣牆、而殖蓬蒿と、「三輔決錄」に、隱身不仕、所居蓬蒿沒人と、ヨモギの繁生するを言ふ、【二】天窮　天民之窮者、【三】端來　首來、はじめて來る、【四】一寸毛　「博物志」に、地以草木爲之毛と、一寸以上もある艸、【五】我廩　廩は米倉、コメグラ、「毛詩」に、亦有高廩、萬億及秭と、

【題義】始めて黃州に來り二年の間、非常に困匱した、舊知の馬正卿は余が乏食を哀れみ、余が爲めに、郡中の故營地にて數十畝ある土地を躬耕せよと賜はる、其の地は久しく荒蕪に一任せし故を以て、茨棘や瓦礫が充つ、其の上に大旱に遇うて、墾闢するに筋力を勞盡する、耒を釋てて嘆じ以て是の詩を作る、自から其の勤勞を愍む、唯來年の收穫を樂みに、以て聊か其の勞を忘る、

【詩意】廢壘は久しく人の顧みる無し、頹垣は頹垣の儘にて蓬蒿が亂生するに一任す、誰か能く此の荒地に筋力を損つるものである、折角骨折るも結果は勞を償ふに至らない、獨り孤旅の人は、所謂天民の窮、此の荒地の整理より外に逃るる所はない、首め來りて先づ瓦礫を拾ひ舍て、歲は旱なるが故に土には膏氣が無い、而かも崎嶇たる草棘の中に、一寸以上もある毛を刮るのである、是に於てか喟然として耒を釋てて嘆を發す、我米倉が何れの時にか充盈するぞ、

【餘論】紀曉嵐曰く、八章皆出二入陶杜之間一、而參以二本色一、不レ摹レ古、而氣息自古と、末四句逼二眞少陵一と、

〔二〕

荒田雖二浪莽一。高庳各有レ適。
下隰種二秔稌一。東原蒔二棗栗一。
江南有二蜀士一。桑果已許レ乞。

〔二〕

荒田浪莽なりと雖も、高庳各の適するあり、
下隰に秔稌を種ゑ、東原に棗栗を蒔く、
江南に蜀士あり、桑果已に乞を許す、

好竹不レ難レ栽。但恐鞭橫逸。
仍須レト二佳處一。規以安二我室一。
家童燒二枯草一。走報暗井出。
一飽未二敢期一。瓢飲已可レ必。

好竹栽し難からず、但恐る鞭橫逸するを、
仍は須らく佳處をトし、規して以て我室を安んずべし、
家童枯草を燒き、走り報す暗井出づと、
一飽未だ敢て期せず、瓢飲已に必とすべし、

【字解】〔一〕浪莽　陶淵明の詩、浪莽林野娛と、〔二〕秔稌　秔はウルシネ、稌はモチゴメ、〔三〕蜀士　王梅谿曰、蜀士王文甫、文甫乃嘉州犍爲人、居二於武昌一、先生在二黃州謫居一時、嘗啓與二文甫一往還矣と、〔四〕鞭橫逸　釋贊寧の「竹譜」に、鞭多西南行、故謂二之東家種一竹西家理一也と、〔五〕瓢飲　謝靈運の詩、瓢飮療二朝飢一と、

【詩意】荒田は浪莽ではあるが、高處と庳處に適不適がある、下隰の地には秔稌を種ゑると適する、東原の地には棗栗を蒔くと適する、江南に我友人の蜀士が居る、桑果を種うることを乞ふを以て之を許すが、好竹も栽うるによい、但恐る何處なるを擇ばず鞭の橫逸することを、仍ほ須らく佳處をトして、規畫して我が居室を設置せんと、其の用意をして家童が枯草を燒けば、乃ち暗井あるを發見したと報じて來る、食料の方は一飽すること未だ豫期出來ないが、飲料の方は先づ心配する必要は無い、

【餘論】紀曉嵐曰く、波瀾好、結得沈著、

〔三〕

自昔有微泉。來從遠嶺背。
穿城過聚落。(一)流惡壯蓬艾。(二)(三)
去爲柯氏陂。(四)十畝魚蝦會。
歳旱泉亦竭。枯萍黏破塊。(五)
昨夜南山雲。雨到一犂外。(六)
泫然(七)尋故瀆。(八)知我理荒薈。(九)
泥芹(一〇)有宿根。一寸嗟獨在。
雪芽何時動。春鳩行可膾。(一一)

【自注】蜀人貴芹芽膾、雜鳩肉爲之。

昔より微泉あり、來ること遠嶺の背よりす、
城を穿ちて聚落を過ぎ、惡を流して蓬艾を壯にす、
去つて柯氏陂と爲る、十畝魚蝦會す、
歳旱して泉亦竭き、枯萍破塊に黏す、
昨夜南山雲あり、雨一犂の外に到る、
泫然として故瀆を尋ね、知る我が荒薈を理するを、
泥芹宿根あり、一寸獨在を嗟す、
雪芽何れの時にか動く、春鳩行くゆく膾にすべし、

【字解】〔一〕聚落　郷里を云ふ、「綱目集覽」に、人所聚居、故謂之郡落、屯落、聚落と、「後漢書王扶傳」に、扶少修節行、客居琅邪、所止聚落、化其德と、〔二〕流惡　杜子美大雨詩に、流惡邑里淸と、〔三〕蓬艾　ヨモギ、〔四〕柯氏陂　「圖經」に曰く、柯山四望、南直高邱、故曰柯邱、接先生詩、欲買柯氏林、卽此地也と、〔五〕破塊　漢の桓寬の「鹽鐵論」に、周公時雨不破塊と、塊は土塊、土のかたまり、〔六〕一犂　唐王洌、雨の詩、入土一犂農父喜、揾花終夜美人愁と、耕作するに程度の宜しき雨、〔七〕泫然　涙の流れる貌、「檀弓」に、孔子泫然流涕と、〔八〕故瀆　故き溝瀆、ミゾ、〔九〕荒薈　荒草の叢薈、〔一〇〕泥芹　杜子美の詩、飯煮靑泥坊底芹と、〔一一〕可膾　公の自注に、蜀人貴芹芽膾、雜鳩肉爲之と、

【詩意】昔しから微微たる流泉がある、其の源は遠嶺の背陰より出るのである、城を穿ちて聚落に流れ過ぐ、惡物を流して蓬艾を壯にする、而して流れ去つて柯氏陂と爲る、僅僅十畝の小なるも魚蝦は多く會まる、歳が旱に遇うて泉も亦竭き、枯れた水萍が破塊に黏してある、然るに昨夜は南山に雲が起り、雨も一犂の外に濕し到る、泫然として故瀆を尋ぬるものは、知る我が荒薈を理するのである、泥芹は舊宿根が枯死せざるが故に、一寸獨在するを憫嗟する、雪芽は何れの時か靑色を動かして、春鳩と調理して膾にして食ふことが出來るか、

【餘論】紀曉嵐曰く、泫然二句、無理有情、滄浪所謂詩有別趣、蓋指此種、唯標爲宗旨、則陰矣と、

〔四〕

種稻淸明前。樂事我能數。
毛空(一)暗春澤。鍼水(二)聞好語。

【自注】蜀人以細雨爲雨毛、稻初生時、農夫相語、稻鍼出矣。

分秧及初夏。漸喜風葉擧。
月明看露上。一一珠垂縷。(三)
秋來霜穗重。顚倒相撐拄。(四)

〔四〕

稻を種う淸明の前、樂事我能く數へん、
毛空春澤暗く、鍼水好語を聞く、
秧を分ちて初夏に及ぶ、漸く喜ぶ風葉の擧がるを、
月明かにして露上を看る、一一珠縷を垂る、
秋來霜穗重く、顚倒相撐拄す、

但聞畦隴間、蚱蜢(五)如風雨。　但聞く畦隴の間、蚱蜢風雨の如し、

【自注】蜀中稻熟時、蚱蜢羣飛田間、如小蝗狀、而不害稻、

新春便入甑、玉粒照筐筥。(六)　新春便ち甑に入る、玉粒筐筥を照す、

我久食官倉、紅腐(七)等泥土。　我久しく官倉を食む、紅腐泥土に等し、

行當知此味、口腹(八)吾已許。　行くゆく當に此の味を知るべし、口腹吾已に許す、

【字解】〔一〕毛空　公の自注に、蜀人以細雨爲雨毛、稻初生時、農夫相語、稻鍼出矣と、〔二〕鍼水　杜子美の詩、蜀江如線如鍼水、荆岑彈丸心未已と、〔三〕珠垂縷　江文通の「別賦」に、秋露如珠、秋月如珪と、〔四〕撑拄　顚するものと、倒するものと、互にササヘササフルのである、〔五〕蚱蜢　公の自注に、蜀中稻熟時、蚱蜢羣飛田間、如小蝗狀、而不害稻と、俗にイナゴと稱する蟲、〔六〕筐筥　「毛詩」召南に、于以盛之、維筐及筥と、米を盛る圓形のハコである、〔七〕紅腐　「漢賈捐之傳」に、元狩六年、太倉之粟、紅腐而不可食と、〔八〕口腹　白樂天の詩、採擷助盤筵、芳滋盈口腹と、

【詩意】稻を清明四月五日の前に種う、而して其の結果の樂事を見ることを指を屈して數ふ、細雨霏霏たるが故に春澤は暗く、鍼水は淙淙として好語を聞く、而して分秧は初夏の節に及ぶ、漸く喜ぶ風の爲めに葉が擧る程成長せしを、月明に露の葉上に上るを看れば、一一珠が縷を垂るるの狀態である、既にして秋來れば霜穗が重く、此と彼と顚倒して相撑拄する、但聞く畦隴の間、蚱蜢が羣飛するの聲風雨の如くである、是に於て穫り收めて新春して便ち甑に入るれば、玉粒が筐筥を照す如くである、我は久しく官の米を食うたが、多く紅腐して泥土に等しく味が無い、行くゆくは新米の新味を知らんと、口腹の慾今日より吾自から許して居る、

【餘論】紀曰く、三四究微嫌生造と、又我久以下を許して、忽作得意語、正無聊之極語也と、細讀するに樂事我能數の五字よりして以下皆樂事を取次に敍し來る、一脈が明白に貫流する、公の詩此の如きは多くあらず、其の精細は後生宜しく學ぶべきである、

〔五〕

良農惜地力(一)、幸此十年荒。(二)　良農地力を惜しむ、幸に此に十年荒る、

桑柘未及成、一麥庶可望。　桑柘未だ成るに及ばざるも、一麥庶はくは望む可し、

投種未逾月、覆塊已蒼蒼。　投種して未だ月も逾えず、塊を覆うて已に蒼蒼、

農父告我言、勿使苗葉昌。　農父我に告げて言ふ、苗葉をして昌ならしむる勿れ、

若欲富餅餌(三)、要須縱牛羊。(四)　若し餅餌を富まさんと欲せば、要ず須らく牛羊を縱つべし、

再拜(五)謝苦言(六)、得飽不敢忘。　再拜して苦言を謝す、飽を得て敢て忘れず、

【字解】〔一〕良農　「荀子」に、良農不爲水旱不耕と、〔二〕地力　「周禮」に、以任地力と、〔三〕餅餌　「宋史吳元扆傳」に、濟以舟楫、設餅餌以食と、餅は麥粉のモチ、餌は米を蒸して造る、モチの團子である、〔四〕縱牛羊　賈思勰の「齊民要術」に、耆麥之地、宜縱牛羊踐之と、〔五〕再拜　杜子美の詩、我見常再拜と、〔六〕苦言　「史記商君傳」に、語有之矣、貌言華也、至言實

也、苦言藥也、甘言疾也、夫子果肯終日正言、軾之藥也と、

【詩意】良農は耕地の力を惜しむが故に、幸に此の土地は十年も荒蕪に任してある、今遽かに桑柘は一朝に成らずとするも、一麥は收穫あるを望むに難くはない、投種して未だ月を踰えざるに、塊を覆うて麥の芽は已に蒼蒼と生長する、農父は我に忠告する、苗葉を昌んならしめてはいかぬ、君が餅餌を富まさん爲めならば、要ず牛羊の力を借りて之を踐ましむるがよい、我は再拜して其の苦言を謝す、良結果を得る志あれば、其の苦言は敢て忘れない、

【餘論】紀曰く、此亦寓二憂戚玉成之意一、觀二苦言字一可レ見と、

〔六〕

種棗期可剗、種松期可斵。
事在十年外、吾計亦已慜。
十年何足道、千載如風雹。
舊聞李衡奴、此策疑可學。
我有同舍郎、官居在灊岳。

【自注】李公擇也、

遺我三寸甘、照座光卓犖。

〔六〕

棗を種ゑて剗く可きを期す、松を種ゑては斵る可きを期す、
事十年の外に在り、吾計亦已に慜む、
十年何ぞ道ふに足らん、千載風雹の如し、
舊聞く李衡の奴、此策學ぶ可きを疑ふ、
我に同舍の郎あり、官居灊岳に在り、
我に遺る三寸の甘を、座を照して光卓犖、

百栽倘可致、當及春冰渥。
想見竹籬間、青黃垂屋角。

百栽倘くは致す可し、當に春冰の渥きに及ぶべし、
想ひ見る竹籬の間、青黃屋角に垂る、

【字解】【一】可剗　剗除して之を取るを言ふ、【二】可斵　斫斷するを言ふ、【三】千載　何義門曰、一本作二載、哈謂至黃二年也、作千載豈有味乎と、義門の詩眼無きこと笑ふべきもの、【四】李衡奴　「三國志孫休傳注」に、李衡字叔平、入吳爲丹陽太守、毎欲治家、妻輒不聽、後密遣客十人於武陵龍陽、汎洲上作宅、種甘橘千株、臨死戒兒曰、汝母惡我治家、故窮如是、然吾州里、有千頭木奴、不責汝衣食、歳上一匹絹、亦足可用耳と、甘橘を指して奴と言ふ、【五】同舍郎　公の自注に、李公擇也と、【六】灊岳　衡山南嶽を言ふ、灊は潛と同じ、青水出づるが故に此の名がある、李公擇は刑獄提刑の官を以て此に在る、【七】三寸甘　三寸の甘橘、【八】卓犖　高く拔き出づる、殊絶、超越の義、【九】屋角　杜子美の詩、紅糊屋角花と、

【詩意】棗を種ゑては結果剗ぎ食ふべきを期する、松を種ゑては結果斵りて材と爲すべきを期する、然れども事は速刻ではない十年以後に在る、吾が計畫は亦已に慜んで居る、考ふるに十年は三千六百日何ぞ道ふに足らん、千載と雖も風雹の過ぎるが如く疾速である、舊くから聞いて居る李衡が橘樹を種ゑし事を、此の策は果して學ぶべきや否やを疑ふ、然るに我に同舍郎あり、我に三寸餘の甘橘を遺る、其の實の光は座を照して卓犖たるものである、百本も願ふことなら之を致して、當に春冰の渥きころに種ゑん、豫め想ひ見る竹籬の間、青黃の實が纍纍として屋角に垂るることを、

〔七〕

潘子久不調、沽酒江南郵。

〔七〕

潘子久しく調せられず、酒を江南の郵に沽る、

郭生本將種。賣藥西市垣。 郭生本將種、藥を西市垣に賣る、
古生亦好事。恐是押牙孫。 古生も亦好事、恐らくは是れ押牙の孫ならん、
家有十畝竹。無時客叩門。 家に十畝の竹あり、時に客の門を叩く無し、
我窮交舊絶。三子獨見存。 我窮して交舊絶つ、三子獨り存せらる、
從我於東坡。勞餉同一飧。 我に東坡に從ふ、勞餉同じく一飧、
可憐杜拾遺。事與朱阮論。 憐む可し杜拾遺、事朱阮と論ず、
吾師卜子夏。四海皆弟昆。 吾師卜子夏、四海皆弟昆、

【字解】〔一〕潘子 名は大臨、字は邠老、榮陽の人、〔二〕不調 「漢張釋之傳」に、十年不得調と、調は轉遷、長く一官一役に沈滯して進級せざるを謂ふ、〔三〕郭生 名は遘、汾陽の人、〔四〕將種 「漢書齊悼惠王傳」に、朱虛侯劉章、侍高后宴、爲酒吏、請曰、臣將種也、請以軍法行酒と、〔五〕古生 名は黄道、新平の人、〔六〕押牙孫 王梅溪曰く、古押牙、富平縣俠客也、盜取來陵宮女無雙、以與王仙客爲妻、寃死者數人、押牙亦自刎、事詳見麗情集と、「麗情集」に、劉振女曰無雙、許以妻王仙客、未果、而振授朱泚僞官、無雙籍入掖庭、仙客怨慕不已、聞富平古押牙、人間有心人、以情告之、古生作奇法取之、使復爲夫婦五十年と、〔七〕三子 潘と郭と古と、〔八〕杜拾遺 杜子美は官拾遺である、〔九〕朱阮論 杜子美の詩、梅熟許同朱老喫、松高擬對阮生論と、〔一〇〕卜子夏 「論語顏淵篇」に、司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆兄弟也と、

【詩意】潘子は有用の才を抱き乍ら久しく調せられず、酒を江南の郵里に沽りて生活する、郭生も亦本軍人の家である、不幸にして西市に賣藥して生活する、古生も亦好事の人である、恐らくは古の俠客たる古押牙の孫であらう、我が家に十畝の竹林がある、客の門を叩きて來るの時は無い、我は窮して交游の知己今は絶えて居る、幸に君等三人があるのみ、我に此の僻地の東坡に從游して、勞餉同じく一飧する、憐れなるは杜拾遺である、萬事朱阮の二子と論するのみ、又大きく考へて見ると吾が師と爲すべきは子夏である、四海の內は皆弟昆であると言うて司馬牛を慰めて居る、

〔八〕

馬生本窮士。從我二十年。 馬生本窮士、我に從ふ二十年、
日夜望我貴。求分買山錢。 日夜に我が貴を望む、買山の錢を分たんことを求む、
我今反累君。借耕輟茲田。 我今反つて君を累す、借耕茲田を輟む、
刮毛龜背上。何時得成氈。 刮毛龜背の上、何れの時か氈を成すを得ん、
可憐馬生癡。至今夸我賢。 憐む可し馬生の癡、今に至りて我賢を夸る、
衆笑終不悔。施一當獲千。 衆笑ふも終に悔いず、一を施して千を獲るに當る、

【字解】〔一〕馬生 「東坡志林」に、馬夢得、與僕同歲月生、少僕八日、是歲生者、無富貴人、而僕與夢得、爲窮之冠、即吾二人而觀之、當推夢得爲首と、〔二〕買山錢 唐の范攄の「雲溪友議」に、符載山人、以青書抵于頔、乞買山錢百萬、與之と、〔三〕借耕輟茲田 輟は止也、已也、「史記陳涉世家」に、輟耕之壟上と、休息の意、〔四〕刮毛 梅溪曰く、龜背上刮毛、乃蘇

語也と、其の實に無きことを謂ふ、

【詩意】馬生は本窮乏の士である、我に從游すること二十年、日夜に我が出世することを望む、其の時は買山の錢を分與せんことを求む、然るに我は反對に君を累して、吾が耕田を君の力を借りるに至る、龜背上の毛を刮りて、氈を成すは畢竟空想にて何れの時か其の實際を見ることが出來ようぞ、憐む可きは馬生の癡である、今日に至りて聊か我の方が賢であることに夸る、衆人が笑ふとも終に悔いはない、一を施して千を獲るに當る、

【餘論】紀曰く、刮毛二句、微嫌共纖、結用陶公冥報相貽意と、查初白曰く、立言失體亦是と、戲の極此に至る、公譜謔を好むの性、往往詩の本旨を失するに至る、其の人の性と、其の時代の弊は以て見るべきである、

次韻回文三首　　次韻回文　三首

（一）春機滿織回文錦。　春機滿ちて織る回文の錦、

（二）粉淚揮殘露（三）井桐。　粉淚揮ひ殘す露井の桐、

人遠寄情書字小。　人遠く情を寄す書字小なり、

柳絲低日晩庭空。　柳絲低日晩庭空し、

【字解】〔一〕春機　徐陵の詩、春機當戶前と、〔二〕粉淚　李綽の樂府に、唯餘壞粉淚と、美人の淚の義、〔三〕露井　陸龜蒙の詩、朱闌前頭露井多、碧梧桐下美人過と、屋根の無き井戸を露井と謂ふ、

【題義】回文の詩は、倒に讀めば又一首となる、晉の溫嶠始めて是の體を作る、後、竇滔の妻蘇氏が八百十二字の詩を作る、郎君が家を出づるも、回ると云ふ意より成るもの、乃ち多く婦人の事を敍するのである、公は此の外金山寺の七律もある、

【詩意】倒讀して出して見る、空庭晩日低絲の柳、小字情を書して遠人に寄す、桐井露殘して淚粉を揮ひ、錦文回織して機春滿つ、

〔二〕

（一）紅牋短寫空深恨。　紅牋短寫空しく深恨、

錦句新翻欲斷腸。　錦句新翻斷腸せんと欲す、

風葉落殘驚夢蝶。　風葉落殘して夢蝶を驚かす、

戍邊回（二）雁寄情（三）郎。　戍邊の回雁情郎に寄す、

【字解】〔一〕紅牋　韓翃の詩、紅牋色奪風流座と、〔二〕回雁　元微之の詩、悵望悲回雁と、〔三〕情郎　韓偓の詩、書中說却平生事、猶疑未滿情郎意と、

【詩意】郎が情雁に寄せて邊戍より回る、蝶夢驚き殘す落葉の風、腸斷翻へさんと欲す新句の錦、恨深うして空しく寫す短牋の紅に、

〔三〕

羞雲斂慘傷春暮。　羞雲斂慘春暮を傷む、

細縷詩成織意深。　細縷詩成りて織意深し、
頭畔枕屏山掩恨。　頭畔枕屏山恨を掩ふ、
日昏塵暗玉窗琴。　日昏く塵暗し玉窗の琴、

【詩意】琴窗玉暗し塵昏の日、恨は掩ふ山屏枕畔の頭、深意織成す詩縷細、暮春傷慘雲を斂めて羞づ、

【餘論】紀曰く、東坡何以墮此惡趣と、或は謂ふ東坡が作にあらずと、今眞僞を判するに苦しむ、

## 附江南本織錦圖上回文原作三首

附す、江南本織錦の圖上回文原作　三首

春晚落花餘碧草。　春晚れて落花碧草を餘し、
夜涼低月半枯桐。　夜涼しくして低月枯桐に半す、
人隨遠雁邊城暮。　人は遠雁に隨ふ邊城の暮、
雨映疎簾繡閣空。　雨は映す疎簾繡閣空し、

【詩意】倒讀して見ん、空閣繡簾疎にして雨に映す、暮城邊雁遠く人に隨ふ、桐枯れて半月涼夜に低れ、草碧にして餘花晚春に落つ、

【字解】〔一〕碧草　杜子美の詩、映階碧草自春色と、〔二〕疎簾　杜子美の詩、江色映疎簾と、

〔二〕

紅手素絲千字錦。　紅手素絲千字の錦、
故人新曲九迴腸。　故人新曲九迴腸す、
風吹絮雪愁縈骨。　風は絮雪を吹いて愁は骨を縈る、
淚灑縑書恨見郞。　淚は縑書に灑ぎ郞を見るを恨む、

【詩意】郞見て書を恨み縑に淚を灑ぐ、骨縈愁雪絮風を吹く、腸迴九曲新人故なり、錦字千絲素手紅なり、

【字解】〔一〕紅手　白樂天の詩、銀屬稚女呵紅手と、〔二〕九迴腸　司馬子長報任安書、腸一日而九迴、居則忽忽、若有所忘と、〔三〕縑書　縑は絹の細密なるもの、

〔三〕

羞看一首回文錦。　看るを羞づ一首の回文錦、
錦似文君別恨深。　錦は文君に似て別恨深し、
頭白自吟悲賦客。　頭白自から吟ず悲賦の客、
斷腸愁是斷絃琴。　斷腸愁は是れ斷絃の琴、

【字解】〔一〕文君　「西京雜記」に、司馬相如、將聘茂陵女子爲妾、卓文君作白頭吟以自絕、相如乃止、其詞曰、皚如山上雪、皎若雲間月、聞君有兩意、故來相決絕、平生共城中、何嘗斗酒會、今日斗酒間、明旦溝水頭、躞蹀御溝上、溝水東西流、郭東亦有樵、郭西亦有樵、兩樵相推與、無親爲誰驕、凄凄重凄凄、嫁娶不須啼、願得一心人、白頭不相離と、

【詩意】琴絃斷ずるは是れ愁腸斷なり、客は悲吟を賦して自から白頭、深く恨む君に別るる文錦に似たるを、錦文首を回らし一に看るを羞づ、

【餘論】錦を織り、句句往反回りて讀む故に回文錦字と言ふ、蘇蕙が作るもの是である、而かも是は倒讀するものではなく、つまり横讀するものである、「詩法入門」に云ふ、回文詩者、反覆成レ章、隨レ擧二一字一、皆成レ詩、蘇氏之回文、八百一十二字、縱横讀レ之、得レ詩三千七百五十二首、今回文、順讀成二一首一、倒讀成二一首一、今學者、止學二此法一と、今此の第二首の如き、倒讀して果して詩を成すや、骨縈愁雪、是れ何の句ぞや、紀曉嵐の罵るは極めて理がある、

數日前夢一僧出二二鏡一求レ詩。僧以レ鏡置二日中一。其影甚異。其一如二芭蕉一。其一如二蓮花一。夢中作二此詩一

數日前夢む、一僧二鏡を出して詩を求む、僧鏡を以て日中に置く、其の影甚だ異、其の一は芭蕉の如く、其の一は蓮花の如し、夢中此の詩を作る、

君家有二二鏡一。光景如二湛盧一。(一)
君が家二鏡あり、光景湛盧の如し、

或長如二芭蕉一。或圓如二芙蕖一。
或は長くして芭蕉の如く、或は圓にして芙蕖の如し、

飛電著二子壁一。明月入二我廬一。
飛電子の壁に著き、明月我が廬に入る、

月下合二三璧一。日月跳二明珠一。
月下三璧合し、日月明珠跳る、

問レ子是非レ我。我是非二文殊一。(二)
子に問ふ是れ我にあらず、我は是れ文殊にあらず、

【字解】(一) 湛盧　古の名劍の名、(二) 文殊　文殊室利の略稱、滿珠戸利、曼殊室利とも書す、文殊は妙と譯し、室利は吉祥と譯す、釋尊の左方に侍して智慧を司る、「放鉢經」に、今我得レ佛、皆是文殊師利之恩也、過去無央數諸佛、皆是文殊師利弟子、當來者、亦是其威神力所レ致、譬如二世間小兒有二父母一、文殊者佛道中父母也と、

【詩意】夢中に僧が來りて言ふ我に二鏡あるが、君が家にも亦二鏡がある、其の光景は湛盧の如く明明である、一鏡は長くして芭蕉の如く、一鏡は圓くして蓮花の如く、其の光りは飛電の如く子が壁に著き、又明月が我廬に入る、天上の明月と合して都合三璧と爲る、日月の明珠を跳らすの狀である、問ふ子は自から子にて、我は是れ文殊ではない、

【餘論】紀曰く、此種可レ入二說部一、不レ可レ入二詩集一と、案ずるに此等の文字は所謂邪魔外道にて、禪者の「語錄」には或は入らんも斷じて詩中に入るべきものではない、

岐亭道上見二梅花一。戲贈二季常一

岐亭道上、梅花を見る、戲れに季常に贈る

蕙死蘭枯菊亦摧。
蕙死し蘭枯れ菊亦摧く、

返魂香入嶺頭梅。(一)
返魂香は入る嶺頭の梅、

【字解】(一) 返魂香　[illegible]く、「洞冥記」、有二懷夢草一、武帝思二李夫人一不レ可レ得、朔乃獻二一枝一、帝懷

數枝殘綠風吹盡。
一點芳心雀啅開。
野店初嘗竹葉酒。
江雲欲落豆楷灰。
行當更向釵頭見。
病起烏雲正作堆。

數枝殘綠風吹き盡し、
一點の芳心雀啅開す、
野店初めて嘗む竹葉酒、
江雲落ちんと欲す豆楷灰、
行いて當に釵頭に向うて見るべし、
病より起ち烏雲正に堆を作す、

之、夜果夢夫人、續注所云、未知何木、白樂天赤云、返魂香降夫人魂也と、「續注」に曰く、李夫人死、武帝念之不已、乃令方士作返魂香、燒之、夫人乃降と、查初白曰く、按禪宗頌古所載、唐僧古梅詩云、雪虐風饕水浸根、石邊尚有古苔痕、天公未肯隨寒住、又聚清香與返魂、東坡詩用此と、【二】風吹盡　杜子美の詩、不如醉裏風吹盡と、【三】雀啅　杜子美の詩、啅雀爭枝墜と、【四】竹葉酒　「太平寰宇記」に、宜城縣出美酒、俗號宜城美酒、又名竹葉春と、【五】豆楷灰　王勉の雪詩、上天燒下豆楷灰、烏李須欺做白梅と、【六】烏雲　鬢髮を謂ふ、

【題義】岐亭道上に於て梅花を見て、戯れに此の詩を作りて季常に贈りしもの、察するに季常は妻が病んで心樂しまないのであらう、

【詩意】蕙も蘭も枯死して菊も亦摧けて居る、返魂香は獨り嶺頭の梅に在るのみ、其の梅も數枝の殘綠を風が吹き盡してある、が一點の芳心は雀が啅みて開く、野店に憩うて初めて嘗む竹葉の酒を、江雲が落ちんと欲する其の狀は豆楷灰の如くである、行いて當に更に釵頭に向つて見玉へ、病より起つて烏雲が正に堆を作すであらう、

【餘論】紀曰く、究非雅語と、嶺頭、釵頭、江雲、烏雲、例の病である、

## 樂泉先生生日以鐵拄杖爲壽二首

樂泉先生の生日、鐵拄杖を以て壽を爲す　二首

先生眞是地行仙。
住世因循五百年。
毎向銅人話疇昔。
故教鐵杖鬪清堅。
入懷冰雪生秋思。
倚壁蛟龍護晝眠。
遙想人天會方丈。
衆中驚倒野狐禪。

先生眞に是れ地行の仙、
住世因循五百年、
毎に銅人に向うて疇昔を話す、
故に鐵杖をして清堅を鬪はしむ、
懷に入る冰雪秋思を生じ、
壁に倚る蛟龍晝眠を護す、
遙かに想ふ人天方丈に會し、
衆中驚倒す野狐の禪、

【字解】【一】地行山　「首楞嚴經」に、有十種仙、堅固服餌、而不休息、食道圓成、名地行仙、皆於人中練心、不修正覺、別得生理、壽千萬歲と、【二】住世　「法華經」に、正法住世、二十小劫、像法亦住二十小劫と、【三】銅人　「後漢薊子訓傳」に、人於長安東霸城見之、與一老翁、共摩挲銅人、相謂曰、適見鑄此、而已近五百歲矣と、銅造の人形である、或は銅佛、【四】清堅　「陳琳武軍賦」に、清堅皓鍔と、【五】倚壁　韓退之の赤藤杖歌に、空堂晝眠倚牖戶、飛電著壁搜蛟螭と、【六】方丈　「孟子盡心章」に、食前方丈、侍妾數百人と、一丈四方の小室を謂ふ、維摩居士の室十笏を容るるのみ、之を方丈と謂ふ、【七】野狐禪　「傳燈錄」に、百丈山大智禪師、毎日上堂、有一老人、隨衆聽法、一日衆散、老人不去、師問之、老人曰非人也、師曰因何到此、答曰、過去生中、曾住此山、有學人問、

大修行底人、還落ニ因果一也無、對曰、不レ落ニ因果一、遂墮ニ在野狐身一、今請和尚、代ニ一轉語一、師曰、汝但問、老人便問、師曰、不昧因果、老人言下大悟、告辭曰、今已免ニ野狐身一、只在ニ山後一住、乞依ニ亡僧例一焚燒、師令ニ維那白一レ衆、齋後於ニ巖中一、果見ニ一死野狐一、積レ薪化レ之と、

【題義】 樂全先生の生日に、鐵拄杖を呈して、其の祝賀を爲すのである、

【詩意】 先生は眞に是れ地行の仙である、住世すること因循五百年の舊きに度る、毎に銅人に向つて疇昔の事を話す、是の故に鐵杖をして互に淸堅を鬪はしむるのである、懷に入る冰雪は淸うして秋思を生ぜしむ、壁に倚つて怖ろしき蛟龍は晝眠を護る、因つて遙に想ふ人間や天人が方丈に集會して、衆中に導師が驚倒せしむ野狐禪の事を、

〔二〕

二年相伴影隨レ身。
二年相伴うて影身に隨ふ、

踏偏江湖草木春。
踏み偏し江湖草木春なり、

擿レ石舊痕猶在レ眼。
石を擿ぐる舊痕猶は眼に在り、

閉レ門高節欲レ生レ鱗。
門を閉ぢて高節鱗を生ぜんと欲す、

畏塗自衞眞無レ敵。
畏塗自衞眞に敵無く、

捷徑爭レ先却累レ人。
捷徑先を爭ひ却つて人を累す、

遠寄知公不レ嫌レ重。
遠寄知る公が重きを嫌はず、

筆端猶自幹ニ千鈞一。
筆端猶は自ら千鈞を幹らすを、

【字解】【一】影隨身　李太白の詩、舉レ杯邀ニ明月一、對レ影成ニ三人一、月旣不レ解レ飲、影徒隨ニ我身一と、【二】擿石　擿は投擲、石を投げつける、【三】欲生鱗　費長房、杖を葛陂中に投ずれば化して龍と成る、此の句は是を謂ふか、【四】畏塗　「莊子達生篇」に、夫畏塗者、十殺ニ一人一、則父子兄弟相戒也、必盛ニ卒徒一而後敢出焉と、【五】捷徑　スグシタル ミチ、又ハヤミチ、「唐書」盧藏用、始隱ニ終南山一、晩狥ニ權利一、嘗謂ニ司馬承禎一曰、此中大有ニ佳處一、承禎曰、以レ僕視レ之、仕宦之捷徑耳と、【六】筆端　筆頭、筆尖、皆同じ、【七】千鈞　千斤と同じ、歐陽修の詩、興來筆下千鈞重と、

【詩意】 二年間相伴うて影の身に隨ふ如き杖である、乃ち踏み偏くす江湖草木の春を、出游の際の擿石の舊痕は猶は依然として眼に在る、家に掛けてあるときは高節が鱗を生ぜんと欲するを覺ゆ、畏塗の自衞としては眞に敵が無い、捷徑先を爭ふには不如意なれば却つて人を累はすのである、是を公に呈するが公は其の重量を嫌ふまい、なぜなれば筆端平生自から千鈞の重きを自由に斡旋する、

【餘論】 紀曰く、野狐禪、意有レ所レ斥、然語殊不レ雅、又後首の畏塗の十四字を評して、五六極用意而不レ佳と、元來禪語を運用して詩語に化せしめんとするは、大神力あるも能はざる所、其の不雅を知りつつ用ふる所に坡公の面目が露はる、不雅と評する紀は淸濁幷吞を出來ない人である、

杭州故人信至ニ齊安一
杭州故人の信、齊安に至る

昨夜風月清。夢到ニ西湖上一。
昨夜風月淸し、夢は西湖の上に到る、

朝來聞ニ好語一。扣レ戸得ニ吳餉一。
朝に來りて好語を聞き、戸を扣きて吳餉を得たり、

輕圓白(一)曬荔。脆(二)釅紅(三)螺醬。　輕圓白曬荔、脆釅紅螺の醬、

更將西菴茶。勸我洗江瘴。　更に西菴の茶を將て、我に勸む江瘴を洗へと、

故人情義重。說我必西向。　故人情義重し、我に說く必ず西向せよと、

一年兩僕夫。千里問無(四)恙。　一年兩僕夫、千里問ふ恙無きやと、

相期結(五)書社。【自注】故人相約釀錢、僱僕夫一歲再至黃。　相期す書社を結ばんと、

未怕供詩(六)帳。【自注】僕頃以詩得罪有司。移杭。取境內所留詩。杭州供數百首。謂之詩帳。　未だ怕れす詩帳を供するを、

還將夢魂去。一夜到江(七)漲。【自注】江漲杭州橋名。　還た夢魂を將て去り、一夜江漲に到る、

【字解】〔一〕白曬荔　蔡君謨の「荔枝譜」に、福州舊貢紅鹽蜜煎二種、慶曆初、知州沈邈、以道遠不可致、減紅鹽之數、而增白曬者と、白荔子、閩廣地方多く產す、其の果、龍眼に似て肉は白く味は甘し、〔二〕脆釅　美味の義、字の本義は脆は柔、釅は濃である、〔三〕紅螺醬　蟳をシシビシホに製したるもの、〔四〕無恙　韓退之の書、問無恙外、不暇出一語と、〔五〕結書社　公の自注に、故人相約釀錢、僱僕夫一歲再至黃と、〔六〕詩帳　公の自注に、僕頃以詩得罪有司、移杭、取境內所留詩、杭州供數百首、謂之詩帳と、〔七〕江漲　公の自注に、江漲杭州橋名と、又「臨安志」に、江漲橋在餘杭門外と、

【題義】杭州の友人卽ち王復や張弼や辯才等の雁信が齊安に至るを得て此を作る、

【詩意】昨夜は天晴れて風月清涼である、我が魂夢は杭州西湖の上に飛到する、而して朝來に及んで好語を聞くことが出來た、戶を扣く者は我に吳餉を送り來るのである、それは輕圓なる白曬荔と、脆釅なる紅螺醬とである、更に加ふるに西菴の茶を以てせらる、是を飲んで江瘴を洗へよと、故人は異に情義重し、說き示さる我に必ず西向せよと、一年に雇ひし兩僕夫も、千里恙無きやと問ふ、相期す書社の同盟を結んで、未だ怕れない詩帳を供して亦役人の罪に觸れるを、還た夢魂を將て去り、一夜にして江漲に飛び到るを、

【餘論】紀曰く、剽而不留と、要するに公の詩として尋常喫茶飯に屬するものである、

## 送牛尾貍與徐使君【自注】時大雪中。

牛尾貍を送られ徐使君に與ふ【自ら注す】時に大雪中。

風捲飛花自入帷。　風は飛花を捲いて自から帷に入る、

一尊遙想破愁眉。　一尊遙かに想ふ愁眉を破るを、

泥深厭聽雞(一)頭鶻。【自注】蜀人謂泥滑滑為雞頭鶻。　泥深うして聽くを厭ふ雞頭鶻、

酒淺欣嘗牛(二)尾貍。　酒淺くして嘗むるを欣ぶ牛尾貍、

【字解】〔一〕雞頭鶻　公の自注に、蜀人謂泥滑滑、為雞頭鶻と、査初白云ふ、本草、竹雞一名山菌子、注蜀人呼為雞頭鶻、南人呼為泥滑と、〔二〕牛尾貍「酉陽雜俎」に、洪州有牛尾貍、肉甚美と、「本草注」に、南方有白面而尾似牛者、名牛

（三）通印子魚猶帶骨。　通印の子魚猶ほ骨を帶び、
（四）披緜黄雀漫多脂。　披緜の黄雀漫に脂多し、
殷勤送去煩纖手。　殷勤に送り去る纖手を煩はす、
爲我磨刀削玉肌。　我が爲めに刀を磨し玉肌を削る、

【題義】牛尾貍の肉を送られたる徐使君に謝する詩である、

【詩意】風は飛花卽ち雪を吹き捲いて帷に入る時である、此時や一尊に對して正に愁眉を破る君の情を想ふ、泥深くして此の上にも竹雞（ウバシギ）の鳴聲を聽くは厭になる、酒は淺酌して其の肴に牛尾貍を嘗むるがよい、通印の子魚も美は美であるが骨がある、披緜の黄雀も佳は佳であるが脂が多い、殷勤に送去せらるるは定めし纖手を煩はして、我が爲めに刀を磨して其の白肉の所を削りたるものであらう、

【餘論】題目は「牛尾貍ヲ送リ徐使君ニ與フ」とも讀める、が詩を讀めば我より送つたのではなく、彼より送られたるものである、紀は太俚太滑としてあるが、題目此の如し、俚滑は當然である、

尾貍、專上樹食百果、冬月絶肥、人多糟爲珍品と、【三】通印子魚　「蹇齋閒覽」に、莆陽通應、子魚名著天下、蓋其地有通應侯廟、廟前有港、港中之魚最佳、今人必求其大可容印者、謂之通印子魚と、「酉陽雜俎」に魚長一尺三寸、額上四方、如印有字、諸大魚應死者、先以印封之と、【四】披緜黄雀　施德初云ふ、黄雀出江西、臨江軍土人、謂脂厚爲披緜と、



# 四時詞四首

四時の詞　四首

春雲陰陰雪欲落。　春雲陰陰として雪落ちんと欲す、
東風和冷驚簾幙。（一）　東風和冷にして簾幙を驚かす、
漸看遠水綠生漪。（二）　漸く看る遠水綠漪を生ずるを、
未放小桃紅入萼。（三）　未だ放さず小桃 紅 萼に入るを、
佳人瘦盡雪膚肌。　佳人瘦せ盡す雪膚肌、
眉斂春愁知爲誰。（四）　眉は春愁に斂む知る誰が爲めぞ、
深院無人剪刀響。（五）　深院人無く剪刀の響、
應將白紵作春衣。（六）　應に白紵を將て春衣を作るなるべし、

【題義】春夏秋冬の四時に對して、閨婦の詞を歌うたものである、

【詩意】春雲は陰陰として暗く雪も落ちんとする景色である、加ふるに東風も冷氣を以て簾幙を驚かすが、但漸く遠水が綠色を湛はして漪漣を生ずるを見る、未だ小桃は紅の萼に入るを放さない、佳人は瘦せ盡す雪膚肌を、眉を斂めて春愁の態を爲すは畢竟誰の爲めである、深院は人無きが如き剪刀の響がする、想ふに是れ美人が白紵を裁して春衣を作る爲めであらう、

【字解】【一】簾幙　陸士衡の詩、周室接屋幕と、幕はトバリ、帷幕である、【二】綠生漪　漪は漪漣、サザナミ、【三】紅入萼　杜子美の詩、紅入桃花嫩、青歸柳葉新と、【四】知爲誰　李太白の詩、美人卷珠簾、獨坐顰蛾眉、但見淚痕濕、不知心恨誰と、【五】剪刀　ハサミ、【六】白紵　柳子厚の詩、青衫裁白紵と、

〔二〕

垂柳陰陰日初永。
蔗漿酪粉金盤冷。
簾額低垂紫燕忙。
蜜脾已滿黃蜂靜。
高樓睡起翠眉嚬。
枕畔斜紅未肯匀。
玉腕半揎雲碧袖。
樓前知有斷腸人。

〔二〕

垂柳陰陰日初めて永し、
蔗漿 酪粉金盤冷か、
簾額低く垂れて紫燕忙はし、
蜜脾已に滿ちて黃蜂靜かなり、
高樓睡起して翠眉嚬む、
枕畔斜紅未だ肯て匀はず、
玉腕半ば揎ぐ雲碧袖、
樓前知る斷腸の人あるを、

【字解】〔一〕陰陰 鄭谷の詩、斜陽滿滿柳陰陰と、柳の茂りて暗き貌、〔二〕蔗漿 蔗は砂糖のキビ、製して汁を取り以て飲料となすもの、〔三〕酪粉 牛羊馬等の乳を煮て、飲料と爲すものを酪と言ふ、〔四〕蜜脾 李義山の詩、花房與蜜脾、蜂雄蛺蝶雌と、歐陽修の詩、蜜脾未滿蜂採花と、〔五〕翠眉嚬 杜子美の詩、勞生重馬翠眉疎と、〔六〕斜紅 白樂天の詩、斜紅不暈顏面女と、〔七〕半揎 揎は袂をかかげ臂を出す、

【詩意】垂柳は鬱茂陰陰として日初めて永し、初夏の永日を消する爲め蔗漿や酪粉が金盤上に如何にも冷氣に見える、簾額は低く垂れて紫燕が忙はしく飛ぶ、蜜脾も已に滿ちて黃蜂は靜かである、美人は高樓に睡起して翠眉を嚬めて居る、一枕も其の儘に化粧も斜紅に未だ肯て匀はない、玉腕半ば揎げて露はす雲碧の袖を、樓前知る斷腸の人あるを、



〔三〕

新愁舊恨眉生綠。
粉汗餘香在蘄竹。
象牀素手熨寒衣。
爍爍風燈動華屋。
夜香燒罷掩重扃。
香霧空濛月滿庭。
抱琴轉軸無人見。
門外空聞裂帛聲。

〔三〕

新愁舊恨眉綠を生し、
粉汗餘香蘄竹に在り、
象牀素手寒衣を熨す、
爍爍 風燈華屋を動かす、
夜香燒き罷んで重扃を掩ふ、
香霧空濛月滿庭、
琴を抱き軸を轉じ人の見る無く、
門外空しく聞く裂帛の聲、

【字解】〔一〕粉汗 盧思道の採蓮曲に粧消粉汗滋と、〔二〕蘄竹 簟、タカムシロ、竹にて編みたる敷物である、韓退之の詩、蘄州笛竹天下知、鄭君所寶尤瑰奇、攜來當晝不得臥、一府傳看黃琉璃と、〔三〕象牀 杜子美の詩、象牀玉手亂殷紅、萬草千花動凝碧、美人細意熨帖平、裁縫滅盡鍼線跡と、「戰國策」に、孟嘗君至楚、楚獻象牀と、〔四〕熨 熨斗の器にても知る、火にて布帛の皺をのばすのである、〔五〕爍爍 かがやく貌、韓退之の詩、紅燈爍爍綠盤龍と、〔六〕轉軸 白樂天の詩、轉軸撥弦三兩聲、四弦一聲如裂帛と、

【詩意】新愁も舊恨も眉が綠を生ずる間にも認む、粉汗の餘香は蘄竹に在るのみ、象牙の牀に於て素手を張りて寒衣を熨斗する、爍爍として風燈は華屋を燿かし動く、夜香も燒き罷んで重扃を掩ふの頃は、香霧が空濛として月色は滿庭である、琴を抱き軸を轉するも人は見えない、門外に空しく裂帛の聲を聞くの思がある、

〔四〕

霜葉蕭蕭鳴二屋角一。
黃昏陡（一）覺羅衾薄。
夜風搖動鎭（二）帷犀。
酒醒夢回聞二雪落一。
起來呵レ手畫（三）二雙鴉一。
醉臉輕勻襯二眼霞一。
眞態生（四）レ香誰畫得。
（五）玉如纖手嗅二梅花一。

〔四〕

霜葉蕭蕭として屋角に鳴る、
黃昏陡に覺ゆ羅衾の薄きを、
夜風搖動す鎭帷犀、
酒醒め夢回りて雪の落つるを聞く、
起ち來りて手を呵して雙鴉を畫く、
醉臉輕勻眼霞を襯す、
眞態香を生ず誰か畫き得ん、
玉如たる纖手梅花を嗅ぐ、

【詩意】霜葉は其の響蕭蕭として屋角に鳴る、黃昏に及んで頓に覺ゆ羅衾の薄くして寒きを、夜風は搖動する鎭帷の犀を、酒は醒め夢より回りて雪の落つる響を聞く、起ち來りて手を呵して眉上に雙鴉を畫く、其の容の樣は醉臉輕勻にして眼霞に襯する、其の美人の眞態は香を生ずるが誰か此の姿を畫き得る者ぞ、玉の如き纖手を以て梅花を嗅ぐ、

【餘論】紀曰く、純是詩餘、似二稗官中、才子佳人語一、不レ知何以出二東坡手一と、溫柔鄕の語、杜韓大家の集無き所、公として小家の爲す所を學ぶ、曉嵐先生の評語、余も大に嘆する所である、

【字解】〔一〕陡覺　陡は字音トウ、訓は頓、ニハカである、杜子美の詩、陡上捩二孤影一と、〔二〕鎭帷犀　杜牧の詩、金盤犀鎭帷と、犀角を置いて帷を鎭壓する、〔三〕畫雙鴉　虞世南の詩、學レ畫二鴉兒一半未レ成と、〔四〕生香　薛能の詩、活色生レ香第一流と、〔五〕玉如　玉奴に作る本は誤る、玉の如き纖手である、



## 太守徐君猷通守孟亨之皆不レ飲レ酒以レ詩戲レ之

太守徐君猷、通守孟亨之、皆酒を飲まず、詩を以て之に戲る

（一）孟嘉嗜レ酒桓溫笑。
（二）徐邈狂言孟（三）德疑。
公獨未レ知二其趣一爾。
臣今時復一中レ之。
（四）風流自有二高人識一。
（五）通介寧隨（六）二薄俗一移。
（七）二子有レ靈應二撫掌一。
吾孫還有二獨（八）醒時一。

孟嘉酒を嗜み桓溫笑ふ、
徐邈狂言孟德疑ふ、
公獨り未だ其の趣を知らざるのみ、
臣今時に復た一之に中る、
風流自から高人の識るあり、
通介寧ろ薄俗に隨うて移らん、
二子靈あらば應に撫掌すべし、
吾が孫還た獨醒の時あり、

【字解】〔一〕孟嘉　「晉書孟嘉傳」に、嘉江夏人、字萬年、少知レ名、太尉庾亮、領二江州一、辟爲二從事一、後爲二桓溫參軍一、九日宴二龍山一、風吹レ帽落、嘉不レ覺、桓溫命二孫盛一、爲レ文嘲レ之、嘉即爲二答文一甚美、四座歎賞、嘉飲多不レ亂、溫問、酒有二何好一、嘉曰、明公但不レ得二酒中趣一耳と、〔二〕徐邈　三國魏の人、〔三〕孟德　曹操の字、〔四〕風流　「晉書」に、孟嘉、庾亮、正旦大會二州府人士一、褚裒問レ亮、聞江州有二孟嘉一、其人何在、亮曰在レ坐、卿自覓、裒歷觀、指レ嘉曰、此君小異、將無レ是乎、亮欣然笑二裒得一レ嘉、而奇二嘉爲一レ裒所レ得と、〔五〕通介　通達堅介の人、杜子美の詩、勿レ問通與レ介、徐公自有レ常と、〔六〕隨薄俗移　「徐邈傳」に、徐㒜倘自若、不二與レ俗同一と、〔七〕二子　孟嘉と徐邈、〔八〕獨醒　「史記屈原傳」に、擧世皆濁、而我獨淸、衆人皆醉、而我獨醒と、

【題義】 太守の徐君猷と、通守の孟亨之の二人、共に酒を飲まない、昔孟姓の人と徐姓の人は大に酒を飲んで、而して人格者である、今の孟と徐は人格者であるが、之は反對に飲まない、是に於て戯れに是の詩を作るのである、

【詩意】 高士の孟嘉は酒を嗜んで姦雄の桓温は嘲笑する、豪傑の徐邈はワザと狂言を吐いて是も姦雄の孟德は疑問とする、桓公曹公等は酒中の趣を解しない人である、所で後生の吾等は偶然にも趣を解しない人に一致する、孟嘉の風流は自から高人の識る者がある、徐邈の通介は寧ろ時代の薄俗とは和しない、二子に若し靈があれば應に撫掌して喜ぶべきと思ふ、吾等の孫には還た獨醒の人あるを、

【餘論】 紀曰く、小品自佳、此種從レ姓起レ義、恰有二孟徐二酒事一佐レ之、又不二以レ切レ姓爲レ嫌と、査初白云ふ、中二聯、兩兩分二承起句一、章法獨絶と、此等の詩を作る、學博く且大なる者にあらざれば、決して作る能はざるもの、但し自有、有靈、還有の同字多きは病の致す所、考ふるに自有は自是、有靈は共靈にて妨げなきものと、

## 姪安節遠來夜坐三首

姪安節遠來す、夜坐　三首

南來不レ覺歲(一)崢嶸。　南來覺えず歲の崢嶸、
(二)夜撥二寒灰一聽二雨聲一。　夜寒灰を撥して雨聲を聽く、
(三)遮レ眼文書原不レ讀。　眼を遮る文書原讀まず、
伴レ人燈火(四)亦多情。　人に伴ふ燈火亦多情、
嗟予(五)潦倒無二歸日一。　嗟予潦倒歸日無く、
令二汝(六)蹉跎已半生一。　汝をして蹉跎せしむ已に半生、
免レ使(七)韓公悲二世事一。　韓公をして世事を悲しましむるを免る、
白頭還對短燈(八)檠。　白頭還た對す短燈檠、

【字解】 〔一〕 歲崢嶸　杜子美の詩、旅食歲崢嶸と、即ち歲月の積み重れたるを謂ふ、〔二〕 夜撥寒灰　撥は撥除、撥無、撥開と成語するが、今は寒灰を撥きのけるのである、〔三〕 遮眼　「傳燈錄」に、有レ僧問二藥山惟儼禪師一、和尚尋常、不レ許二人看經一、什麼却自看、師曰、我只圖二遮眼一と、〔四〕 燈火　韓退之の詩、燈火稍可レ親と、〔五〕 潦倒　「嵆叔夜絕交書」に、足下舊、知二吾潦倒麤疎、不レ切二事情一と、多義に用ふるが、老衰の貌を本義とする、〔六〕 蹉跎　杜子美の詩、聞君已朱紱、且得レ慰二蹉跎一と、世路につまづくのである、〔七〕 韓公　韓退之の「短燈檠歌」に、長檠八尺空自長、短檠二尺便且光と、〔八〕 檠　燈火の臺を謂ふ、

【題義】 姪の安節が遠くより訪來するを以て夜坐して情懷を敍せしものである、

【詩意】 南方より來りて歲月の崢嶸たるを忘れ去る、對坐して寒灰を撥きながら雨聲を聽く、眼を遮るの文書は心を勞すること多ければ讀まない、座邊にて人に伴ふ所の燈火は亦言ふべからざる情味が多い、唯嗟するは予は潦倒して歸日の無きことを、汝を世話すること能はずして半生を蹉跎せしむ、然るに汝は我をして韓公の如く世事を悲しましむるの思を免れしむ、白頭今夜の如く歡話して還た短燈檠に對する、

〔二〕

心衰面改瘦崢嶸。　心衰へ面改まり瘦せて崢嶸、
相見惟應識舊聲。　相見て惟應に舊聲を識るべし、
永夜思家在何處。　永夜家を思うて何れの處に在る、
殘年知汝遠來情。　殘年知る汝が遠來の情、
畏人默坐成癡鈍。　人を畏れて默坐癡鈍を成し、
問舊驚呼半死生。　舊を問うて驚呼し死生を半す、
夢斷酒醒山雨絕。　夢斷え酒醒め山雨絕え、
笑看飢鼠上燈檠。　笑つて看る飢鼠の燈檠に上るを、

【詩意】心が衰へ面も亦改まるは世路の崢嶸たるを歷來る爲めである、相見て唯變らないのは舊聲である、永夜に家を思ふそれは何れの處にか在る、吾が殘年に及んで、汝が遠來するは如何なる情であるかを知る、人を畏るる如く默坐する恰も癡鈍の態を成す、舊知の事を問へば驚呼する故人の半は死するを、夢斷え酒醒めて山雨も亦罷むの時、笑うて看る飢鼠の燈檠に上るを、

【字解】【一】思家在何處　韓退之の示姪孫湘詩に、雲橫秦嶺家何在と、【二】知汝　韓退之の示姪詩に、知汝遠來應有意と、【三】癡鈍　「顏氏家訓」に、梁世有一侯、嘗對元帝、飲謔自陳、癡鈍乃成颸段、元帝著之曰、颸異涼風、段非干木と、【四】問舊　杜子美の詩、訪舊半爲鬼と、

〔三〕

落第汝爲中酒味。　落第汝は中酒の味を爲し、
吟詩我作忍飢聲。　吟詩我は忍飢の聲を作す、
便思絕粒眞無策。　便ち思ふ絕粒は眞に無策、
苦說歸田似不情。　苦に說く歸田は情ならざるに似たり、
腰下牛閑方解佩。　腰下牛閑に方に佩を解き、
洲中奴長足爲生。　洲中奴長じて生を爲すに足る、
大弨一弛何緣彀。　大弨一弛何ぞ彀に緣らん、
已覺翻翻不受檠。　已に覺ゆ翻翻檠を受けざるを、

【字解】【一】中酒　唐の李廓落第の詩、氣味如中酒、情懷似別人と、【二】忍飢　秦韜玉の詩、卻笑儒生把書卷、學得顏回忍飢面と、【三】絕粒　「後漢范丹傳」に、有時絕粒と、【四】無策　「匈奴傳」に、嚴尤曰、周得中策、漢得下策、秦無策焉と、【五】解佩　「漢書」に、龔遂爲渤海太守、民有帶持刀劍者、使賣劍買牛、賣刀買犢、曰何爲帶牛佩犢と、【六】洲中奴　水菜でもあれ、園樹でもあれ、活計の助けになるものを指す、【七】大弨　弓が絃を張りて無きもの、韓退之の詩、大弨挂壁無由彎と、揚子曰く、見弓之張兮、弛而不失其良兮、何謂也、曰撓之而已矣と、撓は弓を正すの器械、【八】不受檠　顏師古曰く、檠謂輔正弓弩と、

【詩意】落第して汝は酒に中毒したるの味を爲し、吟詩の我は朗吟せずして唯忍飢の苦聲を爲す、便ち思ふ絕粒絕食などは眞に意氣地が無い、丁寧に說く歸田歸田と云ふもそれも情でないと思ふ、劍を賣つて牛を買ひ官の窮屈を脫せると昔計りし者もある、洲中に種種の果樹を栽ゑて生計をも爲すに足る、大弨の一弛するは弓を引きしぼりたるに緣るのではない、已に其の物が翻翻として檠卽ち弓弩を正しうする器を受けざるのである、

【餘論】三律共に韓退之の左遷至藍關示姪孫湘の詩より粉本し來るものであるが、其の氣魄の盛んなるは到底凌駕することは出來ない、且第一首、不覺、不讀、燈火、燈檠、第三首、汝爲、爲生、不惜、不受、蘇家の法であるか、蘇家の病であるか、

冬至日贈安節　　冬至の日、安節に贈る

我生幾冬至、（一）少小如昨日。　我生幾冬至、少小昨日の如し、
當時事父兄、上壽（二）拜脫膝。　當時父兄に事へ、壽を上り拜して脫膝す、
十年閱彫謝、白髮催衰疾。　十年彫謝を閱し、白髮衰疾を催す、
瞻前惟（三）兄三、（四）顧後子由一。　前を瞻れば惟れ兄三、後を顧みれば子由一、
近者（五）隔濤江、遠者天一壁。　近きもの濤江を隔て、遠きもの天の一壁、
今朝復何幸、見此萬里姪。　今朝復た何の幸ぞ、此の萬里の姪を見る、
憶汝（六）總角時、啼哭爲（七）梨栗。　憶ふ汝が總角の時、啼哭は梨栗の爲めなり、
今來能（八）慷慨、志氣堅鐵石。　今來りて能く慷慨し、志氣鐵石堅し、
諸孫行復爾、世事（九）何時畢。　諸孫行復た爾り、世事何れの時か畢らん、
詩成却超然、（一〇）老淚不成滴。　詩成りて却つて超然、老淚滴りを成さず、

【字解】【一】少小　韓退之の詩、少小棗嬉戲と、【二】拜脫膝　兒童の拜する狀を言ふ、【三】兄三　蘇頴濱の「欒城集」伯父蔚喪、子三人、不欺、官太子中舍、不疑、承議郎通判嘉州、不危、家居不求祿仕と、【四】顧後　「離騷」に、瞻前而顧後兮、相觀民之計極と、【五】隔濤江　歐陽永叔の詩、更欲呼子美、子美隔濤江と、【六】總角　「謝安傳」に、總角神識沈敏、風宇條暢と、「詩風」に、總角丱兮と、【七】梨栗　陶淵明責子詩に、通子垂九齡、但覓梨與栗と、【八】慷慨　「後漢馬援傳」に、慷慨多大志と、【九】何時畢　杜子美の詩、憂虞何時畢と、【一〇】老淚　孟東野の詩に、徘徊相思心、老淚雙滂沱と、

【題義】冬至は夏至と同じく賀日である、此の日懷を書して安節に贈りしものである、

【詩意】我れ生れてより幾冬至を閱する、考ふれば少小の時猶ほ昨日の如き思ひである、當時父兄に事へて、冬至の日は父兄の壽を祝うて拜するに膝を脫ぐの狀を記憶して居る、而かも十年を歷れば長上の彫謝を閱して、我頭は白髮衰疾を催すに至る、前を瞻れば伯兄は三人である、後を顧みれば家弟は唯子由一人である、而かも近き子由の如きものは濤江を隔てて居る、遠きものは已に天の一壁である、今朝は復た何の幸福ぞや、此の萬里より來る姪を見る、記憶する汝が總角の時代を、啼哭するは梨栗を求むる爲めである、今や天下の爲め慷慨する志氣を抱き、其の志氣は鐵石より堅固である、諸孫の行も復た同樣で賴もしい、世事は何れの時にか畢るや、詩成りて却つて超然として氣が强い、故に老淚滴るの弱い念は起らない、

【餘論】紀曰く、眞至之語、朴而不俚と、詩の中脫膝の語、他に多く見ざる所、「佩文韻府」にも公が此の句あるのみ、屈膝の常語に對して特に奇看を作すのである、小兒拜跪の狀、姿態を極む、

## 雪後到乾明寺遂宿

雪後乾明寺に到り遂に宿す

（一）門外山光馬亦驚。 門外の山光 馬も亦驚く、
階前（二）屐齒我先行。 階前の屐齒 我先づ行く、
風花誤入（三）長春苑。 風花誤つて入る長春苑、
雲月長臨（四）不夜城。 雲月長く臨む不夜城、
未許牛羊傷至潔。 未だ許さず牛羊至潔を傷るを、
且看鴉鵲弄新晴。 且看る鴉鵲の新晴を弄するを、
更須攜被留僧榻。 更に須らく攜へて僧榻に留められ、
待聽摧簷瀉竹聲。 待聽せん摧簷竹に瀉ぐの聲、

【字解】【一】門外 唐の韋莊の詩、馬驚門外山如活と、【二】屐齒 白樂天の詩、沙乾屐齒輕と、【三】長春苑 樂史の「寰宇記」に、長春宮在同州朝邑縣、强梁原上、周武帝保定五年、宇文護所築、初名晉城、建德二年、名長春宮、高祖起義兵、自太原赴京師、舍此宮上、休甲養士、後牧此州者、多帶長春宮使、尉遲偓、「中朝故事」長春宮、園林繁茂、花木無所不有、芳菲長如三春節と、【四】不夜城 「寰宇記」に、不夜城、在登州文登縣、春秋時、萊子所置、邑以日出于東、故以不夜爲名と、

【詩意】寺門外の山光は雪後の燦暉あつて馬も亦驚く、階前の屐齒は我が先登第一である、時ならぬ風花は誤つて長春苑に入り、雲月は長く不夜城に臨む、未だ許さず牛羊來りて雪景の至潔を傷るを、且つ看る鴉と鵲とは雪後の新晴を弄して居る、更に寺僧に攜へられて僧榻に留めらる、待つて聽かしめらる摧簷より降りて竹に瀉ぐ聲を、

【餘論】紀曰く、似用白馬花頻驚、三更灞陵雪意、然不成語、二四俗格、五句拙と、要するに曉嵐は佳什と認めざるのである、余は謂ふ寺と雪とに就いて故典の來歷を用ふれば佳なるものあらんと、

## 伯父送先人下第歸蜀詩云、人稀野店休安枕、路入靈關穩跨驢。安節將去、爲誦此句、因以爲韻、作小詩十四首送之

伯父、先人の下第して蜀に歸るを送る詩に云ふ、人稀に野店に枕を安んずるを休めよ、路靈關に入つて穩かに驢に跨ると、安節將に去らんとし、爲めに此の句を誦す、因つて以て韻と爲し、小詩十四首を作り之を送る

（一）索漠（二）齊安郡。從來著（三）放臣。 索漠たり齊安郡、從來放臣を著く、
如何風雪裏。更送獨歸人。 如何ぞ風雪の裏、更に獨歸の人を送る、

【字解】【一】索漠 李白の詩、紙屏自索漠と、多くは索莫と書す、ものさびしき貌、【二】齊安郡 黃州齊安郡、齊安城は今の湖北黃岡縣西北百二十里に在り、【三】放臣 王梅谿曰く、在唐如杜牧之、在本朝如王元之、是著放臣也と、

【題義】伯父が嘗て公の父老泉が下第して蜀に歸るを送る詩あり、安節が今日公と別離に臨んで、此の詩を誦したるを以て乃ち其の十四字を韻と爲して、十四首の五絕を作るのである、

【詩意】索漠たる此の齊安郡は、昔から放逐せられた臣の住著する所である、其の索漠たる氣分を持して居る者が、如何ぞ風雪の裏に於て、更に獨歸の人を送るに耐へ得るぞ、

〔二〕

瘦骨寒將斷。衰髯摘更稀。
未甘爲死別。猶恐得生歸。

〔二〕

瘦骨寒將に斷えんとす、衰髯摘んで更に稀なり、
未だ甘んせず死別を爲すを、猶は恐る生歸を得るを、

【字解】〔一〕將斷　寒の極まるを謂ふ、杜子美の詩、杜陵野老骨欲折と、〔二〕衰髯　李中漁父の詞、雪鬢衰髯白布袍と、〔三〕死別　杜子美の詩、孰知是死別と、〔四〕得生歸　「後漢班超傳」に、願得生歸と、

【詩意】瘦骨は寒に遇うて骨斷折せらるる思がある、其の上に衰髯摘むも稀少である、而かも未だ死別を甘んずる意は起らず、さりながら猶ほ生きて歸るを得るのも恐れる、

〔三〕

日上氣嗽江。雪晴光眩野。
記取到家時。鋤耰吾正把。

〔三〕

日上りて氣は江に嗽す、雪晴れて光は野に眩す、
記取せよ家に到る時、鋤耰吾正に把るを、

【字解】〔一〕嗽江　嗽は旭光の盛なるを謂ふ、〔二〕眩野　雪後の陽光が目をくらますのである、〔三〕鋤耰　鋤はスキ、耰は土ならし器、

【詩意】日上りて先づ江に嗽光を發する、雪晴れて曙光が之を照らし野は眩暈せるが如くである、汝は能く記取せよ吾が家に到るの時を、其の時は吾は必ず鋤を把つて自から耕作することを、

〔四〕

〔四〕

月明穿破裘。霜氣澀孤劍。
歸來閉戶坐。默數來時店。

月明破裘を穿ち、霜氣孤劍に澀る、
歸來戶を閉ぢて坐し、默して數ふ來時の店、

【字解】〔一〕澀　澀滑などと成語して滑の反對、

【詩意】月明の光は下第して歸る者の破裘を穿ち、又霜氣は孤劍を澀らすが如きの嚴である、歸來戶を閉ぢて坐し、沈默して唯來時の店を數ふるのみ、

〔五〕

諸兄無可寄。一語會須酬。
晚歲俱黃髮。相看萬事休。

〔五〕

諸兄寄すべき無し、一語會す須らく酬ゆべし、
晚歲俱に黃髮、相看て萬事休す、

【詩意】諸兄に向つて一一語を寄せることが出來ない、唯一語會ず酬ゆべしと言うて呉れ、晚歲相俱に黃髮、相看て萬事休すと語らんのみ、

〔六〕

故人如念我。爲說瘦欒欒。
尙有身爲患。已無心可安。

〔六〕

故人如し我を念はば、爲めに說け瘦せて欒欒と、
尙ほ身の患と爲るあり、已に心の安んずべき無し、

【字解】〔一〕欒欒　「詩檜風」に、棘人欒欒と、瘦せたる貌、〔二〕身爲患　「老子」に、吾所以有大患者、爲吾有身と、

【詩意】故人が如し我を念はば、爲めに說けよ東坡は瘦せて欒欒たる貌である、而かも尙ほ身の患を

爲して、已に心の安んべき無しと、

〔七〕

吾兄喜酒人、今汝亦能飲、
一杯歸誦此、萬事邯鄲枕、

〔七〕

吾兄は酒を喜むの人、今汝亦能く飲む、
一杯歸りて此を誦せよ、萬事邯鄲の枕、

【詩意】吾兄は天性酒を喜むの人である、今汝も亦能く飲む、歸來一杯を傾けながら此の語を誦せよ、人間萬事邯鄲一睡の枕である、

〔八〕

東阡在何許、寒食江頭路、
哀哉魏城君、宿草荒新墓、

〔八〕

東阡何許に在る、寒食江頭の路、
哀しい哉魏城君、宿草新墓荒る、

【字解】【一】東阡　阡は田間のアゼ路、東西を阡、南北を陌と謂ふ、【二】何許　謝元暉の詩、佳期在何許と、杜子美の詩、我生本飄蓬、今復在何許と、「世說新語」に、張玄與王建武、初不相識、後遇于范豫章許と、乃ち皆所と同義に用ふる、【三】寒食　食は從來呉音ジキに讀む、【四】魏城君　坡公の夫人王氏である、公撰する「王氏墓誌」に、生十有六歲而歸于軾、至治平二年卒、年二十有七と、【五】宿草「禮記」に、朋友之墓、有宿草而不哭焉と、

【詩意】東阡は何れの許に在るや、東阡は寒食江頭の路である、哀しいかな魏城君は此に埋めて、最早や宿艸が新墓を荒涼ならしめたであらう、

〔九〕

臨分亦泫然、不爲窮途泣、
東阡時一到、莫遣牛羊入、

〔九〕

分れに臨んで亦泫然、窮途の爲め泣くにあらず、
東阡時に一たび到れば、牛羊をして入らしむる莫かれ、

【字解】【一】窮途　「晉阮籍傳」に、率意獨駕、不由徑路、車迹所窮、輒慟哭而返と、

【詩意】分離に臨んで涙の泫然たるを免れない、而かも窮途の爲め泣くのではない、若し東阡に時に一到せば、牛羊を縱に入らしめてはいかぬ、

〔十〕

我夢隨汝去、東阡松柏青、
却入西州門、永媿北山靈、

〔十〕

我が夢汝に隨つて去る、東阡松柏靑し、
却つて西州の門に入れば、永く媿づ北山の靈に、

【字解】【一】西州門　「晉謝安傳」に、羊曇爲安所愛重、安薨、輟樂彌年、嘗因石頭大醉、扶路唱樂、不覺至西州門、因慟哭而去と、【二】北山靈　齊の孔稚珪の「北山移文」に、鍾山之英、草堂之靈、馳煙驛路、勒移山庭と、山神の靈を謂ふ、

【詩意】我が夢は汝に隨つて歸り去る、歸りて見れば墓林である東阡は松柏靑靑である、却つて西州の門に入れば、永く北山の靈に媿づ、

〔十一〕

乞墦何足羨、負米可忘艱、
莫爲無車馬、含羞入劍關、

〔十一〕

墦に乞ふ何ぞ羨むに足らん、米を負ふ艱を忘る可し、
車馬無きが爲めに、羞を含んで劍關に入ること莫かれ、

【字解】〔一〕乞墦　「孟子」に、卒之東郭墦間之祭者、と、祭餘の飯食を乞うて妻妾を欺むく者、〔二〕負米　「家語」に、子路曰、昔者由也、事二親之時、常食藜藿之實、爲親負米百里之外、親沒之後、列鼎而食、願食藜藿、爲親負米、不可復得也と、〔三〕車馬　晉の常璩の「華陽國志」に、漢司馬相如、成都人、蜀有昇僊橋、相如用鬭、題其柱云、大丈夫、不乘赤車駟馬、不過汝下也、後奉使入蜀と、

【詩意】如何に美食も墦間に乞ひたるものは何ぞ羨むに足らんや、貧なるも孝道を知つて米を負ひ以て艱難を忘れよ、車馬郷俗に誇るの榮達ならざるも、堂堂として劍關に入り羞を含む狀態をしてはいかぬ、

〔十二〕

我坐名過實。讙譁自招損。
汝幸無人知。莫厭家山穩。

我は名の實に過ぐるに坐し、讙譁自から損を招く、
汝幸に人の知る無し、家山の穩を厭ふ莫かれ、

【字解】〔一〕我坐　崔瑗の「座右銘」に、無使名過實、守愚聖所臧と、「越絕書」に、名過實者滅と、〔二〕招損　「尙書」に、滿招損、謙受益と、

【詩意】我は高名が實より過ぎたるに依つて、小人の爲め讙譁自から損を招く、汝は幸に人の爲めに名を知られて居ない、故に家山の平穩なるを厭ふな、

〔十三〕

竹筍與練裙。隨時畢婚嫁。
無事若相思。征鞍還一跨。

竹筍と練裙と、時に隨つて婚嫁を畢る、
無事若し相思はば、征鞍還た一跨せよ、

【字解】〔一〕竹筍　「後漢逸民傳」に、戴良有五女、疎裳布被、竹筍木屐以遣之と、

【詩意】疎末ながら竹筍と練裙とを備へ、隨時に婚嫁の禮を畢り、身が無事となり若し思を我に馳せるあらば、征鞍に還た一跨して來游せられよ、

〔十四〕

萬里却來日。一菴仍獨居。
應笑謀生拙。團團如磨驢。

萬里却來の日、一菴仍は獨居す、
應に笑ふべし生を謀るの拙なるを、團團磨驢の如し、

【詩意】君が萬里に歸りて却來の日は、吾は依然として一菴に仍ほ獨居の身である、必ず應に笑ふべし吾が謀生の拙にして、其の狀は恰も一所を唯團團する磨驢の如きであるを、

【餘論】此の他人の詩を以て韻と爲すの法、唐人に見ざる所、恐らくは宋人に始まるものであらう、紀曉嵐は第八首を以て第一と爲すものの如きも、特殊に佳きを覺えないのである、

## 次韻和王鞏六首

次韻王鞏に和す　六首

君談陽朔山。不作一錢直。
巖藏兩頭蛇。瘴落千仞翼。

君は談す陽朔山、一錢の直を作さず、
巖には藏す兩頭の蛇、瘴には落つ千仞の翼、

雅宜驩(五)兜放。頗訝虞舜(六)陟。
暫來已可畏。覽鏡憂面(七)黑。
況子三年囚。苦(八)霧變飲食。
吉(九)人終不死。仰荷天地(一〇)德。
我來黃(一一)岡下。攲(一二)枕江流碧。
江南武(一三)昌山。向我如咫尺。
春蔬黃土軟。凍筍蒼崖坼。
茲行我(一四)累君。乃反得安(一五)宅。
遙知丹(一六)穴近。爲斸勾漏石。
他年分刀(一七)圭。名(一八)字挂仙籍。

雅宜し驩兜の放つに、頗る訝る虞舜の陟るに、
暫く來りて已に畏る可し、鏡を覽て面の黑きを憂ふ、
況んや子は三年の囚、苦霧飲食變す、
吉人終に死せず、仰いで荷ふ天地の德、
我黃岡の下に來り、枕を攲つ江流の碧に、
江南武昌の山、我に向つて咫尺の如し、
春蔬黃土軟かに、凍筍蒼崖坼く、
茲行我君を累はす、乃ち反りて安宅を得たり、
遙かに知る丹穴近しと、爲めに斸る勾漏石、
他年刀圭を分ち、名字仙籍に挂く、

【自注】君許惠桂州丹砂。

【字解】【一】陽朔山　桂州の陽朔縣に在り、王定國が謫せられ在住する賓州に近き山、【二】一錢直　「灌夫傳」に、平生毀程不識不直一錢と、【三】兩頭蛇　「賈誼新書」に、孫叔敖、爲嬰兒出游、見兩頭蛇、而埋之と、【四】千仞鷙　柳子厚の詩、猜行狐作孼、林宿鳥爲孥、豈知千仞鷙、祇爲一毫差と、【五】驩兜放　「尚書」に、放驩兜于崇山と、唐堯の時、共工と比周して惡をなせし人、崇山は今の湖南大庸縣の西南、【六】虞舜陟　「尚書」に、舜陟方乃死と、注に升道南方巡狩、死于蒼梧之野と、【七】面黑　「戰國策」に、蘇秦面目黧黑と、【八】苦霧　鮑明遠の賦、蓁蓁苦霧、皎皎悲泉と、【九】吉人　善人と同じ、「詩大雅」に、藹藹王多吉人と、【一〇】天地德　「周易」に、天地之大德曰生と、【一一】黃岡下　齊安郡治、卽ち黃州である、【一二】攲枕　攲は傾攲である、【一三】武昌山　黃州の對岸鄂州に在る山、【一四】我累君　王定國は學問は公の弟子、文章を善く屬る、官は祕書省正字と爲る、公が事に連坐と認められ賓州に貶せらる、【一五】安宅　「毛詩」に、之子于垣、百堵皆作、雖則劬勞、其究安宅と、【一六】丹穴　丹沙の產する穴、史記貨殖傳にあり、【一七】刀圭　藥匙である、【一八】名字　公の自注に、君許惠桂州丹砂と、査初白云ふ、烏臺詩案、軾有譏諷文字、不申繳者二十九人、王鞏名列第一と、

【詩意】君は陽朔山の事を談ず、而して是の山は一錢の直も無きヤクザの山である、其の理由は巖中には兩頭の毒蛇を藏して、其の瘴霧の毒氣は千仞の上を飛ぶの鳥も落す、こんな山は雅驩兜の如き惡人を放逐するによい、虞舜の如き聖人の陟るのは變に思ふ、暫時の間來るも已に畏るべきである、其の證據には忽ちにして面色が黑くなる、況んや子は三年の久しき此に囚人と爲り、苦霧の爲め毎日飮食の味も變ずる、而かも吉人は終に死なない、仰いで天地の德を荷ふ、我は黃岡の下に來りて、枕を攲てて江流の碧なるを見る、江南は武昌山である、我面に對して咫尺の如く、春蔬は黃土軟かなるが故に長じ、凍筍は蒼崖を坼きて出づ、茲の行我は君を累はして居る、君を累はしたるが爲めに我は安宅を得たのである、遙かに想像して知る丹穴が近うして、爲めに勾漏石を斸らるるであらう、他年我等と刀圭を分ちて、同じく名字を仙人の籍に挂けん、

【餘論】紀曰く、頗訝句未甚解と、又曰く、覽鏡句拙と、公が詩は公自身外頗る解し難きものが多い、但し此の詩に限るのではない、

〔二〕

少年帶刀劍。但識從軍樂。
老大服犂鋤。解佩付鎔鑠。
雖無獻捷功。會賜力田爵。
敲冰春擣紙。刈葦秋織箔。
櫟林斬冬炭。竹塢收夏籜。
四時俯有取。一飽天所酢。
君生紈綺間。欲學非其脚。
左右玉纖纖。束薪誰爲縛。
勿令聞此語。翠黛頩將惡。
笑我一間茅。婦姑紛六鑿。

〔二〕

少年刀劍を帶び、但從軍の樂を識る、
老大犂鋤に服し、佩を解きて鎔鑠に付す、
捷功を獻ずる無しと雖も、會ま力田の爵を賜ふ、
氷を敲きて春紙を擣き、葦を刈りて秋箔を織る、
櫟林冬炭を斬り、竹塢夏籜を收む、
四時俯して取るあり、一飽天の酢ゆる所、
君紈綺の間に生れて、學ばんと欲するは其の脚にあらず、
左右玉纖纖、束薪誰か縛を爲す、
此語を聞かしむる勿れ、翠黛頩として將に惡しからんとす、
笑ふ我が一間の茅、婦姑六鑿紛たり、

【字解】【一】少年　「前漢書韓信傳」に、淮陰少年、侮韓信曰、雖長大好帶刀劍怯耳と、【二】從軍樂　王粲の詩、從軍有苦樂、但問所從誰と、【三】服犂鋤　歸農する、【四】鎔鑠　「宋趙安易傳」に、蓋鎔鑠其精液と、トカスのである、【五】獻捷功　春秋僖公二十一年、楚人使宜申來獻捷と、【六】力田　「漢文帝紀」に、遣使者賜孝弟力田、置三老孝弟力田常員と、【七】斬冬炭　「周禮」に、仲冬斬陰木、仲夏斬陽木と、【八】夏籜　籜は竹の皮、【九】所酢　酢は報と酬との義に用ふ、【一〇】紈綺　「漢班固敍傳」に、在於綺襦紈袴之間、非其好也と、富貴の家に生るる意、【一一】非其脚　今日俗語に云ふ「我が立場ではない」と云ふ意、王梅谿曰く、事有非素所諳習而强爲之、諺云不是脚、此語蓋方言耳と、【一二】玉纖纖　美人の玉手を謂ふ、家に美人多くあるを謂ふ、【一三】翠黛　美人を指す、【一四】頩　「楚辭遠游章」に、玉色頩以脕顏兮、精神粹而始壯と、「柳子厚讀龍說」に、澤州郊亭、有奇女、墜地光曄然、少年願且悅之、狎焉、奇女頩爾怒と、二說ある、氣の壯なる貌と、怒りて顏色の青くなる貌と、【一五】六鑿　「莊子」に、心無天游、則六鑿相攘と、

【詩意】少年の多くは腰に刀劍を帶びて、意氣揚揚として但從軍の樂を夢む、老大に及んで刀劍を舍てて犂鋤を執り、總ての軍飾を解いて皆鎔鑠に付し去る、從軍して別に殊功を奏したのではないが、會ま朝廷は生活安定として田畝を賜はる、歸農後は氷を敲きて春寒には紙を擣き、又秋日には葦を刈りて以て箔を織り、冬日には櫟林を燒きて以て炭を製造する、春夏秋冬滿足なる收穫がある、財富に一飽するは天の酢ゆる所である、君は寒衣敝袍の反對なる紈綺の間に生長して、而かも學ばんと欲するは其れ等の事ではない、然れども左右は玉纖纖の美人に圍遶せらる、束薪の如く誰か縛を爲すものぞ、かく言ふ我が此の語を美人に聞かしめてはいかぬ、若し聞かしむる時は翠黛憤然として顏色が變ずるであらう、但笑ふ我が一間の茅屋には、金が不足ぢや米が缺乏だとか婦や姑が六鑿を紛爭する、

【餘論】紀曰く、收得少力、然此處甚難措語、亦只得如此結束と、又曰く不免牽綴と、

〔三〕

欲結千年實。先擢二月花。
故教窮到骨。要使壽無涯。
久已逃天網。何須服日華。
賓州在何處。爲子上棲霞。

【自注】樓名。

結ばんと欲す千年の實、先づ擢く二月の花、
故に窮骨に到らしめ、壽涯り無からしめんと要す、
久しく巳に天網を逃る、何ぞ須ひん日華を服するを、
賓州何れの處に在る、子が爲めに棲霞に上らん、

【字解】【一】先擢　先催に作る本あり、【二】到骨　杜子美の詩、巳訴徵求貧到骨、正思戎馬淚盈巾と、【三】無涯　韓退之の詩、乘詳紛可錄、倬壽浩無涯と、【四】天網　「老子」に、天網恢恢、疎而不失と、【五】日華　「內景經」に、東華眞人、服日月之象、五臟生華、長生不死之道也と、【六】賓州　廣西省思恩府、民國改めて賓陽縣と爲す、【七】棲霞　公の自注に樓名と、

【詩意】千年の實を結ばんと欲する果は、先づ二月の花の因より來るのである、是の故に徹底的貧の因を經來り、以て始めて壽涯り無き果を得、久しく巳に天の罪過を受けない、何ぞ煩はしく日華を服するを須ひんや、賓州は何處の邊に在る、子が賓州に在るが爲めに之を望んで眺望佳絕の棲霞樓に上る、

【餘論】紀曰く、語意甚淺と、如何に公の詩なるも逃天網の三字、字巳に弊と爲る、紀評當れるか、

〔四〕

鄰里有異趣。何妨傾蓋新。
殊方君莫厭。數面自成親。
默坐無餘事。囘光照此身。
他年赤墀下。玉立看垂紳。

鄰里異趣あり、何ぞ妨げん傾蓋新たなるを、
殊方君厭ふこと莫かれ、數面自から親みを成す、
默坐餘事無く、囘光此の身を照らす、
他年赤墀の下、玉立垂紳を看る、

【字解】【一】殊方　班孟堅が「西都賦」に、殊方異類、至于三萬里と、又「董仲舒傳」に、今師異道、人異論、百家殊方、指意不同と、方法を互に別にするを謂ふ、【二】數面　陶淵明の語に、數面成親舊、況其情過此者乎と、數次面會するを言ふ、【三】囘光　「禪宗廣燈錄」に、古德云、若能囘光返照、直下承當、則千足萬足と、一旦謝れし日が、再び顯はれしを囘光と謂ふ、【四】赤墀　宮廷である、【五】玉立　祖元子、爲讚元彥表、抗節玉立、誓不降辱と、其人如玉と云ふの類、

【詩意】鄰里は總てのもの異なる趣味を持つて居る、何ぞ妨げん物珍らしく車蓋を傾けて看又語るを、其の總ての物殊方なるは君厭うてはならぬ、數ば面會すれば厭なものも自然と親近と成る、默坐して餘事無きときは、囘光が反つて此の身を照らすのである、今まで他年赤墀の下に在つて、堂堂と玉立高佩垂紳を看飽きて居る、

【餘論】紀曰く、語意甚淺と、囘光は元來佛語であつて、詩語でない、何の意義ありて、此に使用せられたのであるか、判じ難い、

〔五〕

平生我亦輕(一)餘子。　平生我亦餘子を輕んず、

晚歲人誰念(二)此翁。　晚歲人誰か此の翁を念はん、

巧(三)語屢曾遭薏苡(四)。　巧語屢ば曾て薏苡に遭ひ、

廋(五)詞聊復託芎藭(六)。　廋詞聊か復た芎藭に託す、

子還可(七)責同元亮。　子還た責む可きは元亮に同じ、

妻却差賢勝敬(八)通。　妻却つて差賢敬通に勝る、

【自注】僕文章雖不逮馮衍。而慷慨大節。乃不愧此翁。衍逢世祖英睿好士。而獨不遇流離擯逐。與僕相似。而衍妻妒悍甚。僕少此一事。故有勝敬通之句。

若問我貧天所賦。　若し我が貧を問はば天の賦する所、

不因遷謫始囊空。　遷謫に因つて始めて囊空しからず、

【字解】【一】輕餘子　漢末の禰衡は孔融を重んじ、孔融は亦禰衡を重んじ、其の餘の人間は皆輕視せることを用ふ、【二】念此翁　「東坡詩話」に、昔吾爲鳳翔幕、過長安、見劉原父、留吾劇飲、酒間謂吾曰、昔陳季弼、告陳元龍曰、聞遠近之論、謂明府、驕而矜、元龍曰、夫閨門雍穆、有德有行、吾敬陳元方兄弟、淵淸玉潔、有禮有法、吾敬華子魚、淸修疾惡、有識有義、吾敬趙元達、博聞强記、奇逸卓犖、吾敬孔文擧、雄姿傑出、有王霸之略、吾敬劉元德、所敬如此、何驕之有、餘子瑣瑣、安足録哉、因仰天太息、此亦原父之雅聽也、吾後在黃州作詩云、平生我亦輕餘子、晚歲人誰念此翁、蓋記原父語也と、【三】巧語　「毛詩」に、巧言如簧と、【四】薏苡　薬舞、ズズダマ、「後漢書馬援傳」に、援在交趾、嘗餌薏苡實、用能輕身省慾、以勝瘴氣、南土薏苡實大、援欲以爲種、軍還載之一車、及卒後、有上書譖之者、以爲前所載還、皆明珠文犀、帝益怒と、【五】廋詞　一種のナゾ、隱語である、晉語、有秦客廋詞於朝と、隱伏譎詭の言、【六】芎藭　「ヲンナカヅラ」と香艸、秋に花開き、根を藥用とする、「左傳宣公十二年」に、冬楚子伐蕭、宋華椒救蕭、(中省)還無社、與司馬卯言、號申叔展、叔展曰、有麥麴乎、曰無、有山鞠窮乎、曰無、河魚腹疾奈何、曰目於眢井而拯之と、麥麴はモヤシ、消化を助く、山鞠窮は川芎、カハカ



ヅラ、風氣を去るもの、内憂を去る藥も無く、外患を除く藥も無しと云ふ謎である、【七】可責　陶淵明に子を責むる詩あり、【八】敬通　公の自注に、僕文章雖不逮馮衍、而慷慨大節、乃不愧此翁、衍逢世祖英睿好士、而獨不遇流離擯逐、與僕相似、而衍妻妒悍甚、僕少此一事、故有勝敬通之句と、敬通は馮衍の字、妻妒悍なれば馮媵妾を畜ふる能はざるのである、

【詩意】平生は我も亦餘子を輕視する、晚歲人誰か此の翁を敬念するぞや、巧語屢ば曾て薏苡に遭ひ、廋詞聊か復た芎藭に託することもある、子の不肖を責むるは陶元亮に同じきも、妻の貞賢なることは敬通に勝る、若し人の我貧を訝かり問ふ者あらばそは天賦であると答ふるのみ、遷謫に因つて始めて貧乏と爲つたのではない、

【餘論】紀曰く、起句太激、三句太露、四句無所取義と、此等の詩は學力の餘、强ひて謎語と爲せしものかと思ふ、紀評の無所取義の四字は、公の靈宜しく甘受すべきである、

〔六〕

君家玉臂貫銅靑(一)。　君が家の玉臂銅靑を貫く、

下(二)客何時見目成(三)。　下客何れの時か目成を見る、

勤把鉛(四)黃記宮樣(五)。　勤めて鉛黃を把つて宮樣を記す、

莫教弦管作蠻(六)聲。　弦管をして蠻聲を作さしむる莫かれ、

熏衣漸歎衙(七)香少。　熏衣漸く歎ず衙香少れなるを、

【字解】【一】銅靑　銅靑は衣服の色、以て玉臂の飾裝と爲す、【二】下客　下男、下女と例して知れ、「史記范雎傳注」に、食以下客之具と、【三】目成　「屈原九歌少司命」に、滿堂兮美人、忽獨與予兮目成、「王逸注」に、獨與我睨而相視、成爲親

擁（八）髻遙憐夜語清。 擁髻遙かに憐む夜語の清きを、

記取北歸攜過（九）我。 記取す北歸攜へて我に過ぎ、

南江風浪雪山傾。 南江の風浪雪山傾く、

【自注】君自ニ南江赴任一。不レ一ニ過我一。

娵一也と、成の義は好を結ぶこと、【四】鉛黃 陶倫の詩、終年事ニ鉛黃一と、是は文字を校勘する義、今は鉛白と同じく女の化粧する具、黃色の粉を以て額上に施すのである、【五】宮樣 劉夢得の詩、高髻雲鬟宮樣妝

と、【六】蠻牌 「世説」に、郝隆作レ詩云、娵隅躍ニ清池一、桓温問、娵隅是何物、隆曰、蠻名魚也、温曰、何以作ニ蠻語一、隆曰、千里投レ公、始得ニ蠻府參軍一、那得レ不レ作ニ蠻語一と、【七】衙香 「香譜」に、有ニ開元韓牙香、化度寺牙香法、雍文徵郎中牙香法一と、衙と牙と音義通ずるのである、象牙にて製せる器にて香を焚くのであらう、【八】擁髻 「拾遺記」に、伶元買ニ妾樊通德一、談ニ道趙飛燕姉妹事一、以レ手擁レ髻、凄然泣下と、モトドリを持つこと、【九】過我 公の自注に、君自ニ南江赴任一、不レ一ニ過我一と、

**【詩意】** 君が家の美人は玉臂に銅青を貫くの飾を爲す、下客は何れの時にか其の美容を目成することが出來るか、勤めて鉛黃を把つて宮女の姿態に倣ふ、宮女の姿態に倣ふからには弦管も蠻人の聲を作さしめてはいかぬ、衣を熏する香は漸く牙香が少くなりたるを歎じ、又髻を擁して遙かに夜語の清きを憐まざるを得ない、我は記憶する君が北歸のときは此の美人を攜帶して我が家に過ぐと言うたことを、然るに不幸南江の風浪は雪山傾くの荒景にて君は竟に攜へて來ない、

**【餘論】** 紀曰く、三四却有ニ風調一と、

元豐四年十月二十二日。謁ニ王文父齊萬於ニ江南一。坐上得ニ陳季常書一。報是月四日。种諤領レ兵。深入破ニ殺西夏六萬餘人一。獲ニ馬五千匹一。衆喜忭唱レ樂。各飲ニ一巨觥一

元豐四年十月二十二日、王文父齊萬に江南に謁す、坐上陳季常の書を得たり、報ず是の月四日、种諤兵を領して、深く入り、西夏の六萬餘人を破り殺し、馬五千匹を獲たりと、衆喜び忭し樂を唱へ、各の一巨觥を飲む

聞說官軍取ニ乞（一）閭一。 聞く說らく官軍乞閭を取ると、

將（二）軍旗鼓捷レ如レ神。 將軍旗鼓捷きこと神の如し、

故知無（三）定河邊柳。 故に知る無定河邊の柳、

得レ共中原雪絮春。 共にするを得たり中原雪絮の春、

**【字解】** 【一】乞閭 人名か地名か不詳、虜語に駿馬を乞銀と呼ぶ、或は是か、【二】將軍 「宋史」に、元豐四年八月丙午、种諤、將ニ鄜延及畿内兵九萬三千一、出ニ綏德城一、九月諤圍ニ米脂一、夏人來救、戰ニ于無定河一、大破レ之と、【三】無定河 一名奚乾河と云ふ、陝西の邊外、鄂爾多斯より出で、東南に流れて黃河に入る、陳陶の隴西行に、可レ憐無定河邊骨、猶是深閨夢裏人と、

**【題義】** 王文父齊萬を訪うて、其の席上王師大捷せりとの報を聞いて以て此の詩を作る、

**【詩意】** 聞く今官軍が乞閭を取るとの快報を、將軍の旗鼓は敏捷にして鬼神の如くである、是の故に

知る無定河邊の柳も今より邊士の柳ではない、中原雪絮の春を共にするを得たのである、

【餘論】紀曰く、措語甚拙、似非東坡筆墨と、公の作たるは疑ふべからず、唯所謂率爾にして成るもの、巧拙は論外である、

## 聞洮西捷報　洮西の捷報を聞く

漢家將軍(一)一丈佛。　漢家の將軍一丈の佛、
詔賜天池(二)八尺龍。　詔して賜ふ天池八尺の龍、
(三)露布朝馳(四)玉關塞。　露布朝に馳す玉關の塞、
(五)捷書夜到甘泉宮。　捷書夜到る甘泉宮、
似聞指揮築(六)上郡。　聞くに似たり指揮して上郡を築くを、
已覺(七)談笑無西戎。　已に覺ゆ談笑して西戎なし、
(八)放臣不見(九)天顏喜。　放臣は見ず天顏の喜びを、
但驚草木回春容。　但驚く草木回春の容に、

【字解】【一】一丈佛　「漢武故事」に、昆耶、殺休屠王、以其衆來降、得其金人、置之甘泉宮、金人皆高丈餘と、豐土にて造れる多くの銅佛である、【二】八尺龍　「公羊傳隱公元年注」に、天子馬曰龍、高七尺以上と、【三】露布　戰捷の功を帛に書して朝に奏す、之を露布と云ふ、緘封の如く祕密にせざるのである、又軍中の檄文をも云ふ、【四】玉關　甘肅敦煌郡、長安を去る三千六百里、【五】捷書　杜子美の詩、捷書夜報清晝同と、【六】上郡　秦置く、井州に屬す、【七】談笑　杜子美の詩、談笑無河北と、【八】放臣　遷謫の身なれば謂ふ、【九】天顏喜　杜子美の詩、天顏有喜近臣知と、

【題意】洮西より來る捷報を聞いて喜んで作る、

【詩意】昔漢家の將軍は洮西を伏して金の佛像を分捕する、其の功を賞し詔を下して天池に產する龍馬を賜はる、今も亦露布が玉關の塞より朝に馳せて來る、捷書は夜中に甘泉宮に奏上する、又眼の前に將軍が諸兵を指揮して上郡を築くの威風を聞くが如く、已に覺る將軍が談笑する餘勇のあるは眼中に西戎なぞ認めて居らないことを、我は今都を去る邊境の放臣なれば天顏の喜びを見ることが出來ない、但驚くことには無情の草木ですら總て春容を回したるに、

【餘論】紀曰く、露布卽捷書、未免犯複、此詩本集不載、疑王詔之黨、獵取賜御書詩爲之、以東坡爲重耳と、曉嵐以外の詩家も亦疑ふ所のもの、然りと雖も孰れが眞の本集と定むる能はざるもの、如何ぞ其の一本を信じて、諸本を疑ふを得んや、但露布と捷書とを別義として用ひたるは、眞に是れ犯複である、

## 記夢回文二首　夢を記す、回文二首

十二月二十五日大雪。始晴。夢人以雪水烹小團茶。使美人歌以飲余。夢中爲作回文詩。覺而記其一句云。亂點餘花唾碧衫。意用飛燕故事。

也。乃續レ之爲二二絕句一云。

【訓讀】十二月二十五日大雪、始めて晴る、夢に人雪水を以て小團茶を烹、美人をして歌うて以て余に飮ましむ、夢中爲めに回文詩を作る、覺めて其の一句を記す、云ふ、亂點して餘花碧衫に唾すと、意は飛燕が故事を用ふるなり、乃ち之に續ぎて二絕句を爲ると云ふ、

〔一〕

(一)酡顏玉盌捧纖纖(二)。　酡顏玉盌捧げて纖纖、
亂點餘花唾(三)二碧衫一。　亂點して餘花碧衫に唾す、
歌咽水雲凝二靜院一。　歌咽んで水雲靜院に凝り、
夢驚松雪落(四)二空巖一。　夢は驚く松雪空巖に落つるに、

【字解】〔一〕酡顏「楚辭」に、美人旣醉、朱顏酡些と、顏色の赤くなる貌、〔二〕纖纖 王梅溪曰く、纖纖當レ作二攙攙一と、十五咸の韻、纖は十四鹽の韻、字義は同じく女子の手の美なるを云ふ、〔三〕唾碧衫「趙飛燕外傳」に、后與二其妹倢伃一坐、后誤唾二倢伃袖一、倢伃曰、姊唾染二人紺褎一、正似二石上花一、假令、尙方爲レ之、未レ必能如レ此、衣之華、以爲二石華廣袖一と、〔四〕落空巖 杜子美の詩、晴雪落二長松一と、

【題義】夢中に一句を得て醒めて一詩を爲り回文詩と爲したものである、

【詩意】美人が玉盌を纖纖たる手で捧げて居る、亂點する餘花は碧衫に唾するの狀である、歌聲は咽んで水雲が靜院に凝結するかと思ふ、夢中に我は驚く松雪が空巖に落ちるかと、

〔二〕

空花落盡酒傾レ缸。　空花落ち盡して酒缸を傾く、
日上山融雪漲レ江。　日上りて山融し雪は江に漲る、
紅焙(一)二淺甌(二)一新火活。　紅は淺甌を焙して新火活す、
龍團(三)小碾鬭二晴窗一。　龍團小碾晴窗に鬭はす、

【字解】〔一〕紅焙 焙は茶をはうじること、〔二〕淺甌 淺き瓶、カメである、〔三〕龍團 極めて上品の茶、

【詩意】空花は落ち盡して酒は一缸を傾け飮む、日が上り山は融色を呈して雪は江に漲る、茶を焙して淺甌は新火活するの盛んなる狀である、其の茶は龍團の美である、是を小碾にして晴窗に其のきしる狀を鬭はして居る、

## 三朶花

房州通判許安世。以レ書遺レ予言。吾州有二異人一。常戴二三朶花一。莫レ知二其姓名一。郡人因以二三朶花一名レ之。能作レ詩。皆神仙意。又能自寫レ眞。人有レ得レ之者一。許欲以二一本一見レ惠。乃爲作二此詩一。

### 三朶花

【訓讀】房州通判許安世、書を以て予に遺りて言ふ、吾州に異人あり、常に三朶花を戴く、其の姓名

を知ること莫し、郡人因つて三朶花を以て之に名く、能く詩を作る、皆神仙の意、又能く自から眞を寫す、人之を得る者あらば、許すに一本を以て惠まれんと欲す、乃ち爲めに此の詩を作る、

學道無レ成鬢(一)已華。　學道成ること無く鬢已に華、
不レ勞千劫漫烝(二)レ砂。　勞せず千劫漫に砂を烝すを、
歸來且看一(三)宿覺。　歸來且つ看る一宿覺、
未レ暇遠尋二三朶花一。　未だ暇あらず遠く三朶花を尋ぬるに、
兩手欲レ遮瓶(四)裏雀。　兩手遮らんと欲す瓶裏の雀、
四條深怕井(五)中蛇。　四條深く怕る井中の蛇、
畫圖要レ識先生面。　畫圖識らんと要す先生の面、
試問房(六)陵好事家。　試みに問ふ房陵好事の家、

【字解】【一】鬢已華　盧綸の詩、主寞謝二親愛一、知余鬢已華」と、【二】烝砂　「首楞嚴經」に、佛云若不レ斷レ淫、修二禪定一者、如レ烝二砂石一、欲二其成一レ飯、經二百千劫一、只是熱砂」と、【三】一宿覺　「傳燈錄」に、永嘉元覺禪師、詣二曹溪一、初到振レ錫、繞二六祖一三匝、卓然而立、須臾告レ辭、祖曰返太速乎、日本自非レ動、豈有レ速乎、祖嘆曰、少留一宿、時謂二一宿覺一と、【四】瓶裏雀　人身を瓶に譬へ、精神を雀に譬ふ、四條の條は繩の事、繩を以て人身を樹上に縛す、【五】井中蛇　繩が切るれば身井に墜し、蛇に齩まるるのである、【六】房陵「輿地紀勝」に、三花洞、在二房陵縣溪巖下一と、

【題義】房州通判の官たる許安世が、書を寄せて、房州に一異人ありて、頭上に常に三朶花を戴く、衆人は其の人の名を知らぬから三朶花を以て其の人を呼ぶ、其の人詩も作り畫も作る、公乃ち詩を作りて其の事を言ふ、

【詩意】道を學んで成就せざる中に鬢は已に華白となる、勞せず千劫の長き間漫に砂を烝すの徒爾を、歸り來りて且つ看る一宿覺の機敏なるを、未だ吾は遠く三朶花を尋ぬるの暇がない、戒定の兩手を以て身が心慾の爲め惱まさるるを遮らんと欲するも、又煩惱の繩に縛せられ樹上に在つて怕るる井中の蛇を、畫圖を見て以て先生の面を識らんと思ひ、試みに之を房陵の好事家に問ふ、

【餘論】此等の詩は所謂邪魔が公の胸中に入つて、公が平生の宗旨を紊亂したるもの、紀曉嵐は五六二句を抹殺し去るが、五六のみでない、一二の句も意義を成さず、一宿覺の如きも、方角違ひのものである、

次二韻陳四雪中賞梅一　陳四が雪中賞梅に次韻す

臘(一)酒詩催レ熟。寒梅雪鬭レ新。　臘酒詩熟を催し、寒梅雪新を鬭はす、
杜陵休(二)レ嘆レ老。韋(三)曲已先レ春。　杜陵老を嘆ずるを休めよ、韋曲已に春に先んず、
獨(四)秀驚二凡目一。遺英臥(五)二逸民一。　獨秀凡目を驚かし、遺英逸民臥す、
高歌對(六)二三白一。遲暮慰(七)二安仁一。　高歌三白に對し、遲暮安仁を慰す、

【字解】〔一〕臘酒　杜子美の詩、蟻浮仍臘味と、〔二〕嘆老　杜子美の早梅詩、江邊一樹垂垂發、朝夕催人自白頭と、〔三〕韋曲　長安の地名、杜子美の詩、韋曲花無賴と、〔四〕獨秀　陳謝變の早梅詩に、迎春故早發、獨自不疑寒、畏落衆花後、無人別意看と、〔五〕臥逸民　東漢の袁安が雪中に高臥するを謂ふ、遺逸の士、之を逸民と呼ぶ、〔六〕對三白　王梅谿曰く、西人諺曰、要宜麥見三白、臘月に三度雪を見るを宜しとするのである、〔七〕慰安仁　晉潘岳、字は安仁、閒居賦を作りて曰く、自弱冠涉於知命之年、八徙官、一進階、再免、一除名、一不拜職、遷者、三而已矣、雖通塞有遇、抑亦拙之效也、其辭曰、人生安樂、孰知其他と、

【題義】陳四字は季常が雪中賞梅詩に次韻するもの、

【詩意】臘酒の熟する候には詩も亦熟を催す候である、詩の材料たる寒梅も已に新粧を鬪はして居る、杜陵の詩翁も老を嘆じてはならぬ、韋曲は詩翁の平生敬慕の處それが已に他處より早春である、萬花未だ開かざるに獨秀は凡目を驚かすに足る、人にしては逸民が雪中に臥するの高風がある、高歌して以て三白に對するによろし、君は安仁と同じく遲暮を慰するに足る身分である、

【餘論】坡公の五律、溫藉に近きものである、

## 正月二十日與潘郭二生出郊尋春忽記去年是日同至女王城作詩乃和前韻

正月二十日、潘郭二生と、郊を出で春を尋ぬ、忽ち記す去年是の日、同じく女王城に至り詩を作るを、乃ち前韻に和す

東風未肯入東門。　東風未だ肯て東門に入らず、
走馬還尋去歲邨。　馬を走らして還た尋ぬ去歲の邨、
人似秋鴻來有信。　人は秋鴻に似て來りて信あり、
事如春夢了無痕。　事は春夢の如く了に痕無し、
江城白酒三杯釅。　江城の白酒三杯釅に、
野老蒼顏一笑溫。　野老の蒼顏一笑溫なり、
已約年年爲此會。　已に約す年年此の會を爲さんと、
故人不用賦招魂。　故人用ひず招魂を賦するを、

【字解】〔一〕有信　「禮記」に、季秋之月、鴻雁來賓と、〔二〕春夢　白樂天の詩、人如春夢幾多時、〔三〕三杯釅　釅は釅酒、コキサケ、李白の詩、三杯通大道、一斗合自然と、〔四〕招魂　屈原に招魂章あり、

【題義】元豐四年の正月二十日に潘郭の二生を伴ひ、女王城東の禪莊院に游んで詩を作る、今年も其日に逢うて再游し、前年の韻を以て再び作る、

【詩意】節は已に春ではあるが、まだ東風は吹いて東門に入らない、が馬を走らして去歲游びし邨に再游して見る、恰も人間は秋鴻に似て來るに信がある、蓋し事は春夢の如く了に何等の痕跡も殘らない、江城の白酒は三杯にて醉ふ釅なるが故である、野老は蒼顏なるも一笑して溫存である、已に期約

する年年此の會合を爲すことを、故人は招魂まで賦して喚び起す必要はない、

【餘論】前詩に比すれば稍や遜色はあるが、猶ほ大家の面目を見る、

是日偶至ニ野人汪氏之居一。有レ神降ニ於其室一。自稱ニ天人李全字德通一。善ニ篆字一。用筆奇妙。而字不レ可レ識。云天篆也。與レ予言。有ニ所レ會者一。復作ニ一篇一。仍用ニ前韻一

是の日偶ま野人汪氏の居に至る、神あり其の室に降り、自から天人李全字は德通と稱す、篆字を善くす、用筆奇妙、而して字は識るべからず、云ふ、天篆なりと、予と言ふ、會する所の者あり、復た一篇を作り、仍ほ前韻を用ふ、

(一)酒渴思レ茶漫扣レ門。　酒渴して茶を思ひ漫に門を扣く、
那知竹裏是仙郵。　那ぞ知らん竹裏是れ仙郵、
已聞(二)龜策通神語。　已に聞く龜策通神の語、
更看(三)龍蛇落筆痕。　更に看る龍蛇落筆の痕、
(四)色瘁形枯應レ笑レ屈。　色瘁形枯應に屈を笑ふべし、
(五)道存目擊豈非レ溫。　道存目擊豈溫にあらずや、
歸來獨掃ニ空齋一臥。　歸來獨り空齋を掃うて臥す、
猶恐微言入ニ夢魂一。　猶ほ恐る微言夢魂に入るを、

【字解】【一】酒渴　「裴硎傳奇」に、長慶間、裴航歸ニ輦下一、經ニ藍橋驛一、因レ渴乞ニ漿於篳舍老嫗一、嫗喝曰、雲英(女名)擎ニ一甌漿一來、郎君要レ飲、航異レ之、俄於ニ葦箔下一、出ニ雙手一捧レ瓷飲レ之、眞玉液也、航謂レ嫗曰、願納ニ厚禮一、娶レ之可乎、嫗乃使レ求ニ玉杵臼一、杵刀圭藥一百日、以レ女妻レ之、遂入ニ玉峯洞中一、超爲ニ上仙一と、此の事を暗示する、【二】龜策　龜策を以てトすれば、百の吉凶皆當る、【三】龍蛇　詩文を書する筆勢の奔放なるを譬ふ、「法書苑」に、吳季札墓志、變化開合、若ニ龍蛇盤鬱一と、【四】色瘁　「史記屈原傳」に、顏色憔悴、形容枯槁と、【五】道存　「莊子田子方篇」に、溫伯雪子適レ齊、舍ニ於魯一、仲尼見レ之而不レ言、子路曰、吾子欲レ見ニ溫伯雪子一久矣、見レ之而不レ言、何邪、仲尼曰、若ニ夫人一者、目擊而道存矣、亦不レ可ニ以容一レ聲矣と、

【題義】女王城に游ぶの日、偶ま野人汪氏の居宅に至る、坐に神と稱し天人李德通と稱するものあり、善く篆字を書す、而かも其字は讀む能はず、天上の篆書なりと云ふ、談話するに會得する者の如くである、乃ち此の詩を作る、

【詩意】酒の爲めに渴を覺え乃ち茶を思うて漫に野人の門を扣く、那ぞ知らんや此の野人の家は卽ち是れ仙郵であると云ふことを、已に能く聞く龜策すれば神の語に通ずると云ふことを、今日更に看る龍蛇が筆端に落ちて痕あるを、顏色が憔悴し形容が枯槁すと叫んだ屈原は笑ふべきである、一反目擊して直ちに道を會得して居らるるを悟るは溫伯雪子の如き人である、辭して家に歸り獨り空齋を掃うて臥せば、猶ほ恐らくは天人の言はれた事は夢魂に入るであらう、

【餘論】紀曰く、溫伯雪子、用ニ一溫字一似レ未と、公と雖も韻の窮策は論するまでも無い、言ふに足

らざる市井の奇人を、之を文に入れ、詩に入るるは公の最も得意とする所、公も亦一種奇を好むの癖あるか、

## 浚井

古井沒荒萊。不食誰爲惻。
瓶罌下兩綆。蛙蚓飛百尺。
腥風被泥滓。空響聞點滴。
上除青青芹。下洗鑿鑿石。
沾濡愧童僕。杯酒暖寒栗。
白水漸泓渟。青天落寒碧。
云何失舊穢。底處來新潔。
井在有無中。無來亦無失。

浚井

古井荒萊に沒す、食はす誰か爲めに惻む、
瓶罌兩綆を下す、蛙蚓飛ぶこと百尺、
腥風泥滓を被り、空響點滴を聞く、
上は除く青青の芹、下は洗ふ鑿鑿の石、
沾濡童僕に愧ぢ、杯酒寒栗暖む、
白水漸く泓渟、青天寒碧落つ、
云何ぞ舊穢を失ふ、底の處に新潔を來す、
井は有無の中に在り、來も無く亦失も無し、

【字解】【一】瓶罌　カメとモタヒ、韓退之の詩、瓶大餅罌小、所任各有宜と、綆はツルベナハ、【二】蛙蚓　ミミズ、多くは蚯蚓に作る、以て綆の長きに譬ふ、【三】腥風　韓退之の詩、腥風遠更飄と、【四】鑿鑿　「毛詩唐風」に、揚之水、白石鑿鑿と、水の鮮明なるを云ふ、【五】沾濡　衣服などをうるほす、【六】寒栗　樂天の詩、朝傾暖寒酒と、【七】泓渟　柳宗元の文、散爲株林、滀爲清池、寥廓泓渟と、水がたまつて深くなりたるを云ふ、【八】有無中　「首楞嚴經」に、鑿井求水、出土一尺、于中則有一尺虚空、此空爲當因土所出、因鑿所有、無因自生と、

【題義】古井戸を浚渫して其の事を作る、

【詩意】古井は久しく荒萊の中に沒してある、知らずして飲まず無しと言うて誰か之を惻むや、瓶罌を二本の繩に付けて下せば、蛙蚓が飛ぶこと百尺の深さである、忽ち腥き風が瓶罌に泥滓を被つて來る、其の空間には點滴の響あるを聞く、而して上には青青の芹を除き、下には鑿鑿の石を洗ふ、我は衣を沾濡したる狀は童僕にも愧づ、是に於て杯酒は寒栗を暖めて飲む、(俗、酒をカンして飲む)白水は漸く泓渟にして、青天の寒碧が影を落すに至る、云何ぞ舊穢を消滅して、底の處よりか此の如き新潔の水出で來るや、井は深暗有無の中に在るも、水は元來も無ければ亦失も無い、

【餘論】紀曰く、入禪是東坡習逕、此却太似偈頌と、査初白云ふ、三四新警と、結句の十字全く偈頌なるも、其の他の十四句は偈頌にあらず、尋常の詩語である、

## 紅梅三首

怕愁貪睡獨開遲。
自恐冰容不入時。

紅梅　三首

怕愁す睡を貪り獨り開くこと遲きを、
自から恐る冰容の時に入らざるを、

【字解】【一】冰容　晉の王融の詩、冰容慙遠鑒と、【二】小紅　杜子美の詩、寒椰行疎翠、山梨結小紅

故作小紅桃杏色。　故に小紅桃杏の色を作し、
尚餘孤瘦雪霜姿。　尚ほ餘す弧瘦雪霜の姿、
寒心未肯隨春態。　寒心未だ肯て春態に隨はず、
酒暈無端上玉肌。　酒暈端無く玉肌に上る、
詩老不知梅格在。　詩老は知らず梅格の在るを、
更看綠葉與青枝。　更に看る綠葉と青枝とを、

【自注】石曼卿紅梅詩云、認桃無綠葉、辨杏有青枝、

【詩意】怕愁して睡を貪り目を開くことは遲い、花神は自から恐るる冰容の時期に入らざることを、是の故に小紅を呈して桃杏の色を作すのみならず、尚ほ孤瘦雪霜を冒すの姿を餘して居る、其の凌寒の心は未だ肯て春態に隨はない、が酒暈は端無くも玉肌の表面に上る、世の中の詩老は紅梅の資格は此の如き處にあるを知らず、更に綠葉と青枝とを評看する、

【餘論】紀曰く、細意鉤剔、却不入織巧、中有寓託、不同刻畫形似故也と、公同時の人、石延年紅梅の詩を作る、梅好唯傷白、今紅是絕奇、認桃無綠葉、辨杏有青枝、烘笑從人贈、酡顏任笛吹、未應嬌意急、發赤怒春遲と、公此中三四の句を評して曰く、此至陋語、郵學堂中態也と、費袞の「梁谿漫志」に曰く、世之淺近者、做月詩便說明、做雪詩便說白、東坡作詩力去此弊と、認桃の二句は紅梅の形似を說く者にして、兒童と同じきを笑ふものである、蓋し此等の纖巧自から喜ぶもの、宋人の常態、獨り石曼卿のみにはあらず、況んや石の五律認桃の十字を除き去れば餘の三十字は兒童より以下なるもの、公が此の十字を邨夫子の語と評するは、つまり全首を以て落第點を與へたるものである、是に由つて石の小家であり、公の大家である事が判る、方虛谷の「瀛奎律髓」にも三首中此の一首を取るは識がある、不入、不知、不の同字は疵である、

〔二〕

雪裏開花却是遲。　雪裏開花却つて是れ遲し、
何如獨占上春時。　何如ぞ獨り占む上春の時、
也知造物含深意。　也知る造物の深意を含むを、
故與施朱發妙姿。　故に施朱を與へて妙姿を發す、
細雨裛殘千顆淚。　細雨裛殘す千顆の淚、
輕寒瘦損一分肌。　輕寒瘦損す一分の肌、
不應便作夭桃杏。　應に便ち夭桃杏と作るべからず、

と、【三】玉肌　韋莊の詩、玉肌香膩透紅紗と、【四】詩老　孟東野の詩、唯應待詩老と、【五】綠葉　公の自注に、石曼卿紅梅詩云、認桃無綠葉、辨杏有青枝と、

【字解】【一】獨占　秦韜玉牡丹詩、獨把一春皆占斷、固留三月始教開と、【二】發妙姿　唐の歐陽詹の詩、桃李有奇質、樗櫟無妙姿と、

數點微酸已著枝。　數點の微酸已に枝に著く、

【詩意】雪裏に花を開くは却つて是れ遲しと云ふも、時節から言へば上春の魁を占領するものである、也知る天の造物主は深意を含んで爲す所、故に施朱を付與して妙姿を發せしむるもの、細雨には裛ひ殘す千顆の淚痕を、輕寒には痩損する一分の肌膚を、併し乍ら彼の天桃杏の質とは相違がある、それは數點の微酸が實と爲りて已に枝に著けてある、

〔三〕

幽人自恨探春遲。　幽人自から恨む春を探るの遲きを、

不見檀心未吐時。　見ず檀心未だ吐かざる時、

丹鼎奪胎那是寶。　丹鼎奪胎那ぞ是れ寶、

【自注】朱砂紅銀、謂之不奪胎色、

玉人頩頳(一)更多姿。(二)　玉人頩頳更に多姿、

抱叢暗蘂初含子。　叢を抱くの暗蘂初めて子を含み、

落盞穠香已透肌。　盞に落つる穠香已に肌に透る、

乞與徐(三)熙畫新樣。　乞ふ徐熙に與へて新樣を畫かん、

【字解】〔一〕頩頳　前に解す、玉人怒るときは、頩紅色を爲す、以て紅梅に譬ふ、〔二〕多姿　陸士衡の文賦に其爲物也多姿と、〔三〕徐熙　沈存中の「夢溪筆談」に、國初江南布衣徐熙、長於畫花竹、以墨筆畫之、殊草草、略施丹粉、神氣迥出、別有生動之意と、〔四〕璀璨　花の光る貌、吳筠の詩、璀璨列玉華と、

竹間璀璨(四)出斜枝。　竹間璀璨斜枝を出す、

【詩意】幽人は自から遺恨に思ふ春を探るの遲かりしことを、檀心の未だ吐かざるの時期を見ずに過ぎた、丹鼎が奪胎なぞと稱するが那ぞ是れ寶である、玉人が頩頳なるは言ふに言はれぬ姿である、抱叢の暗蘂は初めて子を含む、落盞の穠香は已に肌に透る、乞ふ徐熙に與へて新樣を畫かしめたい、竹間に璀璨として斜枝を出すの圖を、

【餘論】紀曰く、後二首蛇足と、公に在つては蛇足の感あるも、他人に在つては丹鼎の重價がある、石曼卿輩の一指も染むる能はざるもの、

## 次韻子由寄題孔平仲草菴

子由が孔平仲の草菴に寄題せるに次韻す

逢人欲覓安(一)心法。　人に逢うて安心の法を覓めんと欲す、

到處先爲問道菴。　到る處先づ爲に道菴を問ふ、

盧(二)子不須從若士。　盧子は須ひず若士に從ふを、

蓋(三)公當自過曹參。　蓋公は當に自から曹參に過ぐべし、

【字解】〔一〕安心法　「傳燈錄」に、慧可曰、覓心了不可得、祖曰、與汝安心竟と、〔二〕盧子　「神仙傳」に、燕人盧敖、至蒙谷之山、而見若士焉、方踡龜殼而食蟹蛤と、

羨君美玉經(四)三火。　羨む君が美玉三火を經、
笑我枯桑(五)困八蠶(六)。　笑ふ我が枯桑八蠶に困むを、
猶喜大江同(七)一味。　猶ほ喜ぶ大江の同一味なるを、
故應千里共清甘。　故に應に千里清甘を共にすべし、

【三】蓋公　「漢書」に、曹參爲齊相、避正堂、舍蓋公と、蓋公は道概を謂ふ、【四】三火　白樂天の詩、大圭廉不割、利刀用不缺、當其斬馬時、良玉不如鐵、置鐵在洪爐、鐵消易如雪、良玉同其中、三日燒不熱と、【五】枯桑　古詩に枯桑知天風と、【六】八蠶　左太沖の「吳都賦」に、再熟之稻、鄕貢八蠶之綿と、稻は一年に二度熟し、蠶は一年に八度育するのである、【七】同一味　「華嚴經」に、譬如衆水、皆同一味、隨器異故、水有差別、無念慮と、

【題義】孔平仲が江州の官舍に在つて、而かも艸菴に住したるを子由が其の事を歌ふ、公之に次韻して作る、

【詩意】人に逢へば安心の法を授からんと覓むる故に、官游して到る處に先づ高人の道菴を訪問する、盧敖は已に道を知るもの何ぞ若士に從游するに及ばん、蓋公の如き人の處へは曹參が訪ふは宜し、羨む君が心中の美玉は已に三火を經て居るも、笑ふ我が枯桑には八蠶は勿論一蠶を得るにも困む、猶ほ喜ぶ大江の水は何れの處も同一味である、是の故に千里を隔るも飲む味は共に淸甘である、

【餘論】仙佛同架にして道菴の淸疎を說く所、公の面目躍如たるものがある、

# 二蟲

君不見水馬兒(一)。　君見ずや水馬兒、
步步逆流水。　步步流水に逆ふ、
大江東流日千里。　大江東流する日に千里、
此蟲趯趯(二)長在此。　此の蟲趯趯長く此に在り、
君不見鷃濫堆(三)。　君見ずや鷃濫堆、
(四)決起隨衝風。　決起衝風に隨ふを、
(五)隨風一去宿何許。　風に隨つて一去何許に宿するや、
逆風還落蓬蒿中。　逆風還た落つ蓬蒿の中、
二蟲愚智俱莫測。　二蟲愚智俱に測る莫く、
江邊一笑無人識。　江邊一笑人の識るなし、

【詩意】君は見ないか彼の水馬兒てふ水蟲を、水上を步步する流れに逆うて行く、大江の水は東流して日に千里である、然るに此の蟲は趯趯としながら長く此に止まる、又君見ないか鷃濫堆てふ蟲を、

【字解】【一】水馬兒　杜子美の詩、「鷹兒爭水馬」の句あるも、鷹は蟲にあらず、後賢の教を乞ふ、又考ふ莊子逍遙游に之二蟲又何知とあるは、蜩と鷽鳩とを指して二蟲と云ふにあれば、蜩は確かに蟲なれど、鷽鳩は鳥である、然らば此の水馬兒も「太平御覽」に、海中有魚似馬、或黃或黑、名作水馬とあるを用ひしものか、【二】趯趯　「詩召南」に、草蟲趯趯と、跳る貌である、【三】鷃濫堆　王楙縣曰く、方言阿如軋、亦名鷃濫堆とあるが、和名は不詳である、【四】決起　「莊子逍遙游篇」に、我決起而飛と、【五】隨風　劉禹錫の詩、隨風好去宿誰家と、

此の蟲は一度決起すれば衝風の勢に隨つて天に上る、風に隨つて一去何許に宿するやを知らない、又風に逆へば還つて蓬蒿の中に落つるのである、此の二蟲孰れか愚孰れか智であるか吾は測ることが出來ない、江邊に立つて一笑するも人の識る者はない、

【餘論】紀曰く、小品寓意、却不二小巧一と、梅谿末句を評して、杜子美縛雞行、雞蟲得失無二了時一、注二目寒江一倚二山閣一同意と曰ふは頗る當る、

## 陳季常見レ過三首

陳季常過ぎ見る　三首

〔一〕

仕宦常畏レ人。退居還喜レ客。　仕宦常に人を畏る、退居還た客を喜ぶ、

君來輒館レ我。未レ覺雞黍窄。　君來りて輒ち我を館とす、未だ覺えず雞黍の窄きを、

東坡有二奇事一。已種二十畝麥一。　東坡奇事あり、已に十畝の麥を種う、

但得二君眼青一。不レ辭奴飯白。　但君が眼の青きを得たり、辭せず奴飯の白きを、

【字解】〔一〕畏人　魏の文帝の詩、客子常畏レ人と、〔二〕館我　「檀弓」に、子夏曰、賓客至無レ所レ館、夫子曰、生於レ我乎館、死於レ我乎殯と、〔三〕君眼青　「晉書」に、阮籍、又能爲二青白眼一、見二禮俗之士一、以二白眼一對レ之、及レ見二嵇喜一、籍作二白眼一、喜不レ懌而退、喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴而造焉、籍大悅、乃見二青眼一、由レ是禮法之士、疾レ之若レ仇と、〔四〕奴飯白　杜子美の詩、與二奴白飯一馬青芻と、

【詩意】仕宦の身は上下を顧慮して常に人を畏る、退居すれば顧慮する所無ければ還つて客を喜ぶ、今君來りて我が家を館とする、待遇の疎末なるは少しも頓著しない、東坡には奇事がある、東坡には已に十畝の麥を種う、君が青眼にて我に對するを得ば、辭しない奴に白飯を與ふるを、

〔二〕

送レ君四十里。只使一帆風。　君を送る四十里、只使はむ一帆の風を、

江邊千樹柳。落二我酒杯中一。　江邊千樹の柳、我が酒杯の中に落つ、

此行非二遠別一。此樂固無レ窮。　此の行遠別にあらず、此の樂み固に窮まり無し、

但願長如レ此。來往一生同。　但願ふ長く此の如く、來往一生同じきを、

【字解】〔一〕一帆風　孟東野の詩、一帆天外風と、

【詩意】君を送るに四十里、只一帆の順風を使するのみ、江邊千樹の柳色は、影を我が酒杯の中に落す、此の行や遠別にはあらずして、此の樂みは固より窮まりが無い、但願はくは長く此の如き交游を持續して、來往して一生同じからんことを、

〔三〕

聞君開二龜軒一。東檻俯二喬木一。　聞く君が龜軒を開けば、東檻喬木を俯す、

人言君畏事、欲作龜頭縮。　人は言ふ君事を畏れ、龜頭の縮を作さんと欲すと、
我知君不然、朝飯仰暘谷。　我知る君は然らず、朝飯暘谷を仰ぐ、
餘光幸分我、不死安可獨。　餘光幸に我に分て、死せずんば安んぞ獨りす可けん、

【字解】【一】龜頭縮　盧仝の詩、北方寒龜被蛇縛、藏頭入殼如入獄と、【二】暘谷　日の出づる所、「淮南子」に、龜嚥日氣而壽、故蟄生者、服日華、所以效之と、【三】不死　韓退之の李君墓誌に我得秘藥、不可獨不死と、

【詩意】聞く君が新たに龜軒を開くと、其の軒の東檻より喬木を俯視すると、人は言ふ君は事を畏れて、龜が頭を縮むる如き狀であると、我は知る人言は誤つて居ることを、君は頭を縮める所ではない反對に擧げて居る、論より證據朝飯の時などは暘谷を仰ぐの陽氣である、願はくは其の餘光を幸に分與し玉へ、死せざるの間は獨善主義ではならぬ、

【餘論】紀曰く、二詩殊窘弱と、

## 謝人惠雲巾方舃二首　人の雲巾方舃を惠むを謝す　二首

燕尾稱呼理未便。　燕尾の稱呼理未だ便ならず、
剪裁雲葉却天然。　剪裁雲葉却つて天然、
無心只是青山物。　無心只是れ青山の物、
覆頂宜歸紫府仙。　覆頂宜しく歸すべし紫府の仙、
轉覺周家新樣俗。　轉た覺ゆ周家新樣の俗なるを、
【自注】頭巾起於後周。
未容陶令舊名傳。　未だ容れず陶令が舊名傳ふるを、
鹿門佳士勤相贈。　鹿門の佳士勤めて相贈る、
黑霧元霜合比肩。　黑霧元霜合に比肩すべし、
【自注】皮襲美贈天隨子紗巾詩云、掩斂乍疑裁黑霧、輕明渾似帶元霜。

【字解】【一】燕尾　頭巾の先端岐を成して其の狀燕尾に似てゐるのである、【二】雲葉　杜子美の詩、雨稀雲葉斷と、【三】無心　歸去來辭に、雲無心以出岫と、【四】覆頂　道士の頭巾、【五】周家　公の自注に、頭巾起於後周と、皮日休の詩、周家新樣替三梁と、【六】陶令　淵明は常に濁酒を飲む、頭上の巾を以て之を漉して飲む、漉し了れば復た結る、人之を漉酒巾と呼ぶ、【七】鹿門　唐の皮日休字は襲美、襄陽の人、詩文を以て著はる、鹿門山に隱れて自から閒氣布衣と稱したのである、【八】黑霧　公の自注に、皮襲美、贈天隨子紗巾詩云、掩斂乍疑裁黑霧、輕明渾似帶元霜と、【九】比肩　「戰國策」に、淳于髡、一日而見七人、宣王曰、寡人聞千里一士、是比肩而至也と、

【題義】雲巾と方舃とを惠む人あり、此を賦して謝したのである、

【詩意】頭巾を燕尾と稱呼するは未だ理便ではない、今雲葉を剪裁する却つて天然の趣がある、雲は無心にして只是れ青山の物である、今巾に雲の名を付け頂を覆ふ宜しく紫府の仙居に歸すべし、轉た覺ゆ周家の頭巾は新樣なるも俗である、陶令の漉酒巾は風雅であるが只舊名が傳ふるのみである、鹿門の佳士が勤めて贈る所の、黑霧と元霜是は只今のものと比肩して愧ぢない、

〔二〕

胡韡短靿格麤疎。古雅無如此樣殊。
妙手不勞盤作鳳。輕身只欲化爲鳧。
魏風褊儉堪羞葛。楚客豪華可笑珠。
擬學梁家名解脫。便於禪坐作跏趺。

〔二〕

胡韡短靿格麤疎、
古雅此の樣の殊なるに如くは無し、
妙手勞せず盤鳳を作すを、
輕身只欲す化して鳧と爲らんと、
魏風褊儉葛に羞づるに堪へたり、
楚客の豪華珠を笑ふ可し、
梁家を學んで解脫と名けんと擬す、
便ち禪坐に於て跏趺を作す、

【字解】〔一〕胡韡　胡人製する所の韡、「古今注」に、趙武靈王、好胡服、常服之とあれば、韡も亦服と言へるのである、〔二〕短靿　靿は靴のまがる物、「集韻」に、吳履謂之靿と、〔三〕作鳳　公の自注に、晉永嘉中、有鳳頭履と、〔四〕爲鳧　仙人の舃、化して鳧と爲る、〔五〕褊儉　「詩魏風」の葛屨は褊卽ち衣の小さきを指す、〔六〕笑珠　楚の春申君は三千の食客に皆珠履を躡ましむ、〔七〕梁家　梁の武帝、靴を作り、解脫履と名づく、〔八〕跏趺　結跏趺坐、右脚を左膝上に置き、左脚を右膝上に置きて坐す、之を跏趺と言ふ、

【詩意】胡韡や短靿は良に格が麤疎にて雅致がない、古雅なるは今贈られたる方舃に如くはない、之を受くれば別に妙手を勞して鳳頭鞵を作らせる要はない、之を脚に服すれば身は輕くなり飄飄化して鳧と爲らんと欲する、魏風の葛屨は儉素は可いが儉に過ぎて羞と爲る、又楚の春申君の客は珠履を躡むが是は豪華に過ぎて又笑ふべきである、我は梁武に倣うて此の舃を解脫と名けんと思ふ、著用しながら禪坐して跏趺を作すことが出來る、

【餘論】紀曰く、純作皮陸格と、查初白云ふ、舊事新用と、前首、未便と未容、後首、作鳳、作跏趺、皆是れ小疵、

寒食雨二首

自我來黃州。已過三寒食。
年年欲惜春。春去不容惜。
今年又苦雨。兩月秋蕭瑟。
臥聞海棠花。泥汙燕脂雪。
暗中偸負去。夜半眞有力。
何殊病少年。病起頭已白。

寒食雨　二首

我黃州に來りしより、已に三寒食を過ぐ、
年年春を惜まんと欲す、春去つて惜むを容れず、
今年又苦雨、兩月秋蕭瑟、
臥して聞く海棠花、泥は汙す燕脂の雪、
暗中偸負し去る、夜半眞に力あり、
何ぞ殊ならん病少年、病起すれば頭已に白し、

【字解】〔一〕三寒食　三年黃州にて寒食を閲す、〔二〕惜春　迎春と共に惜春は禮式の一種、〔三〕臥聞　花に灑ぐの雨、〔四〕泥汙　杜子美の詩、林花著雨臙脂濕と、〔五〕夜半　「莊子大宗師篇」に、藏舟于壑、藏山于澤、謂之固矣、然夜半有力者、負之而走、昧者不知也と、

【題義】冬至より已に一百五日を經て寒食の節と爲る、乾粥を食ふの時、天雨ふる其の淒狀を作るの

である、

【詩意】我は黃州に赴任してから、已に三度寒食の節を過ぐ、而して年年惜春の情を歌はんと思ひつ、春は何の容赦も無く堂堂と過ぎ去る、今年も二月と三月の間雨が多く、其の二箇月の間秋の蕭瑟たる景色である、臥して聞く海棠花に灑ぐの雨を、折角燕脂の脣玉雪の如き色も泥に汚される、暗中に其の容姿を偸負して去る、夜半は眞に力あるものである、其の狀態は病んだ少年が、病より起きたときは頭已に白きと殊ならないのである、

〔二〕

春江欲入戶。雨勢來不已。
小屋如漁舟。濛濛水雲裏。
空庖煮寒菜。破竈燒溼葦。
那知是寒食。但感烏銜紙。
君門深九重。墳墓在萬里。
也擬哭途窮。死灰吹不起。

〔二〕

春江戶に入らんと欲す、雨勢來りて已まず、
小屋漁舟の如く、濛濛水雲の裏、
空庖寒菜を煮る、破竈溼葦を燒く、
那ぞ知らん是れ寒食、但感ず烏紙を銜むに、
君門深きこと九重、墳墓萬里に在り、
也途窮に哭せんと擬す、死灰吹けども起たず、

【字解】〔一〕銜紙　白樂天寒食吟に、風吹曠野紙錢飛と、寒食には紙錢を製し、墳墓を祭る、〔二〕九重　「楚辭」に、君之門兮九重と、〔三〕途窮　杜子美の詩、此身醒復醉、不擬哭途窮と、〔四〕死灰　「前漢書」に、韓安國下獄、獄吏辱安國、安國曰、死灰獨不復然乎、曰然則溺之と、宋玉の風賦に吹死灰と、

【詩意】雨の爲め春江が漲りて戶に入らんとする勢である、其の上雨勢が猶ほ未だ已まない、人家の小屋は宛然漁舟の如くである、濛濛として水雲の裏に住するのである、空庖に寒菜を煮て、破竈には溼葦を燒くの始末である、那ぞ知らんや是が寒食の節であると、但感ずるは烏が紙錢を啣んで飛ぶことを、君門は深さ九重にして、墳墓は萬里の遠きに在る、我は途窮に哭せんと擬するも、死灰は吹けども已に起たない、

【餘論】紀曰く、暗中二句、用事殊笨、末二句比擬亦淺、小屋二句自好、結太盡と、紀は詩句としての佳は、小屋如漁舟、濛濛水雲裏の十字のみと評するのである、公の詩は力を故事を運用するに用ひて、景色を自然に歌ふの力に乏しきが如くである、後世摘句圖を製せんと欲する者は、公に取る所少きは是が爲めである、

徐使君分新火

臨皐亭中一危坐。
三見清明改新火。

徐使君新火を分つ

臨皐亭中一に危坐す、
三たび見る清明新火を改むるを、

【字解】〔一〕臨皐亭　或は臨皐館と曰ふ、黃州の朝宗門外に在り、〔二〕危坐　正坐又は端坐と同義、

(四)溝中枯木應レ笑レ人。　溝中の枯木應に人を笑ふべし、
(五)鑽斫不レ然誰似レ我。　鑽斫然えず誰か我に似ん、
黃州使君憐二久病一。　黃州の使君久病を憐み、
分レ我五更紅一朶。　我に分つ五更紅一朶、
從來破(六)釜躍二江魚一。　從來破釜江魚躍る、
只有二清詩嘲(七)飯顆一。　只清詩の飯顆を嘲けるあり、
起攜(八)二蠟炬一遶二空室一。　起つて蠟炬を攜へて空室を遶る、
欲レ事(九)二烹煎一無(一〇)二一可一。　烹煎を事とせんと欲するも一可無し、
爲公分作無(一一)盡燈。　爲めに公は分ち作す無盡燈、
(一二)照破十方昏暗鎖。　照破す十方昏暗の鎖を、

【三】改新火　「江叟詩話」に、唐時淸明、取二楡柳之火一、以賜二近臣一、本朝因レ之と、之を新火と言ふ、【四】溝中　「莊子」に、百年之木、斷在二溝中一と、【五】鑽斫　盧仝の詩、不レ堪二鑽灼與二天下一と、木をキルのである、【六】破釜　後漢の范史雲は貧にして釜中に魚を生ず、【七】飯顆　杜子美は飯顆山下に住したるを以て、「舊唐書」に、太白譏二杜甫一、有二飯顆之嘲一と、【八】蠟炬　杜子美の詩、因レ詩蠟炬紅と、【九】烹煎　韓退之の詩、劑中事二煎烹一と、【一〇】無一可　司馬相如の「子虛賦」に、二者無二一可一也と、【一一】無盡燈　「淨名經」に、諸姉有二法門一、名二無盡燈一、譬如二一燈一、燃二百千燈一、冥者皆明、明終不レ盡と、【一二】照破　「涅槃經」に、一輪降二世間一、黑暗一日破と、

【題義】寒食斷火の後翌日に徐が新火を分つを謝せし詩、

【詩意】臨皐亭中に一人危坐する、而して三年三度淸明に逢うて新火を分與せられたるを見る、溝中の枯木は應に人を笑ふであらう、骨を折つて鑽斫するも燃えず其の意氣地無きこと誰か我に似ん、所が黃州の使君は我が久病を憐み、我に分與する五更紅一朶を、我は從來破釜に江魚を躍らす如き貧である、只時あり淸詩を作り飯顆を嘲ける、起つて蠟炬を攜へて徒らに空室を遶る、飲食物を調理せんと思ふも一として可なるものは無い、幸に公が新火を分たるに因つて之を無盡に作すを得、照破する十方昏暗の鎖を、

【餘論】紀曰く、工二於簸弄一、妙是實地風光、故不レ比二油滑掉筆一と、結句に至りて唐突佛語を引用して、偈頌體に墜ちざる所に其才力を發揮する、

## 次韻答二元素一

次韻元素に答ふ

余舊有レ贈二元素一詞一云。天涯同是傷二流落一。元素以爲二今日之先兆一。且悲三當時六客之存亡一。六客蓋張子野劉孝叔陳令擧李公擇及元素與レ余也。

【訓讀】余舊元素に贈る詞あり、云ふ、天涯同じく是れ流落を傷むと、元素以て今日の先兆と爲し、且當時六客の在亡を悲しむ、六客は蓋し張子野・劉孝叔・陳令擧・李公擇及び元素と余となり、

不レ愁春盡絮隨(一)レ風。　愁へず春盡きて絮風に隨ふを、

【字解】【一】隨風　劉禹錫の詩、

但喜丹砂入頰紅。　但喜ぶ丹砂頰に入つて紅なるを、
流落天涯先有讖。　天涯に流落す先づ讖あり、
摩挲金狄會當同。　金狄を摩挲す會ま當に同じかるべし、
蘧蘧未必都非夢。　蘧蘧未だ必ずしも都て夢に非んばあらず、
了了方知不落空。　了了方に知る空に落ちざるを、
莫把存亡悲六客。　存亡を把つて六客を悲しむ莫かれ、
已將地獄等天宮。　已に地獄を將て天宮に等しくす、

春盡架飛留不得、隨風好去落誰家、と、【二】有讖 讖は讖驗、しるし、【三】金狄 「漢晉春秋」に、魏明帝、徙長安銅人、金狄或泣と、銅の佛像である、【四】蘧蘧 「莊子」に、蘧蘧然而胡蝶也と、【五】了了 「蔡禪師十玄談」に了了了時無可了、玄玄玄處亦須訶と、「傳燈錄」に、慧海禪師、謂法明律師曰、禪師家多落空、法明大驚曰、何得落空、師曰、經論是紙墨、文字空設、坐主執滯、豈不落空と、【六】天宮 「圓覺經」に、地獄天宮、俱爲淨土と、

【題義】 舊時元素に贈りし詞が、殆んど今日の運命を豫言したごとく考へて元素が悲しむ、乃ち此の詩を作りて元素を慰むるのである、

【詩意】 愁へず三春が盡き去つて柳絮風に飛び去るを、但喜ぶ丹砂の靈藥の效が頰に入つて紅を見るを、天涯に流落せる讖言は的中せるも、金狄を摩挲して心を愉快にするは會ま同調である、蘧蘧然としたるも我等は夢でなくはないと思ふ、了了明明に文字は方に知る空に落在するものでない、存だの亡だの考へて六人の事を悲むは休めるがよい、由來苦痛の地獄も極樂の天宮も同等のものである、

【餘論】 紀曰く、五六太滑、落句尤粗曠と、紀は佛典に於ては全く盲人、此の詩意を解する資格が無い、公は地下に於て大笑することであらう、

## 蜜酒歌　　蜜酒の歌

西蜀道士楊世昌。善作蜜酒。絕醇釅。余既得其方。作此歌以遺之。

【訓讀】 西蜀の道士楊世昌、善く蜜酒を作る、絕だ醇釅、余既に其の方を得、此の歌を作り以て之に遺る、

眞珠爲漿玉爲醴。　眞珠を漿と爲し玉を醴と爲し、
六月田夫汗流泚。　六月田夫汗流泚たり、
不如春甕自生香。　如かず春甕自から香を生ずるに、
蜂爲耕耘花作米。　蜂を耕耘と爲し花を米と作す、
一日小沸魚吐沫。　一日小沸して魚沫を吐き、
二日眩轉淸光活。　二日眩轉して淸光活す、

【字解】 【一】眞珠 李賀の詩、小槽酒滴眞珠紅と、【二】醴 甘酒を言ふ、【三】泚 汗の出る貌、【四】眩轉 班孟堅西都賦に、目眩轉而意迷と、【五】撥 「續通鑑長編」に、今醋酒、其齊、冬以二十五日、春秋十五日、夏十日、撥醅變、而浮蟻涌于面、謂之撥醅、豈所謂泛齊者

三日開甕香滿城。　三日甕を開けば香城に滿つ、
快瀉銀瓶不須撥。(五)　銀瓶に快瀉して撥するを須たず、
百錢一斗濃無聲。　百錢一斗濃かに聲無し、
甘露微濁醍醐(六)清。　甘露微濁なるも醍醐淸し、
君不見南園采花蜂似雨。　君見ずや南園の采花蜂雨に似たり、
天敎釀(七)酒醉先生。　天は酒を釀して先生を醉はしむ、
先生年來窮到骨。　先生年來窮骨に到り、
問人乞(八)米何曾得。　人を問ひ米を乞ふも何ぞ曾て得ん、
世間萬事眞悠悠。　世間萬事眞に悠悠、
蜜蜂大勝監(九)河侯。　蜜蜂大に勝る監河侯、

【題義】西蜀の道士である楊世昌が蜜酒を作るの方法を授けらる、因つて此の歌を作つたのである、

【詩意】眞珠と玉とを以て漿醴と爲したかと思ふ色も味も美である、六月は田夫が汗を流して泚泚然たるは、如かず春甕に自から香を生ずるには、それは蜂が耕耘して花が卽ち米である、其の耕耘する一日には小沸して魚が沫を吐くの狀である、二日には眩轉して淸光が活現する、三日に至り甕を開けば香氣滿城である、撥醅するを待たずして銀瓶に快瀉する、百錢にして一斗も購ふ濃かにして聲無く、甘露微濁なるも醍醐は淸む、君も見ないか南園の采花に集る蜂は雨に似て多し、天は蜂に酒を釀らしめて先生を醉はしむ、東坡先生は年來貧窮骨に到るの極貧である、他人を問うて米を乞ふも何ぞ曾て之を得られようぞや、世間の萬事は眞に悠悠たるを感ずる、今蜜蜂を賜はりたるは監河侯の賜より尙ほ勝ると思ふ、

【餘論】紀曰く、平調直走、便嫌淺率と、又曰く、結句太淺露と、蜂爲耕耘花作米は眞に奇語である、平調淺率の評語は當らない、

耶と、【六】醍醐　佛敎に味の極まるものを醍醐と言ふ、【七】釀酒　庾開府の詩に、「花留釀蜜蜂」と、【八】乞米　顏魯公與李太保乞米帖に、「拙于生事、擧家食粥來已數月、今又罄竭、祇益憂煎、輒恃深情、故令投告、惠及少米、實濟艱勤」と、【九】監河侯　「莊子外物篇」に、莊周家貧、故往貸粟於監河侯と、



## 又一首。答二猶子與王郎見和

又一首、二猶子と王郎と和せらるるに答ふ

脯(一)青苔。炙(二)青蒲。　脯青苔、炙青蒲、
爛(三)蒸鵝鴨乃瓠(四)壺。　爛蒸の鵝鴨は乃ち瓠壺、
煮豆作乳脂爲酥。　豆を煮て乳と作し脂を酥と爲す、
高燒油(五)燭斟蜜酒。　高く油燭を燒きて蜜酒を斟む、

【字解】【一】脯青苔　「潘岳西征賦」に、野蒲變而成脯、注云趙高欲爲亂、先設驗以蒲爲脯、二世不覺、羣臣敢言蒲者、陰誅之と、[illegible]解曰、南人以青苔爲脯と、脯はホジシ、乾肉を云ふ、「論語鄕黨篇」

貧家百物初何有。
古來百巧出窮人。
搜羅假合亂天眞。
詩書與我爲麴蘗。
醞釀老夫成搢紳。
質非文是終難久。
脫冠還作扶犂叟。
不如蜜酒無燠寒。
冬不加甜夏不酸。
老夫作詩殊少味。
愛此三篇如酒美。
封胡羯末已可憐。
不知更有王郎子。

貧家百物初めは何ぞ有せん、
古來百巧窮人より出づ、
搜羅假合は天眞を亂す、
詩書我と麴糵爲り、
醞釀老夫搢紳と成る、
質は非文は是なるは終に久しき難し、
脫冠還た扶犂の叟と作る、
如かず蜜酒燠寒無く、
冬甜を加へず夏酸ならざるに、
老夫詩を作り殊に味少し、
愛す此の三篇酒の如く美なるを、
封胡羯末已に憐む可し、
知らず更に王郞子あるを、



に、沽酒市脯不レ食と、「呂覽」に、殺ニ鬼侯ニ而脯レ之と、人を極刑に處するを云ふ、【二】炙 肉を火あぶりすること、【三】鵝鴨 ガテウとカモ、「盧氏雜說」に、鄭餘慶、召レ人會食、呼ニ左右ニ曰、處分厨家、爛蒸去レ毛勿レ拗ニ折項ニ、諸人相顧、以爲ニ必鵝鴨之類ニ、良久就レ餐、每人前下ニ粟飯一椀ニ、蒸ニ壺盧一枚ニ、相國餐美、諸人先笑、强進而罷と、【四】瓠壺 ヒサゴの壺、【五】油燭 馮延巳の辭、高燒銀燭照ニ流蘇ニと、【六】百巧 王倚翁曰く、苔を以て脯と爲し、蒲を以て炙と爲し、瓠を以て鵝鴨と爲し、豆を以て乳と爲し、脂を以て酥と爲し、油を以て燭と爲し、蜜を以て酒と爲す、皆百巧の爲す所なりと、【七】假合 「原人論」に、此身但是衆緣假合と、【八】詩書 徐陵與ニ衆室ニ書、詩書甘ニ于酒醴ニと、【九】麴糵 共にカウジである、【一〇】老夫 「左傳隱公四年」に、石碏曰、老夫耄矣、無ニ能爲ニ也と、【一一】搢紳 「史記封禪書」に、因雜ニ搢紳先生之略術ニと、【一二】質非文是 「揚子法言」に、其文是也、其質非也、羊質而虎皮也と、【一三】脫冠 謝靈運の詩、歸客遂海隅、脫冠謝ニ朝列ニと、【一四】扶犂 「洞仙傳」に、郭璞曰、吾昨夜夢在ニ石頭外ニ、江中扶犂而耕と、【一五】如酒美 杜牧之の詩、酒痕誇ニ酒美ニと、【一六】封胡羯末 「晉書」に、謝奕女韞、初適ニ王凝之ニ、還甚不レ樂、安曰、王郎逸少子不レ惡、汝何恨乎、答曰、一門叔父則有ニ阿大中郎ニ、群從兄弟ニ、復有ニ封胡羯末ニ、不レ意天壤之中、乃有ニ王郎ニ、封謂ニ謝歆ニ、胡謂ニ謝朗ニ、羯謂ニ謝元ニ、末謂ニ謝川ニ、皆其小字也と、

【詩意】 靑苔を乾肉となし靑蒲を炙にする、瓠を以て又鵝鴨の如く爛蒸する、又豆を煮て乳と作し脂を酥と爲す、又油を以て燭と爲して以て蜜酒を斟む、貧家には百物は愚か一物も初めはない、しかも古來より種種の發明は其の貧家の窮人より出るのである、搜羅して假合する者は由來天眞を亂る、詩や書は我に於ては其の樂麴糵と同じである、其の詩書の力が老夫を醞釀して一箇の搢紳と成化せしむ、されど本質が文にあらざるものは終に箔が剝げる、搢紳の冠を脫いで老夫の犂に扶けられて活きることになる、如かず蜜酒の燠も寒も無く、又冬も甜味を加へず夏も酸味を增さざるに、老夫が此の如き事を歌ふも詩に味が少い、只愛す公等の三篇は酒の如く美であるを、封胡羯末の四人は憐むべきである、知らず更に王郞子てふ愛すべき人あることを、

【餘論】 紀曰く、亦是滑調と、余謂ふ此の如き詩は英雄欺レ人の類、又空拳誑ニ小兒ニの類、老夫作レ詩殊少レ味、公自から公の非を知る、又仔細に評すれば假合の二字と亂ニ天眞ニの三字は意義を爲さない、假合本非レ眞でなければならぬ、假合には亂すことが出來ない、公の靈余に敎ふるあれば幸福である、

## 謝陳季常惠一揞巾　陳季常の一揞巾を惠むを謝す

夫子胷中萬斛寬。　夫子胷中萬斛寬かなるに、
此巾何事小團團。　此の巾何事ぞ小團團たる、
半升僅漉淵明酒。　半升僅かに漉す淵明の酒、
（一）二寸纔容子夏冠。　二寸纔に容る子夏の冠、
好戴（二）黃金雙得勝。　好戴す黃金雙得勝を、
休敎（三）白苧一生酸。　白苧一生酸ならしむるを休めよ、
臂弓腰箭何時去。　臂弓腰箭何れの時にか去り、
直上陰山取（四）可汗。　直ちに陰山に上りて可汗を取らん、

【字解】【一】二寸　「漢杜欽傳」に、欽字子夏、茂陵杜鄴與レ欽同二姓字一、俱以二才能一稱二京師一、而欽目偏盲、故衣冠謂レ欽爲二盲杜子夏一以相別、欽惡三以レ疾見二詆、廼爲二小冠高廣纔二寸一、由レ是京師更謂レ欽爲二小冠杜子夏一と、【二】黃金　施德初曰く、世人巾裹以二黃金一爲二大環一、雙鑿二其帶一、謂二之得勝環一、疑用二此事一、亦恐自有二故實一、不二敢臆決一、姑俟二知者一と、王梅溪曰く、季常有二文事一而又有二武備一、黃金得勝、乃戰陣得捷之人所レ戴也と、施王二家の說共に其の意あるものと思ふ、【三】白苧　白苧にて製する巾幗、【四】可汗　唐代夷狄の君主の稱、妻を可敦と稱す、

【題義】陳季常が一揞巾乃ち頭を深く藏する所の巾を惠むを謝する詩である、

【詩意】陳夫子は胷中萬斛寬かであるに、それに反して此の巾は何事ぞや小團團である、淵明の漉酒巾も一升は漉すべし此れは半升より容れない、子夏の冠は二寸の屬りを受けたるがそれと同樣である、丈夫たる者は宜しく黃金雙得勝をして、白苧巾の貧弱に甘んじ一生を酸に終るものではない、弓を臂にし、箭を腰にして何れの時にか去り、其の雄姿にて直ちに陰山に上り可汗王を捕虜とするぞや、

【餘論】題目に戲賦の二字を添へて見るべきである、紀曰く、小品却不二小樣一と、

## 贈黃山人　黃山人に贈る

面頰照人元自赤。　面頰人を照らし元自から赤く、
（一）眉毛覆眼見來烏。　眉毛眼を覆ひ見來りて烏し、
（二）倦游不擬談（三）玄牝。　倦游玄牝を談ずるを擬せず、
（四）示病何妨出白鬚。　示病何ぞ妨げん白鬚出づるを、
（五）絕學已生（六）眞定慧。　絕學已に生ず眞の定慧、
說禪長笑（七）老浮屠。　說禪長く笑ふ老浮屠、
東坡若肯三年住。　東坡若し肯て三年住せば、
親與先生看（八）藥爐。　親しく先生と藥爐を看ん、

【字解】【一】眉毛　「唐書毛若虛傳」に眉毛覆二于眼一と、【二】倦游　倦游に厭きたるを言ふ、【三】玄牝　「老子」に、谷神不レ死、是謂二玄牝一、玄牝之門、是謂二天地根一と、幽玄にして萬物を生むの母、【四】示病　「淨名經」に、維摩示病と【五】絕學　「老子」に、絕學無レ憂と、【六】定慧　定は禪定、慧は智慧、【七】老浮屠　浮屠は僧の義に代用する、【八】藥爐　韓偓の詩、許到名山看二藥爐一と、

【題義】黃山人は道にあらず僧にあらず、半道半僧の人ならんか、詩中に於て其意明明である、

【詩意】山人の面色や頰色は赤くして人を照らす如くである、而して眉毛は長く垂れて眼を覆ひ見れば唯烏し、遊びに倦んで最早や道士の敎を宣布する氣は無い、假りに病を示して何ぞ妨げん白鬚を生するを、理窟を言ふ學を絕てば眞の定慧は玆に生ずるのである、徒らに野狐禪を說く所の老僧は山人の長笑する所、此の東坡も若し肯て三年も此の世に住すれば、親しく先生と丹藥を練るの爐を看んと願ふ、

【餘論】紀曰く、俚甚と、已生、先生、東坡の詩法か、東坡の病か、

## 贈人

人に贈る

(一)別後休論信息疏。　別後論ずるを休めよ信息の疏なるを、
仙凡自古亦殊(二)途。　仙凡古より亦途を殊にす、
(三)蓬山路遠人難到。　蓬山路遠くして人到り難く、
霜柏威高道轉孤。　霜柏威高うして道轉た孤なり、
舊賞未應忘楚國。　舊賞未だ應に楚國を忘るべからず、
新詩聞已滿皇都。　新詩聞く已に皇都に滿つと、
誰憐(四)澤畔行吟者。　誰か憐む澤畔行吟の者、
目斷長安貌欲枯。　目斷す長安貌枯れんと欲す、

【字解】〔一〕別後　李陵荅蘇武書、與子別後、益復無聊と、〔二〕殊途　「易」に、殊途而同歸と、〔三〕蓬山　李義山の詩、劉郎已恨蓬山遠、又隔蓬山一萬重と、〔四〕澤畔行吟者　屈原を言ふ、

【詩意】一別以來消息疎なりと論じてはいかぬ、仙と凡とは古來より途を殊にして居る、蓬山は路遠くして人容易に到り難い、其の上に霜柏が風威高くして道は轉た孤である、舊日賞遊せる楚國の事は猶ほ忘れぬであらう、楚國を歌ふ新詩は皇都の人皆傳唱して居る、誰か憐むぞや澤畔に行吟する者、長安を目斷し盡くして形貌は枯槁せんとするを、

## 問大冶長老乞桃花茶栽東坡

大冶長老に問ひ、桃花茶を東坡に栽せんと乞ふ、

(一)周詩記茶苦。茗飲出近世。　周詩茶の苦きを記す、茗飲は近世に出づ、
初緣厭粱肉。假此雪(二)昏滯。　初め粱肉に厭くに緣つて、此を假りて昏滯を雪ぐ、
嗟我五畝園。桑麥苦蒙翳。　嗟我が五畝の園、桑麥蒙翳に苦しむ、
不令(三)寸地閒。更乞茶子蓺。　寸地も閒ならしめず、更に茶子を乞うて蓺う、
饑寒未知免。已作太飽計。　饑寒未だ免かるるを知らず、已に太飽の計を作す、

庶將通有無(五)。農(六)末不相戾。　庶うて將に有無を通せんとす、農末相戾らず、
春來凍地裂。紫筍(七)森已銳。　春來凍地裂け、紫筍森として已に銳、
牛羊煩呵叱。筐筥(八)未敢睨。　牛羊煩はしく呵叱、筐筥未だ敢て睨す、
江南老道人。齒髮日夜逝(九)。　江南の老道人、齒髮日夜に逝く、
他年雪堂(一〇)品。空記桃花裔。　他年雪堂の品、空しく記す桃花裔、

【字解】【一】周詩　「毛詩」に、誰謂荼苦、其甘如薺と、【二】茗飲　楊衒之の「洛陽伽藍記」に、齊王肅、初好茗飲、及入魏、高祖問曰、茗飲何如酪漿、肅曰、茗不中與酪作奴、高祖大笑、因號茗飲爲酪奴と、【三】昏滯　昏昧滯濁である、「茶錄」に、昏滯滌蕩、一啜兩散と、【四】寸地　杜子美の詩、寸地尺天俱入貢と、【五】通有無　「漢書食貨志」に、分財布利、通有無者也と、【六】農末　農は本を言ふ、末は工商を言ふ、【七】紫筍　顧渚の地、義興の地に產する茶を紫筍と云ふ、「茶經」に、紫者上、綠者次、筍者上、芽者次と、【八】筐筥　茶具である、筐は手持するもの、筥は背に負うて茶を採るもの、【九】日夜逝　日夜に衰白なるを言ふ、【一〇】雪堂　公の堂名である、

【題義】大冶長老に桃花茶の種子を乞うて之を東坡に栽うる詩である、

【詩意】周詩に荼の苦きを記してある、茗は近世即ち晉以來である、人は初め粱肉に厭きて、此の飮料を假りて胸中の昏滯を雪ぐ、嗟于我が所有する五畝の園は、桑や麥が蒙翳なるに苦む、而かも寸地も無駄にしない、更に茶子を乞うて栽ゑて、飢寒は未だ免かるると信じない、是に於てか充分の佃計を作すのである、庶ふ所は有無を善通せんと、農の本も末の工商と通じて相戾らざることと信ずる、春來凍地が裂けて、紫筍が已に森として新銳を現はして居る、牛羊の力を煩はすが爲め之を呵叱して手入れをする、筐筥には未だ其の採取するを睨ないのである、江南の老道人即ち大冶長老は、齒髮日夜に衰殘に逝くのであるが、他年雪堂の茗品は、空しく之が桃花茶の後裔であると記して傳ふる、

【餘論】紀曰く、結四句、不甚醒快と、

## 寄子由　子由に寄す

厭暑多應一向慵。　暑を厭うて多く應に一向慵かるべし、
銀鉤(一)秀句益疎通。　銀鉤秀句益す疎通す、
也知堆案(二)文書滿。　也知る堆案文書滿つ、
未暇開軒硯墨中。　未だ暇あらず開軒硯墨の中、
湖面新荷空照水。　湖面の新荷空しく水を照らし、
城頭高柳漫搖(三)風。　城頭の高柳漫に風に搖く、
吏曹(四)不是尊賢事。　吏曹是れ賢を尊ぶ事にあらず、
誰把前言語化工。　誰か前言を把つて語工と化す、

【字解】【一】銀鉤　「法書苑」に、索靖、矜其書、名曰銀鉤蠆尾と、其の草書の狀を言ふ、銀鉤は元來銀のスダレカケである、【二】堆案　「嵆康與山濤書」、素不便書、又不喜作書、而人間多事、堆案盈几、不相酬答、則犯教傷義と、劉禹錫の詩、莫言堆案無餘地と、【三】搖風　「隋書」に、楊素見御調言曰、柳條通體弱、搖拂不須風と、【四】吏曹　「蜀志」に、杜瓊謂譙周曰、古者名官職不言曹、始自漢已

來、名官書言曹、吏言賜曹、卒言侍曹、此喩天意也と、

【詩意】書を厭ふの人は多くして一向に萬事慵く思ふ、君はさうでない簡を認むるにも美事の筆跡を以て益す疎通する、我は知る君の案上に文書が堆滿するであらう、我は未だ暇がない軒を開きて硯墨中に親むに、湖面に浮ぶ新荷は空しく水を照らして居る、併し城頭の高柳は條枝が漫に風に搖いて居る、吏曹の名は畢竟賢人を尊ぶの事ではない、誰か吏曹の語を賢を尊ぶ語に化せしむる者ぞ、

## 次韻孔毅父久旱已而甚雨三首

孔毅父の久旱已にして甚雨に次韻す　三首

（一）饑人忽夢飯甑溢（二）。　饑人忽ち夢む飯甑溢るるを、
夢中一飽（三）百憂失。　夢中一飽百憂失す、
只知夢飽本來空。　只知る夢飽は本來空なるを、
未悟眞饑定何物。　未だ悟らず眞饑定んで何物ぞ、
我生無田食破硯（四）。　我が生田無く破硯を食とす、
爾來硯枯磨不出。　爾來硯枯れて磨すれども出でず、
（五）去年太歲空在酉。　去年太歲空しく酉に在り、
旁舍壺漿（六）不容乞。　旁舍壺漿乞ひを容れず、
今年旱勢復如此。　今年旱勢復た此の如く、
歲晚何以黔（七）吾突。　歲晚何を以て吾突を黔くせん、
青天蕩蕩（八）呼不聞（九）。　青天蕩蕩呼べども聞こえず、
況欲稽（一〇）首號泥佛（一一）。　況んや稽首して泥佛に號ばんと欲す、
甕中蜥蜴（一二）尤可笑。　甕中蜥蜴尤も笑ふ可し、
（一三）跂跂脈脈何等秩（一四）。　跂跂脈脈何等の秩ぞ、
陰陽有時雨有數。　陰陽時あり雨に數あり、
民是天民天自卹。　民は是れ天民天自から卹む、
我雖窮苦不如人。　我窮苦すと雖も人に如かず、
要亦自是民之一。　要するに亦自から是れ民の一、
形容雖是喪家狗（一五）。　形容は是れ喪家の狗と雖も、
未肯聑（一六）耳爭投骨。　未だ肯て耳を聑れて爭ひ骨に投せず、
（一七）倒冠落幘謝朋友。　倒冠落幘朋友に謝す、

【字解】（一）饑人　白樂天の詩、渴人多夢飲、飢人多夢喰と、
（二）甑　コシキ、食物を蒸す具、
（三）一飽　公の門人黃山谷は、飢人常夢飽、病人常夢醫と、
（四）食破硯　筆耘舌耕に衣食するを言ふ、
（五）去年　元豐四年辛酉である、
（六）壺漿　林宜雅曰く、太歲在酉、乞漿得酒、太歲在巳、販妻鬻子、則知災祥有自然之理と、
（七）黔吾突　「淮南子」に、孔子無黔突、墨子無煖席、魯連子儢、五突分爨者衆矣と、
（八）蕩蕩　「前漢禮樂志」に、天門開詄蕩蕩と、
（九）呼不聞　「莊子山木篇」に、一呼而不聞、再呼而不聞、於是乎三呼耶と、
（一〇）稽首　印度の禮法、首を地に俯すこと、
（一一）泥佛　「傳燈錄」に、趙州從諗禪師云、金佛不度爐、木佛不度火、泥佛不度水、眞佛內裏坐と、
（一二）蜥蜴　トカゲ、嵩山の蜥蜴が雨を降らしたること前に辨あり、
（一三）跂跂脈脈　東方朔曰く、有足跂跂脈脈、善緣壁、是非守宮即

獨與蚊雷(一八)共圭蓽(一九)。
故人嗔我不開門。
君視我門誰肯屈。
可憐明月如潑水(二〇)。
夜半清光翻我室。
風從(二一)南來非雨候。
且爲疲人洗蒸鬱。
褰裳一和快哉(二二)謠。
未暇饑寒念明日。
去年東坡拾瓦礫。
自種黃桑三百尺。
今年刈草蓋雪堂。
日炙(二三)風吹面如墨。
平生懶惰今始悔。

獨り蚊雷と圭蓽を共にす、
故人嗔る我が門を開かざるを、
君我門を視よ誰か肯て屈するや、
憐む可し明月潑水の如し、
夜半清光我が室に翻へる、
風は南より來る雨候にあらず、
且らく疲人の爲めに蒸鬱を洗ふ、
裳を褰げて一和す快哉の謠、
未だ暇あらず饑寒の明日を念ふに、
去年東坡に瓦礫を拾ひ、
自から種う黃桑三百尺、
今年草を刈る蓋し雪堂、
日炙り風吹き面墨の如し、
平生の懶惰今始めて悔ゆ、

蜥蜴と、守宮はヤモリである、跂跂脈脈は守宮や蜥蜴のはひ行く貌、
【一四】秩　秩序、次第を言ふ、
【一五】喪家狗　「孔子家語」に鄭人見孔子曰、若喪家之狗、孔子欣然と、
【一六】聳耳　聳は「廣韻」に、垂貌とある、「淮南子」に、弭耳掉尾而逃と、
【一七】側冠　杜牧之の「晩晴賦」に、側冠落佩兮、與世闊疎と、
【一八】蚊雷　「漢中山靖王傳」に、衆喣漂山、聚蚊成雷と、
【一九】圭蓽　圭竇と蓽門、梁の昭明太子の文、甕門鳥宿、圭竇狐潜と、圭竇は犬のくゞる道、蓽は荊蓽、イバラ門、
【二〇】潑水　潑は光の盛んなる貌、潑剌、潑散と成語する、
【二一】從南來　「天官書」に、風從南方來大旱と、



老大勸農天所直(二四)。
沛然例賜三尺雨。
造物無心怳難測。
四方上下同一雲(二五)。
甘霔(二六)不爲龍所隔(二七)。
【自注】俗有分龍日。
蓬蒿下溼迎曉耒。
燈火新涼催夜織。
老夫作罷得甘寢(二八)。
臥聽牆東人響屐。
奔流未已坑谷平。
折葦枯荷恣漂溺。
腐儒(二九)麤糲支百年。
力耕不受衆目憐(三〇)。

老大勸農天の直とする所、
沛然例賜ふ三尺の雨、
造物無心怳として測り難し、
四方上下同一雲、
甘霔は龍の隔つる所とならず、
蓬蒿下溼曉を迎へて耒す、
燈火新涼夜織を催す、
老夫罷れを作して甘寢を得たり、
臥して聽く牆東人屐を響かす、
奔流未だ已まず坑谷平か、
折葦枯荷恣に漂溺す、
腐儒麤糲百年を支ふ、
力耕して受けず衆目の憐みを、

【二二】快哉　宋玉の賦、快哉此風と、
【二三】日炙　白樂天の詩、風吹日炙不成凝と、
【二四】所直　漢書「高五王傳」に、蒼天與直と、
【二五】同一雲　杜子美の詩、四海八荒同一雲と、
【二六】甘霔　霖雨を言ふ、
【二七】龍所隔　公の自注、俗有分龍日と、「埤雅」に、今俗五月、謂之分龍、雨日隔轍、言夏雨暴至、龍各有分域、雨暘往往隔一轍而異也と、
【二八】甘寢　「莊子徐無鬼篇」に、孫叔敖、甘寢秉羽と、甘寢は安臥すること、
【二九】腐儒　杜子美の詩、麤糲腐儒餐と、
【三〇】衆目憐　杜子美の詩、常受衆目憐と、

破陂漏水不耐旱。
人力未至求天全。
會當作塘徑千步。
橫斷西北遮山泉。
四鄰相率助擧杵。
人人知我囊無錢。
明年共看決渠雨。（三一）
饑飽在我寧關天。
誰能伴我田間飮。
醉倒惟有支頭甎。（三二）

破陂は漏水旱に耐へず、
人力未だ至らず天全を求む、
會ず當に塘を作る徑千步なるべし、
西北を橫斷して山泉を遮る、
四鄰相率ゐて擧杵を助く、
人人知る我が囊に錢無きを、
明年共に看ん決渠の雨を、
饑飽我に在り寧ぞ天に關せん、
誰か能く我に伴うて田間に飮まん、
醉倒惟有り支頭甎、

【題意】孔毅父が久しく旱にして忽ち甚雨なるを歌ふ詩に次韻して作られたるもの、

【詩意】饑人は食より外思ふ物はない、是の故に夢にも飯甎が溢れたのを見る、夢中にも一飽して百憂を忘失する、只知る夢中に飽食したるは其の實がない本來空である、誰もまだ悟らない眞の飢は定んで何物であると云ふことを、我が身生を考ふるに產田は無い唯破硯の力を賴むのみ、爾來は硯水が枯死して磨けども水は出ない、去年は太歳が空しく酉に在りて、鼓篥を旁舎に乞ふも乞を容れて與れない、今年の旱勢も又復去年と似て居る、今日から思ふ歳晩には何を以てか吾が厨の竈を黔くすることが出來るぞ、青天に向つて呼べども天は蕩蕩として聞かざる如くである、況んや稽首して泥佛に號び問はんと欲するも是は答へは無い、蜥蜴は昔雨を降らしたるが今や甕中に跂跂するのみ是も笑ふべし、跂跂脈脈たる果して何等の秩かある、幸に陰陽は時節あり雨にも數がある、斯の民は是れ天の民天も自から鄙みを垂る、我は窮苦であるが他人の如く忍耐せぬでもない、要するに自から天民の一員である、形容は纍纍然として喪家の狗の如く見ゆれども、未だ肯て耳を垂れて爭うて肉や骨に向投はしない、けれども倒冠脫幘は窮人の常態是は朋友に謝する所である、獨り蚊衾の常に集まる貧家の中に居る、幸に故人は嗔りてはいかぬ我が開門せざるを、君は我門を覩玉へ開くも開かんもない曲りて自由がきかぬ、唯憐むは明月の貧家を嫌はず水を潑する如くに光が入る、夜半なぞは淸光が室に翻る、時に風は南方より來るも雨の候ではない、且らく疲人の爲めに蒸鬱を洗ふの惠みである、裳を褰げて君が快哉の謠歌を和せんと思ふ、未だ飢寒が明日に逼るを念はぬ、去年は東坡を開墾して瓦礫を拾ひ、手自から種うる黃桑は三百尺と成る、今年は草を刈る雪堂の庭に、日光に炙られ風威に吹かれて面は墨の如くになる、是に至りて平生懶惰手入れをせざりしことを今始めて悔ゆ、老大にして勸農は天も赤心の直なるを照鑑する、其の證據には沛然として例賜ふ三尺の雨を、造物は由來無心なるや有心なるや怳として測り難いが、四方上下同一雲である、甘霔は所謂何百里も皆雨であるから、龍が甲地乙

---

【三一】決渠雨　「漢書溝洫志」に、白公穿渠、民歌之曰、鄭國在前、白渠起後、擧臿爲雲、決渠爲雨と、

【三二】支頭甎　韓退之の詩、暫辭一手支頭臥と、

地と隔てる所は無い、蓬蒿下濕の地は曉色を迎へるや耒を將て來る、而して新秋の燈火親むべき候には家に在つて夜織を催す、老夫此の如くにして罷勞を作すときは甘寢を求むる、臥して聽く牆東に當りて人の屐聲を響かすを、其の人は言ふ奔流が滾滾して未だ已まず坑谷は一面水が平等である、折れた葦や枯れた荷が漂溺を恣にして居る、腐儒は齏糲に甘んずれば百年の一生を支へる、自分で力耕して衆目の憐みを受けない、破陂は必ず水漏る漏れば旱には耐へない、人力の及ばざる所は天全を求むるのみ、先づ人力にて塘を作りて徑千歩を開くべきである、而して西北を橫斷して山泉を遮り止む、此の計畫あるや四鄰が互に相率ゐて協力する、人人は知る東坡は元來貧であることを、是に於て明年は必ず決渠の雨を看るであらう、一饑一飽は我が勤と惰とに在つて天に關するものではない、斯く觀じ來れば實に愉快である、田間に於て一杯飲むが誰か酌の對手となる、醉倒すれば唯頭を支へる瓴瓦の枕あるのみ、

〔二〕

天公號(一)令不再出。　天公の號令再出せず、
十日愁(二)霖併爲一。　十日愁霖併せて一と爲る、
(三)君家有田水冒田。　君が家田あり水田を冒す、
(四)我家無田憂入室。　我家田無し憂室に入る、
不如西州楊(五)道士。　如かず西州の楊道士、
萬里隨身惟兩膝。　萬里身に隨ふ惟兩膝、
沿流不(六)惡泝亦佳。　流に沿ふも惡しからず泝るも亦佳し、
一葉扁舟任飄突。　一葉の扁舟飄突に任す、
(七)山芎麥麴都不用。　山芎麥麴都て用ひず、
泥行露(八)宿終無疾。　泥行露宿終に疾無し、
(九)夜來饑腸如轉雷。　夜來飢腸轉雷の如し、
旅愁非酒不(一〇)可開。　旅愁酒にあらざれば開く可からず、
楊生自言識音律。　楊生自から言ふ音律を識ると、
(一一)洞簫入手淸且哀。　洞簫手に入りて淸且つ哀、
不須更待秋(一二)井塌。　須ひず更に秋井塌を待ち、
見人白骨方銜杯。　人の白骨を見て方に杯を銜むを、

【字解】〔一〕號令　「揚子法言」に、鼓舞萬物者、其雷風乎、鼓舞萬民者、其號令乎、雷不一、風不再と、〔二〕愁霖　「梁元帝纂要」に、久雨曰苦雨、亦曰愁霖と、〔三〕君家　孔毅父の家、〔四〕我家　公自身の家、〔五〕楊道士　公自ら言ふ、一則有田、一則有室、若楊道士、無田則無室、空手一身無所憂也と、〔六〕不惡　白樂天の詩、開行亦不惡と、〔七〕山芎　前に辨ぜり、〔八〕露宿　「後漢趙壹傳」に、柴車草屛、露宿其傍と、風餐露宿は韻語に多く見る所、〔九〕夜來　昨夜來である、〔一〇〕不可開　庾信の「愁賦」に、細酌榴花一兩杯、蕩後愁門終不開と、〔一一〕洞簫　無底の笛、〔一二〕秋井塌　杜子美の詩、總憶雨時秋井塌、古人白骨生蒼苔、如今不飮令心哀と、塌はひくし、地が低下なるを云ふ、

【詩意】天公の號令は一令して再出の要はない、十日愁霖併せて一と爲つてある、君が家には田あり田あれば水害がある、我が家は田は有せざるが家屋を有す是も亦水害を蒙る、兩人共に如かず西州の

楊道士には、道士は田も室も無く萬里隨身のものは兩膝のみである、而して流れに沿うて下るも流に逆うて上るも意の儘である、一葉の扁舟に身を飄突に任せ、山芎麥麴の心配は無い、泥行露宿も終に疾を起さない、僕は夜來より飢腸が轟轟と鳴る、旅愁は酒にあらざれば開くことが出來ない、楊道士は自から言ふ余は音律を識ると、そこで洞簫を吹くことを乞へば一曲良に淸哀である、須ひず更に秋井塌の寂寞たる處の成るを待つて、人の白骨を見て其の前に於て口に杯を銜むは、

【餘論】 此の篇題に三首とある、起句より念明日に至る三十句を一首と爲し、去年東坡より支頭輒に至る二十八句を一首と爲せば都合三首と爲る、然るに起句の骶滏卽ち入聲四質の韻と漂溺の十二錫の韻とを以て同一通韻として用ふるものとすれば二首に區別せすして一首と見ることも出來る、漂溺以下は平聲一先にて十二句であれば要するに二度換韻の詩と見るを得、天公號令の詩も兩度換韻して成るもの、紀は評して曰く、三首皆排宕兀傲、奇氣縱橫、妙俱從自己現境生情、不作應酬泛語、凡和詩最忌作應酬、人與己兩無涉と、紀は又前首の破陂漏水以下の句を評して忽地跳出題外、却仍是題中、筆力恣逸之至、順手寫出景象、便是凡筆と、旱と雨とを縱橫に說く所、始めて大手筆を見る、玉局を以て宗祖と奉ずる者は、此等の雄篇を硏究すべきである、

## 魚蠻子

魚蠻子

江淮水爲田(一)舟楫爲室居。
江淮水を田と爲し、舟楫を室居と爲し、

魚蝦以爲糧。不耕自有餘。
魚蝦以て糧と爲し、耕さざるも自から餘りあり、

異哉魚蠻子。本非左衽(二)徒。
異なる哉魚蠻子、本左衽の徒にあらず、

連排(三)入江住。竹瓦三尺廬。
連排江に入つて住す、竹瓦三尺の廬、

於焉(四)長子孫。戚施(五)且侏儒(六)。
焉に於て子孫を長ず、戚施且つ侏儒、

擘水(七)取魴鯉(八)。易如拾諸塗(九)。
水を擘きて魴鯉を取る、易きこと諸を塗に拾ふが如し、

破釜不著鹽。雪鱗芼(一〇)青蔬。
破釜鹽を著けず、雪鱗靑蔬を芼ふ、

一飽便甘寢。何異獺(一一)與狙。
一飽すれば便ち甘寢、何ぞ異ならん獺と狙とに、

人間行路難(一二)。踏地出賦租(一三)。
人間行路難、踏地賦租を出だす、

不如魚蠻子。駕浪浮空虛。
如かず魚蠻子、浪に駕して空虛に浮ぶ、

空虛未可知。會當算舟車(一四)。
空虛未だ知るべからず、會ず當に舟車を算すべし、

蠻子叩頭泣。勿語桑大夫(一五)。
蠻子叩頭して泣く、語る勿かれ桑大夫、

【字解】 〔一〕爲田　下に不耕の語があるより此の二字活用する、「漢書五行志」に、吳地以船爲家、以魚爲食と、〔二〕左衽　衣をヒダリマヘに著る、「論語憲問」に、微管仲、吾其被髮左衽矣と、蠻人の風俗である、〔三〕連排　王梅谿曰く、江南多以竹木爲排、浮水中、排上以茅竹瓦爲屋と、黃岡の地、大竹多く、之を以て陶瓦に代用する、〔四〕於焉　於是と同じ、公の此の句以外に他に多く用ひしを見ない、〔五〕戚施　戚は蹙、施は斜、身を伸ばして仰視することが出來ない、俗にセムシである、「國語」に、戚施不可

レ使レ仰と、【六】侏儒 俗に一すぼうし、「國語」に、侏儒不レ可レ使レ援と、「孔子世家」に、優倡侏儒戯而前と、【七】擘水 擘は擘開、水を擘き開くのである、【八】魴鯉 魴はヲシキウヲ、鯉はコヒ、【九】如拾 如拾に作る本がある、【一〇】芼青蔬 肉を野菜と共に煮て食ふを芼と言ふ、「禮記」に、芼レ之以二蘋藻一とある、【一一】猵與狙 猵はカハウソ、狙はサル、【一二】行路難 杜子美の詩、儲有二人間行路難一と、生活に辛苦の多きを言ふ、【一三】賦租 「左傳宣公十五年」に、初稅レ畝と、【一四】舟車 「漢書食貨志」に、武帝元光六年冬、初算二商車一と、李奇注に、始稅二商賈車船一、令レ出レ算と、【一五】桑大夫 「前漢書桑宏羊、洛陽賈人子、能以レ心計、年十二、爲二武帝侍中一、言レ利析二秋毫一、請レ令二吏比一者、三老北邊騎士軺車一算、商旅人軺車二算、船五丈以上一算と、

【題義】 水上に生活する者を魚蠻子の名を設けて歌うたものである、張芸叟が漁父の詩を粉本としたるは明白であるが、詩意は漁父と限つたのではない、

【詩意】 江淮の間は水鄉にて水を以て田地と爲す、舟楫を以て人人が皆室居と定む、魚蝦を以て米の代食とする、耕さざるも食糧には餘裕がある、其の中で異とするは魚蠻子である、此の人は本野蠻の左衽徒ではない、竹瓦を連排して江心を住家と爲し、其の竹瓦に於て三尺の廬を作る、焉に於て子子孫孫に傳ふ、而して戚施の人と侏儒の人と、水を擘開して魴と鯉とを手取りにして來る、其の容易なること諸を塗に於て拾ふが如くである、破釜は鹽を著けることが出來ない、雪鱗は青蔬を芼して食ふ、一飽すれば便ち安臥するのみ、何ぞ異ならんや獺や狙の類と、人間は畢竟行路難である、地上に生活するものは皆賦租を取られる、此等の人は魚蠻子の、浪の上に生活する者には及ばない、去り乍ら浪の上も賦租を免かることが出來なくなる、舟車に曾て稅を施したことがある、斯く語れば蠻子は叩頭して泣く、此の事を桑大夫に語りてはいかぬと、

【餘論】 紀曰く、香山一派、讀レ之宛然秦中吟也と、公は妾なぞを畜へて樂天と類似のものがある、詩も亦樂天より得來るものが多いのは、當然と思ふ、

## 夜坐與レ邁聯句

清風來無邊。明月翳復吐。自
松聲滿二虛空一。竹影侵二半戶一。邁
暗枝有二驚鵲一。壞壁(一)鳴二饑鼠一。自
露葉耿二高梧一。風螢落二空廡一。邁
微涼感二團扇一。古意歌二白紵一。自
樂哉今夕游。獲二此陪杖屨一。邁
傳家詩律(二)細。已自過二宗武(三)一。自
短詩膝上(四)成。聊以感二懷祖(五)一。自

夜坐邁と聯句

清風來ること無邊、明月翳く復た吐く、
松聲虛空に滿つ、竹影半戶を侵す、
暗枝驚鵲あり、壞壁饑鼠鳴く、
露葉高梧に耿たり、風螢空廡に落つ、
微涼團扇を感じ、古意白紵を歌ふ、
樂しい哉今夕の游び、此の陪杖屨を獲たり、
傳家詩律細か、已に自から宗武に過ぐ、
短詩膝上に成る、聊か以て懷祖に感ず、

【字解】【一】壞壁 劉歆傳に出づる語なれども、引用する例ではない、【二】詩律 杜子美の詩、晩節漸於二詩律一細と、【三】宗武 杜子美の子、【四】膝上 「晉王述傳」に、愛二子坦之一、雖二長大一、猶抱二置膝上一と、【五】懷祖 祖を懷うて墓前を遠ざからざること、韓

子華の事、

【題義】夜坐して甥の邁と聯句せるもの、

【詩意】清風は吹き來ること無邊である、明月は或は雲に翳れ或は雲を出る、而して松聲は謖謖として虛空に滿つ、竹影は時に半戶を侵す、暗處の樹枝には驚鵲が一聲鳴き、家屋の壞壁には飢鼠が鳴く、露を帶びて耿たる光あるは高梧である、風に飛ばされ來る螢火は空廡に落ちる、微涼なる夜は團扇の捨てらるることを感ずる、又古意を發して白紵を歌うて見る、樂みに思ふ今夕の遊びを、我が大人叔父の杖屨に陪することを得たるは、家に傳ふる詩律は良に精細である、爾の才は宗武に過ぐ、短詩は膝上にて成る、聊か以て當時懷祖の事に感ずる、

【餘論】紀曰く、佳處便有三謝意と、大人が小兒と相撲を取るのであるから、公としては骨の折れたことと思ふ、しかも句としては邁の方が佳い、

## 弔李臺卿

李臺卿を弔す

李臺卿。字明仲。廬州人。貌陋甚。性介不羣。而博學強記。罕見其比。好左氏。有史學考正同異。多所發明。知天文律歷。千歲之日。可坐數也。軾謫居黃州。臺卿爲麻城主簿。始識之。既罷居於廬。而曹光州演甫以書報其亡。臺卿光州之妻黨也。

【訓讀】李臺卿、字は明仲、廬州の人、貌陋甚だし、性介不羣、而かも博學強記、其の比を見ること罕なり、左氏を好み、史學考正同異あり、發明する所多し、天文律歷を知り、千歲の日、坐ながら數ふべし、軾黃州に謫居す、臺卿麻城の主簿たり、始めて之を識る、既に罷めて廬に居る、而して曹光州演甫、書を以て其の亡を報す、臺卿は光州の妻黨なり、

我初未識君。人以君爲笑。　我初め未だ君を識らず、人君を以て笑を爲す、
垂頭老鸛雀。煙雨霾七竅。　頭を垂るる老鸛雀、煙雨七竅を霾らす、
敝衣來過我。危坐若持釣。　敝衣來りて我に過ぎり、危坐釣を持するが若し、
褚裒半面新。譏蔑一語妙。　褚裒半面新たなり、譏蔑一語妙、
徐徐涉其瀾。極望不可徼。　徐徐として其の瀾を涉り、極望徼すべからず、
却觀元嫵媚。士固難輕料。　却つて元嫵媚を觀る、士は固より輕料し難し、
看書眼如月。罅隙靡不照。　看書の眼月の如く、罅隙照らさざるは靡し、
我老多遺忘。得君如再少。　我老いて多く遺忘す、君を得て再少の如し、

從横通雜藝、甚(一三)博且知要、　從横雜藝に通ず、甚博且つ要を知る、
所恨言(一四)無文、至老幽不(一五)耀、　恨む所言文無く、老に至るまで幽にして耀かず、
其生世莫識、已死誰復弔、　其の生世識ること莫し、已に死して誰か復た弔せん、
作詩遺故人、庶解俗(一六)子譏、　詩を作りて故人に遺る、庶はくは俗子の譏を解かん、

【字解】【一】老鸛雀「唐裴寛傳」に、韋詵有女、擇所宜歸、見裴寛引爲按察判官、許妻以女、歸語妻曰、常求佳壻、今得矣、明日幃其族使觀之、寛時衣碧瘠而長、既入、族人皆笑、呼爲碧鸛雀と、鸛雀はコウヅル、【二】霾 霾晦、風、土を降らして暗きを言ふ、【三】七竅「莊子應帝王篇」に、人皆有七竅、以視聽食息と、「史記殷紀」に、聖人心有七竅、剖比干觀其心と、人は顔面にも七つの穴あり、人の胸にもある七つの穴、【四】持釣「莊子秋水篇」に、釣於濮水、楚王使大夫二人往見焉、莊子持竿不顧と、【五】褚裒 晉人、客座に於て孟嘉を認めし人、【六】半面「後漢書」に、應奉、見造車匠門間半面、他日路逢而識之と、【七】鬷蔑 春秋鄭の人、容貌の醜なる人、「左傳昭公二十八年」に、叔向適鄭、鬷蔑惡、欲觀叔向、從使之收器者、而往立於堂下、一言而善、叔向將飲酒、聞之曰、必鬷明也、下執其手以上と、【八】不可徼「史記司馬相如傳」に、南至牂牁爲徼と、徼の義は小道、又は國界、邊塞である、【九】嫵媚「舊唐書」に、太宗大笑曰、人言魏徵舉動疏慢、我但覺其嫵媚耳と、なまめきこぶるのである、【一〇】士固「史記范睢傳」に、侯嬴曰、人固未易知、知人亦未易と、【一一】看書「世說」に、支道林曰、北人看書、如顯處視月、南人學問、如牖中窺日と、【一二】遺忘「南史」に、劉士深、博綜羣書、沈約、任昉以下、每有遺忘、皆訪問焉と、【一三】甚博「漢司馬遷傳」に、儒者博而寡要と、「唐蕭德言傳」に、太宗詔寂次經史、百代帝王、所以興衰者上之、帝愛其書博而要と、【一四】言無文「左傳襄公二十五年」に、孔子曰、言之無文、行之不遠と、【一五】不耀「老子」に、聖人直而不肆、光而不耀と、【一六】俗士譏 譏は責譏、せむる、とがむる、

【題義】李臺卿は博學强記の人にて、其の著述も一家の見識を持つて居りしが、容貌甚だ陋なるが爲めに高官にも上らずして逝いたのである、之を弔して此の詩を作る、

【詩意】我は君と舊知でなかつた、が他人は君の事を言うて笑うたのである、例せば頭を垂れて居る老鸛雀である、或は煙雨が七竅を霾らする容貌であるとか、一朝敝れた衣服を著けて我を訪問せられ、座に危坐して釣を持するが如く何の愛相も無い、併し乍ら我は君の偉人であること、昔の褚裒や鬷蔑の如き人であることを、半面見たのみで記憶して居る、一語を聞いて其の妙言であることも知つて居る、譬へば徐徐と其の瀾を渉るに、望極まるも界すべからざる廣さと同様である、非常に頑固なるやに思ふ者は誤りで、却つて嫵媚の柔らかき所がある、豪傑の士は輕輕に料り知ることが出來ない、而かも看書の眼は月の如く明らかで、少しの罅隙でも照らさざるはない、我は老耄して遺忘することが多い、君を得て再び少年の記性となる、君は從横に雜藝に通達して、而かも博く而かも要を知る、唯恨む所は世に處して言行に粉飾なく、折角の博學も幽にして外面に耀きを發せざるを、其の生前も世人の多くは識らず、其の死後も亦弔する人が無いやうである、我は其の弔詩を作りて之を故人に遺る、俗子の責譏せる誤りを解かんと庶ふのである、

【餘論】紀曰く、寫照如生と、又、其生世莫識の十字を評して沈著と、晉の道安は一代の高僧であるが、其の師が容貌の醜を嫌うたと傳にある、世外に形骸を土木視する者も是である、況んや煩惱紛塵海の人をや、

## 曹既見和復次韻

(一)造物本兒嬉、(二)風噫(三)雷電笑。
誰令妄驚怪、(四)失匕號萬竅。
人人走江湖、一一操網釣。
偶然連(五)六鰲、便謂此手妙。
空令(六)任公子、三歲蹲海徼。
長貧固不辭、(七)一死實未料。
難將蓍草算、除用(八)佛眼照。
何人嗣(九)家學、恨子兒尚少。
嗟我與曹君、衰老世不要。
空言今無救、奇志後必耀。
吟君五字詩、義重千金弔。
收藏愼勿出、免使羣兒誚。

曹既に和せらる、復た次韻す
造物本兒嬉、風噫し雷電笑ふ、
誰か妄りに驚怪せしむる、失匕して萬竅號ぶ、
人人江湖に走り、一一網釣を操る、
偶然六鰲を連ね、便ち謂ふ此の手妙なりと、
空しく任公子をして、三歲海徼に蹲まらしむ、
長貧固より辭せず、一死實に未だ料らざりき、
蓍草を將て算し難し、佛眼を用ひて照らすを除く、
何人か家學を嗣がん、恨む子が兒尚は少なるを、
嗟我と曹君と、衰老世に不要、
空言今救ふこと無し、奇志は後必ず耀かん、
君が五字の詩を吟ずれば、義は千金の弔より重し、
收藏して愼んで出す勿れ、羣兒をして誚らしむるを免る、

【字解】(一)造物　「舊唐書杜審言傳」に、「甚爲造物小兒相苦」と、(二)風噫　「莊子齊物篇」に、大塊噫氣、其名爲風と、(三)電笑　電光を笑と云ふ、(四)失匕　匕はサジ、匙、飲食中に驚いて匙を投げる、(五)六鰲　「列子湯問篇」に、龍伯之國、有大人、舉足不盈數步、而暨五山之所、一釣而連六鰲と、(六)任公子　「莊子外物篇」に、任公子爲大鉤巨緇、五十犗以爲餌、蹲乎會稽、投竿東海、旦旦而釣、期年不得魚と、(七)一死　「晉載記」に、卜崇曰、所欠唯一死耳と、杜子美の詩、百年不敢料と、(八)佛眼　晉の傅大士の頌に、佛眼如千日、照異體還同と、(九)家學　劉禹錫の詩、知傳家學與青緗と、

【通義】弔李臺卿の詩を曹光州に遣りしに、曹は和詩を作るに依つて、復た次韻したるものである、

【詩意】造物と云ふものは全く兒嬉に類するものである、風はオクビをしたり雷電は笑ふ、誰か妄りに此の驚怪を爲して、人をして匕を失して萬竅を號ばしむる者である、皆な造物の戲れである、人人が江湖に走りて、一人一人に網釣を操り、偶然にも六鰲の連るを見て、便ち謂ふ我が此の釣手は妙であると、又任公子の如きは、三年も海徼に蹲踞して一尾を獲ざらしむ、人間長貧は固より辭せざる所であるが、一死も亦實に未だ料らざる所である、蓍草を將ても算することは出來ない、唯佛眼を用て照すを除くのみ、何人か家學を嗣ぐや、恨むに臺卿が兒は尚は少年である、而して我と曹君とは、共に衰老して世に不要の人間である、何事を言うても空言にて世を救ふの策はない、が李の奇志は後來必ず耀くであらう、今曹君が五字の詩を吟ずれば、千金の弔賻より義は重い、此の詩は自珍して出して人に示してはいかぬ、盲目の羣兒は詩が判らずに誚るからだ、

【餘論】弔詩に和すること禮なるや否やを知らない、唐人の集には多く見ない、坡公を宗とする人は學んでも可、

弔徐德占

徐德占を弔す

余初不識德占。但聞其初爲呂惠卿所薦。以處士用。元豐五年三月。偶以事至蘄水。德占聞余在傳舍。惠然見訪。與之語。有過人者。是歲十月。聞其遇禍。作詩弔之。

【訓讀】余初め德占を識らず、但聞く其の初め呂惠卿の薦むる所と爲り、處士を以て用ひらる、元豐五年三月、偶ま事を以て蘄水に至る、德占余が傳舍に在るを聞いて、惠然訪はる、之と語る、人に過ぐる者あり、是の歲十月、其の遇禍を聞き、詩を作り之を弔す、

美人種松柏。欲使低映門。　美人松柏を種う、低れて門に映せしめんと欲す、

栽培雖易長。流惡病其根。　栽培長じ易しと雖も、流れ惡しければ其の根を病む、

哀哉歲寒姿。(一)骯髒誰與論。　哀しい哉歲寒の姿、骯髒誰と與に論せん、

竟爲(二)明所誤。不免刀斧痕。　竟に明の誤る所と爲り、刀斧の痕を免れず、

一遭兒女汚。始覺山林尊。　一たび兒女の汚に遭うて、始めて覺る山林の尊きを、

從來覓棟梁。未省傍籬藩。　從來棟梁を覓め、未だ省みず籬藩に傍ふを、

南山隔秦嶺。千樹龍蛇奔。　南山は秦嶺を隔つ、千樹龍蛇奔る、

大厦若畏傾。(三)萬牛何足言。　大厦若し傾くを畏れば、萬牛何ぞ言ふに足らん、

不然老巖壑。舍抱枝生孫。　然らずんば巖壑に老い、合抱枝孫を生ぜん、

死者不可悔。吾將遺後昆。　死者悔ゆべからず、吾將に後昆に遺らんとす、

【字解】〔一〕骯髒　「後漢趙壹傳」に、抗髒倚門邊と、たかぶり屈せざる貌、〔二〕明所誤　柳子厚、孤松の詩、不以險自防、遂爲明所誤と、〔三〕萬牛　杜子美の詩、大厦如傾要棟梁、萬牛回首邱山重と、

【題義】徐德占は黃山谷の外兄である、呂惠卿の知遇を蒙り國事に用ひらる、年四十にして殺害せらる、公が蘄水の旅舍に在るとき謁見して、公は初めて其の人物を知り、其の奇禍に遇ふを聞いて、詩を作り之を弔したのである、

【詩意】美人が松柏を種うるは何の爲めである、其の陰が低れて門に映ずるを見んが爲めである、栽培は方法を得れば成長し難くはない、が其の水の流れが惡きときは其の根に病氣を起す、哀しい哉歲寒の姿、他木と異なり骯髒たる處は誰と此の風骨を論せんとする、覓には、聰明が身を誤らすに足り、刀斧の痕を免れない、一たび兒女輩の汚れに遭うて、始めて山林に住するの尊なるを覺る、從來棟梁の材を覓むるに、美人の家の籬藩なぞには覓むること出來ない、看玉へ南山は秦嶺を隔てて聳ゆる、其の山頭の千樹は龍蛇奔るの概がある、大厦が若し傾くを畏るれば、萬牛があるとも何の用も作さない、然らずして巖壑に老ゆれば、十丈百丈合抱して子孫を長ずることが出來る、されど死者は悔ゆる

も及ばない、吾が此の言は後昆に遺るの婆言である、

【餘論】此の篇は佶屈の典故を用ひず、殆んど漢詩を讀むの槪がある、

武昌主簿吳亮君采。攜其友人沈君十二琴之說。與高齋先生。空同子之文。太平之頌。以示予。予不識沈君。而讀其書。如見其人。如聞十二琴之聲。予昔從高齋先生游。嘗見其寶一琴。無銘無識。不知其何代物也。請以告二子。使從先生求觀之。此十二琴者。待其琴而後和。元豐五年閏六月。

武昌の主簿吳亮君采、其の友人沈君の十二琴の說、高齋先生に與ふ、空同子の文、太平の頌を攜へて、以て予に示す、予沈君を識らず、而して其の書を讀み其の人を見るが如く、十二琴の聲を聞くが如し、予昔高齋先生に從つて游び、嘗て其の一琴を寶とするを見る、無銘無識、其の何代の物なるを知らざるなり、請うて以て二子に告げ、先生に從つて之を求觀せしむ、此の十二琴は、其の琴を待つて而して後和せん、元豐五年閏六月、

若言琴上有琴聲。　若し琴上に琴聲ありと言はば、

放在匣中何不鳴。　放ちて匣中に在り何ぞ鳴かざる、

若言聲在指頭上。　若し聲は指頭の上に在りと言はば、

何不於君指上聽。　何ぞ君が指上に於て聽かざる、

【餘論】紀曰く、此隨手寫四句、本不是詩、蒐輯者强收入集、千古詩集、有此體否と、馮惟訥の古詩紀を讀む、其の古逸と稱するもの、多く此の類の詩である、紀の如く詩にあらずと見る者は誤る、然れども圭臬とする所は、楞嚴經にあるのであるから偈頌を以て見るを正當と思ふ、余も多く論するを欲しない、

## 李委吹笛

李委笛を吹く

元豐五年十二月十九日。東坡生日。置酒赤壁磯下。踞高峰俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委。聞坡生日作新曲。曰鶴南飛以獻。呼之使前。則青巾紫裘。腰笛而已。既奏新曲。又快作數弄。嘹然有穿雲裂石之聲。

坐客皆引滿醉倒。委袖出嘉紙一幅曰。吾無求於公。得一絕句足矣。坡笑而從之。

【訓讀】元豐五年十二月十九日東坡の生日、酒を赤壁磯下に置き、高峰に踞し、鵲巢を俯し、酒酣にして笛聲江上に起る、客に郭古二生あり、頗く音を知る、坡に謂つて曰く、笛聲新意あり、俗工にあらざるなり、人をして之を問はしむれば、則ち進士李委、坡の生日を聞いて新曲を作り、鶴南飛と曰ひ以て獻ずと、之を呼んで前ましむ、則ち青巾紫裘、笛を腰にするのみ、既に新曲を奏し、又快よく數弄を作す、嘹然穿雲裂石の聲あり、坐客皆滿を引いて醉倒す、委、袖より嘉紙一幅を出して曰く、吾公に求むる無し、一絕句を得ば足る、坡笑つて之に從ふ、

山頭孤鶴向南飛。　山頭の孤鶴南に向つて飛ぶ、

載我南游到九疑。(一)　我を載せて南游九疑に到る、

(二)下界何人也吹笛。　下界何人か也笛を吹く、

可憐時復犯龜茲。(三)　可憐時に復た龜茲を犯す、

【字解】(一) 九疑 湖南省寧遠縣南六十里に在り。舜を葬りし山。(二) 下界 人界を天上界に較べて云ふ、(三) 犯龜茲 曲名である、元稹の連昌宮辭に、逡巡大遍梁州徹、色色龜茲轟錄續と、龜茲は鳩茲とも書す、西域に屬し、唐代都督府を置く、今の新疆庫車縣の地、

【題意】十二月十九日は東坡の生日である、自から賀せんと思うて、酒を赤壁磯下に置いて之を飲み樂しむ、身は高峰に踞し、眼は鵲巢を俯して瞰る、時に何處よりとなく笛聲が聞ゆる、郭古の二生は共に音律を解する者、曰く此の笛は新聲ありて、尋常俗士の吹くことが出來ないものであると、是に於て其の人を問へば答へて曰く李委なりと、公の生日を祝せん爲め鶴南飛の曲を吹いて以て之を獻ずと、乃ち座に請ずれば更に數曲を奏す、其の妙技に坐客皆歎賞する、公は返禮せんと欲するも李委に求むる者はない、唯公の詩を求むと、公是に於て此の詩を賦して與へたのである、

【詩意】山頭の孤鶴は南に向つて飛び去る、我を載せて南游して九疑山まで到達せしむ、然るに下界に於て何人か也笛を吹き、可憐なるは時に復た龜茲まで到らしむ、

【餘論】笛の曲に鶴南飛を聞く、又事實上我は鶴に從うて南の方九疑山まで吟魂が到る、然るに曲が一轉して犯龜茲を奏するを聞きて、我が吟魂は更に龜茲まで到るの意、然るに當に其の意を云ふは平凡公の嫌ふ所、故に此の奇句を爲すのである、

## 蜀僧明操思歸。書龍邱子壁

蜀の僧明操歸を思ふ、龍邱子の壁に書す

久厭勞生能幾日。　久しく勞生を厭ふ能く幾日ぞ、

莫將歸思擾衰年。　歸思を將て衰年を擾す莫かれ、

【字解】(一) 片雲 「傳燈錄」に惠忠國師、自受心印、肅宗上元二年赴京、帝問、師在曹溪得何法、

(一)片雲會二得無心一否。　片雲は無心を會得するや否や、

(二)南北東西只一天。　南北東西只一天、

師曰、陛下見二空中一片雲一麼と、

【三】南北　「禮記檀弓」に、丘也東西南北之人也と、「禪錄」に、本来無二東西一、何處有二南北一と、

【題義】蜀地の僧明操が他鄕に雲游して其の游びに倦み故鄕に歸らんと思ふ、公之に戲れて此の詩を龍邱子の壁に題したるものである、

【詩意】久しく勞生を厭うて能く幾日を渉るやを余は知らない、が一朝歸思を起して其の衰年を擾してはいかぬ、片雲は本來無心で方處など擇ばない、僧は雲水と同じきもの、師は其の理を會得するや如何、南北東西只一天である、

【餘論】紀曰く、亦厭二偈頌氣一と、此等の詩決して偈頌の氣は無い、僧を以て對手とする、是れ尋常の小詩である、

# 蘇東坡詩集 卷二十二

## 古今體詩 四十二首

### 次二韻孔毅父集二古人句一見一レ贈五首

孔毅父が古人の句を集め贈らるるを次韻す 五首

羨君戲集二他人詩一。　羨む君が戲れに他人の詩を集むるを、

指二呼市人一(一)如レ使レ兒。　市人を指呼すること兒を使ふが如し、

天邊鴻鵠不レ易レ得。　天邊の鴻鵠得易からず、

便令レ作レ對隨二家雞一(二)。　便ち對を作して家雞に隨はしむ、

退之驚笑子美泣(三)。　退之は驚き笑ひ子美は泣く、

問レ君久假何時歸。　君に問ふ久假何れの時にか歸る、

世間好句世人共(四)。　世間の好句世人共にす、

明月自滿千家墀。　明月は自から滿つ千家の墀、

【字解】【一】市人　王梅溪曰く市人字、亦驅二市人一而戰之意と、【二】家雞　「南史王僧虔傳」に、庾征西翼書、少時與二右軍一齊レ名、右軍後進、庾猶不レ分、在二荊州一、與二都下人書一云、小兒輩賤二家雞一、皆學二逸少書一と、王梅溪の說、詳細なれば譯して出だす、「古詩を集む、前古未だ有らず、王介甫盛んに之を爲す、多きもの數十韻、蓋し古人の詩を誦する者多きを以て、或は座中率然として成り、往往對偶親切、其の後人多く之に

救ふ者あり、但し數十部の詩を取つて、諸家の詩を集むるのみ、故に公此の詩、之を美め、亦數しく以て之を譏るのみ、蓋し市人は之なして兒の如くならしむべからず、鴻鵠は家雞を對と爲さしむべからず、猶ほ古人の詩句美惡巧拙あり、其の初め各の思致あり、豈混じて一律と爲すべけんや」查初白は梅谿を破して王介甫に始まると謂ふは是にあらずと、【三】何時歸　韓退之の詩、公今此去何時歸と、【四】世人共　王梅谿曰く、東坡嘗對㆓歐陽文忠公㆒、誦㆓文與可詩㆒、歐陽公云、此非㆓與可詩㆒、世間原有㆓此句㆒、與可拾得耳と、

【題義】孔毅父が古人の句を一句づつ拾うて以て我が詩と爲し、贈られたるに次韻して作る、譏意と戲意とを含んで居る、

【詩意】羨むは君が游戲に他人の詩を集むる、恰も市井の俗人を指呼して小兒を使用する如くである、例して見れば天邊の鴻鵠と家雞とは固より對すべきものでなく、一方は品位の高きもの、一方は品位の低きものである、それをして對と爲さしめたる君の技倆には退之は驚笑するであらうし子美は泣くことであらう、君に問ふが君が其の本領に歸るは定んで何れの時に在るぞや、世間の好句は世間の人が共に知つて居る、恰も明月は天上一輪にて影は千家の階墀に滿ちてあると同じ、

【餘論】四支と八齊と五微とを通韻として用ふ、

〔二〕

紫（一）駝之峰人莫㆑識。　　〔二〕紫駝の峰人識ること莫し、
雜以㆓雞豚㆒眞可㆑惜。　　雜ふるに雞豚を以てす眞に惜む可し、
今君坐致五（二）侯鯖。　　今君坐ながら致す五侯の鯖、
盡是猩（三）脣與㆓熊（四）白㆒。　　盡く是れ猩脣と熊白と、
路旁拾得半（五）段槍。　　路傍拾ひ得たり半段の槍、
何必開㆑爐鑄㆓矛戟㆒。　　何ぞ必ず爐を開いて矛戟を鑄ん、
用㆑之如何在㆑我耳。　　之を用ふる如何ぞ我に在るのみ、
入㆑手當㆑令㆓君喪魄㆒。　　手に入れて當に君をして喪魄せしむべし、

【詩意】橐駝の肉味は人の識る者は無い、知らないから雞肉や豚肉と雜烹して食ふ、それは惜しいことである、今君は坐ながら五侯鯖の珍味を嘗む、君の食ふものは盡く是れ猩脣や熊掌の極めて得難き珍味であるに、何ぞや路傍に於て半段の槍を拾うて見たり、又新に爐を開き別に矛戟を鑄るの無益の勞をするのであるぞや、之を用ふること如何ぞ我に在るのみぞ、我が手に入らば當に君をして喪魄せしむるものである、

【字解】【一】紫駝之峰　杜子美の詩、紫駝之峯出㆓翠釜㆒と、顧師固曰く、脊上有㆓一封隆高㆒也、如㆓封土㆒然、俗呼㆓封牛㆒と、橐駝を謂ふ、峯ではない、【二】五侯鯖　「西京雜記」に、五侯不㆓相能㆒、賓客不㆓相往來㆒、婁護豐辨、傳㆓會五侯間㆒、各得㆓其歡心㆒、競致㆓奇膳㆒、乃合以爲㆑鯖、世稱㆓五侯鯖㆒、以爲㆓珍味㆒と、【三】猩脣　李賀の大堤曲に、郎食㆓鯉魚尾㆒、妾食㆓猩猩脣㆒と、【四】熊白　查初白云ふ、熊白熊肪也と、【五】半段槍　「談賓錄」に、唐哥舒翰、捍㆓吐蕃㆒、賊衆三道、從㆑山相續而下、翰持㆓半段折槍㆒、當㆑前擊㆑之、無㆑不㆓披靡㆒と、

〔三〕

天（一）下幾人學㆓杜甫㆒。　　〔三〕天下幾人か杜甫を學ぶ、

【字解】【一】天下　杜子美の詩、

誰得(二)其皮與其骨。　誰か其の皮と其の骨とを得るや、
劃如太華當我前。　劃して太華の我が前に當るが如し、
(三)跛牂欲上驚(四)崷崒。　跛牂上らんと欲して崷崒に驚く、
(五)名章俊語紛交衡。　名章俊語紛として交衡、
無人巧會當時情。　人の巧く當時の情を會する無し、
前生子美只君是。　前生の子美只君是れ、
(六)信手拈得俱天成。　信手拈じ得て倶に天成、

天下幾人畫古松」と、【二】其皮 「傳燈錄」に、達磨欲西返天竺、乃命門人曰、時將至矣、汝等盍各言所得乎、師謂道副曰、汝得吾皮、謂尼總持曰、汝得吾肉、謂道育曰、汝得吾骨、最後慧可、依位而立、師曰汝得吾髓、乃付法と、【三】跛牂 「史記李斯傳」に、城高五丈、而樓季不輕犯也、太山之高、百仞而跛牂牧其上、夫樓季也、而難五丈之限、豈跛牂也、而易百仞之高哉、陗塹之勢異也と、跛牂はビッコヒツジ、【四】崷崒 山長くして高き貌、【五】名章 李太白上裴長史書、名章俊語、絡繹間起と、【六】信手 「傳燈錄」に、洛普和尚頌云、入荒田不揀、信手拈來草、觸目未嘗無、臨機何不道と、

【詩意】天下の詩人が幾人か杜甫の詩を學ぶ、而して誰か其の皮を得誰か其の骨を得るものである、我と杜との間は劃として太華山が我が眼前に當るが如くである、跛牂が之に上らんと思ふ先づ崷崒の險峻に驚くのみ、杜甫の詩は名章俊語が紛として交衡して居る、後人は巧く杜甫が作る時の情を會得する者はない、所が前生の杜甫は今日の君である、是の故に手に信して拈得して倶に天成の珠玉と爲つてある、

〔四〕

詩人雕(一)刻閒草木。　詩人の雕刻閒草木、
搜抉肝腎(二)神應哭。　肝腎を搜抉して神應に哭すべし、
不如默誦千萬首。　如かず默誦す千萬首、
(三)左抽右取談笑足。　左抽右取談笑足る、
夜吟石(四)鼎聲悲秋。　夜吟すれば石鼎聲悲秋、
可憐好事劉與侯。　憐む可し好事劉と侯と、
何當一醉百不問。　何か當に一醉百問はざるべき、
(五)我欲眠矣君歸休。　我眠らんと欲す君歸り休めよ、

【字解】【一】雕刻 「莊子天道篇」に、覆載天地、刻雕衆形と、【二】神應哭 「古詩話」に、賀知章見李白烏棲曲曰、此詩可泣鬼神矣と、査初白曰く、詩人搜抉肝腎、自傷其神明、故神應哭也と、苦辛するが故に精神の神哭する、鬼神が其の名篇なるが故に哭感するのではない、【三】左抽 「毛詩」に、左旋右抽、中軍作好と、【四】石鼎 韓退之の石鼎聯句序に、劉師服、侯喜、與道士軒轅彌明同宿、喜夜與師服說詩、視彌明若無人、彌明忽軒衣竪肩、指爐中石鼎曰、子云能詩、能與我賦此乎、劉郎援筆、題其首句、傳於喜、道士啞然笑、即袖手竦肩、高吟初不經意、詩旨似譏喜二子、每聱牙、欲出口吻、聲益悲、喜亦不能奇と、【五】我欲眠 李白の詩、我醉欲眠卿暫去と、

【詩意】詩人は閒草木を材料として頻りに雕刻する、肝や腎を搜抉し盡くして其の神も泣哭することであらう、それよりは古人の詩を千首も萬首も默誦する方がよい、而して左抽し右取して談笑の用に供するに足る、作る技倆も無きに强ひて悲吟する侯喜を見玉へ、善詩の劉師服や彌明は笑つて對手と

しない、一層のことに唯一醉して百事皆問はぬもよい、我も眠りに入らんと思ふ君も歸りて休息し玉へ、

〔五〕

膏明蘭臭俱自焚。
〔二〕象牙〔三〕翠羽戕其身。
〔四〕多言自古爲數窮。
〔五〕微中有時堪解紛。
癡人但數〔六〕羊羔兒。
不知何者是〔七〕左慈。
〔八〕千章萬句卒非我。
急走捉君應已遲。

〔五〕

膏明蘭臭俱に自から焚く、
象牙翠羽其の身を戕ふ、
多言は古より爲めに數ば窮す、
微中時あり紛を解くに堪へたり、
癡人但數ふ羊羔兒、
知らず何者か是れ左慈、
千章萬句卒に我にあらず、
急走して君を捉ふ應に已に遲かるべし

【字解】〔一〕蘭臭「周易」に、同心之言、其臭如蘭と、〔二〕象牙「左傳襄公二十四年」に、象有齒、以焚其身と、〔三〕翠羽 吳筠の「玄猿賦」に、小則翡翠、殞於羽毛、大則犀象、殘於齒革と、〔四〕多言「老子」に、多言數窮、不如守中と、〔五〕微中「史記滑稽傳」に、談言微中、亦可以解紛と、〔六〕羊羔兒 公の自注に世傳、陶穀學士、買得党太尉家故伎、遇雪、陶取雪水、烹團茶、謂伎曰、党家應不識此、伎曰、彼粗人、安有此景、但能於銷金煖帳下、淺斟低唱、喫羊羔兒酒、陶默然媿其言と、又「國策」に、中山君喟曰、吾以一杯羊羹亡國と、羹は羊のスヒモノである、〔七〕左慈「後漢左慈傳」に、曹操欲收殺之、逢慈於陽城山頭、遂走入羊羣、操知不可得、乃令就羊中告之曰、不復相殺、本試君術耳、忽一老羝、屈前兩膝、人立而言曰、遽如許、即競往赴之、而羣羊數百皆變爲羝、並屈前膝、人立云、遽如許、遂莫知所取焉と、〔八〕千章 白樂天の詩、萬句千章無一字と、

【詩意】膏は明あるも蘭は臭あるも倶に自から焚き、象も牙の爲め翠も羽の爲めに其の身を戕ふのである、多言は古より言の爲め數ば窮するに至る、微微たる言中時ありては紛紜を解くことがある、癡人は但眼前のつまらぬ羊羔兒の多少を數へて大事を忘る、怪物の多き世の中誰が眞の左慈であるか分らない、千章も萬句も畢竟人の物にて我物ではない、急走に君の面目を捉へんと欲するは曹が左慈を捉へんと欲したると同樣に已に遲いのである、

【餘論】紀曰く、五首皆語雜嘲弄、頗有率句、不爲傑作と、案ずるに集句の例は傅咸に開くとせば傅は晉人なれば其の例は古に在ると謂つて可い、然るに唐人は此を學ばず、宋に至りて王荊公や石曼卿の如く盛んに作るもの出づるは、時代の趨向として認むることが出來る、然るに公は嘲弄して餘す所がない、古に無くて不可なりとなれば、公は盛んに次韻の詩を作る、中唐に於て元白を除く外多く次韻の詩は作らない、晚唐以來盛賦するのであるから、是も嘲弄せざるべからず、然るに次韻に於て論する所なく、集句を此の如く痛罵する、公の思想として但聞くべきのみである、

## 六年正月二十日。復出東門。仍用前韻

六年正月二十日、復た東門を出づ、仍つて前韻を用ふ

亂山環合水侵門。

亂山環合して水門を侵す、

【字解】〔一〕九重「楚辭宋玉九

身在淮南盡處郵。　身は淮南盡處の郵に在り、
五畝漸成終老計。　五畝漸く成る終老の計、
九（一）重新埽舊（二）巢痕。　九重新に埽ふ舊巢の痕、
豈惟見慣沙鷗熟。　豈惟見て慣る沙鷗の熟、
已覺來多釣石溫。　已に覺ゆ來ること多し釣石の溫、
長與東風約今日。　長く東風と今日を約す、
暗香先返玉（三）梅魂。　暗香先づ返る玉梅の魂、

【題義】元豐四年の正月二十日に始めて女王城に游ぶの詩を作り、而して五年に再び原韻にて作り、今六年三たび原韻にて作るのである、

【詩意】高低定まらざる亂山が環り合して水は東門を優してゐる、身は淮南盡處の郵に在る、五畝の宅地は漸く終老の計が成る、九重の埃塵は新に掃除する舊巢の痕を、沙上に游ぶ閑鷗は從來見て慣るのは勿論、其の上猶ほ記憶して居る釣石の溫なるを、長く東風とは今日の遊びを期約してある、吾に背かないで暗香は先づ玉梅の魂を返して開く、

【餘論】紀曰く、溫雅可誦と、女王城の詩は公の會心する所、乃ち三四重韻する所以である、今に至るまで公を敬する者是の詩に次韻するは、風情盡きざるものあるを見る、

辨じに、君之門兮九重と、今の句は宮門九重の意味とは異なる、舊巢の埃多きを謂ふ、【二】舊巢痕 「施德初注東坡詩陸放翁序」に、昔祖宗以三館養士、儲將相材、及官制行、罷三館、而東坡、蓋嘗直史館、然自謫爲散官、削去史館之職久矣、至是史館亦廢、故云新埽舊巢痕、其用事之嚴如此、而鼠巢西隔九重門、則李義山詩也と、【三】玉梅魂 何焯曰く、韓致光、湖南梅花、一冬再開、偶題其三四云、玉爲通體依稀見、香認返魂容易迴、結云、夭桃莫倚東風勢、調鼎何曾用不才、詩意本此、蓋公之在黄、竊致光之阨于崔昌遐、而在湖南、然時相讎力擠之、而神宗獨爲保全、亦猶致光之見知于昭宗、先返玉梅魂、蓋以神宗之必不忍絕棄也、而語意渾然、恰是收足復出東門意、此老詩識非淺人所能讀也と、

## 食甘

甘を食ふ

一雙羅（一）帛未分珍。　一雙の羅帛未だ珍を分たず、
林下先（二）嘗愧逐臣。　林下先づ嘗む逐臣を愧づ、
露葉霜枝翦寒碧。　露葉霜枝寒碧を翦り、
金盤玉指破芳辛。　金盤玉指芳辛を破る、
清泉蔌（三）蔌先流齒。　清泉蔌蔌先づ齒に流れ、
香霧霏霏欲噀（四）人。　香霧霏霏人に噀かんと欲す、
坐客殷勤爲收子。　坐客殷勤爲めに子を收む、
千（五）奴一掬奈吾貧。　千奴一掬吾が貧を奈ん、

【字解】【一】羅帛 黄色の羅にて、帕頭を著ける、「唐史蕭嵩傳」に、荊州進黄甘、帝以紫帕包賜之と、【二】先嘗 薛逢、謝西川相公賜甘子詩、滿合新甘破鼻香、相公恩重賜先嘗と、【三】蔌蔌 「詩小雅」に、蔌蔌方有穀と、字義は種種の形容に用ふ、今は水分が多きを言ふ、【四】噀人 劉孝標の送橘啓に采之風味照坐、劈之香霧噀人と、【五】千奴 千頭木奴である、李叔平が子の爲めに千株の甘橘を栽せしこと、

前詩に於て詳辨せり、

【題義】柑橘を食うて作る、

【詩意】內禁に於て高官の者でも未だ此の珍を分賜せられないのに、林下に於て先づ嘗めるは逐臣である身を愧づる、露葉霜枝は寒碧を翦りて光澤がある、金盤に盛つて玉指にて芳辛を破る、芳辛を破りて見れば淸泉が蔌蔌として齒間に流るる、而して香霧は霏霏として其の香氣を以て人に噀く如くである、坐客は慇懃に一顆を袖に收めて去る、千奴を一掬して李家の子は富豪と爲るも吾は貧をどうすることも出來ない、

【餘論】紀曰く、千奴一掬四字、求新得拙と、一雙、一掬、先嘗、先流、此の同字あるは、是れ坡公の一家の宗旨、

## 大寒步至東坡贈巢三

大寒步して東坡に至り巢三に贈る

春雨如暗塵。春風吹倒人。
東坡數間屋。巢子誰與鄰。
空牀斂敗絮。破竈鬱生薪。
相對不言寒。哀哉知我貧。
我有一瓢酒。獨飲良不仁。
未能赬我頰。聊復濡子脣。
故人千鍾祿。馭吏醉吐茵。
那知我與子。坐作寒螿呻。
努力莫怨天。我爾皆天民。
行看花柳動。共享無邊春。

春雨暗塵の如く、春風人を吹倒す、
東坡數間の屋、巢子誰と與に鄰る、
空牀敗絮を斂め、破竈生薪鬱たり、
相對して寒を言はず、哀しい哉我が貧を知ればなり、
我に一瓢の酒あり、獨飲するは良に不仁、
未だ我頰を赬うする能はず、聊か復た子が脣を濡はさん、
故人千鍾の祿、馭吏醉うて茵に吐く、
那ぞ知らん我と子と、坐して寒螿の呻を作す、
努力して天を怨む莫し、我爾皆天民、
行きて看ん花柳の動くを、共に享けん無邊の春を、

【字解】〔一〕敗絮　「陶淵明傳」に、敗絮自擁、何慙兒子と、〔二〕生薪　杜荀鶴の詩、時挑野菜和根煮、旋斫生柴帶葉燒と、〔三〕知我貧　「史記」に、管仲曰、吾始困時、嘗與鮑叔賈、分財利多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也と、〔四〕千鍾祿　「史記魏世家」に、魏成子食祿千鍾と、〔五〕馭吏　「前漢丙吉傳」に、馭吏嗜酒數逋蕩、嘗從吉出、醉嘔丞相車上、西曹主吏、白欲斥之、吉曰、以醉飽之失去士、使此人將復何所容、西曹第忍之、此不過汙丞相茵耳と、〔六〕寒螿　「謝惠連擣衣詩」に、烈烈寒螿啼と、螿は蟬、俗にツクツクボウシである、〔七〕天民　天の法に從ふ民、「孟子盡心章」に、有天民者、達可行於天下、而後行之者也と、〔八〕無邊　杜子美の詩、無邊落木蕭蕭下と、

【題義】春寒なるが甚だしければ大寒と題す、其の寒を冒して東坡に至り、此の詩を作り巢三に贈るのである、巢は姓、名は谷、嘗て試して第せず、秦鳳涇原の間に游ぶ、此の時坡公黃州に在り、谷は江淮に走り、因つて共に游ぶ、公は子由と共に朝廷に用ひらるるに及んで、谷其の間之を見ず、後公

嶺海に謫せらる、谷慨然眉州より徒歩して之を訪ふ、梅州に至り、文定に書を遣りて曰く、我萬里歩行して公を見る、自から意はざりき、今梅州に至らんとは、文定驚喜して曰く、此れ今世の人にあらず、古の人なりと、既に見て相泣く、谷時に年七十三、去つて文忠を海南に見んとす、文定之を止めて曰く、今儋より儋に至る數千里、老人の事にあらず、之を留むるも可かず、新會に至る、蠻隸の爲め其の槖裝を竊まる、谷は遂に新會に於て病死す、又嘗て知る所の存寶と云ふ將軍あり、罪を得て自から死を期す、谷に謂つて曰く死は惜しむ所にあらず、妻子寒餓を免れず、銀數百兩あり、君にあらざれば託して遣るべきなし、谷許諾す、卽ち姓名を變じて、銀を懷にし、歩して往いて其の子に授け、逃れて江淮の間に至り、蘇軾等と游ぶと、宋史卓行傳に在り、高士にして亦奇人なる者か、

【詩意】春雨は霏霏として暗塵の如くである、春風は烈烈として人を吹倒する勢である、東坡には數間の屋がある、巢子は誰と鄰を作してあるや、卽ち此の東坡居士である、空牀には敗絮を斂めて、破竈には生薪が鬱積してある、訪問して對坐し暖を取るの篋なきも寒しと言はぬ、言はぬは我が貧を知ればである、我に聊か一瓢の酒がある、獨飮するは良に不仁と思ふ、主人が飮んで頰を赬うするまでに至らないが、聊か復た子が脣をも濡ほさんと思ふ、然るに我が故人の中には千鍾の祿を食んで、騶吏まで飽飮して醉うて車茵に嘔せしものまである、那ぞ知らんや我と子と、寒を忍んで坐して寒蛩の呻吟を學ぶ、されど努力して天を怨むやうな心は起らない、我も爾も皆天民であることを自覺すればである、但し徐徐と春暖に赴くであらうから行いて花柳が生動するを見て、共に無邊の春を享樂せんと思ふ、

【餘論】紀曰く、沈痛之言、不傷忠厚と、春日に大寒の字面を用ひんと欲する者は、公の此の詩を以て論證とすれば可い、春寒は料峭とか悄悄とか定義があると論する者は、公の爲めに笑はるるものと知れ、

## 元修菜

元修菜

菜之美者有吾鄕之巢。故人巢元修嗜之。余亦嗜之。元修云。使孔北海見。當復云吾家菜耶。因謂之元修菜。余去鄕十有五年。思而不可得。元修適自蜀來。見余於黃。乃作是詩。使歸致其子。而種之東坡之下云。

【訓讀】菜の美なる者、吾鄕の巢有り、故人巢元修之を嗜む、余亦之を嗜む、元修云ふ、孔北海をして見せしめば、當に復た吾が家菜と云ふべきか、因つて之を元修菜と謂ふ、余鄕を去る十有五年、思うて得べからず、元修適ま蜀より來り、余を黃に見る、乃ち是の詩を作る、歸りて其の子に致し、而して之を東坡の下に種ゑしむと云ふ、

彼美君家菜。鋪田綠茸茸。　彼の美は君が家の菜、鋪田綠茸茸、

(一)豆莢圓且小。槐(二)芽細而豐。　豆莢圓にして且小、槐芽細にして豐、
種之秋雨餘。擢(四)秀繁霜中。　之を種う秋雨の餘、秀を擢んづ繁霜の中、
欲花而未蕚。一一如青(五)蟲。　花ならんと欲して而かも未だ蕚ならず、一一青蟲の如し、
是時青裙女。採(六)擷何忽忽。　是の時青裙の女、採擷何ぞ忽忽なる、
烝之復湘(七)之。香色蔚其(八)饛。　之を烝し復た之を湘し、香色蔚として其れ饛たり、
點酒下(九)鹽豉。縷(一〇)橙芼(一一)薑葱。　酒を點し鹽豉を下し、縷橙芼薑葱、
那知雞與豚。但恐放(一二)箸空。　那ぞ知らん雞と豚と、但恐る放箸空しきを、
春盡苗葉老。耕翻煙雨叢。　春盡きて苗葉老ゆ、耕翻して煙雨叢、
潤隨甘澤化。暖作青泥融。　潤は甘澤に隨つて化し、暖は青泥と作つて融す、
始終不我負。力與糞(一三)壤同。　始終我に負かず、力は糞壤と同じ、
我老忘家舍。楚音變兒童。　我老いて家舍を忘れ、楚音兒童を變す、
此物獨嫵(一四)媚。終年繫余胸。　此の物獨り嫵媚、終年余が胸に繫る、
君歸致其子。囊盛勿函封。　君歸れば其の子に致せ、囊に盛り函封する勿かれ、
(一五)張騫移苜蓿。適用如葵(一六)菘。　張騫苜蓿を移し、適用葵菘の如し、
馬援載薏(一七)苡。羅(一八)生等蒿蓬。　馬援薏苡を載せ、羅り生じて蒿蓬に等し、
懸知東坡下。塉鹵化千鍾。　懸かに知る東坡の下、塉鹵千鍾に化するを、
長使齊安民。指此說兩翁。　長く齊安の民をして、此を指さして兩翁を說かしめん、

【字解】【一】茸茸　盛んなる貌、令狐楚の詩、細雨綠領綠茸茸と、【二】豆莢　「博雅」に、豆角謂之莢と、【三】槐芽　「本艸」に、槐初生、嫩芽可食、亦可作飲と、【四】擢秀　文選嵇景眞、與嵇茂齊書、植根芳苑、擢秀淸流と、【五】青蟲　梁簡文帝の詩、珠槃雜青蟲と、王楙曰く、形容之工、蜀人皆識之、內地人、非親見其菜者不知其工也と、【六】採擷　杜子美の詩、採擷細頸升中堂と、擷と採と同義の字、つまみとるのである、【七】湘之　「詩」に、于以湘之と、湘は烹る、【八】其饛　「詩」に、有饛簋飧と、盆器に盛滿の貌、【九】下鹽豉　「晉書」に、陸機嘗詣王濟、濟指羊酪謂機曰、卿吳中何以敵此、答曰、千里蓴羹、未有鹽豉、時人以爲名對と、鹽豉とは鹽と豆とを和して造るもの、味噌の類である、【一〇】縷橙　ダイダイを細かに切ることである、【一一】芼薑葱　薑はシヤウガ、葱はネギ、芼は野菜を擇ぶのである、韓退之の詩、芼以椒與橙と、【一二】放箸　杜子美の詩、落碣何曾白紙濕、放箸未覺金盤空と、【一三】糞壤　「維摩經」に、糞壤之地、乃能滋茂と、【一四】嫵媚　前に辨あり、【一五】張騫　漢の武帝の時大宛に使と爲り、苜蓿と天馬を攜へて歸る、【一六】葵菘　俗にタウナ、白菜、黃芽菜である、王楙曰く、苜蓿亦可爲菜茹と、【一七】薏苡　ズズダマ、藥艸、【一八】羅生　「宋玉高唐賦」に、芳草羅生と、

【題義】吾が鄉に野菜がある、故人の巢元修と余は之を嗜む、因つて之を元修菜と名を命じた、余は國を去つて已に十有五年、之を思ふも手に入らない、元修が適〻蜀より來りて余を黃州に訪はる、乃ち是の詩を作り、且つ元修の子に致して、之を黃の東坡の下に種ゑしめたのである、

【詩意】彼の美なるものは君が家の菜である、田面に鋪き滿ちて綠茸茸である、豆莢は圓く且つ小

にして、槐芽は細かにして豐肥である、之を秋雨の十分なる時に種うれば、忽ち芳秀を繁霜の中に於て擢んでる、花ならん欲するも而かも未だ蕚にもならず、其の狀は一一青蟲の如くである、是の時や恰も採擷すべき時であれば、青裙を著けた女兒が皆怱怱として居る、採り來りて之を烝し復た之を湘す、而して香色は蔚として其れ儵である、酒を一點して之に鹽豉を下し、又橙を縷切して薑葱を擇びて料する、那ぞ知らん雞と豚とは、但恐る放箸して空乏なるを、春の晩に及んでは苗葉も老いて、耕鋤の時煙雨が其の叢に滿ち、潤は甘澤するがままに化し去り、畯に向うて青泥と作つて融する、下種より此に至る始終我が勤勞と背かずに、其の勞力と糞壤の力と同等である、我は老いて家舍を忘れ、外に在つて楚音が兒童を變する、此の物のみは獨り嫵媚である、終年余が胸臆には思が繫けて在る、請ふ君歸りなば其の子に致せよ、囊に盛り函に封する儘にしては不可ぬと、昔張騫は馬糧として苜蓿を移植する、適用すれば馬糧の苜蓿も人間の口に副ふ葵菘の如くになる、又馬援は薏苡を載せて歸る、其の薏苡は羅生して蒿蓬と等しく長ずる、懸かに知る東坡の下、埆鹵の地が千鍾の肥地と化するであらう、而して長く齊安一縣の民衆が、此の桑を指して是れ二翁の功であると云ふことを說くであらう、

【餘論】紀曰く、質而不レ俚、細而不レ瑣、此由二筆力不一レ同と、又、張騫以下を評して有二襯貼一便不二單窘一、否則收二不レ住一一篇長詩一と、

# 三月三日點燈會レ客　三月三日點燈客を會す

江上東風浪接レ天。（一）　江上東風浪天に接す、

苦寒無賴（二）破二春妍一。　苦寒無賴春妍を破る、

試開雲夢羔兒酒。　試みに開く雲夢羔兒の酒、

快瀉錢塘藥玉船（三）。　快く瀉ぐ錢塘藥玉の船、

（四）蠶市光陰非二故國一。　蠶市光陰故國にあらず、

（五）馬行燈火記二當年一。　馬行燈火當年を記す、

冷煙濕レ雪梅花在。　冷煙雪を濕す梅花在り、

留二得新春一作二上元一（六）。　新春を留め得て上元を作す、

【字解】【一】浪接天　白樂天の詩、寒浪連レ天白と、【二】無賴「史記高祖紀」に、始大人常以レ臣無賴、不レ能レ治二產業一と、始めは依賴する所無きの義、後轉じて强暴妄爲の者を謂ふ、【三】藥玉船　王梅谿曰く、藥玉船、蓋以二藥煮一石而似二玉者一也と、【四】蠶市　施德初曰く、成都記、蠶叢氏每春、勸二民農桑一、但鬻二蠶具一、謂二之蠶市一と、【五】馬行　王梅谿曰く、馬行者東京繁華之處、燈火最盛と、汴京の城下、馬を驚ぎ市を開く、【六】上元　馮應榴曰く、末二句追二憶當年景事一也、又先生律詩首句韻通用者多、至レ如二此詩一之末韻通用者、絶少と、上元は正月十五日の燈夕である、

【題義】三月三日の上巳に點燈して客を會し詩を作る、

【詩意】江上の東風は浪を吹いて浪は天に接する、苦寒は無賴にして春の芳妍を破る、試みに雲夢の羔兒酒を開いて、之に交ふるに快瀉する錢塘の藥玉船である、蠶市を是の日設くるは故國の事にて客

土の事ではない、馬行燈火を見る亦當年の事である、節は暮春であるのに冷煙や濕雪や梅花が猶は在る、新春正月を留め得て上元の燈夕を作すの思を作すのである、

【餘論】清潭案するに、白樂天の秋江送レ客の詩、秋鴻次第過、哀猿朝夕聞、是日孤舟客、此地亦離羣、濛濛潤レ衣雨、漠漠冒レ帆雲、不レ醉二潯陽酒一、煙波愁二殺人一と、古詩と今體は同一に論せざるも、公は樂天の詩に於て學ぶ所多ければ、或は樂天の韻法を學びしものか、

## 日日出二東門一　　日日東門を出づ

日日出二東門一(一)歩尋二東城一游。　日日東門を出で、歩して東城を尋ねて游ぶ、
城門抱(二)關卒。笑レ我此何求。　城門抱關の卒、我を笑ふ此に何をか求むると、
我亦無レ所レ求。駕言寫二我憂一(三)。　我亦求むる所無し、駕して言に我が憂を寫す、
意適忽忘レ返。路窮乃歸休。　意適すれば忽ち返るを忘れ、路窮すれば乃ち歸休す、
懸知百歲後。父老說二故侯一。　懸かに知る百歲の後、父老故侯を說くことを、
古來賢達人。此路誰不レ由。　古來賢達の人、此の路誰か由らざる、
百年寓二華屋一。千載歸二山邱一。　百年華屋に寓するも、千載山邱に歸す、
何事羊公子。不レ肯レ過二西州(四)一。　何事ぞ羊公子、肯て西州に過ぎざる、

【字解】〔一〕東門　王梅溪曰く、東坡圖云、東門近二東坡一之門也、在二乾明寺前五十步一、今無矣と、〔二〕抱關　「孟子萬章」に、抱關擊柝者、皆有二常職一と、門衞である、〔三〕我憂　「毛詩」に、知レ我者謂二我心憂一、不レ知レ我者謂二我何求一と、〔四〕西州　「晉書」に、羊曇嘗因二石頭大醉一扶レ路唱レ樂、不レ覺至二西州門一と、

【詩意】每日每日東門を出で、歩して以て東城を尋ねて游ぶ、城門の抱關卒は我を見慣れて、我を笑ふ何事か求むるあつて日日來るのであらうと、我は畢竟何事も求むるのではない、此に來るは我が心憂を寫す爲めである、而して意が適すればいつまでも返るのを忘れて游び、路窮まれば乃ち歸休する、懸かに知る我が死後は、父老は定めて故侯を說くことであらう、古來より賢達の人、此の路は皆由る所である、人世は百年の間華屋に寓居するも、要するに千載は山邱に歸るの運命である、何事ぞや羊公子は、肯て西州を過ぎざる、

【餘論】紀曰く、渾渾有二古致一と、又曰く、接レ法入レ古と、漢の十九首を學んで其の痕跡を留めざるものである、

## 南堂五首　　南堂　五首

江上西山半隱レ堤。　江上の西山半は堤に隱る、

【字解】〔一〕南堂　王梅溪曰く

此邦臺館一時西。
南(一)堂獨有二西南向一。
臥看千(二)帆落二淺溪一。

此の邦臺館一時西、
南堂獨西南に向ふあり、
臥して看る千帆の淺溪に落つるを、

【題義】 黃州に於て自から南堂を建築して其の趣を敍す、

【詩意】 大江の上の西山は半は堤に隠れる、此の邦の臺館は一時皆西面して作る、此の南堂は止だ是れ西南に向つて建築する、是の故に臥して千帆の淺溪に落ちるのを見ることが出來る、

【字解】 〔一〕 東坡圖云、南堂在二州治南一里一、俯二臨大江一と、〔二〕 千帆 施德初曰く杜牧之の詩、千帆美滿風と、

〔二〕

暮年眼力嗟猶在。
多病顚毛却未レ華。
故作二明窗書二小字一。
更開二幽室一養二丹(一)砂一。

暮年眼力嗟猶ほ在り、
多病顚毛却つて未だ華ならず、
故に明窗を作りて小字を書し、
更に幽室を開きて丹砂を養ふ、

【詩意】 暮年に及んでも眼力は壯年と同じく堅固である、多病なるも顚毛は却つて未だ白華を著けない、故に明窗を作りて其の窗下に於て小字を書く、其の上更に幽室を開きて此の中に於ては丹砂を養うて居る、

【字解】 〔一〕 丹砂 王梅溪曰く先生與二王定國一書、近有レ人惠二丹砂少許一、光采甚奇、固不二肯服一、然其人敎レ以二甕火一養二其變化一、聊以悅レ神度レ日と、

〔三〕

他時夜雨困二移(一)床一。
坐厭二愁聲點二客腸一。
一聽南堂新瓦響。
似レ聞東塢小荷香。

他時夜雨移床に困しむ、
坐に厭ふ愁聲客腸に點するを、
一たび聽く南堂新瓦の響、
聞くに似たり東塢の小荷の香を、

【詩意】 他時夜雨の時は移床して聞くの不便は困みとする、坐に厭ふ雨が愁聲を齎らして客腸に點するには、一たび南堂の新瓦を打つの響を聞けば、東塢の小荷の香を聞くに似て是れのみは良によい、

【字解】 〔一〕 移床 庾開府の詩設レ水更移レ床と、

〔四〕

山家爲割千(一)房蜜。
稚(二)子新畦五(三)畝蔬。
更有二南堂堪レ著レ客。
不レ憂門(四)外故人車。

山家爲めに割く千房の蜜、
稚子新畦五畝の蔬、
更に南堂客を著くるに堪へたるあり、
憂へず門外故人の車、

【字解】 〔一〕 千房蜜 杜子美の詩、風落收二松子一、天寒割二蜜房一と、〔二〕 稚子 潘岳寡婦賦に、鞠二稚子于懷抱一と、〔三〕 五畝蔬 孟東野の詩、獨治五畝蔬と、〔四〕 門外 「漢陳平傳」に、陳平家貧、席爲レ門、門外多二長者車轍一と、杜子美の詩、門多長者車と、

【詩意】山家の生計として千房の蜜を割き、稚子の爲めには新畦に五畝の菜蔬を作る、更に南堂には賓客を容るるに足る坐席がある、門外に車聲あるも聊かも心配はしない、

〔五〕

掃レ地焚レ香閉レ閣眠。　地を掃ひ香を焚き閣を閉ぢて眠る、
簟(一)紋如レ水帳(二)如レ煙。　簟紋水の如く帳は煙の如し、
客來夢覺知何處。　客來りて夢覺め知る何れの處ぞ、
挂起西窗浪接レ天。　挂起すれば西窗浪天に接す、

【字解】〔一〕簟紋　夏日に敷いて坐する具、〔二〕帳如煙　太白の詩、碧紗如レ煙隔レ窗語と、李義山の詩、水紋簟滑鋪二牙牀一と、

【詩意】地を掃ひ香を焚き閣を閉ぢて眠る、簟紋は冷水の如くにて帳帷は煙の如くである、客來の聲を聞いて夢より覺めて客は何處ぞと云うて、挂起すれば西窗の外は浪が天に接する勢である、

【餘論】紀曰く、此首興象自然、不レ似二前四首一、有二宋人極杈之狀一、然以爲二夢得一、則未レ似、不レ知山谷何所レ見也と、黃山谷此の詩を讀みて劉夢得の作と疑ふ、紀評は之を言ふ、余少年の時、津阪東陽の絕句類選を讀む、此の五首中、掃レ地焚レ香の一首を采つて第三句を客來夢覺渾無事と作したるを記憶する、坡公の靈にして之を知らば、日本に人ありと言ふや否や、此の第五首を紀は稱揚するが、我が齋藤拙堂は尋常一樣と見做す、余を以て見れば宋絕として晚唐の地位に置くものと思ふ、

次二韻子由種一杉竹一　子由が杉竹を種うるに次韻す

吏(一)散庭空雀噪レ簷。　吏散じ庭空しうして雀簷に噪ぐ、
閉レ門獨宿夜厭(二)厭。　門を閉ぢて獨宿夜厭厭、
似レ聞梨棗同時種。　聞くに似たり梨棗同時に種うるを、
應レ與二杉(三)篁一刻(四)日添。　應に杉篁と刻日に添ふべし、
糟麴有レ神熏(五)不レ醉。　糟麴神あり熏じて醉はず、
雪霜誇レ健巧相沾。　雪霜健に誇り巧に相沾す、
先生坐待清(六)陰滿。　先生坐して待つ清陰の滿つるを、
空使二人人嘆一滯(七)淹一。　空しく人人をして滯淹を嘆せしむ、

【字解】〔一〕吏散　官吏が役所を退出する、白樂天の詩、百吏放爾散と、〔二〕厭厭　「毛詩周頌」に、厭厭其苗と、又「秦風」に、厭厭良人と、又厭厭夜飮と、滿足して盛んなる貌、又安靜なる貌、〔三〕杉篁　陸龜蒙の詩、杉篁左右供二餘清一と、〔四〕刻日　期日を限定する、「宋史張浚傳」に、刻レ日決レ戰と、〔五〕熏　王梅谿曰く、愼竇至二楊益舅家一、賜二熏肌酒一杯一曰、此酒柏葉草所レ造、亦云二千歲藥一也と、〔六〕清陰滿　陶淵明の詩、藹藹堂前林、中夏貯二清陰一と、〔七〕滯淹　「左傳文公六年」に、田滯淹と、久滯淹留である、韋莊の詩、帝里無レ成久滯淹、別レ家三度見二新蟬一と

【題義】子由が杉と竹とを官庭に種うる詩に次韻したのである、
【詩意】羣吏皆退散して後の官庭は雀が唯簷前に噪ぐのみ、門を閉ぢて獨り宿直して夜厭厭である、梨と棗とは同日に種うるが可いと聞いて居る、今杉と篁竹と同時に種ゑ日を限りて成長すると思ふ、

精麴は神あり人を善熏せしむるも酔ふに至らない、雪霜にも杉竹は健を誇りて巧く相沾ふ、先生は坐して待つ清陰の滿つるに至るを、空しく人人をして官途に滯淹するを嘆せしむ、

## 孔毅父妻挽詞

結褵記初歡(一)、同穴(二)期晚歲。
擇夫得溫嶠(三)、生子勝王濟(四)。
高風相賓友(五)、古義仍兄弟(六)。
從君吏隱中(七)、窮達初不計。
云何抱沈疾、俯仰便一世。
幽陰凄房櫳(八)、芳澤(九)在巾袂。
百年(一〇)縱得滿、此路行亦逝。
那將有限身(一一)、長瀉無益涕。
君文照今古、不比山石脆。
當觀千字誄(一二)、寧用百金瘞(一三)。

孔毅父が妻の挽詞

結褵初歡を記し、同穴晚歲を期す、
夫を擇んで溫嶠を得たり、子を產んで王濟に勝る、
高風相賓友、古義仍つて兄弟、
君に吏隱の中に從ひ、窮達初め計せず、
云何ぞ沈疾を抱き、俯仰便ち一世、
幽陰房櫳凄たり、芳澤巾袂に在り、
百年縱ひ滿つるを得るも、此の路行いて亦逝く、
那ぞ有限の身を將て、長く無益の涕を瀉がん、
君が文今古を照らす、比せず山石の脆きに、
當に觀るべし千字の誄、寧ぞ用ひん百金の瘞、

【字解】【一】結褵　「毛詩東山」に、親結其褵、九十其儀、其新孔嘉、其舊如之何と、結褵又は結縭に作る、女の嫁する時、母が帨巾を帶に結び付ける、【二】同穴　毛詩に、死則同穴と、【三】溫嶠　「世說」云、晉溫嶠姑有女、屬嶠覓壻、嶠自有婚意、答曰、佳壻難得、如嶠云何、姑曰、何敢希汝比也、後日嶠報姑云、已得壻矣、門地壻身不減嶠、因下玉鏡臺一枚、姑大喜、既交婚禮、姑女以手披紗扇、撫掌大笑曰、我固疑是老奴、果如所卜と、【四】勝王濟　「晉書」に、王渾妻鍾琰生濟、渾嘗共琰坐、濟趨庭而過、渾欣然曰、生子如此、足慰人心と、【五】賓友　「左傳僖公三十三年」に、臼季使過冀、見冀缺耨、其妻饁之、敬相待如賓と、【六】兄弟　毛詩、宴爾新婚、如兄如弟と、【七】吏隱中　高人は官吏と爲るも、要するに隱の意を離れない、杜子美の詩、吏隱適性情と、【八】房櫳　レンジマド、班婕妤の賦に、房櫳虛兮風泠泠と、【九】芳澤　「楚辭」に、粉白黛黑施芳澤と、【一〇】百年　韓退之の詩、百年未滿不得死と、【一一】有限身　有待身と義同じ、壽に限りあるを云ふ、【一二】誄　死者の生前の功德を累列して讚稱する哀誄、誄辭である、【一三】瘞　うづむ、をさむである、埋藏、「漢書朱建傳」に、母死辟陽侯奉百金稅と、稅は死者の衣被である、

【詩意】結褵したる當時も初歡を記憶する、而して同穴偕老の誓を固くする、夫を擇んで溫嶠の如きの佳壻を得、子を生めば王濟に勝るの子を得、良人を賓友の如く敬待する古の高風を保ち、又兄の如く弟の如く、眞敬し眞愛する古義も知る、夫君が官海に出沒する中に隨從して、其の窮達は初めより計る所でない、一旦云何がして此の沈疾を抱き、俯仰頃刻の間に便ち一世を終る、今や幽陰房櫳の中良に凄氣である、されど夫人の芳澤は巾袂に在つて殘る、人生百年縱ひ其れ滿つるも、此の冥路は何人も竟に逝かざるを得ない、到底有限の身である、無益の涕を長く瀉ぐは止めよ、孔君の文は乃ち今古を照らす光暉がある、山石の脆きものとは比較にならない、當に千字の誄辭を觀れば足る、寧ぞ百金の厚贈を以て墓に瘞むるを用ひんや、

【餘論】友人の細君を弔せんと欲する者は、宜しく此等の詩を讀み、其の皮を得るも可、其の肉を得るも可、其の骨、其の髓を得る益す可である、

## 初秋寄子由

初秋子由に寄す

百川日夜逝。物我相隨去。
百川日夜に逝く、物我相隨つて去る、

惟有宿昔心。依然守故處。
惟宿昔の心あり、依然として故處を守る、

憶在懷遠驛。閉門秋暑中。
憶ふ懷遠驛に在つて、門を閉づ秋暑の中、

藜羹對書史。揮汗與子同。
藜羹書史に對し、汗を揮つて子と同じ、

西風忽凄厲。落葉穿戶牖。
西風忽ち凄厲、落葉戶牖を穿つ、

子起尋裌衣。感歎執我手。
子起つて裌衣を尋ね、感歎我が手を執る、

朱顏不可恃。此語君莫疑。
朱顏恃む可からず、此の語君疑ふ莫かれ、

別離恐不免。功名定難期。
別離恐らくは免れざらん、功名定んで期し難し、

當時已悽斷。況此兩衰老。
當時已に悽斷、況んや此の兩衰老、

失途既難追。學道恨不早。
失途既に追ふこと難し、道を學ぶ早からざるを恨む、

買田秋已議。築室春當成。
田を買ひ秋已に議す、室を築き春當に成るべし、

雪堂風雨夜。已作對牀聲。
雪堂風雨の夜、已に對牀の聲を作す、

【字解】【一】日夜逝　「論語子罕篇」に、子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜と、【二】宿昔心　鮑照の詩、何煩宿昔意、猜恨坐相仍と、【三】懷遠驛　施德初曰く、懷遠驛、在汴京履貴門河南岸、按東坡嘉祐六年、與子由同來制策、寓懷遠驛と、【四】藜羹　王楙縮曰く、陸龜蒙、復友生論文書云、讀古聖人書、每涵泳義味、獨坐日昃、案上一杯藜羹、如五鼎太牢、饋於左右と、【五】裌衣　袷衣、アハセである、【六】朱顏　歐陽修の詩、須知朱顏不可恃、有酒當飲且相賜と、【七】恨不早　「唐書裴度傳」に、上巳宴羣臣曲江、度不赴、帝賜詩曰、注想待元老、識君恨不早と、【八】買田　歐陽永叔の詩、築室買田淸潁尾と、【九】雪堂　黃州の東坡に於て築きし堂名、大雪中に成りしを以て名づけ、且つ雪を堂壁に畫く、

【詩意】百川の水滾滾として日夜に流れ逝く、自も他も我も彼も相隨つて去る、我等は唯宿昔の素心あつて、是れのみは依然として故處を守りて動かない、追憶する曾て懷遠驛に在つて、門を閉ぢて秋暑の中に住せし事を、藜羹を飲みながら書史に對し、汗を揮うて勉强すること子と同じうした、然るに西風は忽ち凄厲にして、落葉は戶牖を穿ちて入る、其の時子は起つて裌衣を尋ね、感歎して我が手を執つて言ふ、朱顏は恃むべからず衰顏に變ずるは遠くない、此の語君疑うてはいかぬ、別離は恐らくは免れざる所、功名富貴は到底期することは出來ない、此の談を爲して當時已に悽斷する、況んや此の兩衰老と成るに及んでは、壯年の失途は既に追ふことが出來ない、道を學ぶこと唯早からざるを恨むのみ、唯買田歸計の事は秋已に君と商議した、室を築き是の業も春時には落成するものと思ふ、回

思するに雪堂風雨の夜、君と已に對牀の聲を作せしことを、

【餘論】紀曰く、發端深警、又曰く、音節似香山桐花詩、但收斂謹嚴耳、王摩詰寄祖三詩、亦此格、而氣體各別と、

## 和黃魯直食筍次韻

黃魯直が筍を食ふに和す次韻

飽(一)食有殘肉。饑(二)食無餘菜。　飽食して殘肉あり、饑食して餘菜無し、

紛然生喜怒。似被狙(三)公賣。　紛然喜怒を生じ、狙公に賣らるるに似たり、

爾來誰獨覺(四)。凜凜白下宰(五)。　爾來誰か獨覺、凜凜たり白下の宰、

【自注】太和古白下。

一飯在家僧(六)。至樂甘不壞(七)。　一飯在家の僧、至樂不壞を甘しとす、

多生味蠹簡(八)。食筍乃餘債(九)。　多生蠹簡を味ふ、筍を食ふ乃ち餘債、

蕭然映樽俎(一〇)。未肯雜菘(一一)芥(一二)。　蕭然樽俎に映ず、未だ肯て菘芥を雜へず、

君看霜雪姿。童稚已耿介(一三)。　君看よ霜雪の姿、童稚已に耿介、

胡爲遭暴横。三嗅(一四)不忍嘬(一五)。　胡爲れぞ暴横に遭ふ、三嗅して嘬ふに忍びず、

朝來忽解籜(一六)。勢迫風雷噫。　朝來忽ち籜を解き、勢は風雷迫る噫、

尙可餉三閭(一七)。飯筒(一八)纏五采。　尙ふ三閭に餉して、飯筒五采を纏ふべし、

【字解】【一】飽食　「漢霍去病傳」に、旣還重車、餘棄粱肉、而士有飢者と、【二】饑食　「毛詩」に、權輿於我乎、夏屋渠渠、今也每食無餘と、【三】狙公賣　「莊子齊物論篇」に、狙公賦芧曰、朝三而暮四、衆狙皆怒、然則朝四而暮三、衆狙皆悅と、芧は橡子である、【四】獨覺　辟聞と緣覺と菩薩を三乘と謂ふ、其の緣覺は一名を獨覺と云ふ、自から飛花落葉を觀て、無常を悟り、一人の師をも求めざる人、【五】白下宰　王楙鄙曰く、按魯直是時、爲吉州太和縣宰、先是魯直、作食筍詩、寄先生、其序云、太和諸生穿於用韻、而先生次其韻と、太和は古白下と稱す、【六】在家僧　「名勝志」に、元豐四年、魯直令太和、嘗出東郊勸農、歸登快閣、稍臥、夜飯鮓魚、及覺猶者在口也、起散步行林中、見一老嫗哭墓下、前設飯鮓、試詢之、則曰、只有此女、死若干年矣、訊其月日、卽庭堅所生之辰、因自贊曰、似僧有髮、似俗無塵、非夢中夢、無身外身と、【七】不壞　「淮南子」に、孟孫至樂不壞と、【八】蠹簡　古書の義、【九】餘債　「楞嚴」に、償其宿債と、【一〇】樽俎　酒樽と肉俎、【一一】菘　タカナ、【一二】芥　カラシナ、辛菜、【一三】耿介　「楚辭」に、彼堯舜之耿介と、志操堅固にして庸俗と合せざるを言ふ、【一四】三嗅　論語の語、【一五】嘬　「孟子滕文公」に、蠅蚋姑嘬之と、一口に食ふ貌、【一六】解籜　籜は竹皮、筍の皮、【一七】三閭　屈原を以て公自から譬ふ、【一八】飯筒　荊楚の俗、五月五日に竹筒に飯を盛り、五采の絲を以て縛り以て水に投じ、屈原を弔ふのである、

【題義】黃山谷が筍を食ふの詩に次韻して作る、

【詩意】飽くまで食うて猶ほ貴き殘肉がある、飢ゑて食へば賤しき餘菜も無い、紛然或は喜色を爲し或は怒色を生じて、殆んど人間も狙と同じく狙公に弄賣せらるる感がある、爾來誰人か獨覺の悟りを開くやと言はば、それは凜凜たる白下の長宰たる君である、一日一飯其の生活は出家せざる僧であ

る、至樂は不壞を甘しとし、多生には蠹魚と爲つて簡冊を食うたのであらう、今筍を食ふは其の餘債を償却するのである、蕭然として樽俎に映じて、未だ聊かも菘芥を雜へない、君看玉へ竹の霜雪の姿を、童稚乃ち筍の時代より已に耿介である、胡爲れぞ人間の暴横に遭ふや、我は三嘆して喫ふに忍びない、考へて見れば朝來忽ち籜粉を解き、勢風雷に迫る氣がある、倘はくは一飯を三閭に餉りて、而して竹筒を五色の絲にて纏ひ玉ふがよい、

【餘論】紀曰く、忽然自寓、不粘不脫、信手無痕、而玲瓏四照と、韓退之の詠筍五排、白樂天の食筍五古各の一家の妙を極む、今公險韻を見ること穩韻と異ならず、山谷の原作は其の足下に在るを覺ゆ、

## 聞子由爲郡僚所捃恐當去官

子由が郡僚の捃する所と爲つて、恐らくは當に官を去るべしと聞く

(一)少學不爲身。宿志固有在。　少學身の爲めならず、宿志は固に在るあり、
雖然敢自必。用舍(三)置度外。　然りと雖も敢て自から必とせん、用舍度外に置く、
天初若相我。(二)發跡造宏大。　天初め我を相くる若く、發跡宏大を造す、
豈敢負所付。(四)捐軀欲投會。　豈敢て付する所に負かん、軀を捐てて投會せんと欲す、
寧知事(五)大繆。擧步得(六)狼狽。　寧ぞ知らん事大に繆まるを、擧步狼狽を得、
我已(七)無可言。(八)墮甑難追悔。　我已に言ふ可き無し、甑に墮して追悔し難し、
子雖僅自免。(九)雞肋安足賴。　子は僅かに自から免ると雖も、雞肋安んぞ賴むに足らん、
低回畏(一〇)罪罟。(一一)黽勉敢言退。　低回罪罟を畏る、黽勉敢て言に退く、
若人疑(一二)或使。爲子得微罪。　若し人或使を疑はば、子が爲めに微罪を得ん、
(一三)時哉歸去來。共抱東坡耒。　時なる哉歸去來、共に東坡の耒を抱かん、

【字解】【一】少學　柳子厚の詩、少時陳力希公侯、許國不復爲身謀と、【二】發跡　「司馬相如封禪文」に、公劉發跡於西戎と、【三】置度外　「後漢書隗囂傳」に、帝曰且當置此兩子於度外と、【四】捐軀　曹子建の詩、誰言捐軀易、殺身誠獨難と、【五】大繆　「莊子繕性篇」に、時命大繆と、【六】狼狽　「酉陽雜俎」に、或言狼狽是兩物、狽前足絕短、毎行常駕於狼腿上、狽失狼則不能動、故世言事乖者稱狼狽と、【七】無可言　「後漢裴步傳」に、負負無可言也と、【八】墮甑　「後漢郭太傳」に、孟敏客居太原、荷甑墮地、不顧而去、林宗見而問其意、對曰、甑已破矣、視之何益、林宗異之、因勸令游學、十年知名と、【九】雞肋　「晉書」に、劉伶嘗醉、與俗人相忤、其人攘袂奮拳而往、伶徐曰、雞肋不足以安尊拳、其人笑而止と、【一〇】畏罪罟　「毛詩」に、豈不懷歸、畏此罪罟と、【一一】黽勉　「毛詩」に、黽勉從事、不敢告勞と、【一二】或使　意義明白を缺く、【一三】時哉　「尚書」に、時哉弗可失と、

【題義】子由の意見が郡僚の捃摭即ちひろひとる所と爲り、子由は以て不平なるに由り辭職せんとするやに聞いて此を賦して子由を慰むるのである、

【詩意】少年より學に志したるは一身の爲めのみではない、宿志の確乎たる所は固より在ることあり、されど事を作す必ず吾が意見を是とするのではない、意見の通ると通らざるとは度外に置く、天は最初は我を相くるが若く、發端の跡は宏大を造すに至ると思はる、然らば我は天の付する所に負かない様に心を注ぐ、此の軀を捐てて會に投ずるの覺悟である、斯く考へたるは寧んぞ知らん事の大に謬まりであつたことを、一擧一歩皆狼狽するのである、されど我は已に何事も言はない、肩から墮した甑は已に壞れて揮り回り視るも詮はない、子は僅かに大事に至るを免れたるも、雞肋は舍つるも惜しくないもの何ぞ賴むに足らん、左低右回して罪罟を畏るるを知る、黽勉敢て言に勇退すべきである、若しや他人が子瞻も同類であると疑はば、子が爲めに甘んじて微罪を得るを辭しない、時なる哉歸去來を歌ひ、共に東坡に耒を把つて眺すであらう、

【餘論】當時の事情が明白ならざれば、古人も已に詩意を解するに苦しむ、余が解する所の詩意も大に繆まるものあらんと考ふ、明達の士の敎を乞ふ、紀は「捐レ軀欲二投會一」の五字を拙と評す、此の如き詩は全體が巧拙以外に在る、五字のみ拙と云ふは、評する者が拙である、

## 次二韻王鞏南遷初歸一二首　　王鞏の南遷初めて歸るに次韻す　二首

問君謫二南賓一野葛食幾尺。　問ふ君南賓に謫せられ、野葛食ふこと幾尺ぞ、

逢レ人瘴髮黄。入レ市胡眼碧。　人に逢へば瘴髮黄、市に入つて胡眼碧なり、

三年不レ易レ過。坐睨倚二天壁一。　三年過ぎ易からず、坐睨して天壁に倚る、

歸來貌如レ故。妙語仍破レ鏑。　歸來貌故の如く、妙語仍は鏑を破る、

那能廢二詩酒一。亦未レ妨二禪寂一。　那ぞ能く詩酒を廢せん、亦未だ禪寂を妨げず、

願爲二尙書郎一。還賜二上方舃一。　願はくは尙書郎と爲つて、還た上方の舃を賜へ、

【字解】【一】南賓　賓州は唐始めて置く、今の廣西の南寧道、【二】野葛　宋の朱翌の「猗覺寮雜記」に「嶺表錄異記」を引いて曰く、野葛俗呼爲二胡蔓一、蔓生如レ蘭、香光而厚、置生二菜中一毒レ人、用二羊血一解、羊食レ之肥大と、【三】髮黃　王梅谿曰く、嶺南人瘴癘所レ感、則鬢髮皆黃、其眼皆作二胡人碧色一と、【四】倚天壁　郁嶺を謂ふ、白樂天の詩、巨山靑倚レ天と、【五】如故　白樂天の詩、容顏盡怪長如レ故と、【六】破鏑　「世說」に、劉尹至二王長史許一、淸言旣去、長史曰、韶音令辭不レ如レ我、往輒破レ的勝レ我と、的を鏑とする意は同じ、【七】禪寂　「淨名經」に、維摩詰、以二善方便一、居耶離、一心禪寂、攝二諸亂意一と、【八】上方舃　後漢の王喬は朝する每に雙鳧が之に從ふ、一日羅を張り之を捕ふるに但一雙舃のみ、乃ち上方に詔して諦視するに、嘗に賜ふ所の舃にて尙書郎の用ふるもの、

【題義】王鞏が南賓に謫遷せられてより年を經て初めて歸り感を述べたる詩に次韻して作る、

【詩意】君に問ふ君は南賓に謫せられて、南賓に多く產する野葛を食ふこと凡そ幾尺であるぞ、其の國は逢ふ人每に瘴髮が黃である、市街往來の者の眼は皆碧である、他鄉から往きては三年の生活は過ぎ易しとは思はぬ、日日坐睨する天に聳ゆる山を、然るに君は歸來しても容貌は故の如くにして變らない、妙語も亦鏑を破るの元氣がある、其の元氣では那ぞ能く詩酒を廢せんや、亦時ありては禪寂に

入つて觀察することを妨げない、古の神仙の如く尙書郎と爲つて、上方より賜うた舃を返上して俗界を離れ去るの志を願ふのである、

〔二〕

江家舊池臺。修竹(一)圍一尺。　江家の舊池臺、修竹圍むこと一尺、
歸來萬事非。惟見秦淮(二)碧。　歸來萬事非なり、惟見る秦淮の碧なるを、
平生痛飮處。遺墨鴉棲壁(三)。　平生痛飮の處、遺墨鴉壁に棲む、
西來故父客(四)。金印(五)雜鳴鏑(六)。　西來故父の客、金印鳴鏑雜はる、
三槐(七)老更茂。花絮(八)春寂寂。　三槐老いて更に茂し、花絮春寂寂たり、
中微(九)未可料(一〇)。家廟(一一)藏赤舃(一二)。　中ごろ微未だ料るべからず、家廟は赤舃を藏す、

【字解】〔一〕修竹　劉禹錫の詩、靑松鬱成塢、修竹盈尺圍と、〔二〕秦淮　川の名、江蘇省溧水縣より出で、西北に流れて江寧城を貫き、大江に入る、秦始皇之を鑿つ、江總の詩、歸來唯見秦淮碧と、〔三〕鴉棲壁　盧仝示添丁詩に、聞來案上翻墨汁、塗抹詩書如老鴉と、〔四〕故父客　「漢吳王濞傳」に、周亞夫、問故父絳侯客と、「史記張耳傳」に、外黃富人女亡、其夫去抵父客と、〔五〕金印　「漢書百官表」に、金印紫綬と、〔六〕鳴鏑　「漢匈奴傳」に、冒頓迺作鳴鏑、習勒其騎射と、鏑はヤジリ、矢の稽古をする、〔七〕三槐　「周禮」に、面三槐三公位焉と、公の三槐堂銘に故兵部侍郎晉國王公、嘗手植三槐於庭曰、吾子孫必有爲三公者、已而魏國文正公、相眞宗、享國祿榮名者、十有八年、其子懿敏公、事仁宗、出入侍從將帥三十餘年、蓋其子也と、〔八〕花絮　徐彥伯、雪の詩、花絮落殘機と、〔九〕中微　「史記楚世家」に、其後中微、或在中國、或在蠻夷と、〔一〇〕未可料　闕南未可料と、〔一一〕家廟　「唐禮樂志」に、諸臣之享、其親廟室、服器之數、視其品、開元十二年著令、一品二品四廟、三品三廟、五品二廟、嫡士一廟、四品五品、有兼官亦三廟と、〔一二〕赤舃　「詩」に、王錫韓侯、玄袞赤舃と、

【詩意】江總が家の舊池臺は、修竹が圍むこと一尺である、歸來して見れば萬事非なるに、依然として同じきものは秦淮水の碧のみである、嘗て仕して平生痛飮の處、壁上には吾が書したる字が遺つてある、西來故父の客を見れば、金印を佩び鳴鏑を雜ふる者が在る、三槐は老木と爲りて葉は益す茂盛である、が花絮は飛んで春寂寂である、家も人も前後は盛んなるも中間は微なること未だ料り知るべからずと思ふ、併し乍ら家廟には赤舃を藏して名門であることは人が皆知る、

【餘論】後首の江家以下二十字を紀が評して曰く、用事欠親切、江令乃亡國之餘、非謫官也と、余も亦言ふ、江總は(江令とも稱す)梁陳隋の三朝に仕して、人品は論ずるに足らざる者、此の者を拉し來りて王粲の謫官歸來と同架に論ずるは、紀が後世の評を待たず、王粲が不滿足なりしならんと思ふ、諺に云ふ善泳する者は善溺すと、公が此の句は善溺せるものである、

孔毅父以詩戒飮酒問買田且乞墨竹次其韻

孔毅父、詩を以て飮酒を戒め、買田を問ひ、且墨竹を乞ふ、其の韻に次す

酒中眞復有何好。　酒中眞に復た何の好きかある、〔一〕

【字解】〔一〕孟生　「晉書」に、孟

（一）孟生雖賢未聞道。　孟生賢と雖も未だ道を聞かず、
醉時（二）萬慮一掃空。　醉ふ時萬慮一掃して空し、
醒後紛紛如宿草。　醒むる後紛紛として宿草の如し、
十年（三）揩洗見眞妄。　十年揩洗眞妄を見る、
（四）石女無兒焦穀槁。　石女兒無く焦穀槁る、
此身何異貯酒瓶。　此の身何ぞ異ならん貯酒の瓶に、
滿輒予人空自倒。　滿つれば輒ち人に予へ空しければ自から倒る、
武昌痛飮豈吾意。　武昌痛飮する豈吾が意ならん、
（五）性不違人遭客惱。　性人に違はず客に遭うて惱む、
君家長松十畝陰。　君が家の長松十畝の陰、
借我一菴聊洗心。　我に一菴を借して聊か洗心せん、
（六）我田方寸耕不盡。　我が田方寸耕し盡きず、
何用百頃（七）縻千金。　何ぞ用ひん百頃千金を縻するを、
枕書睡熟呼不起。　書を枕にし睡熟して呼べども起たず、
好學憐君工（八）雜擬。　好學憐む君が雜擬に工なるを、
且將墨竹換新詩。　且墨竹を將て新詩に換へん、
（九）潤色何須待東里。　潤色何ぞ須ひん東里を待つを、

【題義】　孔毅父が詩を作りて、公の飮酒を戒め、買田の事實を問ひ、且墨竹の揮毫を乞はる、其の返詩を作る、

【詩意】　酒中に眞に復た何の好きことあるや、と問うたら孟嘉は趣味を以て答へたるは賢は賢であるが未だ眞に聖人の道を聞いた人とは言へない、酒に醉ふ時は千思も萬慮も一掃して空しきも、醒めて後は千思萬慮が紛紛として宿草の如くに生ずる、過去十年間の事を揩洗して眞と妄とを見る、石女無兒にて焦穀槁の類、酒中の眞境は石女の如き人には解らない、考ふれば此の一身は渾て貯酒の瓶と同樣である、自からも飮み人にも予へ空しければ倒臥するのみ、武昌に於て痛飮せしことは吾が本意ではない、吾が性人に逆ふことを忌む、從つて客に逢へば飮んで惱む、孔君が家の長松は十畝を陰する底の大である、乞ふ我に其の一菴を借して洗心するを許可せよ、洗心する我が田地は心其の物にて僅に方寸であるが一生畊し盡きざるもの、亦別に何ぞ百頃の田を買うて千金を消費する必要あらん、書を枕にして熟睡して呼べども起たない、好學憐む君が雜擬に工なるを、君の乞ふが儘に我が墨竹を將て君が新詩と交換せんとする、詩成らば直ちに贈り玉へ、潤色を東里の子產などに求むるに及ばない、

---

【一】孟嘉好酣飮、愈多不亂、桓溫問嘉、酒有何好、而卿嗜之、嘉曰、公未得酒中趣耳と、【二】萬慮　韓退之の詩、數杯澆腸肺、皆醉、峨峨萬慮醒還新と、【三】揩洗　淨揩淸洗と成語して、洗ひ淸める、「北史」に、則防揩洗之僞」と、是は別意である、【四】石女　「淨名經」に、文殊室利、問維摩詰言、菩薩云何觀於衆生、維摩詰言、如焦穀芽、如石女兒」と、又「普燈錄」に、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌と、石女とは龜毛兎角と同じく、非有の譬である、【五】性不違人　晉の嵇康の詩、性不違物、頗致怨憎」と、【六】我田　丹田方寸である、【七】縻　縻爛、消費すること、【八】雜擬　施德初曰く、雜謂非一類、擬比古志、以明今情」と、【九】潤色　「論語憲問篇」に、行人子羽、修飾之、東里子產、潤色之」と、

【餘論】紀曰く、「隨事作レ答、自是倡和正格、而限ニ於韻脚一、收束處、未レ能ニ圓足一」と、宋人の詩は鉤章棘句は定評である、十年、石上の二句、新創は新創なるも棘句たるを免れない、天魔外道の類のみ、觀奕道人痛罵せざるは不思議である、

## 任師中挽詞

任師中挽詞

大(一)任剛烈世無レ有。　大任は剛烈世に有ること無し、
疾レ惡如レ風朱伯厚(二)。　惡を疾むこと風の如し朱伯厚、
小(三)任溫毅老更文。　小任は溫毅老いて更に文、
聰明慈愛小馮君(四)。　聰明慈愛小馮君、
兩任才行不レ須レ說。　兩任の才行說くを須ひず、
疇(五)昔竝友ニ吾先人一。　疇昔竝んで吾が先人に友たり、
相看半作ニ晨星(六)沒一。　相看るに半は晨星沒すると作る、
可レ憐太白配ニ殘月(七)一。　憐む可し太白殘月に配す、
大任先去冢未(八)レ乾。　大任先づ去つて冢未だ乾かず、
小任相繼呼不レ還。　小任相繼ぎ呼べども還らず、
強寄ニ一(九)樽生死別一。　強ひて寄す一樽生死の別れに、
樽中有レ淚酒(一〇)應レ酸。　樽中淚あり酒も應に酸なるべし、
貴(一一)賤賢愚同盡耳。　貴賤賢愚同盡のみ、
君今不レ盡緣ニ賢子(一二)一。　君今不盡なるは賢子に緣る、
人間得喪了無レ憑。　人間の得喪了に憑ること無し、
只有ニ天公終可レ倚一。　只天公の終に倚る可きあり、

【字解】〔一〕大任　師中の兄名は孜、字は遵聖、〔二〕朱伯厚　「後漢書陳蕃傳」に、「朱震字伯厚、爲ニ州從事一、奏ニ濟陰太守單匡一、諺曰、車如ニ雞棲一馬如レ狗、疾レ惡如レ風朱伯厚」と、〔三〕小任　師中名は伋、〔四〕小馮君　「前漢馮奉世傳」に、「子九人、野王爲ニ上郡太守一、立五原太守、徙ニ上郡一、治行略與ニ野王一相似、吏民嘉美、相代爲ニ太守一、歌レ之曰、大馮君小馮君、兄弟繼レ踵相因循、聰明賢知惠ニ吏民一、政如ニ魯衞一德化鈞、周公康叔猶ニ二君一」と、〔五〕疇昔　前日とか昨夕とか云ふの義、「左傳宣公二年」に、「疇昔之羊、子爲レ政」と、〔六〕晨星　張華の詩、「屢落晨星稀」と、〔七〕殘月　韓退之の詩、「東方未レ明大星沒、獨有ニ太白對ニ殘月一」と、〔八〕未乾　「駱賓王傳」に、「一抔之土未レ乾、六尺之孤安在」と、〔九〕一樽　李太白の詩、「一樽齊ニ生死一、萬事固難レ審」と、〔一〇〕酒應酸　白樂天の詩、「盃レ我和レ淚酒」と、「揚子法言」に、「日昃不レ飲レ酒酒必酸」と、〔一一〕貴賤　白樂天の詩、「賢愚貴賤同歸レ盡、北邙冢墓高嵯峨」と、〔一二〕賢子　師中の子、名は大防、字は仲微、

【詩意】兄の大任は性剛烈なること世に少い、惡を疾むこと風の如き朱伯厚に似て居る、弟の小任は性溫毅なるが老いては更に溫醇であつた、而かも聰明慈愛は今日の小馮君とも言ふべきである、君等兄弟の才行は詳說する必要がない、疇昔吾が先人が君等を友として游ぶのを見ても君等の人品は解かる、先人の友人は今日半は失して存在する者は晨星の如くである、太白が殘月に配する曉天の景色の如くでもある、兄の遵聖は先きに逝いて冢未だ乾かざるのであるに、弟の君も繼ぎて逝き呼ぶも復た還らない、強ひて一樽を寄せて生死の別を表せんとするも、樽中に淚點が落つれば酒味も酸味と爲る、思へば貴賤賢愚を問はず早晩皆同盡である、然るに君の任家の盡きざるは賢子が有るに緣る、人間の

得喪は了に遡ることが無い、只天公のみ有つて終に倚るべきである、

【餘論】紀曰く、亦是凡語と、凡語なるも東坡先生の百有餘字の弔詞を受ける任師中は死して餘榮あるものと思ふ、

## 子由作二頌頌石臺長老問公手寫蓮經字如黑蟻且誦萬遍脇不至席二十餘年予亦作二首

子由二頌を作り、石臺長老を頌す、問公蓮經を手寫し、字黑蟻の如く、且誦すること萬遍、脇、席に至らざること二十餘年、予も亦二首を作る

眼前擾擾黑蚍蜉。　眼前擾擾たる黑蚍蜉、

口角霏霏白唾珠。　口角霏霏として白く珠を唾す、

要識吾師無礙處。　吾師無礙の處を識らんと要せば、

試將燒却看瞋無。　試みに燒却を將て瞋無を看よ、

【字解】〔一〕蚍蜉　蟻の大なるもの、〔二〕白唾珠　「莊子秋水篇」に、子不見夫唾者乎、噴則大者如珠、小者如霧と、「後漢趙壹傳」に、咳唾自成珠と、〔三〕無礙處　「維摩經」に辨才無礙と、〔四〕瞋無　瞋は三毒の一、

【題義】子由が二頌を作りて石臺長老を頌讚す、問公は法華經を手寫して、其の字が黑蟻の如く、而して、誦經も亦萬遍、橫臥せざること二十年、公乃ち弟の此の頌に倣うて此の二首を作り、石臺を讚したのである、

【詩意】問公の書したる經字は眼前擾擾たる黑蚍蜉の如きである、其の蟻の口角は霏霏として白く珠を唾く狀を爲してある、世人が若し吾師問公の圓融無礙の境地を識らんと思ふ者は、問公が一切の瞋毒を燒却したる處を看るがよい、

〔二〕

眼睛心地兩虛圓。　眼睛も心地も兩ながら虛圓、

脇不沾牀二十年。　脇牀に沾はざること二十年、

誰信吾師非不睡。　誰か信せん吾師睡らざるにあらざるを、

睡蛇已死得安眠。　睡蛇已に死して安眠を得たり、

【字解】〔一〕脇不沾牀　「傳燈錄」に、西天脇尊者、未三嘗睡眠一其脇不至席、覺且四祖、道信大師、攝心無寐、脇不至席、僅六十年と、〔二〕睡蛇　睡眠煩惱に譬ふ、

【詩意】眼睛も心地も兩ながら虛圓である、脇が席に沾はざること二十年の永きに渉る、誰か信ずるや吾師の睡らざるにあらざることを、睡眠の煩惱毒たる蛇が已に死するに依つて反對に安眠を得たのである、

【餘論】紀曰く、二首大偈頌氣と、余案ず前首の結末試將の句は殆んど語を成して居らぬ、鈎棘は宋人の癖とは言へ、此は其の尤なるものである、

## 鄧忠臣母周氏挽詞

微生眞草木。無處謝天力。
慈顏如春風。不見桃李實。
古今抱此恨。有志俯仰失。
公子豈先知。戰戰常惜日。
吾君日月照。委曲到肝鬲。
哀哉人子心。吾何愛一邑。
家庭拜前後。粲然發笑色。
豈比黃壤下。焚瘞千金璧。
若人道德人。視此亦戲劇。
聊償曾閔意。遽與仙佛寂。
孤纍臥江渚。永望墳墓隔。
作詩相楚挽。感動淚再滴。

### 鄧忠臣が母周氏挽詞

微生眞に草木、天力を謝する處無し、
慈顏春風の如く、見ず桃李の實、
古今此の恨を抱く、有志俯仰失す、
公子豈先知ならんや、戰戰常に日を惜しむ、
吾が君日月照らす、委曲肝鬲に到る、
哀しい哉人の子の心、吾何ぞ一邑を愛せん、
家庭前後を拜す、粲然として笑色を發す、
豈比せん黃壤の下、焚瘞す千金の璧を、
若き人道德の人なり、此を視て亦戲劇、
聊か償ふ曾閔の意、遽かに仙佛と寂す、
孤纍江渚に臥す、永く墳墓の隔りを望む、
詩を作りて楚挽を相く、感動して淚再び滴る、

【字解】【一】天力　「漢書霍光傳」に、乃天力也と、【二】俯仰　陸士衡の詩、昔我秉介懷、俯仰愧今古と、【三】先知　知識が常人より較や先なること、「孟子萬章」に、使先知覺後知、使先覺覺後覺也と、【四】戰戰　「論語」に、戰戰兢兢と、恐懼戒謹の意、【五】日月照　「莊子天道篇」に、舜曰天德而出寧、日月照而四時行と、【六】肝鬲　肝鬲、心と脾との間が鬲である、【七】一邑　周氏は永嘉縣の太君に封ぜらる、一邑は即ち永嘉を指す、【八】前後　王梅谿曰く、「公羊傳文公十三年」に、周公何以稱太廟於魯、封魯公以爲周公也、周公拜於前、魯公拜於後と、【九】粲然　笑ふ形容、「穀梁傳昭公四年」に、軍人粲然皆笑と、【一〇】黃壤　黃土と同じ、樂天の詩、厚夜皆歎黃壤曉と、【一一】千金璧　「莊子山木篇」に、棄千金之璧、負赤子而趨と、【一二】若人　「論語」に、子謂子賤、君子哉若人と、「もし人」ではなく「かくのごとき人」である、【一三】戲劇　「五代史南唐李景傳」に、便議班旋、眞同戲劇と、【一四】曾閔　曾參と閔損、共に孝道に厚き人、元稹の詩、昔公孝父母、行與曾閔儔と、【一五】孤纍　罪あるも死せざるを孤纍と曰ふ、漢揚雄傳注に見ゆ、公自から謂ふ、【一六】相楚挽　「史記商君傳」に、童子不歌謠、舂者不相杵、此五羖大夫之德也と、相はキネウタ、舂くに杵を搗る時歌ふ、辛楚哭挽に擬へず、【一七】淚再滴　公は前年成國太夫人の喪に丁る、今年亦鄧母を哭する故に云ふ、

【題義】鄧忠臣字は眘思の母を挽む詞である、

【詩意】微微たる此の生は眞に草木の如くであるが、人と生れたるは天力を謝するに處は無い、母氏の慈顏は春風の如く溫なるも、惜しい哉桃李の實の大なるを見ずに逝く、古今共に此の恨を抱くもの多く、志あるも俯仰の間に失する、公子は先知の人ではない、唯戰戰として光陰を惜み勉强する、吾が太君たる母氏は日月の照臨する如くである、訓育する旨の委曲は肝膈に到り徹する、哀しい哉人の子の心、吾は一邑を愛するのみではない、家庭は甲邑乙邑と前後に拜して居る、粲然と笑顏の色を發する、豈比せんや黃土の下に、千金の重璧を焚瘞し去るには、若のごとき人は眞に道德の人である、此等の事を視ること戲劇と同樣である、聊か曾閔の孝意を以て償ふ、何ぞ料らん仙佛と歸寂する、余

や孤㷀の身を以て江渚に臥す、永く墳墓隔るを望む、今詩を作りて以て楚挽を歌ふを相く、感動して涙が再び滴るに禁へない、

【餘論】挽詞此に至りては鈎句棘語、人の死に於て己が才學を示す具に供するものの如くで、讀む者は感動しないと思ふ、公の挽詞は多く此の類、

## 徐君猷挽詞

（一）一舸南游遂不歸。　一舸南游して遂に歸らず、
清江（二）赤壁照人悲。　清江赤壁人の悲みを照らす、
請看（三）行路無從涕。　請ふ看よ行路從涕無く、
盡是當年（四）不忍欺。　盡く是れ當年欺くに忍びず、
雪後獨來（五）栽柳處。　雪後獨來して柳を栽うる處、
竹間行復采茶時。　竹間行くゆく復た茶を采る時、
山城散盡尊前客。　山城散じ盡くす尊前の客、
（六）舊恨新愁只自知。　舊恨新愁只自から知る、

【字解】【一】一舸　舸は船の大なるもの、【二】赤壁　山の名、湖北に三處ある、黃岡縣と嘉魚縣と武昌縣と、三國の戰爭は嘉魚縣で、公の游地は黃岡縣である、公は三國の戰地に誤る、【三】行路　王梅谿曰く、「禮記」に、孔子之衛遇舊館人之喪、入而哭之哀、出曰、予惡夫涕之無從也と、【四】不忍欺　「史記滑稽傳」に、子產治鄭、民不能欺、子賤治單父、民不忍欺と、【五】栽柳處　馮應榴曰く、先生醉蓬萊詞題云、謫居黃州、三見重九歲、與徐君猷會棲霞樓、今年公將去乞郡湖南、故作是詞、中云、搖落霜風、有手栽雙柳、此詩蓋紀實也と、【六】舊恨　李後主の詩、往愁新恨有誰知と、柳子厚の詩、徘徊只自知と、

【題義】徐君猷が黃州知事にて卒するを挽む詞、

【詩意】一舸に乘じて南游中遂に不歸の人と爲る、清江赤壁が人の悲む狀を照らす如くである、請ふ看よ行路の他人は涕に從ふもの無きも、徐君が當年州を治めし功は欺くことは出來ない、余は今憶ひ起す曾て雪後に來りて栽柳の處を、又竹間に行いて復た采花の時を、然るに今や山城散じ盡くす尊前の客、誰も其の時の樣を知る者はない、舊恨と新愁と幷せて只自から知るのみ、

【餘論】紀曰く、三四太拙と、之を周氏挽詞に比すれば稍や勝れたるかと思ふ、不歸、不忍の同字は例の疵である、

## 洗兒戲作

人皆養子望聰明。　人は皆子を養うて聰明を望む、
我被聰明誤一生。　我は聰明に一生を誤らる、
惟願（一）孩兒愚且魯。　惟願ふ孩兒愚且魯、
無災無難到公卿。　災無く難無く公卿に到るを、

【字解】【一】孩兒　一本生子に作る、生子の方が勝る、

【詩意】千人が千人皆其子の聰明なることを願望するが、我は聰明の爲めに一生を誤つたのである、願はくは生まれた子が愚にして且魯、而して何の災も無く何の難も無く公卿の位に到らんことを、

【餘論】紀曰く、此種詩、豈可入集と、聰明の者は縱令公卿に到るも災難を蒙る、又兕刃に斃るるもの多く、公卿にて一生無事なるもの大抵愚物である、余は云ふ公の集中眞實の詩であると、

## 和蔡景繁海州石室

蔡景繁の海州石室に和す

(一)芙蓉仙人舊游處。　芙蓉仙人舊游の處、
蒼藤翠壁初無路。　蒼藤翠壁初めは路無し、
戲將(二)桃核裹黃泥。　戲れに桃核を將て黃泥に裹み、
石間散擲如風雨。　石間に散擲して風雨の如し、
坐令空山作錦繡。　坐して空山をして錦繡と作らしむ、
倚天照海花無數。　天に倚り海を照らし花無數、
花間石室可容車。　花間の石室車を容るべし、
(三)流蘇寶蓋窺靈宇。　流蘇寶蓋靈宇を窺ふ、
何年(四)霹靂起神物。　何れの年か霹靂神物を起す、
玉棺飛出王喬墓。　玉棺飛び出づ王喬の墓、
當時醉臥動千日。　當時醉臥動もすれば千日、
至今石縫餘糟(五)酺。　今に至りて石縫糟酺を餘す、
仙人一去五十年。　仙人一たび去つて五十年、
花老室空誰作主。　花老い室空しくして誰か主と作る、
手植數松今(六)偃蓋。　手植の數松今偃蓋、
蒼髯白甲低(七)瓊戶。　蒼髯白甲瓊戶に低る、
我來取酒(八)酹先生。　我來り酒を取つて先生に酹ぐ、
(九)後車仍載胡琴女。　後車仍ほ載す胡琴の女、
(一〇)一聲冰鐵散巖谷。　一聲冰鐵巖谷散ず、
(一一)海爲瀾翻松爲舞。　海は瀾翻を爲し松は舞を爲す、
爾來心賞復何人。　爾來心賞復た何人ぞ、
持節中(一二)郎醉無伍。　節を持する中郎醉へば伍無し、

【字解】【一】芙蓉仙人　公が亡友石曼卿、【二】桃核　桃の實子、「歐陽修詩話」に、石曼卿、通判海州、以山嶺高峻、人路不通、了無花卉點綴映照、使人以泥裹桃核、爲彈拋擲於山嶺之上、一二歲間、花發滿山、爛如錦繡と、【三】流蘇寶蓋　貴人の車の裝飾を云ふ、又仙車の形容と見るも可い、【四】霹靂　電雷が急激に鳴る貌、「後漢王喬傳」に、吏人喬爲葉令、天降玉棺於堂前、吏人推排、終不搖動、喬曰、天帝獨召我耶、乃沐浴服其中、蓋便立覆、宿昔葬於城東、而土自成墳と、【五】糟酺　糟はニゴリサケ、酺はシタミザケ、旅鏡初曰く「博物志」昔劉元石、於中山酒家酤酒、酒家與千日酒、而忘言其節度、歸至家當醉、家人以爲死、權葬之、酒家計千日滿、往視之、開棺始醒と、【六】偃蓋　松の枝葉が横に廣く覆ふ貌、【七】瓊戶　玉にて飾りたる戶、宋之問の詩、畫堂瓊戶特相宜と、【八】酹　酒を地に沃ぎて神を祭る、【九】後車　「楚辭惜誓章」に、載玉女於後車と、【一〇】一聲　白樂天の詩、鐵擊珊瑚一兩曲、冰瀉玉盤千萬聲と、【一一】海爲瀾翻　「傳燈錄」に、乾闥婆王奏樂、須彌震動、大海騰波、迦葉起舞と、【一二】中郎　後漢の蔡邕は左中郎、以て景繁

獨臨斷岸呼日出。　獨り斷岸に臨んで日出を呼ぶ、

紅波(一三)碧巘相吞吐。　紅波碧巘相吞吐す、

徑尋我語覓餘聲。　徑ちに我語を尋ねて餘聲を覓む、

拄杖(一四)彭鏗叩銅鼓。　拄杖彭鏗として銅鼓を叩く、

長篇小字遠相寄。　長篇小字遠く相寄す、

一唱三歎神悽楚。　一唱三歎神悽楚、

江風海雨入(一五)牙頰。　江風海雨牙頰に入る、

似聽石室胡琴語。　聽くに似たり石室胡琴の語を、

我今老病不出門。　我今老病門を出でず、

海山巖洞知何許。　海山巖洞知る何許ぞ、

門外桃花自開落。　門外桃花自から開落、

牀頭酒甕生塵土。　牀頭の酒甕塵土を生ず、

前年開(一六)閤放柳枝。　前年閤を開きて柳枝を放ち、

今年洗心歸佛祖。　今年心を洗うて佛祖に歸す、

---

に譬ふ、景繁は淮南に漕使と爲つて來るに由る、【一三】碧巘　絶巘の碧色、【一四】彭鏗　彭は鼓聲の形容、鏗は銅聲の形容、【一五】入牙頰　王楙齋曰く、松陵詩集添漁具詩序云、江風海雨、櫛櫛生牙頰間、眞世外漁者之才也と、【一六】開閤　閤は閤門、白樂天、不能忘情吟序に、樂天既老又病風、乃錄家事、會經費、去長物、妓有樊素者、年二十餘、綽綽有歌舞態、善唱楊枝、人多以曲名名之、由是名聞洛下、籍在經費中、將放之、素懵然立且拜、婉孌有辭、辭畢泣下、予聞默不能對、且命反袂飮、素酒自飮一杯、快吟數十聲、因自哂題其篇、曰不能忘情吟と、【一七】俯仰　陸士衡の詩、俯仰悲今古と、【一八】東海　「神仙傳」に、麻姑謂王方平曰、接待以來、已見東海三爲桑田と、



夢中舊事時一笑。　夢中の舊事時に一笑、

坐覺俯(一七)仰成今古。　坐に覺ゆ俯仰今古と成る、

願君不用刻此詩。　願はくは君用ひざれ此詩を刻するを、

東(一八)海桑田眞旦暮。　東海桑田眞に旦暮、

【題意】 淮南轉運使たる蔡景繁が石室を歌ふ詩に和して作る、此の石室は石曼卿が曾て此の處に知府と爲つて功績があれば詩中多く曼卿が事を言うたのである、

【詩意】 芙蓉仙人が舊游の處を見れば、蒼藤が翠壁に垂れて初めは路が無い、是の故に仙人が戲れに桃核を黃泥に裹んで山上に抛げて見たれば、其の核が石間に風雨の如き勢にて飛んだ年を經てから、此の空山が桃花錦繡の壯觀と爲る、上は天に倚り下は海を照らして花無數である、而して其の花間の石室も今日は車を容るるの餘地がある、宛も神仙の境の流蘇寶蓋の靈宇を窺ふことが出來る、何れの年か知らず霹靂の響とともに神物を起したるかを、玉棺飛んで出でし王喬の墓は乃ち此處である、當時寸刻醉臥せしと思ふも動もすれば千日餘である、故に今に至るまで石縫に尚ほ當時の糟酺を餘すを見る、芙蓉仙人は一去してより已に五十年である、花は老い室は空しく誰か桃花石室の主人公と爲るや、仙人當時手植の數松も今は偃蓋の如くにして、蒼髯白甲が瓊戶に低れてある、我も來りて酒を取りて先生の靈に沃ぎ祭る、其の祭の助役として後車には胡琴を彈ずる女を載せて居る、一彈一聲冰

鐵の如く響き巖谷に散ずる、其の妙奇に感じて海水は瀾翻を爲し松葉は歌舞を爲す狀である、仙人以來之を心賞する者は復た何人である、それは持節の中郎である、中郎は醉うて伍なき人、伍する人無きも獨り斷岸に臨んで日出を呼び出す、日出づるが爲めに紅波と碧巘と相呑吐する、徑ちに我が語を我れ自から尋ねて何處まで達するやと餘聲を覓めて、拄杖して彭鏗と銅鼓を叩く、而して長篇が就り小字に書き遠く此の東坡に寄す、東坡此の詩を讀んで一唱三歎して神が悽楚と爲る、江風海雨が牙頰に入るの感が起る、又石室に胡琴の彈聲を聽くの感も起る、奈にせん我は老病の身にて門を出ない、海山巖洞其れ何許に在るやを知らない、門外の桃花は自から開落して、牀頭の酒甕は久しく飮まざるゆゑ塵土を生ずる、今年は清淨に洗心して清淨の佛祖に歸命する、夢中の舊事は萬事皆時に一笑に供するのみ、坐に自覺する年時は俯仰の間に直ちに今古と成ることを、君にも願ふが此の詩を石に刻し玉ふな、陸が忽ち海、海が忽ち陸と變化すること眞に旦暮である、

【餘論】此の篇に至りて、始めて東坡居士の本領を發揮する、紀曰く、情往興來處、有㆓宛轉關生之妙㆒、東坡得意之筆と、又、我來取㆑酒の四句を評して只四語而淋漓酣足と、又、徑尋㆓我語㆒より以下の句を評して前後縈拂、有㆓情致㆒、亦有㆓法度㆒、鉤心鬪角、觸手玲瓏と、曼卿は認㆑桃無㆓綠葉㆒、辨㆑杏有㆓青枝㆒の句を作りて公の爲め叱呵せられし人、今此の稱讚を得て、前恨は悉皆消滅するであらう、

## 橄欖

紛紛青子落㆓紅鹽㆒。(一)
正味森森苦且嚴。
待㆓得微甘回㆓齒頰㆒。(二)
已輸崖蜜十分甜。(三)

橄欖

紛紛たる青子紅鹽落つ、
正味森森苦且嚴なり、
微甘の齒頰を回らすを待ち得るも、
已に輸す崖蜜十分の甜さに、

【字解】【一】落紅鹽　王梅谿曰く、江南有㆓紅鹽橄欖㆒、樹高以㆓紅鹽㆒塗㆓其樹㆒、両子自落と、苕溪の「漁隱叢話」に曰く、余在㆓嶺南㆒七年、見㆓土人采㆓橄欖㆒、未㆔嘗以㆑鹽塗㆓樹身㆒、只以㆑梯采㆑之、或以㆑杖擊㆑之、東坡語、蓋自別出㆓小說㆒也と、【二】待得　王梅谿曰く、小說有㆓橄欖與㆑棗爭㆒、棗謂㆓橄欖㆒曰、待㆓得深回味㆒、我已甜了と、【三】崖蜜　朱墨の「猗覺寮雜記上」に、王立之詩話云、崖蜜櫻桃、出㆓金樓子㆒、坡宜正爲㆑蜜爾、言㆓餘甘㆒者、甘味有㆑餘、非㆓果中餘甘㆒也、立之見㆓餘甘㆒爲㆑果、遂以㆓崖蜜㆒爲㆓櫻桃㆒、杜詩云、充腸多㆓薯蕷㆒、崖蜜亦易㆑求、又云崖蜜松花白、皆蜜蜂之蜜也、然則崖蜜豈專是櫻桃、且櫻桃非㆓十分甜者㆒、又不㆓與㆓橄欖㆒同時㆒と、

【詩意】橄欖の青色の實が紛紛と紅鹽落ちる、其の正味は森森として苦く且つ嚴である、少しく甘味を增し齒頰に適するころを待ち得たり、已に其の時は崖蜜が十分甜き節なれば之が爲めに橄欖は輸ける、

【餘論】紀曰く、未㆑免㆓傖氣㆒と、席上卒爾の作、往往小說を粉本として賦することもある、傖氣を免れざるも當然である、

## 東坡　　東坡

雨洗東坡月色清。　雨は東坡を洗うて月色清し、
市人行盡野人行。　市人行き盡くして野人行く、
莫嫌犖确坡頭路。　嫌ふこと莫かれ犖确坡頭の路、
自愛鏗然曳杖聲。　自から愛す鏗然曳杖の聲、

【詩意】晩來一雨が東坡を洗ひ去つて月色正に淸し、其の時には市人は已に行き盡くして今は野人が行く、犖确たる坡頭の險路を嫌はないのは、杖を曳く聲の鏗然と音するを愛するが爲めである、

【餘論】紀曰く、風致不凡と、公の詩としては無難に屬する者、

【字解】【一】犖确　韓退之の詩、小石犖确行徑微と、山路瓦石の多くある貌、【二】曳杖　「禮記」に、孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門と、

## 生日王郞以詩見慶。次其韻幷寄茶二十一片

生日王郞詩を以て慶せらる、其の韻に次し、幷せて茶二十一片を寄す

折楊新曲萬人趨。　折楊の新曲萬人趨る、
獨和先生于蔿于。　獨り和す先生の于蔿于を、
但信櫝藏終自售。　但信ず櫝藏終に自から售るるを、
豈知盌脫本無橅。　豈知らんや盌脫本と橅無きを、
塲從氷叟來游宦。　塲りて氷叟に從ひ來りて游宦、
肯伴臞仙亦號儒。　肯て臞仙に伴はれ亦儒と號す、
棠棣竝爲天下士。　棠棣竝に天下の士と爲り、
芙蓉曾到海邊郛。　芙蓉曾て到る海邊の郛、
不嫌霧谷霾松柏。　嫌はず霧谷松柏を霾らすを、
終恐虹梁荷棟桴。　終に恐る虹梁棟桴を荷ふを、
高論無窮如鋸屑。　高論無窮にして鋸屑の如し、
小詩有味似連珠。　小詩味あり連珠に似たり、
感君生日遙稱壽。　感ず君が生日遙に壽を稱せらるるを、
祝我餘年老不枯。　祝す我が餘年老いて枯れざるを、
未辦報君青玉案。　未だ辦せず君に報ずる青玉案を、
建溪新餅截雲腴。　建溪新餅雲腴を截る、

【字解】【一】折楊　「莊子天地篇」に、大聲不入於俚耳、折楊皇荂、則嗑然而笑と、【二】于蔿于　「唐元德秀傳」に、玄宗、幸五鳳樓下、命三百里縣令刺史、各以聲樂集、河内太守、輦優伎數百、環錦光麗、魯山令元德秀、唯樂工數十人、聯袂歌于蔿于、于蔿于者、德秀所爲歌也、帝聞異之、嘆曰、賢人之言哉、河内人、其塗炭乎、乃黜河内太守、德秀益知名と、【三】櫝藏　「論語子罕篇」に、子貢曰、有美玉於斯、韞匵而藏諸、求善賈而沽諸、子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也と、櫝と匵と同じ、【四】盌脫　唐の張鷟が撰と號する「朝野僉載」に、武后時宮中謠曰、補闕連車載、拾遺平斗量、把推侍御史、盌脫校書郎と、「通鑑注」に、盌脫者盌之形模、言人如模脫盌杯、悄悄相似也と、則天が革命、舉人が考試を經ずして皆官を與ふ、其の事を云ふ、【五】塲　塲來の語多く、塲乾と用ふる例は少い、圭の字と意義同じ、詩の考槃に、庶子有塲は別の意義、【六】氷叟　「世說」に、衞玠妻父、樂廣有重名、議者以爲婦翁氷清、

女壻玉潤と、王郎は子由の女壻である、【七】游宦 「史記」に、韋元成、復自游宦、而起至丞相と、【八】臞仙 司馬相如、大人賦序に、形容甚臞、此非帝王之仙意也と、【九】棠棣 兄弟を謂ふ、王郎が兄の子高と、弟の子敏である、【一〇】芙蓉 荷花、査初白曰く、先生在湖州、有與王郎昆仲、遊城濠荷花詩、詩句卽指此事と、【一一】虹梁 「班固西都賦」に、抗應龍之虹梁、有棟桴而高驤と、梁はウツバリ、【一二】棟桴 ムネ、【一三】鋸屑 ノコギリクヅ、「晉書胡母輔之傳」に、王澄與人書曰、彥國吐佳言、如鋸木屑、霏霏不絕、誠爲後進領袖也と、【一四】連珠 文章の一體、明かに其の物を指さず、譬を借りて、以て其の本義を表はし、文字歷歷貫珠の如く、複て悅ぶべきもの、之を連珠と謂ふ、【一五】青玉案 漢の張衡四愁詩に、美人贈我錦繡段、何以報之青玉案と、【一六】建溪 閩江の北原、崇溪とも東溪とも云ふ、茶の產地、【一七】雲腴 名茶の名、

【題義】公の生日乃ち十二月十九日に子由の女壻なる王子立が生日を賀して贈らるる詩に次韻して作り、幷に茶二十一片を寄贈したるのである、

【詩意】折楊の新曲は萬人が趨きて聽く解り易いからである、先生が歌ふ于蔫于の歌は解り難いから和する者は唯一人である、但し信ずる美玉は平生深く藏して置くも其の價を知る者の爲めには售る、盌脫を混雜して同架に置かるる事は我は關知しない、汝は媒介の氷叟に從つて來りて宦途に游ぶの身となり、而かも肯て臞仙に伴はれて亦儒と號するを憚らない、汝等兄弟は竝んで天下の士である、我は記憶する曾て汝を伴うて芙蓉を海邊の郛に觀しことを、嫌はない霧谷が松柏を翳らすの陰氣なる狀態を、只終に恐るる虹梁が棟桴を荷ふの力あるや否やを、余は稱讚するが汝が高論は無窮なること鋸屑の如くなるを、又其の小詩は妙味ありて連珠の如く美であることを知る、感喜する君は余が生日を遙かに壽し、又我が餘年老いて身尙ほ枯れざるを祝せらる、余は君が厚志に報ゆるに青玉案を以てすることは未だ辦ずる力はない、只建溪の新餅と雲腴の截片を以て報の意を表する事とする、

【餘論】題に生日とあるも、生日の祝賀すべき事は一言も及ばない、後世生日を祝ふ者は此等の詩を作例とするが可い、棠棣竝爲天下士の句は用處大に過ぐと思ふ、不知天下士、猶作布衣看、范雎は秦の宰相である、「魯仲連傳」に、今日知先生爲天下之士、魯連や范雎には天下之士は當然であるが、王郎如何に大才なるも天下之士の字を以てするは、郡長も郡長も知事も皆天下の士である、東坡先生時に文字濫用の弊がある、後生は此等の事は倣うてはいかぬ、

## 柏石圖詩

柏石圖の詩

陳公弼家。藏柏石圖。其子慥季常傳寶之。東坡居士作詩。以爲之銘。

【訓讀】陳公弼の家、柏石の圖を藏す、其の子慥季常、傳へて之を寶とす、東坡居士詩を作り、以て之が銘と爲す、

(一)柏生兩石間。天命本如此。　柏は兩石の間に生ず、天命本と此の如し、
雖云生之艱。與石相終始。　生の艱を云ふと雖も、石と相終始す、
韓子俯仰人。但愛(三)平地美。　韓子俯仰の人、但愛す平地の美を、

土膏雜糞壤、成（四）壞幾何耳。　土膏糞壤を雜ふ、成壞幾何のみぞ、
君看此槎（五）牙、豈有可移理。　君看よ此の槎牙を、豈移す可き理あらん、
蒼龍轉玉（六）骨、黑虎抱金（七）梘。　蒼龍玉骨を轉り、黑虎金梘を抱く、
畫師亦可（八）人、使我毛髮起。　畫師亦可人なり、我をして毛髮起たしむ、
當年落（九）筆意、正欲識韓子。　當年落筆の意、正に韓子を識らんと欲す、

【字解】〔一〕柏生　韓退之の詩、柏生兩石間、百歲終不大と、〔二〕俯仰人　「莊子天運篇」に、不見夫桔槹者乎、引之則俯、舍之則仰、彼人之所引、非引人也、故俯仰而不得罪於人と、〔三〕平地美　韓退之の詩、柏移就平地、柏有傷根容、傷根柏不死、千丈不敢至と、〔四〕成壞　佛經に、成住壞空を四劫と云ふ、成は物の發達すること、壞は物の敗毀すること、字音「エ」で、クワイではない、〔五〕槎牙　木の枝が角だちて入りくむ貌、〔六〕玉骨　王維の詩、闌干玉骨齊と、〔七〕金梘　梘は車の下に在りて、輪を止むる木、「易」に、繫於金梘と、〔八〕可人　「三國志蜀費禕傳」に來敏曰、君信可人、必能辦賊と、〔九〕落筆　杜子美の詩、觀我落筆中書堂と、

【題義】陳希亮字は公弼と云ふ公と同鄉人の家に柏石圖を藏す、公弼の第四子慥季常が之を家寶として珍重する、乃ち此の詩を作りて其の銘と爲したのである、

【詩意】柏が兩石の間に生ずるが天命は自然にて本と此の如きである、柏は如何にも艱難なる狀であ る、而かも生長するも枯死するも石と相終始する、韓子は元來賢人にて世と俯仰する人でありながら 但偏短にも平地の美のみを愛する、土が膏肥なる上に糞壤を雜ふるの功を施すも、成長すると朽敗す ると幾何である、君看玉へ自然に任して置いて此の槎牙たる狀を、韓子は移せと言ふが僕は考ふ移す べき理なしと、其の狀や蒼龍玉骨を轉じ、黑虎が金梘を抱くに似て居る、畫師の名は知らないが亦 解意の人である、此の圖を看る我をして毛髮を起たしむる概がある、之を描くの當時、正に韓子を諷 りて反對に描きたるものと思はる、

【餘論】骨を描きて肉を描かざるもの、後世詩人も畫師も粉本として然るべきものと思ふ、

## 和秦太虛梅花

和秦太虛梅花　秦太虛が梅花を和す

西（一）湖處士骨應槁、只有此詩君（二）壓倒。　西湖處士骨應に槁るべし、只此の詩あり君壓倒す、
東坡先生心已灰、爲愛君詩被（三）花惱。　東坡先生心已に灰す、君が詩を愛する爲めに花に惱まさる、
多情立馬待黃昏、殘雪消遲月出早。　多情馬を立てて黃昏を待つ、殘雪消すること遲く月出づること早し、
江頭千樹春欲闇。　江頭千樹春闇からんと欲す、

【字解】〔一〕西湖處士　林逋字は君復、錢塘の人、廬を西湖の孤山に結んで、恬澹好古、榮利に趨らず、二十年、足城市を踏まず、自から西湖處士と號す、卒して和靖先生と諡す、梅花の詩、絕唱と稱せらる、〔二〕君壓倒　寶曆中、楊嗣復、宴諸生於新昌里第、元白俱在、賦詩、唯楊汝士詩、後成而最佳、元白歎服、汝士醉歸、語子弟曰、我今日壓倒

竹外一枝（四）斜更好。
孤山山下醉眠處。
點綴裙（五）腰紛不㆑掃。
萬里春隨㆓逐（六）客㆒來。
十年花送㆓佳人㆒老。
去年花開我已病。
今年對㆑花還草草。
不㆑知風雨捲（七）㆑春歸。
（八）收㆓拾餘香㆒還界（九）㆑昊。

竹外の一枝斜にして更に好し、
孤山山下醉眠の處、
點綴裙腰紛として掃はず、
萬里の春逐客に隨ひ來る、
十年花は佳人を送りて老ゆ、
去年花開き我已に病む、
今年花に對し還た草草、
知らず風雨の春を捲いて歸るを、
餘香を收拾して還た昊に界ふ、

界昊 「詩小雅之什」に、投㆓界有昊㆒と、

【題意】秦觀 字は太虛、一の字は少游、揚州の人、其の詩歐陽修や公の稱する所と爲つて、名を天下に揚ぐ、建溪梅花を參寥と同賦して公に示さる、公は其の詩に次韻したるもの、詩に云ふ、海陵參軍不㆓枯槁㆒、醉憶梅花愁絕倒、爲憐一樹傍㆓寒溪㆒、花水多情自相惱、清淚班班知㆑有㆑恨、恨春相逢苦㆑不㆑早、甘心結㆑子待㆓君來㆒、洗雨梳風爲㆑誰好、誰云廣平心似㆑鐵、不㆑惜珠璣與㆓揮掃㆒、月沒參橫畫角哀、

元白㆒と、【三】被花惱 杜子美の詩、江上被㆓花惱㆒不㆑徹、無㆑處㆓告訴㆒只顚狂と、【四】一枝 林逋の詩、屋簷斜入一枝低と、【五】裙腰 白樂天の詩、誰開湖寺西南路、草綠裙腰一道斜、注云、孤山寺、在㆓湖洲中㆒、草綠時望如㆓裙腰㆒と、【六】遷客 「史記」に、秦大索㆑逐㆑客、又止㆓逐客令㆒、又「李斯傳」に、宗室大臣請㆓一切逐㆑客、斯亦在㆓逐中㆒と、【七】捲春歸 歐陽修の詩、落絮風卷盡、春歸不㆑留㆑迹と、【八】收拾 「漢書光武紀」に、不㆑能㆓收拾㆒と、【九】



暗香銷盡令㆓人老㆒、天分四時不㆓相貸㆒、孤芳轉盼同㆓衰草㆒、要須㆓健步遠移歸㆒、亂㆓插繁華㆒向㆓晴昊㆒、

【詩意】梅を詠じて絕唱なる西湖處士の骨は已に枯槁したであらう、今梅を歌ふ君が此の詩は處士の詩を壓倒する妙がある、東坡先生は心已に死灰同然であるが、君が詩を讀んで今や花に惱まさるるの想を爲す、乃ち多情にも馬を立て黃昏の時を待つ、殘雪は消すること遲きも月の出づるは早い、江頭の千樹は春も將に闌澹たらんと欲する景色である、竹外に橫はる一枝は斜にして更に好感を與ふ、西湖の孤山山下に醉眠する處、裙腰を點綴せる如くにして紛として掃はざる趣がある、萬里の春風は私無ければ逐客の我に隨つて來る、而かも十年の花は佳人を送りて老ゆ、去年梅花開きし時我は臥病の人であつた、今年は幸に健在で花に對したるが還た草草である、知らず風雨の春を捲いて歸りしを、今餘香を收拾して還た昊天に界へしむるのである、

【餘論】紀曉嵐、江頭千樹の二句を評して曰く、實是名句、謂在㆓和靖暗香疎影一聯上㆒、固無㆓媿色㆒と、又結末を評して悲壯似㆓高適岑參口吻㆒と、「詩人玉屑」に云ふ、竹外一枝斜更好、語雖㆓平易㆒、頗得㆓梅之幽獨閒靜之處㆒と、後世の詩家、「竹外一枝梅」を以て詩題とするに至る、畢竟警句や妙語は五字六字の間に含蓄の味を見るにある、

## 再和㆓潛師㆒

再び潛師に和す

化工未㆑議㆑蘇㆓羣槁㆒。

化工未だ羣槁を蘇へすを議せず、

【字解】【一】傾倒 杜子美の詩

先向寒梅一傾倒。（一）
先づ寒梅に向つて一に傾倒す、

江南無雪春瘴生。
江南雪無く春瘴生ず、

爲散冰花除熱惱。（二）
爲めに冰花を散じ熱惱を除く、

（三）風清月落無人見。
風淸く月落ち人の見る無く、

洗妝自趁霜鐘早。（四）
洗妝して自から趁ふ霜鐘の早きを、

惟有飛來雙白鷺。（五）
惟飛來の雙白鷺あり、

（六）玉羽瓊枝（七）鬪清好。
玉羽瓊枝淸好を鬪はす、

（八）吳山道人心似水。（九）
吳山の道人心水に似たり、

眼淨塵空無可掃。
眼淨く塵空しくして掃ふべき無し、

故將妙語寄多情。
故に妙語を將て多情を寄す、

橫機欲試東坡老。
橫機試みんと欲す東坡老、

東坡習氣（一〇）除未盡。
東坡習氣除くも未だ盡きず、

時復長篇書小草。
時に復た長篇小草を書す、

且撼長條（一一）餐落英。（一二）
且長條を撼かして落英を餐するを、

志士懷感傷、心骨已傾倒と、心を傾けて感歎すること、【二】除熱惱 熱惱は普通に言へば焦慮の義、佛語で之を煩惱又は熱惱と曰ふ、【三】風淸 皮日休、白蓮の詩、無情有恨何人見、月墮風淸欲曉時と、【四】霜鐘 施德初曰く、「龍城錄」に、隋開皇中、趙師雄、遷羅浮、一日薄於松林中、見一女靚妝出迎、因與之叩酒家門相與飲、頃之醉寢、師雄亦懵然久之、東方已白、起視乃在大梅樹下、上有翠羽啾嘈相顧、月落參橫、但惆悵而已、獨注云、宋武帝宮人、早朝聞景陽樓鐘聲と、杜子美の詩、金吼霜鐘徹と、【五】飛來 杜子美の詩、飛來雙白鷺、過去杳難攀と、【六】玉羽 鮑照の舞鶴賦に、振玉羽而臨霞と、【七】瓊枝 「楚辭」に、折瓊枝以爲羞兮と、【八】吳山 杭州城中に在り、仁宗



忍飢未擬窮呼昊。
飢を忍び未だ擬せず窮して昊を呼ぶを、

の詩、地有吳山美、東南第一州と、【九】心似水 「漢書」に、鄭崇曰、臣門如市、臣心如水と、【一〇】習氣 「述記」に、言習氣者、是現行氣分、熏習所成、故名習氣と、既に惡の現行を伏し、且つ惡の種子を斷ずるも、尙ほ惡の氣分ありて、時に惡相を現ずるを習氣と云ふ、【一一】長條 杜子美の詩、狂風挽斷最長條と、【一二】落英 「楚辭」に、夕餐秋菊之落英と、

【題義】 潛師は名は道潛、參寥子と號す、錢塘の人、哲宗の朝に妙總大師と號を賜ふ、公の門客と爲つて諸詩客と交はる、石門の學は無きも、詩は淸妙讀むべきもの多し、臨平道中や、江上秋夜や東園や令歌舞者等の七絕は人口に膾炙するもの、但此の梅花詩は「宋詩鈔」中載せざるが爲め今は其の原作を擧ぐる能はざるは遺憾である、

【詩意】 造化の神工は未だ寒梅を蘇活することを許議しない、先づ第一に寒梅に向つて敬意を表する、江南の地雪が無く春瘴生ずるに至る、爲めに氷の如き梅花を散發して熱惱や瘴氣を除滅する、而して風淸く月落つるの曉景は人の見る者がない、羅浮の花神は洗妝して自から霜鐘の早きを趁うて發く、時に何處よりか飛來する雙白鷺あり、鷺の玉羽と花の瓊枝とが淸好を鬪はすのを見る、吳山道人たる潛師は心澄んで水に似てゐる、法眼は淨く俗塵は空しければ別に塵の掃ふべきは無い、是の故に妙語を將て多情を我に寄せたのである、縱橫の機氣は畢竟此の東坡を試驗するのであらう、然るに此の東坡は人間としての習氣は多少は除きたる考へなれども全盡とは言へない、時には復た長篇を作り小草を以て書く娑婆氣がある、且つ長條を撼かして其の落英を餐ふ、飢を忍んで昊天に呼ぶ如き古人の窮

には擬しないつもりである、

【餘論】紀曉嵐は起句を評して曰く、先著ニ四語一入ニ參寥一、便覺レ有レ情と、參寥は熱惱を除き、東坡は習氣未だ除かずと對照する所、人を知つて法を說く者、

海棠　　海棠

東風（一）渺渺泛ニ崇光一。　東風渺渺崇光泛ぶ、
香霧（二）空濛月轉レ廊。　香霧空濛月廊に轉す、
只恐夜深花睡去（三）。　只恐る夜深うして花睡り去るを、
高燒ニ銀燭（四）一照ニ紅妝一。　高く銀燭を燒いて紅妝を照らす、

【字解】【一】渺渺　一本燎燎に作り、一本嫋嫋に作る、孰れが公の眞なるや、樂天の詩、青雲高渺渺と、渺渺は廣くして涯なき貌、【二】香霧　杜子美の詩、香霧雲鬟濕と、【三】花睡去　「明皇雜錄」に、上皇曰、海棠睡未レ足耳と、【四】銀燭　李義山の詩、更持ニ紅燭一賞ニ殘花一と、

【詩意】東風が渺渺と吹いて花の崇光を泛ぶ、香霧は濛濛と滿ちて月色は廊に轉ずる、只恐る夜深ければ花が睡り去ることを、是の故に高く銀燭を燒きて其の紅妝を照らし花の睡らざる樣にする、

【餘論】秋日牡丹の詩が「烏臺詩案」に入つて、此の詩が入らざるは不思議であると思ふ、或は此の詩は後れて作れるものか、查初白云ふ、此詩極爲ニ俗客所一レ賞、然非ニ先生老境一と、陸放翁の句、常恐夜寒花索寞、錦茵銀燭按ニ涼州一と、我が津阪東陽は放詩坡詩に勝ると爲し、齋藤拙堂は坡詩放詩に勝ると爲す、余も亦坡詩を以て優と爲すものである、

次ニ韻曹九章見一レ贈　　曹九章の贈らるるに次韻す

蘧瑗（一）知レ非（二）我所レ師。　蘧瑗非を知る我が師とする所、
流年已似ニ手中蓍（三）一。　流年已に手中の蓍に似たり、
正平（四）獨肯從ニ文擧（五）一。　正平獨り肯て文擧に從ひ、
中散（六）何曾靳ニ孝尼（七）一。　中散何ぞ曾て孝尼に靳しまん、
賣レ劍（八）買レ牛眞欲レ老。　劍を賣つて牛を買ふ眞に老いんと欲す、
得レ錢（九）沽レ酒更無レ疑。　錢を得て酒を沽ふ更に疑ひなし、
雞豚（一〇）異日爲ニ同社一。　雞豚異日同社たらば、
應レ有ニ千篇唱和詩一。　應に有るべし千篇唱和の詩、

【字解】【一】蘧瑗　「論語憲問篇」に、蘧伯玉、使ニ人於ニ孔子一、孔子與レ之坐而問焉と、伯玉は衞の大夫、名は瑗、【二】知非　「淮南子」に、蘧伯玉、年五十、而知ニ四十九年非一と、【三】手中蓍　施德初曰く、周易大衍之數五十、其用四十九、接世之明ニ易占一者、以ニ蓍四十九一、揲レ之而成レ象と、蓍とは五十本の竹の棒である、【四】正平　後漢の禰衡、字は正平、【五】文擧　北海の孔融、字は文擧、【六】中散　晉の嵇康は魏に仕へて中散大夫と爲る、【七】孝尼　「嵇康傳」に、將レ刑ニ東市一、顧ニ視日影一、索レ琴彈レ之曰、昔袁孝尼、嘗從レ吾學ニ廣陵散一、吾每靳ニ固之一、廣陵散、於レ今絕矣と、祕曲を吝みて眞髓を敎へざるを靳固と云ふ、【八】賣劍　「漢書」に、龔遂爲ニ渤海太守一、民有ニ帶ニ持刀劍一者上、使ニ賣レ劍

買レ牛、賣レ刀買レ犢と、【九】得錢　杜子美の詩、醉時歌、得レ錢卽相覓、沽レ酒不二復疑一と、【一〇】雞豚　韓退之の詩、願從二同社人一、雞豚燕二春秋一と、

【題意】曹九章名は煥、子由の壻である、是の人の贈る所に次韻して作る、

【詩意】蘧伯玉が五十にして四十九年の非なるを知つたことは我も師として居る、年華流れて四十九過ぎることは宛も手中の蓍の如く容易である、汝は今日の正平であるが我は今日の孔文擧である、乃ち汝は我に從つて肯て學ぶ、我は今日の中散で汝は今日の孝尼の如くである、我は汝に敎ふることは吝でない、我は劍を賣つて牛を買ひ畊田に老いんと欲する志望がある、而かも錢を得れば酒を沽うて鄕黨と與に樂むことは眞實にて疑ふものはない、雞豚を烹て異日に同社の人と爲るときは、應に千篇も唱和詩あるものと思ふ、

【餘論】紀曰く、屢用二此事一、實不二親切一と、多作の結果、集中同事を處處に見るは、已むを得ざることならんが、詩に言ふ所、徒らに文字を使用するのみにて、其の眞意にはあらずやと思はるるものがある、曉嵐の評語は、余も然りと思ふのである、

## 上巳日與二二三子一攜レ酒出遊。隨二所見一輒作二數句一。明日集レ之爲レ詩。故辭無二倫次一

上巳の日二三子と酒を攜へて出遊、所見に隨つて輒ち數句を作り、明日之を集めて詩と爲す、故に辭に倫次無し、

薄雲霏霏不レ成レ雨。　薄雲霏霏雨とならす、
（一）杖藜曉入千花塢。　杖藜曉入る千花の塢に、
（二）柯邱海棠吾有レ詩。　柯邱の海棠吾詩あり、
獨笑深林誰（三）敢侮。　獨笑深林誰か敢て侮らん、
（四）三杯卯酒人徑醉。　三杯の卯酒人徑に醉ふ、
一枕春眠日亭午。　一枕の春眠日亭午、
（五）竹間老人不レ讀レ書。　竹間の老人書を讀ます、
留レ我閉レ門誰敎レ汝。　我を留めて門を閉ぢ誰か汝に敎ふる、
出レ簷（六）槀枳十圍大。　簷を出づる槀枳十圍大、
寫二眞素壁一千蛟舞。　眞を素壁に寫し千蛟舞ふ、
東坡作レ塘今幾尺。　東坡塘を作る今幾尺ぞ、
攜レ酒一勞農工苦。　酒を攜へて一たび勞す農工の苦を、

【字解】【一】杖藜　杜子美の詩、杖藜徐步立二芳洲一と、【二】柯邱　王梅谿曰く、柯山四望、直南高邱、故亦名二柯邱一、東西岡、海棠一株甚茂と、【三】誰敢侮　「孟子公孫丑」に、今此下民、或二敢侮一レ予と、【四】三杯　韓退之の詩、三杯取レ醉不二復論一、一生長恨奈何許と、【五】竹間　「晉王徽之傳」に、吳中士大夫家有レ竹、欲レ觀レ之便出、造二竹下一、嘯詠良久、主人掃灑請レ坐、徽之不レ顧、將レ出、主人閉レ門、徽之賞レ之、盡レ懽而去と、【六】槀枳　槀は藁と同じ、枳はカラタチ、【七】䳄鴂　和名ゴキサヤ、アヲサギ、鷺の一種、【八】韓家圃　東門外に在り、【九】轆轤　盧仝の詩、轆轤無レ繩井百尺と、

卻尋流水出東門。　卻つて流水を尋ねて東門を出づ、
壞垣古塹花無主。　壞垣古塹花主無し、
臥開桃李爲誰妍。　臥して開く桃李誰が爲めに妍なる、
對立(七)鵁鶄相媚嫵。　對立する鵁鶄相媚嫵す、
開尊藉草勸行路。　尊を開き草を藉いて行路を勸む、
不惜春衫汚泥土。　惜まず春衫泥土に汚るるを、
褰裳共過春草亭。　裳を褰げて共に過ぐ春草亭、
扣門卻入(八)韓家圃。　門を扣き卻つて入る韓家の圃、
(九)轆轤繩斷井深碧。　轆轤繩斷えて井深碧、
(一〇)秋千挂索人何所。　秋千挂索人は何れの所ぞ、
映簾空復小桃枝。　簾に映じて空しく復た小桃枝、
(一一)乞漿不見(一二)應門女。　漿を乞うて見ず應門の女、
南上古臺臨斷岸。　南のかた古臺に上りて斷岸に臨めば、
雪陣翻空迷俯仰。　雪陣空に翻つて俯仰に迷ふ、

---

【一〇】秋千　鞦韆に同じ、俗に言ふブランコ、【一一】乞漿「裴硎傳奇」に、長慶間、裴航、僦舟襄漢、同舟有樊夫人者、國色也、航以詩及珍果獻、夫人以詩答曰、一飲瓊漿百感生、元霜搗盡見雲英、藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上玉京、後航歸經藍橋驛、因渴乞漿、忻茅舍老嫗、嫗喝曰、雲英擎一甌漿來、郎君要飲、航異之、又憶夫人雲英之句、俄於葦箔下、出雙手、捧瓷飲之、眞玉液也、航謂嫗曰、願納厚禮娶之可乎、嫗乃使求玉杵臼、航求得、以女妻之、遂入玉峯洞中、超爲上仙、與裴同舟、即其婦也と、【一二】應門　杜子美の詩、驅藥能無婦、應門幸有兒と、【一三】餞我　查初白曰く、「木集雜記」に、步出城東、入何氏韓氏竹門、逢覆酒竹陰下、有劉唐年主簿者、餞袖

故人(一三)餽我玉葉羹。　故人我に餽る玉葉羹、
火冷煙消誰爲煮。　火冷かに煙消え誰か爲めに煮る、
崎嶇(一四)東縕下荒徑。　崎嶇東縕して荒徑を下る、
(一五)婭姹隔花聞好語。　婭姹花を隔てて好語を聞く、
更隨落影盡餘尊。　更に落影に隨つて餘尊を盡くす、
卻傍孤城得僧宇。　卻つて孤城に傍うて僧宇を得、
主人勸我(一六)洗足眠。　主人我に勸む洗足して眠るを、
倒牀不必聞(一七)鐘鼓。　倒牀必ずしも鐘鼓を聞かず、
明朝門外泥(一八)一尺。　明朝門外泥一尺、
始悟三更雨如許。　始めて悟る三更雨許の如きを、
平生所向無(一九)一遂。　平生向ふ所一遂無し、
茲游何事天不阻。　茲の游何事ぞ天阻まざる、
固知我友不終窮。　固に知る我が友終に窮せず、
(二〇)豈弟君子神所予。　豈弟の君子神の予ふる所、

---

煎餅餌、其名爲甚酥、味極美と、【一四】東縕「漢書蒯通傳」に、里婦夜亡肉、姑逐之、里母東縕請火於亡肉家、曰、昨夜犬得肉相殺、請火治之、亡肉家遽追呼其婦、注縕亂麻也と、【一五】婭姹　婭は兩壻相呼ぶの稱、己の妻の姉妹の夫、姹は弱年の女、又美くしき女、【一六】洗足眠「吳志呂蒙傳」に、上岸擊賊、洗足入船と、【一七】鐘鼓　杜子美の詩、睡美不聞鐘鼓傳と、【一八】泥一尺　白樂天の詩、雨晴三秋日、泥深一尺時と、【一九】無一遂「司馬遷傳」に、所以自惟、四者無一遂と、【二〇】豈弟　詩小雅に、豈弟君子、神所勞矣と、樂易の貌、愷悌と同じ、

【題義】三月三日、二三の諸生と酒を攜へて出游し、途上に於て見る所を歌うて句を得たるも一詩とならず、其の翌日之を纏めて一詩と爲す、是の故に辭に次第順序が無いと辨じて置く、

【詩意】薄雲が霏霏たるも未だ雨は降らない、杖藜を引いて曉天に千花の集る塢堤に入る、柯邱の海棠は曾て觀賞して已に詩がある、深林にて獨笑するは興が發する故である誰か敢て侮るものぞ、三杯の卯酒にて人は徑に醉ふ、醉へば枕を求めて眠に入る、覺むれば日は亭午である、竹間の老人は何者であるか書を讀まない、我を留めて門を閉ぢ去らしめざるは誰か汝に此の事を敎ふるや、簷を出づるの叢枳は十圍もある大木である、其の圖を壁に寫せば陰は千蛟の舞ふ狀である、東坡先生塘を作る今幾尺であるや、時に酒を攜へて塘を作る農人や工人の苦勞を慰める、却つて流水を尋ねんと思うて東門を出て去る、忽ち認む壞垣と古塹の側に花開きて主なきを、下に臥して開くの桃李は誰の爲めに妍であるや、之に鴳鵠が相對立する樣はいかにも媚嫵の態がある、酒尊を開き草の上に坐して行路を勸助する、惜まない春衫が泥土に汚るるを、裳を褰げて共に春草亭を過ぎ、門を扣きて却つて韓家の園に入つて看る、轆轤の繩は切斷してある井中は深碧である、秋韆は索を挂けて游戲の用を爲すが人は何所に在るや、去年見る所の花の如き女は無く、簾に映ずるものは空しく復た小桃枝のみ、漿を乞ふも返事をする女の聲はしない、去つて南の方角の古臺に上りて斷岸を下瞰すれば、雪陣が空に翻翻と飛んで俯仰に迷ふ、故人は我に玉葉羹を餽らるるも、火は冷かに煙は消して煮る術が無い、崎嶇たる路に此の爨を東縕して荒徑を下ることにする、忽ち姹姹が花を隔て喃喃の好語が聞える、我は更に落日ならんとする景に於て殘酒を飮み盡くす、此れより去つて孤城に傍うて一僧字を認む、主人の和尚は我に足を洗うて眠休し玉へと勸む、乃ち倒床するも必ずしも鐘鼓を聞くに及ばない、明朝は定んで門外泥一尺、之を見て始めて昨夜は雨の多量であつたことを悟るのである、平生向ふ所乃ち志す所は一も遂げたものはない、茲の游のみは何事ぞや天も阻害しないのは、固に知る我友は情が終窮せず、豈弟の君子は神の予ふる所であつたに由る、

【餘論】紀曰く、此永叔所謂、一林亂石、天然位置者也、其法始自元白、而筆力則非元白所及と、查初白曰く、得平生二語、全篇方有收來と、公自から道ふ辭無倫次と、倫次無き中に、往復曲折の味がある、大家の本領、小家の夢想せざる所である、

## 劉監倉家。煎米粉作餅子。余云爲甚酥。潘邠老家。造逡巡酒。余飮之云。莫作醋錯著水來否。後數日。攜家飮郊外。因作小詩。戲劉公求之

劉監倉の家、米粉を煎て餅子を作る、余云ふ甚酥爲り、潘邠老の家、逡巡酒を造る、余之を飮みて云ふ、醋錯水に著け來るを作す莫きや否や、後數日、家を攜へて郊外に飮む、因つて小詩を作り、劉公に戲れ之を求む

野飮花間百物無。　野飮して花間に百物無し、
杖頭惟挂一葫蘆。　杖頭惟挂く一葫蘆、
已傾潘子錯著水。　已に傾く潘子の錯著水、
更覓君家爲甚酥。　更に覓む君が家の爲甚酥、

【餘論】字解も詩意も讀んで字の如く解して可い、一時突嗟の作、詩としての味は無い、紀曰く、此亦後人炫博捃拾、轉爲二古人之累一者と、

## 和二參寥一　參寥に和す

芥（一）舟只合レ在二坳（二）堂一。　芥舟只合に坳堂に在るべし、
紙帳心期老孟（三）光。　紙帳心は期す老孟光、
不レ道山人今忽去。　道はず山人今忽ち去ると、
曉狙（四）啼處月茫茫。　曉狙啼く處月茫茫、

【字解】〔一〕芥舟「莊子逍遙遊篇」に、覆二杯水於坳堂之上一、則芥爲二之舟一、置レ杯焉、則膠、水淺而舟大也と、芥は塵芥である、〔二〕坳堂 床の窪みたる處、〔三〕孟光「後漢書」に、梁鴻妻孟光、鴻至レ吳、依二大家皐伯通一、居二廡下一、爲レ人賃舂、每レ歸妻爲具レ食、不三敢於二鴻前一仰視二、擧レ案齊レ眉と、〔四〕狙 猨の俗字、ヒサナガザルである、

【題意】參寥が示されたる詩に和して作る、案ずるに參寥が公の家に宿し明日辭して去る其の旨を說きしものかと、

【詩意】芥舟は只合に坳堂に在るべし、我と酒盃を對酌するがよい、紙帳は疎末であるが我が老婦は慇懃に懽待する積りで居る、道はず山人が今忽ち辭し去ると、曉猨の啼く處は月茫茫の景色である、

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部六十

309
65

峡入

始

吉田待郎氏 寄贈本

# 續國譯漢文大成

文學部第六十册（第十五帙の四）

## 蘇東坡詩集 三の四

309
65

# 蘇東坡詩集 卷二十三

## 古今體詩　四十四首

### 別黃州

黃州に別る

病(一)瘡老馬不任鞿(二)。
猶向君王得敝(三)幃。
桑(四)下豈無三宿戀。
樽(五)前聊與一身歸。
長腰尙載撐(六)腸米。
闊領先裁蓋癭(七)衣。
投老江湖終不失。
來時莫遣故人非。

病瘡の老馬鞿に任へず、
猶ほ君王に向つて敝幃を得、
桑下豈三宿の戀なからん、
樽前聊か一身と歸る、
長腰尙ほ載す撐腸の米、
闊領先づ裁す蓋癭の衣、
老を投ずるの江湖終に失せず、
來時故人の非を遣ること莫し、

【字解】【一】病瘡　杜子美の詩、日莫不レ敢烏啄レ瘡と、瘡は瘡痍卽ち キズ、又瘡腫卽ち一種の皮膚病、【二】鞿　オモガヒ、馬の口に在るキヅナ、【三】敝幃　敝は破、幃は單帳、ヒトヘノトバリ、【四】桑下豈無三宿戀　「律文」に、日中一食、樹下一宿と、三宿を許さざるは愛著を此に生ずるからである、【五】樽前　牛僧孺の贈二汝州劉中丞一詩に、休レ論世上升沈事、且鬪樽前見在身と、【六】撐腸　盧仝の詩、三椀撐二枯腸一、唯有二文字五千卷一と、【七】癭衣　葛立方の「韻語陽秋」に、汝人多苦レ癭、故歐陽公、汝癭詩云、佩餙垂二變袞一、嬌嬰包二卵轂一、無レ由レ辨二肩

頸一有レ瘢ニ鱗新ニ殺と、梅聖兪の詩、女鬘高挽レ髻、男衣闊裁領と　瘢は頸の瘡、

**【題義】** 元豐七年正月に黄州を去つて汝州に移る時の作、

**【詩意】** 病瘠の老馬は意の如く轡を自由にすることは出來ないが、猶ほ君主に向つて敝幃を請ひ得る光榮がある、桑下でも三宿したのであるから猶は戀戀の情は免れない、尊前に對すれば黄も汝も無い一身無事に歸りたるを喜ぶ、無事なる證據は長腰に尙ほ腸を撐へる米を載せて居る、闊領には身體に相應する瘦を蓋す衣を著けて居る、老に投向して到る處に終に失策は無い、來る時には決して故人の非を遣ることは莫い、

**【餘論】** 紀曰く、婉轉淸切、薄而不レ弱、來時作ニ將來一解、非字作ニ非議一解と、不任、不失、例の小疵、

## 過レ江夜行ニ武昌山一聞ニ黄州鼓角一

江を過ぎ、夜武昌山に行き、黄州の鼓角を聞く

清風弄レ水月銜レ山。(一)　清風水を弄し月山を銜む、
幽人夜度呉王峴。(二)　幽人夜度る呉王峴、
黄州鼓角亦多情。(三)　黄州の鼓角亦多情、
送レ我南來不レ辭レ遠。　我を送りて南來遠きを辭せす、
江南又聞出塞曲。(四)　江南又聞く出塞の曲、
半雜ニ江聲一作ニ悲健一。　半ば江聲に雜はりて悲健を作す、
誰言萬方聲一槩。(五)　誰か言ふ萬方聲一槩と、
鼉憤龍愁爲レ余變。　鼉憤龍愁余が爲めに變す、
我記江邊枯柳樹。　我記す江邊枯柳樹、
未レ死相逢眞識レ面。(六)　未だ死せす相逢うて眞に面を識る、
他年一葉泝レ江來。　他年一葉江に泝り來る、
還吹ニ此曲一相迎餞。　還た此の曲を吹いて相迎餞するを、

**【題義】** 夜武昌山に游んで黄州の鼓角を聞き、其の聲の悲壯なるに淒氣を催して作りし詩である、

**【詩意】** 淸風は颯颯と水面を弄して月は山を銜んで居る狀である、此の時に幽人は夜呉王峴を度りて來る、忽ち黄州鼓角の聲が多情なるを聞く、我を送りて南來して其の遠きを辭しない、而して南來して又出塞の曲を聞く、曲聲と江聲と相雜はりて一層悲健の響を作す、鼉も憤り龍も愁へて余が爲めに變するものの如くである、我は記憶する江邊の枯れたる柳樹を、未だ全く枯死せざるは眞に識面であ

**【字解】** 〔一〕月銜山　太白の詩、青山欲レ銜半邊日と、〔二〕呉王峴　山の名、「地志」に、呉造峴、俗呼ニ呉王峴一耳と、武昌襄陽に在る、〔三〕鼓角　呉兢の「樂府古題要解」に、横吹曲、有ニ鼓角一、蚩尤氏、帥ニ魑魅一、與ニ黄帝一戰、帝始命吹レ角、爲ニ龍鳴一以禦レ之、其後魏武、北征ニ烏丸一、渉ニ沙漠一、軍士聞レ之、悲而思レ歸、於レ是減爲ニ中鳴一、尤更悲矣と、〔四〕出塞曲　「古今樂錄」に、横吹胡樂也、張騫入ニ西域一、傳ニ其法於長安一、李延年、因レ之更造ニ新聲一、後漢以給ニ邊將一、萬人將軍得レ之、有ニ黄鵠隴頭、出塞、入塞等十曲一と、〔五〕一槩　杜子美の詩、鼓角緣ニ邊郡一、川原欲ニ夜時一、萬方聲一槩、吾道竟何之と、〔六〕識面　杜子美の詩、李邕求レ識レ面、王翰願レトレ鄰と、

る、他年に一葉の扁舟にて江に泝り來るときは、還た此の曲を吹いて相迎へ相餞することであらう、

【餘論】紀曰く、語特深秀と、又曰く、屢以幽人自稱、其實假借、此何不直曰行人と、幽人と稱するは公の癖である、紀評の如く行人と改めば更に切なるを覺ゆ、

## 岐亭五首

岐亭　五首

元豐三年正月。余始謫黃州。至岐亭北二十五里。山上有白馬青蓋來迎者。則余故人陳慥季常也。爲留五日。賦詩一篇而去。明年正月。復往見之。季常使人勞余於中途。余久不殺。恐季常之爲余殺也。則以前韻作詩。爲殺戒以遺季常。自爾不復殺。而岐亭之人。多化之。有不食肉者。其後數往見之。往必作詩。詩必以前韻。凡余在黃四年。三往見季常。季常七來見余。蓋相從百餘日也。七年四月。余量移汝州。自江淮徂洛。送者皆止慈湖。而季常獨至九江。乃復用前韻。通爲五首以贈之。

【訓讀】元豐三年正月、余始めて黃州に謫せられ、岐亭の北二十五里に至る、山上白馬青蓋來り迎ふる者有り、則ち余が故人陳慥季常なり、爲めに留まること五日、詩一篇を賦して去る、明年正月、復た往いて之を見る、季常人をして余を中途に勞はしむ、余久しく殺さず、季常の余が爲めに殺すを恐るるなり、則ち前韻を以て詩を作り、殺戒と爲し、以て季常に遺る、爾してより復た殺さず、而して岐亭の人、多く之に化し、肉を食はざる者あり、其の後數ば往いて之を見る、往けば必ず詩を作る、詩は必ず前韻を以てす、凡そ余、黃に在ること四年、三たび往いて季常を見る、季常七たび來りて余を見る、蓋し相從ふ百餘日なり、七年四月、余汝州に量移す、江淮より洛に徂く、送る者皆慈湖に止む、而して季常獨り九江に至る、乃ち復た前韻を用ひ、通じて五首と爲し、以て之に贈る、

昨日雲陰重。東風融雪汁。(一)
　昨日雲陰重し、東風雪汁を融す、
遠林草木暗。近舍煙(二)火澀。
　遠林草木暗く、近舍煙火澀ふ、
下有隱(三)君子。嘯歌方自得。
　下に隱君子あり、嘯歌方に自得、
知我(四)犯寒來。呼(五)酒意頗急。
　我が寒を犯して來るを知り、酒を呼ぶ意頗る急、
撫(六)掌動鄰里。遶郝捉鵞鴨。
　撫掌鄰里を動かす、郝を遶りて鵞鴨を捉ふ、
房櫳(七)鏘器聲。蔬果照巾冪。(八)
　房櫳器聲鏘たり、蔬果巾冪を照らす、
久聞(九)蔞蒿美。初見新芽赤。
　久しく聞く蔞蒿の美を、初めて見る新芽の赤きを、
洗盞酌鵞黃。(一〇)磨刀削熊白。(一一)
　盞を洗うて鵞黃を酌み、刀を磨して熊白を削く、

須臾我徑醉。坐睡落巾幘。(一二)　　須臾に我徑ちに醉ふ、坐睡巾幘落つ、

醒時夜向闌。唧唧(一三)銅缾泣。　　醒むる時夜闌に向ふ、唧唧銅缾泣く、

黃州豈云遠。但恐朋友缺。(一四)　　黃州豈遠しと云はんや、但恐る朋友の缺くるを、

我當安所主。君亦無此客。(一五)　　我當に主とする所に安んずべし、君も亦此客無し、

朝來靜菴中。惟見峰巒集。　　朝來靜菴の中、惟見る峰巒の集まるを、

【字解】【一】雪汁　「禮記月令」に、天時雨汁、注雨汁者、水雪雜下也と、【二】煙火濕　孟郊の詩、僵宮煙火濕と、【三】陋君子　「史記」に、老子隱君子也と、【四】犯寒來　沈休文の詩、春色犯寒來と、【五】呼酒　韓退之の詩、呼酒持勸君と、【六】撫掌　成化の「杭州志」に、玉泉寺、在錢唐門西、青芝塢、南齊建元中、靈悟禪師曇超、卓菴講經、龍於菴前撫掌、泉自湧出、號撫掌泉と、【七】餅器聲　「魏志」に、曹操、過呂伯奢、聞其食器聲、以爲圖己、遂夜殺之と、【八】巾羃　料理人の頭巾、又果物を覆ふ具、【九】蓬蒿　ヨモギ、【一〇】鵞黃　杜子美の詩、鵞兒黃似酒、對酒愛新鵞と、【一一】熊白　「淮南子」に、熊當心有白脂如玉、味甚美、俗呼熊白と、【一二】巾幘　「晉庾敳傳」に、頹然而醉、幘墮几上と、【一三】唧唧　蟲聲を形容する語、【一四】朋友缺　毛詩、伐木廢則朋友缺矣と、【一五】此客　「晉書桓溫傳」に、桓溫請謝安爲司馬、既至、溫甚喜言平生、歡笑竟日、溫問左右、頗嘗見我有如此客否と、

【題義】始めて黃州に謫せらるる時、白馬青蓋を以て迎へらるる者は舊友の陳季常である、陳が家に五日滯在して去る、其の明年に再び往く、季常は使を以て復た余を途中まで迎へらる、余は久しく殺生はしない、が季常は余を馳走する爲めに雞豚を殺すであらう、是に於て殺戒の詩を作りて示せば、其れより殺を罷む、岐亭の人も多く之に化して、肉を食はざる者が多くなる、其の後、度度岐亭に游ぶ、季常を訪ふこと三度、季常より訪はるること七度、余に隨從すること百有餘日、七年に余は去つて汝州に移るとき、江淮より洛に徂く、送者は大底慈湖までであるが、季常一人は九江まで送らる、乃ち前韻を用ひて五首を作りて與ふるのである、

【詩意】昨日より雲陰が重く、東風が雪汁を融下する、遠林を望めば草木が暗澹で、近舍を看れば煙火が溼ひを帶びて居る、其の下に隱君子が住して居り、嘯歌して方に自得の境界を樂しむ、其の隱君子は我が寒を犯して訪ひ來りしを知り、酒を呼んで意頗る急である、掌を撫して其の元氣は鄰里を動かす、鄰里を奔走して鵞鴨を捉へて來る、それを料理する爲めであらう房櫳には鏘として器の聲がする、又看る蔬果の類が巾羃を照らして居るを、我は久しく精進料理を食うて蓬蒿の美味なるを知つて居る、初めは見る其の新芽の赤きを、暫くして盞を洗うて鵞黃の斗を酌み、又刀を磨して熊肉の美を削る、須臾にして我は徑ちに醉ふ、醉ふが爲めに坐睡して巾幘を落すに至る、醒むる時は夜も已に闌となりて、唧唧として銅缾の泣くを聞く、黃州は遠しと云ふのではない、但恐るるは朋友の缺くることである、併し我は其の主とする所に安んずる覺悟である、君には復た此の如く無遠慮の客は多く無からう、朝來靜菴の中、坐して唯峯巒の簡に集まるを見る、

【餘論】紀曰く、泣字押得生而穩、結得超逸と、

〔二〕

我哀籃中蛤、閉口護殘汁。
又哀網中魚、開口吐微溼。
刳腸彼交病、過分我何得。
相逢未寒温、相勸此最急。
不見盧懷愼、烝壺似烝鴨。
坐客皆忍笑、髠然發其冪。
不見王武子、每食刀几赤。
琉璃載烝㹠、中有人乳白。
盧公信寒陋、衰髮得滿幘。
武子雖豪華、未死神已泣。
先生萬金璧、護此一蟣缺。
一年如一夢、百歲眞過客。
君無廢此篇、嚴詩編杜集。

〔二〕

我は哀れむ籃中の蛤、口を閉ぢて殘汁を護す、
又哀れむ網中の魚、口を開いて微溼を吐く、
腸を刳かれて彼交も病む、分に過ぐるは我れ何ぞ得ん、
相逢うて未だ寒温せず、相勸む此の最急、
見ずや盧懷愼、壺を烝す鴨を烝すに似たり、
坐客皆笑を忍ぶ、髠然其冪を發く、
見ずや王武子、食ふ毎に刀几赤し、
琉璃に烝㹠を載す、中に人乳の白きあり、
盧公信に寒陋、衰髮滿幘を得、
武子豪華と雖も、未だ死せず神已に泣く、
先生萬金の璧、此の一蟣缺を護す、
一年一夢の如く、百歲眞に過客、
君此の篇を廢する無かれ、嚴詩杜集に編せん、

【字解】【一】我哀　哀は堅哀、「東坡題跋」に、去年下獄得脱、自此不殺一物、有餉蟹蛤者、皆放之江中と、【二】開口　「莊子大宗師篇」に、泉涸、魚相與處於陸、相呴以濕、相濡以沫、不如相忘於江湖と、【三】刳腸　「莊子外物篇」に、乃刳龜、七十二鑽、而無遺筴、不能避刳腸之患と、【四】交病　「陶淵明歸去來序」に、飢凍雖切、違己交病と、【五】過分　白樂天の詩、榮寵尋過分と、【六】寒温　「唐武攸緒傳」に、親貴來謁、道寒温外、默無所言と、【七】烝壺　王梅溪曰く、據盧氏雜説、烝壺是鄭餘慶、而先生指爲盧懷愼、豈懷愼亦、同此而別有出處耶、【八】髠然　馮應榴曰く、未詳所出と、【九】王武子　「晉王濟傳」に、字武子、性豪侈、麗服玉食、武帝嘗幸其宅、供饌甚豐、悉貯琉璃器中、烝㹠甚美、帝問其故、答曰、以人乳烝之、帝色甚不平、食未畢去、濟死年四十六歳と、【一〇】㹠　豚と同じ、キノコ、【一一】寒陋　「北齊書吳遵世傳」に、門族寒陋と、【一二】衰髮　王梅溪曰く、衰髮滿幘、言其壽也、而新舊唐書、竝不見其死之年歳、唯鄭餘慶則云、死年七十六也と、【一三】神已泣　「黃庭經」に、長生至愼房中、急何謂死、作令神泣と、【一四】蟣缺　「抱朴子」に、以蟣鼻之缺損、無傷之淳鈞と、【一五】過客　李太白の桃李園序に、光陰者百代之過客と、【一六】嚴詩　嚴武の詩集、【一七】杜集　杜子美の詩集、

【詩意】我は哀憐の情を以て籃中の蛤を看る、口を閉ぢて生を保つ爲めに猶は殘汁を護して居る、又哀憐する網中の魚を、是は口を開きて微しく呴を吐いて溼を保ちて居る、腸を刳かるることは籃魚も網魚も共に苦痛とする、此等の事を思ふと、過分なるは我も得ようとは思はぬ、相逢うて未だ寒温の挨拶もしないで、先づ此の物を憐む最急なることを勸告する、見ずや鄭餘慶が事を、餘慶は大官ではあるが貧なれば壺を烝して鴨を烝すに似たる狀を爲すことを、坐客は笑ふに忍びずして辛抱したのである、髠然として其の冪を發く、又見ざるや王武子が事を、此の人豪侈にて食ふ毎に赤色の琉璃盆に㹠を載せて、而して人乳の白きを雜ふ、鄭餘慶は信に寒陋の人である、が年壽は相當に高くあつた、武子は鄭と反對に豪華であつた、が身未だ死せざるに神は已に泣いて居る、先生は萬金の璧にて

圓滿貴ぶ可き人であるが、唯此の一蟻缺卽ち殺を意とせざる缺點がある、凡そ一年の經過するは一夢の如く、百年の經過は旅客の如くである、君は此の區區たる情を敍べたる篇を廢棄すること無く、我が此の篇を君の集末に附屬さして具れ玉へ、

【餘論】紀曰く、純是香山門徑、又未死神已泣五字警策、又君無廢二句、未免率率と、公初めは殺生を意とせず、殺牛殺羊の句多し、然るに下獄以來生を憐むに至る、眞詩人と爲るは後半生である、

〔三〕

君家蜂(一)作窠。歲歲添漆汁。　君が家蜂窠を作す、歲歲漆汁を添ふ、

我身牛(二)穿鼻。卷舌聊自溼。　我身は牛鼻を穿ち、卷舌聊か自から溼す、

二年三過君。此行眞得得(三)。　二年三たび君に過ぐ、此の行眞に得得、

愛君似劇孟(四)。扣門知緩急。　愛す君が劇孟に似たるを、門を扣けば緩急を知る、

家有紅頰兒(五)。能唱綠頭鴨(六)。　家に紅頰兒あり、能く唱ふ綠頭鴨、

行當隔簾(七)見。花霧輕冪冪。　行いて當に簾を隔てて見るべし、花霧輕くして冪冪、

爲我取黃封(八)。親拆官泥赤(九)。　我が爲めに黃封を取り、親しく拆く官泥の赤きを、

仍須煩素手(一〇)。自點葉家白(一一)。　仍ほ須らく素手を煩はすべし、自から點す葉家白、

樂哉無一事。十年不蓄積。　樂しい哉一事無く、十年積を蓄へず、

閉門弄添丁(一二)。哇笑(一三)雜呱泣。　門を閉ぢて添丁を弄す、哇笑呱泣に雜ふ、

西方正苦戰。誰補將帥缺。　西方正に戰に苦む、誰か補ふ將帥の缺、

披圖見八陣(一四)。合散更主客(一五)。　圖を披きて八陣を見る、合散主客を更ふ、

不須親戎行(一六)。坐論教君集(一七)。　須ひず親しく戎行するを、坐論君集を敎へん、

【字解】【一】蜂作窠　「物類相感志」に、蜂窠細大者、圍一二尺、其殼不過小窯許大、云、是十姑樹汁、鞘漆類、故擬牢耳と、馮應榴云、二句似喩其屋小而人增也、與下句添丁意合と、【二】牛穿鼻　「莊子秋水篇」に、牛馬四足是謂天、落馬首、穿牛鼻、是謂人と、【三】得得　韓退之の詩、上去無得得、下來亦悠悠と、【四】劇孟　「漢愛盎傳」に、洛陽劇孟、嘗過盎、盎善待之、安陵富人、有謂盎曰、劇孟博徒、將軍何自通之、盎曰、劇孟雖博徒、然母死、客送喪車千餘乘、此亦有過人者、且緩急人所有、夫一旦扣門、不以親爲解、不以在亡爲辭、天下所望者、獨季心劇孟、今公陽從數騎、一旦有緩急、寧足恃乎と、【五】紅頰　韓退之の詩、青娥翳長袖、紅頰吹鳴籥と、【六】綠頭鴨　王梅谿曰く、曲名、【七】隔簾　「南史夏侯亶」、有妓妾十數人、並無被服姿容、每有客、常隔簾奏伎と、【八】黃封　施德初曰く、京師官法、酒以黃紙、或黃羅絹封羅餅口、名黃封酒と、【九】官泥赤　劉禹錫の西山試茶詩、何況蒙山顧渚春、白泥赤印走風塵と、【一〇】素手　「漢古詩」に、纖纖擢素手、札札弄機杼と、【一一】葉家白　建谿の茶名、製茶の家一千餘戶、葉氏の茶を第一とする、【一二】添丁　其の子を言ふ、【一三】哇笑　小兒の聲、【一四】八陣　上古風后の作る八ツの陣立、天と地と風と雲と龍と虎と鳥と蛇、「蜀志」に、諸葛亮、作八陣圖と、【一五】主客　「老子」に、用兵有言、吾不敢爲主而爲客と、【一六】戎行　「左傳成公二年」に、韓厥曰、屬當戎行、無所逃隱と、杜子美の詩、濮鹿親戎行と、戎行は軍行、【一七】君集

「唐侯君集傳」に、始太宗、命二李靖一、教二君集兵法一、既而奏、靖且レ反、兵之隱微、不二以示一レ臣、帝以讓レ靖、靖曰、方中原無事、臣之所レ教、足レ以制二四夷一、而求レ盡二臣術一、此君集欲レ反耳と、

【詩意】　君が家の蜂は棄を作りて、蔵蔵に漆汁を添ふるの賑かさである、我が輩は譬へて見れば牛が鼻を穿たれて居ると同じ、舌を卷いて聊か自から溼すに過ぎない、二年の間に君を訪ふこと三度、僅に三度なれど此の行は眞に得得たる者である、それは君の氣性が劇孟に似たるを愛すればである、門を扣く者の爲めには緩急共に承知して吳れる、君が家には紅頰の兒がある、能く綠頭鴨の曲を歌ふ、行きし時は必ず簾を隔てて見る、花霧が輕く霏霏たる景色を、君は我に供するに黃封酒を以てせられ、又親しく自から名茶を煎じて吳れる、猶ほ此の上美人を煩はして、自から葉家白の名茶を點せらる、樂しい哉君の一事も無き身分は、十年も禮幘を蓄へずに、日日閉門して唯佳兒を弄するのみ、兒孫の啀笑の聲は呱呱の泣聲と雜はる、然るに今や西方は正に苦戰最中である、誰か將帥の缺を補ふ者ぞ、圖を披きて八陣の陣立を見玉へ、或は合し或は散じて主客を更代するではないか、然りと言うて必ずしも自身軍行は必要としない、坐論して君集に兵法を敎授すればよいのである、

【餘論】　紀曰く、此首有二補湊之痕一と、

## 〔四〕

酸酒如二齏湯一(一)、甜酒如二蜜汁一(二)。　酸酒は齏湯の如く、甜酒は蜜汁の如し、

三年黃州城、飲レ酒但飲レ溼(三)。　三年黃州城、酒を飲んで但溼を飲む、

我如更揀擇、一醉豈易レ得。　我如し更に揀擇せば、一醉豈得易からん、

幾思壓茆柴(四)、禁網日夜急(五)。　幾たびか思ふ壓茆柴、禁網日夜急なり、

西鄰椎二甕盎(六)一、醉倒猪與レ鴨(七)。　西鄰甕盎を椎す、醉倒す猪と鴨と、

君家大如レ掌、破屋無二遮羃(八)一。　君が家大さ掌の如く、破屋遮羃無し、

何從得二此酒一、冷面妬二君赤(九)一。　何くよりか此の酒を得たる、冷面君が赤きを妬む、

定應二好事人(一〇)一、千石供二李白(一一)一。　定んで應に好事の人、千石李白に供するなるべし、

爲レ君三日醉(一二)、蓬髮不レ暇レ幘(一三)。　君が爲めに三日醉ふ、蓬髮幘に暇あらず、

夜深欲レ踰レ垣(一四)、臥想春甕泣(一五)。　夜深けて垣を踰えんと欲す、臥して想ふ春甕の泣くを、

君奴亦笑レ我、髮齒行禿缺。　君が奴亦我を笑ふ、髮齒行くゆく禿缺、

三年已四至、歲歲遭二惡客(一六)一。　三年已に四たび至る、歲歲惡客に遭ふ、

人生幾兩屐(一七)、莫レ厭頻來集。　人生幾兩屐、厭ふ莫かれ頻りに來集するを、

【字解】【一】酸酒　「揚子法言」に、日飲不レ飲、酒酒必酸と、【二】甜酒　白樂天の詩、戶大嫌二甜酒一と、【三】飲溼　乏酒に作る本がある、飲酒の方が善、【四】壓茆柴　任曰、黃州人造二私酒一、俗謂二之壓茆柴一と、【五】禁網　飲酒の禁令、「酷吏傳序」に、禁網疏闊と、【六】甕盎　甕は甕と同字、カメ、盎はハチ、ホトギ、「漢書趙廣漢傳」に、守二京兆尹一、至二霍光子、博陸侯禹第一、直突二入其門一、廋二索私屠酤一、椎二

破盡盎」と、【七】醉倒 韓退之の詩、花前醉倒歌者誰と、【八】破屋 司空圖の詩、霜葉穿破屋と、【九】君赤 施德初曰く、俗諺、有無錢喫酒、妬人面赤之語と、【一〇】好事人 陶淵明の詩、時賴好事人、載醪祛所惑と、【一一】千石 李太白の詩、愁來飲酒二千石、寒灰重暖生陽春、山翁醉後能騎馬、別是風流賢主人と、【一二】三日 「漢高祖紀」に、張飮三日と、【一三】蓬髮 「漢揚雄傳」に、頭蓬不暇梳と、【一四】踰垣 「孟子滕文公」に、段干木、踰垣而辟之と、【一五】春甕泣 「晉畢卓傳」に、比舍郎、酒熟、夜至其甕間盜取と、酒熟して響くを云ふ、【一六】惡客 酒を飲まざる者と、大に飲む者と二樣に通ずる、「羣碎錄」に、元結以不飲酒爲惡客と、【一七】兩屐 「晉阮孚傳」に、祖約好財、孚好屐、同是累而未判其得失、有詣約見、正料財物、客至、屛當不盡、餘兩小簏以著背後、傾身障之、意未能平、或詣孚、正見自蠟屐、因自嘆曰、未知一生當著幾緉屐、神色閑暢、於是勝負始分と、

【詩意】酸酒を飲めばナマスの湯を飲むが如きの感である、甜酒を飲めば蜜汁を飲むが如きの感である、三年間黃州城に在りて、酒を飲むと言ふもののホンの湯を飲む氣持である、我は如し之を揀擇して居れば、一醉すらも得ることが出來ない、幾たびか壓茆柴のことを思ひ出す、が酒稅官吏は日夜に眼が光る、已に西鄰の舍は私醸を發覺され、家宅搜索の結果罌盎を推破せらるる狀態である、醉うて居りし主人は猪と鴨との料理鉢を打倒す、然るに君が家は大きさ掌の如きものである、而して破屋は物を遮る覊も無い、此の如き始末であるに何の術あつて此の酒を得たるや、冷面の者は君が面の赤きを妬むのである、定んで察するに好事の人が、千石の美酒を攜帶して來て李白に供したるものと考へる、我も君の爲めに三日醉うて蓬髮も亂れしままにて幘するに暇が無い、夜深けて惡事と知り乍ら垣を踰えんと欲する氣が起る、臥して春甕の泣くを聞いては奴の事を笑へない、君が奴僕は反つて僕を笑ふことであらう、髮は禿し齒は缺けてよい年である、三年間に四度も至りて、歲歲惡客に遭はしむ、考ふれば人生は幾兩屐ぞや、厭うてはいかぬ頻りに來集することを、

【餘論】紀曰く、此首亦眞朴と、又、醉倒猪與鴨の五字を評して曰く、豈有此理、語亦不雅と、座敷の中にて猪や鴨を倒すなぞ狂人の夢以外には無い、それを眞面目に見る觀奕道人は餘りに小兒に類す、其の料理が載せてある鉢や盆の類と見れば少しも支障はない、況んや鴨は韻字なるに於てをや、

〔五〕

枯松強鑽(一)膏。槁竹欲瀝汁。
兩窮相値遇。相哀莫相溼(二)。
不知我與君。交游竟何得。
心法(三)幸相語。頭然(四)未爲急。
願爲穿雲(五)鶻。莫作將雛(六)鴨。
我行及初夏。煮酒映疏冪(七)。
故鄉在何許。西望千山赤。
玆游定安歸。東泛萬頃白。

〔五〕

枯松強ひて膏を鑽り、槁竹汁を瀝まんと欲す、
兩窮相値遇し、相哀れんで相溼す莫し、
知らず我と君と、交游竟に何をか得る、
心法幸に相語らん、頭然未だ急と爲さず、
願はくは穿雲の鶻と爲らん、將雛の鴨と作る莫かれ、
我が行初夏に及ぶ、酒を煮て疏冪に映ず、
故鄉何許に在る、西望すれば千山赤し、
玆游定んで安くに歸らん、東のかた萬頃の白きに泛ばん、

一歡寧復再。起舞花墮幘。
將行出苦語。不用兒女泣。
吾非固多矣。君豈無一缺。
各念別時言。閉戶謝衆客。
空堂淨掃地。虛白道所集。

一歡寧ぞ復た再びせん、起つて舞へば花幘に墮つ、
將に行かんとして苦語を出す、用ひず兒女の泣くを、
吾が非固に多し、君豈一缺無からんや、
各の別時の言を念ふ、戶を閉ぢて衆客を謝す、
空堂淨掃の地、虛白は道の集まる所、

【字解】【一】鑽膏　松膏を鑽斬する、【二】相遷　第二首に注したる莊子大宗師の意、【三】心法　白樂天の詩、自我學心法、萬緣成一空と、心法とは形相なくして用を表はすものを謂ふ、形相ありて體を表はすものを色法と謂ふ、今此の句は佛法の意味にて見よ、【四】頭然　「梵網經序」に、當求精進、如救頭然、但念無常、愼勿放逸と、然は燃である、【五】穿雲鶻　杜子美の詩、莫作翻雲鶻、聞呼向禽急と、鶻はクマダカ、【六】雛鴨　「宣和畫譜」、易元吉、有雛鴨圖と、【七】羃　巾羃、羃とは異なる、覆ふと云ふ義は羃も冪も同じ、【八】墮幘　「漢灌夫傳」に、夫起舞、屬蚡墮幘と、【九】苦語　韓退之の詩、苦語感我耳と、【一〇】兒女泣　「後漢來歙傳」に、謂蓋延曰、呼巨卿、欲相屬以軍事、而反效兒女子涕泣乎と、【一一】淨掃地　白樂天の詩、深閉竹間扉、淨掃松下地と、【一二】虛白　「莊子人間世篇」に、虛室生白と、缺孔あれば、空室自から光を生ず、

【詩意】已に枯死したる松は膏を鑽ることは出來ない、已に槁朽したる竹から汁を瀝むことは出來ない、其枯松と槁竹の兩窮が相値遇して、相哀れむも相濡すことは出來ない、知らず我と君との交游は、畢竟互に何の得る所がある、道の根本を語ることを得たるは幸福である、頭上に火が燃えるも未だ緊急問題とはしない、願はくは堂堂と穿雲の鶻と作つて、微微たる雛を將く鴨と作らぬことを、我が出立する方に初夏に及ぶ、別燕の酒を煮れば疏羃に映ずる、故鄉は其れ何れの許である、西方を望めば千山皆赤赭禿である、茲の游は定んで安くにか歸るや、東の方は江水が萬頃白い、そこで今日の一歡は再び容易にない、起つて舞ひ花が幘に墮つるもよい、離別に泣くは兒女の事である、吾は固に圓滿具足の人ではない、君と雖も一缺無き人とは思はぬ、各の別時の言を念ふより外の事はない、乃ち戶を閉して衆客を謝絕し、而して空堂淨掃の地に居れば、虛白は道卽ち眞の道の集まる所である、

【餘論】紀曰く、此首最深至と、又結末を評して、此古人臨別贈言之義、不似後人但以好語相媚と、前餘論に記せざりしが、第三首は紅頰兒、綠頭鴨、素手、黃封、泥赤、家白、此の五色を見るが、是は偶爾ではなく、用意して成ることを知れ、王右丞なども往往此の用字法を見る、

## 初入廬山三首

初めて廬山に入る　三首

青山若無素。偃蹇不相親。
要識廬山面。他年是故人。

【自注】山南山面也。

青山素無きが若く、偃蹇相親しまず、
要識す廬山の面、他年是れ故人、

【字解】【一】無素　「漢嚴爲傳」に、無忘雅素と、平素、平生、モトカラの意、【二】偃蹇　山の怪奇なる形容、【三】故人　公の自注に、山南山面也と、

【題意】廬山は江西星子縣の西北、九江縣の南に在る、古名南障山、一名匡山、總名匡廬、江西の名

山と稱せらる、漢時匡俗の如き仙人、晉時惠遠の如き高僧、此の山に住したるを以て後人之を敬慕するのである、

【詩意】初めて入る廬山は平素の知己ではなかつた、それは偃蹇とタカブル貌にて相親まなかつた、既にして要識す廬山の面を、他年相見る故人の如くである、

〔二〕

自昔懷淸賞。神游杳靄間。
如今不是夢。眞箇是廬山。

〔二〕

昔より淸賞を懷ふ、神游す杳靄の間、
如今是れ夢ならず、眞箇に是れ廬山、

【字解】〔一〕淸賞　謝朓の詩、江垂得淸賞と、〔二〕神游「太白大鵬賦序」に、余昔於江陵見天台司馬子微、謂余有仙風道骨、與神游八極之表と、〔三〕眞箇　韓退之の詩、老翁眞箇是童兒と、

【詩意】昔より此の中に淸賞せんことを懷うて居り、唯神魂のみ杳靄の間に游んで足は未だ踏まなかつた、只今は神游ではなく、眞實際に是れ廬山の中に在る、

〔三〕

芒鞵青竹杖。自挂百錢游。
可怪深山裏。人人識故侯。

〔三〕

芒鞵青竹杖、自から百錢を挂けて游ぶ、
怪む可し深山の裏、人人故侯を識る、

【字解】〔一〕故侯「前漢書」に、召平者、故秦東陵侯、秦破爲布衣、貧種瓜長安城東、瓜美、故世謂東陵瓜と、

【詩意】脚には芒鞵手には青竹杖、而して竹杖には百錢を挂けて游ぶ、唯怪しいと思ふことは此の深山の裏にて、山中の人人が我を識つて居ることである、

【餘論】紀曰く、隨意口占、無甚出色と、東坡詩話云、僕初入廬山、山谷奇秀、平日所未見、殆應接不暇、遂發意、不欲作詩、已而山中僧俗皆云蘇子瞻來矣、不覺作一絕云、芒鞵青竹杖、自挂百錢游、可怪深山裏、人人識故侯、既而哂前言之謬、復作二絕句と、因つて知る今の本の順序は逆にするのが公の本意であるを、

## 贈東林總長老

東林の總長老に贈る

溪聲便是廣長舌。山色豈非淸淨身。
夜來八萬四千偈。他日如何舉示人。

溪聲便ち是れ廣長舌、
山色豈淸淨身にあらずや、
夜來八萬四千偈、
他日如何ぞ人に舉示せん、

【字解】〔一〕廣長舌「阿彌陀經」に、出廣長舌相、遍覆三千大千世界、又曰く、出廣長舌、說誠實言と、「傳燈錄」に、袁州南源道明禪師、有僧問、一言作麼生、師乃吐舌云、我有廣長舌、卽向汝道、法華經云、世尊現大神力、出廣長舌、淸淨法身と、〔二〕淸淨身「法華功德品」に、得淸淨身、如淨琉璃と、〔三〕八萬四千偈「法華經見寶塔品」に、持八萬四千法藏十二部經、爲人演說と、又「觀無量壽經」に、無量壽佛、有八萬四千相と、〔四〕舉示人「傳

燈錄」に、省念禪師、到處舉ニ示人一と、

【題義】廬山に東林寺と西林寺がある、晉の世惠遠は東林に住し、惠永は西林に住して居る、今此の東林に游び其の寺の長老住持たる常總に贈る詩である、寺は禪にして淨土の法を兼ねて說く、

【詩意】溪聲が日夜に滾滾たる響を爲して流るるは、卽ち是れ佛陀が廣長舌の說法を聽くと同じ、又山色が常に青琉璃を現する如きは、卽ち是れ佛陀が清淨法身と同じ、昨夜は一夕にして八萬四千の法を覺り盡した、他日如何がして此の自覺の妙旨を人に舉示することを得るや、

【餘論】此の篇は尋常詩家の詩にあらざれば、尋常詩家の手に成る詩話なぞに入らぬが、「冷齋夜話」に之を收めてより禪林より出でし叢話類には載せざるものはない、詩にあらず、偈にもあらず、而して亦詩、而して亦偈、慧眼の人唯妙を知つて、肉眼の人は其の妙を見ることは出來ない、

### 題ニ西林壁一

西林の壁に題す

橫看成レ嶺側成レ峯。(二)　橫看すれば嶺と成り側には峯と成る、
遠近高低各不レ同。　遠近高低各の同じからず、
不レ識ニ廬山眞面目一。　廬山の眞面目を識らざるは、
只緣ニ身在ニ此山中一。　只身此の山中に在るに緣る、

【字解】【一】成嶺　嶺は人の衣領と同じく山頂ではあるが、人の通路の通ずるもの、和訓してタウゲ、峠である、【二】峯　峰尖の如く、望むべく、攀ぢ難きもの、「西溪叢話」に、南山宣律師感通傳云、廬山七嶺、共會ニ於東一、合而成レ峯、因知東坡橫看成レ嶺側成レ峯之句、有ニ自來一矣と、又唐句に、橫看是嶺側是峯と、

【題義】西林寺は後に乾明寺と改む、曇現や惠永の如き高僧の住したる寺、東林の惠遠法師も寂後は西林に埋葬せしものである、此の詩は廬山全體を咏じて、單に西林を詠するのではない、唯詩を西林の壁に題したるに過ぎない、

【詩意】外より廬山を望んで、橫看すれば嶺であるが側看すれば峯である、看處の遠近に因つて山の高低が一樣でない、廬山の山そのものの眞面目を識らないのは、畢竟自身が廬山の中に在るからである、

【餘論】紀曰く、亦是禪偈、而不ニ甚露ニ禪偈氣一、尙不ニ取厭一、以爲ニ高唱一則未レ然と、黃山谷許して曰く、此老於ニ般若一、橫說竪說、了無ニ剩語一、非ニ其筆端有レ口、安能吐ニ此不傳之妙一哉と、觀奕道人は到底山谷居士の敵ではない、

圓通禪院先君舊游也。四月二十四日晚至宿焉。明日先君忌日也。乃手ニ寫寶積獻蓋頌佛一偈一。以贈ニ長老僊公一。僊公撫掌笑曰。昨夜夢寶蓋飛下。著處輒出レ火。豈此祥乎。乃作ニ是詩一。院有ニ蜀僧宣遠一事ニ訥長老一識ニ先君一云

圓通禪院は先君が舊游なり、四月二十四日晩に至りて宿す、明日先君の忌日なり、乃ち寶積獻蓋頌佛一偈を手寫し、以て長老僊公に贈る、僊公撫掌し笑うて曰く、昨夜夢む寶蓋飛下し、著處輒ち火を出す、豈此の祥か、乃ち是の詩を作る、院に蜀僧宣逮あり、訥長老に事へて、先君を識ると云ふ

（一）石耳峯頭路接天。　石耳峯頭路天に接す、
（二）梵音堂上月臨泉。　梵音堂上 月泉に臨む、
此生初飲廬山水。　此の生初めて飲む廬山の水、
他日徒參（三）雪竇禪。　他日徒らに參ず雪竇の禪、
袖裏寶書猶未出。　袖裏の寶書猶は未だ出さず、
夢中飛蓋已先傳。　夢中飛蓋已に先づ傳ふ、
何人更識（四）嵇中散。　何人か更に識る嵇中散、
野鶴昂（五）藏未是僊。　野鶴昂藏未だ是れ僊ならず、

【字解】〔一〕石耳　「廬山志」に馬耳峯西南、爲石耳峯、其峯峭異、後山尤聳拔と、〔二〕梵音堂　「圓通事實」に、寺中有夜話亭、梵音亭、歐陽永叔、與居訥談道處、或云梵音堂、即清音亭と、〔三〕雪竇　「續傳燈錄」に、重顯姓李氏、字隱之、遂州人、出家、初住靈隱、後出世蘇州翠峯、遷四明之雪竇、宗風大振、皇祐五年、七月七日、不遺喝、亦不說偈、北首而亡と、〔四〕嵇中散　前詩に屢ば出づ、〔五〕昂藏　「北史」に、高昂字敖曹、幼有壯氣、及長俶儻、膽力過人、其父以其昂藏敖曹、故以名字之、李太白の詩、褊衣柱史何昂藏と、

【題意】圓通禪院は嚮に歿した我が嚴君が、生前に游びし寺である、四月二十四日に此の寺に來りて宿泊する、明二十五日は卽ち先君の忌日である、其の供養の爲めに手自から長者子寶積が七寶の天蓋を佛に獻じて佛を讃歎する一偈を寫して長老僊公に贈る、僊公は掌を撫で笑うて昨夜夢むる事を話す、乃ち是の詩を作りて以て贈る、院に蜀僧の宣逮が留錫して居り、其の師事したる訥長老に從つて我が先君を面識せりと語る、

【詩意】廬山の最高頂たる石耳峯は路が天に接する、而して梵音堂上の月は溪泉に臨んで居る、我は此生初めて廬山の水を飲む、他日雪竇の禪に參ずるも是れ徒參である、袖裏に攜へ來るの寶書は未だ之を提出せざるに、僊公の夢中に飛蓋の事已に先づ傳ふ、何人か更に嵇中散即ち今日の東坡を識るや、野鶴昂藏たる氣槪あるが未だ是れ僊ではない、

【餘論】題に手寫寶積とあるは寶積經であるか、維摩經であるか分明でない、諸注家は維摩經と定むるが、維摩經を寶積と稱する例は曾て無い、維摩經の中に、有長者子、名曰寶積、與五百長者子、俱持七寶蓋來、以獻佛とあれば、公も維摩經を書寫して、以て寶積と稱したのであらう、されど維摩經の中の寶積は佛國品に出づる一節にて、一經一品の名ではない、單に寶積と云へば唐の菩提流志譯の大寶積經に限る、若し維摩を寫して寶積と言ふならば明かに公の誤謬である、未出、未是僊は例の小疵、

子由在筠作東軒記。或戲之爲東軒長老。其壻曹煥往筠。余作一絶句送曹以戲子由。曹過廬山。以示圓通愼長老。愼欣然亦作一絶。送客出門。歸入室趺坐化去。子由聞之。仍作二絶。一以答余。一以答愼。明年余過圓通。始得其詳。乃追次愼韻

子由筠に在りて、東軒の記を作る、或ひと之に戲れて東軒長老と爲す、其の壻曹煥筠に往く、余一絶句を作りて曹を送り、以て子由に戲る、曹、廬山を過ぎ、以て圓通の愼長老に示す、愼、欣然亦一絶を作り、客を送り門を出で、歸りて室に入り、趺坐して化し去る、子由之を聞き、仍つて二絶を作り、一以て余に答へ、一以て愼に答ふ、明年、余圓通を過ぎ、始めて其の詳かなるを得たり、乃ち愼が韻に追次す

君到高安幾日回。　君高安に到り幾日か回る、
一時斗擻舊塵埃。　一時斗擻す舊塵埃、
贈君一籠牢收取。　君に贈る一籠牢く收取せよ、
盛取東軒長老來。　東軒長老を盛取し來れ、

【自注】予送曹詩。

【字解】〔一〕斗擻 「善住意經」に、斗擻貪欲嗔恚愚癡、斗擻三界内外六入と、洗濯して、紛塵を除却する義、梵語の音譯、義を譯して頭陀、杜多、藪治と云ふ、白樂天の詩、斗擻塵埃衣と、〔二〕贈君 公の自注、予送曹詩と、

【題義】子由が筠州に在つて東軒の記を作る、或る人子由を戲れて東軒長老と呼ぶ、子由の壻曹煥が筠州に往く、公は一絶を作り曹を送り兼ねて以て子由に戲る、曹が廬山を過ぎるとき、其の詩を以て圓通の長老に示せば、長老も欣然として亦一絶を作る、作り畢つて客を送りて門を出で、歸りて室に入るや忽ち坐化す、子由が其の事を聞いて二絶を作り、一詩は余に答へ、一詩は長老に答ふ、明年公は圓通禪院を過ぎて親しく其の事を聞くに因つて、長老の韻に追次して此れを作る、

【詩意】君が高安に到れば幾日にして回るや、此の行や一時に斗擻して盡す舊塵埃を、君に贈る所の一籠は何の爲めであるか牢く收め取り記憶し玉へ、是の籠は東軒長老を盛り取り來る爲めである、

大士何曾有生死。　大士何ぞ曾て生死あらん、
小儒底處覓窮通。　小儒底の處にか窮通を覓めん、
偶留一吷千山上。　偶ま一吷を留む千山の上、
散作人間萬竅風。　散じて人間萬竅の風と作る、

【自注】予次愼韻。

【字解】〔一〕大士 普通に大人と言ふと同じ、愼長老を指す、〔二〕小儒 「莊子外物篇」に、大儒臚傳曰、東方作矣、事之何若、小儒曰、未解裙襦、口中有珠と、〔三〕一吷 ささやく小聲、〔四〕萬竅 「莊子齊物論篇」に、大塊噫氣、其名爲風、是唯無作、作則萬竅怒號と、

【詩意】大士は平生より生死を超脱する人なれば生死共に有ることとなし、小儒は底の處に窮通を覓む

るや、偶ま長老との一呹を千山の上に留めてより、一呹が散じて人間萬竅の風と爲つて響がある、

【餘論】紀曰く、此眞偈子矣と、余曰く純偈でも無く、純詩でもない、妙は半偈半詩の間に在る、

余過溫泉。壁上有詩云。直待衆生總無垢。我方清冷混常流。問人云長老可遵作。遵已退居圓通。亦作一絕

余温泉を過ぐ、壁上詩あり、云ふ、直待す衆生總て無垢を、我方に清冷にして常流に混す、人に問へば云ふ長老可遵の作と、遵已に圓通を退居す、亦一絕を作る

石龍有口口無根。　石龍口あり口に根無し、
自在流泉誰吐吞。　自在流泉誰か吐吞する、
若信衆生本無垢。　若し衆生 本無垢を信せば、
此泉何處覓寒溫。　此の泉何れの處にか寒溫を覓めん、

〰〰〰〰〰〰

【詩意】石龍は口あるとも口には根がない、故に自在に流泉を吐吞する、若し一切衆生は本來無垢なりとせば、此の流泉は何れの處に向うて寒溫を覓むるや、

【餘論】紀曰く、亦是偈子、此種偶作何妨、但入集則須斟酌矣と、「冷齋夜話」に曰く、廬州僧可遵、好作詩、暴所長以盖人、叢林貌禮也、而心不然、嘗題詩湯泉壁間、東坡游廬山、偶見爲和之、遵曰、禪庭誰立石龍頭、龍口湯泉沸不休、直待衆生塵垢盡、我方清冷混長流、東坡和之、遵自是愈自矜伐と、陸放翁の「老學菴筆記」に、可遵詩、本凡惡、偶以無垢句、爲東坡所賞、大自矜詡、追坡至前途、自言有一絕、欲題三峽之後、遂朗吟曰、君能識我湯泉句、我却愛君三峽詩、道得可嘶不可漱、幾多詩將竪降旗、坡悔賞拔之誤、且惡其無禮、促駕去、可遵、徑至栖賢、欲題所擧絕句、寺僧方礱石、刻坡詩、大詬而逐之、山中傳以爲笑と、學に根柢なく、僅かに韻字を知る者、此の僧に類するものが古今多い、可遵が佛印に贈るの詩、上國歸來路幾千、渾身猶帶御鑪煙、鳳凰山下敲蓬戶、驚起山翁白晝眠、佛印答へて曰く、打睡禪和萬萬千、夢中趁利走如煙、勸君抖擻修禪定、老覺如蠶已再眠と、漁隱叢話に在り、

世傳徐凝瀑布詩云。一條界破青山色。至爲塵陋。又僞作樂天詩。稱美此句。有賽不得之語。樂天雖涉淺易。然豈至是哉。乃戲作一絕

世に傳ふ徐凝瀑布の詩に云ふ、一條界破す青山の色、至つて塵陋と爲す、又樂天の詩を僞作して稱す、此の句を羨み、賽するを得ざるの語あり、樂天淺易に渉ると雖も、然かも豈是に至らんや、乃ち戲れに一絕を作る

帝遣銀河一派垂。　帝は銀河一派を垂れしめ、
古來惟有謫仙詞。　古來惟謫仙の詞あり、
飛流濺沫知多少。　飛流濺沫知んぬ多少ぞ、
不與徐凝洗惡詩。　徐凝に與へて惡詩を洗はず、

【字解】〔一〕謫仙詞　李太白の詩、日照香爐生紫煙、遙看白布挂長川、飛流直下三千丈、疑是銀河落九天と、〔二〕飛流　「孫綽天台山賦」に、瀑布飛流以界道と、〔三〕濺沫　張九齡の廬山瀑布詩に、濺沫驚飛鳥と、〔四〕徐凝　睦州の人、元和中に官侍郎に至る、廬山瀑布の詩、虛空落泉千仞直、雷奔入江不暫息、今古長如白練飛、一條界破青山色と、「全唐詩話」に、白居易、刺杭州、張祜自負詩、以解頭爲己任、徐凝後至、誦所作瀑布詩、祜愕然、居易遂以凝爲首薦と、李肇の「國史補」に、憲宗晩年尤工詩、臣下莫及、杜太保、在淮南、進崔叔清詩百篇、帝謂使者曰、此惡詩何用進と、「東坡詩話」に、僕初入廬山、有以陳令舉廬山記見寄者、且行且讀、見其中有徐凝李白之詩、不覺失笑、開元寺主求詩、爲此一絕と、

【題義】世に傳誦する徐凝の瀑布詩は實に塵陋である、又徐凝は樂天が此の句を羨稱して己れには賽することと出來ないと云うたと僞作して居る、樂天の語は淺易に渉ると雖も、ここまでには至らない、故に戲れに此の一絕を作るのである、

【詩意】天帝は銀河一派を垂下せしむ、之を詠ずる者は古來より唯謫仙が一詞あるのみ、其の飛流の濺沫は多少を知らないが、徐凝に與へて惡詩を洗はない、

【餘論】紀曰く、詆之太過、此自有意翻案、非持平之論也と徐凝の爲めに辯護せるが、三百代言の辯護にて、辯護の功は無い、謫仙が黃鶴樓を詠せんとして武昌に赴くも、已に崔顥の名篇ありて、手の著け樣が無い、已むを得ず去つて金陵の鳳凰臺を詠じたのである、絕大の人は、皆己を知り、又他を知る、魯鈍の徒は己をも知らず、他も知らない、往往に螢火を以て太陽に比較せんとする、坡公が徐に痛棒を與へたるは、眞實慈悲である、紀の詆之太過と云ふは、公の慈悲心を知らないからである、徐凝に香爐峯を詠ずる五絕がある、香爐一峯絕、頂在寺門前、盡是玲瓏石、時生旦暮煙と、到底兒童と游ぶべし、大人と交游する資格は無い、

## 書李公擇白石山房　李公擇の白石山房に書す

偶尋流水上崔嵬。　偶ま流水を尋ねて崔嵬に上る、
五老蒼顏一笑開。　五老蒼顏一笑して開く、
若見謫仙煩寄語。　若し謫仙を見ば寄語を煩はす、
康山頭白早歸來。　康山頭白し早く歸來せよと、

【字解】〔一〕崔嵬　「詩卷耳」に、陟彼崔嵬と、〔二〕五老　李太白五老峯の詩、廬山東南五老峯、青天削出金芙蓉と、〔三〕謫仙　賀知章が太白を稱せし語、〔四〕寄語　梁元帝の詩、寄語古人情と、〔五〕康山　廬山は匡廬山が舊名であるが、宋の太祖は趙匡胤、匡の字避ける必要がある、

【題義】李公擇は廬山の楞伽院內白石菴に於て書を讀み、此處に異書九千卷を藏したのである、公擇は宦途に赴きしも山房は依然として廬山に置く、公は別に李氏山房藏記を作り、沈德潛の唐宋八大家文鈔中に收めて諸生も知つて居る、

【詩意】偶ま流水を尋求して崔嵬に上りて行く、先づ看る五老峯の蒼顏が我を迎へて一笑開くが如くである、李君は山中に在つて若し謫仙を見ば東坡が一語を寄せたと傳へて吳れ玉へ、廬山に頭髮白くなるまで居らずに早く歸來し玉へと、

【餘論】太白の死、舊唐書には、醉死於宣城とある、新唐書には、潯陽釋囚、辟爲參謀、未幾辭職、李陽冰、爲當塗令、白依之、代宗立、以左拾遺召、而白已卒、年六十餘、白晚好黃老、度牛渚磯、至姑孰、悅謝家青山、欲終焉、及卒葬東麓云云、後裔泣曰、先祖志在青山、頃葬東麓非本意云云とある、當塗の李陽冰の處に於て卒すとなれば、當塗は卽ち宣城なれば二唐書とも合致する、然らば此の三四二句如何が解すべきや、康山ヨリ歸レでなく、康山へ歸レと云ふ意味に解するや、此の解が可なりとせば第三句が落著しない、故に余は前の如くに暫く認む、紀曰く、本地風光、點染殊妙と、禪語を嫌ふ觀奕道人が本地風光などと禪語を用ふるは奇怪なる感を生ずるのである、

## 廬山二勝

廬山の二勝

余游廬山。南北得十五六奇勝。殆不可勝紀。而懶不作詩。獨擇其尤佳者作二首。

【訓讀】余廬山に游び、南北に十五六の奇勝を得たり、殆んど紀するに勝ふべからず、而かも懶にして詩を作らず、獨其の尤も佳なるものを擇んで二首を作る、

### 開先漱玉亭

開先漱玉亭

高巖下(一)赤日。(二)深谷來(三)悲風。　高巖赤日に下り、深谷悲風來る、
(四)擘開青玉峽。飛出兩(五)白龍。　擘開す青玉峽、飛出す兩白龍、
亂沫散霜雪。古潭搖清空。　亂沫霜雪散じ、古潭清空を搖かす、
餘流滑無聲。快瀉雙(六)石矼。　餘流滑かに聲無く、快瀉す雙石矼、
我來不忍去。月出飛橋東。　我來りて去るに忍びず、月は出づ飛橋の東、
(七)蕩蕩白銀闕。(八)沈沈(九)水精宮。　蕩蕩たり白銀闕、沈沈たり水精宮、
願隨(一〇)琴高生。脚踏赤鯶公。　願はくは琴高生に隨つて、脚赤鯶公を踏まん、
手持白芙蕖。跳下清泠中。　手に白芙蕖を持して、跳下せん清泠の中に、

【字解】【一】赤日　杜子美の詩、日色赤如血と、【二】深谷　毛詩に、高岸爲谷、深谷爲陵と、【三】悲風　杜子美の詩、慘澹來悲風と、【四】擘開　「述征記」に、華山首陽本一山、巨靈擘開、以通河流と、【五】兩白龍　查初白云ふ、漢陽峯之頂多瀆泉、趵突播流、西爲谷簾泉、東爲開先之二瀑、二瀑同源異流、其在東北者、瀉出鶴鳴、龜背二峯之間、曰馬尾水、其在西南者、則自山頂下、注雙劍峯背、匯爲大龍潭、下注大壑、懸挂數百丈。曰瀑布、水循壑、西北與馬尾水合流、出兩山峽中、下注

石潭一、石碧両削、水練両飛、潭紺両涸、爲二開先佳境一、因名二其峡一、曰二青玉峡一、潭曰二龍池一、二潭倶奇觀、両西潭尤勝と、【六】　雙石硔　二つの大なる谷、硔は谷壑である、【七】　藹藹　「論語泰伯篇」に、蕩蕩乎民無二能名一焉と、又「堯典」に、蕩蕩懐レ山襄レ陵と、廣大なる貌、意義は有形無形共に用ふ、【八】　沈沈　夜の深けゆくを云ふ、【九】　水精宮　「逸史」に、盧杞、嘗騰二上碧霄一、見二宮闕樓臺一、皆以二水晶一爲レ牆、有二女子一謂曰、此水晶宮也と、【一〇】　琴高生　「列仙傳」に、琴高、趙人、以レ鼓レ琴爲レ樂、康王舍人、行二涓彭之術一、浮二游冀州涿郡之間一、二百餘年、後辭入二涿水一、取二龍子一、與二弟子一期、至レ日皆潔齋、候二於水傍一設レ祀、果乘二赤鯉一來、坐二祠中一、且有二萬人觀一レ之、留一月、復入レ水去と、

【題義】　廬山の開先禪院は南唐の李景が立つる所、禪院中の漱玉亭の景勝を敍して十六奇中の第一と爲したのである、

【詩意】　高巖には赤日の下るを見、深谷には悲風の來るを聞く、青玉峽は擘開して、中間には兩白龍が飛んで出る、其の白龍の亂沫は霜や雪を散ずる如くである、古潭は清空を搖かし、其の餘流は滑かにして聊かも聲がない、且靜かに快瀉して雙石硔に落ち入る、我は此に來りて容易に去るに忍びない、黄昏より月が飛橋の東方に上り出づる、譬へば蕩蕩たる白銀闕かとも疑ふ、又沈沈たる水晶宮かとも疑ふ、願はくは琴高生の如き仙人に隨つて、脚は赤鯉公を踏みたしと、而して手には白芙蕖を持して跳下したしと思ふ清冷の淵中に、

【餘論】　紀曰く、不二必定有二深意一、直是氣象不レ同、與二三峽橋詩一、倶奇警、此近二太白一、彼近二昌黎一、寫二瀑布一、奇勢迭出、曲二盡其妙一、此巨靈開レ山手、徐凝惡詩、誠不レ足レ道と、紀は前に徐凝の爲めに辯護し、此に至りて徐凝を貶す、滑稽なりと思ふ、

## 棲賢三峽橋

吾聞太山石、積日穿綫溜。　吾聞く太山の石、日を積んで綫溜に穿たると、
況此百雷霆、萬世與石鬭。　況んや此の百雷霆、萬世石と鬭ふをや、
深行九地底、險出三峽右。　深きは九地の底を行き、險は三峽の右に出づ、
長輪不盡溪、欲滿無底竇。　長く不盡の溪を輸し、無底の竇に滿たんと欲す、
跳波翻潛魚、震響落飛狖。　跳波潛魚翻り、震響飛狖を落とす、
清寒入山骨、草木盡堅瘦。　清寒山骨に入り、草木盡く堅瘦、
空濛煙靄間、澒洞金石奏。　空濛煙靄の間、澒洞金石奏す、
彎彎飛橋出、瀲瀲半月彀。　彎彎飛橋出づ、瀲瀲半月彀、
玉淵神龍近、雨雹亂晴晝。　玉淵神龍近く、雨雹晴晝亂る、
垂缾得清甘、可嚥不可漱。　缾を垂れて清甘を得たり、嚥む可くして漱ぐ可からず、

【字解】【一】　太山石　「漢枚乘傳」に、太山之霤穿レ石、漸靡使二之然一也と、【二】　九地底　王梅溪曰く、兵書行二於九地之下一と、【三】　三峽　杜子美の詩、『詞源倒流三峽水』と、蜀中の三峽、【四】　長輪　韓退之の詩、高浪駕レ天輸二不盡一と、【五】　無底　「列子湯問篇」に、渤海之東、有二大壑一焉、實無底之谷、名曰二歸墟一と、【六】　竇　孔穴、アナ、【七】　飛狖　狖は猿狖、黑ザル、【八】　淸寒　韓退之

の詩、濟寒瘦骨許崚嶒と、【九】草木　白樂天の詩、巖崿無撮土、樹木多瘦堅と、【一〇】澒洞　杜子美の詩、青冥澒洞と、【一一】彎彎　皮日休の詩、彎彎向身曲と、【一二】瀲瀲　水のあふれる貌、又サザナミの貌、楊雯の詩、春江瀲瀲清且急と、【一三】半月彀　彀に弓張り月、韓退之の文、見秋月之三彀と、【一四】玉淵　玉淵潭、三峽橋上流に在る、【一五】不可漱　「晉書」に、孫楚子、少時欲隱居、謂王濟曰、當云欲枕石漱流、誤云漱石枕流、濟曰、流非可枕、石不可漱、楚曰、所以枕流、欲洗其耳、所以漱石、欲礪其齒と、

【題義】棲賢谷の三峽橋の奇景を敍した詩である、

【詩意】吾は聞いて居る太山の石は鋸の如くであると、永い間綫溜の爲め打たるるに由る、況んや此の瀑布が百雷霆の落下する如き勢にて、萬世石と鬪ふに於てをや、其の深さは九地の底まで行き、其の險しさは蜀の三峽の右に出づると稱されて居る、長く不盡の溪を運輸して、以て無底の竇孔に滿たさんとする、跳波は潛む所の魚も翻上し、震響には飛狖も落下する、四邊の清寒は山骨まで逼入して、草木は盡く堅瘦の狀態である、而して空濛たる煙靄の間に在つて、澒洞は金石奏する美音も聞く、彎彎と曲る飛橋も出で、瀲瀲たる半月彀の如き形である、玉淵潭は神龍近うして、雨雹は盛に晴晝を亂す、綆を垂れ清甘を得るも、但是れ嚥むことは出來る、口をすすぐことは出來ない、

【餘論】紀曰く、奇景以精理通之、發爲高談、結爲香豔、絡繹間起、使人應接不暇と、又曰く、清寒入山骨、草木盡堅瘦、十字絕唱と、此の二篇を讀む、李杜韓の三大家合して一人と爲るやの感がある、玉堂を宗とする者、此等の處に於て歸命頂禮すべきである、

# 自興國往鈷宿石田驛南廿五里野人舍

興國より鈷に往き、石田驛南廿五里、野人の舍に宿す

谿上青山三百疊。　谿上の青山三百疊、
快馬輕衫來一抹【一】。　快馬輕衫來る一抹、
倚山修竹【二】有人家。　山に倚る修竹人家あり、
橫道清泉知我渴。　道に橫はる清泉我が渴を知る、
芒鞵竹杖自輕軟。　芒鞵竹杖自から輕軟、
蒲薦【三】松牀亦香滑。　蒲薦松牀亦香滑、
夜深風露滿中庭。　夜深けて風露中庭に滿つ、
唯有孤螢自開闔【四】。　唯孤螢の自から開闔するあり、

【字解】【一】一抹　「宣和畫譜」に、蹤影追電、一抹千里と、ひとなすり、杜牧之の詩、一鏃橫抹と、【二】修竹　「吳禮部詩話」に曰く、東坡自黃移汝、別子由於高安、過瑞昌亭子山、題字崖石、點墨竹葉上、至今環山之竹葉、葉有墨點、景定中、王景璞、主瑞昌簿、移植廳事、扁其堂、曰景蘇、蓋簿廳、東坡夜宿處也と、馮應榴曰く、瑞昌與興國、往鈷經由之路と、【三】蒲薦　ガマムシロ、「釋名」に、青齊閒人、謂蒲薦爲蒲席と、【四】閈闔　閈は明、闔は滅、

【詩意】谿上の青山は三百疊の大さである、快馬に騎り輕衫を著ける身は一抹に過ぐるを得、山に倚る修竹は皆人家を繞りてある、道に橫はつて出る清泉は我が渴を知る、芒鞵と竹杖の身も亦輕軟である、蒲薦も松牀も亦香滑である、夜深に及んで風露は蕭蕭として中庭に滿ちて、其の間に孤螢の影

が明滅するを見る、

【餘論】紀曰く、語自俊逸、不嫌其剽、結亦幽絕と、今考ふるに元來一首であるが、恰も二首の如くの調である、快馬輕衫にて夜裝は足る、更に芒鞋竹杖とある、紀は俊逸と評するが毫も俊逸の處は無い、但結末の幽絕は當る、

## 過建昌李野夫公擇故居

建昌の李野夫公擇が故居を過ぐ

(一)彭蠡東北源。廬阜西南麓。　彭蠡東北の源、廬阜西南の麓、

何人修水(二)上。種此一雙玉(三)。　何人か修水の上、此の一雙玉を種うる、

思之不可見。破宅餘修竹。　之れを思ふも見るべからず、破宅修竹を餘す、

四鄰戒莫犯。十畝森(四)似束。　四鄰戒めて犯すこと莫し、十畝森として束ぬるに似たり、

我來仲夏初。解籜呈新綠。　我來る仲夏の初、籜を解いて新綠を呈す、

幽鳥向我鳴。野人留我宿。　幽鳥我に向つて鳴く、野人我を留めて宿せしむ、

裴徊不忍去。微月挂喬木。　裴徊去るに忍びず、微月喬木に挂る、

遙想他年歸。解組(五)巾一幅。　遙かに想ふ他年歸り、組を解きて巾一幅、

對牀老兄弟。夜雨鳴竹屋。　對牀す老兄弟、夜雨竹屋に鳴る、

臥聽鄰寺鐘。書窗有殘燭。　臥して聽く鄰寺の鐘、書窗殘燭あり、

【字解】【一】彭蠡　湖の名、今日江西の鄱陽湖、【二】修水　「名勝志」に、修水、在艾縣南、東流屈曲、六百三十八里、出建昌城、又百二十里、入於彭蠡、以其流長、故曰修と、【三】雙玉　兄の李華と弟の公擇を指す、「徐鉉搜神記」に、陽公子雍伯、常設義漿、以給行旅、歸三年、有一人就公飲、出石子一升、與之曰、種此可得美玉、幷得好婦、如言種之、後求徐氏婚、徐笑曰、得白璧一雙乃可、公於所種玉田、果得玉、徐氏乃以女妻之と、【四】森似束　元稹の詩、建昌宮中滿宮竹、歲久無人森似束と、【五】解組　唐玄宗帝の詩序に、解組辭榮と、退官すること、

【題義】建昌の李野夫と公擇との兄弟の故居を過ぎて作つた詩である、

【詩意】彭蠡湖の東北源の地、廬阜西南の麓、此處に何人か修水上に、此の一雙玉を種ゑしものである、之を思ふも其の人は已に見るべからず、唯破宅には修竹を餘すのみ、而かも四鄰は互に相戒めて竹を犯すことをしない、是の故に十畝森森として束ぬる如く大となる、我の訪ひ來る恰も仲夏即ち四月の初旬である、竹が籜を解いて正に新綠を呈する節、幽鳥は啾啾として我に向つて鳴き、近鄰の野人は我に留宿を勸める、我は裴徊して去るに忍びない、暫くにして微月は喬木の上に挂り、是に於て舊時の事を想ふ官を辭して歸り、官服を棄て隱者の巾一幅と換へる、一牀に對坐する老兄弟は、夜雨の竹屋に鳴るのを聞き、又は臥して鄰寺の鐘を聽く、今日も書窗に殘燭がある、

【餘論】紀曰く、二李之爲人可知、若直作贊詞即是凡筆と、又末句を評して、此批固是然、東坡

之意、只補寫二李生平、以盧筆託出耳、前路設二李處、都是隱隱躍躍、未明言爲何如人也と、結句書齒の五字、兄弟在時の事を敍したるや、或は公が今日の見る所を言ふや、解釋は孰れにも出來る、余は公が弔意を此に示すものと見る、

## 將至筠先寄遲适遠三猶子

將に筠に至らんとし、先づ、遲・适・遠の三猶子に寄す

(一)露宿(二)風餐六百里。
露宿風餐六百里、

明朝(三)飲馬(四)南江水。
明朝馬に飲ふ南江の水、

未見(五)豐盈犀角兒。
未だ見ず豐盈犀角兒、

先逢(六)玉雪(七)王郎子。
先づ逢ふ玉雪王郎子、

【自注】時道遜王郎於建昌、方北行也。

對牀欲作(八)連夜語。
對牀連夜の語を作さんと欲す、

念汝還須(九)戴星起。
念ふに汝も還た須らく星を戴きて起つ〔べし、〕

夜來夢見(一〇)小於菟。
夜來夢に見る小於菟、

【自注】遲小名虎兒。

【字解】【一】露宿 「後漢書王渙傳」に、境內淸夷、商人露宿於道と、野じゆく、【二】風餐 風を食ふ、是も野宿、鮑明遠の詩、風餐委松柏と、【三】飲馬 「風俗通」に、洪黃子廉、性廉介、毎飮馬、輒投錢於水と、馬に水を呑ます、【四】南江水 「太平寰宇記」に、蜀水在高安縣北三里、源出小界山、東流入南昌、與章水合、水南有錦江亭と、【五】豐盈 「國語」に、史伯曰、今王惡角犀豐盈、而近頑童窮固と、狀貌の奇特を云ふ、【六】玉雪 韓退之の「馬繼祖墓志」に、肌肉玉雪可念と、【七】王郎子 子由の壻、王子立を指す、【八】連夜語 白樂天の詩、要語連夜語、【九】戴星起 「呂氏春秋」に、宓子賤、治單父、彈鳴琴、身不下堂、而單父治、巫馬期、戴星出入、日夜不居、而單父亦治、巫馬期、問其故、宓子曰、我之謂任人、子之謂任力、任力者故勞、任人者故逸と、【一〇】小於菟 「左傳」に、於菟神鹿、儼列西北と、虎を於菟と云ふ、楚國の方言、小於菟は虎兒である、【一一】髧髦 「詩鄘風」に、髧彼兩髦と、髦は髮の垂れたる貌、【一二】古河東 査初白曰く、先生年譜、熙寧九年、子由爲齊州掌書記、時先生、自密州就差知河中府、明年正月、過濟南、故云我時移守古河東、時尙未聞改徐州命也と、【一三】渾舍 韓退之の詩、渾舍驚伯走折趾と、

猶是(一一)髧髦垂兩耳。
猶ほ是れ髧髦兩耳垂る、

憶過濟南春未動。
憶ふに濟南を過ぐるも春未だ動かず、

三子出迎殘雪裏。
三子出で迎ふ殘雪の裏、

我時移守(一二)古河東。
我時に移り守る古河東、

酒肉淋漓(一三)渾舍喜。
酒肉淋漓渾舍喜ぶ、

而今憔悴一(一四)羸馬。
而今憔悴す一羸馬、

逆旅(一五)擔夫相(一六)汝爾。
逆旅の擔夫相汝爾、

出城見我定驚嗟。
城を出で我を見て定んで驚嗟せん、

身健窮愁不須恥。
身健なるも窮愁恥づるを須ひず、

我爲(一七)乃翁留十日。
我乃翁の爲め留まること十日、

(一八)掣電一歡何足恃。
掣電一歡何ぞ恃むに足らん、

惟當(一九)火急作新詩。
惟當に火急に新詩を作るべし、

一醉兩翁勝酒美。
一醉兩翁酒美に勝る、

【一四】羸馬　羸は疲羸、羸弱、つかれた馬、【一五】擔夫「唐李太白傳」に、見公主擔夫爭道と、荷を負ふ男、【一六】汝爾　爾汝を倒用す、「後書」に、禰衡少與孔融作爾汝交と、キサマ、オレと隔意なき交り、【一七】乃翁「漢張良傳」に、迺公自行爾と、顔師古曰く、乃公汝父也と、【一八】掣電　其の疾速なるを云ふ、杜子美の詩、走過掣電傾城知と、【一九】火急　意義は掣電と同じ、柳子厚の詩、顧君火急孫工用、趁取當時二妙聲と、武后の詩、明朝游上苑、火急報春知と、

【題意】元豐七年に興國を去つて將に筠州に往かんとする時、此の詩を作りて蘇遲・蘇适・蘇遠の三猶子に寄せたのである、

【詩意】露宿風餐すること六百里、明朝は馬に南江の水を飲ますことが出來る、而かも未だ豐登犀角の君等三人を見ることは能ふまい、先づ對面するは玉雪の王郎子である、君等に逢うて對牀夜通し談話せんことを思へども、念ふに君等は勤勉なれば早く家を出でて不在なるやも知れぬ、昨夜來の夢に虎の兒を見たが、猶ほ是れ髧髦が兩耳に垂れ親虎の形其の儘である、今に記憶する我が濟南を過ぐる時春は未だ動かず、其の時君等三人は殘雪の中に迎へらる、我は時に移りて古河東を守りに往く、時に酒肉淋漓として渾舍の兒等皆喜ぶ、而今は當時と異なり憔悴せる一羸馬である、宿屋の擔夫どもと相汝爾する、三人は城を出でて我を見れば定んで驚嗟するであらう、我は身健なれば窮愁は恥ぢる要はないと思ふ、我は汝には父我には弟たる者の家に留まること十日、掣電一歡事は何ぞ恃むに足らん、唯當に火急に新詩を作るがよいと思ふ、一醉する兩翁は酒美にも勝るであらう、

【餘論】紀曰く、筆仗跳脫之至と、又曰く隨手撇過、隨手急入と、

端午游眞如遲适遠從子由在酒局
端午眞如に游ぶ、遲・适・遠從ふ、子由は酒局に在り

一與子由別。却數七端午。(一)　一たび子由と別れ、却つて數ふ七端午、
身隨綵絲繫。心與昌歜苦。(二)(三)　身は綵絲に隨つて繫がれ、心は昌歜と苦し、
今年匹馬來。佳節日夜數。(四)　今年匹馬來り、佳節日夜に數ふ、
兒童喜我至。典衣具雞黍。(五)　兒童我が至るを喜び、衣を典して雞黍を具ふ、
水餅既懷鄉。飯筒仍愍楚。(六)(七)　水餅既に鄉を懷ひ、飯筒仍ほ楚を愍む、
謂言必一醉。快作西川語。(八)　謂つて言く必ず一醉せんと、快く西川の語を作す、
寧知是官身。糟麴困熏煮。(九)　寧ぞ知らん是れ官身なるを、糟麴困んで熏煮す、
獨攜三子出。古刹訪禪祖。(一〇)　獨り三子を攜へて出で、古刹に禪祖を訪ふ、
高談付梁羅。(一一)【自注】梁羅遲适小名也。　高談梁羅に付し、
詩律到阿虎。(一二)　詩律阿虎に到る、
歸來一調笑。慰此長齟齬。(一三)(一四)　歸來一調笑、此の長く齟齬するを慰む、

【字解】【一】端午　五月五日が端午、端五と云ふ、【二】綵絲　五色の絲、「荊楚歲時記」に、綵絲一名長命縷、一名續命縷、一

名詳兵辟、一名五色絲、一名朱索と、此の日、肩に懸け、又臂に繫け、惡病を受けないと云ふ、【三】昌歜 「左傳僖公三十年」に、王使₂周公閲₁來聘₁、饗有₂昌歜₁、杜預曰、菖蒲菹也と、菖蒲のヒメシモノである、「藥性論」に、昌蒲味辛苦と、端午には菖蒲を酒に泛して飲む、【四】西馬 杜子美の詩、短衣西馬隨₂李廣₁と、【五】典衣 衣服を質屋へ置く、其の實、殷勤に優待する意味、【六】水餅 「南史」に、高帝好₂水引餅₁、戢毎設上焉と、【七】飯筒 端午に楚人筒に飯を盛つて水に投じ、以て屈原を弔する、【八】西川 今日の四川省の西部、唐は劍南西川節度使を設け、宋は西川路とする、【九】糈麪囷 一本に糈麪同に作る、同の字可なるを覺ゆ、公は前に糈麪有₂神重不₁醉の句を作る、子由が酒税官たるを云ふ、【一〇】譚組 普通に言へば達磨であるが、今は誰を指したるや判じ難い、【一一】梁羅 公の自注に、梁羅迺适小名也と、【一二】阿虎 虎卽ち於菟は遠の小名、【一三】調笑 謝靈運の詩、調笑輒酬答と、李白の詩、調笑二千石と、嘲笑や戲謔と同じ、からかひ笑ふのである、【一四】齟齬 「宋玉九辯」に、齟齬而難₂入と、「太玄經」に、其志齟齬と、上下の齒がそろはぬこと、

【題義】端午の日に眞如寺に游ぶ、其の猶子たる遲と适と遠と隨行し、子由は酒局に在ると云ふ、

【詩意】一たび子由と別れてから、過去を數へて見ると端午を七回經て居る、其の間に身は綵絲（世の俗累）の爲めに繫がれ、心は菖蒲の苦味と同じく愉快は少かつた、今年は匹馬にて此の筠州に來り、端午の佳節を日夜數へて待つ、兒童輩は我が至るを喜んで、種種に意を盡くして馳走をする、水餅を食うては鄕土の事を懷ひ、飯筒を見ては楚人を愍む情を起こす、兒童等に向つて言ふ我必ず一醉すれば、愉快の氣にて西川の語も作すであらう、寧ぞ知らんや子由は是れ在官の身にて、酒局の中に自由を得ない、因つて我は汝等三人と出游する、而して此の眞如寺と云ふ古刹に歷史を訪ふ、梁羅の二人には高談放言し、阿虎は詩律を解するに因つて詩を論ずる、歸來して調笑するに勝へぬ、平生長く齟齬して居りしことを慰むるを得、

【餘論】紀曰く、詩亦淸老、苦不₂出色₁と、何事を批評したるや聊か了解に苦む、紀は評語に於て、一家の奇語を作る癖あり、鬼面嚇人に類する、余をして此の詩を評せしめば、偶然涉筆、平調諧和と作さんと思ふ、

## 別子由三首兼別遲　子由に別る三首、兼ねて遲に別る

知君念我欲別難。　知んぬ君が我を念うて別れんと欲する難きを、
我今此別非他日。　我今此の別他日にあらず、
風裏楊花雖未定。　風裏の楊花未だ定まらずと雖も、
雨中荷葉終不淫（一）。　雨中の荷葉終に淫はず、
三年磨我費百書。　三年我を磨くに百書を費し、
一見何止得雙璧（二）。　一見何ぞ止だ雙璧を得ん、
願君亦莫嗟留滯（三）。　願はくは君亦留滯を嗟する莫かれ、
六十（四）小劫風雨疾。　六十小劫風雨疾し、

【字解】【一】不淫 馮應榴曰く、海錄碎事云、池荷不₂淫、火玉常冷と、【二】雙璧 「北史陸凱傳」に、見₂其兄弟₁、歎曰、僕以₂年老₁、更覩₂雙璧₁と、二箇並びて美なるもの、【三】留滯 「漢司馬遷傳」に、天子始建₂漢家之封₁、太史公、留₂滯周南₁、不₂得₁與從₁事、發憤且₂卒と、【四】六十小劫 大劫、中劫、小劫と云ふことあり、人壽八萬歳より、百年毎に一年を減じ、十歳に至り、其の十歳より、百年毎に一年を增して、八

爲說に至る、此の增劫又は減劫の一一を小劫とするのである、「法華經」に、六十小劫、不レ起二於座一と、

【詩意】君は我と別るるの惜念あるを知つて居る、されど此の別れは他日ではない、我が身は風裏の楊花にて落ちるか落ちないか未だ定まらざるも、我が心は雨中の荷葉と同じく終に溼はない、三年間我を磨くに百書を閱するの力を費す、一見して雙璧を得たるの喜び以上である、願はくは君も亦此處に留滯するを嗟いてはいかぬ、六十小劫は人間の力で計算出來ない長い日であるが實は風雨一過の疾かさと同じ、

〔二〕

先君昔愛洛陽居。
我今亦過嵩山麓。
水南卜築吾豈敢。
試向伊川買修竹。
又聞緱山好泉眼。
傍市穿林瀉冰玉。
遙想茅軒照水開。
兩翁相對清如鵠。

〔二〕

先君昔　愛す洛陽の居、
我今亦過ぐ嵩山の麓、
水南卜築吾豈敢てせん、
試みに伊川に向うて修竹を買ふ、
又聞く緱山の好泉眼、
市に傍ひ林を穿ちて氷玉を瀉ぐ、
遙かに想ふ茅軒水を照して開くを、
兩翁相對して淸きこと鵠の如し、

【字解】【一】先君　子由が「卜居賦」に、昔余先君、以二布衣一學二四方一、嘗過二洛陽一、愛二其山川一、慨然有二卜居意一、而貧不レ能レ遂と、【二】嵩山　洛城の東南五十里の地、【三】水南　「史記」に、周公營二周居于洛邑一、又成王、使三召公卜二居焉一、「尙書洛誥注」に、瀍澗之間、南近二洛吉一と、【四】伊川　「元和郡縣志」に、洛陽三川、伊洛河也、伊水西自二陸渾縣界一、流入二伊闕一、東北過二洛陽縣一南入二於洛一と、【五】緱山　「元和郡縣志」に、緱氏山、在二緱氏縣東南二十九里一、王子晉得レ仙處と、

【詩意】我が先君は昔洛陽に居住する希望であつた、我は今亦洛城に近き嵩山の麓を過ぎる、其の水南に卜築するもよからうが吾豈敢てせんや、其の居住が善いか惡いか試驗の爲め伊川に向うて修竹の地を買ふ、又聞く緱山には好泉眼と稱するものがあると、市に傍ひ林を穿ちて泉が氷玉を瀉ぐ、遙かに想ふ茅軒は水に照映して開き、其の軒下に兩翁相對して淸きこと白鵠の如きであるを、

〔三〕

兩翁歸隱非難事。
惟要傳家好兒子。
憶昔汝翁如汝長。
筆頭一落三千字。
世人聞此皆大笑。
愼勿生兒兩翁似。
不知樗櫟薦明堂。

〔三〕

兩翁の歸隱は難事にあらず、
惟要す傳家好兒子を、
憶ふ昔　汝が翁汝が如く長じ、
筆頭一たび落す三千字、
世人此を聞いて皆大笑、
愼んで兒を生む兩翁に似ること勿かれ、
知らず樗櫟の明堂に薦むるは、

【字解】【一】好兒子　「後漢鄭玄傳」に、老物不レ足レ惜、慮レ困二我好兒一耳と、【二】大笑　「老子」に、下士聞レ道大笑レ之と、【三】樗櫟　徒に大木にて、用に立たぬもの、無用の人物に譬ふ、【四】鹽車　「戰國策」に、汗明見二春申君一曰、夫驥之齒至矣、服二鹽車一而上二太行一、漉汁灑レ地、白汗交流、中阪遷延、負レ轅而不レ能レ上、伯樂遭レ之、下レ車攀而哭

何似(四)鹽車壓(五)千里。　何似ぞや鹽車千里に壓むに、

之、驥於是、俛而噴、仰而鳴、見伯樂之知己也と、李太白の詩、崔嵬鹽車上峻坂と、【五】千里　「荀子」に、驥一日而千里と、王梅谿曰く、今謂以千里之驥、而困壓於鹽車也と、

【詩意】兩翁が退官して歸隱するは難事ではない、唯簡要と思ふことは蘇家を傳ふる好兒子の出づることである、憶ふに昔汝遲の翁が今日汝が長じたる位のときは、筆頭一揮すれば三千字は徑ちに就りしものである、世の凡人輩は此を聞いて皆大笑したものである、愼んで汝も兒を生まば兩翁に似たることはいかぬ、無策の人を朝廷に薦むると、名馬に鹽車を挽かして千里の路に困壓せしむるといづれがよい、

【餘論】前の二首は、子由に別れ、最後の一首は遲に別れる詩である、紀曰く、三首語皆眞至、雖短幅而情理曲包と、

初別子由至奉新作　　初めて子由に別れ奉新に至りて作る

雙(一)鵲先我來。飛上東(二)軒背。　雙鵲我に先だつて來る、飛んで東軒の背に上る、

書隨好(三)夢到。人與佳(四)節會。　書は好夢に隨つて到り、人は佳節と會す、

一(五)歡難把(六)玩。回首了無在。　一歡把玩し難し、首を回らせば了に在ること無し、

却渡來時溪。斷橋號淺(七)瀨。　却つて渡る來時の溪、斷橋淺瀨と號す、

茫茫署天潤。靄(八)靄孤城背。　茫茫署天潤し、靄靄たり孤城の背、

青山(九)旺暭中。落日凄涼外。　青山旺暭の中、落日凄涼の外、

盛(一〇)衰豈我意。離(一一)合非所礙。　盛衰豈我が意、離合礙はる所にあらず、

何(一二)以解我憂。粗(一三)了一(一四)事大。　何を以て我が憂を解かん、粗了る一事大、

【字解】【一】雙鵲　鵲はカサヽギ、又は朝鮮ガラス、「西京雜記」に、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜と、又「天寶遺事」に、時人之家、聞鵲聲以爲吉兆と、【二】東軒　子由が筠州に在つて官舍に建て讀書せし軒の名、【三】好夢　陸龜蒙の詩、好夢經年說と、【四】佳節　佳節は一年の中、何度もある、今は端午を指す、韓退之の詩、偶與佳節會と、【五】一歡　「晉書稽康傳」に、合一歡益離と、【六】把玩　「陳琳の文」讀之喜笑、把玩無厭と、手に取つて玩弄する、【七】淺瀨　瀨は急流を云ふ、【八】靄靄　淵明の詩、停雲靄靄、時雨濛濛と、雲の盛に集る貌、【九】旺暭　「王定保摭言」に、我唐進士、不捷醉飽、謂之打旺暭と、單に字の意義としては昏旺昏暭にて日の明かならざるの謂ひ、青山は漠漠の中に在るとの意、【一〇】盛衰　古詩に、盛衰各有時と、【一一】離合「呂氏春秋」に、萬物盛則毀、合則離と、【一二】何以　魏武の詩、何以解憂と、【一三】粗了　詳了、明了までにはゆかぬ、粗は聊かと同じ、【一四】一事大　「法華經」に、一大事因緣故と、

【題義】初めて子由と別れて奉新縣卽ち今日の江西の潯陽道に赴くの詩である、

【詩意】喜びを報知する雙鵲は我より先に來る、飛び來りて東軒の背に停まる、信書は好夢に隨つて到來し、人は恰も佳節と出會する、而かも其は一歡に過ぎず長く把玩することは出來ない、今日首を回らせば了に其の形跡はない、乃ち此を去つて却つて來時の溪を渡る、斷橋は淺瀨と號するが、此

に來れば茫茫として暑天の濶く、靄靄として孤城とは益す背く、青山はボンヤリと眊矂の中に認むるのみ、落日は淒涼の外、盛衰共に深く我意としない、從つて離合も時に任せ障礙する所ではない、何を以てか我憂を解くものぞ、我は已に粗一事大郎ち道を了つて居る、

【餘論】紀曰く、曲折深至、語皆警策と、余は謂ふ公が七古にせよ、五古にせよ、短古は極めて少く、大底長古である、如何なる大人物でも饒舌に過ぐれば、脫線が往往出來る、此の詩、上に盛衰豈我意とある、已に憂なぞある筈がない、而かも下に來りて何以解我憂とある、前後矛盾して一貫せる脈が無い、余は謂ふ何の警策ぞ、何の深至ぞ、坡公集中尤も下劣なるもの、

## 白塔鋪歇馬

白塔鋪に歇馬す

(一)甘山廬阜鬱相望。　甘山廬阜鬱として相望む、
林隙(二)熹微漏日光。　林隙熹微日光を漏らす、
(三)吳國晚蠶初斷葉。　吳國の晚蠶初めて葉を斷ち、
(四)占城(五)蚕稻欲移秧。　占城の蚕稻秧を移さんと欲す、
(六)迢迢澗水隨人急。　迢迢澗水人に隨つて急、
(七)冉冉巖花撲馬香。　冉冉巖花馬を撲ちて香ばし、

【字解】【一】甘山　未詳、【二】熹微　光の未だ盛ならざる貌、【三】吳國　古の吳は今日の淮洞以南、浙江蓋湖の地を云ふ、【四】占城　國名、本周の越裳の地、秦には林邑、撲には象林縣と爲す、今の安南南部の地、【五】蚕稻　ウルチの早熟な稍と稱し、晚熟を稉と稱す、秧は秧苗、ナヘ、【六】迢迢　張九齡の詩、萬丈洪泉落、迢迢半紫氛と、【七】冉冉　杜子美の詩、雨裛紅蕖冉冉香と、

望眼儘從飛鳥遠。　望眼儘に飛鳥より遠し、
白雲深處是吾鄉。　白雲深き處是れ吾が鄉、

【題義】江西星子縣の白塔鋪に至り馬を休憩して作る、

【詩意】甘山と廬山の鬱蒼たるを望む、林隙には熹微として僅に日光を漏らすを見る、吳國は今や晚蠶を飼育する爲め初めて葉を斷切する、占城は定んで蚕稻の秧苗を移すの節である、迢迢と流るる澗水は人に隨つて急なる如く、冉冉たる巖花は馬頭を撲つて香氣を散ずる、望眼は儘にする飛鳥の遠きまで、白雲深き處は是れ吾が故鄉である、

【餘論】前後二聯、別に巧致と許する程ではないが、唐人の集中に入るるも遜色がない、望の二字あるは聊か疵である、

## 同年程筠德林求先墳二詩

同年程筠德林先墳の二詩を求む

### 思成堂

思成堂

(一)宰樹連山谷。(二)祠堂照路隅。　宰樹山谷に連り、祠堂路隅を照らす、
(三)養松無觸鹿。(四)助祭有馴烏。　松を養うて觸鹿無く、祭を助けて馴烏あり、
歸夢先寒食。(五)兒啼到白須。　歸夢寒食に先ち、兒啼白須に到る、

遙知鄰里化。醉叟道爭扶。　遙に知る鄰里化して、醉叟道爭ひ扶く、

【字解】〔一〕宰樹　「公羊傳僖公三十三年」に、秦伯將襲鄭、百里子、與蹇叔子諫、秦伯怒曰、若爾之年者、宰上之木拱矣と、宰は冢墓である、王思道の詩、蒼蒼宰樹起寒煙と、〔二〕祠堂　杜子美の詩、丞相祠堂何處尋と、〔三〕養松　「晉書」に、許孜二親沒、宿墓所列植松柏、亘五六里、時有鹿犯其松栽、孜悲歎曰、鹿獨不念我乎、明日忽見鹿爲猛獸所殺、自後樹木滋茂、而無犯者と、〔四〕助祭　「晉書成公綏傳」に、有孝烏、每集其廬舍、綏謂有反哺之德、作賦美之と、〔五〕兒啼　「高士傳」に、老萊子年七十、著五色斑斕之衣、戲舞於當庭、爲小兒啼、以悅親と、

【題義】同年程筠德林の事は不明なるが、思成堂と歸眞亭の二墓域を求めて、其の墓に對する詩を作つたのである、

【詩意】墓を繞りて蒼蒼たる樹木は山谷に連る、而して先賢を祀る祠堂、日本のヤシロは路隅を照らしてある、松を養ふて皆鬱茂して居るのは鹿なぞの害が無いことを知る、又祭をする時は馴鳥なぞまで助勢する、先賢の生前を考ふれば歸を懷ふの夢は寒食以前なることを望み、老親の爲めには自分が小兒の眞似までして老親を悅ばした、今日より遙に知る鄰里の人皆其の風に善化して、醉叟が醉叟同志道を爭うて扶ける、

## 歸眞亭

舊笑桓司馬。今師鄭大夫。　歸眞亭　舊笑ふ桓司馬、今師とす鄭大夫、

不知徂歲月。空覺老楸梧。　知らず歲月徂くを、空しく覺ゆ楸梧老ゆるを、

祭禮傳家法。阡名載版圖。　祭禮家法を傳へ、阡名版圖に載す、

會看千字誄。木杪見龜趺。　會看す千字の誄、木杪龜趺を見る、

【字解】〔一〕桓司馬　「禮記」に、孔子居於宋、見桓司馬自爲石槨、三年而不成、夫子曰、若是其靡也、死不如速朽之愈也と、〔二〕鄭大夫　「晉杜預傳」に、邢山上有冢、云是鄭大夫墓、自然之石、不勞工巧、而此石不入世用也、將來兆域儀制、取法於鄭大夫、欲以儉自完耳と、〔三〕徂歲月　杜子美の詩、今夕何夕歲云徂と、〔四〕楸梧　楸はヒサギ、碁局を造るに用ふる木、梧は碧梧、〔五〕阡名　阡は南北の「アゼミチ」、「前漢原涉傳」に、初武帝時、京兆尹曹氏、葬茂陵、民謂其道爲京兆阡、原涉慕之、乃買地開道、立表、署曰南陽阡、人不肯從、謂之原氏阡と、〔六〕版圖　版は戶籍、圖は地圖、其の所領の地を謂ふ、〔七〕會看　會の字は必の義も、偶の義もある、今は會面の義と同じ、出會して看る、〔八〕木杪　杪は木枝の尖端、〔九〕龜趺　石碑の臺石に龜の形を刻みしもの、禮制として五品以上の者の墓の製、宋の葉夢得の「石林詩話」に、學者多譏、木杪見龜趺、爲語病、謂龜趺不當出木杪、殊未之思、東南多葬山上、碑亭往往在半山間、則自下觀之、龜趺出木杪、何足怪哉と、

【詩意】舊時は桓司馬の墓を造るを笑うたものである、今日は鄭大夫の墓の質素なるを師とする、歲月の堂堂と過ぎ去るは知らずして、唯空しく楸梧の長大になるを覺ゆる、祖先を祭るの禮法はどこまでも家法を傳へて居る、又阡名も先賢を記憶する爲め版圖に載せてある、會ずや千字の文を刻したる墓碑を看ん、山の半途より木杪に龜趺の隱見するを見る、

【餘論】紀曰く、養松無觸鹿、五字拙句と、別に典據ありての語、拙でも無い、巧でもない、平語

である、無益の評を下したるものと思ふ、

## 陶驥子駿佚老堂二首　　陶驥子駿佚老堂　二首

文擧與元禮。尙得稱世舊。　文擧と元禮と、尙ほ世舊と稱するを得、
淵明吾所師。夫子乃其後。　淵明は吾が師とする所、夫子乃ち其の後、
挂冠不待年。亦豈爲五斗。　挂冠年を待たず、亦豈五斗の爲めならん、
我歌歸來引。【自注】余增損淵明歸去來、以就聲律、謂之歸來引。　我は歌ふ歸來の引、
千載信尙友。　千載信に尙友、
相逢黃卷中。何似一杯酒。　相逢ふ黃卷の中、何ぞ似ん一杯の酒、
君醉我且歸。明朝許來否。　君醉うて我も且歸らん、明朝來るを許さんや否や、

【字解】【一】文擧　「後漢書」に、孔融字文擧、年十歲隨父詣京師、時河南尹李膺、以簡要自居、不妄接士賓、敕外、自非當世名人、及與通家、皆不得白、孔融欲觀其人、故造膺門、語門者曰、我是李君通家子弟、門者言之膺、請融、問曰、高明祖父、嘗與僕有舊乎、融曰然、先君孔子、與君先人李老君、同德比義、而相師友、則融與君、累世通家、衆座莫不歎息と、【二】挂冠　「後漢逢萌傳」に、萌謂友人曰、三綱絕矣、不去禍將及人、卽解冠挂東都城門と、爾後官を罷むるを云ふ、【三】歸來引　公の自注に、余增損淵明歸去來、以就聲律、謂之歸來引と、施德初曰く、東坡歸來引世歌之、曲名唱過是也と、【四】尙友　孟子の語、【五】黃卷中　「唐書狄仁傑傳」に、黃卷中、方與聖賢相對と、「顏氏家訓」に、黃卷赤軸、五經三史と、古人の寫書、皆黃紙を用ひ、檗を以て之を染め、蠹を防ぐものである、【六】明朝　太白の詩、我醉欲眠君且去、明朝有意抱琴來と、

【題意】姓は陶名は驥字は子駿と云ふ人の佚老堂に題詠したものである、

【詩意】昔孔文擧と李元禮の初めて交際せし時、我は孔、君は李、卽ち孔子と老子は親類關係であると稱した、陶淵明の人品文章は吾が師とする所、而して君は卽ち其の後裔である、君は官途を去るのに恩給年限なぞを待たない、君の祖の淵明は五斗米の爲めに節を折らない、其の後裔の君も同じ道を取る、我も歸來の引を歌ふが、君の祖先は歸去來を歌うて居る、千載を隔てての尙友であると信ずる、世が異なるから面識はないが書物の中にて日日相逢うて居る、餘事は兎もあれ一杯の酒を飮むに如かない、君は酣醉し玉へ我は且く歸ることとする、又復明朝來らんと思ふが君は其れを許すや否や、

〔二〕　〔二〕

我從廬山來。目送孤飛雲。　我は廬山より來る、目送す孤飛の雲、
路逢陸道士。知是千載人。　路に陸道士に逢ふ、知る是れ千載の人、
試問當時友。虎溪已埃塵。　試みに問へば當時の友、虎溪已に埃塵、
似聞佚老堂。知是幾世孫。　聞くに似たり佚老堂、知る是れ幾世の孫、
能爲五字詩。仍戴漉酒巾。　能く五字の詩を爲る、仍ほ戴く漉酒巾、

人呼小靖節。自號(四)葛天民。　人は呼ぶ小靖節と、自から葛天の民と號す、

【字解】（一）孤飛雲　「唐書狄仁傑傳」に、登太行山、反顧見白雲孤飛、謂左右曰、吾親舍其下、瞻悵久之、雲移乃得去と、（二）陸道士　「廬山記事」に、陸修靜、吳興人、少懷塵業、元嘉末、游京都、還入廬山、隱居簡寂觀と、（三）虎溪　「廬山記」に、遠公十八賢、同修淨業、結白蓮社、山有虎溪、遠公送客過此、虎輒號鳴、昔與陶淵明、陸修靜、不覺過虎溪、因相語大笑、好事者、故作三笑圖と、（四）葛天民　杜子美の詩、上古葛天民、不貽王屋憂と、陶淵明の「五柳先生傳」に、酣觴賦詩、以樂其志、無懷氏之民歟、葛天氏之民歟と、

【詩意】我は廬山より此處に來る、目は戀戀と孤飛の雲を送る、來路にて陸道士に突然と逢ふ、心に知る此れは是れ歲の永き人であると、乃ち試みに前世當時の友を問へば、道士は答ふ虎溪は已に埃塵と化し去ると、されど我は髣髴と道士の言ふことを聞くに、今佚老堂と云ふものが在る、虎溪に舊遊の一人靖節の子孫である、其の人能く五字の詩を爲り、頭には靖節と同じく漉酒巾を戴く、故に世人は小靖節と呼稱するが、本人自からは葛天氏の民と稱して居ると、

【餘論】紀は前首を評して曰く、無情處生情、善於弄筆と、後首を評して亦是無中生有と、陶の一字を拈弄して自由を極むる所、公の面目も亦躍如たるものがある、

## 和李太白　李太白に和す

李太白有潯陽紫極宮感秋詩。紫極宮今天慶觀也。道士胡洞微以石本示余。蓋其師卓玘之所刻。玘有道術。節義過人。今亡矣。太白詩云。四十九年非。一往不可復。予亦四十九。感之次其韻。玉芝一名瓊田草。洞微種之七八年矣。云更數年可食。許以遺余。故幷記之。

【訓讀】李太白、潯陽紫極宮秋に感ずる詩あり、紫極宮は今の天慶觀なり、道士胡洞微、石本を以て余に示す、蓋し其の師卓玘が刻する所、玘道術あり、節義人に過ぐ、今亡し、太白の詩に云ふ、四十九年の非、一たび往いて復すべからず、予も亦四十九、之に感じて其の韻に次す、玉芝一名瓊田草、洞微之を種うる七八年なりと云ふ、更に數年食ふ可し、以て余に遺るを許す、故に幷せて之を記す、

寄臥虛寂堂。月明浸疏竹。　寄臥す虛寂堂、月明疏竹を浸す、
冷然洗我心。欲飲不(一)可掬。　冷然我が心を洗ふ、飲まんと欲するも掬すべからず、
流光發(二)永歎。自昔非余獨。　流光永歎を發す、昔より余獨りにあらず、
行年四十九。還此北(三)窗宿。　行年四十九、此の北窗に還りて宿す、
(四)緬懷卓道人。白首寓(五)醫卜。　緬かに懷ふ卓道人、白首醫卜に寓す、
謫仙固遠矣。此(六)士亦難復。　謫仙固に遠し、此の士亦復り難し、
世道如(七)奕棋。變化不(八)容覆。　世道奕棋の如く、變化覆するを容さず、

惟應玉芝老。待得蟠桃熟。(九)　惟應に玉芝老い、蟠桃の熟するを待ち得べし、

【字解】【一】不可掬　唐于良史の詩、掬水月在手と、【二】永歎　「詩」に、況也永歎と、【三】北窗　陶潛夏月虛閑、高臥北窗之下と、【四】緬懷　「世說」に、緬想人外、三十年矣と、緬は悠緬、遐緬である、【五】醫卜　「史記日者傳」に、賈誼曰、吾聞古之聖人、不居朝廷、必在醫卜之中と、【六】處士　卓玘を指す、【七】奕棋　杜子美の詩、聞道長安似奕棋、百年世事不勝悲と、【八】不容覆　「三國志王粲傳」に、觀人圍棋局壞、粲爲覆之、棋者不信、以帕蓋局、使更以他局爲之、用此比較、不誤一道と、【九】蟠桃　仙家に在る巨大なる桃實、「漢武故事」に、三千年一結實、指東方朔曰、此桃三熟、此兒已三偸と、

【題義】李太白が潯陽の仙人を祀る紫極宮に秋を感ずる詩がある、其の宮觀を守る道士が、其の詩の石搨を示され、曰く是れは師の卓玘が刻する所、而かも卓玘は今は亡き人、良に太白の一往復るべからずと云ふは當然である、白は四十九年の非なるに感じたのである、余も同じく四十九である、次韻して感を敍する、且胡洞微が觀庭に種ゑてある玉芝を遺らる、數年後には食ふ程度となる、依つて此の事をも記するのである、

【詩意】道士が守る虛寂堂に寄臥すれば、此の夜月明にして露光が疏竹を浸してある、此の景に對し冷然として我が心を洗ふが如く、淸氣を飮まんと欲するも掬すべからざるを恨みと爲す、此の流光に唯永歎を發するのみ、昔より四十九年の非を悔ゆるもの余獨りではない、觀庭より還りて此の北窗を借りて宿泊する、曾て仙去せる道人を緬かに懷ふ、思ふに道人は白首にして醫師や卜師の中に寓したのであらう、李謫仙も已に逝いて固に年を經て居る、此の士も亦復ることは出來ない、世道は元來奕棋の如くにて、變化して本の如くに覆しない、唯應に玉芝も老い、蟠桃も亦熟するときを待つべきである、

【餘論】紀曰く、非東坡不敢和太白、妙於各出手眼、絕不規摹と、又曰く、忽拉出卓道人、唱歎有神、映發有致、不然便是泛泛一首懷古詩と、紀の稱揚此の如し、太白の原作茲に出すの必要がある、何處聞秋聲、翛翛北窗竹、迴薄萬古心、攬之不盈掬、靜坐觀衆妙、浩然媚幽獨、白雲南山來、就我簷下宿、懶從唐生決、羞訪季主卜、四十九年非、一往不可復、野情轉蕭散、世道有翻覆、陶令歸去來、田家酒應熟、

## 次韻道潛留別　道潛の留別に次韻す

爲聞廬岳多眞隱。　爲めに聞く廬岳は眞隱多しと、

故就高人斷宿攀。(一)　故に高人に就いて宿攀を斷つ、

已喜禪心無別語。　已に喜ぶ禪心別語無し、

尙嫌剃髮有詩斑。(二)　尙ほ嫌ふ剃髮詩斑あるを、

異同更莫疑三語。(三)　異同更に三語を疑ふこと莫かれ、

物我終當付八還。(四)　物我終に當に八還に付すべし、

【字解】【一】斷宿攀　「維摩經」に、云何斷攀緣、以無所得と、王梅谿曰く、宿攀宿願所攀慕也と、【二】有詩斑　王梅谿曰く、唐僧詩云、髮爲作詩斑と、【三】三語　「晉阮瞻傳」に、王戎問曰、聖人貴名敎、老莊明自然、其旨同異、瞻曰、將無同、戎咨嗟良久、卽命辟之、

到後與君開北戸。 到後君と北戸を開き、

擧頭三十六青山。 頭を擧ぐれば三十六青山、

時人謂之三語椽と、【七】八還 「倶舍論」に、五種不還、六種不還、七種不還、八種不還、乃至九種十一種不還等の語あるも、今は楞嚴經の説を取る、「楞嚴經」に、佛告阿難、汝咸看此諸變化相、吾今各還本所因處、云何本因此諸變化、明還日輪、暗還黒月、通還戸牖、擁還墻宇、緣還分別、頑虚還空、鬱𡋯還塵、清明還霽、則諸世間、一切所有、不出斯類、汝見八種、見精明性、當欲誰還と、【五】北戸 「左太沖吳都賦」に、開北戸以向日、齊南冥於幽都と、【六】三十六 嵩山を云ふ、

【題義】 道潛が留別の詩に次韻したるもの、宋詩鈔に參寥集全部を收めず、故に原作は今日讀む能はずと知れ、

【詩意】 爲めに聞く廬岳には眞の隱者が多しと、眞の隱者は人に逢ふことを嫌ふから我は高人に接近して教を乞ふの宿願は斷念して居る、已に喜ぶ禪心は尋常離別の語は無きを、尙嫌ふ剃髮して是れも尋常の詩班あることを、異同を議して更に三語を疑うてはいかぬ、物我を種種と論ずるが、終には八還に付すべきである、廬岳に到著後は君と同じく北戸を開いて、頭を擧げて三十六青山の眞面目を看賞せんと思ふ、

【餘論】 此の詩の新意は五六の二語に在る、

## 贈江州景德長老 江州景德の長老に贈る

白足高僧解達觀。 白足の高僧達觀を解す、

安排春事滿幽欄。 春事を安排して幽欄に滿たしむ、

不須天女來相試。 須ひず天女の來りて相試みるを、

總把空花眼裏看。 總て空花眼裏の看を把る、

【字解】【一】白足 「肇踰集」に釋曇始、足白於面、雖跣渉泥水、未嘗沾濕、稱白足和尚と、後僧の異名と爲る、李義山の詩、白足禪僧思敗道と、【二】安排 「莊子」に、安排而去化、乃入於寥天一と、沈彬の詩、須知手筆安排定、不怕山河整頓難と、孟郊の詩、妻笑貴安排と、處置宜しきを得るを云ふ、【三】天女 欲界六天の女性、「維摩經觀衆生品」に、天女が佛弟子の得力を試みんとして天華を散ず、諸菩薩には付著せず、諸弟子の衣に皆付著す、菩薩には分別執著の心無し、弟子には分別執著の心がある、【四】空花 空華に作るのがよい、空中の華、病眼の者、空中に花を認むるも、是れ病眼の見る所にて、其の實空中には木花がない、「圓覺經」に、妄認四大爲自身相、六塵緣影、爲自心相、譬如彼病目、見空中華第二月と、

【題義】 江州景德寺の長老即ち寺の主僧に贈るもの、

【詩意】 白足の高僧は物を達觀するを解得して居る、乃ち春花春卉を安排して梵庭の幽欄に滿たしめる、天女が來りて花を散じ此の僧の得力を試驗することはいらぬ、そんなことは總て空華病眼の看るものであると知つて居る、

## 郭祥正家醉畫竹石壁上。郭作詩爲謝。且遺二古銅劍

郭祥正が家に醉うて竹を石壁上に畫く、郭詩を作り爲めに謝す、且二古銅劍を遺る

空腸得酒芒角出。 空腸酒を得て芒角出づ、

【字解】【一】芒角 芒は稻麥の

肝肺槎牙生竹石。（二）　肝肺槎牙竹石を生ず、
森然欲作不可回。（三）　森然作さんと欲し回すべからず、
吐向君家雪色壁。　吐いて君が家の雪色の壁に向ふ、
平生好詩仍好畫。　平生詩を好み仍は畫を好む、
書牆涴壁長遭罵。（四）（五）　牆に書し壁を涴して長く罵りに遭ふ、
不嗔不罵喜有餘。　瞋らず罵らず喜んで餘りあり、
世間誰復如君者。　世間誰か復た君の如き者、
一雙銅劍秋水光。（六）　一雙の銅劍秋水光る、
兩首新詩爭劍鋩。（七）　兩首の新詩劍鋩を爭ふ、
劍在牀頭詩在手。　劍は牀頭に在り詩は手に在り、
不知誰作蛟龍吼。（八）　知らず誰か蛟龍の吼ゆるを作す、

【題義】郭祥正字は功父の家にて酒に醉ひ、其の元氣にて墨竹を功父が家の石壁に畫く、功父は詩を作つて謝を言はれ、且古銅劍を一雙遺られたるに因つて賦したる詩である、

實の尖鋭、針の如き毛、「律歷志」に、角觸也、觸地而出、戴芒角也と、「晉陽秋」に、有星赤而芒角、自東北西南流、投于亮營と、「梁武帝論書」に、運筆邪則無芒角と、【二】槎牙　樹枝が左右入りくむ貌、【三】森然　樹木の繁茂する貌、又並び立つ貌、「舊唐書禮儀志」に、碩學通儒、森然在列と、【四】涴壁　涴は汙と同じ、白壁をけがす、劉禹錫の詩、頑小兒弄筆不能嗔、涴壁書窗且賞勤と、【五】遭罵　杜子美の詩、頻遭官長罵と、【六】秋水　白樂天古劍詩に、湛然玉匣中、秋水澄不流と、【七】劍鋩　鋩は劍のキツサキ、刃端である、【八】蛟龍吼　杜子美の詩、酒酣擊劍蛟龍吼と、

【詩意】空腸に酒を得て飲めば芒角の元氣が出で、肝臓も肺臓も槎牙として竹石を生ずる、其肝肺の中にて竹が森然と作らんと欲して其の儘に任して置けない、是に於てか吐き出して君が家の雪の如き白壁に向うた譯である、余は平生詩を好むのみでない仍は畫をも好む、屢ば他人の牆や壁を汙涴して罵倒せらるるに遭ふ、幸に君は瞋らず又罵らざるは良に喜びに堪へない、世間に君の如く溫厚なる人は多くあるまい、惠まるる所の一雙の銅劍は光輝秋水の如く澄む、且二首作られたる新詩の好きは劍鋩の好きと爭ふ、而して劍は牀頭に在り詩は手に在る、知らず誰ぞや蛟龍の吼ゆる如く浩歌を發するや、

【餘論】紀曰く、奇氣縱橫、不可控制と、此の評極めて當る、短古であるが一氣にして成り、筆力渾勁、一世に橫絕するもの、

## 龍尾硯歌
龍尾硯の歌

余舊作鳳咮石硯銘。其畧云。蘇子一見名鳳咮。坐令龍尾羞牛後。已而求硯於歙。歙人云。子自有鳳咮。何以此爲。蓋不能平也。奉議郎方君彥德有龍尾大硯。奇甚。謂余若能作詩少解前語者。當奉餉。乃作此詩。

【訓讀】余舊鳳咮石硯の銘を作る、其の畧に云ふ、蘇子一見して鳳咮と名づく、坐に龍尾をして牛後

に羞ぢしむ、已にして硯を歙に求む、歙人云ふ、子自から鳳味あり、何ぞ此を以て爲ん、蓋し平なる能はざるなり、奉議郎方君彥德、龍尾大硯あり、奇甚だし、余に謂ふ若し能く詩を作り、少しく前語を解かば、當に奉餉すべしと、乃ち此の詩を作る、

(一)黃琮白琥天不惜。　黃琮白琥天惜します、
顧恐貪夫死懷璧。(二)(三)　顧つて恐る貪夫の死して璧を懷くを、
君看龍尾豈石材。　君看よ龍尾豈石材、
玉德金聲寓於石。　玉德金聲石に寓す、
與天作石來幾時。　天に與へて石と作し來る幾時ぞ、
與人作硯初不辭。　人に與へて硯と作し初め辭せず、
詩成(四)鮑謝石何與。　詩成りて鮑謝石何ぞ與からん、
筆落(五)鍾王硯不知。　筆落ちて鍾王硯知らず、
(六)錦茵(七)玉匣俱塵垢。　錦茵玉匣俱に塵垢、
(八)擣練(九)支牀亦何有。　擣練支牀亦何ぞ有らん、

【字解】【一】黃琮白琥　琮は外は八角、中は圓き瑞玉、琥は琥珀、虎の皮の文をきざめる瑞玉、「周禮」に、以レ玉作二六品一、以禮二天地四方一、以二黃琮一禮レ地、以二白琥一禮二西方一と、【二】貪夫「賈誼傳」に、貪夫死レ利と、【三】懷璧「左傳桓公十年」に、虞叔有レ玉、虞公求レ旃、弗レ獻、旣而悔レ之曰、周諺有レ之、匹夫無レ罪、懷レ璧其罪、吾焉用レ此、其以賈レ害也、乃獻レ之と、【四】鮑謝　劉宋の詩人、鮑參軍昭と謝靈運、【五】鍾王　三國魏の鍾繇と晉の王羲之、【六】錦茵　潘安仁の賦、易二錦茵一以二苫席一兮と、

況瞋蘇子鳳味銘。(一〇)　況んや瞋らん蘇子の鳳味銘、
戲語相嘲作牛後。(一一)　戲語相嘲り牛後と作すを、
碧天照水風吹雲。　碧天水を照し風は雲を吹く、
明窗大几淸無塵。　明窗大几淸うして塵無し、
我生天地一閒物。　我は天地に生れて一閒物、
蘇子亦是支離人。(一二)　蘇子亦是れ支離の人、
(一三)齹言細語都不擇。　齹言細語都て擇ばず、
(一四)春蚓秋蛇隨意畫。　春蚓秋蛇意に隨つて畫く、
願從蘇子老東坡。　願はくは蘇子老東坡に從へ、
仁者不用生分別。(一五)　仁者用ひず分別を生ずるを、

謂ふ、「王羲之傳」に、子雲近世擅二名江表一、僅得レ成レ書、無二丈夫之氣一、行行如レ縈二春蚓一、字字如レ綰二秋蛇一と、【一五】分別「維摩經」に、天女言舉無二分別一、仁者自生二分別想一耳と、

【七】玉匣　桐爐の新論、蔵レ之以二宋匣一と、【八】擣練　石の名、【九】支牀　杜子美の詩、支牀錦石圓と、【一〇】鳳味　硯の名、「漁隱叢話」に、胡仔若曰く、劍浦黯滄灘、有二一種石一、黑眉黃眼、人以爲レ硯、鳳味必此灘石也と、【一一】牛後「史記蘇秦傳」に、諺曰、寧爲二雞口一、無レ爲二牛後一、今四面交レ臂、而臣事レ秦、何異二牛後一乎と、【一二】支離人「莊子人間世篇」に、支二離其形一者、猶足三以養二其身一、終二其天年一、況支二離其德一者乎と、【一三】齹言「大毘婆娑論」に、齹言及輭語、皆歸二第一義諦一と、【一四】春蚓秋蛇　文字細く曲りて力無きな

【題義】余嘗て鳳味石硯の銘を作りて、彼の龍尾硯は名は立派であるが、其の實鳳味硯より劣ると云うた、其の後、歙溪（安徽省婺源）の硯を得んと欲したるに、歙溪の人は云ふ、公は已に鳳味石硯を

所有するから、歙硯なぞは無用であると、之を聞いて余は聊か不平であつた、然るに奉議郎の官を奉する方彥德が龍尾の大硯を藏し、頗る珍奇である、彥德が公に謂ふ、若し能く詩を作りて、坐令ニ龍尾羞ニ牛後一の語を解說し玉へば、此の硯を呈贈せんと、乃ち此の詩を作る、

【詩意】黃琮の玉も白琥の珠も天は生ずることを惜まない、顧みるに唯恐るる玉も石も解する力なき貪夫輩が玉の功用を知らずして之を死藏して居るを、君は能く看玉へ龍尾も豈唯石材でないことを、玉德金聲が石に寄寓したのである、自然に與へては石と作り今に至るまで幾年時ぞや、人に與へては硯と作し是れも初め辭しない、之を賞して詩を作る鮑參軍や謝公の如き名人でも石は與る所でない、又鍾繇や王右軍の如き書聖でも硯の方よりは關知せざるのである、錦茵の上、玉匣の中に置くも倶に塵垢と同じ、擣練石を以て支牀するも亦何の關知有ることは無い、況んや蘇子が作つた鳳咮銘なぞを瞋る筈がない、余が龍尾羞ニ牛後一なぞと戲語相嘲るも石の方から何も怒らない、此の硯を摩するとき碧天は水を照し風は雲を吹散する、而して明窗大几は淸淨にして一塵も留めない、石は言はん我は天地の間に生ずる一閒物であると、蘇子も亦是れ世と支離の人である、銘の蠢言も細語も都て擇ばない、字の春蚓秋蛇意に隨つて盡くのみ、君も願はくは蘇子老東坡の言に信從し玉へ、仁者は是の非のと分別を生じてはいかぬ、

【餘論】紀曰く、語自淸辨、與天四語、意好而落筆太快、便入ニ香山門徑一と、查初白曰く、信レ手曲折、善ニ於解嘲一、爲レ硯吐レ語、筆陣開拓、匪ニ夷所思一と、曰く歙硯、曰く端溪、曰く鳳咮、曰く龍尾、眞少く僞多きもの、龍尾山の如きは山實に石無く、他處の石を以て硯を製し、以て龍尾硯と稱するものである、此の眞である僞であると論じて、肝腎なる其の實際の用を忘るる者比比是である、仁者云云の結語、千斤の力あるを覺ゆ、公の眞面目は此の篇に於て歸命頂禮せざるを得ない、

## 張近幾仲有ニ龍尾子石硯一以ニ銅劍一易レ之

張近幾仲、龍尾子石硯あり、銅劍を以て之に易ふ

我家銅劍如ニ赤蛇一。　我が家の銅劍赤蛇の如し、
君家石硯蒼璧橢(一)而窪。　君が家の石硯蒼璧橢にして窪、
君持ニ我劍一向ニ何許一。　君我が劍を持して何れの許に向ふ、
大(二)明宮裏玉佩鳴ニ衝(三)牙一。　大明宮裏玉佩衝牙鳴る、
我得ニ君硯一亦安用。　我君が硯を得て亦安くにか用ふる、
雪堂窗下爾(四)雅箋ニ蟲鰕一。　雪堂窗下爾雅蟲鰕を箋す、

【字解】〔一〕橢而窪　橢はほそながし、狹長、長圓形、窪は坳窪、低窪、くぼむ、〔二〕大明宮　唐の高宗の龍朔二年に置く、〔三〕衝牙　「潘岳籍田賦」に、衝牙錚鎗と、佩玉の付屬品にて音を發する物、〔四〕爾雅　十三經の一、作者は不詳、郭璞の注、邢昺の疏と十一卷ある、皐甫湜の詩、爾雅注ニ蟲魚一、定非ニ磊落人一と、〔五〕隨風花　「南史范縝傳」に、竟陵王子良、精ニ信釋教一、而范縝盛稱ニ無佛一、子良問曰、君不レ信ニ因果一、何得ニ富貴貧賤一、縝答曰、人生如ニ樹花

二物與人初不異。　二物人と初めは異ならず、
飄落高下隨(五)風花。　飄落高下風に隨ふの花、
(六)蒯緱玉具皆外物。　蒯緱玉具皆外物、
(七)視草草(八)玄無等差。　草を視玄を草す等差無し、
君不見秦(九)趙城易璧。　君見ずや秦趙城を璧に易へ、
指圖(九)睨柱相矜誇。　圖を指し柱を睨し相矜誇す、
又不見(一〇)二生妾換馬。　又見ずや二生妾馬に易へ、
驕鳴(一一)啜泣思其家。　驕鳴啜泣其の家を思ふ、
不如無情兩相與。　如かず無情兩ながら相與にするに、
(一二)永以爲好譬之桃李與瓊華。　永く以て好と爲し之を桃李と瓊華とに譬ふ、

同發、隨風而墮、自有拂簾幌墜於茵席之上、自有關籬牆落於糞溷之中、墜茵席者、殿下是也、落糞溷者、下官是也、貴賤雖復殊途、因果竟在何處、子良不能屈、然深怪之と、【六】 蒯緱 蒯は茅の類、緱は劍首、【七】 視草 「翰林志」に玄宗召張說等入禁中、謂之翰林待詔、或詔從中出、雖宸翰所揮、亦資其檢討、謂之視草と、【八】 草玄 「漢揚雄傳」に、哀帝時、丁傅董賢用事、諸附離之者、或起家至二千石、時揚雄方草太玄、有以自守泊如也と、【九】 秦趙 「史記」に、秦昭王、願以十五城請易趙和氏璧、趙惠文王、遣藺相如奉璧奏秦王、相如觀秦王無意償趙城、乃前曰、璧有瑕、請指示王、相如因持璧却立曰、大王必欲急臣、臣頭與璧俱碎於柱矣、持璧睨柱、欲以擊柱、秦王恐其破璧、乃辭謝、召有司按圖、指從此以往、十五都予趙、相如度秦王詐、乃使其從者衣褐懷其璧、從徑道亡歸璧於趙と、【一〇】 二生 李玫の「異聞實錄」に、酒徒鮑生、多蓄聲伎、外弟韋生、好乘駿馬、一日相遇、既飲酒、乃以女妓善四絃者換紫叱撥、郎有二人造席、便以妾換馬作題聯賦、折亭下衡葉書之、四韻訖而棄置、韋生取紅箋、獻之二公、曰鬪鷄路岐、何見遇之甚、言訖行十餘步而失、二客自稱江淹謝莊、鮑生既以妾換馬、妾歌曰、風颭荷珠難暫圓、多情信有短因緣、西樓今夜三更月、還照離人泣斷絃と、【一一】 啜泣 「詩王風」に、有女仳離、啜其泣矣と、啜は泣く貌、すすり泣くのである、【一二】 永以 「毛詩」に、投我以木桃、報之以瓊瑤、投我以木李、報之以瓊玖、匪報也、永以爲好也と、

【題意】 張近幾仲が龍尾子石硯を所有する、公は銅劍を所有する、乃ち之を交換して詩を作る、

【詩意】 我が家の銅劍は光を放ちて赤蛇の如くである、君が家の石硯は蒼色の璧の如く橢圓形にして且窪む、君は我が劍を持つて何許に向つて用を作さんとするのである、恐らく大明宮裏に玉佩を帶びて銜牙を鳴らす爲めであらう、我は君が硯を得て亦何の用に充てるかと言へば、我が雪堂窗下に於て爾雅を閲して蟲鰕の箋を書く爲めである、此の非情なる二物は有情なる人間と初めより其の運命は異ならない、風に隨つて飛ぶ花と同じく飄落高下がある、蒯緱玉具は我と關係なき外物であるが、官に在つて視草するも野に在つて玄を草するも事に於て等差はない、君も看玉へ昔より物を交換せんとした歴史があることを、秦と趙とは城と璧とを交換せんとして、趙將は柱を睨して矜誇せる狀を、又看玉へ人間と動物とを交換して、共に其の故家を思うて啜泣したことを、そんな殘酷なる交換は皆不可ぬ、無情無機の物を交換して、永く我と君との好みを繼續して、以て桃李と瓊華との美を保つ事に如くはない、

【餘論】紀曰く、多用㆓長句㆒、而尚不㆑失㆓雅音㆒、頗覺㆓縱橫有㆑氣、長句始㆓於漢樂府㆒、成㆓於鮑明遠㆒、而縱橫變化於㆓太白㆒、不㆓善學㆑之、非㆓萎弱冗沓㆒、卽生硬粗野、然冗弱之病易㆑見、有㆓筆力㆒人、往往以㆓生硬粗野㆒爲㆑豪、則不㆑可㆓救藥㆒矣と、一韻到底、平聲仄聲、使用法例蘇家の正法を看る、

## 張作㆑詩送㆑硯反㆑劍。乃和㆓其詩㆒卒以㆑劍歸㆑之

張詩を作り、硯を送り劍を反す、乃ち其の詩を和し、卒に劍を以て之に歸す

贈㆓君長(一)鋏㆒君當㆑歌。　君に長鋏を贈る君當に歌ふべし、
毎食無㆑魚歎㆓委(二)蛇㆒。　毎食魚無くんば委蛇を歎せん、
一朝得㆑見㆓暴(三)公子㆒。　一朝暴公子を見るを得て、
檑具欲㆓與㆑冠(四)爭㆒峩。　檑具冠と峩を爭はんと欲す、
豈比杜陵貧病叟。　豈比せんや杜陵の貧病叟、
終日長(五)鑱隨㆓短簑㆒。　終日長鑱短簑に隨ふ、
斬㆑蛟刺㆑虎老(六)無㆑力。　蛟を斬り虎を刺し老いて力無く、
帶㆑牛佩㆑犢吏(七)所㆑訶。　牛を帶び犢を佩ぶ吏の訶する所、
故將換㆑硯豈無㆑意。　故に將て硯に換ふ豈意無けん、
恐君雕琢傷㆓天和㆒。　恐らくは君雕琢天和を傷るを、
作㆑詩反㆑劍亦何謂。　詩を作りて劍を反す亦何の謂ひぞ、
知君故以㆑詩相磨。　知る君が故に詩を以て相磨するを、
報(八)章苦恨無㆓好語㆒。　報章苦だ恨む好語無きを、
試向㆓君硯㆒求㆓餘(九)波㆒。　試みに君が硯に向つて餘波を求む、
詩成劍往硯應㆑恨。　詩成りて劍往かば硯應に恨むべし、
那將㆓屋漏㆒供㆓懸河㆒。　那ぞ屋漏を將て懸河に供せん、

【字解】【一】長鋏　前詩に掛じてあるが、鋏は劍である、「史記孟嘗君傳」に、馮驩居㆓孟嘗君傳舍㆒、彈㆓其劍㆒而歌曰、長鋏歸來乎食無㆑魚、孟嘗君、遷㆓之幸舍㆒、食有㆑魚矣と、【二】委蛇　「詩召南」に、退食自㆑公、委蛇委蛇と、「詩鄘風」に、委委佗佗、如㆑山如㆑河と、雍容自得の貌、【三】暴公子　「漢書雋不疑傳」に、暴勝之、爲㆓直指使者㆒、至㆓渤海㆒、聞㆓不疑賢㆒、請㆓與相見㆒、不疑冠㆓進賢冠㆒、帶㆓檑具劍㆒、盛服上謁曰、竊伏海瀕、聞㆓暴公子威名㆒久矣と、劍頭に雷の飾りあるを檑具劍と云ふ、【四】冠爭峩　韓退之の詩、復聞顚天聚、峨冠進㆓鴻疇㆒と、冠のいかめしく盛んなる形容を峩冠と云ふ、【五】長鑱　杜子美の詩、長鑱長鑱白木柄、我生托㆑子以爲㆑命と、土を掘る長き柄のスキ、【六】老無力　杜子美の詩、蕭章欺㆑我老無㆑力と、【七】吏所訶　韓退之の詩、凡吏之所㆑訶、嗟實頗有㆑之と、【八】報章　杜子美の詩、何時有㆓報章㆒と、【九】餘波　「尚書禹貢」に、餘波入㆓于流沙㆒と、

【題義】張幾仲が詩を作りて硯と共に贈與せられ、我の交換の爲め贈りし劍を送り反さる、是に於て其の詩に和して、詩と劍とを以て張に改めて贈りしものである、

【詩意】君に長鋏を贈るは君が此長鋏を彈じて歌ふことを勸むる爲めである、其の歌は毎食無㆑魚歎㆓委蛇㆒と吟ずるがよい、さうして一朝暴公子に謁見するを得て、檑具の劍を腰に帶び峩冠を爭ふの人と爲るであらう、豈杜陵の貧病を歎ずる叟と比較するを得んや、杜陵は終日長鑱を持つて短簑を隨著して居る、壯年元氣の時は蛟を斬り虎を刺すの勇あるも老いては其の氣力は無い、牛を帶び犢を佩ぶるの野人が劍を持するは吏の訶する所である、其れであるから之を將て硯に交換する無意味であるまい、

然るに君は心肝を雕琢して天和を傷るを我は恐るる、詩を作るには彫琢せざるを得ない、君はその彫琢までして詩を作りて劍を反さるるは亦何の謂ひぞや、料知するに君は詩を以て我と研磨する爲めであらう、我は君に報ゆるの詩章に好語の無きに苦しむ、試みに君が硯に向うて餘波を求むれば、詩の成りて劍も亦往くは硯も笑ふことであらう、硯は笑うて言はん那ぞ人の無き隱微の處に於て詩の爲めに我を懸河の用に供するぞやと、

【餘論】紀曰く、淸辨滔滔、曲折如意と、事は劍と硯とを交換するに過ぎず、然るに縱橫變化自在を極む、玉堂の神力を見るは此等の篇に於てである、

去歲九月二十七日在黃州生子。遯小名幹兒。頎然穎異。至今年七月二十八日病亡於金陵。作二詩哭之

去歲九月二十七日黃州に在りて子を生む、遯小名幹兒、頎然穎異、今年七月二十八日に至り金陵に病亡す、二詩を作りて之を哭す

吾年四十九。羇旅失幼子。　吾が年四十九、羇旅に幼子を失す、

幼子眞吾兒。眉角生已似。　幼子眞に吾が兒、眉角生れながら已に似る、

未期觀所好。蹁躚逐書史。　未だ所好を觀るを期せざるに、蹁躚書史を逐ふ、

搖頭却梨栗。似識非分恥。　頭を搖かし梨栗を却け、識るに似たり非分恥を、

吾老常鮮歡。賴此一笑喜。　吾老いて常に歡鮮し、此の一笑喜を賴ひとす、

忽然遭奪去。惡業我累爾。　忽然として奪去に遭ふ、惡業我が累のみ、

衣薪那免俗。變滅須臾耳。　薪を衣にす那ぞ俗を免れん、變滅須臾のみ、

歸來懷抱空。老淚如瀉水。　歸來懷抱空し、老淚瀉水の如し、

【字解】〔一〕羇旅　「史記陳餘傳」に、兩君羇旅而欲附趙難獨立と、〔二〕蹁躚　「張平子東都賦」に、鹼鹼蹁躚と、「廣韻」に、旋行の皃、めぐりゆく皃と、〔三〕梨栗　淵明の詩、通子垂九齡、但覓梨與栗と、〔四〕奪去　唐の「楊綰傳」に、綰薨、帝驚悼曰、天何奪綰之速耶と、〔五〕惡業　理に背く行を惡と云ふ、身口意の三にて事を作すを業と云ふ、「四十華嚴經」に、我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴と、〔六〕衣薪　「易」に、古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野と、〔七〕變滅　「寶積經」に、念念不可住、須臾還變滅と、〔八〕懷抱　「晉王衍傳」に、衍喪幼子、悲不自勝、山簡曰、孩抱中物、何至於此、衍曰、情之所鍾、正在我輩と、〔九〕老淚　白樂天の詩、何堪老淚交流日と、

【題義】元豐七年に黃州に在りて子を生む、幹兒と名く、其の性頎然穎異であつた、翌年の七月金陵に於て病死す、痛んで此の詩を作りしものである、

【詩意】吾が年四十九である、羇旅中に幼子を失する、幼子は眞に吾が兒である、眉角生れながら父の我其の儘である、未だ善も惡も好きも嫌ひも分らないのに、蹁躚として書史を逐ふ、我が梨栗を與ふるも頭を搖かして之を受けない、分に非ざるの恥を識るものの如くである、吾は老いて平生常に歡

ぶこと鮮い、此の子の一笑一喜を頼りと思ふのみ、然るに今や忽然奪取せらる、我が惡業が此の果を招くに由る、薪を衣にするは尋常一樣の俗を免れない、人間の變滅は須臾の間である、事を褁めて歸來して見れば掌中の珠は已に空し、唯老涙が瀉水の如く流るるのである、

〔二〕

我涙猶可拭。日遠當日忘。　我涙は猶ほ拭ふべし、日遠ければ當に日に忘るべし、

母哭不可聞。欲與汝俱亡。　母哭は聞くべからず、汝と俱に亡びんと欲す、

故衣尙懸架。漲乳已流牀。　故衣尙ほ架に懸け、漲乳已に牀に流る、

感此欲忘生。一臥終日僵。　此に感じて生を忘れんと欲す、一臥終日僵る、

中年忝聞道。夢幻講已詳。　中年忝なく道を聞き、夢幻講じて已に詳かなり、

儲藥如丘山。臨病更求方。　藥を儲ふる邱山の如く、病に臨んで更に方を求む、

仍將恩愛刃。割此衰老腸。　仍つて恩愛の刃を將て、此の衰老の腸を割く、

知迷欲自反。一慟送餘傷。　迷を知つて自から反らんと欲し、一慟餘傷を送る、

【字解】〔一〕日遠　韓退之の文、日遠日忘と、〔二〕故衣　白樂天の詩、故衣猶架上、殘藥尙頭邊と、〔三〕恩愛　「無量壽經」に、恩愛思慕、憂念結縛と、「長阿含經」に、三界無縁縛、能斷恩愛網と、父母妻子等の間に於て、互に恩に感じ愛に溺るるの情である、

【詩意】我が涙は自制心あれば猶ほ拭ふ、漸漸と日が遠くなれば漸漸と其の思ひを忘れる、母は女なれば自制心がない徒らに哭泣する、而して汝と俱に死亡せんとまで思ふ、汝が著せし故衣は尙ほ架に懸けてある、漲乳は呑むものなければ只牀に流るるのみ、此れに感慨を催して生を忘れんと欲する態である、一臥して終日起たない、省みるに中年より忝なく道を聞いて、人生は夢の如く又幻の如くであると講じて詳細である、藥を儲蓄する邱山の如く、病に臨んで更に療法あらんかと求む、仍ほ恩愛の刃を將て、此の衰老の腸を割くの痛情がある、それは迷であると自から本性に反らんと欲するも、又復一慟して餘傷を送るに至る、

【餘論】紀曰く、此首不免窠臼、然亦別無出路、故此種詩、是第一難題と、又曰く、漲乳句、情眞而語太俚と、僅僅一歲の兒言ふべきこと無きに、遂書史、却梨栗の語を用ふ、平生聰明の者も、子の爲には愚癡の人と變ずるものか、

## 葉濤致遠見和二詩。復次其韻

葉濤致遠、二詩を和せらる、復た其の韻を次す

平生無一女。誰復歎耳耳。　平生一女無く、誰か復た耳耳を歎ずる、

滯留生此兒。足慰周南史。　滯留して此の兒を生む、慰するに足る周南史、

那知非眞實。造化聊戲爾。　那ぞ知らん眞實にあらざるを、造化聊か戲るのみ、
〔三〕煩惱初無根。〔四〕恩愛爲種子。　煩惱初め根無し、恩愛を種子と爲す、
煩公爲〔五〕假說。反覆相〔六〕指似。　公を煩はして假說と爲し、反覆相指似す、
欲除〔七〕苦海浪。先乾〔八〕愛河水。　苦海の浪を除かんと欲せば、先づ愛河の水を乾かす、
棄置一寸〔九〕鱗。悠然笑侯喜。　一寸の鱗を棄置して、悠然として侯喜を笑ふ、
爲公寫餘習。〔一〇〕缾罍一時恥。　公の爲めに餘習を寫し、缾罍一時恥づ、

【字解】〔一〕耳耳　「魏崔琰傳」に、太祖爲魏王、楊訓發表、稱贊功伐、琰與訓書曰、省表事佳耳、時乎時乎、會當有變時、白琰此書傲世怨謗者、太祖怒曰、諺言生女耳耳非佳語、會當有變時、意指不遜、於是罰琰爲徒隸」と、「詩魯頌」に、六轡耳耳と、柔かに從ふ貌を耳耳と云ふ、〔二〕周南　「史記太史公自序」に、留滯周南」と、〔三〕煩惱　貪瞋痴の三毒が心を煩はし身を惱ますを煩惱と云ふ、「大論」に、能令心煩、能作惱故、名爲煩惱」と、梵土の吉隷舍を譯せる語、〔四〕恩愛　白樂天の詩、不將恩愛子、更種悲憂根」と、〔五〕假說　佛教に假說と實說とある、假は借の義、借りて以て說を立つるを假說と云ふ、〔六〕指似　指似は指示、似は示と同義、〔七〕苦海　白樂天の詩、苦海波生蕩破舟」と、〔八〕愛河　愛欲は人を溺らすが爲めに以て河水に譬ふ、「楞嚴經」に、愛河枯乾、令汝解脫」と、〔九〕一寸鱗　韓退之が侯喜に贈る詩、吾黨侯生字叔起、呼我持竿釣溫水、擧竿引線忽有得、一寸纔分鱗與鬐」と、〔一〇〕缾罍　「毛詩」に、缾之罄矣、惟罍之恥と、小なる缾に酒の罄きるは大なる罍の恥である、

【題義】葉致遠名は濤は太學博士である、此の人が前二詩を和して贈らるるに因つて復た其の韻を次して作る、

【詩意】我は未だ一女も無い、誰か其れ耳耳を嘆ずる者ぞや、然るに黃州に滯留中に此の兒を生む、良に周南史を慰するに十分である、が知らなかつた是が眞實ではないことを、造物者が聊か游戲を作したに過ぎない、思ふに煩惱は初め何の根も葉も無い、恩愛を生じて其の種子と爲したのである、其の實にあらずして假であると公の詩にも苦苦に說く、反覆して道理を指示せらる、苦海の浪を除脫せんと欲するには、先づ愛河の水を乾かすのが根本である、愛は苦を招くの根源であると佛も說いて居る、又微微たる一寸の鱗魚を得んが爲め苦辛する侯喜を韓公は悠然として笑うたではないか、公の詩に報ゆる爲めに復た煩惱の餘習を寫す、缾も罍も畢竟するに一時の恥である、

〔二〕

聞公少已悟。〔一〕拄杖久倚牀。　聞く公が少にして已に悟り、杖を拄いて久しく牀に倚ると、
笑我老而癡。〔二〕負鼓欲求亡。　笑ふ我が老いて而かも癡、鼓を負うて亡を求めんと欲す、
庶幾東門子。〔四〕杜史安敢望。　庶幾ふ東門の子、杜史安んぞ敢て望まん、
〔五〕嗜毒戲猛獸。慮患先不詳。　毒を嗜んで猛獸に戲れ、患を慮かる先づ詳かにせず、
囊破蛇已走。倘未省〔七〕齧傷。　囊破れて蛇已に走る、倘未だ齧傷を省せず、
妙哉兩篇詩。洗我千〔八〕結腸。　妙なる哉兩篇の詩、我が千結の腸を洗ふ、

黠蠶不作繭(九)未老輒自僵。　黠蠶繭を作らず、未だ老いざるに輒ち自から僵る、
永謝湯火厄。冷(一〇)然超無方。　永く謝す湯火の厄、冷然として無方に超ゆ、

【字解】【一】拄杖　「魏略」に、乃託病拄杖と、杖をつくこと、【二】負鼓　「莊子天運篇」に、孔子見老聃而語仁義、老聃曰、吾子亦放風而動、總德而立矣、又奚傑然、若負建鼓而求亡子者耶と、【三】東門子　「列子力命篇」に、魏有東門吳者、子死而不憂、曰吾嘗無子、無子之時不憂、今子死、與向無子同、吾奚憂也と、【四】柱史　老子を柱下史と云ふ、【五】嗜毒　「枚乘七發」に、越女侍前、齊姬奉後、此甘餐毒藥、戲猛獸之爪牙也と、【六】蛇已走　「仁王經」に、識神無形、假乘四蛇、無明保養、以爲樂車と、「大論」に、篋中有四蛇、王勅罪人、令看養瞻育、四毒蛇四大也と、【七】齧傷　「大論」に、愛慾な求めて嚴樹に縋り、其の藤樹を二鼠が嚙み切らば、其の身は穴に墮ち入らんとする譬喩がある、【八】千結　「吳越春秋」に、越王夫人哀吟曰、腸千結兮服膺と、【九】不作繭　「朝野僉載」に、王顯與文皇有舊、常戲顯曰、抵死不作繭、及文皇登極、因奏曰、今日得作繭耶、帝笑曰、解無貴相、脫弄爲爾惜也、曰朝貴夕死足矣、帝與三品服、其夜卒と、【一〇】冷然　「莊子逍遙遊篇」に、列子御風而行、冷然善と、輕妙の貌、清くして冷やかなる貌、

【詩意】我聞く公は少時已に早く心を悟りて、杖を拄いて久しく牀に倚り門外に狂走しないと、我は自から笑ふ老いて猶ほ癡である、兒の好む鼓を負うて而して死んだ子を求めんと欲する癡態を爲す、庶幾ふ所は東門子の如く子が死んでも憂心を起さない事に、又柱下史の如く死生を超脫するは望む所でない、多くの人は毒を嗜んで猛獸に戲るの所作を好む、此の一時の游戲が後に患と爲ることなぞは一向に無頓著（不詳）である、囊中の蛇は害をしないが囊が破るれば走り出て害をする、而かも未だ彼が齧み傷るの恐ろしい事は考へない、君が作れる兩篇の詩意は巧妙である、我が憂悲して千結せる腸を洗ひ去る、思ふに黠蠶は食ふだけ食うて繭を作らない、未だ老年ならざるに容易に自から僵れる、永く湯火藥餌の厄を謝して、冷冷然として無方に超ゆる、

【餘論】至親無語の教を聞くこと久しい、是の故に古今親を哭する詩を作る者は無い、妻や子に至りては禮に說無ければ哭詩を作る妨げなきも、之を和するに至りては、余は禮にあらずと思ふ、公自から老而癡と云ふ、老いては判斷の力に乏し、公も亦其の一人である、菊池五山の「五山堂詩話」に某家少年死、其友相會作哭詩、其父泣曰、賤息短命、不料今日爲諸君嘲具、此言沈痛、可以醒世と、今此の四詩を讀む、哀痛を通過して、文字游戲の域に入るの感がある、「蘇文忠公合注」を撰せる馮應榴が其の妻が生む所の子を哭して此四首の韻を以て作る、是れも亦老いて癡と爲るの人か、紀が何事も言はざるは不審不審、

# 蘇東坡詩集　巻二十四

## 古今體詩　五十六首

### 次二荊公韻一四絶　　荊公の韻に次す　四絶

青李扶疏禽自來。(一)　　青李扶疏禽自から來る、
(二)清眞逸少手親栽。　　清眞逸少手親しく栽す、
(三)深紅淺紫從爭發。　　深紅淺紫從つて爭ひ發く、
雪白鵞黃也鬭開。　　雪白も鵞黃も也鬭開す、

【字解】【一】禽自來　王羲之帖曰く、王羲之、有レ求二來禽青李帖一、來禽即今之林禽也、以二其食美一、禽來食レ之、故曰二來禽一と、禽は檎である、青李の實、自から禽鳥來るからである、【二】清眞　李太白の詩、右軍本清新、瀟灑在二風塵一と、【三】深紅　楊行敏の詩、杜鵑花發杜鵑啼、淺紫深紅更傍レ谿と、

【題義】王荊公が示さるる詩、乃ち酴醾一架最先來、夾水金沙次第栽、濃綠扶疎雲乍起、醉紅撩亂雪爭開、(一首)午陰寬占一方苔、映レ水前年坐看栽、紅蕊似レ嫌塵染汚、青條飛上別枝開、(二首)北山輸綠漲二橫陂一、直塹廻塘灔灔時、細數二落花一因坐久、緩尋二芳草一得レ歸遲、(三首)故作二酴醾架一、金沙秖漫栽、似レ矜顏色好、飛度雪前開、(四首)の四絶句に次韻して作る、

【詩意】青李の樹枝が扶疎繁茂して禽鳥は自然と集まりて來る、其の青李は清眞なる王逸少が手親から栽したものである、深紅色も淺紫色も爭うて發くのみでない、鷺の白きも鶯の黃なるも也鬭開するのである、

〔二〕

斫竹穿花破綠苔。　竹を斫り花を穿ちて綠苔を破る、
小詩端爲覓榿栽。　小詩端覓榿の爲めに栽う、
細看造物初無物。　細看するに造物初め無物、
春到江南花自開。　春は江南に到れば花自から開く、

【字解】〔一〕造物　「郭象南華眞經序」に、上知造物無物、下知有物之自造也と、

【詩意】竹を斫り又花を穿ちて綠苔を破る、小詩卽ち七言絶句を栽するは榿を覓むる爲めである、而して造物を細看するに初めは物無し、春は誰が造るでもない自然であるが是れが江南に到れば花は自然に開く、

〔三〕

騎驢渺渺入荒陂。　驢に騎つて渺渺荒陂に入る、
想見先生未病時。　想ひ見る先生未だ病まざる時、
勸我試求三畝宅。　我に勸む試みに三畝の宅を求めよと、
從公已覺十年遲。　公に從ふ已に覺ゆ十年遲きを、

【字解】〔一〕未病時　查初白曰く、潘子眞詩話謂、東坡得請歸宜興、道過鍾山、時荊公病方愈、約卜居秦淮、故坡詩云、勸我試求三畝宅云云、按陸放翁題跋云、東坡自黃州歸、見荊公於半山、劇談累日、約卜鄰以老焉、蓋宜興得請、在明年春夏之交、其間未嘗再過金陵也と、

【詩意】驢に騎つて渺渺として荒陂に入る、荒陂を見るに就いて想ひ見る先生が未だ病ならざる時を、我に勸めて三畝の宅を求めよと、而して我は覺る公に從游する十年の遲きことを、

〔四〕

甲第非眞有。閑花亦偶栽。　甲第眞有にあらず、閑花亦偶栽なり、
聊爲淸淨供。却對道人開。　聊か淸淨の供を爲し、却つて道人に對して開く、

【自注】公病後捨宅作寺。

【字解】〔一〕甲第　「霍光傳」に、孝宣帝賜甲第一區と、〔二〕淸淨供　公の自注に、公病後捨宅作寺と、荊公は元豐の末年に、江寧府上元縣の宅を奏して以て寺と爲し、其子雱の菩提を弔ふ、雱は性惡、父が惡名を得しは實に其子の爲であると、續通鑑長編に見ゆ、

【詩意】堂堂たる甲第も眞の所有ではない、眞有ではないが閑花を栽して賞看する時もある、然れど

も是を自己の娯樂に供せず清淨菩提に供養し、却つて塵外の道人に對して開かしむ、

【餘論】紀曰く、東坡半山、旗鼓對壘、似レ應下別有二佳處一、方適中人意上と、右軍の來禽帖を言はんが爲め、右軍に切なる字を用ふる所に工夫を見るのみ、

## 半山亭

登レ嶺勢巍巍。蓮峰太華(一)齊。
凭レ欄紅日(二)蚤。回レ首白雲低。
(三)松柏月中老。猿猴物外啼。
(四)禪師吟絶後。千古指二(五)人迷一。

半山亭

嶺に登れば勢ひ巍巍たり、蓮峰太華齊し、
欄に凭れば紅日蚤く、首を回らせば白雲低る、
松柏月中に老い、猿猴物外に啼く、
禪師吟絶ゆるの後、千古人をして迷はしむ、

【字解】【一】太華　「山海經」に、太華山、在二華陰一、石壁直上如二削成一、最著者、蓮花、明星、玉女三峯也と、太華は總名にて蓮峯は其の支山である、【二】紅日　寇準が華山詩、只有二天在一レ上、更無二山與齊一、擧レ頭紅日近、回レ首白雲低と、準は年八歲である、【三】松柏　松と柏と二物なれば、下句も猿と猴との二物である、松柏と云ふ一樹なれば、下句も猿猴と云ふ一獸である、【四】禪師　誰と指したのではない、德の高き僧を指すのみ、【五】指人　指は恐らくは諳の誤か、

【題義】半山亭は卽ち半山寺にて王荊公が住したる處、此に來りて其の四望の景を敍したのである、

【詩意】半山亭の建ててある嶺に登れば山勢は巍巍である、殆んど蓮峯太華山と高さを齊しうすと思ふ、亭上の欄干に凭れば紅日の下界より蚤きを知る、首を回らせば四面に白雲の低るるを看る、松柏も月中に老樹となる、猿猴も物外に啼叫する、禪師の是に於て高吟絶えたる後は、千古の下登嶺する者皆迷ふであらう、

【餘論】紀曰く、不レ似二東坡筆墨一何也と、馮應榴曰く、似レ非二先生作一と、二家は他の作と其の調が似てゐない所より斯く論ずるのであるが、余は坡公の眞作と思ふ、小兒の詩でも佳は則ち佳であれば、以て我が用に供するが公の性質、怪むべきことは絶對にない、

## 張庵民挽詞

東晉巾(一)車令。西京執(二)戟郎。
(三)甘心向二山水一。結(四)髮事二文章一。
故自輕二千戶一。何曾羨(五)二一囊一。
天高鬼(六)神惡。骨朽姓(七)名芳。
(八)庾嶺銘(九)旌暗。秦(一〇)淮舊宅荒。
吾詩不レ用レ刻。妙語有二黃(一一)香一。

張庵民の挽詞

東晉の巾車令、西京の執戟郎、
甘心して山水に向ひ、結髮して文章を事とす、
故に自から千戶を輕んじ、何ぞ曾て一囊を羨まん、
天高ければ鬼神惡み、骨朽つるも姓名芳ばし、
庾嶺銘旌暗く、秦淮舊宅荒る、
吾が詩刻するを用ひず、妙語黃香あり

【自注】黃魯直從二庵民一作二哀辭一。

【字解】【一】巾車令　「陶淵明歸去來辭」に、或命巾車と、後世巾車令と云ふは淵明嘗て彭澤令と爲るに由る、【二】執戟郎　「漢東方朔傳」に、官不過侍郎、位不過執戟と、【三】甘心　「左傳莊公九年」に、鮑叔來言曰、請受而甘心焉と、【四】結髮　丁年を謂ふ、「李廣傳」に、結髮與匈奴、大小七十餘戰と、【五】羨一囊　「東方朔傳」に、侏儒長三尺餘、奉一囊粟、錢二百四十、臣朔長九尺餘、亦奉一囊粟、錢二百四十、侏儒飽欲死、臣朔飢欲死と、【六】鬼神惡　韓退之の詩、天公高居鬼神惡、欲保性命誠難哉と、【七】姓名芳　曹大家の「東征賦」に、惟令德爲不朽兮、身既歿而名存と、【八】庾嶺　一名梅嶺、東嶠縣韶州に在る、梅花を以て名高し、【九】銘旌　杜牧之の詩、黃旗不濕新雨露、粉書空換舊銘旌と、旌を以て葬處を明示するのである、【一〇】秦淮　水の名、源は江蘇の溧水縣に出で、西北に流れて江寧城を貫き、又西北して大江に入る、秦の始皇鑿する所、【一一】黃香　後漢の人黃香は博學能文、天下無雙と稱せらる、今は黃山谷に譬ふ、公の自注に、黃魯直、爲庖民作哀辭と、

【題義】張庖民字は翔父を哀挽する詩である、

【詩意】君は東晉の巾車令の如き高士であつた、又君は西京の執戟郎の如き文豪であつた、而かも世に求むる心は薄く、甘んじて山水に情を寄せて居つた、壯年以來文章を屬するに從事したるが故に、千石二千石の諸侯を輕視する、其の故一囊粟錢なぞ羨む如き下劣なる事はしない、哀い哉天分の高き者は鬼神の惡みを受ける、されど骨は朽ちるも姓名は後世に芳を留む、葬處の庾嶺は銘旌暗く、秦淮の舊宅は荒涼たる景色である、吾は弔うて詩を作るも刻することはいらぬ、我より勝れた妙語は黃香が作つて居る、

【餘論】紀曰く、不出錢字、則一囊何物と、已に上に千戶とありて侯の字を闕く、一囊に錢の字を闕く、亦妨げずと思ふ、されど千戶侯に侯を除くは可、一囊錢に錢の字を除くは聊か妥ならず、紀評は首肯すべきである、

次韻葉致遠見贈　　葉致遠贈らるるに次韻す

欲求五畝寄樵蘇。　五畝を求めて樵蘇に寄らんと欲す、
所至遲留似賈胡。　至る所遲留賈胡に似たり、
信命不須歌去汝。　命に信せて須ひず去汝を歌ふことを、
逢人未免歎猗吾。　人に逢うて未だ免れず猗吾を歎ずるを、
人皆勸我杯中物。　人皆我に勸む杯中の物、
我獨憐君屋上烏。　我獨り憐む君が屋上の烏、
一伎文章何足道。　一伎文章何ぞ道ふに足らん、
要知摩詰是文殊。　知らんと要す摩詰是れ文殊、

【字解】【一】樵蘇　樵は薪を取る者、蘇は草を取る者、左太沖「魏都賦」に、樵蘇往而無忌と、【二】賈胡　「後漢書」に、馬援征五溪、水疾船不得上、耿舒與兄弁書曰、伏波類西域賈胡、到一處輒止、以是失利と、【三】去汝　「毛詩」に、逝將去汝、適彼樂土と、【四】猗吾　「論語公冶長章」に、崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶吾大夫崔子也、違之、之一邦、則又曰、猶吾大夫崔子也、違之何如、子曰清矣、曰仁矣乎、未知、焉得仁と、【五】杯中物　酒を云ふ、淵明の詩、天運苟如此、且進杯中物と、【六】屋上烏　杜子美の詩、丈人屋上烏、烏好人亦好と、「太公六韜」に、武王克殷、將奈其士衆何、太公曰、愛其人者、愛及屋上之烏、憎其人者、惡其餘胥と、【七】摩詰　「維摩經」に、佛告文殊師利、汝行詣維摩詰問疾、文殊師利言、彼上人者、難以酬對、深達實相、善說法要と、

【詩意】余は五畝安身の地を求めて樵蘇に寄託せんと思ふも、官途に在つて至る所に滯留して恰も賈胡に似て居る、乃ち身は運命に信して此處はいかぬ彼處はよいと擇ぶことはせぬ、人に逢うて余は淸ではあるが仁であるとは言へないことを嘆する、他人は皆我に杯中の物を飲めと勸むるが、我は君が博愛の心に富むを可憐に思ふ、文章は僅かに藝の一伎道に於ては道ふに足らぬ、知らんと要することは摩詰と文殊の法の深妙を論ずることである、

【餘論】紀曰く、此格刱自義山、殊非雅音と、案するに佛語と詩語を混用するは公の癖恠むに足らざるが、今の結句、摩詰是文殊は意義を成さない、人の字も二字、我も二字、例の疵である、

次韻致遠

致遠に次韻す

長笑右軍稱草聖。　長く笑ふ右軍の草聖と稱するを、
不如東野以詩鳴。　如かず東野の詩を以て鳴るに、
樂天自愛吟淮月。　樂天は自から愛す淮月に吟ずるを、
懷祖無勞聽角聲。　懷祖は角聲を聽くを勞とすること無し、

【字解】【一】草聖　「宣和書譜」に、王羲之、善草隸、爲今昔之冠、然其得名、乃專以草聖と、書譜は畫譜と共に撰人の名は著はさざるも蔡京と蔡卞と米芾と三人の合著ならんと、二十巻皆内府に藏する墨跡を以てしたのである、【二】東野　韓退之の送孟東野序に、東野始以其詩鳴、其高出魏晉と、【三】樂天　樂天宿淮口詩に、舟行明月下、夜泊淸淮北、行行弄雲水、步步近鄕國と、【四】懷祖　「晉書」に、王述爲會稽、以母喪居郡境、羲之代述止一弔、述毎聞角聲、謂羲之當候己、如此者累年、而羲之不顧と、懷祖は述の字、角聲は軍營中に吹く角笛、

【詩意】右軍を世人が草聖と稱するは我は笑ふのである、如かず孟東野の詩名を以て鳴るには、白樂天は自から好んで淮水の月に吟詠する、懷祖は角聲を聽くことを少しも勞としない、

【餘論】四人の人名を入れて歌ふ、一種游戲の作、可も無く不可も無きもの、

次韻杭人裴維甫

杭人裴維甫に次韻す

餘杭門外葉飛秋。　餘杭門外葉飛の秋、
尙記居人挽去舟。　尙ほ記す居人の去舟を挽くを、
一別臨平山上塔。　一別臨平山上の塔、
五年雲夢澤南州。　五年雲夢澤南の州、
凄涼楚些緣吾發。　凄涼の楚些吾に緣りて發し、
邂逅秦淮爲子留。　邂逅す秦淮子が爲めに留まる、
寄謝西湖舊風月。　寄謝す西湖の舊風月、
故應時許夢中游。　故に應に時に許すべし夢中の游を、

【字解】【一】餘杭　今は縣名、秦漢以來浙江の杭州府に屬す、今は浙江の錢塘道、吳自牧の「夢粱錄」に、杭州北城門者三、一曰餘杭門、舊名北關是也と、【二】挽去舟　「晉書」に、吳人歌曰、鄧侯挽不留、謝令推不去と、【三】臨平山　「杭州圖經」に、臨平山、在州西北六十里と、【四】雲夢澤　雲澤と夢澤と二澤なるも合して雲夢澤の一と爲す、湖北安陸縣南に在る、雲は江北、夢は江南、方八九百里、聚落が散在する、

【五】楚些　些は些細とか些事とか成語してスコシの義に用ふるが、本義は無意義である、楚人の發する歎聲で、宋玉の招魂に毎句些字を用ふ、「說文」にも語詞とある、【六】邂逅　約束せずして出會するを云ふ、「詩鄘風」に、有二美一人一、淸揚婉兮、邂逅相遇、適二我願一兮と、【七】夢中游　白樂天の詩、十五年前似二夢游一と、

【題義】黃州を去つて後、杭州の人裴維甫が贈られたる詩に次韻したるもの、裴は嘉祐四年の進士、公よりは遙かに後進である、

【詩意】黃を去るの時は餘杭門外は落葉飛散する高秋であつた、今も尙ほ記憶する杭の居人は別を惜んで去舟を挽き留めしことを、一たび臨平山下の塔下を別れて、已に五年の間雲夢澤南の州に在る、淒涼として楚些の如き哀歌は吾が胸中より發する、邂逅に相遇ふ秦淮の地は子の懇請に因つて留まる、君に賴つて寄謝する杭州西湖舊知の風月に、此の如き理由にて身は游べないが夢中には游ぶが是を許すや否や、

【餘論】紀曰く、淸婉可レ誦と、雲夢と夢中は義異なれば同字妨げなきも、讀んだ刹那の感が善くない、矢張り同字は無い方がよい、

## 次韻段縫見贈
段縫贈らるるに次韻す

季子(一)東周負郭田(二)。　季子は東周負郭の田、

須知力穡(三)是家傳。　須らく知るべし力穡は是れ家傳なるを、

細思種レ薤(四)五十本。　細思して薤を種う五十本、

大勝取レ禾(五)三百廛。　大勝して禾を取る三百廛、

若得與レ君連北巷(六)。　若し君と北巷に連なることを得ば、

故應終老忘西川(七)。　故に應に老を終るまで西川を忘るべし、

短衣(八)匹馬非吾事。　短衣匹馬吾が事にあらず、

只擬關門不レ問レ天。　只關門天に問はざるに擬す、

【字解】【一】季子　蘇秦の字、東周洛陽の人、【二】負郭田　「史記蘇秦傳」に、秦曰使三我有二負郭田二頃一、豈能佩二六國相印一乎と、天子の城下に近き處の好田地を負郭田と云ふ、【三】力穡　「尙書」に、若二農服一レ田力レ穡、乃亦有レ秋と、穀を植うるを稼と云ひ、穀を斂むるを穡と云ふ、要するに農事に盡力すること、【四】薤五十本　「前漢龔遂傳」に、勸二民務二農桑一、令三口種二一株楡、百本薤、五十本葱、一畦韭一と、薤はオホニラ、漢書に薤に作る、五十は杜牧之の南朝四百八十寺の句法、平聲讀のシンにて、入聲讀のジフでは諧調を失する、【五】取禾　「詩」に、不レ稼不レ穡、胡取二禾三百廛一兮と、【六】北巷　杜子美の詩、我居二巷南一子巷北と、【七】西川　蜀の西川、【八】短衣　杜子美の詩、自斷此生休レ問レ天、杜曲幸有二桑麻田一、故將レ移二住南山邊一、短衣匹馬隨二李廣一、看レ射二猛虎一終二殘年一と、

【題義】朝散大夫の官に居る段縫字は約之が贈らるる詩に次韻して作る、

【詩意】蘇秦も本心は東周に負郭の田を有して、力穡するのが是れ家傳であることを知つて居た、家計を細思して薤を種うる五十本を命じた人もある、而して收穫は禾が三百廛に及ぶのである、我も亦若し君と北巷に居を連ぬることが出來るなら、此の身は終身故鄕の西川に還らうと思はぬであらう、短衣匹馬人間に驅役するは吾が事ではない、只關門に擬して運命を天に問はない、

## 題孫思邈眞

孫思邈の眞に題す

先生一去五百載。　先生一去して五百載、
猶在峨眉西崦中。　猶ほ峨眉西崦の中に在り、
自爲天仙足官府。　自から天仙の爲めに官府足る、
不應尸解坐蝱蟲。　尸解して坐ながら蝱蟲なるべからず、

【字解】【一】五百載　陳隋の世より、大凡の計數、【二】峨眉　「杜陽雜編」に、明皇西幸、夢一叟、再拜於前曰、臣孫思邈也、廬於峨眉山有年矣、今聞鑾駕成都、故來候謁と、【三】西崦　日の入る所の山を崦嵫と云ふ、「山海經」に、鳥鼠同穴西南曰崦嵫、下有虞川、日所入處と、【四】足官府　韓退之の詩、上界眞人足官府と、「周禮」に、以八法治官府と、政府、役所と同じ、【五】尸解　梵侶の死を示寂と云ふ、道士の死を尸解と曰ふ、四大がほどける義、佛をホトケと和訓する、即ち解の義である、尸は屍である、【六】蝱蟲　蝱はアブなれど、今は蟲蛆と見ればよい、「僊傳拾遺」に、孫思邈、嘗有神僊降曰、爾所著千金方、濟人之功、亦已廣矣、而以物命爲藥、害物亦多、必爲尸解之僊、不得白日輕擧矣、其後思邈、取草木之藥、以代蝱蝨水蛭之命、作千金方翼三十篇、每篇有龍宮僊方一首、行之於世と、

【題義】孫思邈は京兆華原の人、周の宣帝の時、太白山に隱居し、隋の文帝徵して國子博士と爲すも起たず、唐の高宗召見して、鄱陽公主の邑司を賜うて居らしむ、學は數術を究む、自から云ふ年九十三と、鄉里咸云ふ數百歲と、老子莊子の注を著はし、天授中に鳳閣侍郎と爲る、

【詩意】先生は人間の世を去つて已に五百載であるが、猶ほ峨眉西崦の中に在る、自から天僊中の堂堂たる高官に上つて居る、肉身が死して蟲蛆が生ずる如き醜態はない、

【餘論】紀曰く、自寫兀傲と、紀評は當る、孫思邈の名を借りて以て自からを寫すのである、韓愈が伯夷頌を作りて自家を寫すと同樣である、

## 戲作鮰魚一絶

戲れに鮰魚一絶を作る

粉紅石首仍無骨。　粉紅の石首仍ほ骨無く、
雪白河豘不藥人。　雪白の河豘人に藥ならず、
寄語天公與河伯。　語を寄す天公と河伯とに、
何妨乞與水精鱗。　何ぞ妨げん水精鱗に乞與するを、

【字解】【一】石首　「蘇州圖經」に、婁魚城下、水中有石首魚と、又「明一統志」に、石首魚、在南海、頭中有小石、故名と、【二】河豘　河豚、河魨、河豚を普通とす、「藝苑雌黃」に、鮰水族之奇味、世傳其能殺人と、フグの中毒にて死する者在り、【三】河伯　「抱朴子」に、馮夷以八月上庚日、渡河溺死、天帝署爲河伯と、

【題義】鮰魚は鮎の類であると古注にあるが、詳かではない、古注に釋氏稽古畧を引く、今考ふ釋氏稽古畧の寶公の故事は是と何の關係もない、

【詩意】赤色の石首魚は全身に骨が少しも無い、又白色の河豚は食へば人を殺す、我は寄語する天帝と河伯に、何ぞ妨げんや此の魚にも水精鱗を乞與したることを、

【餘論】紀曰く、俚甚と、一時游戲の作、俚の尤なるもの、

## 同王勝之游蔣山

到郡席不暖。居民空惘然。
好山無十里。遺恨恐他年。
欲款南朝寺。同登北郭船。
朱門收畫戟。紺宇出青蓮。
【自注】荊公宅已爲寺。
夾路蒼髯古。迎人翠麓偏。
龍腰蟠故國。鳥爪寄層巓。
竹杪飛華屋。松根泫細泉。
峰多巧障日。江遠欲浮天。
畧彴橫秋水。浮圖插暮煙。
歸來踏人影。雲細月娟娟。

王勝之と同じく蔣山に游ぶ

郡に到りて席暖まらず、居民空しく惘然、
好山十里無し、遺恨恐らくは他年、
南朝の寺を款かんと欲し、同じく登る北郭の船、
朱門畫戟を收め、紺宇青蓮出づ、
路を夾んで蒼髯古、人を迎へて翠麓偏す、
龍腰故國に蟠し、鳥爪層巓に寄る、
竹杪華屋に飛び、松根細泉に泫す、
峰多くして巧に日を障へ、江遠くして天に浮ばんと欲す、
畧彴秋水橫ふ、浮圖暮煙を插む、
歸來人影を踏む、雲細かに月娟娟、

【字解】【一】席不暖　韓退之「爭臣論」に、孔子席不暇暖と、孔子が四方に周游して座席暖まる暇の無きを云ふ、【二】惘然　「後漢黃憲傳」に、戴良見憲歸、惘然若有失と、俗語のボンヤリすること、【三】十里　「家語」に、達山十里、蟪蛄之聲、猶尚在耳と、【四】南朝寺　東晉と宋と齊と梁と陳と隋と皆金陵を都とす、之を南朝と謂ふ、杜牧之の詩、南朝四百八十寺と、【五】畫戟　隋の制、三品以上は門頭皆戟を列ね、【六】紺宇　紺園と同じ、寺を稱す、寺門多く紺色、劉長卿の詩、紺宇挾香浮と、青蓮も亦寺を謂ふ、李太白の詩、我尋青蓮宇、獨往謝城闕と、【七】蒼髯　松檜を謂ふ、査初白云ふ、金陵地紀、蔣山初少林木、東晉時、令諸州刺史、罷還京者、人栽松百株、郡守五十株、宋時刺史栽三十株、下至郡守各有差と、【八】龍腰　「寰宇記」に、諸葛亮、謂呉大帝曰、鍾山龍蟠、石城虎踞、眞帝王都也と、【九】鳥爪　「高僧傳」に、誌公生於鷹窠、手脚鳥爪、死葬此山と、【一〇】泫　泫然、水微流の貌、【一一】畧彴　マルキバシ、獨木橋である、【一二】浮圖　梵語の窣都婆、ツウツバの音譯、即ち塔である、【一三】娟娟　新月の圓違なる貌、

【題義】蔣山は鍾山又は俗に紫金山と稱す、今日の江蘇江寧縣の東北に在る、孔明が歎稱せしより其の名愈よ高し、王荊公、蘇子美、宋の大家皆名篇あり、今王勝之と同游して作る、

【詩意】郡に赴任するも出游すること多く席が暖まる暇がない、郡の居民は其の有様を見て空しく惘然として居る、好山は十里弱の地に在る、一游もしないときは遺恨恐らくは他年ならんと思ふ、是に於てか南朝の古寺を款問せんと、二人して同じく北郭の船に乘つて路を取る、當時諸侯の邸門は今は寂寞として畫戟を見ない、只紺宇が青蓮花の出づるが如くに在る、左右の路を夾んで松檜は喬木と爲つて古り、訪人を迎へて翠陰が山麓にまで偏し、龍蟠の地形は眞に故國の趣がある、古の高僧の塔は層巓に樹ててある、修竹林の杪頭には塔の華屋が飛來せしかと疑ふ、而して松根には細泉が泫然として流るる聲を聞く、山峯が多ければ巧妙に日を障へる、長江は遠きより視れば天に浮んで流るる如くである、獨木橋下には秋水が橫流する、塔尖の邊は暮煙を插んで居る、已にして歸路を求めて來れば

人影を踏むの夜景となる、雲は細細にして月は娟娟として見ゆ、

【餘論】紀曰く、風神秀削と、王荊公が峯多巧障日、江遠欲浮天の二句を讀み歎じて曰く、老夫平生作詩無此二句と、乃ち次韻して曰く、金陵限南北、形勢豈其然、楚役六千里、陳亡三百年、江山空幙府、風月自航船、主迸悲涼岸、妃埋想故蓮、臺傾鳳久去、城踞虎爭偏、司馬墻廟域、獨龍層塔巓、森疎五顯木、蹇淺一人泉、梲杖窮諸嶺、籃輿罷半天、朱門園滌水、碧瓦第靑煙、墨客眞能賦、留詩野竹娟と、眞に大將と大將と相對して、毫も軒輊することは出來ない、長律の上乘なるものと思ふ、

## 至眞州再和二首

老手王摩詰。窮交孟浩然。
論詩曾件直。話舊已忘年。
北上難陪驥。東行且趁船。
離亭花映肉。醉眼鷺窺蓮。
栬轉三山沒。風回五兩偏。
荒祠過瓜步。古甃墮松巓。

眞州に至り再和す　二首

老手の王摩詰、窮交の孟浩然、
詩を論じて曾て直に伴ひ、舊を話して已に年を忘る、
北上して驥に陪し難く、東行して且らく船を趁ふ、
離亭花肉に映じ、醉眼鷺蓮を窺ふ、
栬轉じて三山沒し、風回りて五兩偏す、
荒祠瓜步を過ぎ、古甃松巓に墮つ、

聞道淸香閣。新篘白玉泉。
莫敎門掩夜。坐待月流天。
小院檀槽鬧。空庭樺燭煙。
公詩便堪唱。爲付小嬋娟。

聞く道らく淸香閣、新篘白玉泉、
門夜を掩はしむる莫かれ、坐して待つ月天に流るるを、
小院檀槽鬧がし、空庭樺燭の煙、
公が詩便ち唱ふるに堪へたり、爲めに付す小嬋娟、

【字解】【一】老手　能手、妙手、皆同義に用ふ、伎に精達したるを云ふ、【二】伴直　摩詰が公廷の宿直に竊に孟浩然を呼んで、宮中にて詩を論ぜしこと、【三】忘年　彼は年長、此は年少と互に其の年を忘れて交游すること、杜子美の詩、淸談見滋味、爾輩可忘年と、【四】北上「世說」に、賀司空入洛、經吳閶門、在船中彈琴、張季鷹、本不相識、聞絃甚淸、下船就賀因共語、便大相知悅、問賀欲何之、賀曰入洛赴命、正爾進路、張曰、吾亦有事北京、因路寄載、便與賀同發、初不告家、家追問乃知と、此の句は暗に此の故事を借りて、之を翻用したのであると邵僃の說に見ゆ、王勝之は江寧より移りて南都に赴く、乃ち是れ北上、【五】離亭　陳子昂の詩、斜月隱離亭と、【六】花映肉　杜子美の詩、紅顏白面花映肉と、【七】醉眼　杜牧の「晚晴賦」に、忽八九之紅芰、姹然如婦、斂然如女、白鷺潛來兮、邈風標之公子、窺此美人兮、如慕悅其容媚と、【八】栬轉　栬は檝、柁と同義、カヂ、「拾遺記」に、以棠文桂爲栬檝と、【九】三山沒「金陵志」に、三山在江寧府城西南、周圍四里、大江從西來、勢如建瓴、此山當衝と、【一〇】五兩　郭璞が「江賦」に、覘五兩之動靜と、李善曰く、凡候風法、以雞羽重八兩、建五丈旗、取羽繫其顚、立軍營中、許愼淮南子注曰、綄候風也、音桓、楚人謂之五兩と、【一一】瓜步　揚州江都縣瓜步鎭は眞州に往くの渡口、【一二】古甃　陳陶の詩、鮫龍蟠古甃と、石の甃である、【一三】新篘　白樂天の詩、一甕香醪新插篘と、篘は酒を漉す器、【一四】檀槽鬧「明皇雜錄」に、白秀貞、自蜀回、得邏逤檀雙鳳琵琶と、李義山の詩、檀槽一抹廣陵春と、紫檀で作る琵琶の胴を檀槽と云ふ、琵琶の中空にして兩面に革を張る所が槽である、【一五】樺燭　樺はカバの樹、其の皮を以て蠟を卷き燭火と爲すもの、沈佺期の詩、無勞秉樺燭と、【一六】小嬋娟　妓女の名、

【題義】王勝之と別れて眞州に至りて再和の詩を作る、

【詩意】唐代の老手たる王摩詰は、身高官であるが、一平民にて且つ窮乏なる孟浩然とは交はりを忘れない、詩を論ずる爲めに平民の孟を宮中の宿直室へ伴うて來、舊游を話して官の高きも年の上下も共に之を忘れる、君は今北上するも僕に隨伴することは出來ない、僕は君の北上とは反對に東行して路を水上に取る、離亭には花が爛漫である、又鷺が醉眼を以て蓮を窺ふ如き態度の樣を見る、梔が轉すれば今まで眼に在つた三山が影を沒する、しかし風は順風にて五兩偏する風である、已にして瓜步の渡口に江妃を祀る荒祠の側も過ぎた、其の前路に古甃が松巓に墮ちたるを見る、是は曾てより聞いて居る淸香閣の屋根が松巓と等しき爲めである、此の閣に息うて新篘の白玉泉を酌まんと思ふ、是の故に夜に到るも門は掩はないやうに賴む、乃ち是に坐して月の天中を流るるを見んか、小院の中にては權槽の響き閙ぐの音が聞える、而して空庭には樺燭の煙が颺がる、是に於て公の詩を朗唱するの氣分が起る、而かも自分獨りではいかない、是の故に此の詩を歌へよと小嬋娟に付したのである、

〔二〕

公顏如雪柏。千載故依（一）然。
笑我無（二）根柳。空中不待年。

〔二〕

公顏雪柏の如く、千載故くして依然、
笑ふ我が無根の柳、空中年を待たず、

肯留歸闕旆。坐待逆（三）風船。
特許門傳（四）籥。那知（五）箭起蓮。
相逢月上後。小（六）語坐西偏。
流落千（七）帆側。追思百尺巓。
躬耕懷谷（八）口。水（九）石羨平泉。
（一〇）茅屋歸元亮。霓（一一）裳醉樂天。
行聞宣室（一二）召。歸近御（一三）爐煙。
未用歌池上。隨（一四）宜敎李娟。

肯て留めん歸闕の旆、坐して待つ逆風の船、
特許す門に籥を傳ふるを、那ぞ知らん箭に蓮を起すと、
相逢ふ月の上る後、小語して西偏に坐す、
流落す千帆の側、追思す百尺の巓、
躬耕谷口を懷ひ、水石平泉を羨む、
茅屋元亮歸り、霓裳樂天を醉はしむ、
行いて聞く宣室の召すを、歸りて御爐の煙に近し、
未だ用ひず池上に歌ふを、隨宜に李娟に敎へん、

【字解】〔一〕依然　「古詩」に、聞非〻燒〻敗梜〻、見子故依然と、〔二〕無根柳　韓滉之の詩、浮雲柳絮無根蒂と、「劉義慶世說」に、顧悅與簡文帝同年、而髮早白、簡文曰、卿何以先白、對曰、蒲柳之姿、望秋而落、松柏之質、經霜彌茂と、〔三〕逆風　「後漢書皇甫嵩傳」に、逆坂走丸、迎風縱棹、豈云易哉と、〔四〕籥　鑰と同じ、〔五〕箭起蓮　王梅谿曰く、蓮花漏法、以水浮箭爲候と、〔六〕小語　「世說」に、支道林、謂王逸少曰、貧道與君小語と、〔七〕千帆側　劉禹錫の詩、沈舟側畔千帆過、病木前頭萬樹春と、〔八〕谷口　揚子雲云ふ、谷口鄭子眞、耕於巖石之下、名振於京師と、〔九〕水石　李衞公の詩序云、後世以平泉一石一花移他處者、非李氏子孫と、「賈氏談錄」に、李德裕平泉莊、周圍四十里、天下奇花異草、珍松怪石、靡不畢置其間と、〔一〇〕茅屋　陶元亮の詩に、樂眞衡茅下、庶以善自吻と、〔一一〕霓裳　白樂天の「醉吟先生傳」に、若興發、命家僮、調法部、絲竹合奏霓裳羽衣一曲、放情自娛と、〔一二〕宣室召　漢の文帝、賈誼を宣室に召して、夜半に席を前め、鬼神の事を問ふ、〔一三〕御爐煙　唐

詩に、從事不ㇾ須ㇾ輕ニ御史一、滿身獨帶御爐煙と、【四】隨宜　白樂天の詩、李娟張態君莫ㇾ嫌、亦擬隨宜且教取と、李娟、張態は蘇の妓女、

【詩意】公の顏は雪に耐へる松柏の如く、いつまでも故の依然たる盛容である、君に反し我は笑ふ此の身は無根の柳の如く、根柢が無いから年を待たずして衰變するであらう、肯て歸闕の旆を留め置いて、身は坐して逆風の船客と爲らんと待つ、役人は特に許して吳れた門に鑰を挂けない事を、只何ぞ知り得んや時の幾時であることを、相逢うて小語する月の上る後、西偏に對坐したることを、低き處の千帆の側に流落すれば、高き處の百尺の巓に追思せざるを得ない、人品を守りて躬耕せる鄭子眞の谷口の淸きを懷ひ、又天下水石の美を究める平泉を羨むべきである、茅屋に住する人は多多あるが高士としては陶淵明である、妓を集めて舞歌せし人も多多あるが、是は樂天を以て代表者としてよい、君の行くは皇室のお召であることを聞いて居る、退朝毎に必ず御爐の煙氣を帶びて來る、未だ河上を歌ふことはいらぬ、これは隨宜に李娟美人に敎へて歌はしむるがよい、

【餘論】紀は前首を評して、淸鑿と、後首を評して、湊泊と、確評である、鄭子眞の後に元亮出で、其の後に、白樂天が出で、其の次ぎに宣室が出づ、湊泊厭ふべきものがある、

## 次韻答ニ寶覺一

次韻寶覺に答ふ

芒鞵竹杖布(一)行纏。　芒鞵竹杖布行纏、
遮(二)莫千山與ニ萬山一。　遮莫　千山と萬山と、
從來無ㇾ脚不(三)ㇾ解ㇾ滑。　從來脚無くんば滑を解せず、
誰信石(四)頭行路難。　誰か信ぜん石頭行路難を、

【題義】金陵定林寺の長老たる寶覺の詩に次韻したるもの、

【詩意】手には竹杖を持ち足には芒鞵と布行纏を著く、此の甲斐甲斐しい容にては千山も萬山も容易に踏破が出來る、要するにそれは脚があるからである、從來無脚の人ならば路の滑であるか滑でないかを解しない、解しない位であるから石頭が行路難の險阻であると言うたとて到底信じない、

【餘論】末二句は所謂禪意禪語であるから、解釋の仕方で種種に說くことが出來る、今は正面の文字よりの解釋を施したのである、

一【字解】【一】布行纏　日本の脚絆の類な足に纏うて、歩行に便宜を取るならん、脚絆は、彼には行縢と名づく、【二】遮莫　明の方以智の「通雅」に、遮莫猶ㇾ言ニ儘敎一也と、唐代の俗語ならんとの説もある、唐詩に多くあるも今擧げず、【三】不解滑　「傳燈錄」に、鄧隱峯、辭ニ馬祖一、馬祖云、什麼去、對曰、石頭去、師云、石頭路滑と、【四】石頭　唐の石頭希遷禪師、天寶の初、衡山に到る、寺頭石あり、形狀臺の如し、乃ち菴を其の上に結びて居る、時人貴んで石頭和尚と日ふ、貞元中寂す、德宗之に無際大師と諡す、

## 眉子石硯歌。贈ニ胡誾一

眉子石硯の歌、胡誾に贈る

君不ㇾ見成都畫手　君見ずや成都の畫手十眉を開くを、

一【字解】【一】十眉　唐の玄宗、

開（一）十眉。
横雲却月爭新奇。　横雲却月新奇を爭ふ、
游人指點（二）小顰處。　游人指點す小顰の處、
中有（三）漁陽胡馬嘶。　中に漁陽胡馬の嘶くあり、
又不見（四）王孫（五）青瑣
横雙碧。　又見ずや王孫青瑣雙碧を横ふを、
腸斷浮雲（六）遠山色。　腸斷浮雲遠山の色、
書生性命何足論。　書生性命何ぞ論ずるに足らん、
坐費千金買（七）消渴。　坐して千金を費して消渇を買ふ、
爾來喪亂愁（八）天公。　爾來喪亂天公愁ふ、
謫向君家書硯中。　謫せられて君が家書硯の中に向ふ、
小窗（九）虛幌相嫵媚。　小窗虛幌相嫵媚す、
令君曉夢生（一〇）春紅。　君をして曉夢春紅を生せしむ、
（一一）毘耶居士談空處。　毘耶居士空を談ずる處、
結習已空（一二）花不住。　結習已に空しく花住せず、
試教天女爲（一三）磨鉛。　試みに天女をして磨鉛を爲さしむ、
（一四）千偈（一五）瀾翻無一語。　千偈瀾翻して一語無し、

畫工をして十眉圖を畫かしむ、一、鴛鴦、二、小山、三、五嶽、四、三峯、五、垂珠、六、却月、七、分梢、八、涵煙、九、横雲、十、倒暈、「淸稗類書」と、「海錄碎事」に出づ、【二】 小顰 顰は眉にシワをよせること、楊貴妃を指す、【三】 漁陽 安祿山の叛を言ふ、【四】 王孫 漢の卓王孫の女、卓文君を言ふ、文君竊かに戸隙より司馬相如を見て之を好む、【五】 青瑣 門扉に連鎖の模樣を彫刻して青漆にて繪く、【六】 遠山色 「西京雜記」に、文君姣好眉色、如望遠山、爲人放誕風流、故悅長卿之才、而越禮焉と、越禮とは私通を言ふ、【七】 消渇 「西京雜記」に、司馬長卿、素有消渇疾、悅文君色、遂以發痼疾、乃作美人賦、欲以自刺、而不能改、卒以此疾至死と、咽喉が乾きて、飲料を求むるも、尿の通ぜざる病である、【八】 天公 皇天を言ふ、【九】 虛幌 江文通の詩、錦帳虛幌と、幌はトバリ、帷幔、【一〇】 春紅 李太白の詩、花頰笑春紅と、

【一一】 毘耶 維摩居士は毘耶離城中の長者であれば、之を毘耶居士と曰ふ、【一二】 花不住 空の眞理を會得した人であれば、塵の花が飛んでも其の人の衣上には住著しない、【一三】 磨鉛 古代は鉛にて字を書く、語を替へて言へば磨墨と同じ、【一四】 千偈 二句八字、或は二句十字、散文にあらざるものを偈と稱す、「羅什傳」に、日誦千偈と、【一五】 瀾翻 韓退之の詩、挐指除雜口瀾翻と、

【題義】 蜀より出づる所の眉子石硯に題して胡誾に贈る、此の硯は半月形を爲して眉の如くなれば、詩中に多く眉態の事を詠じたものと思ふ、

【詩意】 君も見たであらう成都の畫家は十眉圖を毫端に展開したるを、横雲やら却月等に各の新奇の圖を爭ふことを、游人は小顰の處を指點して言ふ、彼の處は曾て漁陽胡馬の嘶きし處である、又見たであらう王孫の女が青瑣の隙より雙碧の眉を横へたことを、腸は斷つ遠山眉態も浮雲の爲め判然としない、書生が性命なぞを說くも論ずるに足らざることである、文君は千金を費して消渇の病を買ふに至る、蜀中は爾來喪亂が續出して屢ば天公を愁へしむ、それであるから眉態を謫して君が家の書硯の中に向はしめた、乃ち此の書硯は君が小牕虛幌の側に於て相嫵媚して、君をして曉夢に春紅を生せしむ、君は當年の毘耶居士の如く空を談ずる處、如何に眉態を以て君を惱まさんと欲する者が現はれて

もそれは功は無い、余が言を疑ふ者は試みに天女をして磨鉛を爲さしめて見よ、千偈を瀾翻して居るさまであるが實は初めより半偈も一偈も無いのである、

【餘論】紀は坐費千金買消渴の句を評して、文君不曾費千金と、紀は文君の當面を知つて、文君の裏面を知らないのである、消渴を買ふに至るまで、紅を買ひ、粉を購ひ、千金を費したるは明かである、此の如き裏面は坡公は知つて紀は知らないのである、

## 以玉帶施元長老。元以衲裙相報。次韻二首

玉帶を以て元長老に施す、元は衲裙を以て相報いらる、次韻二首

(一)病骨難堪(二)玉帶圍。　病骨堪へ難し玉帶の圍むに、
(三)鈍根仍落(四)箭鋒機。　鈍根仍ほ落つ箭鋒の機、
欲教(五)乞食歌姫院。　食を歌姫の院に乞はしめんと欲し、
(六)故與雲山舊(七)衲衣。　故に與ふ雲山の舊衲衣、

【字解】【一】病骨　孟東野の詩病骨可剸物と、【二】玉帶　杜子美の詩、不知官高卑、玉帶懸金魚と、【三】鈍根　利根の反對、「法華經」に、衆生諸根鈍、著樂癡所盲と、【四】箭鋒機　「傳燈錄序」に、機緣交激、若拄於箭鋒義と、利根機と云ふと殆んど同じ、【五】乞食　「北夢瑣言」に、貫休、嘗挂衲於歌姫院、持鉢乞食、自言曰、不爲俗情所染、可以說法爲人と、【六】故與　「五燈會元」に、寄得に作る、元よりは與である、公よりは寄である、【七】衲衣　「冷齋夜話」に云ふ、先生悟其前生爲戒禪師、常衣衲衣と、

【題義】佛印禪師名は了元は公が方外の友である、一日公之を尋ぬ、佛印云ふ內翰駕を枉げらるるも、坐處無しと、公戲れて曰く暫らく和尙の四大を借りて、用て禪牀と作さん、佛印云ふ、山僧一轉語あり、內翰卽答すれば、請ふ所に從ふべきも、若し稍稍でも擬議せば、公の玉帶を留めて山門を鎭せよ、公諾す、已にして佛印云ふ、山僧の四大本來空、五蘊有にあらず、內翰何れの處に於て坐せんと欲するや、公擬議して答ふる能はず、佛印は侍者を呼んで云ふ、此の玉帶を收めて永く山門を鎭せよと、公は笑つて之を許す、佛印遂に衲裙を以て公に與へ、且詩を作る、公が此の詩は其の次韻である、佛印の原作を見んと思ふ人は「五燈會元」を看よ、

【詩意】病骨は窮屈なる禮裝には堪へ難く思ふ、堪へ難く思ひながら著用して居るは畢竟鈍根の故である、今共の鈍根の機が箭鋒利根の機に落さる、思ふに師が意は余をして歌姫の院に食を乞はしめん爲めであらう、是の故に雲山の舊衲衣を施與せらる、

〔二〕

此帶閱人如傳舍。　此の帶人を閱する傳舍の如く、
流傳到我亦悠(一)哉。　流傳我に到るも亦悠なる哉、
錦袍錯(二)落差相(三)稱。　錦袍錯落相稱に差へば、

【字解】【一】悠哉　杜子美の詩、秋衆轉悠哉と、【二】錯落　入りまじる、「班固西都賦」に、隨侯明月、錯落其間と、【三】稱　かなふ、

乞二與佯狂老萬回一。　佯狂の老萬回に乞與せよ、

適である、仄聲、【四】佯狂 僞せ氣ちがひ、【五】老萬回「舊唐書」に、唐武后、賜二萬回和尚、錦袍玉帶一、師八九歲、能言、其兄戍二安西一、師持レ信、朝往夕返、自二宏農一抵二安西一萬餘里、故號二萬回一と、

【詩意】此の帶は人を閱すること宛も傳舍の如きものである、昨年は甲の官、今年は乙の官と流轉して今我に到る眞に悠なる哉である、錦袍錯落として居る物は元來吾と相稱はない、佯狂の老萬回に乞與するは吾が本懷である、

【餘論】明の王元美は藝苑巵言に、讀二子瞻詩一見レ學矣と評するは當る、明清の詩人が諸天とか眞性とかの佛語を用ふるを見るに、往往義を爲さざることがある、公の佛語を用ふる、毫も專家と異なること無し、實學の力、歎ずべきである、

## 次二韻滕元發許仲塗秦少游一　滕元發、許仲塗、秦少游に次韻す

二公詩格老彌新。　二公の詩格老いて彌よ新なり、

醉後狂吟許二野人一。　醉後狂吟野人を許す、

坐看青邱呑二澤芥一。　坐して看る青邱の澤芥を呑むを、

自慙黃潦薦二溪蘋一。　自から慙づ黃潦溪蘋を薦むるを、

兩邦旌纛光相照。　兩邦旌纛光 相照らし、

十畝鋤犂手自親。　十畝鋤犂手自から親しむ、

何似秦郎妙二天下一。　何似ぞ秦郎天下に妙なるに、

明年獻レ頌請二東巡一。　明年頌を獻じ東巡を請はん、

【字解】【一】二公 滕と許を謂ふ、【二】詩格「顏氏家訓」に、詩格既無二此例一と、【三】許野人 許の字王梅谿は許仲塗の性と認む、名詞ではなく、動詞である、王梅谿は誤る、野人は公自から謂ふ、【四】青邱「海內十洲記」に、長洲一名青邱、在二南海辰巳之位一、地方五千里、去レ岸二十五萬里と、【五】呑澤芥「藝苑雌黃」に、子虛賦中、芥蔕剌鯁也、非二草芥之芥一、東坡先生詩、坐看青邱呑二澤芥一、又西湖詩、亦有二青邱巳呑二雲夢芥一之句一、皆非也と、【六】黃潦「左傳隱公三年」に、苟有二明信一、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可レ薦二于鬼神一、可レ羞二于王公一と、潦はタマリミヅ、【七】兩邦 滕は湖州の知、許は潤州の知、【八】旌纛 旌は鳥の羽を付けたるハタ、纛は旄牛の尾を付けたるハタ、【九】獻頌「後漢馬融傳」に、車駕東二巡岱宗一、融上二東巡頌一、帝奇二其文一、召拜二郎中一と、

【題義】滕元發が初め詩を作り許仲塗と秦少游が續いで次し、公又續ぎて次韻したるものである、

【詩意】二公の詩格は老來彌よ新想を發する、醉後に狂吟する野人は暫く許し玉へ、坐して青邱が澤芥を呑むの雄大の氣象がある、それに慙づる小微微たる黃潦溪蘋を薦めることである、滕湖許潤の兩邦に樹つる旌纛は互に光が相照らして赫赫である、我は十畝の田園に鋤犂を持つて自から親しく眺す、秦郎が文章天下に妙なると二君の詩格と優劣は何似ぞと定むることは出來ない、明年は頌を獻じて東巡を請ひ帝の嘆稱を經て定むべきである、

【餘論】紀曰く、割裂不レ妥と、

## 送金山鄉僧歸蜀開堂

撞鐘浮(一)玉山。迎我(二)三千指。
衆中聞(三)謦欬。未語知鄉里。
我非箇中人。何以(四)默識子。
(五)振衣忽歸去。隻影千山裏。
(六)涪江與(七)中泠。共此一味水。
(八)冰盤薦(九)琥珀。何似(一〇)糖霜美。

金山の鄉僧蜀に歸りて開堂するを送る

鐘を撞く浮玉の山、我を迎ふ三千の指、
衆中謦欬を聞く、未だ語らざるに鄉里を知る、
我箇中の人にあらずんば、何を以て子を默識せん、
衣を振うて忽ち歸去す、隻影千山の裏、
涪江と中泠と、此の一味の水を共にす、
冰盤に琥珀を薦む、何似ぞや糖霜の美に、

【字解】【一】浮玉山　一名金山、揚子江の中心に在り、潤州城の東南に屬す、【二】三千指　三百人の手である、「漢書貨殖傳」に、通都大邑、童手指千、注千則人百と、【三】謦欬　言笑を喩ふるのである、「莊子」に、而況乎昆弟親戚之謦欬其側者乎と、【四】默識　暗中に記師するを謂ふ、「論語」に、默而識之と、【五】振衣　陸機の詩、撫枕不能寐、振衣獨長想と、【六】涪江　涪江は梓州の江鄉、僧の故鄉であらう、【七】中泠　金山の水を言ふ、【八】冰盤　韓退之の詩、冰盤夏薦碧實脆と、【九】琥珀　王梅谿曰く、琥珀正以言糖霜之狀と、鑛物の琥珀ではない、【一〇】糖霜　白砂糖である、古は甘蔗の汁を笮して曝して飴を製し、之を石蜜と號す、白糖を製するは唐以後なりと言ふ、

【題義】金山に住山したる鄉僧が蜀に歸りて祝國開堂するを送る詩、

【詩意】何事かの法要を修する爲めに鐘を浮玉の山に撞く、我を迎ふる三百人の法侶がある、其の多勢の中にて一僧の謦欬を聞く、未だ其の人と語らざるも是の人は我と同鄉だと云ふことが判る、我箇中の人にあらざるときは、何で子は我と同鄉だと云ふことを默識することが出來ようぞ、然るに忽忽に衣を振うて故國に歸去せんとする、蕭蕭として唯隻影が千山の裏を行く、しかし涪江の水と金山の中泠とは、遠近異なるも味は同一である、譬へば冰盤に琥珀を薦める、何似ぞや箇の白糖の甘美なると、

## 送沈逵赴廣南

嗟我與君皆丙(一)子。
(二)四十九年窮不死。
君隨(三)幕府戰(四)西羌。
夜渡(五)冰河斫雲壘。
飛塵漲天箭灑甲。
歸對(六)妻孥眞夢耳。
我謫黃岡四五年。

沈逵の廣南に赴くを送る

嗟我と君と皆丙子、
四十九年窮すれども死せず、
君は幕府に隨ひて西羌に戰ひ、
夜冰河を渡りて雲壘を斫る、
飛塵天に漲り箭甲に灑ぐ、
歸りて妻孥に對す眞に夢のみ、
我黃岡に謫せらるる四五年、

【字解】【一】丙子　仁宗の景祐三年、十二月十九日公生る、【二】四十九年　神宗の元豐七年甲子、【三】幕府　大將軍の本營、一定の常居無く、到る處に幕を引きて府とする、【四】西羌　「後漢書西羌傳」に、西羌之本、出自三苗、羌姓之別也と、【五】冰河　高山の雪融け、其の流狀、河と異ならず、之を冰河と云ふ、【六】妻孥　妻と子と、「詩

孤舟出沒煙波裏、　孤舟出沒煙波の裏、
故人不ニ復通一ニ問訊一。　故人復た問訊を通せす、
疾病饑寒疑ニ死矣一。　疾病饑寒死矣と疑ふ、
相逢握レ手一大笑。　相逢うて手を握り一大笑す、
白髮蒼顏略相似。　白髮蒼顏略ぼ相似たり、
我方北渡脫ニ重江一。　我方に北渡し重江を脫す、
君復南行輕ニ萬里一。　君復た南行して萬里を輕んず、
功名如レ幻何足レ計。　功名幻の如く何ぞ計るに足らん、
學道有レ涯眞可レ喜。　學道涯あり眞に喜ぶ可し、
勾漏丹砂已付レ君。　勾漏丹砂已に君に付す、
汝陽甕盎吾何恥。　汝陽甕盎吾何ぞ恥ぢん、
君歸赴ニ我雞黍約一。　君歸りて我が雞黍の約に赴かば、
買レ田築レ室從レ今始。　田を買ひ室を築く今より始む、

---

小雅」に、宜ニ爾妻孥一と、【七】煙波　杜牧之の詩、終老煙波不レ計レ程と、【八】問訊　杜子美の詩、問訊東橋竹と、謂甫問訊今何如と、【九】握手　江文通の詩、握レ手淚如レ雨と、【一〇】大笑「史記滑稽傳」に、淳于髡仰レ天大笑と、【一一】北渡　錦州より金陵と皆北渡である、【一二】南行　廣南道は宋置く、即ち唐の嶺南道である、【一三】有涯「莊子養生主篇」に、吾生也有レ涯、而知無レ涯と、【一四】勾漏「晉葛洪傳」に、以ニ年老一、欲ニ煉レ丹以祈ニ遐壽一、聞ニ交阯出レ丹、求レ爲ニ勾漏令一、帝以ニ洪資高一不レ許、洪曰、非レ欲レ爲レ榮、以レ有レ丹耳、帝從レ之、遂將ニ子姪一俱行、至ニ廣州一、刺史鄧嶽、留不レ聽レ去、洪乃止と、【一五】汝陽　汝州である、【一六】甕盎「莊子德充符篇」に、甕盎大癭、說ニ齊桓公一、桓公說レ之、而視ニ全人一、其脰肩肩と、汝州の風土病として頸に瘤がある、【一七】雞黍約　臨走して招待する、



甫に辨ぜり、

【題義】　永嘉縣の沈逵が廣南に赴くを送る詩、

【詩意】　ああ我と君とは同年である、然るに共に今日に至るまで四十九年の間窮すれども生は保つ、而して君は幕府の命令に隨つて西羌に戰ふ、其の時に夜冰河を渡りて敵の雲壘を斫る、其の戰ふや飛塵が天に漲りて箭は甲衣に雨の如く灑ぐ、而かも無事に歸りて妻孥に對するを得たるは眞に夢の如きのみ、我は謫せられて黃岡に居ること四五年、譬へて見れば孤舟が煙波の裏に出沒すると同樣である、舊友故人と復た音問を通ずること少れである、疾病にも飢寒にも今度は必ず死すと疑うた位である、所が生きて居て相逢ひ手を握るは喜びの餘り一大笑する、併し君も白髮蒼顏と變る、我も同樣である、我は方に北渡して重江を脫するの時、君は復た南行して萬里の遠きを輕んずる、人間の功名は幻影の如く何ぞ計畫するに足らんや、唯學道のみ涯あるは眞に喜ぶ可きである、廣南の勾漏丹砂は昔人が取つて來られなかつたが、それは君に付する爲めであらう、汝州の甕盎たる如き癭は我は先天的の不具でないから恥としない、君が重ねて歸來せば我が雞黍の約に背き玉ふな、我は田を買ひ室を築きて今日よりそれを待つ、

【餘論】　紀曰く、雙縮到底、雖レ薄而清と、公は此の評を得て地下に一大笑することと思ふ、

## 豆粥

君不見滹沱(一)流澌(二)
　車折(三)軸。
公孫倉皇(四)奉豆粥。
溼薪破竈自燎(五)衣。
飢寒(六)頓解劉文叔(七)。
又不見金谷(八)敲冰
　草木春。
帳下烹煎皆美人。
萍虀(九)豆粥不傳法。
咄嗟而辦石季倫(一〇)。
干戈未解身如寄。
聲色(一一)相纏心已醉。
身心(一二)顛倒不自知。

豆粥

君見ずや滹沱の流澌車は軸を折る、
公孫倉皇として豆粥を奉ず、
溼薪破竈自から燎衣、
飢寒頓に解く劉文叔、
又見ずや金谷に冰を敲く草木春、
帳下に烹煎する皆美人、
萍虀豆粥法を傳へず、
咄嗟にして辦ず石季倫、
干戈未だ解けず身寄するが如し、
聲色相纏うて心已に醉ふ、
身心顛倒して自から知らず、

更識人間有眞味。
豈如江頭千頃雪
　色蘆。
茅簷(一三)出沒晨煙孤。
地碓(一四)舂(一五)秔光似玉。
沙缾煮豆軟如酥(一六)。
我老此身無著處。
賣(一七)書來問東家住。
臥聽雞鳴粥熟時。
蓬頭(一八)曳履君家去。

更に識る人間の眞味あるを、
豈如かん江頭千頃雪色の蘆、
茅簷出沒晨煙孤なり、
地碓舂秔光玉に似、
沙缾豆を煮て軟かきこと酥の如し、
我老いて此の身著處無し、
書を賣り來りて問ふ東家の住、
臥して聽かん雞鳴粥熟の時、
蓬頭曳履君が家に去らん、

**【字解】**【一】滹沱　滹沱河は源を山西の泰戯山に發して、代縣孟縣を經て直隷に入り、更に東北流して子牙河と爲り、北運河に會して海に入る、【二】流澌　河水が盡きる處、【三】折軸　「史記范雎傳」に、須賈曰、五馬病、車軸折、非大車駟馬、吾不出と、【四】倉皇　胡曾の詩、倉皇闕智成何語と、【五】燎衣　燎はカガリビ、【六】飢寒　「後漢書馮異傳」に、異字公孫、王郎起、光武自薊東南馳、晨夜草舍、至饒陽蕪蔞亭、時寒冽、衆皆飢疲、異上豆粥、明旦光武、謂諸將曰、昨得公孫豆粥、飢寒俱解、及至南宮、遇大風雨、光武引車、入道旁空舍、異抱薪、鄧禹爇火、光武對竈燎衣、異復進麥飯、因復渡滹沱河、至信都と、【七】劉文叔　光武の字、【八】金谷　晉の石崇が園の名、【九】萍虀　萍はウキクサ、虀はナマス、「晉石崇傳」に、爲客作豆粥、咄嗟便辦、每冬得韮萍虀、王愷不能及、每以此爲恨、乃密貨崇帳下、問其所以、答云、豆至難煮、預作熟末、客來但作白粥以投之、韮萍虀、是擣韮根、雜以麥苗耳、於是悉從之、遂爭長焉、崇後知之、因殺所告者と、【一〇】季倫　石崇の字、【一一】聲色　「楞嚴經」に、汝愛我心、我憐汝色、以是因緣、經千百劫、常在纏縛と、【一二】身心　「楞嚴經」に、不知身心顛倒所在と、【一三】茅簷　クサブキの家、張繼の詩、茅簷秋日午雞鳴と、【一四】碓　カラウス、【一五】舂　うすづく、【一六】酥　牛羊の乳にて製せる飲料、【一七】賣書　杜子美の詩、盡拈書籍賣、來問爾東家と、【一八】蓬頭　「莊子說劍」に、皆蓬頭突鬢と、頭髮が蓬の如く亂る、

**【詩意】** 君は見ないか光武が滹沱河を渡り、流の澌盡せる處にて車の軸を折り、其の時公孫が倉皇と

して豆粥を奉進したることを、鄧禹は溼薪を破竈に入れて火を燒き光武は甲衣を乾かした、しかし豆粥を食うた爲めに飢と寒とを凌げたのである、又見ないか金谷園に於て冬猶ほ春の如き贅澤したる石崇を、帳下に平生美人を多く置いて料理に皆贅澤を極めしことを、萍虀豆粥は祕して他に其の煎法を傳へないが、石崇は此の豆粥を咄嗟の間に料辨する、石崇の愚鈍なる天下今戰爭最中で且つ此の身も何時頭が飛ぶかを知らない、而かも聲色を近づけて己が心は泥の如く醉うて居る、是れ身心顚倒して居り乍ら自分は知らずに居る、我は更に識る普通の人間に眞味のあるを、金谷の如き狹きものでなく所謂千頃茫茫の闊き江頭に蘆が雪の如く生じて居る處、其の邊には茅簷が點點と出沒して晨煙も細孤である、此の江郁にて別に祕法なぞ考へずに地碓舂秔する皆光が玉に似てゐる、沙缾に於て豆を煮るも其の柔軟は酥の如くである、我も老いて此の身に住著する處は無い、家藏の書籍を賣却して東家を問うて此に住せんと思ふ、而して臥し乍ら雞鳴を聽けば是れ粥の熟する時である、其の時亂髮のまま木履でも曳いて君が東家を訪ひ去らん、

【餘論】紀曰く、牽光武石崇二事、强生意義、支綴成篇、殊無眞實本領と、韓退之の所謂、牛溲馬勃、敗鼓之皮、悉く詩に入れざる無きが公の本領、徹徹たる豆粥、以て堂堂たる雄篇と成る、公としては眞實本領である、但し田園の好きを說き、而して終身紳笏の人であるは如何如何、

## 秦少游夢發殯而葬之者云。是劉發之柩。是歲發首薦秦。以詩賀之。劉涇亦作。因次其韻

秦少游、夢に發殯して之を葬る者は云ふ、是れ劉發の柩と、是の歲、發、首として秦を薦む、詩を以て之を賀す、劉涇も亦作る、因つて其の韻に次す

君看三代士執(一)雉。　君看よ三代の士雉を執るを、
本以殺身爲小補。　本身を殺すを以て小補と爲す、
居官死職戰死(二)綏。　官に居て職に死するは戰死して綏むなり、
夢(三)尸得官眞古語。　尸を夢みて官を得る眞の古語、
五(四)行勝己斯爲官。　五行己に勝つ斯を官と爲す、
官(五)如草木吾如土。　官は草木の如く吾は土の如し、
仕(六)而未祿猶賓客。　仕して未だ祿あらざるは猶ほ賓客、
待以純(七)臣蓋非古。　待するに純臣を以てす蓋し古にあらず、
餽(八)焉曰獻稱寡(九)君。　餽焉して獻と曰ひ寡君と稱す、
豈比公卿相爾(一〇)汝。　豈比せんや公卿が相爾汝するに、

【字解】【一】執雉　執贄、雉は死するも其の節を失はざることを表す、【二】死綏　「魏武帝紀」に、令曰司馬法、將軍死綏と、綏は安妥の義もある、又却、しりぞくの義もある、【三】夢尸　「晉殷浩傳」に、或問浩曰、將涖官而夢棺、將得財而夢糞何也、浩曰、官本臭腐、故將得官而夢尸、錢本糞土、故將得錢而夢穢、時人以爲名言と、【四】五行　「珞琭子」に、人命五行、剋我者爲官と、【五】官如草木　王梅谿曰く、五行以剋我者爲官、而先生止言官如草木吾如土、蓋

世衰道微士失己。
得喪悲歡反其故。
(一一)草袍(一二)蘆箠相嫵媚。
飮酒嬉游事(一三)羣聚。
(一四)曲江船舫月(一五)燈毬。
是謂舞(一六)殯而歌(一七)墓。
(一八)看花走馬到東野。
(一九)餘子紛紛何足數。
(二〇)二生年少兩豪逸。
詩酒不知軒(二一)冕苦。
故令將士夢發棺。
勸子勿爲官所腐。
(二二)塗車芻靈皆假設。
著眼細看君勿誤。

世衰へ道微にして士己を失ひ、
得喪悲歡其の故に反す、
草袍蘆箠相嫵媚す、
飮酒嬉游羣聚を事とす、
曲江の船舫月燈の毬、
是を殯に舞ひて墓に歌ふと謂ふ、
花を看馬を走らし東野に到る、
餘子紛紛何ぞ數ふるに足らん、
二生年少にして兩豪逸、
詩酒知らず軒冕の苦、
故に將士をして發棺を夢みしむ、
子に勸む官の腐る所と爲ること勿れ、
塗車芻靈皆假設、
著眼細看して君誤ること勿れ、

取其咒餞者言之耳と、剋は克、勝と義同じ、【六】仕而「孟子公孫丑下」に、仕而不受祿、古之道乎と、【七】純臣　純は良と同じ、純良の臣、「左傳隱公四年」に、石碏純臣也と、【八】餓焉「禮記」に、仕而未有祿者、有餓焉と、【九】寡君　自國の君主を他國人に對して言ふ、謙遜の稱、【一〇】爾汝　他を輕蔑する語、キサマと呼ぶの類、「孟子盡心章」に、人能充無受爾汝之實、無所往而不爲義也と、又親しみを表はすに用ふ、禰衡與孔融、作爾汝之交と、友人を呼んでキミと稱するは稍ほ隔意ある、キサマと呼ぶに到りて親熟の極となす、【一一】草袍「古詩」に、青袍似春草と、【一二】蘆箠　箠は策、馬のムチである、【一三】事羣聚「列子仲尼篇」に、長幼羣聚、而爲牢藉庖廚之物、



時(二三)來聊復一(二四)飛鳴。
進隱不須煩伍(二五)擧。

時に來りて聊か復た一飛鳴、
隱を進めて須ひず伍擧を煩はすを、

奚異犬豕之類乎と、【一四】曲江　池の名、唐人の詩、其の名在在、【一五】月燈毬　進士及第祝として曲江亭下に船舫を放ち、燈開打毬會を開くことを言ふ、【一六】舞殯　殯即ちカリモガリ、尸を棺に斂むるも、未だ葬禮を行はざるもの、【一七】歌墓「禮記」に、適墓不歌と、【一八】看花　孟東野が落第して棄置復棄置、情如刀劍傷と作り、又江離伴我泣、海月投人驚と作り、三度目に登第して春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花と、悲喪歡得の態、明白である、【一九】餘子「後漢禰衡傳」に、大兒孔文擧、小兒楊德祖、餘子碌碌不足數也と、【二〇】二生　秦少游と劉發、【二一】軒冕　軒は大夫以上の乘る車、冕は冠冕、「莊子繕性篇」に、軒冕在身、非性命也と、【二二】塗車「檀弓」に、塗車芻靈、自古有之、明器之道也と、塗車は泥を以て作る車、芻靈は草を束ねて人の形を造るもの、葬禮に用ふるもの、【二三】時來「唐張嘉貞傳」に、張說曰、宰相時來則爲と、【二四】一飛鳴「史記楚世家」に、莊王卽位三年、日夜爲樂、令國中曰、敢諫者死、伍擧入諫、莊王左抱鄭姬、右抱越女、坐鐘鼓之間、伍擧曰、願有進隱曰、有鳥在於阜、三年不蜚不鳴、是何鳥也、莊王曰、三年不蜚、蜚將沖天、三年不鳴、鳴將驚人、擧退矣、吾知之矣と、隱は謎である、【二五】伍擧　子胥の先世、

【題義】秦少游が夢に其の友劉發が死せると見た、而して葬送に及んで其の事に當る者は云ふ是は劉發の柩であると、而して是の歲劉發が首唱者と爲つて秦を官に推薦したのである、詩を作りて之を賀したるに、劉涇も亦作るに仍つて乃ち復た劉涇の韻に次して作るのである、

【詩意】君看玉へ三代の世の士が王の爲め雉を執ることを、本は此の身を殺すを以て國に小補ありと爲す、官職を有しながら其の職に死するは戰死して絞止すると同じ、尸を夢みて官を得ると云ふことは眞に古語である、水火木金土の五行が人の行爲として身を正しくする斯を官と云ふのである、譬

へて見れば官は草木の如くにて吾人は土の如きものである、仕官するも未だ俸祿を受けざる者は猶ほ賓客の類、之を待遇するに純臣の名を以てするは是れ古の法ではない、焉に食品を餽り獻と曰ひ寡君と稱する、公卿が互に相爾汝するに比すべきでない、然るに今や世道衰微して士も亦己を失ひ、得喪に悲歡の意を動かして道を學ばざる故に反る、草袍蘆箠の瑣事に相嫵媚する、加ふるに飲酒嬉游但會合することを樂しむ、曲江に船舫を泛べて月燈毬の游戲を事とする、殯には舞踏せず墓には吟歌せざるは禮であるに恰も反對の誤謬を爲す、東野の如き人でも登科して看花走馬の狂喜をしたのである、況んや餘子は碌碌紛紛何ぞ數ふるに足らんやである、今秦劉の二生は年少なるのみならず二人とも豪逸である、詩を作り酒を飲んで高官人の苦なぞ知らない、是の故に天は仕官して官苦を知らしめん爲め發の棺なぞを見せしめたのである、子等に勸めるが官の爲め本心を腐敗してはいかぬ、塗車芻靈は皆假設である、仔細に眼を著けて見て誤りてはならぬ、時節が來らば其の時一飛鳴するがよい、王の爲めに隱語を進獻するの伍擧と爲りてはいかぬ、

【餘論】紀曰く、純入論宗矣、然此種題、不入論宗、如何下語、既入論宗、不透快發洩、如何能暢逢其旨、皆勢之不得不然、不能復以含蓄不露繩之者と、凡そ此種の詩、香山をして作らしめば、此の佶屈の語は爲さざる所、韓退之、李長吉にも亦稀れである、依然として蘇家の論宗、

## 金山夢中作

金山夢中の作

（一）江東（二）賈客（三）木緜裘。　江東の賈客木緜の裘、
會散金山月滿樓。　會散じて金山月樓に滿つ、
夜半潮來（四）風又熟。　夜半潮來り風又熟す、
（五）臥吹簫管到（六）揚州。　臥して簫管を吹いて揚州に到る、

【字解】【一】江東　長江以東の地、江東の名は漢初に始まる、【二】賈客　商人、【三】木緜裘　「香山雜編」に、木緜、先花後葉、紫赤色、大如杯、二月三月間、花既謝、蘂爲綿、有綿盛之、彼人續爲衣裘と、「漫叟詩話」に、坡嘗衣木緜裘、坐客戲云木緜換俗、飲散乃出此詩、且云、纔欲俗不可得、坐客大笑と、南史に、孔覬二弟、頗營産業、請假東歸、覬出渚迎之、輜重十餘船、皆綿絹紙席之屬、覬僞喜、因命置岸側、既而正色謂曰、汝輩忝預士流、何至還東作賈客耶、命燒盡乃去と、【四】風又熟　熊孺登の詩、水生風熟布帆新と、【五】臥吹簫管　「唐書讓皇帝傳」に、漢中王瑀、素知音、嘗早朝過永興里、聞笛音、顧左右曰、是太常工手、曰然、他日識之曰、何故臥吹笛、工驚謝と、【六】揚州　「爾雅」に、江南曰揚州と、中心は江蘇である、

【詩意】江東の賈客は皆木緜の裘を談じて居る、其の會が散じたる後は金山の上唯月光が梵樓に滿つるのみ、夜半に潮が來り風も又順熟して、臥して簫管を吹きながら揚州繁華の地に到る、

【餘論】紀曰く、此有感而託之夢作耳、一氣渾成、自然神到と、公の七絶を論ずる者、多く望湖樓下水如天を取つて、此の詩を取らざるは、余亦之を怪しむ、題目已に夢、詩解すべく、又解すべからざるに由るか、

## 次二韻周穜惠一石銚

周穜の石銚を惠むに次韻す

銅腥鐵澀不ㇾ宜ㇾ泉。　銅腥鐵澀泉に宜しからず、
愛此蒼然深且寬。　愛す此の蒼然深く且寛なるを、
蟹眼翻ㇾ波湯已作。　蟹眼波を翻して湯已に作り、
龍頭拒ㇾ火柄猶寒。　龍頭火を拒ぎ柄猶は寒し、
薑新鹽少茶初熟。　薑新鹽少茶初めて熟し、
水漬雲蒸蘚未ㇾ乾。　水漬雲蒸蘚未だ乾かず、
自ㇾ古函牛多折ㇾ足。　古より函牛多く足を折る、
要ㇾ知無脚是輕安。　知るを要す無脚は是れ輕安、

【字解】〔一〕銅腥　「水經注」に永水東合二略斯一、塘中有二銅神水一、觸嬰ㇾ浪作二銅腥一と、〔二〕鐵澀　澀はしぶる、皮日休の詩、石澀古鐵銚と、〔三〕蒼然　古色蒼然、暮色蒼然、皆色に就いて言ふ、〔四〕蟹眼　蔡襄の「茶錄」に、候ㇾ湯最難、未ㇾ熟則沫浮、過ㇾ熟則茶沈、前世謂二之蟹眼一者、過熟湯也と、〔五〕龍頭　湯を汲む勺柄を言ふ、〔六〕薑新　薛能の詩、鹽損二添常戒一、薑宜二著更誇一と、唐人煎茶の法、薑と鹽とを多少之に調合して飲むのである、〔七〕水漬云云　韓退之の「石鼎聯句」に、外苞乾蘚文、中有二晴浪驚一と、〔八〕函牛　「淮南子」に、函牛之鼎、沸則蟻不ㇾ得ㇾ置二一足一焉と、〔九〕無脚　「衝波傳」に、孔子使二子貢於ㇾ吳、久雨不ㇾ來、謂二弟子一曰、占ㇾ之遇ㇾ鼎、皆言無ㇾ足不ㇾ來、顏回掩ㇾ口而笑曰、無ㇾ足者、乘ㇾ船而來矣、子貢朝至、如二回言一と、

【題義】鄆州教授の官に居る周穜字は仁熟が石にて造りし銚を惠むを謝する詩、銚は釜の柄も口も著いて居り、茶を煎又は他の飲食物を溫める爲めの器である、



【詩意】銅は腥味があり鐵は澀味があつて共に泉には宜しくない、石銚には此の腥と澀がないのみならず古色が蒼然として銚底も深く寛かでよい、湯が能く湧けば蟹の眼の如き波を翻し、其の銚も火の上にどれだけ長く置いても火力を拒ぎて柄は猶ほ寒涼である、薑の新らしきものと鹽とを混じて茶は初めて善熟する、薑と鹽とを入れた結果石は所謂水漬雲蒸して苔蘚が未だ乾かぬかと思ふ古色がある、昔から函牛の鼎の形は多く足を折る、此の石銚の無脚の形の方が折れる憂がなく是れ輕安である、

【餘論】紀曰く、今海舶、有二風熟之語一、蓋風之初作、轉移不ㇾ定、過二一日一不ㇾ轉、則方向定、謂二之風熟一と、茶熟の二字を評して風熟に至る、煎茶博士の東道たるもの、三句は銚、四句は石、五句は銚、六句は石、對法整正、

## 次二韻蔣潁叔一

蔣潁叔に次韻す

月明驚鵲未ㇾ安ㇾ枝。　月明驚鵲未だ枝に安んせず、
一棹飄然影自隨。　一棹飄然として影自から隨ふ、
江上秋風無ㇾ限浪。　江上の秋風限り無きの浪、
枕中春夢不二多時一。　枕中の春夢は多時ならず、
瓊林花草聞二前語一。　瓊林の花草前語を聞き、

【字解】〔一〕驚鵲　李太白の詩、還同月下鵲、三繞未ㇾ安ㇾ枝と、〔二〕江上　白香山の詩、秋風江上浪無限と、〔三〕枕中　王梅谿曰く、歐陽永叔詞語云、來如二春夢一不二多時一、枕中字、特用ㇾ字耳、不三必指二邯鄲呂翁枕一也と、〔四〕瓊林　開封の瓊

（五）罨畫溪山指後期。　罨畫の溪山後期を指す、
豈敢便爲雞黍約。　豈敢て便ち雞黍の約を爲すや、
玉堂金殿要論思。（六）（七）　玉堂金殿論思を要す、

【題義】蔣之奇字は穎叔が寄せられたる詩に次韻して作る、

【詩意】詭が驚鳴を發するは月明の爲め未だ安らかに寢ないのである、水にて降る人は一棹の孤舟飄然として自身の影が隨ふのみ、江上の秋風は長く吹いて無限の浪を揚ぐ、一枕軒中の春夢は信に短時間である、瓊林に登科を祝したる時花艸の好きを聞いたのは已に前語に屬した、だが罨畫の溪山に夏秋の景を見るのは是は後期である、但し罨畫の游を以て雞黍の約と定めたのではなく、眞の約は玉堂金殿に於て朝夕に文辭を論思して君の爲めに盡すに在る、

林、奉天の瓊林ではない、公自注に、蔣詩記及第時、瓊林苑宴、坐中所言、且約同卜居陽羨と、陽羨は常州である、【五】罨畫「呉興統志」に、罨畫溪、在長興縣西、古木夾岸、朱藤蔽其上と、【六】金殿「六朝古詩」に、華月照方池、列坐金殿側と、【七】論思「班固兩都賦序」に、朝夕論思、日月獻納と、

## 龜山辯才師

此生念念浮雲改。（一）　此の生念念浮雲改まる、
寄語長淮今好在。（二）　語を寄す長淮今好在なりや、

【字解】【一】念念「大論」に、念念無常と、柳子厚の詩、坐來念念非と、【二】長淮 江蘇安徽の間、



故人宴坐虹梁南。（三）（四）　故人宴坐す虹梁の南、
新河巧出龜山背。（五）　新河巧に出づ龜山の背に、
木魚呼客振林莽。（六）　木魚客を呼んで林莽に振ひ、
鐵鳳横空飛綵繪。（七）　鐵鳳空に横はりて彩繪を飛ばす、
忽驚堂宇變雄深。（八）　忽ち驚く堂宇の雄深に變ずるに、
坐覺風雷生謦欬。　坐に覺ゆ風雷も謦欬より生ずるかと、
羨師游戲浮漚間。（九）（一〇）　羨む師が游戲す浮漚の間に、
笑我榮枯彈指內。（一一）　笑ふ我が榮枯彈指の內、
嘗茶看畫亦不惡。（一二）　茶を嘗め畫を看る亦惡しからず、
問法求詩了無礙。（一三）　法を問ひ詩を求む了に無礙、
千里孤帆又獨來。　千里孤帆又獨來、
五年一夢誰相對。　五年一夢誰か相對せん、
何當來世結香火。（一四）　何か當に來世香火を結び、
永與名山供井磑。（一五）　永く名山と井磑を供せん、

【三】宴坐 燕坐、安坐と同じ、【四】虹梁 泗州の長橋を指す、【五】新河「泗州圖經」に、新河在龜山南、元豐七年、發運使蔣之奇、開鑿、夾河自洪澤上至龜山六十里、謂之新河と、【六】木魚 唐以來、禪林にて是を製す、宋の道誠の「釋氏要覽」に、今寺院之木魚者、蓋古人不可以木朴擊之、故剡魚象也、又必取張華相魚之名、或取鯨魚一擊大鳴也と、【七】鐵鳳 杜子美の詩、鐵鳳森翺翔と、庭中に立つる長竿、【八】變雄深 佛說の神通變化、小は忽ち大と變ずる意、施懷初は雄深雅健と云ふ、此の句の意味ではない、風雷も神通變化を言ふ、【九】游戲「法華經」に、游戲神通と、【一〇】浮漚「楞嚴經」に、空生大覺中、如海一漚發、有漏微塵國、皆依空所生、漚滅空本無、況

復請三有と、【一一】彈指　「維摩經」に、度二千百劫一、猶如二彈指一と、「法華神力品」に、一時謦欬、俱共彈指と、荊溪の「文句」に、彈指者隨喜也と、懽喜の爲めと隨喜の爲めと警告の爲めの三用がある、今の句は「一秒時間に」の意である、專門家の辭典に「ダンシ」とあるは非常に誤る、「ダンジ」と讀むが古例である、【一二】問法　杜子美の詩、問レ法看二詩妄一、觀レ身向二酒慵一と、【一三】無礙　佛典で自由自在を表はす語、【一四】香火　「唐書」に、白樂天、與二香山僧如滿一、結二香火社一と、【一五】井磴　「高僧傳」に、五祖弘忍、問二慧能一曰、汝作二何功德一、能曰、團錫レ力抱レ石而春、供レ衆而已と、磴はウス、

【題義】泗州の龜山に住する辯才法師に贈る詩、辯才は曾て杭州の上天竺寺にも住せし人である、

【詩意】人間の此の生は一念念の間に浮雲の如く變改するものである、余は師の爲めに信を發して長淮に今猶は無事に在ますや、察知するに故人は虹梁の南畔に宴坐するであらう、新河は巧に師の住み玉ふ龜山の背面に出づるを見る、其の龜山では木魚の聲が香客を呼ぶ如く林莽の中に振ふ、又鐵竿の棒には鳳凰の楡のあるのが空に飛ぶかと思ふ、忽ちに驚く尋常の堂宇も非常なる寶殿の雄深なるを幻出する、又坐に覺ゆ風雷も師の一謦一欬より生ずるにあらずやと、羨む師が自由に浮漚の間に游戲することを、師に反して笑ふは我等が榮だの枯だのと爭うて居るは彈指の寸間であることを、茶を嘗め畫を看るは世間の事ではあるが惡しくもない、がそれよりは法を問ひ詩を求むるの出世間の事が了に無礙である、千里孤帆を飛ばして又獨來する、我は思ふ五年間來らざる實に一夢にて誰と相對するやと、何かの來世には香火の結社をして、永く名山に在つて師や祖に隨侍供養することが出來ようぞ、

【餘論】紀曰く、應酬詩之不レ俗者と、俗ならざるのみではない、佛語を自由に運用して、其の用法を誤らざる所、公の特伎此等の篇に於て遺憾なきもの、

贈二潘谷一

潘郎曉踏河(一)陽春。
明珠白璧驚(二)二市人一。
那知望(三)拜馬蹄下。
胸中一斛泥與レ塵。
何似墨潘穿二破褐一。
琅(四)琅翠餅敲二玄(五)芴一。
布衫漆黑手(六)如レ龜。
未レ害冰(七)壺貯二秋月一。
世人重レ耳輕二目前一。
區區張(八)李爭二嫱(九)姸一。

潘谷に贈る

潘郎曉踏む河陽の春、
明珠白璧市人を驚かす、
那ぞ知らん望拜馬蹄の下、
胸中一斛泥と塵と、
何似ぞや墨潘破褐を穿ち、
琅琅翠餅玄芴を敲くに、
布衫漆黑にして手は龜の如く、
未だ害せず冰壺に秋月を貯ふるを、
世人耳を重んじ目前を輕んず、
區區たる張李嫱姸を爭ふ、

【字解】【一】河陽春　晉の潘岳、河陽令と爲り、桃李の花を種う、人號して河陽一縣花と曰ふ、【二】驚市人　「潘岳傳」に、美二姿儀一、少時常挾レ彈出二洛陽道一、婦人遇レ之者、皆連レ手縈繞、投レ之以レ果、遂滿レ車而歸と、【三】望拜　「潘岳傳」に、岳性輕躁、趨二世利一、與二石崇等一、諂二事賈謐一、每候二其出一、與レ崇輒望レ塵而拜と、【四】琅琅　「子虛賦」に、琅琅磕磕、若二雷霆之聲一と、【五】元芴　專目く、宋人言レ黑、皆以レ芴計、見二諸翅跋中一と、【六】手如龜　龜むるのではなく、手の色を言ふ、「趙壹草書歌」に、領袖如レ皁、唇齒皆黑と、

一朝入海尋李白。(一〇)　一朝海に入りて李白を尋ねば、
空看人間畫墨仙。(一一)　空しく看ん人間畫墨の仙、

【七】冰壺　鮑明遠の詩、清如玉壺冰と、【八】蜚李　蜚遇と李庭珪、宋代製墨の名家、【九】嬙姸　嬙は醜、姸は美、【一〇】李白　杜子美の詩、巢父掉頭不肯住、東將入海隨煙霧、若逢李白騎鯨魚、道甫問訊今何如と、【一一】畫墨仙　王苑卿曰く、先生作此詩後、潘谷因事落井而死、人以爲此詩讖と、劉須溪曰く、尋李太白本無謂、殆讖語耳、然得名墨仙李矣、志林豈又欲實此語耶、苑卿未見志林也と、「志林」に、賣墨者潘谷、余不識其人、然聞其所爲、非市井人也、墨既精妙、而價不二、士或不持錢求墨、不計多少與之、一日忽取欠墨錢劵焚之、飲酒三日、發狂浪走、遂赴井死、人下視之、蓍趺坐井中、手尙持數珠也と、

【詩意】昔潘郎が早晩に門を出でて河陽の春を踏むときは、明珠白璧にも比すべき美容は世人を驚かしたものである、那ぞ知らんや其の人が他馬蹄の下を望拜して、胸中は一斛餘の泥と塵とに滿ちて居る、今日賣墨者潘谷が破褐を穿ちて、琅琅翠餅玄笏を敲きて行くと清濁はドチラに在る、外貌は布衫漆黑手も赤龜に類して黑きも、胸中は冰壺に秋月を貯ふる如き淸朗である、世人の多くは耳に聞いたことを重んじて目に覩ることを輕んずる、それであるから張製の墨だの李製の墨なぞと論じて其の嬙姸を爭ふのである、此の人が一朝海に入つて李白を尋ぬれば、李白は定めし言ふであらう、空しく人間畫墨の仙を看ると、

【餘論】紀曰く、起四句與豆粥詩、同一落想、皆無聊之牽引と、同姓の潘を拉し來りて、一揚一抑、此を九天の高きに揭げ、彼を千仞の谷底に墜下する所、大家の伎倆を遺憾なく發揮したものである、

徐大正閒軒　　徐大正の閒軒

冰蠶不知寒。火鼠不知暑。(一)(二)　冰蠶は寒を知らず、火鼠は暑を知らず、
知閒見閒地。已覺非閒侶。　閒を知つて閒地を見るは、已に覺ゆ閒侶にあらざるを、
君看東坡翁。懶散誰比數。　君看よ東坡翁、懶散誰か比數せん、
形骸墮醉夢。生事委塵土。　形骸醉夢に墮し、生事塵土に委す、
蚤眠不見燈。晚食或欺午。(三)　蚤く眠りて燈を見ず、晚食或は午を欺く、
臥看盜取氈。坐視麥漂雨。(四)(五)　臥して看る盜の氈を取るを、坐して視る麥の雨に漂ふを、
語希舌頰强。行少腰脚僂。(六)(七)　語ること希にして舌頰强く、行くこと少にして腰脚僂む、
五年黃州城。不蹋黃州鼓。(八)　五年黃州城、黃州の鼓を蹋まず、
人言我閒客。置此閒處所。(九)(一〇)　人は言ふ我は閒客なりと、此の閒處の所に置く、
問閒作何味。如眼不自睹。(一一)　問ふ閒は何の味を作すと、眼の自睹せざるが如し、
頗訝徐孝廉。得閒能幾許。(一二)　頗る訝る徐孝廉、閒を得る能く幾許ぞ、
介子願奉使。翁歸備文武。(一三)(一四)　介子は使を奉せんと願ふ、翁歸は文武を備ふ、
應緣不耐閒。名字挂庭宇。　應緣は閒に耐へず、名字は庭宇に挂かる、

我詩爲レ閒作、更得二不レ閒語一。　我が詩閒の爲めに作る、更に閒ならざる語を得たり、
君如二汗(一五)血駒一、(一六)轉盼略二(一七)燕楚一。　君は汗血駒の如く、轉盼燕楚を略す、
莫レ嫌二鑾輅重一、終勝二鹽車苦一。　嫌ふ莫かれ鑾輅の重きを、終に鹽車の苦に勝る、

【字解】【一】冰蠶　「王子年拾遺記」に、員嶠山有二冰蠶一、長七寸、黑色有レ角有レ鱗、以二霜雪一覆レ之、作レ繭長一尺、綵爲二文錦一、入レ水不レ濡、投レ火經レ宿不レ燎と、【二】火鼠　「東方朔神異經」に、南荒之外有二火山一、其中皆生二不燼之木一、晝夜火燒、得二暴風猛雨一不レ滅、火中有レ鼠、重十斤、毛長二尺餘、細如レ絲、可三以作二布と、王貞白の詩、火鼠重燒布、冰蠶獨繭絲、直須二天上手一、裁作二領巾一披と、【三】敲午　一本に敲午に作る、白樂天の詩、午食何所レ有、魚肉一兩味と、【四】盜眠氈　「晉王獻之傳」に、夜臥二齋中一、有二偸兒一入二其室一、盜レ物都盡、獻之徐曰、偸兒、靑氈我家舊物、可二特置一レ之、羣盜驚走と、【五】麥漂　「後漢書」に、高鳳、少爲二書生一、家以二農畝一爲レ業、而專精誦讀、晝夜不レ息、妻嘗之レ田、曝二麥於庭一、令二鳳護一レ雞、時天暴雨、而鳳持レ竿誦レ經、不レ覺二潦水流一レ麥と、【六】舌頰　「晉書」に、殷仲堪、每云、三日不レ讀二道德論一、便覺二舌本閒強一と、【七】僂　「左傳昭公七年」に、一命而僂と、屈する狀、【八】不羈　「三國志楊阜傳」に、曹洪、置レ酒大會、令下女倡著二羅縠之衣一蹋上レ鼓と、【九】閒客　杜牧之の詩、閒爲二閒客一此閒行と、【一〇】處所　「高唐賦」に、雲無二處所一と、【一一】不自睹　「韓非」に、目能視二百步之外一、而不レ見二其睫一と、【一二】徐孝廉　「漢武帝紀」に、元光元年、初令三郡國一擧二孝廉一と、孝子を表奬する稱號である、【一三】介子　「前漢書」に、傅介子、謂二霍光一曰、樓蘭、龜茲、數反覆而不レ誅、無レ所二懲艾一、介子過二龜茲一、時其王近就レ人、易レ得也、願往刺レ之、以威二示諸國一と、【一四】翁歸　「前漢書」に、王延年、爲二河東太守一、行レ縣至二平陽一、召二故吏五六十人一、延年親臨見、令三有レ文者東、有二武者西一、閱二數十人一、次到二尹翁歸一、翁歸獨伏、不三肯起一曰、翁歸文武兼備、唯所二施設一と、【一五】汗血　大宛に產する馬、【一六】轉盼　轉眼と同義、ちよつと顧視する間、【一七】燕楚　李太白の天馬歌、升二崑崙一、歷二西極一、四足無二一蹶一、雞鳴發レ燕暮秣レ越と、

【題義】徐大正字は得之は公に從學するの人、其の住居の閒軒を詠じて贈る詩である、

【詩意】冰蠶は寒と云ふことを知らない、火鼠は暑と云ふことを知らない、人間も閒と云ふことを知つて閒地を見るものは、其人已に眞の閒侶ではない、君看玉へ此の東坡翁の懶散ものぐさは誰にも比數できない、五尺の形骸は昏昏として醉夢に墮して居る、平生活計の事は塵土に委して居る、まだ燈火點せざるに早や眠に就き、人は晩食であると云ふ時自分は午飯である、臥しながら盜兒の氈を失敬して行くを看、又坐して麥が雨に漂うて流れ去るのも悠然と視る、人と語言すること希である、されば舌頰も自然と強くなる、步行する少なるは腰や脚が傴むからである、五年間も黃州城に在りながら、黃州の鼓を蹋んだことがない、所で他人は言ふ彼は閒客であるから、此の閒處所に置くのであると、我は却つて問ふ閒と云ふものは畢竟何の味を有するものである、要するに眼そのものが眼自からを睹ることが出來ないと同じもの、我は徐孝廉が自から閒軒と號するを訝るものである、其の閒を得る能く幾許ぞや、昔傅介子は自から忙を求めて使者と爲ることを願ひ、又尹翁歸も文武何れの道も行くと忙を自から求めたのである、時世の緣に應じて閒には耐へられない、然るに君は閒の名字を庭宇に挂けて居る、暫らく君に從つて我が詩も閒の爲めに作る、閒の爲めに作る詩は警語なぞはいかぬ閒語でよい、而かも君が本性は汗血馬の如くにて少しも閒ではない、轉盼の間に燕國も楚國も計畧する、鑾輅は重きも嫌うてはいかぬ、汗血馬の動きは是れ無ければ現はれない、鹽車の苦には萬萬勝れて居る、

【餘論】紀曰く、純用二議論一、亦殊揮斥自如、此種不レ易レ學、無二其心思筆力一而强爲レ之、便成二禪偈一、

與靜照堂詩、同一翻案、此較和平耳と、一篇の中、閒の字十字、閒軒を縱横無盡に翻弄す、杜と韓とを打して一丸と爲すの觀がある、

## 蒜山松林中可卜居。余欲僦其地。地屬金山。故作此詩。與金山元長老

蒜山松林中卜居すべし、余其の地を僦らんと欲す、地は金山に屬す、故に此の詩を作り、金山の元長老に與ふ

(一)魏王大瓠無人識。　魏王の大瓠人の識る無し、
種成何翅實五石。　種成何ぞ翅實に五石、
不辭破作兩大尊。　辭せず破つて兩大尊を作るを、
只憂水淺江湖窄。　只憂ふ水淺くして江湖窄きを、
我材(二)濩落本無用。　我が材濩落本無用、
(三)虛名驚世終何益。　虛名世を驚かすも終に何の益ぞ、
東方先生好自(四)譽。　東方先生好んで自譽し、
(五)孟賁子路幷爲一。　孟賁子路幷せて一と爲す、
杜陵布衣老且愚。　杜陵の布衣老いて且愚、
信口自(六)比契與稷。　口に信せて自から比す契と稷とに、
暮年欲學柳(七)下惠。　暮年學ばんと欲す柳下惠、
嗜好酸(八)鹹不相入。　嗜好酸鹹相入れず、
金山也是不羈人。　金山也是れ不羈の人、
蚤歲聞名晩(九)相得。　蚤歲名を聞き晩に相得たり、
(一〇)我醉而嬉欲(一一)僊去。　我醉うて嬉み僊去せんと欲す、
旁人笑倒山謂實。　旁人は笑倒し山は實と謂ふ、
問我此身何所歸。　問ふ我が此の身何くに歸する所ぞ、
笑指浮休百年宅。　笑うて指す浮休百年の宅、
(一二)蒜山幸有閒田地。　蒜山幸に閒田地あり、
招此無(一三)家一房客。　招く此の無家一房の客を、

【字解】【一】魏王 「莊子逍遙遊篇」に、惠子謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種、我樹之、成而實五石、以盛水漿、其堅不能自擧也、剖之以爲瓢、則瓠落無所容、非不呺然大也、吾爲其無用而掊之、莊子曰、今子有五石之瓠、何不慮以爲大樽、而浮乎江湖、而憂其瓠落無所容、則夫子猶有蓬之心也夫と、【二】濩落 杜子美の詩、居然成濩落、白首甘契闊と、【三】虛名 古詩に、虛名復何益と、【四】自譽 「前漢東方朔傳」に、武帝初即位、朔上書、文辭不遜、高自稱譽、帝偉之、又帝笑曰、使自責、邁反自譽と、【五】孟賁 「東方朔傳」に、上書曰、常服子路之言、勇若孟賁と、【六】自比 杜子美の詩、杜陵有布衣、老大意轉拙、許身一何愚、竊比契與稷と、【七】柳下惠 春秋の世、魯の人、柳下に居、諡して惠と曰ふ、孟子稱して聖之和と爲す、小官た辭せず、謙德を守る、【八】酸鹹 韓退之の詩、雲夫吾兄有狂氣、嗜好與俗殊酸鹹と、【九】晩相得 「漢灌夫傳」に、夫得嬰相得驩甚、恨相知之晩と、【一〇】我醉 李太白の詩、我醉欲眠君暫去と、【一一】欲僊去 「趙飛燕傳」に、帝恩我、使我僊去不得と、【一二】蒜山 施注云、蒜山在江上、說者云、山多澤蒜、故名、蒜嘗作筭、周瑜、諸葛亮、嘗會此山、拒曹操、策計多筭故名と、【一三】無家 杜子美の詩、此身那得更無家と、

【題義】蒜山の松林中は卜居するに勝地である、余は其の地を貰り受けて家を建てんと思ふ、聞く其の地は金山に屬すと、金山の長老は余が舊知であるから先づ詩を送りて種種便宜を求むるのである、

【詩意】魏王の所持せる大瓠は人の識るものはない、之を種うれば實が成ること五石六石である、其の瓠を破つて兩個の尊を作るも辭しない、只憂ふるは水淺うして江湖の窄きことである、我が材は濩落として完全ではない故に無用の材である、而かも有用の材なるかの如く他に思はるるは虛名の致す所にて終に世に益はない、昔東方先生は好んで自から愚として居る、之に反し杜陵の布衣は自から擧む、孟賁の蠻勇と子路の智勇とを幷せて一と爲して居る、口に信せて契と稷とに比して居る、晚年に達して柳下惠の謙德を學ばんと思ふ、嗜好は酸鹹を異にすれば他人とは意氣が合はない、併しながら余一人ではない金山和尙も也是れ不羈の人である、余は早くから名を聞いて居たが親しく會うたのは晚年である、我醉うたときは嬉んで口癖に言ふ僊去せんと欲すと、旁人はウソだと思ふから絕倒するも金山和尙は眞實であると云ふ、而して問ふ僊去は善いが何處に僊去するぞと、余は笑うて指す浮休仙人が百年の宅であると、蒜山は卽ち百年浮休の宅にて　幸に閒田地もある、此の無家一房の客を招致せらるるが可い、

【餘論】紀曰く、極力做出、却不十分自如と、此の評、人信ずるか信せざるか、

## 王中甫哀辭

王中甫の哀辭

仁宗朝以制策登科者十五人。軾忝冒時。尙有富彥國。張安道。錢子飛。吳長文。夏公酉。陳令擧。錢醇老。王中父。幷軾與家弟轍九人存焉。其後十有五年。哭中父於密州。作詩弔之。則子飛長文令擧歿矣。又八年軾自黃州量移汝海。與中父之子沇之相遇於京口。相持而泣。則十五人者獨三人存耳。蓋安道及軾與家弟而已。嗚呼悲夫。乃復次前韻以遺沇之。時沇之亦以辠謫家於錢塘云。

【訓讀】仁宗の朝、制策を以て登科する者十五人、軾忝く冒時す、尙ほ富彥國・張安道・錢子飛・吳長文・夏公酉・陳令擧・錢醇老・王中父、幷に軾と家弟轍と九人の存するあり、其の後十有五年、中父を密州に哭し、詩を作り之を弔す、則ち子飛・長文・令擧歿す、又八年、軾　黃州より汝海に量移す、中父の子、沇之と京口に相遇ふ、相持して泣く、則ち十五人の者獨三人存するのみ、蓋し安道及び軾と家弟とのみ、嗚呼悲しい夫、乃ち復た前韻に次し、以て沇之に遺る、時に沇之亦辠を以て謫せられ、錢塘に家すと云ふ、

（一）生芻不獨比前人、　生芻は獨前人に比せず、
（二）東臺端能廢謝鯤。　東臺端に能く謝鯤を廢す、
子達想無（三）身後念。　子達して想ふに身後の念無からん、
吾衰不復夢中論。　吾衰へて復た夢中に論せず、
已知（四）穀豹爲均死。　已に知る穀豹の死を均くするを爲すを、
未識（五）荊凡定孰存。　未だ識らず荊凡定んで孰れか存する、
堪笑東坡癡鈍老。　笑ふに堪へたり東坡の癡鈍老、
區區猶記（六）刻舟痕。　區區猶は記す刻舟の痕、

【字解】【一】生芻「後漢書」に、郭林宗有母憂、徐孺子往弔之、置生芻一束於廬前而去、衆怪不知其故、林宗曰、此必南州高士徐孺子也、詩不云乎、生芻一束、其人如玉、吾無徳以堪之と、生は刈りて來て新らしきもの、芻は馬糧、玉の如き譬人が世に用ひられず、馬に乘つて遠く去らんとするを惜み、之を贈りて吾が寸志を表はす、【二】東臺「晉書謝鯤傳」に、爲太傅東臺坐家僮盜官稾除名と、【三】身後念「晉張翰傳」に、使我有身後名、不如即時一杯酒と、【四】穀豹「莊子達生篇」に、田開之曰、魯有單豹者、巖居而水飲、不與民共利、行年七十、而猶有嬰兒之色、不幸遇餓虎、餓虎殺而食之、有張毅者、高門縣薄、無不走也、行年四十、而有內熱之病以死、豹養其內、而虎食其外、毅養其外、而病攻其內、此二子者、皆不鞭其後者也と、【五】荊凡「莊子田子方篇」に、楚王與凡君坐、少焉、楚王左右曰凡亡者三、凡君曰、凡之亡也、不足以喪吾存、夫凡之亡、不足以喪吾存、則楚之存、不足以存存、由是觀之、則凡未始亡、而楚未始存也と、【六】刻舟「呂氏春秋」に、楚有涉江者、其劍自舟中墜於水、遽刻其舟曰、是吾劍之所從墜、舟止、從其所刻者、入水求之、舟已行矣、而劍不行、求劍若此、不亦惑乎と、

【題義】王中甫と云ふ人を哭する辭である、仁宗の時、同登科する者十五人なりしが、暫時にして五



人歿し、殘存する者十（九は誤ならん）人、其の後中甫も亦歿す、其の後黃州より汝州に轉任する時、中父の子の沈之と京口に於て面會する、是の時同登科の人を計するに余と張安道と家弟の子由と三人のみ、是に於て沈之と遇ふ、其の父の中甫を思はざるを得ない、乃ち追哭して此の詩を作り沈之に贈りしものである、

【詩意】中甫の人品は唯古人にも比すべきものであるが、子の沈之も諸生の罪に坐して官を罷む宛も謝鯤が事に似て居る、子は何程達官となるも身後の念なぞは無からんと想ふ、吾は衰へて復た夢中に論することなどはせぬ、已に知る穀も豹も死は皆均しきものであるを、未だ識らない荊と凡と孰れが亡び孰れが存するものなるかは、笑ふに堪へたるは東坡の癡鈍老である、區區として猶は刻舟の痕を記することを、

【餘論】紀曰く、純是宋格、而氣體渾闊、無江西生硬之痕と、不獨、不復、例の病のみ、

## 蔡景繁官舍小閣　　蔡景繁の官舍小閣

使君不獨（一）東南美。　使君獨東南の美ならず、
（二）典型尙記（三）先君子。　典型尙は記す先君子、
（四）戲嘲王叟短轅車。　戲嘲す王叟の短轅車、

【字解】【一】東南美「三國吳志」に、虞翻與孔融書、并示以所著易注、融答書曰、聞延陵之禮樂、觀吾子之治易、乃知東南之美者、

肯爲(五)徐郎書紙尾。　肯て徐郎が爲めに紙尾に書せん、
三年(六)弭節江湖上。　三年の弭節江湖の上、
千首放懷風月裏。　千首の放懷風月の裏、
手開西閣坐(七)虛明。　手西閣を開きて虛明に坐す、
目淨東溪照(八)清泚。　目淨うして東溪淸泚を照す、
(九)素琴濁酒容一榻。　素琴濁酒一榻を容れ、
(一〇)落霞孤鶩供千里。　落霞孤鶩千里に供す、
(一一)大舫何時繫門柳。　大舫何れの時か門柳に繫ぐ、
小詩屢欲書窗紙。　小詩屢ば窗紙に書せんと欲す、
(一二)文昌新構滿(一三)鵷鷺。　文昌新に構ふ滿鵷鷺、
(一四)都邑正喧(一五)收杞梓。　都邑正に喧なり杞梓を收むるに、
相逢一醉豈有命。　相逢うて一醉豈命あらん、
南來寂寞君歸矣。　南來寂寞君歸りぬ、



非徒會稽之竹箭也と、「爾雅」に、東南之美者、有會稽之竹箭焉と、【三】典型　常の法を言ふ、【三】先君子　「禮記」に、子思曰、吾先君子、無所失道と、【四】戯嘲　「晉書」に、王導字茂弘、妻曹氏、性妬、導甚憚之、乃密營別館以處衆妾、曹氏知、將往焉、導恐妾被辱、遽令命駕、猶恐遲之、以所執麈尾柄驅牛而進、蔡謨聞之、戯導曰、朝廷欲加公九錫、導弗之覺、但謙退而已、蔡謨曰、不聞餘物、唯有短轅犢車、長柄麈尾、導大怒、謂人曰、吾往與羣賢共遊洛中、何曾聞有蔡充兒也と、【五】徐郎　「南史」に、蔡廓字子度、徵爲吏部尚書、因北地傅隆問傅亮、選事若悉以見付不論、不然不能拜也、亮以語錄尚書徐羨之、羨之曰、黄門郎以下、悉以委蔡、吾徒不復措懐、自此以上、故宜共參同異、廓曰、我不能爲徐干木書紙尾、遂不拜、干木羨之小字也と、【六】弭節　「子虛賦」に、於是楚王、乃弭節徘徊と、【七】虛明　淵明の詩、秋景淡虛明と、【八】淸泚　泚は鮮明なるを言ふ、「詩邶風」に、新臺有泚と、【九】素琴　「江文通恨賦」に、中散下獄、神氣激揚、濁醪夕引、素琴晨張と、【一〇】落霞　「王勃滕王閣序」に、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色と、韓退之の滕王閣記に、人自得於湖山千里之外と、【一一】大舫　舫はモヤヒブネ、兩舟を連ねる舟、杜子美の詩、縱侵堤柳繫と、【一二】文昌　「唐百官志」に、光宅元年、改尚書省、曰文昌臺と、元豐六年十月、文昌府と稱して新構成り、壯偉雄盛、煥然美を極むと、【一三】鵷鷺　高位高官の人を言ふ、【一四】都邑　杜子美の詩、近聞下詔喧都邑、肯使麒麟地上行と、「禮記」に、仲秋之月、可以築城郭建都邑と、五里を邑、十邑を都とする、【一五】收杞梓　袁彥伯の「三國名臣序贊」に、篤收杞梓と、杞も梓も良材にして且喬木、「孔叢子」に、聖人官人、猶大匠用木、取其長、棄其短、故杞梓連抱、而有數尺之朽、良工不棄と、

**【題義】** 蔡元導と云ふ公と同年の友がある、其の元導の子の景繁は亦淸勵の士である、其の景繁の住する官舍の東閣に題し、忠良を嘆じて姦徒を嘲つて作る詩である、

**【詩意】** 景繁使君は今日獨東南の美と稱せらるるのみではない、其の典型は君の先君子たる元導の遺したるものである、上官たりとも姦なりと認むる者は蔡謨が王導を戯嘲したると同樣の戯嘲も辭しない、又身を保つの高きことは蔡廓が徐羨之の下に立たないと同じ、三年間浪人をしても猶ほ節を按じて居る、其の間千首の詩を作りて懷を風月の裏に放ちて淸くす、手自から西閣を開きて其の虛明を坐賞し、目は紅塵を見ず唯東溪の淸泚を照すを見るのみ、一の素琴と三盃の濁酒と一榻に身を寄する、落霞孤鶩の小なるは千里の大に點ずる巨景を見る、王命を奉じて來るの大舫は何時の間にか門柳に繫ぎてある、主人は小詩を屢ば窗紙に書せんと思ふ、今や文昌府新たに構へて立派なる人物を網羅して

茲に在る、都邑一齊に喧傳する國家は天下の良材を收め得ると、今日相逢うて一醉する命あるのではない、南來寂寞として君は忽ち歸り去る、

【餘論】題に官舍小閣とある、中に文昌新構滿鵷鸞とある、景繁は滿鵷鸞には入らずして、別に小官の部屬に置くものであらう、要するに詳傳なく詩意も判然と知ることが出來ない、紀曰く、王叟杜撰、蓋避蔡家諱耳と、

## 十一月十三日。與幾先自竹西來。訪慶老。不見。獨與君卿供(一)奉蟾(二)知客東閣道話久之【自注】惠州追錄、

十一月十三日、幾先と竹西より來り、慶老を訪ふ、見ず、獨君卿供奉蟾知客と東閣に道話久しくす【自ら注す】惠州追錄、

(三)卷卷長廊走黃葉。　卷卷長廊黃葉走る、
席簾垂地香煙歇。　席簾地に垂れて香煙歇む、
主人待來終不來。　主人來るを待つ終に來らず、
火紅銷盡灰如雪。　火紅銷え盡して灰雪の如し、

【題義】幾先と同伴して竹西より來り、慶老を訪問したるも不在である、座に君卿供奉と蟾知客の二人あれば、此の二人と東閣の中に道話を久しうしたのである、

【詩意】卷卷と長き廊下には黃葉が風に伴れて走る、席簾は地に垂れて香は燒いて居ない、慶老主人の歸來を待つも主人は終に歸來しなかつた、此の間に香火は銷し盡して殘灰唯雪の如きのみ、

【字解】〔一〕供奉　官名、內廷供奉、翰林供奉の二種ある、唐より以後、宋も盛用する、〔二〕知客　禪林の役名、字の如く寺門に香客を應酬する役、唐末より此の名がある、〔三〕卷卷　黃葉の走る形容、

## 邵伯梵行寺山茶

邵伯梵行寺の山茶

山茶相對阿(一)誰栽。　山茶相對阿誰か栽うる、
細雨無人我獨來。　細雨人無く我獨り來る、
說似與君君不(二)會。　說似して君に與ふるも君會せず、
爛紅如火雪中開。　爛紅火の如く雪中に開く、

【字解】〔一〕阿誰　「三國蜀志龐統傳」に、先主曰、向者之論、阿誰爲失と、人を呼ぶ親しみを示すが阿である、〔二〕不會　「五燈會元」に、洛京南院和尚、有儒者博覽古今、時呼爲甕百會、謁南院、南院問、莫是甕百會麼、曰不敢、南院以手於空畫一畫、曰會否、曰不會と、

【題義】邵伯湖上の梵行寺の山茶花に題したもの、

【詩意】山茶花が二樹相對して在るが是は阿誰が栽ゑたのである、細雨霏霏たる中人は居らない我獨り訪來する、說示して君に與ふるも君は恐らくは會せぬであらう、山茶花が爛紅火の如く燃えて而かも雪中に開くの實相を、

【餘論】少林に雪夜法を求めて、道情火の如くに雪中に開く、君以て會すべきである、

## 高郵陳直躬處士畫雁二首　高郵の陳直躬處士が畫雁　二首

野雁見人時。未起意先改。　野雁人を見る時、未だ起たず意先づ改まる、
君從何處看。得此無人態。　君何れの處より看て、此の無人の態を得たる、
無乃槁木形。人禽兩自在。　乃れ槁木の形なる無からんや、人禽兩つながら自在、
北風振枯葦。微雪落璀璀。　北風枯葦を振ひ、微雪落ちて璀璀、
慘澹雲水昏。晶熒沙礫碎。　慘澹として雲水昏く、晶熒沙礫碎く、
弋人悵何慕。一擧渺江海。　弋人悵として何ぞ慕はん、一擧江海渺たり、

【字解】〔一〕槁木　「莊子齊物論」に、形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎と、〔二〕自在　佛典に、二種自在、四種自在、乃至十種自在の語がある、通達無碍なるを言ふ、〔三〕璀璀　杜牧之の詩、珠落璀璀白綢袍と、光が散じて鮮明なるを璀璀と言ふ、〔四〕慘澹　天色變じて、ものすごく暗きを言ふ、「世說」に、道壹道人、好整飾音辭、從都下、還東山、會雪下、未甚寒、人問所歡、壹公曰、風霜固所不論、乃先集其慘澹と、〔五〕晶熒　韓退之の詩、堆金疊玉光晶熒と、光が明白なるを晶熒と言ふ、〔六〕弋人　張九齡の詩、弋者何所慕と、繳を矢に付けて飛鳥を射るを弋と言ふ、

【題義】高郵の陳直躬は家富むが故に官に仕へず、終身處士にして畫を善くす、今其の畫ける雁に題したるもの、

【詩意】野雁は人の來るを一見せし時、未だ飛び起たずして先づ注意する狀を爲す、君は雁の態を何れの處よりか看て、雁が人を見ざる時の自得の貌を寫し得たるや、鳥が槁木の如く無心なる形、其の狀を善寫する人と共に自在の境界である、北風は蕭蕭として枯葦を振ふを聞き、微雪は璀璀として落ちるを見る、而して一面慘澹として雲水の昏色を呈し、晶熒として砂礫の碎けたる處を認む、弋人が捕へんと慕ふもそれは不可能で唯悵然とするのみ、雁の方は一擧して江海の上渺渺である。

〔二〕

衆禽事紛爭。野雁獨閒潔。　衆禽紛爭を事とし、野雁獨り閒潔、
徐行意自得。俯仰若有節。　徐行して意自得、俯仰して節あるが若し、
我衰寄江湖。老伴雜鵞鴨。　我衰へて江湖に寄す、老伴鵞鴨に雜ふ、
作書問陳子。曉景畫苕霅。　書を作りて陳子に問ふ、曉景苕霅を畫く、
依依聚圓沙。稍稍動斜月。　依依圓沙に聚まり、稍稍斜月に動く、
先鳴獨鼓翅。吹亂蘆花雪。　先鳴獨り翅を鼓す、吹き亂す蘆花の雪、

【字解】〔一〕徐行　雁不亂行を言ふ、〔二〕俯仰　嵇叔夜の詩、俯仰有得、游心太元と、〔三〕苕霅　苕水の一名を霅水と云ふ、浮玉山より流出して太湖に入る、〔四〕依依　一所に羣を爲して、離るるに忍びざる貌、〔五〕圓沙　杜子美の詩、宿雁聚圓沙と、〔六〕稍稍　「戰國策」に、稍稍蠶食之と、次第次第と云ふ義、〔七〕翅　翅翼である、

【詩意】 禽鳥の性は小人と同じく集まれば紛爭を事とする、野雁のみは其の性獨り閒潔である、徐行する狀は其の意良に自得である、俯仰する貌は良に節操がある、我が身は老いて江湖に寄せ一箇浪人である、老の伴としては鵞鴨に雜はるのみ、今陳子に問ふが、畫く所は曉景にして其の地は苕霅なるや、野雁は依依として圓沙に聚まり、稍稍として殘月に動く、一雁先づ鳴いて翅を鼓せば、紛紛として蘆花の雪を吹き散する、

【餘論】 紀は前首を評して曰く、一片神行、化盡刻畫之跡と、後首を評して曰く、此首虵足と、物を詠するに神を寫して、形を寫さず、杜少陵と宗旨を同じうする者、後世謝翶輩、此等の詩を讀まずして死せしは、憐まざるを得ない、

## 和王斿二首　【自注】斿平甫子

王斿に和す　二首　【自ら注す】斿は平甫の子

異時長怪謫仙人。(一)(二)　異時長く怪しむ謫仙人、
舌有風雷筆有神。(三)(四)　舌に風雷あり筆に神あり、
聞道騎鯨游汗漫。(五)　聞道らく鯨に騎つて汗漫に游ぶと、
憶嘗捫蝨話悲辛。(六)　憶ふ嘗て蝨を捫して悲辛を話するを、
氣呑餘子無全目。(七)(八)　氣は餘子を呑んで全目無く、
詩到諸郎尚絕倫。(九)(一〇)　詩は諸郎に到りて尙ほ倫を絕す、
白髮故交空掩卷。　白髮の故交空しく卷を掩ふ、
淚河東注問蒼旻。(一一)　淚河東注蒼旻に問ふ、

【字解】 〔一〕 異時 「漢書食貨志注」に、異時言往時也と、〔二〕 謫仙人 王斿を以て李白に譬ふ、〔三〕 舌有風雷 韓退之の詩、舌作霹靂飛と、〔四〕 筆有神 「董仲舒答策」に、下筆如有神助と、〔五〕 汗漫 杜子美の詩、甘爲汗漫游と、放浪して檢制なき義、〔六〕 捫蝨 「晉書」に、王猛隱於華陰山、懷佐世之志、桓溫入關、猛披褐而詣之、一面談當世之事、捫蝨而言、旁若無人、溫察而異之と、李太白の詩、捫蝨對桓公、願得論悲辛と、〔七〕 氣呑 「唐張巡傳」に、吾欲氣呑逆賊と、〔八〕 全目 鮑照の詩、鷙雀無全目と、〔九〕 諸郎 王斿の父平甫、平甫の兄介甫等を指す、〔一〇〕 絕倫 「漢匡衡傳」に、才智有餘、經學絕倫と、〔一一〕 淚河 杜子美の詩、獨有淚成河と、

【題義】 王安國の子、王斿字は元龍の詩に和したるもの、

【詩意】 時代は異なるに尙は謫仙人住するやと怪しむのである、舌に風雷あり筆に神助あるは謫仙人のことである、或は聞く長鯨に騎して汗漫の游を爲すと、而して長官に屈せず蝨を捫して悲辛を話することを、豪氣は餘子を呑んで目中に全く人無く、能詩は王の一家に到つて是れ絕倫である、君の詩に對しては白髮の先輩故交も空しく卷を掩うて、淚は河の如く東注して感歎以て蒼旻に問ふのである、

〔二〕

嫋嫋春風送度關。(一)　嫋嫋たる春風關を度るを送る、

【字解】 〔一〕 嫋嫋 風のそよぐ

(二)娟娟霜月照ニ(三)生還一。　娟娟たる霜月生還を照す、

遲留歲暮江淮上。　遲留す歲暮江淮の上、

來往君家(四)伯仲間。　來往す君が家伯仲の間、

未レ厭冰灘吼ニ(五)新洛一。　未だ厭はず冰灘新洛に吼ゆるを、

且看松雪媚ニ(六)南山一。　且看ん松雪の南山に媚ぶるを、

(七)野梅官柳何時動。　野梅官柳何れの時か動く、

(八)飛蓋長橋待ニ子閑一。　飛蓋長橋子が閑を待つ、

貌、「楚辭湘夫人」に、嫋嫋兮秋風、洞庭波と、春風と限るのではない、【二】娟娟　幽遠なる貌、杜子美の詩、風含ニ翠篠一娟娟淨と、【三】生還　子美の詩、生還偶然遂と、【四】伯仲　曹丕の「典論」に、文人相輕、自レ古而然、傅毅之於ニ班固一、伯仲之間耳と、【五】新洛　「王注」に、黃河元豐中、始以ニ洛水一易レ之、謂ニ之清汴一、或謂ニ新洛一と、【六】南山　「王注」に、南山潁州之山、爲ニ名都梁山一と、【七】野梅　杜子美の詩、市橋官柳細、江路野梅香と、【八】飛蓋　亮卿曰く、歐陽文忠公、皇祐元年、作ニ三橋於潁州西湖一、作レ詩云、鳴騶入レ林遠、飛蓋渡ニ長橋一と、

**【詩意】** 嫋嫋たる春風は吹き送りて故關を度る、娟娟たる霜月は無事に生還を照らす、遲遲として滯留する江淮の上に歲は方に暮れる、而して來往頻繁は唯君の家兄弟の間のみ、未だ厭はない冰灘が新洛に吼ゆることを、且看る松雪が南山に媚ぶるの景を、野園の梅と官道の柳と何れの時にか芽が動くや、飛蓋長橋は子が閑を待つ如きものである、

**【餘論】** 紀曰く、前首純以レ氣勝、又、憶嘗の七字を評して逆挽法と、呂惠卿の爲め王一家は逆境に沈淪する、而かも氣節を持して下らざること詩意彰彰、二首共に以レ氣勝と稱して可なるか、

## 次ニ韻張琬一　張琬に次韻す

新落霜餘兩岸隆。　新に落つる霜餘兩岸隆なり、

塵埃擧レ袂識ニ西風一。　塵埃袂を擧げ西風を識る、

(一)臨淮自レ古多ニ名士一。　臨淮古より名士多く、

樽酒相從樂ニ(二)寓公一。　樽酒相從へ寓公を樂ましむ、

(三)半日偸レ閒歌嘯裏。　半日閑を偸む歌嘯の裏、

(四)百年暗盡往來中。　百年暗に盡く往來の中、

知君不レ向ニ窮愁一老。　知る君が窮愁に向うて老いず、

尚有ニ清詩(五)氣吐レ虹。　尚ほ清詩の氣虹を吐くあり、

**【字解】** 【一】臨淮　「元和郡縣志」に、秦泗水郡、漢沛郡、武帝分ニ置臨淮郡一と、【二】寓公　國を失して、他國に寄寓する君主、「禮記」に、諸侯不レ臣ニ寓公一と、【三】半日　白樂天の詩、朝囘半日閑と、【四】百年　白樂天の詩、百年隨レ手過、萬事轉レ頭空と、【五】氣吐虹　「文選、七啓」に、慷慨則氣成ニ虹霓一と、

**【詩意】** 新霜が落ちた後の兩岸は隆く見える、塵埃の袂を擧げるは西風の盛んなるを識る、臨淮の地は古より多く名士を出して居る、樽酒互に相從へて寓公をも樂ましめ慰む、半日閑を偸んで詩歌を吟嘯する、百年は知らず識らず往來の中に盡きる、知る君は窮愁に向ふも窮愁の爲めに老ゆるものでない、それが證據には君が賦する清詩には氣を吐く虹の如き雄句が多い、

**【餘論】** 紀曰く、隆字腐甚、此等不ニ是不一レ通、只是不レ佳、如ニ近代蓮洋山人一、用ニ柳花一、作ニ柳葩一、葩

何嘗非花、然是底語と、蓮洋山人固より小家數、論ずるに足らざるも、兩岸隆は如何にも郵學究の陋態である、

## 次韻王定國南遷回見寄

王定國が南遷より回り寄せらるるに次韻す

土暈銅花蝕秋水。　土暈銅花秋水を蝕す、
要須悍石相礱砥。　要ず須らく悍石相礱砥すべし、
十年冰蘗戰膏粱。　十年冰蘗膏粱と戰ひ、
萬里煙波濯紈綺。　萬里煙波紈綺を濯ふ、
歸來詩思轉淸激。　歸來詩思轉た淸激、
百丈空潭數魴鯉。　百丈の空潭魴鯉を數ふ、
逝將桂浦擷蘭蓀。　逝いて將に桂浦に蘭蓀を擷らんとす、
不記槐堂收劍履。　記せず槐堂劍履を收むるを、
却思庾嶺今何在。　却つて思ふ庾嶺今何くに在る、
更說彭城眞夢耳。　更に說く彭城眞に夢のみ、
【自注】來詩述彭城舊游。
君知先竭是甘井。　君知る先づ竭くるは是れ甘井、
我願得全如苦李。　我願ふ全きを得ること苦李の如きを、
妄心不復九廻腸。　妄心復た九廻腸せず、
至道終當三洗髓。　至道終に當に三たび髓を洗ふべし、
廣陵陽羨何足較。　廣陵陽羨何ぞ較ぶるに足らん、
【自注】余買田陽羨、來詩以爲不如廣陵。
只有無何眞我里。　只無何あり眞に我が里、
樂全老子今禪伯。　樂全老子今の禪伯、
【自注】謂張安道也、定國其婿。
掣電機鋒不容擬。　掣電の機鋒擬するを容れず、
心通豈復問云何。　心通豈復た云何と問ふ、
印可聊須答如是。　印可聊か須らく如是と答ふべし、
相逢爲我話留滯。　相逢うて我が爲めに話して留滯す、

【字解】【一】土暈　土中に埋沒して在りし銅劍が、花の模樣が土の爲めボンヤリ暈を生じたるを言ふ、【二】秋水　劍光を言ふ、【三】悍石　俗に荒砥、アラトである、【四】冰蘗　白樂天の詩、三年爲刺史、飲冰復食蘗と、蘗はキハダ、寒地の香木、其の實は苦、【五】膏粱「國語」に、膏粱之性、難以力正と、【六】煙波　杜牧之の詩、江湖酒伴如相問、終老煙波不計程と、【七】紈綺　白き練絹と綾絹、「宋書武帝紀」に、上淸簡寡欲、後庭無紈綺絲竹之音と、女色に代用する、【八】桂浦　鮎魚の詩、豈給魴桂餌と、【九】擷　つまみとる、許有任の詩、擷滿筐と、【一〇】蘭蓀　蘭も蓀も共に香艸、【一一】槐堂　三槐堂は定國の家に在る、【一二】彭城「公自注」に、來詩述彭城舊游と、【一三】先竭「莊子山木篇」に、直木先伐、甘井先竭と、【一四】九廻「司馬遷答任少卿書」に、是以腸一日而九廻と、【一五】至道「靈寶記」に、雖有至道、弗學不知其善也と、至極せる大道を言ふ、【一六】洗髓「太平廣記」に、東方朔、元封中、游鴻濛之澤、忽遇老母、採桑於白海之濱、俄而有黃眉翁、指母以語朔曰、昔爲我妻、托形於太白之精、今汝亦此星之精也、吾卻食吞氣、已九千餘年、目中童子、皆有靑光、能見幽隱之物、三千年、一返骨洗髓、三千年、一剝皮伐

（二四）桃花春漲孤舟起。　桃花春漲りて孤舟起る、

レ毛、寄生來、已三洗レ髄、五伐レ毛矣と、【一七】廣陵　公の自注に、余買ニ田陽羨ニ、來詩以爲レ不レ如ニ廣陵ニと、【一八】無何「莊子應帝王篇」に、出ニ六極之外ニ、而遊ニ無何有之郷ニと、【一九】欒全　公の自注に、謂ニ張安道ニ也、定國其壻と、【二〇】禪伯　孟東野の詩、安閑顧ニ禪伯ニ、復得レ疎ニ陳家ニと、詩伯と同義、禪人に對する敬稱語、前二十一巻に、欒全先生生日の詩がある、【二一】掣電機鋒　他を教示する發烈にして少しも假借せざるを言ふ、【二二】心論　他心通、佛の術語である、他人の心を知るの通力、自在無礙なるを言ふ、【二三】印可「維摩弟子品」に、若能如レ是宴坐者、佛所ニ印可ニと、弟子の所得を證明して、之を許可し稱美すること、【二四】桃花春漲　三月の水の異名を桃花水と爲す、

【題義】王定國が元豐二年賓州に謫せられて、其の七年に放還せられたる時寄投せらるる詩に次韻して作る、

【詩意】久しく土暈の爲め銅花も錆びて秋水も蝕してある、それは先づ悍石を用ひて能く錆を落して礱砥するがよい、十年の間氷蘗の苦を嘗めて膏粱の美なるものと戰ふ、且つ萬里の煙波を渡りて人間紈綺の柔弱を灌ひ來る、歸來後の詩思は轉た清激にして、百丈の空潭に鮑鯉を數ふるにも譬ふべきである、今よりの將來は桂浦に蘭蓀の香艸を採擷せんと思ふ、槐堂に劍履と云ふ嚴めしい物を收めない、却つて思ふ庾嶺は今何くに在るや、更に說く嘗て彭城に游びし事は眞に一夢である、君は聰明であるから甘井の先づ竭き易きことを知つて居る、我は願ふ全きを得ること苦李の如く人の望まざることを、物に迷を起すの妄心も復た九廻腸する程度には亂れない、至道を求むるは三たび髄を洗ふの歲月を經べきである、廣陵の地と陽羨の地と何れがよいかは比較する必要はない、それより別に無何有と稱する里が是れ我求むる里である、欒全老子は今の世の禪伯である、掣電の機鋒は他人の追擬するを許さない、他人が道とは何ぞやと問ふものあれば、其の問の利鈍に依つて印可して如是如是と答ふるであらう、相逢うて我が爲に道を話して留滯せば、桃花春水が漲つて孤舟を泛べるによい節である、

【餘論】紀曰く、筆筆精銳、盤空硬語、具體昌黎と、始めは人間、中は仙人、終り佛法、知る定國其の人、禪に所得あることを、

# 贈ニ梁道人一

梁道人に贈る

采レ藥（一）壺公處處過。　藥を采つて壺公處處に過ぐ、

笑看（二）金狄手摩挲。　笑うて看る金狄手摩挲、

老人（三）大父識レ君久。　老人大父君を識る久し、

造物（四）小兒如ニ子何一。　造物小兒子を如何せん、

（五）寒盡山中無ニ歷日一。　寒盡きて山中歷日無く、

雨斜江上一（六）漁蓑。　雨斜に江上一漁蓑、

神仙護（七）短多ニ（八）官府一。　神仙短を護して官府多し、

【字解】【一】壺公「後漢費長房傳」に、汝南人也、曾爲ニ市掾ニ、市中有ニ老翁ニ、賣レ藥、懸ニ一壺於肆頭ニ、及ニ市罷ニ、輒跳入ニ壺中ニ、市人莫ニ之見ニ、唯長房、於ニ樓上ニ覩レ之異レ焉、因往再拜奉ニ酒脯ニ、翁知ニ長房意ニ其神ニ也、謂レ之曰、子明日可ニ更來ニ、長房旦日復詣レ翁、翁乃與俱入ニ壺中ニ、唯見ニ玉堂嚴麗、旨酒甘殽、盈ニ衍其中ニ、共飲畢而出と、【二】金狄「後漢薊子訓

未厭人間醉踏歌。(九)　未だ厭はず人間醉うて踏歌するを、

傳」に、人於長安東霸城見之、與一老翁共摩挲銅人、相謂曰、適見鑄此、而已近五百歳と、「水經注」に、魏文帝黄初元年、徙長安金狄、重不可致、因留霸城南と、【三】大父　「前漢郊祀志」に、武帝時、李少君、以祠竈穀道却老方見上、嘗從武安侯宴坐、中有年九十餘老人、少君乃言與其大父遊射處、老人爲兒時、從其大父識其處、一坐盡驚と、【四】小兒　「景龍文館記」に、杜審言、好大言、臨終、宋之問往候之、乃曰、甚被造物小兒相苦、得在世、久壓公等、今死固當慰人心、但恨不見替人耳と、【五】寒盡　唐太上隱者、人莫知其本末、好事者從之問姓名不答、留一絕云、偶來松樹下、高枕石頭眠、山中無歷日、寒盡不知年と、【六】一漁蓑　長橋記の詩、八十仙翁今釣客、一輪一艇一漁蓑と、【七】護短　韓退之の詩、乃知僊人未賢聖、護短憑愚邀我敬と、【八】官府　韓退之の詩、上界眞人足官府と、【九】踏歌　「續仙傳」に、藍采和者、常於市中歌曰、踏踏歌藍采和、世界能幾何、紅顏一春樹、流年一擲梭、古人混混去不返、今人紛紛來更多、朝騎鸞鳳到碧落、暮見桑田生白波、長景明暉在空際、金銀宮闕高嵯峨と、

【詩意】藥を采つて壺公は處處に經過を認む、途中に於て笑うて金狄人の像を看ては手にて摩挲する、老人や大父は君を識ること久しい、君から言へば造物の小兒は子を如何せんやと、寒盡きるとも山中は歷日無ければ冬も春も無い、雨は斜に降る江上の一漁蓑、思ふに異の神僊は短處を護して上仙の下仙のと官府の區別が多い、それに比すれば人中の僊は一醉して踏歌し行くの樂みがある、

【餘論】梁道人は恐らくは奇行の人にして、常人とは異なる點より見て、多く神僊の故事を用ふるならんと、

雍秀才畫草蟲八物　　雍秀才が畫く草蟲八物

促織(一)　　促織

月叢號(二)耿耿。露葉泣(三)漙漙。
夜長不(四)自暖。那憂(五)公子寒。

月叢耿耿と號ぶ、露葉漙漙に泣く、
夜長くして自暖ならず、那ぞ憂へん公子の寒きを、

【字解】【一】促織　「古語」に、促織鳴、懶婦驚と、一名ハタオリ、一名コホロギ、【二】耿耿　謝朓の詩、秋河曙耿耿と、【三】漙漙　李太白の詩、秋露如白玉、漙漙下庭際と、漙漙は露の多き貌、【四】不自暖　韓退之の詩、露蛩不自暖と、【五】公子寒　「毛詩」に、七月爲公子裳、爲公子裘と、

【題義】雍秀才が畫く草蟲八種を咏じて、當時用事者を譏るのである、蟲は名を借りたるに過ぎない、

【詩意】草叢に號ぶとき月色は耿耿である、草葉に泣くとき露は漙漙である、秋夜の長きに自から暖を求むる遑もない、何に況んや公子の寒きを憂ふる暇はない、

蟬(一)　　蟬

蛻(二)形濁汚中。羽翼便(三)翾好。
秋來間(四)何闊。已抱寒莖槁。

蛻形濁汚の中、羽翼便ち翾ぶ好し、
秋來間何ぞ闊き、已に寒莖の槁を抱く、

【字解】【一】蟬　「遯齋閑覽」に、夏鳴曰蜩、秋鳴曰蟬と、【二】蛻形　「淮南子」に、蟬飲不食、三十日而蛻と、【三】翾好「攝

子」に、朱鳥翾翾、歸其肆矣と、翾は小飛の貌、【四】聞何闒「庾諸葛豐傳」に、爲二司隸校尉一、刺擧無レ所レ避、京師爲レ之語曰、聞何闒逢二諸葛一と、司隸の職は囚徒を監督して道路溝渠の事に從はしめ、又は京畿の糾察に從事するのである、

【詩意】塵芥等の濁汚中より蛻形し來るも、羽翼は鮮美にして翾飛も亦好し、秋來間何ぞ闒きや、已に寒螿の枯槁を抱きて居る、

## 蝦蟇（一）

瞑目知誰嗔。皤腹空自脹。
愼勿レ困二蜈蚣一。飢蛇不二汝放一。

瞑目知る誰ぞか瞋る、皤腹空しく自から脹る、
愼んで蜈蚣を困しむる勿れ、飢蛇汝を放さず、

【字解】【一】蝦蟇「墨子」に、禽子問曰、多言有レ益乎、墨子曰、蝦蟇日夜恆鳴、口乾舌擗、而人不レ聽レ之と、【二】瞑目「左傳宣公二年」に、宋城華元、爲レ植巡レ功、城者謳曰、睅其目、皤其腹、弃レ甲而復、于思于思、棄レ甲復來云云と、「王注」に、艾子昔有二龜逢二鼃海濱一、龜問レ鼃曰、汝之喜怒何如、曰吾怒、則先レ之以二努眼一、次レ之以二腹脹一と、艾子以下の二十三字は、何の書に出づるか詳かにせず、【三】蜈蚣　百足、ムカデ、施德初曰く、世有下畫二蜈蚣蝦蟇蛇三物一爲レ圖者上、謂蜈蚣畏二蝦蟇一、蝦蟇畏レ蛇、而蛇復畏二蜈蚣一也、今以二三物一、聚而爲レ一、雖レ有二相呑噬之意一、無二敢先レ之者一、蓋更相制伏、去レ一則能肆二其毒一焉と、「査注」に、本草蝦蟇畏レ蛇、而制二蜈蚣一、故關尹子曰、蝍蛆食レ蛇、蛇食レ鼃、鼃食二蝍蛆一と、蝍蛆はムカデ、鼃はカヘル、我が邦俗間では蜈蚣と言はずして蛞蝓、ナメクヂを取る、蛞蝓は事實蛇の畏るる物にて、蝦蟇には呑まるるものである、

【詩意】瞑目するは誰を瞋る爲めである、皤腹は空しく自から脹るるのみ、愼んで蜈蚣を困しむることをするな、飢蛇は汝を放さぬ、

## 蜣蜋（一）

洪鐘起二暗室一。飄瓦落二空庭一。
誰言轉丸手。能作二殷牀聲一。

洪鐘暗室に起り、飄瓦空庭に落つ、
誰か言ふ轉丸の手、能く殷牀の聲を作す、

【字解】【一】蜣蜋「爾雅」に、蛣レ蜣蜋とある、卽ちタマムシ、【二】洪鐘「西京賦」に、洪鐘萬鈞と、【三】暗室「晉庾答蘇愛生論」に、錦衣繡裳、不レ陣二於暗室一と、【四】飄瓦「莊子外物篇」に、雖レ有二忮心一者不レ怨二飄瓦一と、【五】轉丸「五代史任圜傳」に、如レ棄二蘇合之丸一、而取二蜣蜋之轉一と、「莊子」に、蛣蜣之智、在二於轉丸一と、蛣蜣の一名を轉丸と曰ふ、

【詩意】洪鐘の響が暗室に起る、飄瓦は空庭に落ちてある、誰か言ふや小さな轉丸の手、能く殷殷と牀を動かす聲を作すと、

## 天水牛（一）

兩角徒自長。空飛不二服箱一。
爲レ牛竟何事。利吻穴二枯桑一。

兩角徒らに自から長く、空しく飛んで箱を服せず、
牛と爲す竟に何事ぞ、利吻枯桑を穴にす、

【字解】【一】天水牛　一名は天牛、又八角兒と名づく、頭に黑角ありて八字に似て居るより此の名ある、俗にカミキリムシである、【二】不服箱「詩」に、睆彼牽牛、不レ以二服箱一と、【三】枯桑「古辭」に、枯桑知二天風一と、

【詩意】兩つの角は徒らに自から長く、牽牛星が箱を服せざると同樣何の用をも爲ない、牛なぞと緞

めしき名を持ちながら所作は何事である、口吻のみ利にして唯枯桑を穴にするのみである、

## 蝎虎(一)

(二)跂跂有レ足蛇。(三)脈脈無レ角龍。
爲レ虎君勿レ笑。食盡(四)蠆尾蟲。

蝎虎
跂跂足あるの蛇、脈脈角無きの龍、
虎と爲す君笑ふ勿れ、食ひ盡くす蠆尾蟲、

【字解】【一】蝎虎　木中の蠹蟲、スタモムシ、キクヒムシ、【二】跂跂　蟲の行く貌、「漢書」に、跂跂脈脈、善緣レ壁と、【三】脈脈　行く貌、【四】蠆尾蟲　「左傳昭公四年」に、鄭子産、作二邱賦一、國人謗レ之曰、其父死二於路一、已爲二蠆尾一と、「說文」に、蝎蠆尾蟲也、長尾爲レ蠆、短尾爲レ蝎と、蠆は刺蝥卽ちトゲである、

【詩意】跂跂と行く貌は足のある蛇である、脈脈と走る狀は角の無き龍である、虎と名稱あるは君笑うてはいかぬ、虎であるから蠆尾蟲を食ひ盡くすのである、

## 蝸牛(一)

(二)腥涎不レ滿レ殼。聊足二以自濡一。
升レ高不レ知レ回。竟作二黏壁枯一。

蝸牛
腥涎殼に滿たず、聊か以て自から濡すに足る、
高きに升りて回るを知らず、竟に黏壁と作つて枯る、

【字解】【一】蝸牛　「爾雅」に、蛞蝓、又瓜牛と名づく、【二】腥涎　「王立之詩話」に、先生作二蝸牛詩一云、中弱不レ勝レ觸、外堅聊自衞、後改云、腥涎不レ滿レ殼、聊足二以自濡一、余以二改者一爲レ勝と、

【詩意】腥涎は殼に滿ちるほど十分あるのではないが聊か以て自から濡すには十分である、高きに登りて本に回ることを知らない、昇りつめて竟に壁に黏して枯死する、

## 鬼蝶(一)

雙眉卷二鐵絲一。兩翅暈二金碧一。
初來花爭レ妍。忽去鬼無レ跡(二)。

鬼蝶
雙眉鐵絲を卷き、兩翅金碧を暈す、
初來花妍を爭ふ、忽ち去つて鬼も跡無し、

【字解】【一】鬼蝶　「酉陽雜俎」に、鬼蝶一足著レ木、如二乾木葉一と、【二】鬼無跡　王炎公曰、蝸牛鬼蝶、雖レ不レ用二事與一レ語、而蝸牛之夜レ登レ高、鬼蝶之歎二倏忽一者、皆有二深意一矣と、

【詩意】雙眉は鐵絲を卷くの狀である、兩翅は金碧を暈する色に似て居る、初め來るや花と妍を爭ふ如く、忽ちに去つて鬼は跡方も無い、

【餘論】紀曰く、八首皆借レ物寓レ意、亦山谷演雅之類と、又蝦蟇を評して曰く、脹字唐薛能詩、嘗用レ之、然終非二佳字一、如二瞪目字一、唐人亦屢用レ之、究是近レ俚、不レ可レ訓也と、要するに八首皆諷諭を以て主とし、風韻を以て主と爲したるものでない、一字一語を評して云云するは愚に近きもの、

## 泗州南山監倉蕭淵東軒二首

偶隨二漁父一採二都梁(一)一。

泗州南山監倉蕭淵が東軒　二首
偶ま漁父に隨うて都梁を採る、

【字解】【一】都梁　公の自注に

【自注】南山名二都梁山一、山出二都梁香一故也。

竹屋松扉試乞漿。　竹屋松扉試みに漿を乞ふ、

但見東軒堪隱几。　但見る東軒几に隱るに堪へたり、

不知公子是監倉。　知らず公子是れ監倉、

溪中亂石牆垣古。　溪中の亂石牆垣古、

山下寒蔬匕箸香。　山下の寒蔬匕箸香し、

我是江南舊游客。　我は是れ江南の舊游客、

挂冠知有老蕭郎。　挂冠知る老蕭郎あるを、

南山名二都梁山一、山出二都梁香一故也と、都梁は一名澤蘭、香艸である、【二】試乞漿　唐の張鷟撰する「朝野僉載」に、歳在二申酉一乞レ漿得レ酒、言二年豐一也と、【三】監倉　「職官分紀」に、諸州掾屬、有二司倉參軍一、又名二倉曹一と、米倉庫を守るの役ならんか、【四】匕箸　サジとハシ、「蜀志」に、劉先主方レ食失二匕箸一と、【五】挂冠　「東觀漢記」に、王莽殺レ之、逢萌謂二友人一曰、三綱絶、不レ去禍將レ及レ人、即解レ冠挂二東門一而去と、【六】老蕭郎　白樂天の挽二蕭處士一詩、能文好飲老蕭郎、身似二浮雲一鬢似レ霜と、

【題義】酒州南山の倉庫を監視する蕭淵の東軒に題して其の人品を讃したる詩である、

【詩意】偶ま樵父に隨行して此の南山に都梁の香艸を採る、直ちに之を料理せんと思うて、竹屋松扉に漿を乞ひ求むる、但し見る此の東軒は靜寂にして机に隱るに堪へ、誰人も氣が著かない公子が是れ監倉の役であることは、溪中を臨めば亂石の牆垣は古色を帶びて居る、山下に生じて居る寒蔬は思ふばかりでも匕箸の香を覺ゆ、我は是れ江南の舊游客である、冠を挂けて老蕭郎が茲に在ることを知る、

〔二〕

北望飛塵苦蜚霾。　北のかた飛塵を望んで蜚霾に苦しむ、

洗心聊復寄東齋。　洗心聊か復た東齋に寄る、

珍禽聲好猶思越。　珍禽聲好きも猶ほ越を思ひ、

野橘香清未過淮。　野橘香淸うして未だ淮を過ぎず、

有信微泉來遠嶺。　信あり微泉遠嶺より來り、

無心明月轉空階。　無心明月空階に轉ず、

一官倉庾眞堪老。　一官倉庾眞に老ゆるに堪へたり、

坐看松根絡斷崖。　坐して看る松根斷崖に絡はるを、

【字解】【一】蜚霾　「詩」に、終風且霾と、【二】珍禽　古詩に、越鳥巢二南枝一と、【三】思越　「史記陳軫傳」に、莊舃仕レ楚執レ珪、有レ頃而病、楚王曰、舃故越之鄙細人也、今仕レ楚執レ珪富貴矣、亦思レ越不と、【四】野橘　「周禮考工記」に、橘踰レ淮而北爲レ枳と、【五】絡斷崖　「周益公題跋」に、歐陽丞新喩、蕭一致五世從祖濬夫、元豐七年、監二盱眙倉一、坡公歳除前、過二其東軒一、留二題二詩一、蓋晉景二移汝州一時也、盱眙隷二泗州一、州在二淮北一、縣治二其陰一、故都梁號二淮南第一山一、景物清曠、公旣愛レ之、而濬夫諒潤、蓋慕二陶靖節一者、其人又可レ知矣と、

【詩意】北の方飛塵を望見して蜚霾に苦しむ、是の故に心を淸淨にして聊か此の身を東齋に寄するのである、珍禽は如何に聲が好きも北地の他鄕よりも南地の故越を思慕する、野橘がまだ枳と變らずに香の淸きは淮を越えないからである、信あるの微泉は遠嶺より流れ來るを知る、而して無心の明月は其の光空階に轉ずる、一官永く米倉を守る倉氏庾氏の職以て老ゆるが可い、官に居り乍ら坐して

松根の斷崖に絡ふを看るは風流である、

【餘論】紀曰く、二詩俱清切と、前首に不知、知有、子是、我是と、案ずるに公の詩多く是を看る、此の如き作法は公は唐人以外に發明せるものであるか、

## 泗州除夜雪中黄師是送酥酒二首

泗州除夜雪中、黄師是、酥酒を送る　二首

（一）

暮雪紛紛投碎米。　暮雪紛紛として碎米を投す、
春流咽咽走黄沙。　春流咽咽黄沙に走る、
舊游似夢徒能說。　舊游は夢に似て徒らに能く說き、
逐客如僧豈有家。　逐客は僧の如く豈家あらんや、
冷硯欲書先自凍。　冷硯書せんと欲し先づ自から凍り、
孤燈何事獨生花。　孤燈何事ぞ獨り花を生ずる、
使君夜半分酥酒。　使君夜半酥酒を分ち、
驚起妻孥一笑譁。　妻孥を驚起して一笑譁すし、

【字解】〔一〕碎米　陸佃の「埤雅」に、霰稷雪也、閩俗謂之米雪、言霰粒如米、所謂稷雪義蓋如此と、〔二〕咽咽　「六書故」に、淵淵咽咽、其聲不同、淵淵狀鼓聲多而遠、咽咽聲近而叠と、〔三〕逐客　「史記」に、秦出逐客令と、公自身を謂ふ、〔四〕冷硯　「月令」に、正月硯凍開、十一月硯水冰と、〔五〕生花　「西京雜記」に、樊噲問陸賈曰、自古人君、受命於天、云有瑞應、豈有是乎、賈曰、目瞤得酒食、燈花得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小既有徵、大亦宜然と、杜子美の詩、燈花何太喜と、〔六〕使君　「古詩」に、使君從南來、使君自有婦と、刺史を使君と曰ふ、

【題義】元豐八年に泗州に在つて黄師是が除夜雪中に酒を送られたるを喜ぶ詩である、

【詩意】暮雪は紛紛として碎米を投ずる如く散る、春流は咽咽として黄沙の上を走る、舊游縱は徒らに能く說くが全く夢に似て居る、逐客の余は僧が出家と稱し家無きと同じ、冷硯を取つて字を書せんと思ふも硯水は凍りて用を爲ない、孤燈は何の喜ぶ事あつてか獨り花を生ずる、果せるかな使君は夜半に酥酒を分與せらる、眠より驚き起つて妻孥は一笑して甚だ譁すしい、

〔二〕

關右土酥黄似酒。　關右の土酥黄酒に似たり、
揚州雲液却如酥。　揚州の雲液却つて酥の如し、
欲從元放覓拄杖。　元放に從つて拄杖を覓めんと欲し、
忽有麴生來坐隅。　忽ち麴生の坐隅に來るあり、
對雪不堪令飽暖。　雪に對して堪へず飽暖せしむるに、
隔船應已厭歌呼。　船を隔てて應に已に歌呼を厭ふべし、

【字解】〔一〕關右　卽ち關西を曰ふ、「太平寰宇記」に、關西道慶州土產有牛酥と、「西河舊事」に、祁連山、在張掖酒泉二郡界、牛羊充肥、乳酪醲好、一斛酪、得酥斗餘と、〔二〕雲液　雲腴と瓊液、酒の名である、〔三〕元放　「神仙傳」に孔元放、與客會飲、元放作一令、以杖拄地、手把杖倒豎、頭在下、

明朝積玉深三尺。 明朝玉を積む深きこと三尺、

(六)高枕牀頭尙一壺。 高枕牀頭尙ほ一壺、

足在上、以一手持杯側飲、人莫能爲也と、【四】麴生 「集異記」に、朝官數人、詣葉法善、座上思酒、忽有人叩門、稱麴秀才、論難鋒起、葉疑其妖、以劍擊之、化爲酒壺、坐客飲之、強笑曰、麴生風味不可忘と、【五】飽暖 白樂天の詩、飽暖及妻兒と、【六】高枕 「宋玉九辨」に、高枕而自適と、

【詩意】 關右の土酥は黃色にして酒に似て居る、又揚州の雲液は却つて酥の如くである、余は仙人の元放に從つて拄杖を覓め美酒を飲まんと欲したるに、計らざりき忽ちに麴生の坐隅に來るあらんとは、雪に對して飽暖せしむるには堪へぬ、さりながら船を隔てて飲むも歌呼を厭ふの不粹である、察するに明朝は積雪が三尺の深さに達するであらう、門外へは出られないから臥し乍ら牀頭に置いて一壺を傾けることとする、

【餘論】 紀曰く、投碎米三字不雅、舊游二句自佳、孤燈句、呼起末二句、點得輕便、恰引起第二首と、又曰く、後首未佳、七八二句雙縮作收好と、

## 章錢二君見和復次韻答之二首

章錢二君和せらる、復た次韻之に答ふ 二首

黃昏已作風翻絮。 黃昏已に風絮を翻すを作す、

(一)半夜猶驚月在沙。 半夜猶は驚く月沙に在り、

(二)照汴玉(三)峰明佛刹。 汴を照すの玉 峰佛刹明かに、

(四)隔淮(五)雲海暗人家。 淮を隔てて雲海人家暗し、

(六)來牟有信迎(七)三白。 來牟信あり三白を迎へ、

(八)薝蔔無香散六花。 薝蔔香無くして六花散ず、

【自注】薝蔔梔子花也、與雪花皆六出。

欲喚(九)阿咸來守歲。 阿咸を喚んで來りて歲を守らんと欲す、

林烏櫪馬鬪喧譁。 林烏櫪馬喧譁鬪ふ、

【字解】【一】月在沙 盧仝の詩、夜半沙上行、月在天心明、沙月浩無際、此中離思生と、【二】照汴 汴は汴京、北宋の都、【三】佛刹 韋蘇州の詩、佛刹出高枝と、【四】隔淮 淮水を隔つ、【五】雲海 李太白の詩、烈炎張天照雲海と、【六】來牟 「毛詩」に、貽我來牟と、小麥を來と曰ひ、大麥を牟と曰ふ、【七】三白 「陶朱公書」に、臘前得兩三番雪、謂之臘前三白と、「朝野僉載」に、西北人諺曰、要宜麥見三白と、【八】薝蔔 公の自注に、薝蔔梔子花也、與雪花皆六出と、「酉陽雜俎」に、花少六出者、唯梔子花六出と、クチナシである、【九】阿咸 杜子美の守歲詩に、守歲阿咸家、椒盤已頌花、盍簪喧櫪馬、列炬散林鴉と、兄としてのイトコは阿咸、弟としてのイトコを阿戎と曰ふ、

【題意】 章氏と錢氏が雪中の詩を和せらるるに依つて復た之に和して二首を作る、

【詩意】 黃昏に及んで風が頻りに雪絮を吹き翻す、半夜に至れば夜は晴朗となりて月光が沙上に印してある、其の月光にて汴水の側の玉峯に古寺の塔尖が明かなるを見る、淮を隔つるの雲海は茫茫と人家の暗きを望む、來牟に於て良に好信である此の三白を迎へることは、薝蔔の六花が散ずるなれば

香がある筈なるに是は香がない、阿咸を喚び寄せて共に今夜を守らんと思へども、林鴉攤馬の游戲に喧譁を鬪はして一向に我が坐に來ない、

〔二〕

(一)分無纖手裁(二)春勝。　分として纖手の春勝を裁する無く、
況有新詩點(三)蜀酥。　況んや新詩の蜀酥を點するあらんや、
醉裏冰髭失(四)纓絡。　醉裏の冰髭纓絡を失し、
夢回(五)布被起(六)廉隅。　夢回りて布被廉隅に起る、
君應旅睫寒生暈。　君應に旅睫寒うして暈を生ずべし、
我亦飢腸夜自呼。　我も亦飢腸夜自から呼ぶ、
明日(七)南山春色動。　明日南山春色動かん、
不知誰佩(八)紫微壺。　知らず誰か佩ぶ紫微の壺、

【字解】【一】分無　分は分際、身分の意に解する、【二】裁春勝　「荊楚歲時記」に、人日剪綵爲レ人、或鏤二金箔一爲レ人、以貼二屏風一、亦戴二之頭鬢一、又造二華勝一相遺、起二於晉代一と、王注、次公曰く、春勝元日所レ製也と、【三】獨酥　次公曰く、蜀中人、多跨二婦女以二點酥詩一釘坐一と、【四】纓絡　「普門品」に、寶珠纓絡、両以與レ之と、【五】布被　木綿の蒲團な言ふ、「史記」に、公孫弘、以二漢相一、布被食不レ重レ味、爲二天下先一と、【六】廉隅　「禮」に、砥二礪廉隅一と、「漢揚雄傳」に、不レ修二廉隅一以徼二名當世一と、カドタツ行な言ふ、【七】南山　長安の南山にはあらず、洲州の南山である、【八】紫微　杜牧之は曾て紫微舍人と爲る、獨酌詩に曰く、獨佩二一壺一遊、秋毫泰山小と、

【詩意】我が身分としては坐に纖手が春の勝服を裁する者はない、況んや新詩の獨酥を點するの樂の有る筈がない、醉裏に冰髭が纓絡の如くなるを失する、夢より回れば布被が廉隅に起る、君は應に旅睫も寒の爲めに暈を生ずるならん、我も亦飢腸夜餐を求めて呼ぶ、明日は南山に春色が動くであらう、知らず誰か紫微壺を佩びて元旦の游びを爲すものであるを、

【餘論】紀曰く、呼字不レ妥と、紀は呼の字妥當ならざるを知つて、總て是れ次韻の罪であることを知らない、妥ならざるも、韻字を如何ともすべからざるものである、李東陽や沈歸愚は一代次韻の非なるを說く、觀奕道人は議論を好む性を持ちながら、次韻に就いて無關心なるは恠しむべき限りである、

309
65

昭和五年六月十二日印刷
昭和五年六月十五日發行

續國譯漢文大成 文學部 第十五帙

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴巻町百七番地

印刷所 康文社印刷所
東京市牛込區早稻田鶴巻町百七番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五番・八三八番）
振替東京一八五七二番

終